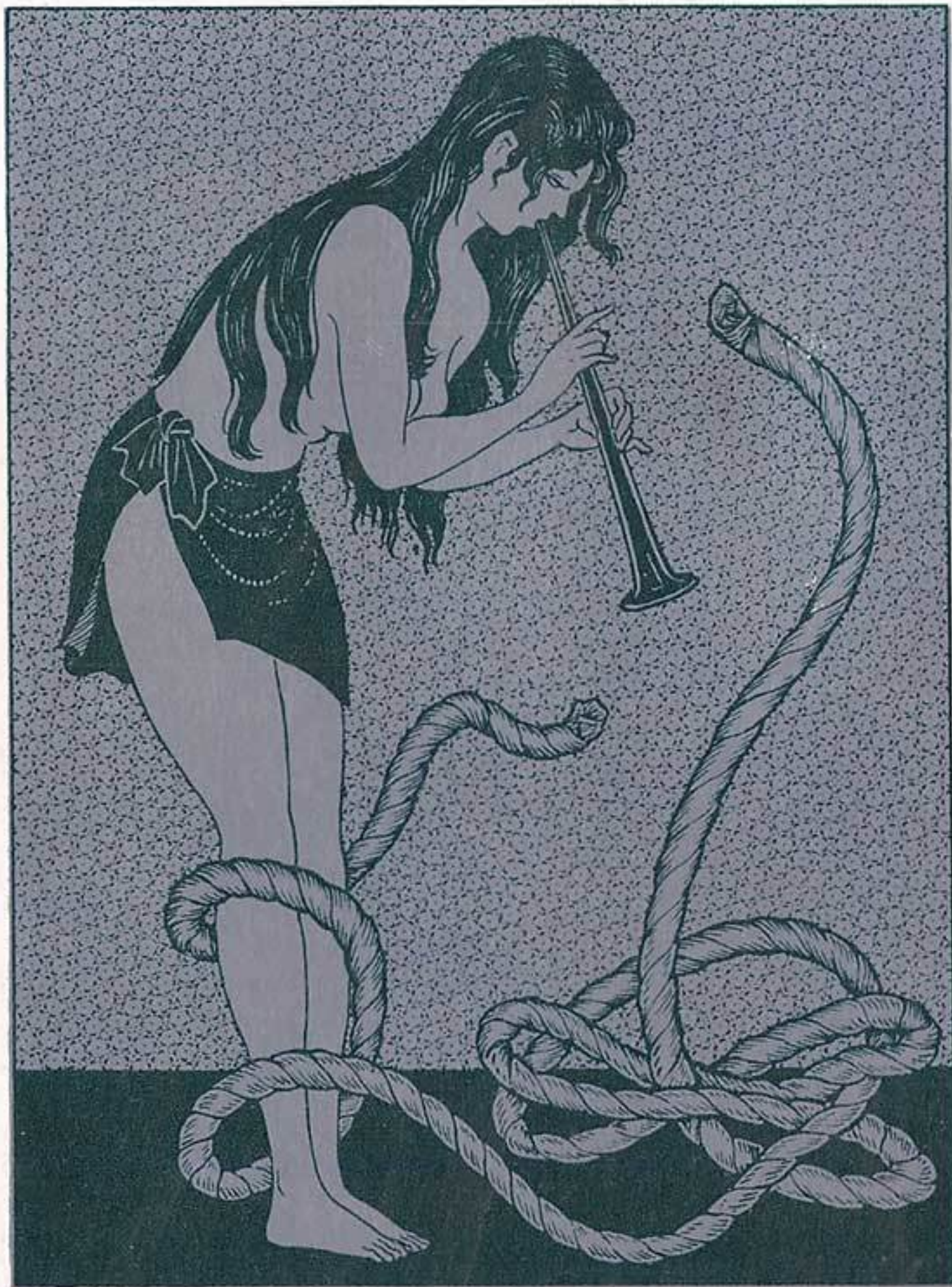


奇譚クラス

6 月号



新しい風俗文献誌

昭和四十八年五月十日印刷 昭和四十七年六月一日発行 六月号(第二十七卷第六号)毎月一回一日発行 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大島特別扱承認第二一〇号

1973・



☆総天然色カラー新作女体緊縛資料☆

極彩色のカラーで描く
五人のM女の美しき生姿

可憐な近代的な姿の深田奈保子。純情で素人っぽくない笠井桃子。妖艶な芸者福竜の松本たえ。飼育済みのMマダム江口淑子。五人の個性あるM女たち。大活躍した。鮮明な生肌色も、自然な色。リマの生肌色も、自然な色。ど、肉迫る緊張感も、画面に盛る。し、貴重的な資料の作成に努める。貫いて、重要な資料の作成に努める。お、黒写真の本物は、三氏で。だ、表を機に、貴方は、是非この。作、美しさの端にお縛り、素晴し。い、満足される、桃と、必、ラ、一、緊縛、少、価値、珍、資、と、大、さ、は、R、少、価値、珍、資、と、大、リ、断、素、ま、た、鮮、明、度、五、人、の、を、M、女、の、カ、ラ、ー、に、お、し、た、責、め、下、さ、い。

全裸開股開陳縛り

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
深田 奈保子 略号A〇〇〇円
思いきり両股をひらいて開陳する可憐で美しい女体も、縛られてこんなあどけない表情なのです。

白肌と赤白斑ら紐

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
深田 奈保子 略号A〇〇〇円
真白い肌をぐっとくびる斑ら紐の美しいムードを盛りあげる。

浣腸と緊縛と弄戯

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
各種の浣腸器を前にして大の字に正面開股したマダムと後手高小手に縛られた。

縛りの羞恥に喘ぐ

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
すぐ赤面する恥かしがり屋の奈保子が大好きな縄で縛られるというナマナマしい色彩の中の羞恥。

羞らしいの坩堝の中

大手札三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
原色のな配色の中心に全裸の肌、腋毛もあらわに繰り展げられる緊縛と羞恥のかもしだす饗宴。

晒らされた緊縛体

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
縄にくびられた乳房の先のグミのような乳首もピンク色に染まり全裸を晒して縛られた美麗な女体。

猿轡に悶える女体

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
噛まされた豆絞りの猿轡にうめき思わず開股する女体の息づまのような迫真的な色美しきシーン。

全裸で見せる狂態

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
松本 たえ 略号A〇〇〇円
芸者福竜が全裸にひん剥かれて三種三様の縄にて変った縛りを、そのM性を露呈してゆく。

強烈後手縛り展開

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
松本 奈保子 略号A〇〇〇円
如何なる強烈な責めにも耐えるというM女の繊細な裸身を厳重に縛りあげて執拗にいたぶり抜く。

臨月腹緊縛の発端

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
覚悟はしていても出産予定日が目前に迫っている、それを払いのけて緊縛する。

便々たる太鼓腹を

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円

もうこれ以上大きくはならないという程思いきり突き出た太鼓腹にも情容赦なく縄が襲いかかる。

拘束された臨月腹

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
丸々と極めて美しい線を見せた妊孕腹をツンと突き出させて非情な縄は妊婦の裸身にからみつく。

蛙腹にも強烈縄目

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
出産間際の便々たる蛙腹でも苦しいのに、更に縄目も凄い後手高小手に縛りが肌を痛めつける。

海老責め後手吊り

カラー二枚一組 略号A〇〇〇円
江口 淑子 略号A〇〇〇円
強烈な海老責めと伸した後手を逆に吊り上げた姿の秘密があつた。

苦痛と喜悦の交錯

カラー二枚一組 略号A〇〇〇円
江口 淑子 略号A〇〇〇円
厳しい縄目で裸身をさいなまれる苦痛も彼女にとつては、身のおれきどころのない甘い喜悦であつた。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱第14号天星社へ略号記入の上、御注文下さい。送料当方負担にて急送いたします。

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の
数々の告白の投稿やモデルの応募によって
献誌として、絢爛たる金文字塔を打ち、風俗文
まいり、期待した。真摯な研究熱心な本誌読者
望まれる方は、どうぞ、御遠慮なく、勇躍を出
て、御応募下さるよう、お待ちしています。
○本誌、愛読の女性の方、切問、また、国籍、未
婚の別、年齢、性別、一切、採用、遠近
に拘らず、お申し込み願、お返、遠近
拾万、お申し込み、即、お返、遠近
○応募、お申し込み、即、お返、遠近
は、御本人の、お申し込み、即、お返、遠近
を、お申し込み、即、お返、遠近
提、お申し込み、即、お返、遠近
致、お申し込み、即、お返、遠近
幸、お申し込み、即、お返、遠近
○撮影、お申し込み、即、お返、遠近
と、お申し込み、即、お返、遠近
表、お申し込み、即、お返、遠近
改、お申し込み、即、お返、遠近
介、お申し込み、即、お返、遠近
成、お申し込み、即、お返、遠近
き、お申し込み、即、お返、遠近
個、お申し込み、即、お返、遠近
○御応募、お申し込み、即、お返、遠近
重、お申し込み、即、お返、遠近
な、お申し込み、即、お返、遠近
当、お申し込み、即、お返、遠近
。申込、お申し込み、即、お返、遠近

大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社 編集部

◆本誌三百号突破記念◆

百萬元懸賞原稿募集

▽賞金△

| | | | |
|--------|-----|------|-----|
| 入選作品 | 第一席 | 二十萬円 | 1篇 |
| 入選作品 | 第二席 | 十萬円 | 1篇 |
| 入選作品 | 第三席 | 五萬円 | 3篇 |
| 入選作品 | 第四席 | 三萬円 | 5篇 |
| 入選作品 | 第五席 | 二萬円 | 10篇 |
| 佳作優秀作品 | | 一萬円 | 15篇 |
| 選外佳作作品 | | 五千円 | 10篇 |

▽内容△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
奇譚、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
この間に、風俗、多岐にわたる、オニ、ア、星霜を
の辛、酸、を、具、に、嘗、め、な、ら、オニ、ア、星霜を
き、御、支、援、を、具、に、嘗、め、な、ら、オニ、ア、星霜を
よ、く、耐、え、て、今、日、に、至、る、風、俗、文、献、の、生、長、を
一、本、誌、は、異、色、な、る、風、俗、文、献、の、生、長、を
に、ま、よ、る、数、多、く、M、傑、作、と、し、て、の、生、長、を
咲、き、乱、れ、多、く、M、傑、作、と、し、て、の、生、長、を
い、や、が、上、れ、多、く、M、傑、作、と、し、て、の、生、長、を
三、百、号、新、刊、を、計、画、し、た、更、に、一、層、の、内、容、の、充、實、を
実、と、清、新、化、を、計、画、し、た、更、に、一、層、の、内、容、の、充、實、を
て、原、稿、募、集、を、企、画、し、た、更、に、一、層、の、内、容、の、充、實、を
一、本、誌、は、異、色、な、る、風、俗、文、献、の、生、長、を
す、が、一、例、を、本、誌、に、発、表、す、に、向、て、の、生、長、を
た、も、の、マ、ゾ、を、本、誌、に、発、表、す、に、向、て、の、生、長、を
嗜、好、の、種、種、を、本、誌、に、発、表、す、に、向、て、の、生、長、を
崇、風、俗、特、異、な、風、俗、見、聞、を、本、誌、に、発、表、す、に、向、て、の、生、長、を
色、風、俗、特、異、な、風、俗、見、聞、を、本、誌、に、発、表、す、に、向、て、の、生、長、を
テ、風、俗、特、異、な、風、俗、見、聞、を、本、誌、に、発、表、す、に、向、て、の、生、長、を
に、属、する、も、の、を、取、り、上、げ、て、下、さ、い、異、色、文、献、

▽規定△

一、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、原稿
り、用、紙、を、御、利、用、は、必、ず、二、百、字、又、は、三、十、枚、以、上、原
三、百、枚、以、上、原稿、を、御、利、用、は、必、ず、二、百、字、又、は、三、十、枚、以、上、原
入、選、と、同、時、に、表、定、の、賞、金、を、得、る、と、思、わ、れ、ま、す、
掲、載、の、際、に、表、定、の、賞、金、を、得、る、と、思、わ、れ、ま、す、
削、除、す、る、際、に、表、定、の、賞、金、を、得、る、と、思、わ、れ、ま、す、
ま、す、削、除、す、る、際、に、表、定、の、賞、金、を、得、る、と、思、わ、れ、ま、す、
故、て、原、稿、を、御、利、用、は、必、ず、二、百、字、又、は、三、十、枚、以、上、原
一、本、誌、は、異、色、な、る、風、俗、文、献、の、生、長、を
と、区、別、す、る、た、め、一、般、に、懸、賞、と、し、て、の、生、長、を
下、さい、又、は、本、誌、に、発、表、す、に、向、て、の、生、長、を
住、所、の、氏、名、を、公、開、し、た、り、他、の、氏、名、を、公、開、し、た、り、
は、絶、對、に、奇、怪、な、作、品、を、御、利、用、は、必、ず、二、百、字、又、は、三、十、枚、以、上、原
性、の、有、る、奇、怪、な、作、品、を、御、利、用、は、必、ず、二、百、字、又、は、三、十、枚、以、上、原
箱、第、四、十、一、号、送、付、先、は、大、阪、市、住、吉、郵、便、局、私、書、箱、第、四、十、一、号、
並、に、持、込、み、は、固、く、お、断、り、致、し、ま、す、直、接、の、訪、問、

奇譚クラブ

昭和四十八年五月二十日印刷 昭和四十八年六月一日発行 六月号(第二十七卷第六号)毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日 国鉄大局特別換承認雑誌第二一〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



それは女体への愧らい……きくかおる
 玉木章子取材者立候補の弁……吉田 遥
 SMとフェチマニアの雑感……西原 浩
 ▲サロン落穂抄(三)
 「屋根裏棲息記」……塚本 鉄三
 荒尾慶子を恋うる唄……美作 太郎
 告白 羞恥のときめき……小杉 千恵
 高村浩子さまへの手紙
 我が故郷への招待……秋野 美水
 サジスチンを待望する……上田 光一
 針灸院見聞記
 灸をする女の子……奈良下元三
 イメージ画「整髪式」……小川 茂正
 M女の告白 奴隷妻の呟き……北川まりこ
 短信往来 前田真知子様へ……大阪T・H

夢を持つ浣腸強要……竹迫 誠也
 浣腸責め雑感……大竹 昌弘
 責め随想 縛り心……早木 夢二
 フォト「くびれ肌」……中河 恵子
 編集部だより……編集部
 四月号「たけ子の高もも自縛法」の
 「ヘヤピン」の訂正……岩井たけ子
 私とプレイをしませんか……宇野真理子
 イメージ画「艶夢」……黒田 縛
 焦らされている僕のS……保世きんじ
 イメージ画「素描」……よみじどり
 大塚啓子さんに憧れた頃……西行吟次郎
 感想 スクリーンの秋山氏……広野比徒理
 告白 小さなオシメカパー……小西 一嘉
 映画 最近の緊縛シーン……東山 映史

光と影の緊縛芸術(2葉)……前田真知子
 足はどこまで挙るか?……深田菊子
 沖縄美人緊縛図(3葉)……座間明子
 嗜虐に悶える肢体と表情(2葉)……松本たえ
 菱縄縛りに羞らう(2葉)……江口淑子
 飼育済みの成果……玉木章子
 淑やかな夫人の情熱(3葉)……三浦純子
 惑溺のひととき(2葉)……鈴木千鶴子
 いじめられた年頃(2葉)……高村浩子
 剃毛責めのあと……荒尾慶子
 明眸益々冴える(2葉)……深田菊子
 背負った後手首……西条 紀代
 緊縛感に喘ぐ……松山真樹子
 マキが縛られたア!(2葉)……富田由美子
 稚妻の妊孕美を責める……中河恵子
 悦虐に泣くM女の表情……渡部・川路
 吊りとローソク責め(2葉)……笠井奈保子
 床の上の人身御供……シイラケニ
 日本式縛りの金髪美人……

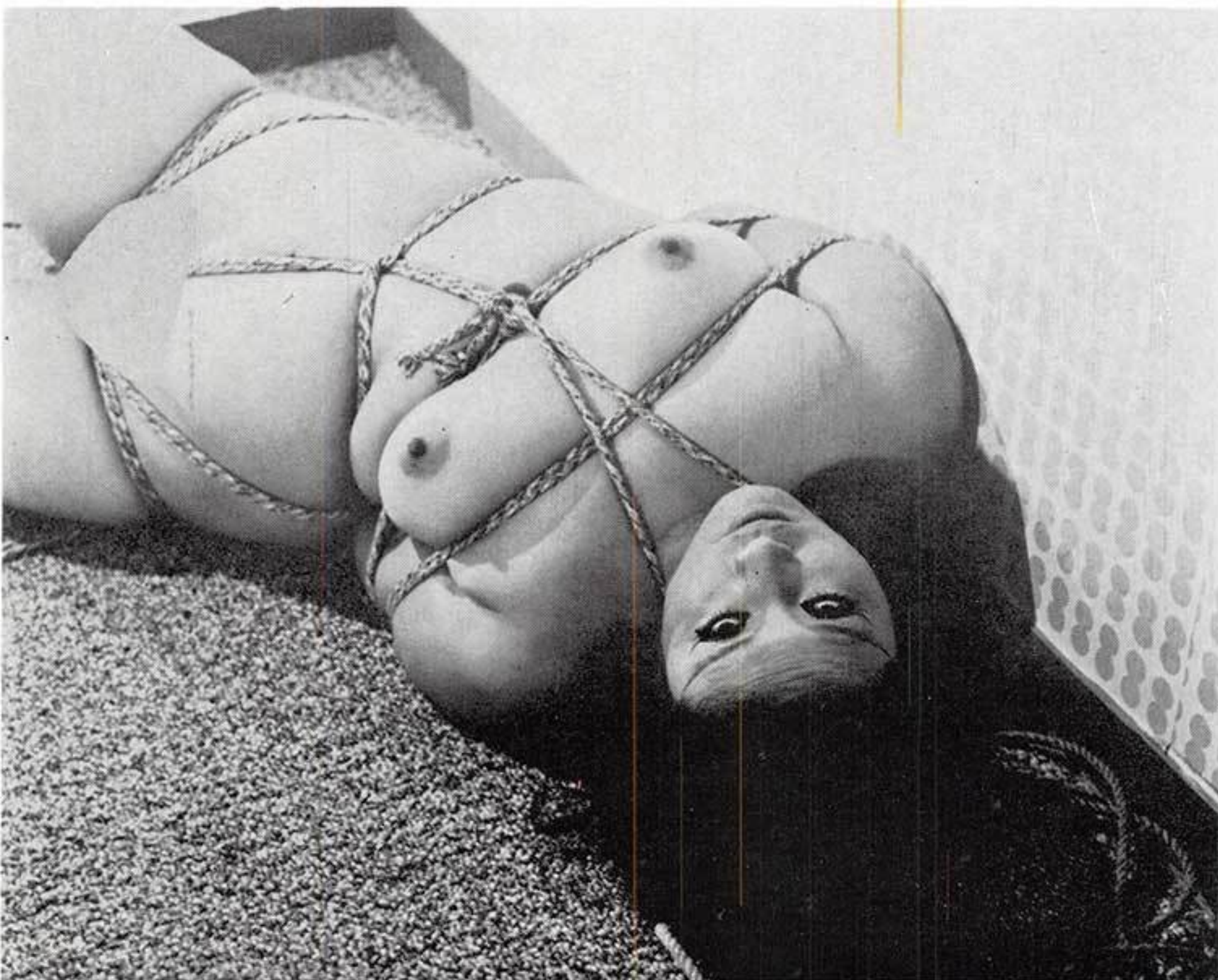
| | |
|--|-----|
| 女体緊縛「妖艶の美女、絹川文代」……小雅田 勇……(178) | 美各論 |
| M派交友録(39)『グラマーな猛女』……鬼山 絢策……(188) | |
| 小説「命預けます」余話「奴隷妻覚え書」……柴 利好……(202) | |
| 「耽奇房」我楽多控(3)『幻の少女』(後)……辻村 隆……(212) | |
| 読者通信……編集部選……(266) | |
| イメージギャラリー「夢魚が誘う」室井亜砂路(34)・「ある願望」須坂旭(37) | |
| ・「奴隷着溶接」三鷹I・O(52)・「兎とひ」志羽利也(54)・「ある愛の表 | |
| 現」春川ナミオ(62)・「滑車の軌み」須坂旭(74)・「気の合う二人」室井亜 | |
| 砂路(79)・「撮られる」須坂旭(134)・「牝ブタ料理」仲乃ハルミ(137)・「千 | |
| 登世の悶え」岡たかし(166)・「ムチ音交響楽」市原幸三郎(171)・「十字架の女」 | |
| 三鷹I・O(174)・「ブーツ用下僕」岡たかし(194)・「最高のもてなし」春川 | |
| ナミオ(198) | |
| 目次フォト……深田菊子・江口淑子 | |





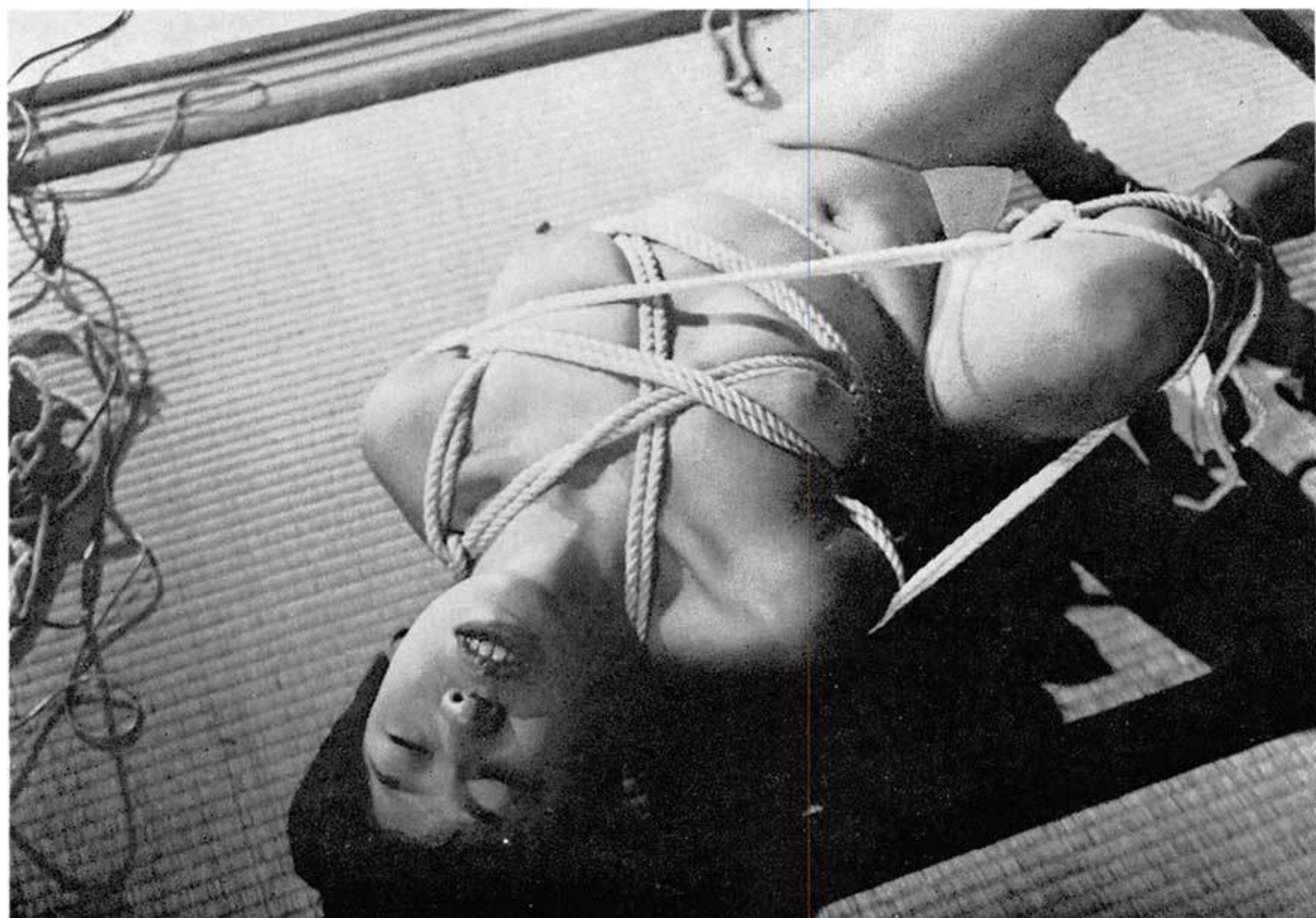
＜深 田 菊 子＞

足はどこまで挙るか？



沖縄美人緊縛図

△座間明子▽



嗜虐に悶える肢体と表情

＜松 本 た え＞





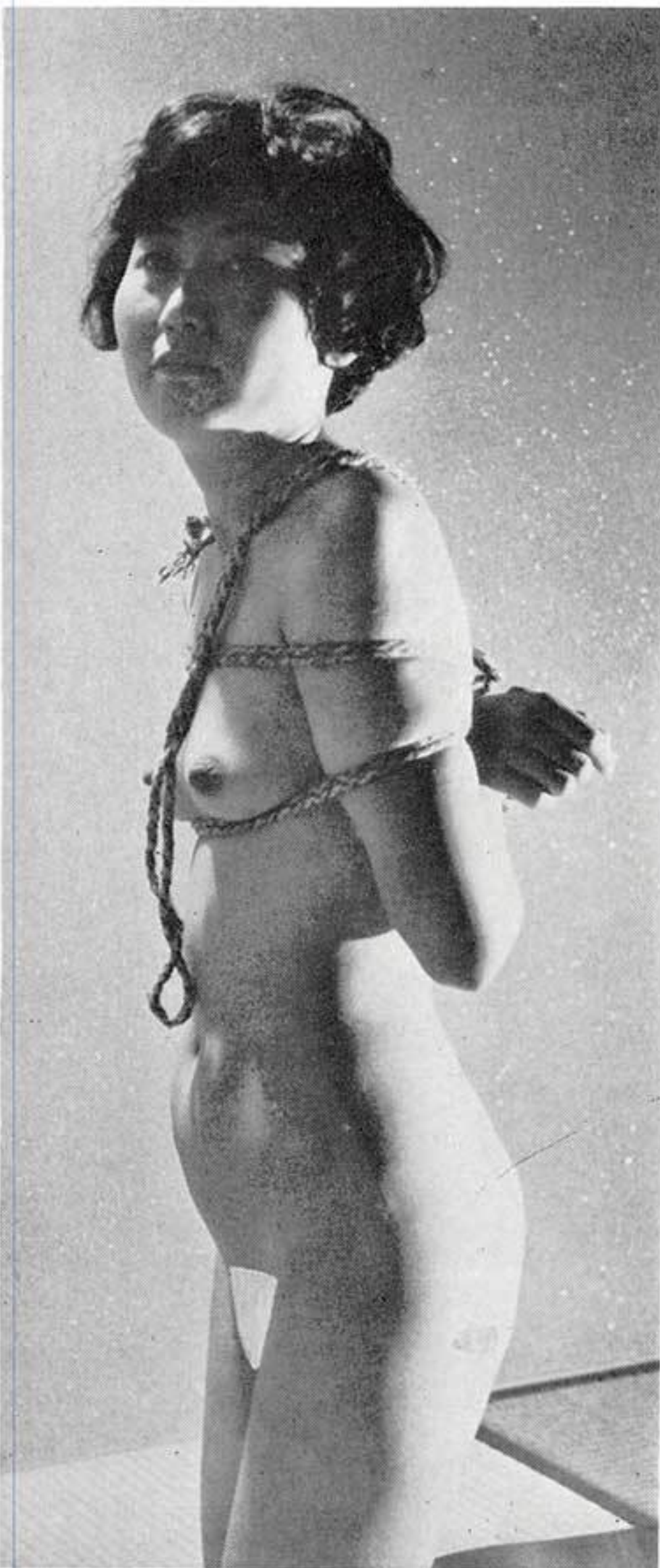
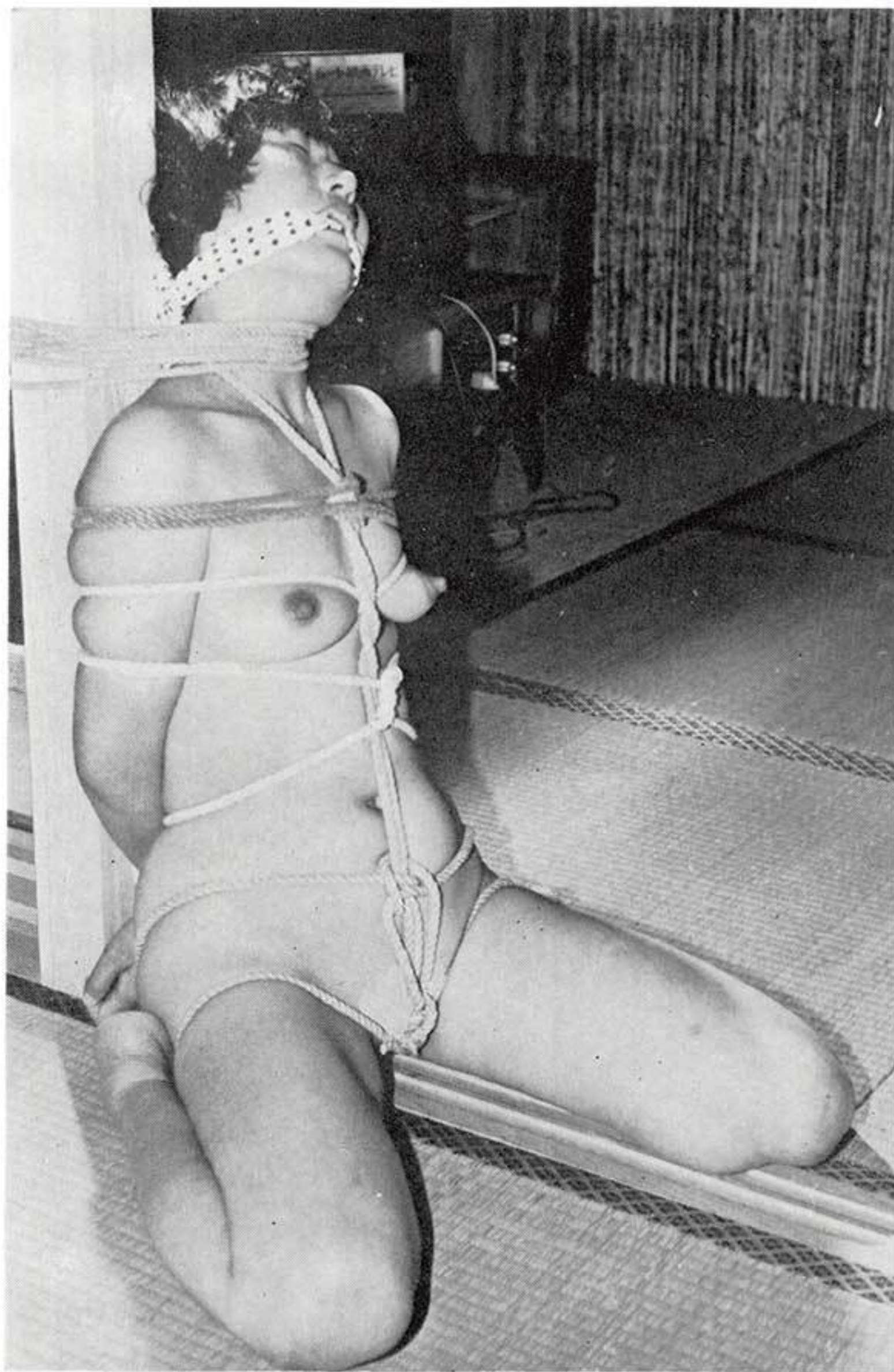
菱縄縛りに羞らう

△江口淑子▽



飼育済みの成果

＜玉木章子＞



淑やかな夫人の情熱

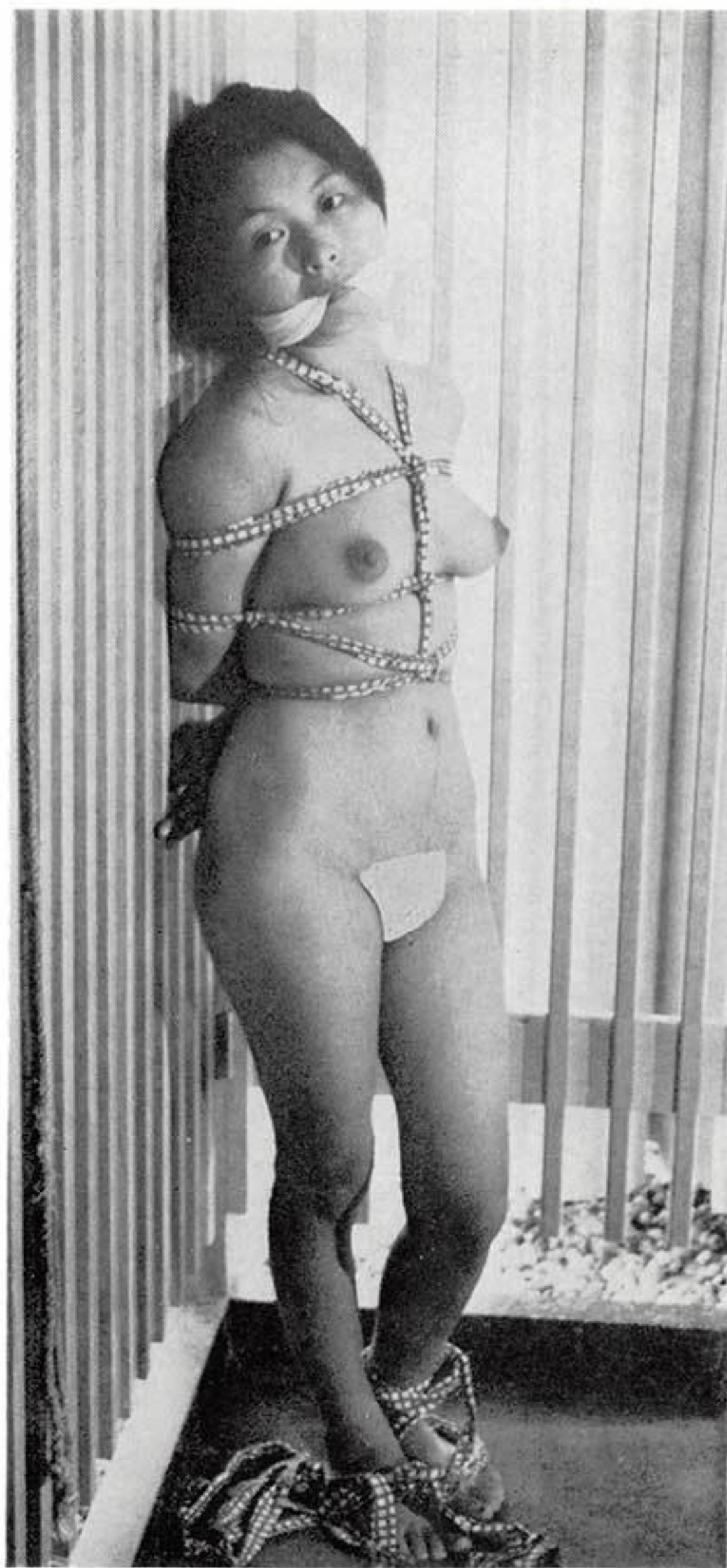
△三浦純子▽



惑溺のひととき

＜鈴木千鶴子＞





いじめられたい年頃

△高村浩子▽



剃毛責めのあと

＜荒尾慶子＞

明眸益々冴える

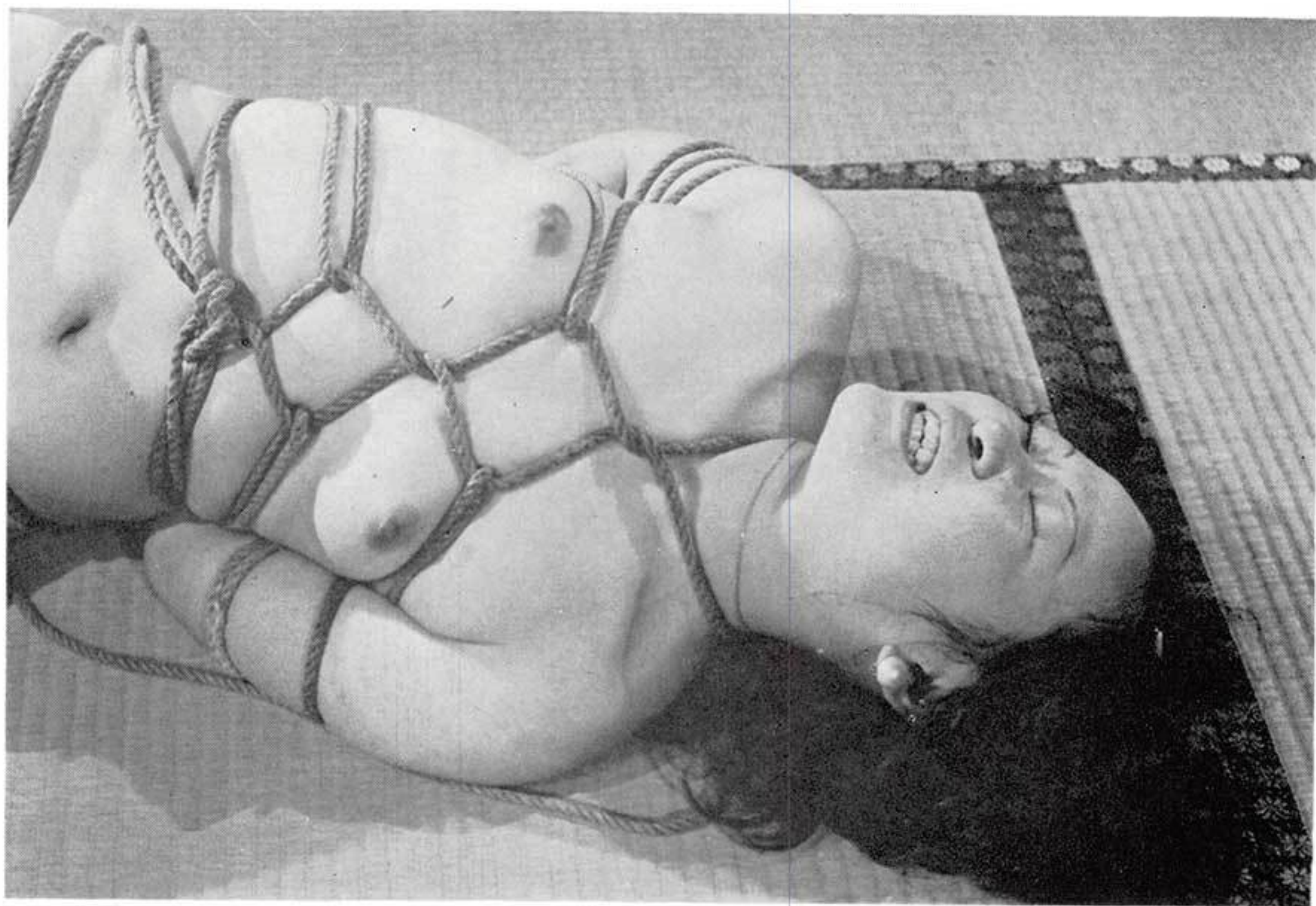
△深田菊子▽





背負った後手首

＜西条紀代＞

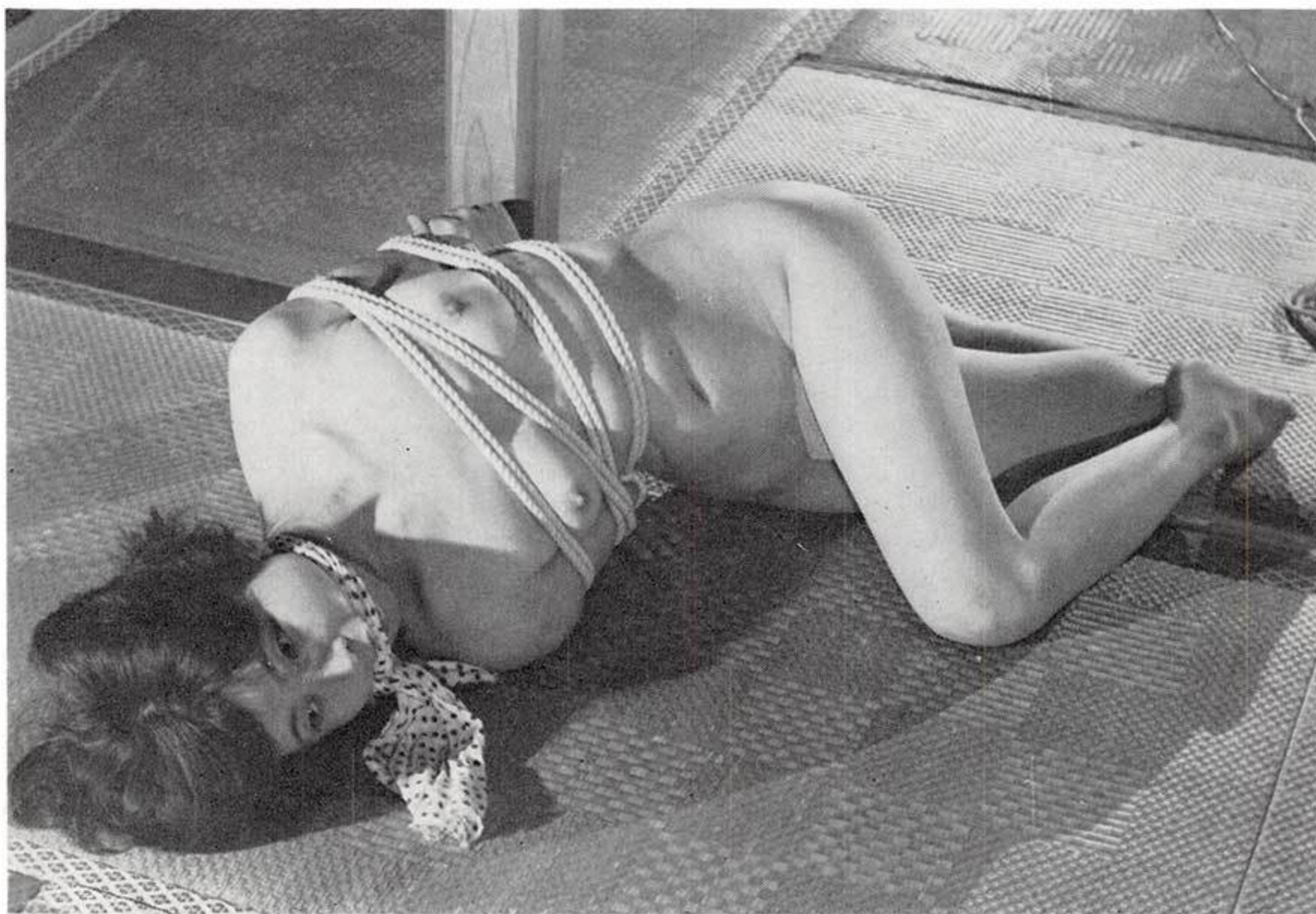


緊縛感に喘ぐ

＜西条紀代＞

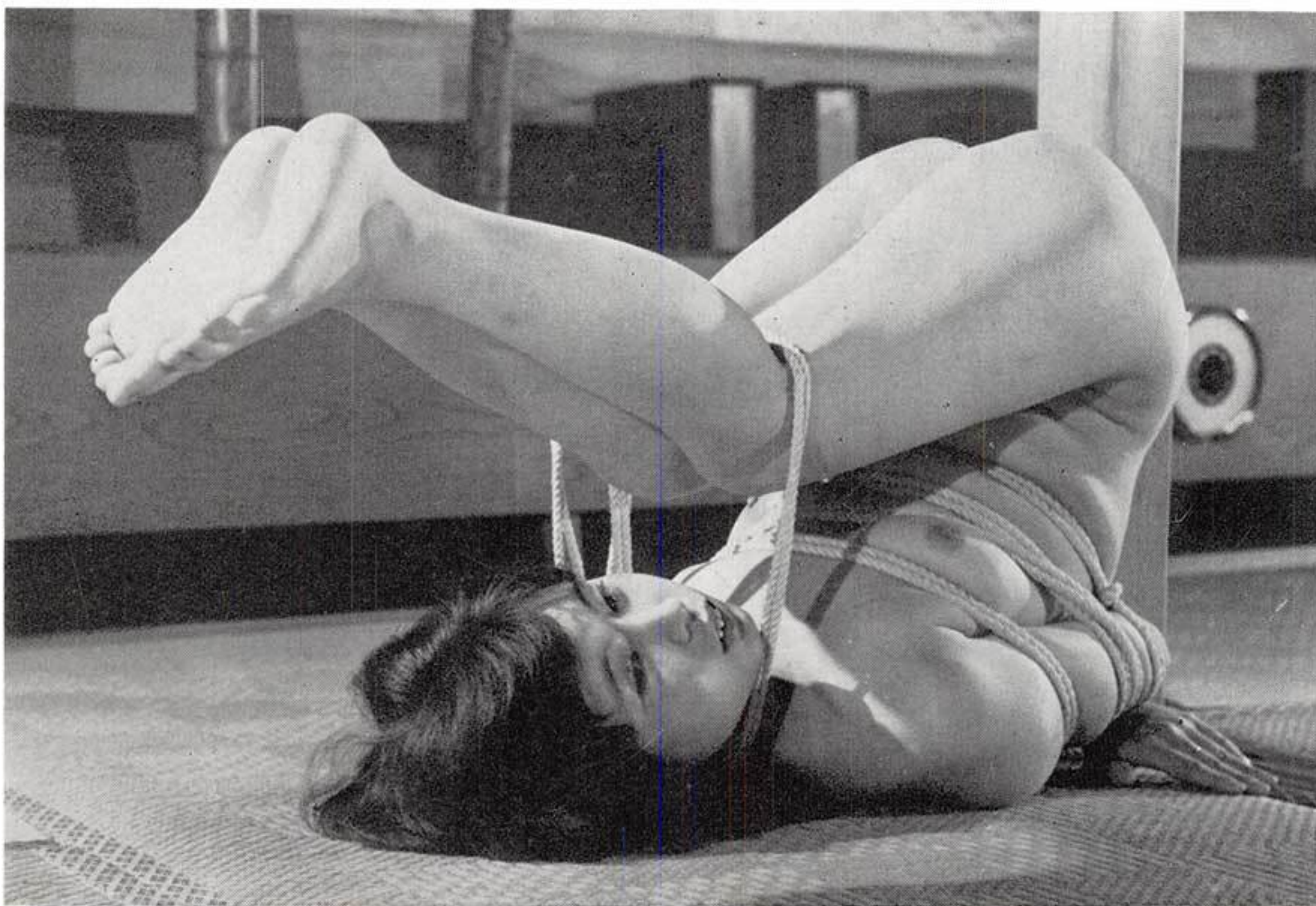
〔緊縛フォト〕 ア・ラ・カルト

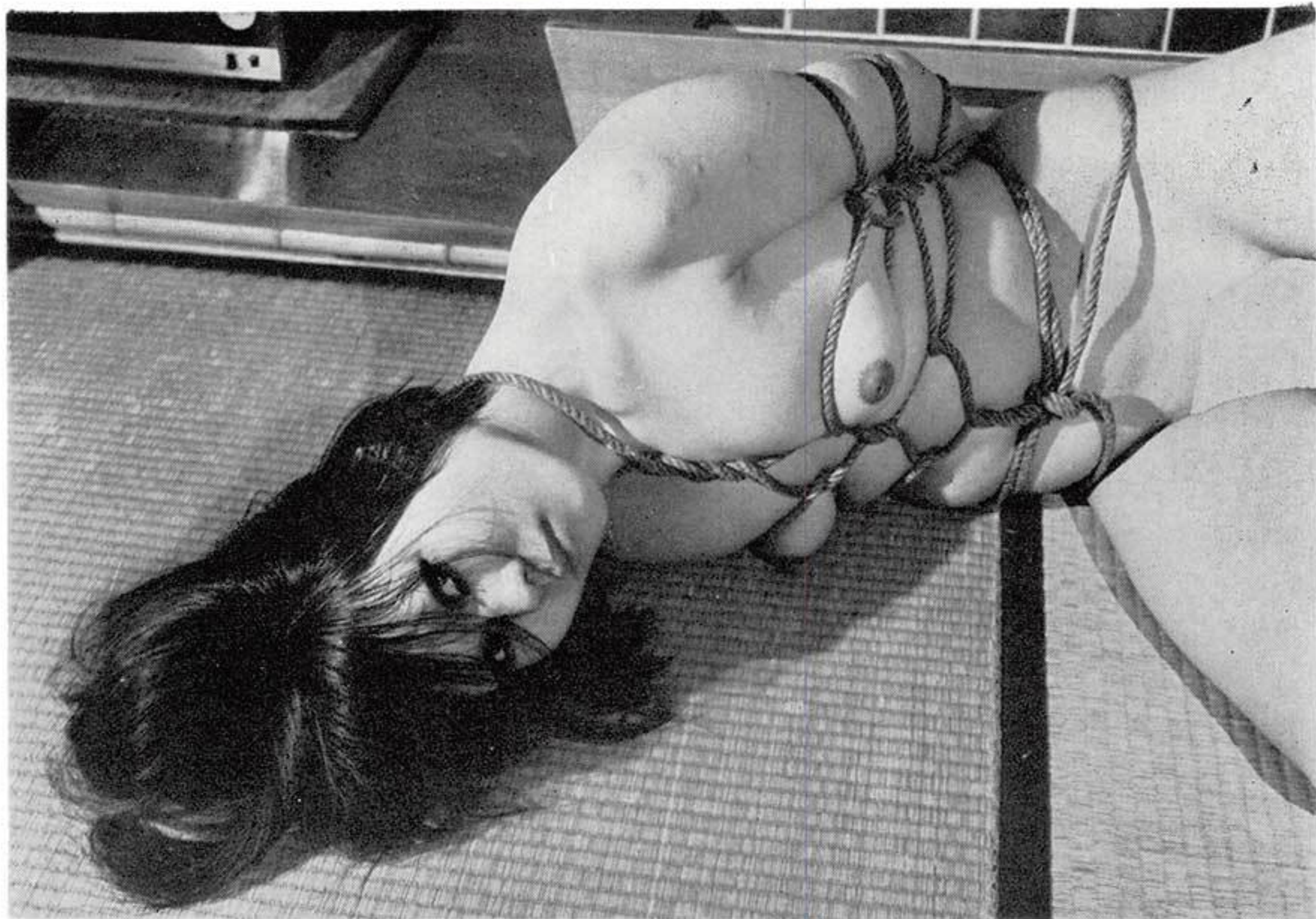
編集部・構成



光と影の緊縛芸術

＜前田真知子＞





六月号目次

△昭和四十八年▽

△第二十七卷Ⅱ第六号Ⅱ通刊第三〇四号▽

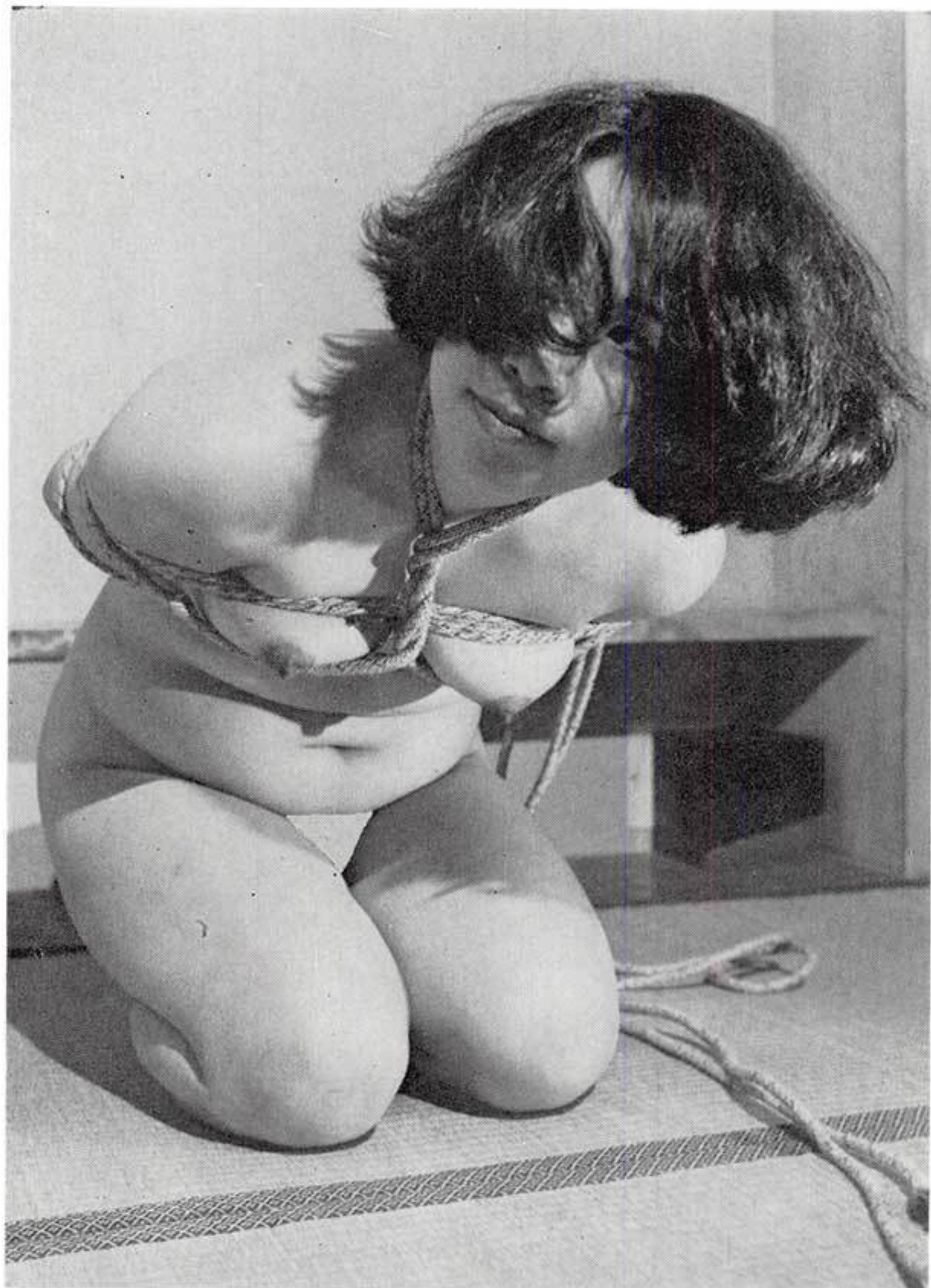
本

文

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|---|---------------------------------------|-------------------------------|--|------------------------------------|-------------------------------------|---|--|--------------------------------|-----------------------------------|--|--------------------------------------|---|
| 「マゾ、永遠の憧れの女性」△梨花悠紀子▽……………橋本恭一郎……………(21) | 提言 SMブームの退潮と奇クについて……………橘 房由……………(22) | 懸賞入選告白「アブ・ラブ行状記」……………戸保呂一郎……………(30) | 鉄三SM談義『マゾに目覚めた女人群像』塚本 鉄三……………(40) | 連載・S大河小説 パロディ◇花と蛇◇ ⁽¹⁸⁾ ……………山光 純……………(48) | 男奴隷の告白「あるマゾヒストの一日」……………大西 信二……………(58) | 手記 “モデル志願”……………小松 裕子……………(64) | S小説『残酷・スター誕生』△第二部・残酷行路▽……………久留木 栄……………(68) | エキセントリック「淋しい情欲」……………陶山 祝生……………(84) | 連載小説『大噴火』△第五十七回▽……………千葉 青鬼……………(88) | 私見 “現代SM考”△プレイとしてのSMを考える▽……………那智 薫……………(96) | 「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△深田菊子の巻▽……………塚本 鉄三……………(100) | 『足の裏の温かい女』……………塚本 鉄三……………(100) | 手記「妻と恋人を縛るの記」……………求楽 知遊……………(130) | M体験小説『亜矢様をめぐる不思議な夜』 ⁽²⁾ 沢井 和雄……………(140) | 告白 “長くて短い一年の思い出”……………笠井奈保子……………(157) | 連載・時代S小説『紫蘭の門』 ⁽²²⁾ ……………風流極道軒……………(162) |
|---|--------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|---|---------------------------------------|-------------------------------|--|------------------------------------|-------------------------------------|---|--|--------------------------------|-----------------------------------|--|--------------------------------------|---|

マキが縛られたア！

△松山真樹子▽



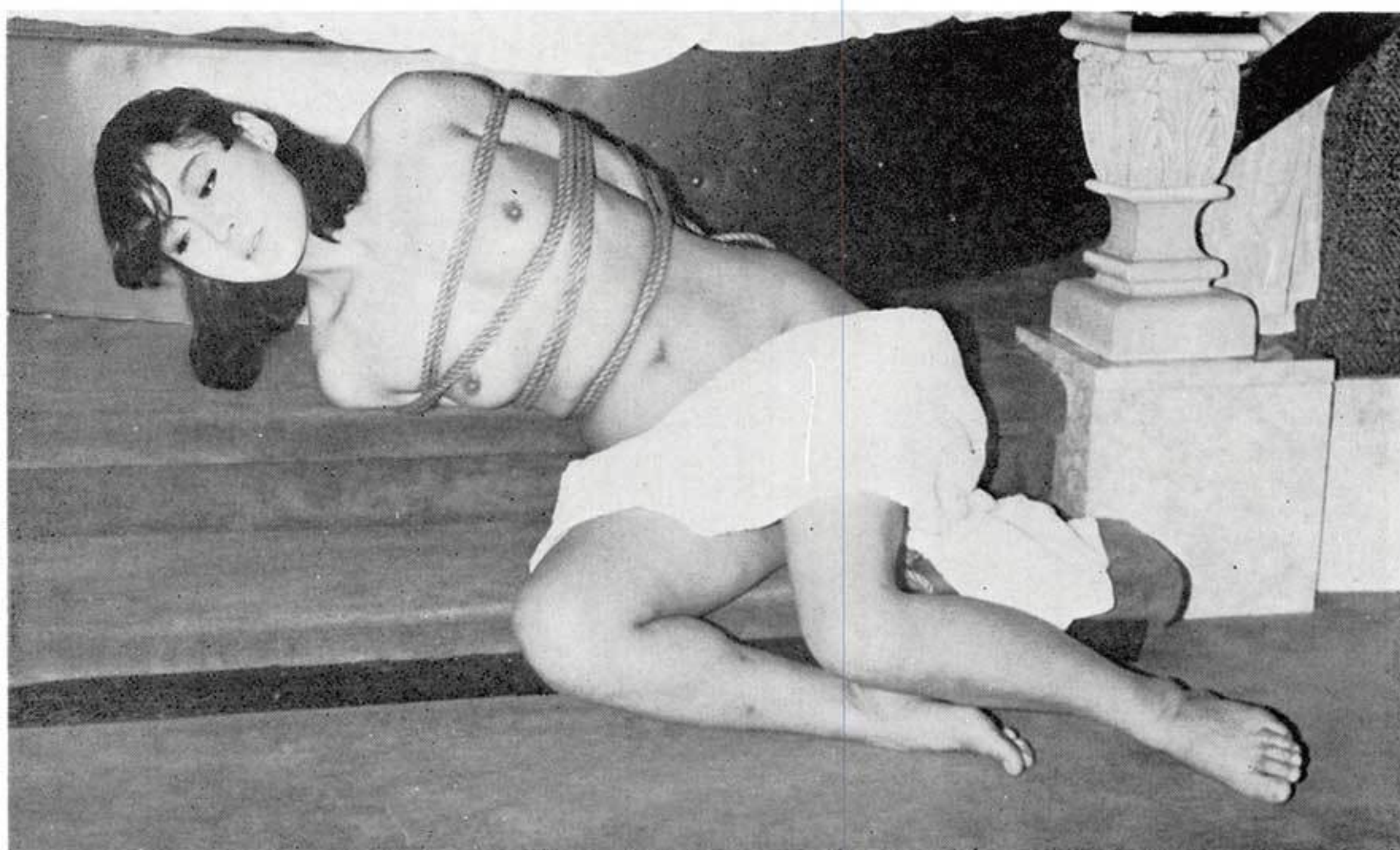
△富田由美子▽



稚妻の妊孕美を責める

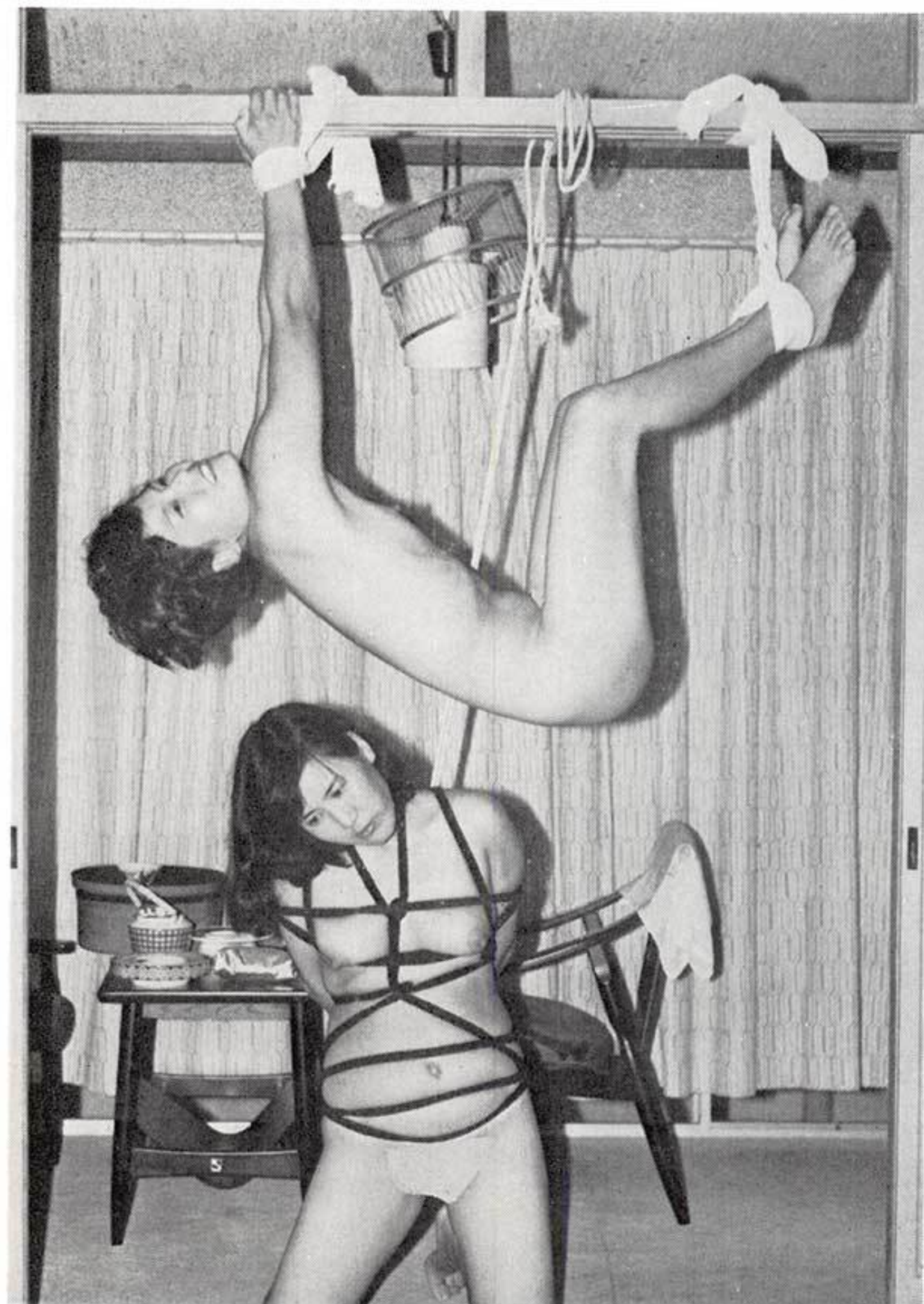
悦虐に泣くM女の表情

△中河恵子▽



吊りとローソク責め

△渡部好美△
△川路むら子△

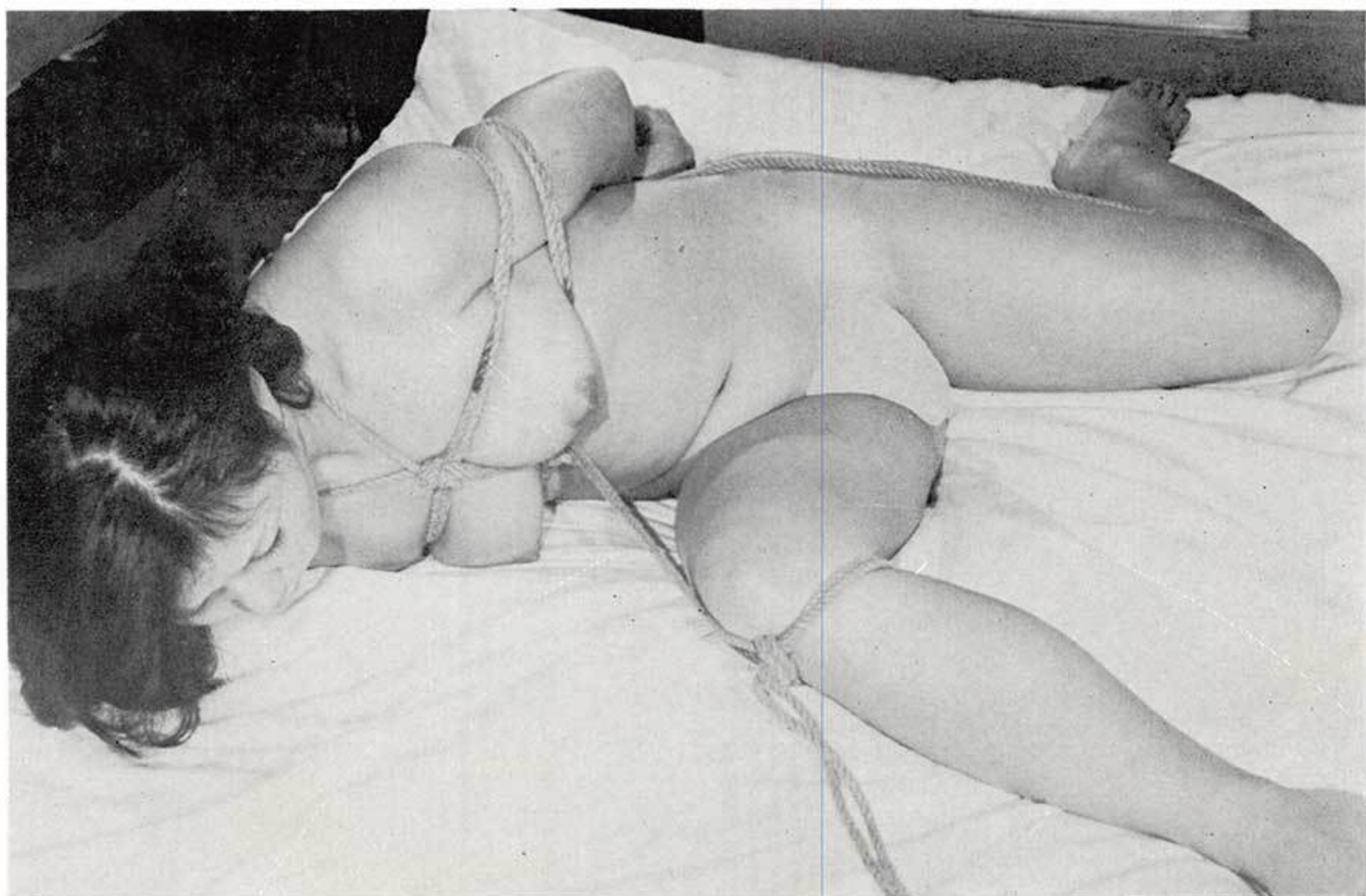
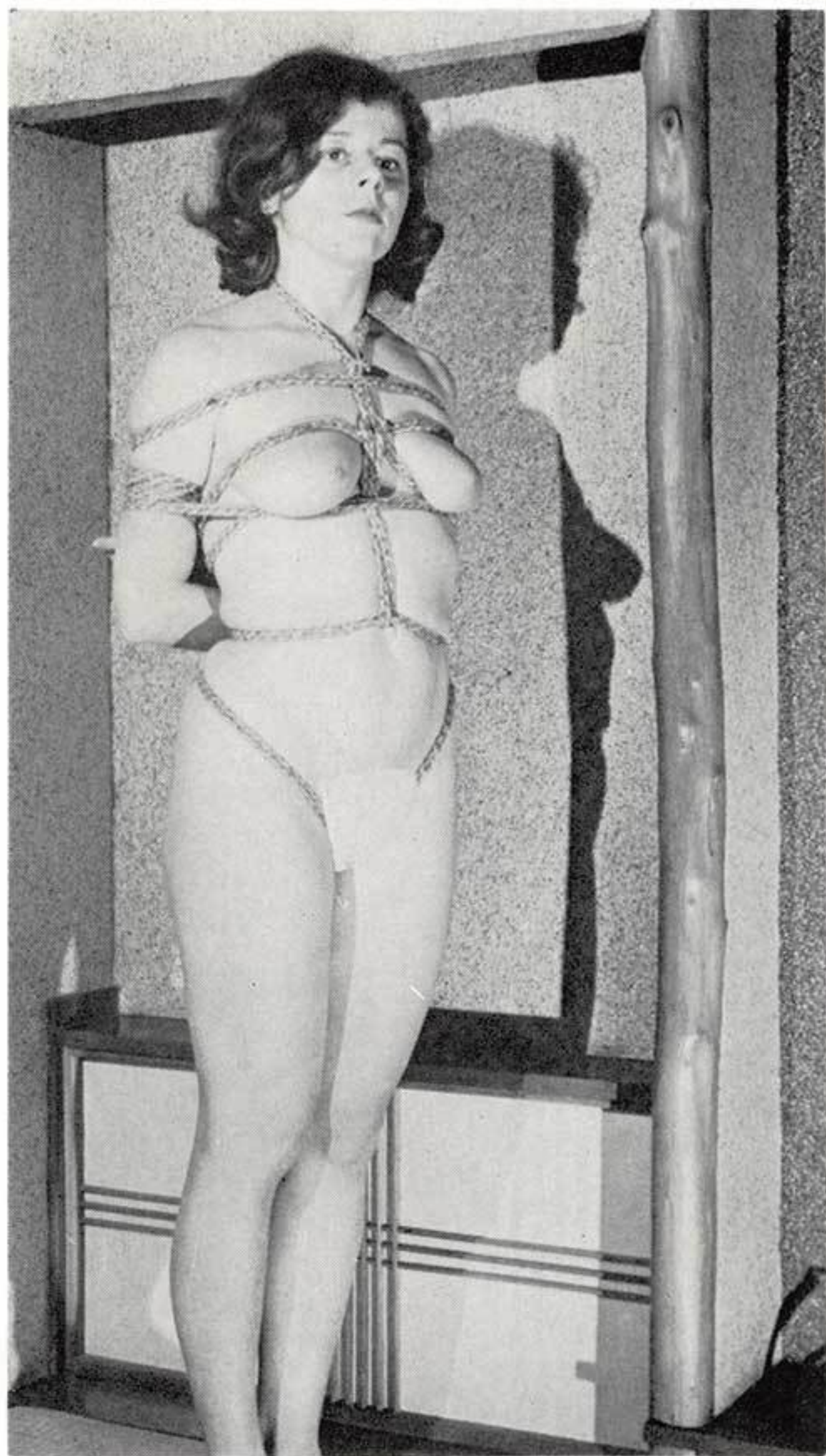


床の上の人身御供

△笠井奈保子▽

△シーラー・ケニー▽

日本式縛りの金髪美人



奇

譚

ク

ラ

ブ

昭和四十八年 六月号

(第二十七卷 第六号)
(通刊 第三〇四号)



マゾ、永遠の憧れの女性

梨花悠紀子の少女じみた可憐なフェイスやプロポーションが、世のS人士的好き心を、快くくすぐるのであるうか。或はまた、彼女の心の中にくすぶり続けるMの灯が、外部に向かって妖しい信号音を発し、呼びかけているのだろうか。

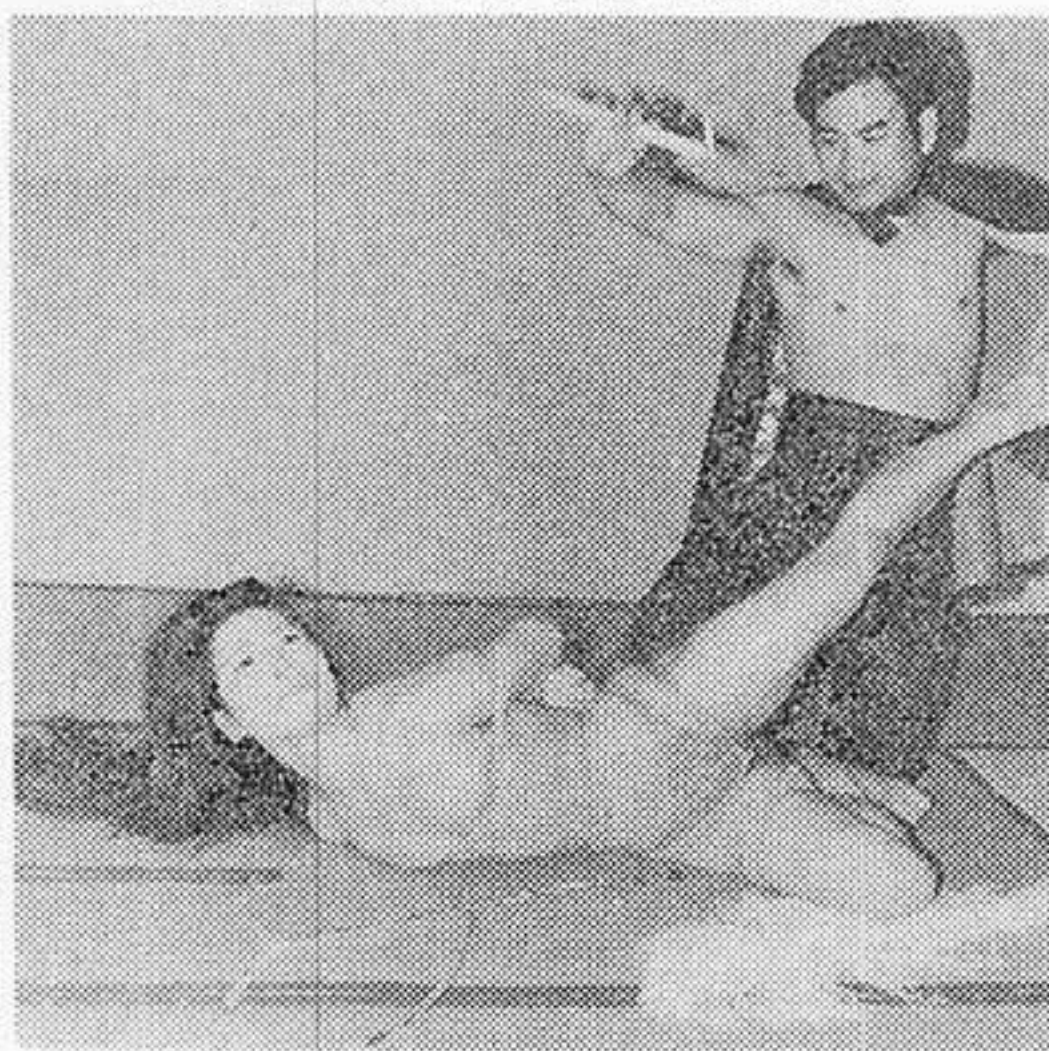
責めの対象について、もし男性各自の好み

モデル……梨花悠紀子

というものが、適切に動くものであるならば私も多くのファンの方々と同じように、梨花悠紀子を、永遠の憧れの女性として推すのに吝かではない。彼女こそは、いついつまでも私達SM愛好者の心の中に、明るい灯を付け続けていてくれる女性である。

(橋本恭一郎・記)

舞台を再現してくれた秋山夫妻



本誌2月号の——編集部だより——にもあったようにSMブームは、どうやら下火になってきているらしい。小森白監督の『日本拷問刑罰史』に始まって、石井輝男監督の『徳川女刑罰史』『元禄女系図』など東映の残酷時代劇、洋画でもフロスト監督の『アニマルシリーズ』や『ラブキャンパーク』（これはめりけん、サディズムの傑作）などがあって、一時は映画だけでもSM全盛を思わせた。

ストリップの方でも秋山夫妻をはじめ忍妙子などの残酷ショーが流行し、書店にもSMと名をうった雑誌が溢れ、女体緊縛の写真集

編集部への提言

SMブームの退潮と

『奇ク』について

橘

房

由

が、ずらりと並んだ。だが、それも束の間のこと、日活のロマンポルノのシリーズをきっかけにして、映画はSMから、いわゆるポルノブームに入った。ストリップも、残酷ショーから一条さゆりなどの強烈なオナニッシュを経、現在ではレスビアンショーが全盛である。

書店にもSM誌より、ポルノ雑誌（なぜエロ本では、いけないのだろうか）といわれるものが多く並ぶようになってきた。現在のこういう状態を見れば、SMブームが去ってゆくのは一目瞭然である。ではこのSMブームの

急速な隆盛と急速な冷却は、どうして起きたのだろうか。

まず映画の場合、ピンク映画はマンネリの打開策としてSMに走り、その残酷性が刺激を求める大衆に受けた。東映もこれを敏感に感じて、ヤクザ路線にSM路線を加えた。

しかも11PMなどを使って宣伝したので、ニュースのネタを捜し求めているマスコミがいつせいに飛びついて週刊誌やスポーツ新聞に書きたてたので、急にSMブームなるものが生まれた。

ところが、縛られたり撲たれたりでは、い



木馬責めにかける美木乃々子

くら商売とはいえ、女優が嫌がるにきまっているし、映画を見る方も最初のうちこそ好奇心にかられて面白がっているが、やがて、うんざりしてきて、ゆえに女優も嫌がる、見る方も、うんざりということになり、映画のSMブームは退潮したのである。SMよりもポルノ路線ということになり、観客もピチピチした新人女優が、惜し気もなく豊かな乳房をまるだしにして、スクリーンの上で悶えてくれる方が新鮮で、いいと思うようになった。

女優の方もポルノなら、それほど体が傷つく心配もないと歓迎で、万事が万事SMブームから離れていったのである。ストリップの場合でも同様のことがいえる。こちらの方は

毎日毎日、それも一日に何回も公演するのだから、そのたびに縛られたり吊るされたりでは、秋山夫妻のように、よほど熟練していないと、それこそストリッパーの体が、もたないだろう。かくして残酷ショーも下火になり体に安全？　な、そのものズバリのレスビアンショーが流行しはじめたのである。

SM雑誌の場合、映画やストリップの場合と少し異なった要素があるように思える。というのもSM誌は映画やストリップのようにその時まで全然そういったものがなかったかというところ「奇ク」や「風奇」が厳然としてあったわけで、なにも特別、目新しいものではなかった筈である。にもかかわらず、そこへ急遽、新興SM雑誌なるものが殴り込みをかけてきた。勿論SMブームとともにSM人口が増加して定着すれば、映画やストリップとは違って、SM誌だけは今なお全盛の筈である。しかし、そうはならなかった。俄にSM誌を手にとってみても所詮そういう資質のない人々には、不可解な世界でしかなかったのだろう。

それにもっと重要なことは、書店に溢れたSM雑誌、あるいは写真集のうち、本当にSMに理解を示している編集者がつくったもの

は殆どなかったということである。俄に急増したSM人口と俄につくられたSM誌が「奇ク」や「風奇」が戦後まもない頃から、ひっそりとつくりあげていたSとMの秘密の花園へ、いきなり現われて混乱を、もたらしただけというのが実情ではないだろうか。

しかも急増したSM人口も新興SM誌の殆ども、快楽ならSであれMであれ何でも、ためしてやれという人々と、金が儲かるのならどんな本でも出版しますという人々との、いわば快楽エゴと金銭エゴとが手を握りあった形でSMブームをつくっていたように思われる。そのため、俄にSMに興味をもった人々は、その快楽が理解できないということになると、すぐに去ってゆくし、出版社の方も儲からぬとなれば、すぐに手をひくのである。

以上のことからSMブームの退潮について次のような結論がだせる。SMブームとは、大衆のあくことなき快楽への欲望と金銭欲のつくりあげた、滑稽な一つの社会現象でしかなかった。そしてSMブームは、本来のSMとは最初から終わりまで、あまり関係なく、本来のSMと根本的なところで繋がっていないので、やがて大衆からも本物のSM愛好者からも背を向けられる結果になり、退潮

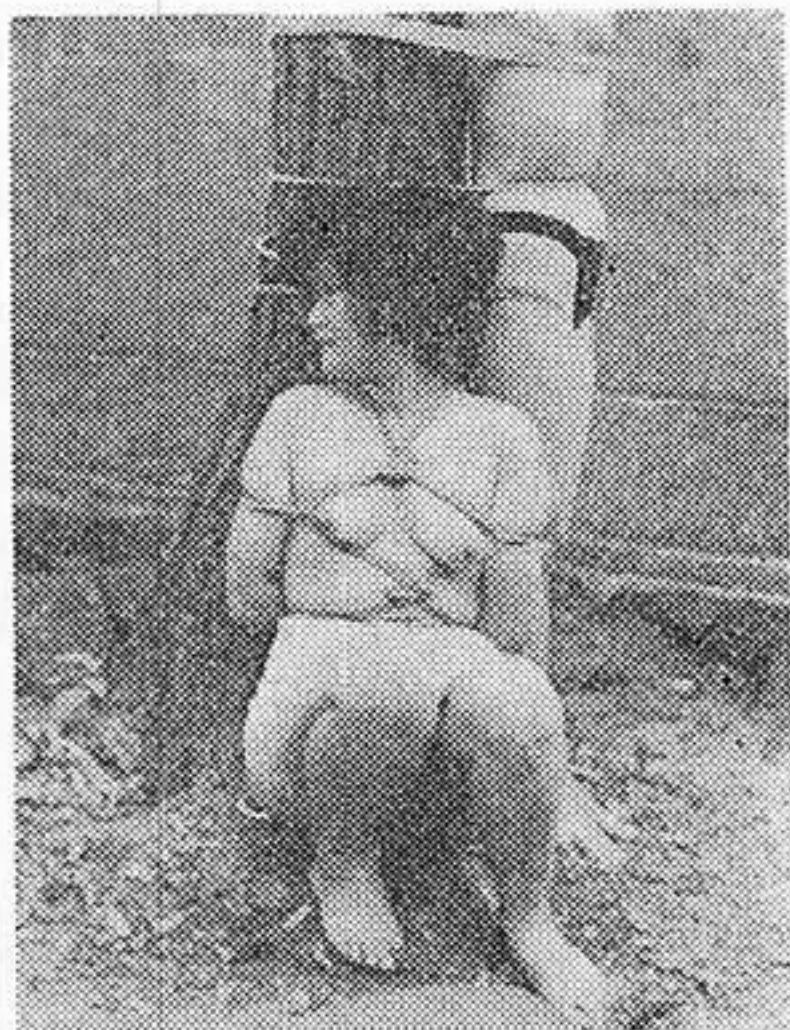
した。

ではSMブームは私たち「奇ク」の読者にとって何の意味もなかったかというところ、でもない。SMブームのおかげで、かつては少数者にしか使われなかったSMという言葉も公になり、世間もSM愛好者を以前ほど冷たい目で、見なくなってきたように思える。これは「奇ク」の読者にとっても喜ばしいことである。

それでは、SMブームが下火になってゆくことは「奇ク」に、どんな影響があるかというところ、私はプラスの影響があると思う。なぜなら、真にSMを理解しない人々が、理解しないままにSMに執着し、変にナンセンスの度合いを深めて、警察や世論の反発を買ってふたたび「奇ク」が弾圧されては、たまったものではないからである。

真にSMを理解せぬ人々には、すみやかに去ってもらう方が「奇ク」の読者にとっても都合がいいのではないだろうか。SMの世界には、プレイをするにしても文章を書くにしても、自ずと、そこには踏みこえてはならない一線があって、その一線を、はかる、ものさしは、SMを真に理解できる人にしか、わからないし、また使えないものである。

立木縛りで晒される田中美佐子



一人の女を、縛るにしても、縄の種類、肌への喰い込み方、その場の雰囲気など、どれ一つ、とってみても、おろそかにできない。いい加減な気持では駄目である。だから、本気になって緊縛写真を撮ろうとすれば、モデルからポーズからカメラワークから、あれこれ考えて、くたくたになってしまう筈だ。ほんの少し下着が覗いているかいないか、ほんの数本、おくれ髪が乱れているかいないか、その微妙なところで、緊縛写真は成功するか失敗するか、決定してしまう場合が多い。

そのあたりの事情が、わかり過ぎるほど、わかっている者でも、なかなか、いい写真は撮れないものなのだ。それほど微妙、かつ独

特な神経の鋭さを要求されるSMの世界に、最初からSでもMでもない人が、やってきても、うまくゆかないのは当然である。美人のモデル、プロのカメラマン、豊富な資金を使っても所詮理解できぬものは理解できない。だが理解できないからといって、ナンセンスで露骨な方向へエスカレートされては、世間に誤解され反発を買う恐れは充分にある。そんなことにならないうちに、お引きとり願うのは「奇ク」にとってプラスでなくて何であろう。

では、これら新興SM誌の間にあって、SM誌の老舗である「奇ク」は、どうあるべきだろう。勿論、それは「奇ク」編集部胸のうちにあることで、私のような青二才が、とやかくいう筋合いのものではないかもしれない。数々の非難、中傷、誤解、弾圧に二十年以上も耐え、ついこのあいだ「奇ク」三百号を出版された編集部は、ただただ偉いという他なく、私などの考えていることは、とくに知りつくされているかもしれない。また、たとえ編集部が今、いくらいい企画を持っておられても、今までの様々な経験から、まだそれらの企画を具体化するのには早過ぎると、他誌が色々な企画を実行させても、あえて堪

実感と視覚に悶えるM女・大塚啓子



えておられるのかもしれない。けれど私は、「奇ク」により、いっそうの発展を願うがゆえに、あえて私なりの今、考えていることを述べてみたい。

先日、私は例によって古本屋で「奇ク」の昭和36、37年度版を、さがしていた。目的の「奇ク」は、なかったけれど、代わりに、おもしろい本を見つけた。やはり、これも昭和37年発行の本で、美濃村晃・著「スクリーン・エロティシズム②」（久保書店）という写真集で、映画の中のエロチックな場面やサデ

イスチックな場面の、ワンカットを集めてある。どこがおもしろいのかというと、どこもなく当時の「奇ク」に共通した、古き良きエロティシズムの香が感じられるからである。

このことは現在の「奇ク」の読者が、今なお、絹川文代さんや梨花悠紀子さんなどに憧憬に似たサディズム、あるいはマゾヒズムを感じられるのに似ている。「奇ク」2月号に中野靖二氏が、絹川文代さんの魅力についてマゾヒストの立場から——おそらく絹川文代さんほどのエロチックな魅力をもつ女性は、もう二度と、私の前に現われないのではないだろうか、という気が、しきりです——と書いておられたが、私もサディストの立場からかつてのモデルの方が、現在「奇ク」誌上を賑わしているモデルより魅力的な女性が多かったように思っている。

その理由は、モデルの質も、さることながら、昭和48年現在と、かつての昭和37年とでは、エロティシズムの感覚が、かなり違っているという時代背景に関係している。「スクリーン・エロティシズム」には、炎加世子、若尾文子、三原葉子、小畑絹子、叶順子、万里昌代など、なつかしい女優のエロチックなワン・シーンが紹介されている。

現在のポルノ映画に比べれば、問題にならない場面ばかりで、乳房でさえ、まともに見せている場面のものは、この「スクリーン・エロティシズム」全頁の中で、何頁もない。にもかかわらず私は、現在の東映や日活のポルノより、今ではテレビでも充分にパスできるような新東宝映画の、どことなく泥臭い濡れ場面や責め場面の方に、何倍ものエロティシズムやサディズムを感じる。池玲子、杉本美樹、白川和子よりも、小畑絹子、万里昌代、三ツ矢歌子の方に魅力を感じる。

「奇ク」の読者の中にも、案外そんな人が多いのではないだろうか。東映や日活のポルノより、新東宝の作品に郷愁を持っている人かなり、いるような気がする。あの当時はミニスカートもホットパンツもなく、パンティが見えたというだけで大騒ぎになった。現在では駅のホームの階段でも、気をつけていればパンティぐらい実際に見ることができるとだ。だから女優の方も脱ぐことを、かつてのように、ためらわなくなってきた。

水着にしても、最近ではビキニは当たり前になり、セパレーツでさえ野暮ったく見えるほどである。結局、現在のエロティシズムの感覚が昭和37年頃に比べて違っているのは、

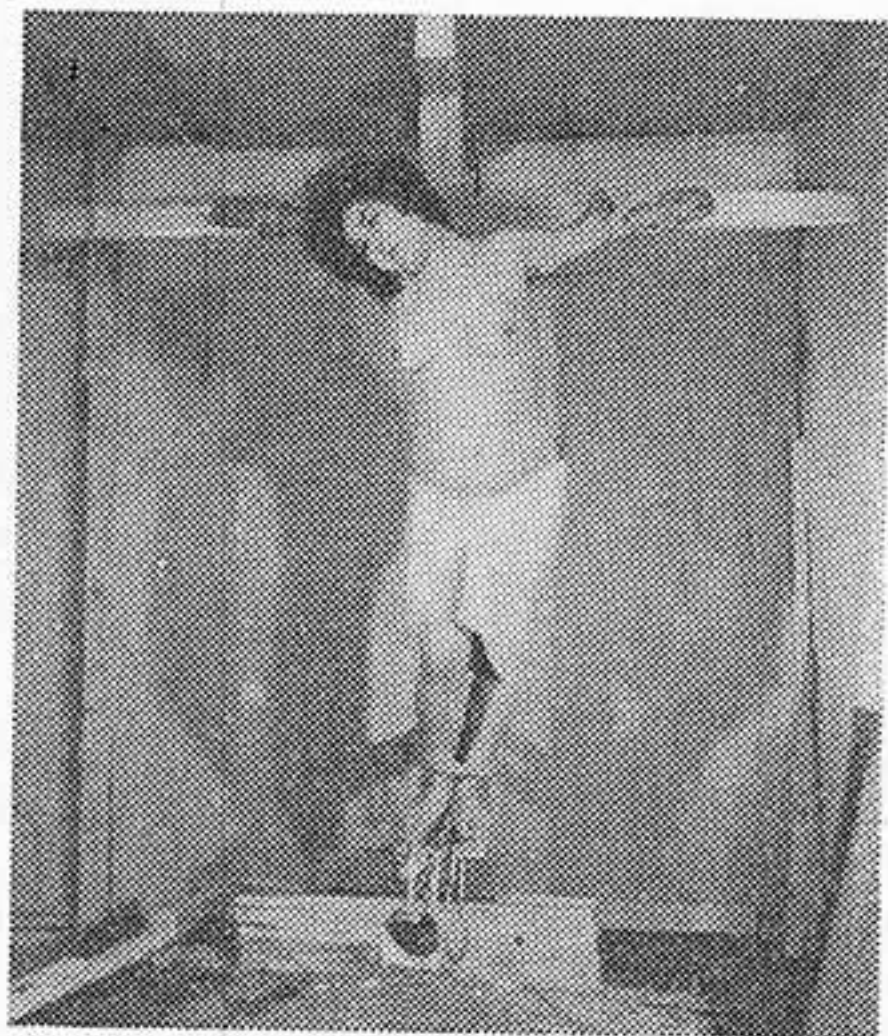
ヌードに対する人々の意識の変化にともなって、女性の服装が次第に大胆になり、同時に女性の羞恥心が極めて稀薄になってきたことに原因があると思われる。

羞恥責めのお好きな風流極道軒氏が、S小説の舞台を、しばしば時代劇に設定されるのも、半ば脱いであってしまっているような格好で臆面もなく街中を闊歩している現代娘に、羞恥というものを、なんら感じられないからかもしれない。その上、現代は男女ともモノ・セックスと称して中性化してゆく傾向にあるので、なおさら、女の羞恥心を云々という喜びが、ぴたりしない時代になってきている。

S小説にも、現代娘に似た鉄火肌の娘が、よく登場してくるが、これとても、鉄火娘は本当は、ふつう以上に羞恥心の強い女らしい女であり、やがては自分が、ただの女ではないという屈辱と喜びを思い知らされる、という筋書きが前提になっているのであって、これが素っ裸にされても顔色一つ変えず「寒いから、早く服を返してよ」というのでは話にならない。

SMブームの最中、新興SM雑誌が沢山のプロのヌードモデルやピンク女優を使いながら、緊縛写真に失敗したのは、演出のまずさ

処刑女囚の悲愴美に酔う山原清子



SMが理解できていなかったことに加えて、もっとも羞恥心を持ちあわせていない人々をモデルにしたことに原因がある。露出することだけに快感を覚えるタイプの女性に、緊縛写真のモデルは、むづかしい。

「奇ク」の読者も、何回となく見られたであろう。あの文房具店で買ってきたばかりのような白々しいロープを、なんとなく体に巻き付けられて、バカみたいな顔をしたモデルがきょとんとしているSでもMでもない、できそこないの、記念写真みたいな迫力のない緊縛？ 写真を。CMではないが、羞恥心のない緊縛写真なんて×××××を入れないコーヒ

ーみたいなものだ。羞恥心のない緊縛写真なんて……。

ところで、中近東の女性は、その昔、乳房を見せることより、唇を見せることの方に、より強い羞恥心を感じたらしい。というよりも、習慣によって、そう感じるように小さい時から育てられていたのであろう。これによっても、女性の羞恥心が、いかに頼りなく環境次第で、どうにでもなるものだということ

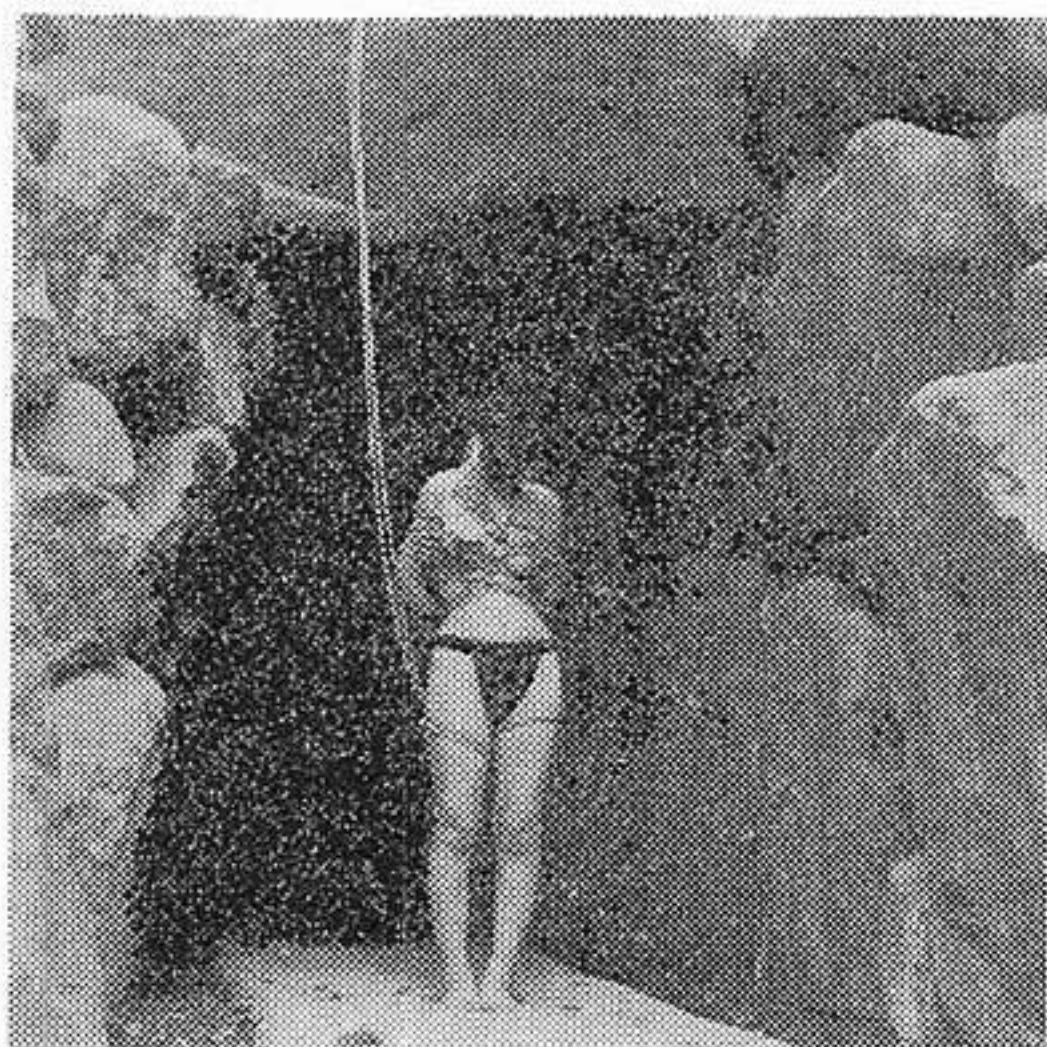
がわかる。そのあたりの事情は、フックスの「風俗の歴史」（角川文庫全9巻）にも詳しく書かれている。

現実にセックスの解放とともに、裸になることに対して羞恥心を全く感じない女性が出現してくる可能性は十分にあるわけで、羞恥責めの好きな人にはSのプレーも序々に、つまらぬものになってゆくかもしれない。ゆえに絹川文代さんや梨花悠紀子さんが今なお、もてはやされるのは一つには彼女たちが「奇ク」誌上で活躍した頃は、まだ羞恥心の健全な時代であったので、私たちは彼女たちの緊縛された表情に満足のいく羞恥心を感じることもができるからではないだろうか。

絹川文代さんにしても梨花悠紀子さんにしても、当時のモデルは勇気があったと思う。

世間の目が、SやMに対して恐ろしく冷たい時代であったから、裸で、しかも縄目に悶えているという、あさましい姿を誌上に発表するということは、もし近所の人に、そんなことがバレでもしたら、ヘンタイとか狂人とか言われかねないであつたらう。その代わり、いったん、この世界へ入ったら、冷たくノーマルな世間に背を向けている者同志、ひっそり慰めあい、モデルも読者も編集者も一緒にあって誌面を作っていた。

読者は、絹川文代さんや梨花悠紀子さんな



洞窟幽閉の不安を味わう木村洋子

どが、自分たちのためにモデルになってくれていることを、よく知っているから、読者もモデルも、ある意味では同じ屋根の下の住民仲間のような、何かしら、ほのぼのした親しみがあつた。当時はモデルの数も今ほど多くなくて、絹川、梨花両嬢の他に、竹野ひろ子大塚啓子、東浦ひかるの五人が、主流メンバーで、他にもいるにはいたが、読者の目も、ここらに集中していたように思う。今の「奇ク」ほどモデルの消長は激しくなかったように思うのだが……。

絹川文代さんについていえば、SM両方をこなすことができ、しかもSの側からもMの側からも魅力的だと支持されていた素晴らしいモデルである。彼女が、いかに素晴らしいか、手もとに、「奇ク」昭和37年2月号があるので、それに掲載されている——粘着する嵌口具——という一枚のグラビア写真について、少し書いてみよう。

その前に嵌口具（かんこうぐ）とは——はめ込み型猿ぐつわ——とでもいう意味で広辞苑にもでていない「奇ク」編集部の新語である。この他にも——檻棲（きょうてい）に至るまで——とか、——筐底（きやうてい）の牝豹——とか当時の「奇ク」には、むずかしい漢

語が、つきものであつた。

そういう漢語を、さりげなく使うところに他のエロ本とは読者層が違ふんだという「奇ク」の一種のプライドみたいなものが、あつたのかもしれない。ちなみに檻棲とは破れごろもの意味、筐底とは箱の底という意味で競艇とは何の関係もない。この二つの漢語は、ちゃんと辞書にでている。

で——粘着する嵌口具——のグラビアの方だが、絹川文代嬢の目は、うつろで、口に密着した嵌口具の苦しさを、あきらめきつた表情で甘受している。やや心持ち、顔を左に傾けて、顎を前へつきだしているのも、きつと嵌口具のきびしさに耐えかねて自然と、そういう格好になつてしまつたのであろう。

目もとに乱れかかる髪が、後手に縛りあげられているので、手で払うこともできず、文代嬢の哀れさを、いっそう増している。八重の縄は、ひしひしと、やわらかい肌あいに沈み込んでいるし、その縄目のあいだから、ぶつくりと二つの乳房が、泣いてでもいるかのように、とびだしている。

この美しくも悲しい二つの乳房は、嗜虐的な男によって撫弄されるためにだけ、存在している。もし、ぴよんと、はっている可愛い

乳首の先端を爪の先で弾いたり、摘んで右左に引っぱってやったら、文代嬢は嵌口具の奥で、どんな声をだして泣くだろう。嵌口具はきつと、舌すら動かすことを禁じているだろう。文代嬢は喉でクウクウと鳩のような悲鳴を、かろうじて、もらしながら、目に涙をため、男に許しを乞うに違いない（心の奥底では「もっと、もっと……」と叫びながら）。

このグラビアを構成された塚本鉄三氏も、「絹川文代嬢なんかは、どんな役柄でも十分にこなすことができる素質を持っているし、又、仲々努力家でもあるので、こちらの意図を、いち早くのみ込んで動いてくれるため、非常にやり易いし、気が楽でスムーズに仕事が進んでいくため、有難い」と、いつか奇ク誌上で言っておられた。

この塚本氏の言葉の中に——努力家——という語句が、でてくるのに注意してもらいたい。絹川文代さんは単に先天的素質があったのみならず、努力し修練していたのである。当時のモデルは絹川文代さんに限らず、各自がそれぞれ自分なりに努力していた女性が多かったと思う。いかに、より素晴らしいM女性になるか、一生懸命、励んでくれたりして、S的男性としては表彰してあげたいような、

縄と竹に纏いつかれた関谷富佐子



いじらしい娘さんが多かったように思われる

これが現在の「奇ク」のモデルということになると、玉石混淆で、どれがいいモデルなのかわからなくなってくる。いいモデルというのは絹川文代さんのように、先天的素質プラス努力型の女性であるのだが、現在の「奇ク」のモデルは数が多いので読者の人気も、まちまち。自己中心的なタイプも少なくないように思える。中にはアルバイトかせぎのつもりでモデルを志願する現代っ子もあるらしい。これでは絹川文代さんや梨花悠紀子さんが「奇ク」における一種の伝説的存在になり

つつあるのも、わかるような気がする。

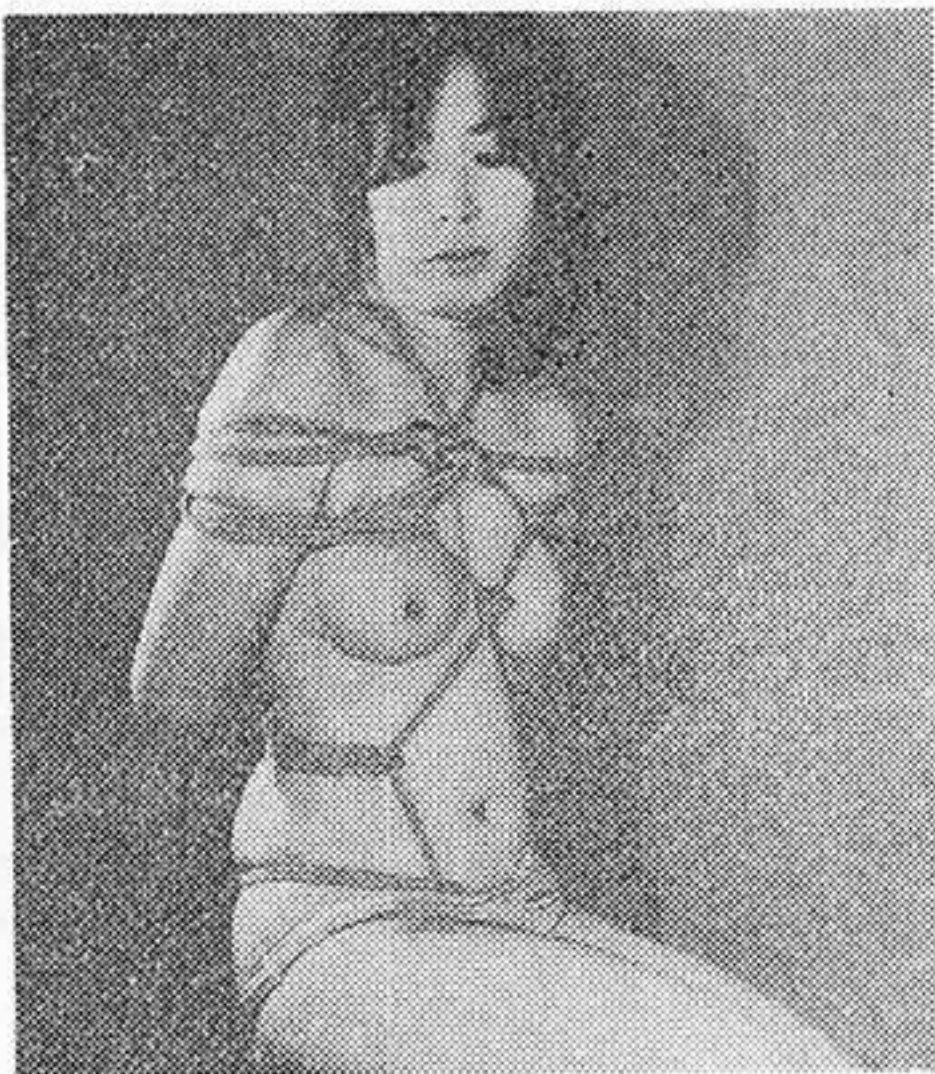
なるほど「奇ク」誌上においては、投稿する男女の割合を見ても、圧倒的に女性が少ない。だから女性が、少々天狗になっても仕方ないかもしれないが、あまり調子にのって——私は、こんなに素敵なマゾヒストなのよ——というような態度が見えてくると、いいモデルとは言えないだろう。

M女性は縛られてヒイヒイ泣いてみせたらそれでいいなどと単純に考えていたら、何ら発展性がない。飼育などという時間のかかることより、バイブを使って、さっさとMの境地へ昇天したい、というのであれば、それはもはやMとは言えないのではないだろうか。それでは、オナニーと何ら変わるところがない。ただ縄とバイブを使用しているだけに過ぎない。Mの境地は、もっと他にある。飼育されていく間に女奴隷として成長し、その中に自分のMの個性を発見し、さらに飼育によって、かつては思うだけでも気が狂いそうに恥かしかった行為を、喜々としてやりこなせるようになり、さらにまた、努力して成長してゆく。

サディズムもマゾヒズムも、決して一つところにとどまって、同じことを繰り返す性質

のものではなく、有機的に発展してゆくべき性質のものである。そのためにはSの側もMの側も、縄（あるいは、その他、諸々の責め具）を通じて、互いの心と心の触れあいを大切にし、互いの立場を考えあいながら努力してゆく必要がある。

安井喜久子夫妻や渡部好美夫妻の生活ぶりは、理想的な気がする。総じておしどりプレーに本格的なものがあるのではないか。ところが最近の「奇ク」は、そういう時間をかけて一人のM女性を、ゆっくり成長させてゆくような本格的プレーより、なんとなく新人モ



S 人士に垂涎せしめた絹川文代

デルのごきげんとりみたいないんスタントSMプレーが、誌上に多く見受けられるみたいだ。そのため、申しわけないが私は毎月毎月「奇ク」を買わなくなった。勿論、毎月、本屋で手にとってみることはみるけれど……。

かつての「奇ク」の魅力が、まだ完全に蘇生していないからか、あるいは時代が、もはや、かつてのような悠長なSMプレーの存在を許さなくなってきているのかもしれない。もしそうだとしたら、誠に淋しいことだと思う。だから今さら何をしてみても、一緒かもしれない。しかし、やってみて駄目なら、それはそれで仕方がないけれど、試みもせぬうちに諦めるのも積極的姿勢とはいえない。ゆえに「奇ク」に対して、第二の絹川文代や梨花悠紀子が現われ、かつて以上の素晴らしい魅力的なSM専門誌になるように、次のことを提言したい。

一、やたらに何でもかんでも、モデル本位の態度をとらぬこと。その代わり良い資質のモデルは充分に優遇し、誌上において連載形式でその飼育の過程を紹介する。

二、グラビアは余白をなるべくなくし、写真を、より鮮明にする。フォトストーリーや組写真を積極的にとり入れ、余白には気の

きいた題やセリフを入れること。また単にヌードだけの緊縛写真の他に、セミヌードや洋服、着物、セーラー服など羞恥の効果を狙った緊縛写真を入れる。

三、グラビアは、巻頭、綴込み、巻末の三部に分け、S的写真ばかりでなくM的写真も入れ、切腹、下着その他、フェチスト向けの写真も入れること。

四、グラビア写真を増すことによって、本文中の、小さく不鮮明な写真は、あまり沢山載せぬこと。載せるときは写真の枚数を減らして大きくする。

五、優れたイラストや、さし絵を、もっと豊富に載せること。

六、他のSM誌が懸賞小説の募集等「奇ク」と似たようなことをしているので、懸賞金を思いきって上げるとか（そのため、少々誌代が上がっても、よい。内容がよくなるのなら）して対抗し、優れた新人作家を養成すること。

私の提案が少しでも「奇ク」のためになったら私としては、しあわせである。私が毎月「奇ク」の発売と同時に、本屋へ走って行って買うようなSM専門誌になられるよう、心から願っている。

カット・マエダヒオミ



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

アブ・ラブ行状記

戸保呂 一郎

北見市に近い、オホーツク海沿いの私の村に、白系露人の女を妻にもったSという男がいた。

夫婦ともに私の父の山で働いていたが、男は材木運搬中、切れたワイヤーを頭に受け、数日後に死亡した。

この男のことを、私は今でも忘れることが出来ない。それは、この男が極端な変わり者であったことと、男が異常なほどの残酷さを、もっていたことによる。

子供ながら漠然とした性的好奇心をもっていった私は、作業中の山に入って、その白系露人の女を含め、飯場や下草刈りの女たちが、林の中で用を足していたり、川で体を洗っていたりするのを

のぞくのが好きであった。

そういう訳で、その日も父がいる林区に探索に行っていたのである。

私が空気銃をもって白樺の中を足音をたてずに（空気銃をもっていれば、しのび足で歩いていたり、藪をうかがったりしても、おかしく思われないのである）歩いていたら、白樺の中で男と女が絡んでいるのを見つけたのである。

Sと白系露人の女である。絡み方は山羊や馬のやり方と、そっくりであった。私が、すぐ近くまで行っても気付かない。

近づいてみて、ぞっとした。女は上半身をむき出しにされた上

乳房の上を樹のつるで、かなりきつく縛られているのである。女は苦しいのであろう、齒を食いしばって声もあげない。私は女が殺されそうになっているのではないかと恐ろしくさえ、あった。ややあって、男は女のモンペを脱がすと、女の上体を起こし、そのままにして腹を、もみ出した。

白系露人の女は、ひどく苦しそうにしていたが突然、小便を垂らし始めた。勢いは、かなり強く、すぐ下で腐葉土に、ぶち当たり、その、はね返りの土が尻についていたことまで私は、はつきり思い出せる。

私は腹這いになって藪のすき間から、女と男と一間も離れない近さで、じっと見ていた。父の呼び笛がなると、二人はなんでもないようにして立ち上がり、川をこえて、作業場へ行ってしまった。

私は二人が川の向こうへ上がるのを見届け、さっきの場所に引き返し、女を縛っていた、つると小便の跡に見入った。

父と一緒に家へ帰っても、あの異常な光景が瞼の裏に灼きついていて、まるで人生の不気味さを感じとった気分になり、どうにも落ち着けなかった。今、こうして想い起こしても、独特の興奮を覚えるのである。

それで、その後も私は女に注意を向けていたのだが、それ一度だけであった。ただ、その再現の代りのように、男が、生きている野兎の腹を割いた上で、逃がしてやるのを目撃したことが、二度、あった。それを見た後など、夕飯が、ろくに、のどを通らなかつたのを覚えている。

男の死後、山の若い者たちが面白半分に女のところへ夜這いす

ることがあったらしい。ある夜、一町も離れた私の家に女が逃げて来たことがあった。あまり上手でない日本語で母に泣いて訴えていた。翌朝、私は意外に美人の白系露人の女と初めて飯と一緒に食ったのである。しかし、あの光景を思い浮かべ、妙に興奮したのを覚えている。女はそれ以来、私の家で働くことになった。期待を大きくした私は、女が山仕事でなく、家事や水汲み仕事を手伝わされるのが多少、残念であった。ところが、山での用便姿を見る以上の興奮を与える女の姿を、やがて私は見つけ出したのである。

私の弟は病弱で父母と一緒に寝ており、姉たちは二人で別の部屋に、私だけは二階の八畳に寝ていた。私の下の部屋には、女がいる。

そして、家の大便所の隣には噴霧器などを置く大人一人ぐらい入れる空部屋がある。

私は早速、探索の実行にとりかかった。思ったとおり、便所と空部屋の間は板のはぎ合わせで、節穴を通して十分、内部を観察できた。尻の方なので気付かれる心配は全くない。問題は女の部屋であった。畳をはがさない限り無理である。だが押入れには畳はない。これも、うまい穴が見つかった。敷板を外すと節穴の三つほどある板があった。

私は白系露人の女が大便所に入ると、外にまわって小さな物置に、もぐり込み、彼女の小便している姿や、大便をしている姿に見入ったものである。大きな白い尻から猛烈な勢いで、ほとぼしる小便に、私は雌馬のそれを思い浮かべた。

そのうち、私は女が時々、禪のような下着をつけることがある

のを知った。便所に入っても小便や大便をせず、下ばきをおろして、その禪様の下着にチリ紙か何かのようなものを、はさみ、下ばきをあげモンペをなおして出てゆくのである。

私は、それが女の生理帯であることなどを、姉が生理の始末をしているところを見るまで、わからなかった。ただ、姉の場合、普通の白いズロースの下に、黒い下着をつけていることだけが違っていた。

私の部屋の隣は物干場代りに使用されていたが、偶然、新聞紙をかぶせて干してあるそれを見つけ、その奇妙な構造、何か人生の裏の世界を暗示するような干し方を見て、私は疑問が解けたと思った。女のそれは彼女が留守の時、部屋に入って確認した。興味あることに、それはアザラシの皮でできていた。おそらく手製であろう。

大学で民俗学などの書物を読むうち、月経の手当てと方法が、漁民、狩猟民、農耕民という三つの類型に当てはまるということを知った時、女の生理帯の構造の最適さに感心したものである。

アザラシの皮の柔らかさと通気性、そして、あの一定方向に生えた毛の利用には、女たちの頭脳のよさを思わせた。一定方向をもった毛は、脱脂綿などが足の動きによって、ずれたり外れたりすることを防ぐのであろう。

女の、この簡便で理想的な形に比べ、姉たちのは、わざわざ黒く染めて、ゴム布をはってあって、一目で、その陰微さを示しているようであった。

白系露人の女は、私の家に馴れ、母や姉や病弱の弟に、よく変わった人形や木の細工物を作ってくれるほどであったが、町の人

たちとは、うちとけなかったようだ。父も母も温厚であったから女を叱ったこともなかった。

特に父が盲腸炎で北見市の病院に入院した時、姉と弱い弟、それに私を母以上に世話してくれたものである。時々、山で鹿を伐採夫たちが密猟し、その肉や皮を父の元にもって来てくれると、素晴しくうまいシチューを作ってくれた。そのせいか、弟は小学生になると、極めて健康になり父母を喜ばせた。

私の家の大便所にはメンソレータムが置いてあり、父などが痔の治療に使っていたようだが、何度か母も、のぼせたなどといって排便後、肛門に塗っていたこともあった。

私は、母が人差し指に、ちり紙を巻いて、その上にメンソレータムを、たっぷりのせて、大きくて白い尻の割れ目に、かなり深くまで挿入するのを見て妖しく興奮したものである。

ある時は姉が排便後、紙で始末して立ち上がりスカートまで下ろしたのだが、どうしたものか、また、しゃがみこんでメンソレータムを手にとったのである。音のしないようにキャップを外して胸のポケットのハンカチをとり出すと、それを指に巻き、メンソレータムを、たっぷり塗り始めたのである。

姉は少し立ち上がって便所の前壁に左手をついて体を支えてスカートを、たくし上げると、Aに指を、じわじわ入れ出したのである。半ば立っているの、私からはハンカチを巻いた指が、めり込んでいくのが、はっきり見えた。姉は、まるで楽しんでいるかのようにあった。

この姉は中学を卒えると、釧路市内の親類方から高校に通い、夏など友達をつれて帰省することがあり、私は彼女達の排便姿も

観察する機会に、ずいぶん恵まれた。しかし姉もふくめて、少なくとも十代の女たちの排便姿で、最も美しいのは原野の牧草の上での、それであろう。私は姉達の後をつけて、彼女達が時には並んで牧場の隅の叢で、小便をしているのを美しいと感じたものである。全く陰微さはなかった。

白系露人の女は、私の家で生活するうちに、ずいぶん、人なつっこくなり、体つきも、ふくよかになったようだ。しかし、私はどうしても、あの樹ぶるで乳房を絞めあげられた姿を忘れることができず、想い起こすたびに、異常なほどの快感で心臓が高鳴った。ところが、ある機会に、私はそれが性欲に直接、結びついたものであることを知った。

隣の町に芝居の巡業団が来たのである。私は母にせがんで、女と一緒につれていってもらうことにした。

唄や踊りを見ているうちに弟は母に、私は女に抱かれて眠ってしまった。目がさめたのは時代劇の途中で、侍姿の女が腹を切つて口から血を流し、腹に巻いた、さらしには大刀が突き刺さり、血がにじんでいる。私は下から白系露人の女を盗み見た。

不思議なことに、女も興奮を感じているのか、じっと見入っている。割腹中の女侍は切り終えると、大刀をバンと舞台に刺し、合掌して前に倒れ伏した。

その後、着物姿の女が胸を縛られて出てきたが、私は裸体でなかったのだ、さほど興奮しなかった。しかし、白系露人の女は明らかに興奮していた。それまで時折、私の肩をトントンたたいてくれていたのが、じっと私をかかえたまま舞台に見とれているのである。

私達が家に帰ったのは、九時近かった。父は猟銃の手入れをしており、面白かったか、などと母に言っていたようだったが、私は一刻も早く二階に上がって階下の女を、のぞき込みたかった。じっと待っていると女が入って電燈がついた。ふとんを敷き服を脱ぎ出した。ブラジャーとかシューミーズなどは着ていないのですぐ乳房が見えた。やはり女は、ああいうことに欲情するらしく乳房をもんだりしていたが、寝巻の紐を手にとると、乳房の上を例のように縛り出したのである。

かなり、きっちり縛り結ぶと、その上に寝巻を、はおり、その両すそを絞り上げて股間に通し、両手を後にまわして、ぎゅっと引いた。実に妖しくも美しい姿だった。そういうことがあって間もなく、女は父の紹介で浜頓別という寒村で、小さな牧場をしている人のところに後妻になっていった。

足の悪い人だったが帯広の獣医専を出た、おだやかな人であった。去年、久しぶりに訪ねてみると、女はすっかり太って、よいおばさんになっていた。私は、これでよかったのだと、つくづく思ったものである。去年の彼女の姿からは十六年近く昔の、あの姿態は想像できなかった。しかし、かかる光景だけは鮮明に灼きついて離れない。

私は中学の三年になった時、進学準備の為に、札幌の叔父の元にやられ、翌春M高校に入学した。叔父は内科の医者で、小さな医院をやっていた。従妹がいて私と二つ違いであった。私は従妹の隣の部屋で七年間、生活し、叔父の医学部進学希望を拒否し大学は理学部数学科に進んだ。

この従妹の部屋を私は一度、いや数度、高校の最終学年時で最

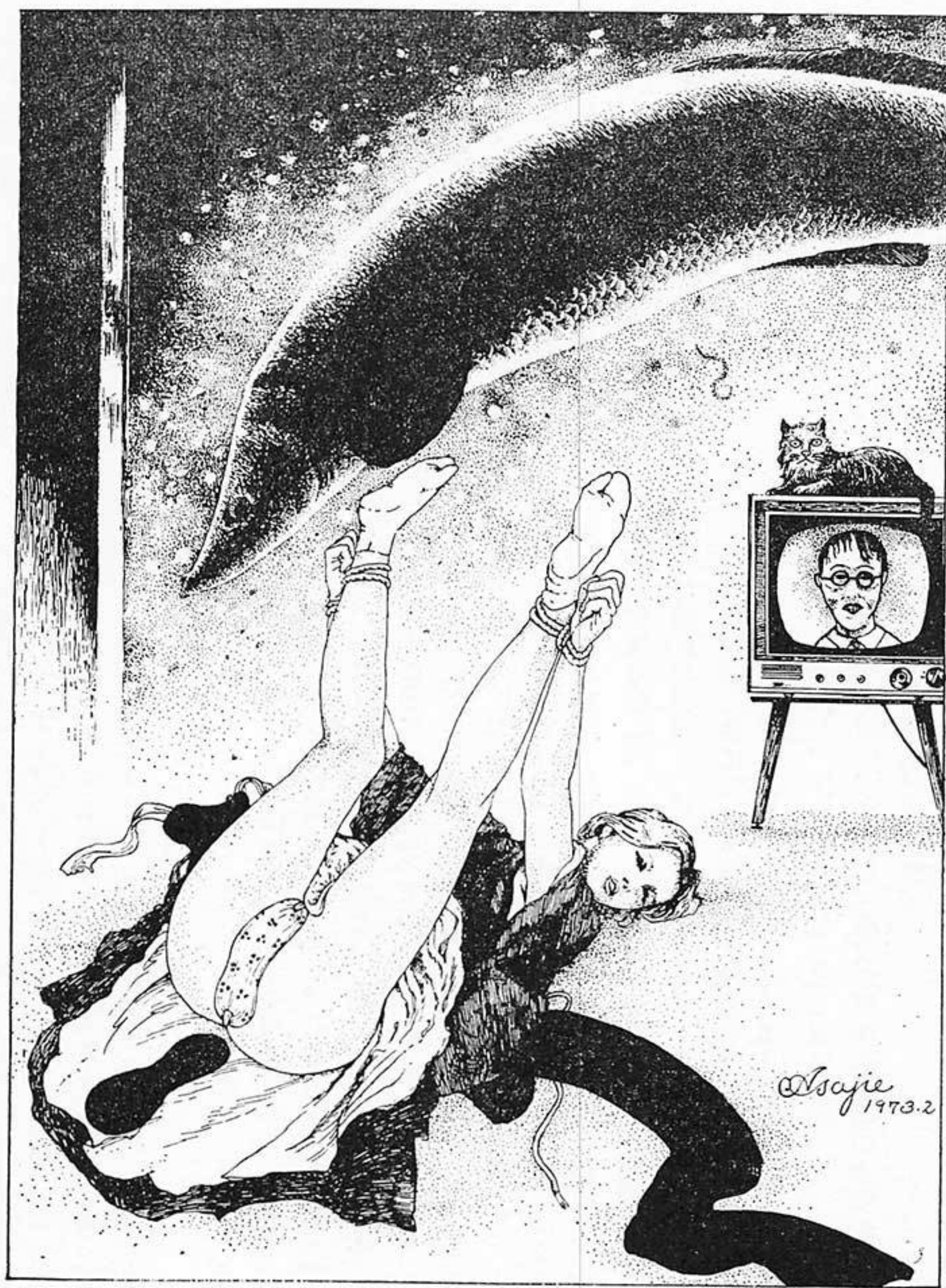
も勉強で苦しんでいる時
ひそかに、のぞいたこと
がある。

私の部屋の押入れの上
の板を外し、従妹の部屋
が見えるように穴をあけ
たのである。

穴からはベッドの足の
方から頭の方を見れた。

しかし従妹は着替えは全
裸にならず、下ばきなら
下ばきというふうに着
やスカートを着けたまま
していたようだ。ところ
が、夏で札幌にしては暑
い昼間、従妹が昼寝する
まえに読むからルネッサ
ンスの絵画集を見せてく
れと部屋にやってきた。
私は貸してやったが、ふ
と悪い欲望が起きて、の
ぞいてやれと思ったので
ある。

従妹は毛布を、ずり下ろし、窓を、だいぶ開けてカーテンを引
き、下ばきを脱いで、後になってわかったことだが、キリストの



受難画を見ながら手淫をしていたのである。その時、はじめて従
妹の陰毛が平面的ではなく陰部の亀裂の内側より立体の带状に生
えているのに気がついた。私も従妹の手淫を見ながら射精した。

時には風呂場の洗濯籠の中に、従妹のものとわかる下ばきや生理帶まであった。しかし、それらは看護婦のと一緒に乾燥室で干されたようである。

従妹は美人というほどではないけれど、いわゆるめんこい顔立ちをしている。頭脳も普通であったが、文学が好きで、よく私を相手に拙い文学論を、ふっかけてきたものだが、大学に入った私は、その話の中に覚えてたのサディズムやマゾヒズムの話を挿入して反応をうかがった。

札幌の街の古本屋で、ある雑誌を手に入れ、私はそれまでの体験を分析、総合できていたのである。明らかに従妹はマゾヒステイックな話に反応を示した。

彼女は、こっそり『第二の性』を読んでいたことも、私はわかった。しかし私は彼女に、その雑誌の絵や記事を見せなかった。なぜか私は決定的な、つながりのできるのが恐かったのである。ところが、私が大学三年の時、即ち彼女がF女子短大一年の時、帰省中の私の家へひょっこり、彼女が訪ねてきたのである。私との異質の性の交渉は、その時から具体的になっていった。

弟は内地旅行でいなく、家は母と父と私の三人であったので、父母も喜んで迎えた。

白系露人の女が生活していた部屋を急ぎ整え、そこに彼女は二週間ほどいた。私は彼女の排便する様を例の小部屋から、就寝の姿を押入れから観察した。こちらへ来て生理が始まったらしく、三日間ほど続けて、彼女の生理の始末を見た時は、いささか嫌になっただけである。水洗便所ではないので血で汚れた生理綿を、ちり紙で、きちんとくるんで落としているのは、好感がもてた。

小便も白系露人の女のように勢いは強くなかったけれど、尻の方に少し流れてポタポタしずくを垂らすことが多かった。

生理が終わった頃、私は彼女を猟につれていくことにした。密猟であるが、自分の所有する山であるから他人は何も言わないし侵入してくる事もない。父の二連銃と犬をつれて家をオートバイで出て、林道を登って途中から林の中に入ってしまった。

草原に出ると、犬がすぐ雉を追いついた。雌雉であったが二の矢で撃ち落とした。犬がもつてくると、私は木の枝を折り、雉の下腹を上に出し、息をふきかけて羽毛を払げ、肛門をむき出すと枝を挿し込んだ。ところが彼女が「卵をとり出すの」と聞いたのである。

私は苦笑して、「腸をすぐ抜かないと腐るんだ」と説明してやった。しかし私は心の中で、「そうだ！ おまえの腹の中にある子宮を引きずり出すようにね」と言いたいくらいであった。

私は彼女が明らかに腹の中に枝をおし込まれ、太い腸が引き出されるのを見て欲情していると判断した。あの上気した顔は獲物をとった興奮でなく、明らかに性的な、それであった。

そうでなくて何であろう。白系露人の、死んだ夫が野兎の腹を開いて、いたぶっていたのも、私や白系露人の女が割腹を見て胸が鳴ったのも、姉が必要もないのに刺戟性の薬を肛門深く入れていたのも、これらは、みな性に結びついているのだ。

大学の一般教養で、アメリカの女流作家でポーターという人の短編を読んだことがある。その中で、兄が射殺した野兎の腹を割くと子宮がとび出して、その中に胎児が並んでおり、それを見て幼い妹（ポーター）が性に目覚めるという場面がある。

私は確信を深めた。「従妹も欲情しているのだ」と。私と彼女は白樺林の中に入っていた。

白樺林は美しい。森の佳人といわれる理由がわかる。私は彼女に白樺の美しさや、しなの木の木の林の香気のことなど話しながら奥深く入っていった。この白樺の下で、柔らかい腐葉土の上で、かつて、死んだSが妻を半裸にし、乳房を樹づるで絞めあげ、犯していた。腹をもみしごいて小便まで垂らさせていた。

私は自分の思い出に心を奪われて、彼女が「バンビよ！」と叫んだ声に、はっとした。その日は雉一羽と山鳩を数羽とただけで山を下りた。雉鍋を彼女は喜んで食べてくれた。

道内の大学は夏休みが短い。私は彼女と一緒に帰るべくレポートを書き上げ、もっぱら残りの時間は彼女を北見市につれていったりしたが、彼女が、また鹿を見たいと言いつ出した為、私は以前のように出かけることにした。

私は、自分だけが知っている山の斜面の秘密のスペースに、彼女をつれていった。そこは柔らかい五十センチほどの草が密生しているところである。

私は彼女に好きだと言ひ、接吻し、おし倒した。犯す意志などなかったが、下ばきが濡れているのがわかると猛烈に犯したくなつた。初めてにしては、私も従妹も、うまく交わることができたのに妙に感動したのを覚えている。

犬は、そこらの鳥を追ひ駆けている。静かで、風が草をゆらし、彼女の白い腹の上に光をゆらせたのが、きれいだった。その白い腹が波打つを見て、私は何気なく、「ここを開いてみたら、美しいだろうな」と、つぶやいた。

従妹は、「いいわ」と目をつぶって言った。それが私を刺戟した。私は細長く固い剣状の草の葉をちぎり、葉のへりのざらざらするところを腹にあて、へりのざらざらが腹を逆目にこするようにして静かに引いていった。

腹に赤い筋がつき、従妹は高ぶった声を挙げた。「お乳を吸って」と私につぶやいた。私は言われるままに吸い、その葉で乳房も引いた。手をやると血が少しついており、それ以上に、乾くと何か独特の香りのする、つるつるしたもの、あふれている。雌鹿の肛門の香りと、ひどく似ているなと感じたのを覚えている。

私は、下ばきや、スラックスを引き上げてやり、下半身をかくした。そして、草を何本も抜き、縄を編む要領で、それらを細縄にし、彼女の乳房を縛りあげた。白いお乳に緑の草の縄は、たとえようもなく美しかった。

私と従妹は、しばらく草の中で眠り、結局は山鳩一羽とらず山を下った。しかし、私の胸は感動的に満ちていた。途中、私ともう恥かしさなど意に介さず、彼女に背を向けて小便をし終ると、彼女は「じゃ私も、しょうと」と言ひ、あのかわいいお尻を私に向けた。もうなんの気のてらいもなかった。

セックスは女を、このようにも変えていくものだなと私は思った。私は道すがら、「あんなおかしいことやってごめんな」と謝った。すると彼女は「何故か、とっても気持ち、よかった」と言ひくれた。変質的だなどとは一言も言わなかった。めんこい、やつである。

翌朝、庭の物干には、昨夜、風呂で洗ったのか小さくて可愛い下着類が、かかっていた。私は、あらためて彼女を、めんこいと

思ったものである。しかし、その時、妊娠が心配になった。札幌に帰って、しばらくして、彼女は私に生理があったことをそっと知らせてくれた。げんきなもので、安心すると又、逢いたくなった。

私は、いやがる彼女を、おし倒し、生理帯に手をかけた。汚れ

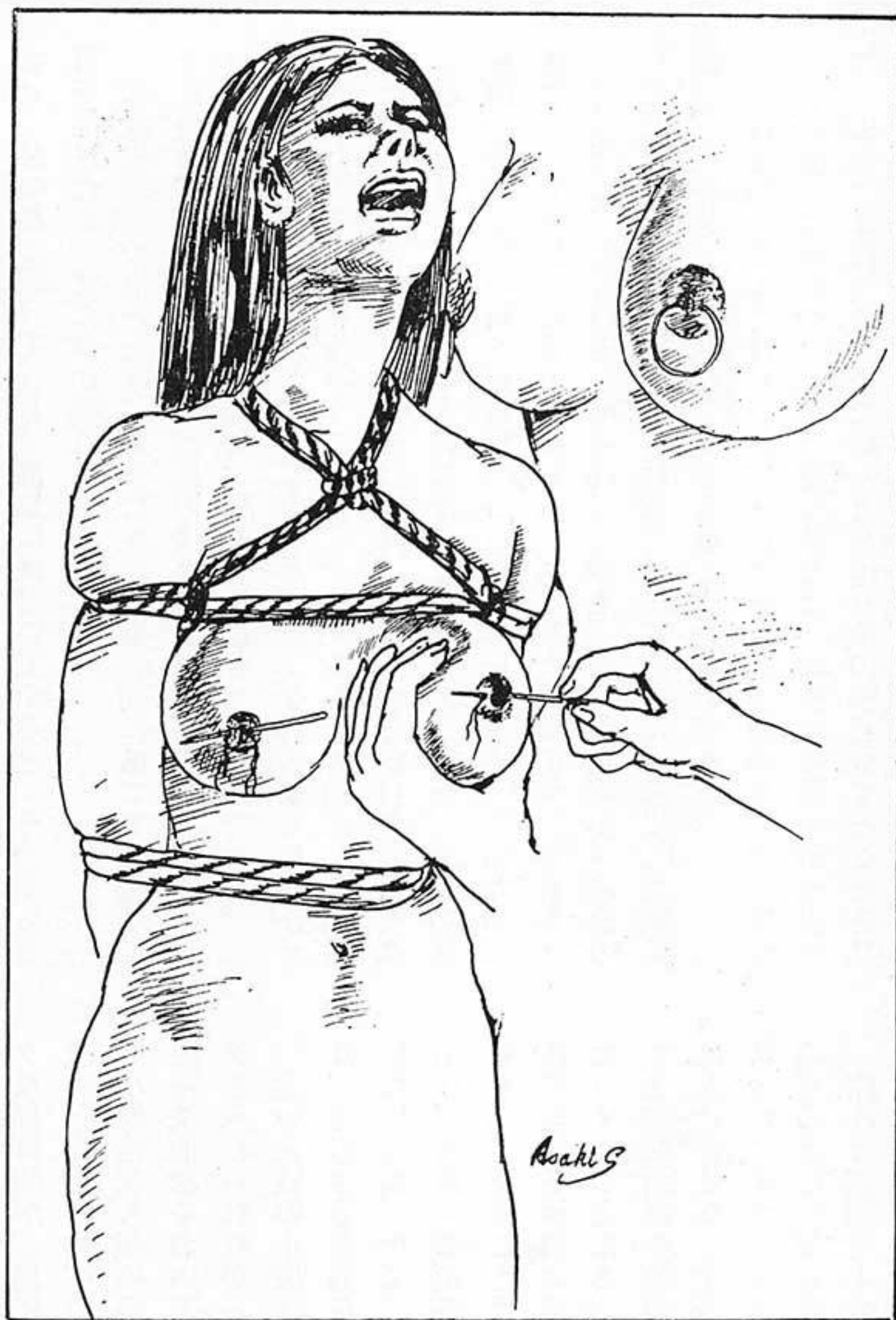
るからと彼女は、あらがったが、私は気にしないと言って脱ぎ下ろしてしまった。生理帯をベッドの下にやり、ベッドのヘリから彼女の足をおろさせる、ひどい型をとった。途中、彼女が苦しいと訴えるので、うつ伏せにし、後から、あの白系露人の妻と夫が交っていた姿をまねた。尻を割ると、少し黒ずんだところにAが見えた。私はAに唾液で濡らした人差し指を、めり込ませた。彼女は、うめいたが別に、いやがらなかった。

私は、ベッドの中の自分のタオルの寝巻をとり、その紐で彼女の胸をサマーセーターの上から思いつき縛り、寝巻を前にまわして彼女の股間にあてがい、彼女の耳元に「おしっこして、みなさい」と、ささやいた。

彼女は、いやとは言わなかった。ただ「出ないわよ、出ないわよ」と言った。「さあ、私の言う通りするんだよ」と、再び、せかした。すると彼女は「出ないわよ、出ないわよ」と言いながら、力んでいるのである。

と、この時、彼女は、「ああ」と言ったので、私は顔を前からまわして股間に見入った。細い放射を描いて小便が寝巻に染み込んでゆく。私はそれを見ながら極限の感覚に酔いしれていった。

——イメージギャラリー——『ある願望』——須坂 旭——



そのまま、私と彼女はベッドの中で眠った。股間にあてていた寝巻は、小便と血で少しだけ濡れていた。従妹は胸を緊縛されたまま、私の胸で眠っている。静かにほいてやると、うっすらと目を開けたが、まだ体が痺れているらしい。

私は生理帯を拾い上げ、外れた生理綿を股間にあてて、生理帯をはかせてやった。まるで赤児のようにされるがまだ。その後少し又、私の胸の中で眠った。私を信頼しきった寝顔である。

私と従妹は体を縛ったり、私のサポーターを輝のようにはかせたり、小便させたりということをし、セックスの修飾物として実行したが、縛りそれ自身、輝それ自身、小便強制それ自身として楽しむことはなかった。私と従妹は決まって夕方三時頃、医院の誰かが一番、多忙の時を選んで、これらのプレイをやっていたので後になって婚約するまで、誰一人、私と彼女の間に気付かなかった。従妹は、乳房の上を縛られ、その上、細くて柔らかい寝巻の紐などで、股間を輝様に縛られるのを特に好んだ。輝にした縦の紐のところが、手で触れてわかるほど濡れるのである。

浣腸をかけたことはないが、Aに指を入れて直腸をなぞってやることは、よくあった。その度に彼女は「お腹から腸を引き出されるよう」と言った。後で聞くとやはり雉の腸を抜くところを見て、欲望を刺戟されたと告白していた。特に、細めのロウソクをガスの火で微妙な形にくねらせたものを、Aから、かなり深く入れ、その頭を指で弾くと「まるで切腹しているよう」とも言う。

切腹演技のように、多少とも虚構性とか、演技性とか、いうものが伴うものは、私と従妹は何故か白けを感じて没入できない。縛ったり、排尿させたりの場合でも、仮面をつけたりとか、映画

の残酷場面を気取ったりとかの虚構が入ると、二人ともだめである。縛りや、その他の諸々のサディスティック&マゾヒスティックな修飾物が、真に性欲が要求する自然さを、もつ時、滑らかに次々と実行され、カタルシスも大きいようである。

小便強制も初めのような少量から、両ひざの間にポリの小さい浴用洗面器をおいて、高めの位置から、VとAに指や例のロウソクを入れられながら垂らすという形を、とったこともある。

若い女性の小便は汚くはない。もちろん、きれいで香わしいとは、さらさら思わないが、その姿は彫刻のように美しい。浣腸をしないのは、出てくるそれが臭気も悪く、異形であるからだ。しかし、Aから薬剤を入れられる姿や排便に苦しむ姿は興奮をそそるものであることは理解できる。であるから、私は従妹に、よく痔の座薬を直腸の奥深く入れてやったり、私の目の前で入れさせたりすることはあった。そういう時は全裸にしないで、普段着のままの便所の中の姿にして、座薬を入れてやったり、彼女自身に入れさせたりするのである。その方が双方とも刺戟的のようであった。アナルセックスなどは我々にとっては指やロウソクの次のものとして極めて自然に行なえた。

痛みは座薬で十分、消せるし、滑らかである。しかし初めてAにPを挿入しようとした時は、やはり興奮も大きかったようだ。先ず、肛門座薬を三つほど射ち込み、溶けた頃を見計らって指を挿入し、直腸内と特に痛みを訴えるAの周囲と、すぐ内側に十分に、すり込むのである。コンドームを、つけてすることはなかった。しかし、雑菌が尿道より侵入しないように、ペニシリンを、たっぷり塗った方がよいようだ。

彼女をも、私をも、一番興奮させたのは、アナルセックスをしながら、排尿をすることである。初めは嫌がったが、排尿する時の快感が極めて強いせいか、後ではアナルセックスの時は、決まって例のポリ容器に小便を垂らした。私も彼女が力むときの筋肉の動きを感じるとアッというまに昇天してしまうのであった。

こういうことは、別に毎日やった訳ではない。看護婦たちは別棟で生活していたから問題はなかったが、母親が時々私や彼女の部屋に来て話をしていくことがあったからだ。夫婦は下に寝室があり、二階には私と彼女の部屋と予備の部屋があるだけだった。下には彼等が寝ているので、夜にプレイするなんてこともできなかった。母親は四十五才であったが、未だ生理があるらしく、風呂場の籠の中には、従妹のそれとは異なる生理帯や血が染み込んで固くなった下ばきなどが、あったりした。

従妹も母親も勿論、女である。どちらも、つましくて教養のある女性である。しかし、私の生まれ育った町の多くの女は、教養もなく、およそ粗野である。その上、貧しいから生理用品だって満足に買ってなかったようだ。学校で一括して注文したり、町内会あてに来たパンフレットなどで手に入れるのが普通で、時々よその家の風呂に入ったりした時、手拭いかけなどに、すり切れたような、それが、かけてあるのを見て、妙に物悲しくなったものである。それに比べて、彼女は（医者の娘であるからということでもないだろうが）きちんとタンスの中に自分で作った手当ての品を、ふろしきにつつんであるのだった。私の前でも、めったに、それらを見せることはなかったが、一度、行為の時、観察したことがあった。いずれにしても、かかるものは、女の悲しさと

陰微さを示すようで、このごろは、あまり触れることはない。女は、そうやって男に隠して（承知のことなのに）、即ち虚構の隠ぺいをして、思春期から生きているのか。そう思うと、全ての女が、極めて性的に見えてくる。隠ぺいという行為によって、ますます、そう見えてくる。私は大学卒業後、そのまま大学院へ行くつもりであったが、七年も世話になった生活の区切りに、遠くで一人で暮そうと思い、都内某大学院に合格したのを契機に叔父の家を出た。従妹と離れるのは辛かったが仕方のないことと思っていた。ところが私を慕って、彼女が、のこのこ東京へ、やって来たのである。嬉しかったが、なにせ、せちがらい東京のこと、自分一人、生きるのが精一杯。婚約した形式で札幌につれて戻った。お互いに、すべてを知りつくした間柄である。学位を取る前でも、たとえば地方の国立大でもよい、もし助手の口でもあれば、妻に迎えて二人で楽しく暮らす積りである。

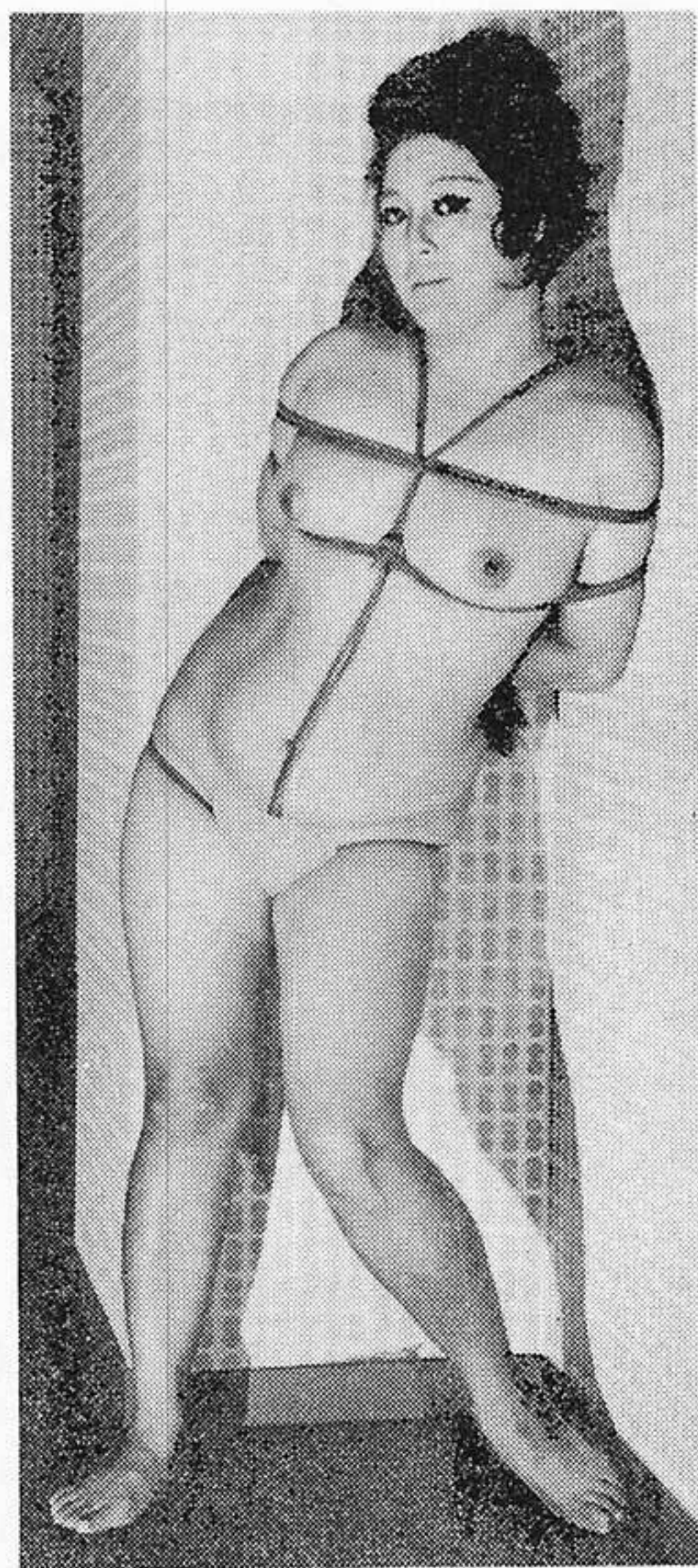
こうして安アパートの一室で、その頃を想い起こしつつ、この告白を書いている。階下では夫婦の営みをしているらしく、密度の高い振動がする。隣は便所である。向かいの部屋の女であろうか、壁に耳をつけなくとも小便が便器に、あたる音がする。中にはSM行為をしている者もいるのであろう。みんなみんな、こうして生きて死んでゆくのかと思うと、かかる性行為の秘められた響きや女の排便の音が、何かしら、発動機の、うなりのように安心できる。今朝もアパートの物干には色とりどりの女の下着が風にふかれていたが、私はこのごろ、あれらが隠す女という存在の悲しさ、陰惨さ、虚偽、恥かしさなどが、わかるように思う。実際は、ちらとしか、見なかったのであるが。

（おわり）

M 談 義]

た女人群像

鉄 三



私は、SMプレイの中でも、そうした遊びをしようと思いついたときは、後手に縛った女をベッドの上で前屈みにさせ、額を布団につけさせ両膝を心持ち開かせるのです。

そうしておいて、後手縛りの縄尻を右と左に振り分けて、それぞれ左右の膝頭に縛りつけてしまいます。この縛り自体、別にとり立てて言うほどのことはありません。ただ、この、うつ向きのポーズを、ひっくり返して、仰向けにすると面白いのです。

両方の膝頭が左右に引っ張られて、両脚がいや両の太股といった方がよいかな、とにかく、いやでも羞恥の部分、あけっぴろげの

ポーズになってしまいます。当の女性でも、あまりのことに、呆然としてしまうくらいですが、殆どの女性は、仰向けにされた顔を思わず、そむけてしまいます。

この際、少し注意しなければいけないことは、両の膝頭を縛る縄を余りにも短か目にすぎますと、膝の裏側の皮膚の柔らかいところを痛めることがあります。そのかわり、太股の真っ白い裏側が、こんなにも太かったのかと、驚くほど豊かな張りを見せて目の前に逞しく開帳され、その見事な眺めといったそれはありません。

連繋の縄が緩きにすぎたときは、勿論、開張度がよくありませんので、そこは、その女性の体格や柔軟度、それにM度なんかを考えて、短か目にしたり、長目にしたりする必要があるのでしよう。若し、長時間の責めを持続されるのでしたら、出来たら、後手首を縛った縄から直接、連繋せず、胴とか腰とかを縛った縄を利用して、そこからの縄尻で膝頭へ走らせた方が、結果がよいようです。

私は沖縄美人の座間明子を、この縛り方で執拗に責めたとき、一つの新しい発見をしたことがあります。彼女は身長も高かったのですが、体重が六八キロもあるとかで、全く見



〔鉄 三 S〕

マゾに目覚め

塚 本

事な肉づきの綺麗な太股をしていました。そのむっちりとした盛り上がった太股の裏側を思いきり反転させて、開けきっているポーズは本当に見事なものでした。

すべすべとした太股の肌にひきかえ、脛には、割にこわい毛が密生していて、それが足首近くまで続いています。

背中の下敷きになって縛られた両手首が痛いのか、お尻をもじもじさせて背をそらすようにしますが、そうすると腰が浮いて一層、開股が大きくなってしまふのです。

私は、その頃、大人のおもちゃ屋などで流していた小型パイプを取り上げ、それを、

最も鋭敏なポイントへ攻撃目標を定めて責め始めたのです。

手足が自由なときと、このように見事に開陳させられたポーズであるときとは、女性に対するショックは、もう何倍にも違うことでしょう。もし、Mの傾向のある女性でしたら、こんな場面を想像するだけでも、忽ちメロメロになってしまうことは必至です。

座間明子も、その心の奥深く巢喰っていたM性が、今や最高頂に達しつつあることが、私の目にも、はっきりとわかりました。

汗ばんだ足の拇指を、くの字に曲げて、左右に張った縄を揺さぶり続け、口からは、もうそのままでは、ここに書けないような言葉が呻き声と共に洩れ続けました。

肉づきの豊かな大柄な裸身が、ダイナミックに悶え抜くのを目の前に見た私は、一段と執拗にパイプの責めを続けました。

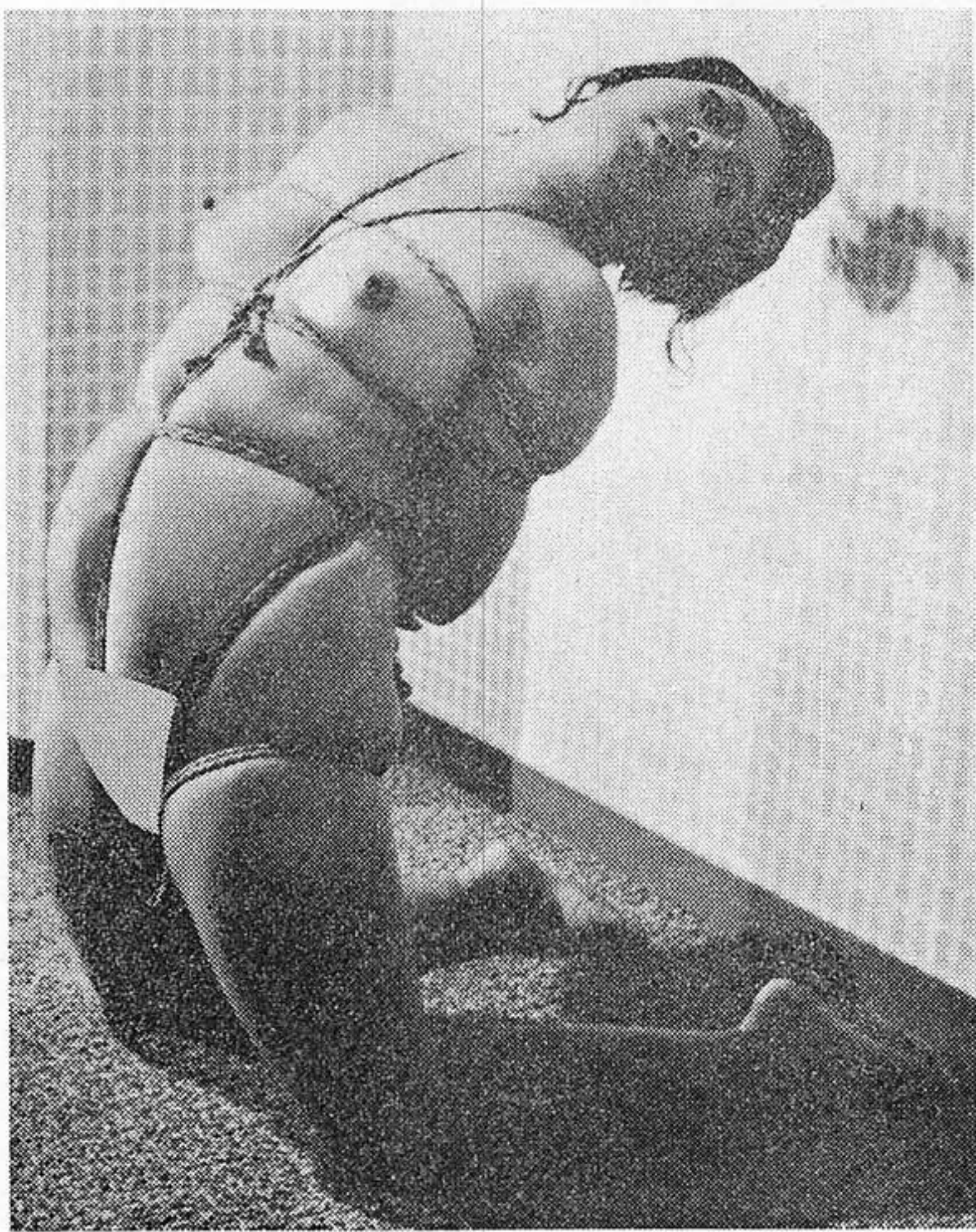
男というものは妙なもので、もし仮に、こんな際、無反応であったとしたら、馬鹿らしくなって途中で投げだしてしまうのですが、責めに対して、このように、全身のありとあらゆる力をふりしぼって、狂ったように反応を示されると、前後の見境も忘れて、責めに熱中してしまうものです。

「勘忍して……」と言う女の言葉が、甘いプレイ用のゼスチュアであるのか、本当に辛抱できなくて、許しを乞うているものか、単純に判断できなくなってしまっています。

それよりも、燃えさかるSの焰が、とどまるところを知らず、あとから、あとから、補給される燃料に、益々その燃焼を高めてゆきます。バイブの先端を僅かに放したり、縦にしたり、横にしたり、押しつけたり少しでも、刺戟の強からんことを願って、あらゆる技巧を、こらすのでした。

不思議なもので、泣き、喚き、全身を波打たせて悶える、その彼女の反応を見ていると、責めの力を強く与えるから、必ずしも反応が大きいとは限りません。むしろ、ソフトタッチの方が、縛っている縄が切れんばかりに、もがき回ることが多いようです。

責め狙う部分と強弱のタイミング、それに



彼女の無意識のうちに洩らす嬌声に対する、適当な受け答え、それらの条件が一体となつて、目をあざむくような羞恥責めの華麗なシーンが、とめどもなく展開するのです。

一本調子に責めたてるということは、いつの場合も労多くして、結果はよくない場合が多いようです。相撲で言う「肩すかし」の戦

法、すなわち、軽くないなして本墨をとるという、やり方も時には必要です。

「許して、許して、許して……」彼女が許しを乞うて絶叫した場合、

「よしよし、許してやるよ。そのかわり、〇〇〇をして……」て、叫んでごらん。そうしたらすぐ許してやるよ」

そんな条件をつけてみるのです。彼女が、私の言った卑猥な言葉を口にするか、否かは彼女の自由ですが、多くの場合、「いやいや、いや。そんなこといや」とは言って拒否しますが責めが最高頂になってきますと私に無理じいされたという恰好

で、実際は身体と心の奥底から、本当に、そんな気持ちになったように口に出します。

といって、それで責めが中断されるわけでは、決してありません。そんな淫らな言葉は、彼女が私の目の前で、あからさまに口にしたいということだけで、二人共、一層あふられたように昂揚してしまいます。いわば、そんな



やり取りは、責めの序の段階であって、いよいよ本格的な凄い責めが、それから以後に彼

女の全身に対して、これでもか、これでもか——と、ねばっこく加えられることになるのです。

私が、その準備に移ろうとして、花芯からパイプを放そうとしたとき、透明な水玉が、数滴こぼれ出たかと思うと、宝石のような美しい輝きを見せて水流が溢れました。

私にしては、初めて見る美しくも刺戟的な光景でした。何故、こんなことになったのか、私にもわかりませんでした。

私は、もっともっと、そんな光景を見たくてたまらず、許しを乞い上半身をねじって逃げ回る彼女を片手で押えつけておいて、更にパイプの責めを加えてゆきました。

透明で真珠のように美しい水玉は、やがて迸り出る水となって噴出しました。

量は決して多くなく、一瞬、盛り上がるだけで、直ぐにその盛り上がりは止まってしまふのです。

その間歇的^{かんけつ}に起こる溢水の発作は、次第に間隔を狭くしてきました。

私は、一回、二回、三回……と、回数を数えて、遂に二十八回あたりまできますと、その発作の間隔が、殆どないくらいに短くなって、連続的に、水流の噴出が見られるようになってきました。

三十四回、三十五回、三十六回……。

私の回数を数える言葉も、いそがしいくらいです。遂に、流石の彼女も、とうとう、ダウンしてしまいました。

一息ついて、我に返って、私は、はっと気がつき、あわてました。

何の準備もせず、ベッドの上でプレイをしてしまったのです。そのときになって、私は始めて、あの水流がなんであつたか、はつきりと、わかったのです。

「ああ、しまった」

そう気がついたときは、すでに万事休す、すべてが晚かったのです。敷布ばかりか、蒲団からマットレスに至るまで、まるで寝小便をしたように、びっしょりと濡れてしまつて



いるのです。

余儘まだ覚めやらぬ彼女にひきかえ、私の熱は急速にさめてゆきました。

何故、こんなことになってしまったのでしょうか。この座間明子が特異体質だったために、こんなことが起こったのでしょうか。

最初から、こんなことがわかっていたら、

もっと、何か方法があった筈です。

高橋鉄氏あたりが『女性に果たして射精があるのか、どうか?』という議論をされていましたが、私は、このことについて、八有る女性もいるのではないかと、秘かに思っていました。

私は以前、一人の韓国女性と一年半ばかり

親しくしていたことがあります。氣立てがやさしくて、情が濃やかな女性でした。

時折、彼女がクライマックスのとき、私はその部分に熱湯を浴びせられたように、熱く感ずるのです。そのことを、言いますと彼女は、「それは私が唐辛子を沢山、食べたからでしょう」と答えました。

それで私は、人によっては、女性にも射精が有るのではないかと、秘かに思っていたのです。ところが、座間明子を責めてみて、私は一つの疑問に突き当たったわけです。

先の韓国女性の場合も、さては、あの水流は膀胱から進出したものではないだろうか、と考え及んだのです。私が熱く感ずるのは、いつものことでなかったのですが、それは、あながち、彼女の唐辛子の摂取量に関係があったものか、どうか、それはわかりません。

『ソバカスの多い女性は情が濃い』と俗に言われているようですが、私がダンスホールで知り合ったダンサーに、顔一面にソバカスのある女性がありました。

ホテルを出て、家へ送って行こうとしますと、食事のあとで、すぐ別のホテルへ行こうと誘うくらいに剛の者でした。彼女が黒人の男性と遊んだときの様子を喋るのを聞いてい

ますと、思わず嫉妬心の湧いてくるを押えきれなくなる程、凄いものでした。

このソバカス女性も、敷布に直径五十センチもの大きな地図を描くことが常なので、二度と同じホテルへは行けないといった有様でしたが、初めの頃は間遠うな発作が、次第にタイミングが早くなって、しまいには、連続的と思えるほど、間隔が短くなるという点は座間明子の例と全く同じでした。

体質によるものか、どうか、それは知らないし、また、それが何であるかについても私には確かなことは、わかりませんでした。ただ、時には、こんな女性もタマにはいるんだなあ——と、感心させられていました。

さて、座間明子のことですが冷えきった身体を浴槽で温めているとき、私は今まで抱いていた疑問点を訊ねてみたのです。

彼女の二の腕や脛の部分の毛深さからみて当然、アノ部分も濃密だと、想像していたのに、案外、短くて薄いのです。

「実は私、あんまり濃いもんで

すから、自分で剃ってしまったんです」

そう答えてから、彼女は意味ありげに、ニヤニヤと笑っていました。

「自分で剃るくらいだったら、僕にも一つ、剃らしてくれないか」

誘い込むような彼女の言葉につられて、私は思わず、そう言っていました。予想に反して、彼女の拒否は、きっぱりしていました。「いやよ、そんなこと、人にしてもらうなんて、死んでもいやよ。それに、やっと、これまで伸びたんだもの」

「だって、剃りたてと、伸びかけは特に刺戟的じゃないんかね」

「知らないッ、そんなこと……」

怒ったようにツンとして、顔を赤らめていますが、図星であることが、その顔に書いてあるようです。

さんざん手古ずらせましたが、やっと剃毛の儀式を納得させたときは、彼女は二つの条件を持ち出していました。

それは、石鹸をつけて剃刀で剃ること、と作業中は手と足を縛っておくこと、でした。

私は電気カミソリと鋏の準備はしていましたが、剃刀は持ってきていなかったもので、備え付けの簡易カミソリを用いることにしました。いくら生えかけと言っても、簡易カミソリでの作業は遅々として進まず、何度も何度も、浴槽の湯の厄介になりました。

人一倍大柄で、ボリニームのある肉体の持

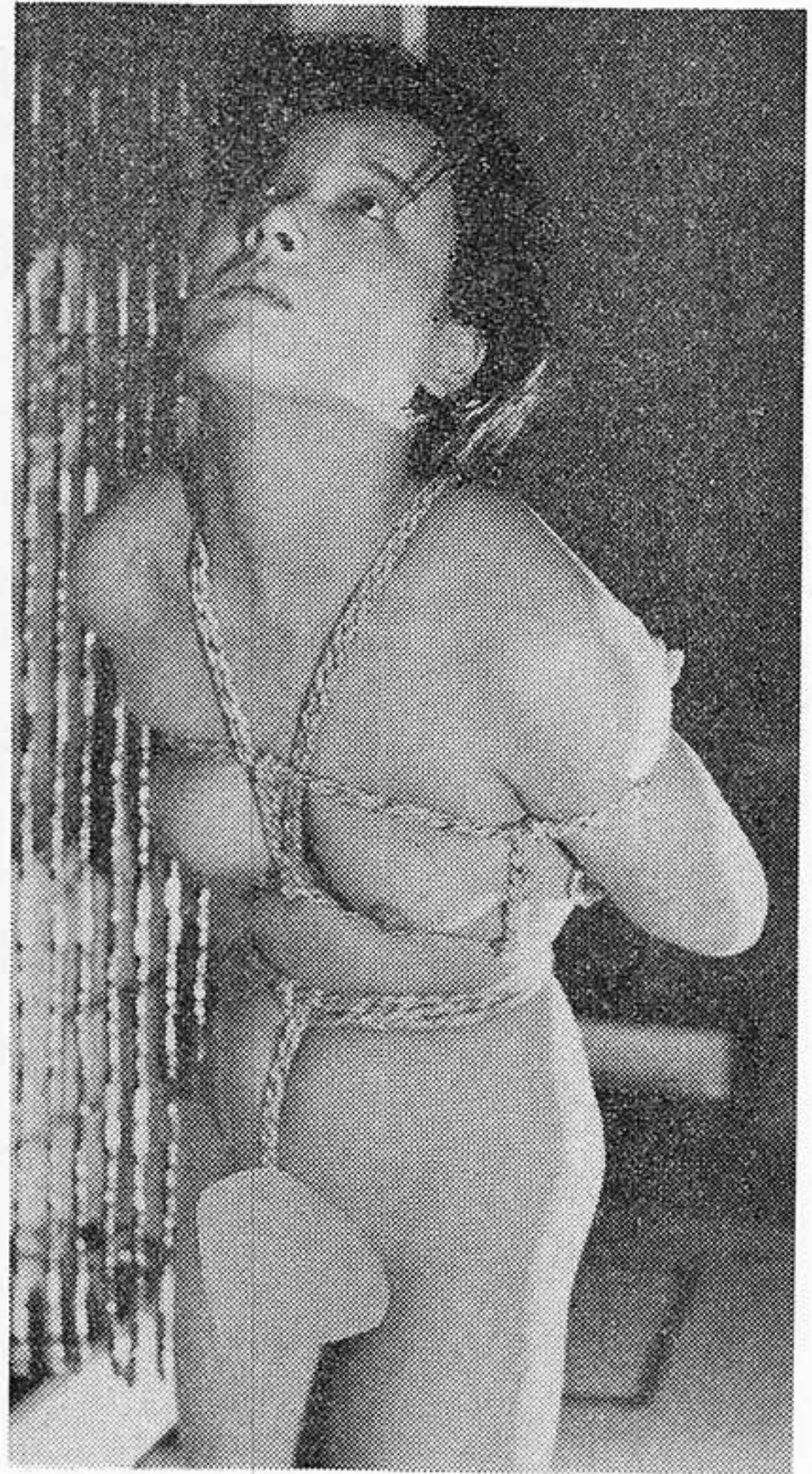


主である彼女が、童女のようなすべすべとした丘陵をさらして立った姿は、本当に見事なものでした。最近の責めの一つのジャンルの中に、△剃毛の儀式△も加えられるほど、一般化してきましたが、案外、M女性の側からも剃毛は高く評価されているようです。

普通、十人が十人まで、この剃毛の責めを行なうと言ったら承知しないと思います。だが、一度この儀式の洗礼を受けると必ずといってよい程、この責めの良さというものが女性の側に、わかって貰える筈です。

最近のSM夫婦プレイ実践者の方々の例を見ましても、この△剃毛の責め△をやっておられる例の如何に多いことか枚挙に、いとまなくらいです。実際、夫婦プレイの際、この責めは、一番適当なものでしょう。夫婦の愛情を一つの共同作業であるSM行為によって、より深め、より高め、更に一層、濃やかにしてゆけるのだと思います。

△剃毛△について、私は長井葉津子という洋裁生で、びっくりするような経験をしたこと



があります。彼女を柱縛りにして、正面から狙いをつけてカメラのピントを合わせていたときのことです。さして濃いというわけでもないのに、極めて房々としていて、如何にも目立っているのです。それで、私は、ふと何気なく、思わず知らず、独り言を言っていました。「ここがなかったら、修整しなくても、いいのになあ」そして、その次に長井葉津子に逢ったときのことです。私は彼女を裸にしてみ、びっくりしました。この前、あれ程、見事に密生していたものが、今日はすっかり姿を消してしまっているのです。私

は自分の目を疑いました。あれあれ一体これはどうしたことだろうか。私は確かめたくて彼女に近寄りました。

「どうしたんだね？」

彼女は恥かしがって私に見せまいとかくし私は不思議さと好奇心にかられて、理由を知りたいと思いました。

逃げまわる彼女を追いかけて、問いつめま

すと、抗しきれなくなった彼女は、顔を赤らめながら、蚊のなくような声で、

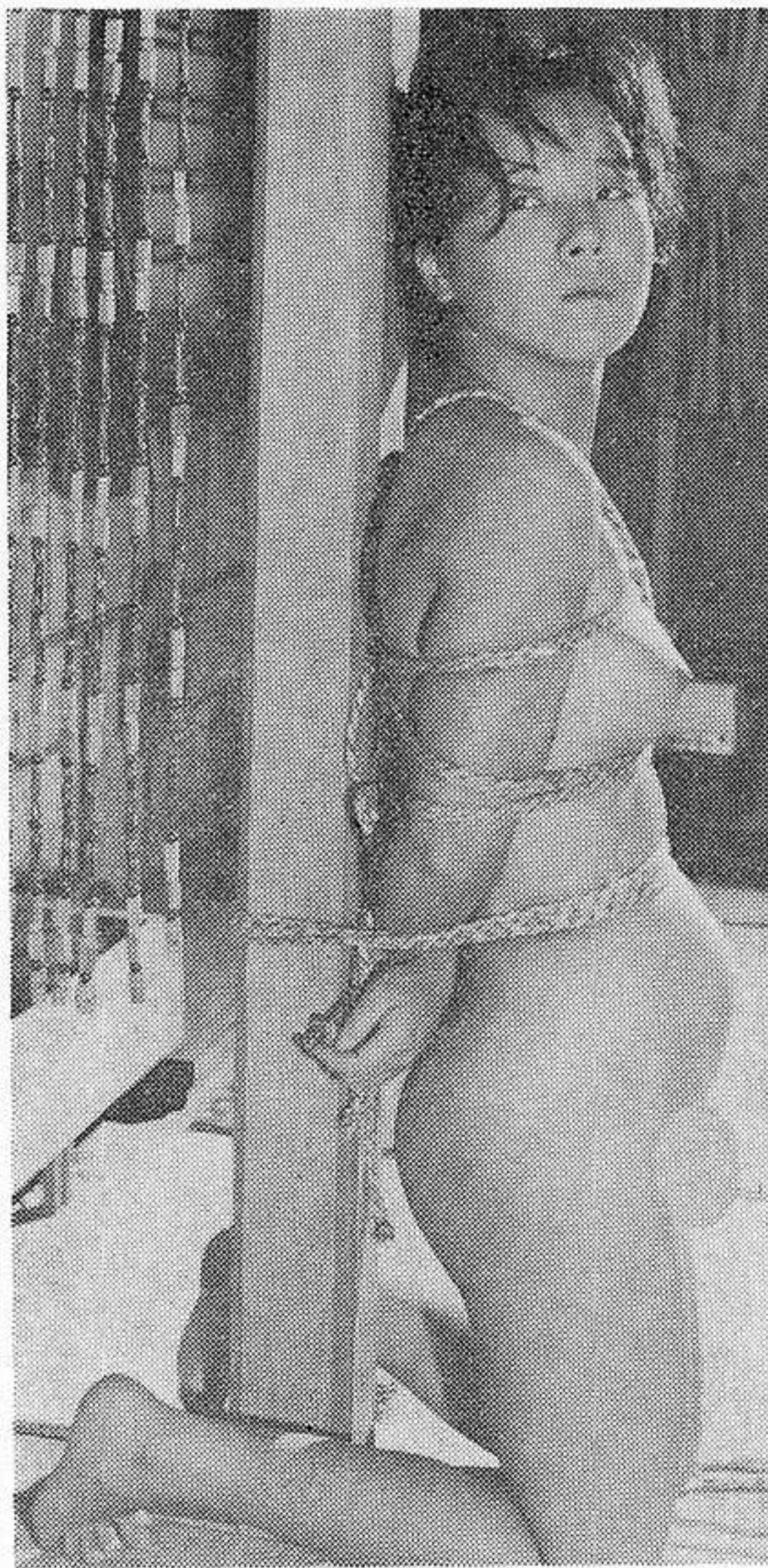
「だって、この前に、ない方がいいって、おっしゃいましたから……」

「それで、自分で剃ったというのかい？」

消え入りたいたい風情で、頬を染めながら、彼女は、こっくりと、うなずきました。

鏡を前に置いて、自分自らシェービングしている彼女の昨夜の行為を思い出すと、私はいじらしくさえ思えてくるのです。

その日の責めの一項目に、彼女の剃り残しの部分に対する△剃毛の儀式△が臨時につけ



加えられたのは、勿論のことでした。

手と足を縛られて、身動きできないようにされて、自分では手の届かない個所の剃毛までされたときの、彼女の心境は、どのようなものであったか、それは言わずとも私にはよく、わかりました。長井葉津子のM性は縛りには特に強い関心があるとは思えません。彼女の求めているものは、内臓露呈趣味とでも言うのでしょうか、M性の中でも一風、変わったものであることは、彼女の告白の文章の中からも私は感じとっていました。

洋裁学校の行き帰りに眺めて漢方薬を扱う

店のウィンドーに飾ってあるアルコール漬の類人猿の胎児や怪しげな動物のミイラなんかを見て、空想に乙女の胸をときめかしていたことを、彼女は告白で書いていましたが、単純な被虐心ではなかったようです。縄による被縛といっても、彼女の心の奥底に潜めている秘かな願望を満たす一手段として使われてこそ、彼女には最も有効だったのでしょう。『内臓露呈願望』といっても、これに関連して、女性の切腹願望というのがありますが、彼女の場合は、それとは又、違っていたようです。変死者とか犯罪の被害者なんかは、解

剖されるようですが、彼女は自分の身体が、沢山の人達の眺めている中で、解剖されたいと思っただけで凄く興奮したそうです。

でも、それは空想の中でだけ可能であって実際は行なわれるすべもありません。だからSMプレイとしては、やはり浣腸とか洗滌とかいった責めに転化されてゆくことになりました。先に書きました、自分から剃毛してきたという行為も、この内臓露呈趣味Vに一脉相通するものがあつたのかもしれない。

自分の身体を多くの人に見てほしい、眺められたいという願望は多くの人が持っているのですが、俳優とか役者、特にストリップやヌードダンサーなんかは、職業の上で、そうした自分の願望を、或程度、満たすことが出来ます。しかし、内臓まで露呈したいというのは、いささか度が過ぎます。

病気でもないのに医者通いをしたり、産婦人科医の門を叩いたりする女性があるのは、この辺の心境を物語っているのですが、公娼廃止以前の検診を楽しみにしていたという女性の告白を、一度ならず聞いたことがあります。秘めて語らずとも、案外、程度の差こそあれ、こうした願望を抱いている女性が、少なくないのではないのでしょうか。



カット・洲崎三郎

身替わり

立て続けに飲んだ冷酒のため、京子は喉元まで赤く染まり、熱い息をつく。

最後のチャンスだったかもしれない反撃の機会は去り、再びもとのように固く縛められてしまったため、垂涎ものの豊かにうねった肉の起伏は、白々と剥きだされている。

そればかりではない。本来なら深く秘められているべきはずの享樂の泉まで、柔らかに

パロディ

花

と

蛇

連載・S大河小説

山光

純

暖かそうな下腹部につらなあって、ひっそりとつつましい風情を、ちよっぴりのぞかせているのである。

「ねえ、なにをおっしゃりたいの?……」

と不安げに睫毛をしばたかせる裸女は、つきせない性衝動を、ちんぴら共に与えつづけるほど色っぽいのだ。

今の京子の肉体には、とことんまでの痴戯に男たちを引きずりこんでゆく、濡れた淫蕩な匂いばかりが感じられる。痺れるような重い疲れがあるにもかかわらず、そこからくる

情情は、とにかく男のいたずら心を更に掻きたてる作用を果たしているようだ。

このような、ぬめりを帯びた肌のうるみは元来、京子には、なかったものである。四人の男たちの過度の情欲に翻弄されると、どんな女でも、このような妖しい色艶を滲みださせるようになるのであろうか。

法界は、魅せられたような目付きで喰いいるように豊かな盛り上がりを見せている両乳に見入りながら、唇に唾をためて、
「俺たちに金がねえことは、知っているだろ

う。寢床へ引きあげるのもいいが、その前にゼニを置いてゆくのが作法っていうもんじゃねえか」

「ええ？ お金？……どうしてかしら？」

「すつとぼけちゃいけねえ。飲み食いをした割り前を出すのは、当たり前じゃないか。ほら、お前もスシを、旨って食っただろう」

「お寿司って……」

「ふざけるのも程々にしろよ。ああ、おいしい、とか何とかいって散々食ったくせに。あのスシは高いんだぜ。それを大口を開けて何個もくらっておきながら、知らないとても言う気かよ。全体、只でメシが食えるご身分かよ。皆も腹が減っていたから割り勘で出前させたんだ。誰もお前に奢らなきゃならねえ義理なんてありやしねえ」

「だ、だって、京子は、ご馳走になったばかり……」

再び因縁をつけられる口惜しさに、つい言葉が荒くなってゆくのもどうしようもない。いかにも、チンピラらしい笑止な言いがかりだが、とにかくも、それはワナであった。

「冗談じゃねえぞ。あれは一個百円は、するんだ。誰がお前なんか——さあ、もう色事は終わったんだ、俺ももう倦き倦きしたぜ。」

皆んなが食ったり飲んだりした分だけ払って置きや、何の文句も出ないんだ。言いたいことはそれだけさ。さあさあ、お前の食った割り前だけ置いていったり、置いていったり」

空腹のあまり、ただ夢中でつまんでしまった、あのケチな食べ物に、こんな陥穽があったとは……あまりのみじめさに、京子は声もでない。

「お互いに何の貸し借りもないほうが、いいやな。おれも、四個ばかり食ったかな——ええと、四百円というわけだ。すぐに払うぜ」

などと、調子にのった三郎や五郎も、脱ぎ散らしてあるズボンのポケットを探りながら余念もない様子である。

「清次兄い。聞いての通りだ。後々まで借りをつくらねえように、スパッと割り勘がいいだろう」

「まったくだ。俺は確か三個、食って酒を二杯、飲んだから……まったく高くつくぜ」

と、これ見よがしに何枚かの百円玉を茶碗の中に投げこんでみせるのである。

法界は、彼のセックスそっくりな無毛の頭をツルリと撫でて、大道の小商人から小銭を取り立てる口調で、

「というところ——京子は残りの十個以上を、あ

つという間に平らげちゃった訳だ。なあに大した金額じゃなし、勘定は勘定だ」

「待ってちょうだい！ あたし……あたしは皆さんが、ご馳走して下さったとばかり、思っていたの。だから、お礼を言って、頂いたのよ。ほんの少しだけ……でも今になって、そんなことを言われたって……」

「同じことを又、言わせる気か。そんな世迷い事が通用するかよ」

新しく降りかかってきた難癖を切りぬけようと、京子は赤い唇をヒクヒクさせ、

「ね、ねえ、清次さん。ご馳走して下さったんでしょ。三郎さんも、そう言ってくれたわね」

と、二人のチンピラに同意を求めようとすのだった。たかが残飯箱行きの、くずれかけた寿司や冷酒のために、この美しい裸女は一生懸命である。

「い、いや。おれも清次兄貴も、そんなことは言わなかったぜ。お嬢さんのお前にも、その位のことは分かっていると思っていたさ。大体、お前みたいな稼業の女は、たっぷりと稼いでいるもんだぜ。端金じゃねえか」

「だって、だって……」

と、途方に暮れる京子は唇を固く噛みしめ

ながら、遠くを一心に見つめ、

「京子はお金なんか、一銭も、もっていないワ……」

「ハンドバッグにしまい込んで——いいや、持っていなかったな。ドレスもなしとするってえと、はてな？」

「もしかすると、女だけが持っているポケットに、ダイヤか何かを隠しているかも知れねえぜ」

「いいや、あそこにはなかったぜ。俺が念には念を入れて充分に調べたからな」

「そういえば、特にお前は丹念に掻き廻してたじゃねえか。ワハハ……」

と、好色な冗談を大声で喋り合いながら、腹をかかえて爆笑する始末である。

「こんなにまで、あさましい、みじめな目に合わされるのなら、なぜ両手を解かれたときこの男たちに罵り殺しになるつもりで、逃げ出さなかったのだろう——」と、自らを息苦しいまでに蔑みながら、どうしようもない憤りや悔いのあまり、ギリギリと京子は皓齒をかみ合わせる。

「なんでえ、その顔つきは……ここまで来ても、まだ俺さまたちに刃向かいてえのか？なんなら、そのつもりで受けて立ってやろう

か。ええ、どうだ、売女^{ばいた}」

売女、すれっからし、パン助……畳みこんでくる清次の脂の浮いた顔には、弱い者を虐げることが本領の、街のダニの、いやらしい残忍さが、くっきりと出ている。

酒に濁った目と煙草のヤニで汚れた齒をむいて、うなだれようとする京子の美しい顎をぐいと持つ。

「何とか言ってみな。聞いてやるぜ！」

と、凄んでみせるのだ。

京子の妖艶なまでに美しい丸顔に、つらく切ない睨りが走った。眼尻に、みるみる真珠のような涙が浮かび、頬を伝う。気弱な光が明眸に宿る。清次の勝ちである。

「ごめんなさいね。どうしても、お金をとおっしゃるのなら、そのかわり、お相手をした後は、きっと美津ちゃん、あたしを休ませて下さるわね」

「何をいつてるのか、さっぱり分からねえ。もって廻った言い方をするんじゃない、淫売らしく、はっきり言いな」

京子は、丸い剥き出しの肩をピクリと慄わせ、ひっそりと、つぶやくように、

「京子には、お払いできないワ。だから、だから、体でお払いするしかないの。すっかり

くたびれているので、あなたたちのお氣に召さないといけないから、あのお薬をタッパー使ってちょうだいネ」

すべての女は、爾来、ごく悲しいものだと思う。一度、道にふみ迷ってしまえば、次から次へと、もうとても抜け出しようのない泥濘の奥深くへと引きずりこまれてしまうものである。女が美しければ美しいほど、泥沼は深いのが普通だ。

女の意志には拘りなく、責めは苛酷さを増す。それを少しでも和らげるためには、加虐者たちの前に、ひれ伏すことが必要で、その哀しさが男共の衝動に少しでもブレーキをかけることを、心から願う以外に途は、ありそうにない。

僅か二、三個しか食べなかった崩れかけた寿司の代償に、男と寝なければならぬ悲しみは悲痛で、この世のものとも思えない屈辱感が頬に血を昇らせたが、アルコールの回った若い女の肉体は、逆に一きわ艶っぽく照り映えてしまうのであった。

「体で払うんだって？ フン、そりゃあ、いい心掛けだ。だがな、俺は断わるぜ。夕べからお前を何度も抱いたので、もうすっかり飽き飽きしてしまったんだ。そりゃ、お前が腰

を振ると、そのでっかい乳がブルンブルンと揺れて、何とも言えない気持ちさ。まるで、ちぎられそうな感じでな。だが、それだけのことよ」

「ひひ、ひどい……」

清次の徹底した愚弄作戦に手もなく落ちる京子であった。彼女にとって、男たちとのセックスは、死と隣合わせの汚辱と懊悩の時だったのである。

この過淫としかいえない性生活を続けてゆくと、これから先、いくら京子が、いい軀をしていても衰えがくるのは自明のことだ。

「じゃ、京子は、いったい、どうしたら、いいのかしら？」

甘酸っぱい体臭をふりまきながら、目にも綾な曲線に、くるまれた全裸の女は、なかば男の侮蔑に酔ったように、臀部をモクモクとくねらせる。

「なにを、ぶつくさいってるんだ。お前の喰い代にゼニを払わなくちゃならねえ俺たち四人のことも、考えて貰いたいもんだ」

「だから言ってるでしょ。その代り、京子が軀で弁償するって……お願い、そうさせてちようだい。それしか、京子には、できないんですもの」

理不尽は、きまりきっているが、どうにもならない。

清次の企みが今は、はっきりと分かった京子は、それでも彼の気まぐれに、すがろうとする。

後手縛りは、どうにもならないので、熱く熟れた裸身をベツタリと清次に預けてゆき、大胆にも、形のよい片脚を立てる。内腿の白い部分と、その奥につづく柔らかく弾んだあたりは、嫌でも清次の視線に、はっきりと入ってくるのだ。ぴったりと肌を触れ合っているの、京子には清次の血がドキドキと騒いで大きく脈打っているのが、よく分かる。

「ねえ、いいでしょう。だからキスしてちようだい。ああら、頼もしいワ。そんなに隆々としているじゃないの。京子に、ちようだいネ……」

と、自らを酔いしれさせる口調で、あぐらをかいている清次に、のしかかってゆき、唇を合わせる。

充分に舌をからませ合うと、清次の掌が、果実のような九〇センチの乳房に、たわむれてくる。乳首がコリコリと揉まれ、隆起全体がタプタプと波打つ。

憤りも、恐怖も、悲哀も——如何なる感情

も、すべてを行為の中に没入させてしまおうと、京子は自意識をふり捨て、誇りも怒りも自ら招いた汚辱の中に忘却させようと一途に清次を誘いこもうとするのだ。醒め果てた後の、どうしようもない寂寥感、今のこの時思うだけでも惨めなことである。

だが、何ということだろう。存分に唾液をそそぎこんだ後で、京子を、もぎ放した清次は憎々しげに、

「いや、もう沢山だぜ。お前には飽きたが、お前の決心一つで、俺も考えてやってもいいことが一つだけ、あるんだ」

心身をすりへらし、ずっと遠い処にあると信じているいつかの日のことを考え続けて、すっかり消耗した京子は、すがりつくような美貌を男に向ける。きつと狂わんばかりの穢らわしい要求なのにちがいないのだが、今の彼女にとって、それは拒否するには、あまりに圧倒的なものようである。

昨夕以来、必死で保ち続けてきた媚態が、一気に水泡となってしまう瀬戸際にたつて、彼女は男の声に耳をすますのだ。

「言って。どうしろというの？……」

どきりとする程、可憐な表情をみせて、清次を、ふり仰ぐようにする。

イメージギャラリー

『奴隷着溶接』

三鷹 I・O



「ああ、簡単なものだぜ。妹の美津子にお前の代りをさせりゃいいのさ。皆も、俺と同じ意見さ」

してやったりとばかり、残りのチンピラ共

も、てんでにパンツ一枚のまま、こわばりを振り立てながら、

「そうとも。なんてことはありやしねえ。もともと、処女でもないし……」

「もうお前を抱くのはゲップが出るぜ。濃厚な体臭が、すっかり鼻についちまった。あまりビフテキばかり食ってると、もう取れ立てみたいな刺身も喰いたくならあな……」

と、てんでに、いつのり合いながら一升瓶から酒をつぎ、湯呑みを飲み廻す。

——京子は、あてどのない、宙の一点を凝視し、放心しつくした表情になっている。だがその近代的な美貌は一種のベールを、かむった光茫につつまれ、幼な児が一心に神に祈っているように見えた。

一しきりの胸間声が、と絶えた時、遥かな声で京子は言った。

「そうおっしゃるのだと思っていたわ。そんなにまでして、京子を苦しめたいのね……」
と、形のよい唇をブルブル慄かせながら、
「あれ程、約束したのに！ でも、これだけは、たった一つだけは、聴いてほしいの。ねえ、清次さん、お願い。三郎さん、お願い。五郎さん、お願い。法界さんも、あたしに、約束して」

「おお、なんだ。ことによったら聞いてやらねえでもない。一応は言ってみな」

急激に回ってきた冷酒が彼女の、しどろもどろの口振りを余計に乱す。だが、京子は妹

を守るのだという決意に、あふれていた。

「美津子を、どうしても犯すのだというのなら、縛られているあたしには、とても貴方たちを止めることなんかできない。美津子は、好きなようにされても仕方がないワ。でも、お願い。美津子にキスしたり、おっぱいをいじったり……淫らなペッティングをしても、犯すことだけは許してやって。美津子は、まだ子供なのよ。だから、あたしのようにさせたくはないの。出来るかぎり綺麗なままで、いさせてやりたいの。分かってちょうだい！だから、最後の時だけは、目をつむって、京子で我慢してちょうだい。あたし、貴方たちにスペシャルサービスをするわ」

それは凄絶な自己犠牲に充ちた、妹への愛の言葉であった。

男たちは、その決意のすごさに、かなわなもののすら感じた様子で、互いに鼻白んだ顔を見合わせるばかりである。

ずいぶん経って清次が、開き直る。

「そうか、さすがに鉄火姐御のことだけはあ。素っ裸なのが滑稽だが、俺もその根性には感心するぜ。つまり何だな、美津子と思いつきり、たわむれて、どうにも収まらなくなつた時には、お前と交替するというわけだ。

感じとしては、ただ、一寸ばかり位置が違うだけで、美津子だと思って楽しみたいんだな。そうだな」

「そうよ。美津っちゃんを犯さないで……」

この世の陰湿さの極みにあるような行為を自ら言ってしまった京子は、痴呆のような、ぎりぎりの表情で、あてどのない遠くをみつめるばかりである。

「面白い。じゃそれで、いこう。代用品ってえのも、あまり、ぞっとしねえが、乱交パティと、ゆこう。お前どこまで持つかな？」

……もう時間は、どのくらいたったのか、よく分からない。場所もおぼろに、かすんだ夢の中の世界のようにも思える。

「ねえ、清次さん。京子に、もっと、お酒を飲ませてちょうだい。酔って、いい気持ちになって、皆さんから教えていただいたテクニクの、ありったけを使わなくちゃ。何といったかしら、あの狂おしくなってくるお薬……ねえ、あれを京子にも、たっぷり塗ってくれなくっちゃ、いやン……」

京子は、むせぶように目をトロリとさせて清次にねだる。

それというのも、無理やり引きずってこら

れた美津子が、すぐ目の前で三郎と五郎の二人に、まといつかれているからである。

「ええい、うるせえな。手前は、黙ってろ」

と邪険に言いすてて、清次はゴクリと喉をならして新しい犠牲に見入るのだ。

美津子の内腿は、真っ白く、静脈が浮いて光るばかりの新鮮さである。

下半身を受持っている三郎は、かねてから鬼源の機嫌を取って、うまくせしめておいた塗り薬を、たっぷり指先に掬いとると、

「さあ、可愛い子ちゃんや、そんなにうれしがらないで、もっと思いきって抜げるんだ」

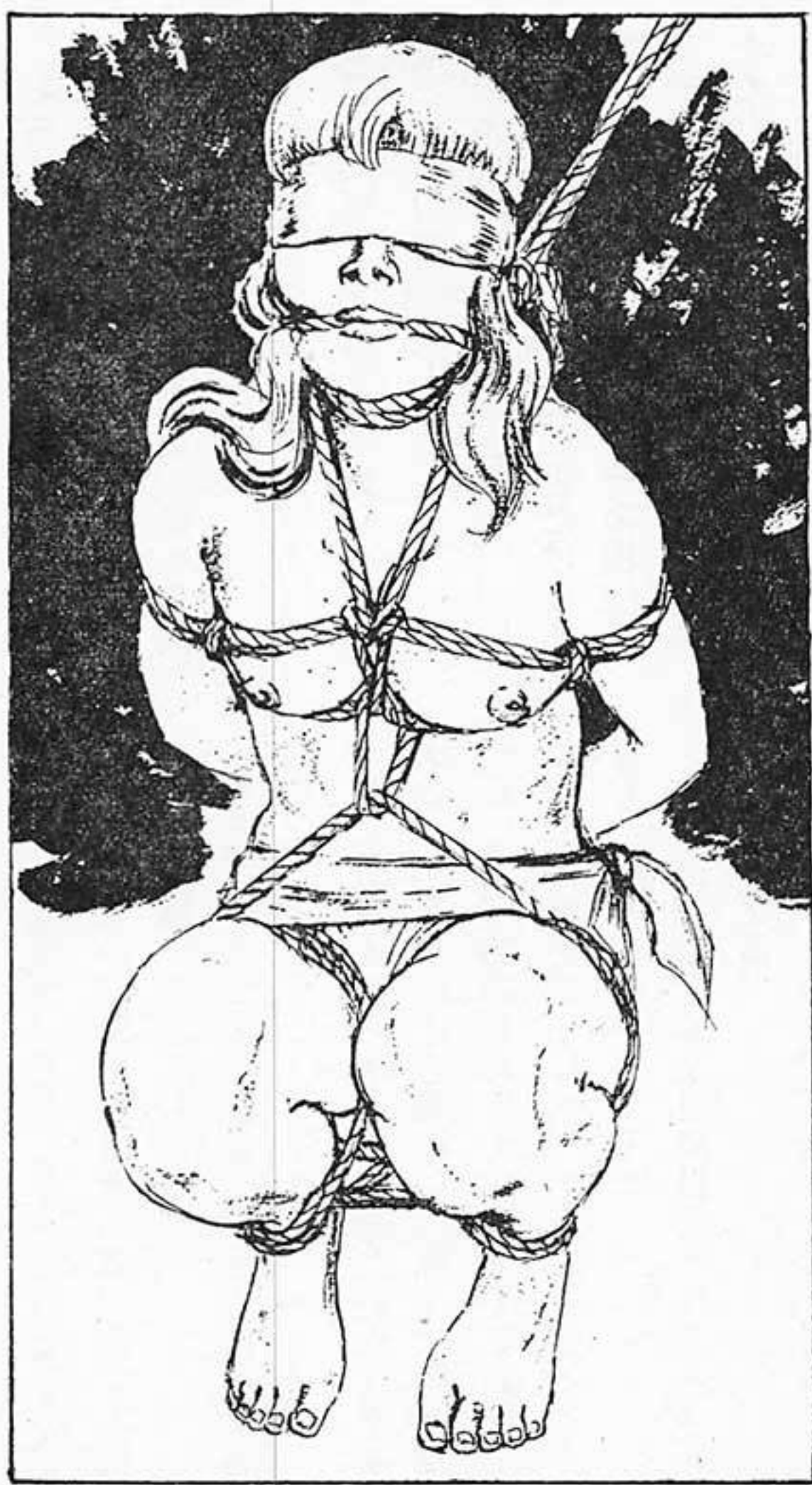
皆んなに見られていると、よりハッスルするのが三郎の陰湿な性格である。彼は、上半身を責めている五郎を押しつけるようにし、美津子をゆっくり仰臥させると、ゆるゆるした手付きで内腿から下腹部の暖かく弾んでい肉を撫でさすりあげて、もうろうとして、五月雨のように吸り上げている美津子の両肢をメリメリと左右に拡げてゆく。

上半身にのしかかって夢中の五郎がいるため、か弱い美津子は身をよじらせることもできないのだ。

「いや、カンニンして……」

性人形などではない美津子は、息も絶え絶

也利羽志『とびと兎』イメージギャラリー



えだが、いかにも年頃の女学生らしい抵抗をみせるのに構わず、

「なにを嬉しがってるんだ、フフ……」

そして——無残に剃り上げられてしまっている姉と違い、つつましかかな繁りをみせている盛り上がりに迫るのだ。

「……………」

その部分は溜息がでるほど、蠱惑的な乙女の含羞をたたえていた。すでに二度たっぷり塗られた媚薬のためもあったか、若さにみちて可憐とも淫奔ともいいようはないのだ。

まだ、花なら、ぐんぐん開きつつある清楚な感じの髪の長いこの娘が、このような蠱惑の一面を秘めているなどとは、とても思えない。別の生き物のような感じである。

「あっ……あっ……」

とむせんで、三郎と五郎の術中に完全に陥った美津子は、脂汗や分泌液でテラテラした白い体を、ぴくぴくとサナギのように痙攣させ、破滅の淵に一散に追い込まれてゆく。

喰いしばった白い歯がカチカチとかすかに鳴るのを合図にしたように、三郎の二本の指

が……

上半身を攻略中の五郎は、ねばりつくように、濃厚なキスを息つくひまも与えず奪っていたが、三郎のハッスル振りが目に入ると、前後を忘れ、破れんばかりだったパンツをむしり取る。見物者たちが制止することもなく見守る中で彼は、仰臥して目を閉じている美津子の白くのけぞった喉を狙うのだ。その間にも、白桃のように水々しい両乳房へ攻撃は続けられる……。そして、三郎は、攻撃個所をコリコリした新芽にかえる。

その瞬間、紅潮しきってクナクナになっていた若い性奴隷の裸体が、躍る。

「あっ！ よ、よして……」

と、せっぱつまった生々しい声をあげ、かきくどくような哀願にみちた瞳を開き、三郎をみる。

「なんだ、どうしてほしいってんだ？」

うるんだ明眸は、欲情の焰にあぶられて万感をこめている。

その若い体内の奥深く吸収された塗り薬の効果と、嵩にかかった二人の男の情欲の激しさを知っているのは、悩乱の泥沼をさ迷っている美津子と、とてもその切ない姿態を正視できない京子だけであろう。同じ女である京

子には、そのたまらない遣る瀬なさが骨身に
しみるほど、よく分かるのだ。

無我夢中の美津子は、自分でもわからない
まま、下顎や喉、首筋を攻撃しつづける五郎
を白い掌で包みこんでいたが、

「み、美津子、もう駄目……」

と、全面降服をつげる女言葉を口にしたの
だ。

ニタリと口を歪めた三郎は、してやったり
と、

「じゃ、仕方がねえ。これから、お前の欲し
いものを充分、楽しませてやるぜ——」

と、汚れたパンツを脱ぎにかかった。

三人の痴態を前にして、京子の心はズタズ
タに引き裂かれていた。目を開けていること
は、とうていできない。かなわないまでも目
を閉じるが、高く低く、時に押し潰されそう
な含み声をあげる美津子の惑乱ぶりは、まる
で自分の身に振りかかっていることのように
京子を、さいなむ。美津子の全裸が、どのよ
うな色責めに耐えているかを思うと、いくら
清次に酒をねだっても、飲めば飲むほど酔え
なくなってくるのだった。

二人の虫ズの走る男が、一人の最愛の妹に
どのような淫猥な行為を仕掛けているかは、

手にとるように分かった。

そして、熟れた乳房と尻を残る二人の男の
鬨るにまかせていた、ある瞬間、

「待って、待って！ 約束よ。約束じゃない
の……美津子は、そんな女じゃないのよ！」

と、京子は叫んだのだ。

その叫び声には、哀願と悲愁が、こもって
おり、ともかく、美津子にのしかかろうとし
ていた二人を、辛うじて喰いとめる迫真力に
みちていた。

それから十分ばかり後、京子は、前後の男
たちに挟まれて、ゆっくりと豊満な双臀を、
くねらせていた。

巨大なベッドは三人が入っても、まだ充分
の余地がある。両手を縛られたままの京子が
左側を下にして五郎と向き合っても、フカフ
カしたスプリングのため腕も痺れない。背後
の三郎は、いかにも彼らしく、たっぷり楽し
むつもりだ。

川の字形だけなら、まだいい。ベッドの枕
元に美津子を寝そべらせて、先程の目も眩む
翻弄を続ける執念深さである。

今一步というところで、清次が阻止しなけ
れば、京子の必死の懇願も空しく美津子は、

二人のチンピラの毒牙にかかったにちがいな
かった。新鮮な果実をガブリとやり損ねた二
人が大不満なのは当然のこと、二人を同時
に京子が引き受けるのであれば、と舌打ちを
しながら、ようやく承知した次第なのであっ
た。

しかし、実際にこういうスタイルを取って
みると、思ったよりスムーズにゆき、又京子
が、火のような息をつきながら、ひたすら彼
らの歓心を買おうとしているのを感じると、
新しい嗜虐心が、こみ上げてきたようだ。

すぐ近くに、まだ純でウブな美津子のスベ
スベした肉体がズシリと横たわっており、ど
のように鬨り、どのように触れようと自由
である。この二人の美女から、思慕のありっ
たけを打ちあけられたような有頂天の欲びで
モクモクとうごめいている京子の暖かさと美
津子の匂いを嗅ぎ、二人のチンピラは、だら
しなく目尻を寄せる。

京子は、この邸に来てから訓練された、女
の体が男に与えることのできる、すべてを駆
使しようと身を揺するのだ。

何もかも、もうどうでもよいという思いに
なるような眩暈が、京子の軀の奥深いところ
で起こりはじめる。それは、彼女が白いケダ

モノでしかないと知らせる証拠であり、このような愛情などの全く介在しない醜悪な被虐の中でも、忘我の瞬間を味わうことのできる性奴隷になりきった証拠でもあった。

「ねえ、オッパイを……」

と彼女は、くるむような声で言う。

だが、普通なら触れ甲斐のある九〇センチの乳房や、一メートルの尻にも、男たちは触れて来ようとはしない。

それというのも、ベッドに入る前の、いざこざで中断された美津子の切ない、うずきがふざけた三郎の責めの再開によって再び盛り上がってきて、ピンクの低音が唇から洩れ始めているからだ。

ある予感から、京子は律動を一層、細やかにした。まるで粘りつくように……。

彼女の成熟した体は、あまりにも、たわわで、はちきれるばかりである。ヌードモデルにしても、ストリッパーにしても、したたま稼げるだけの体つきをしている。その彼女が二人の男のただ一瞬の慰みのために、様々の口実をつけられて、青春を、娘ざかりを泥まみれにしている。抑えようとしても止まらない涙が、あとからあとから目尻から、したたり落ちる。きびしく縛られた両手が解ける筈

もない。「もう、あたしは、どうなってもいいの」そう思った時、今のこの不思議な被虐感だけが、これからの彼女を支えてくれる、すべてのような気がした。酒の酔いもあったし、体内で充分に醗酵した得体の知れない媚薬のせいもあった。京子は、転がり落ちる石のように、まっしぐらに地獄の花園めがけて火柱のように燃えさかるのである。

四足の、ケダモノのように複雑に、もつれあっている男女を凝視している法界の目が、赤く燃えている。

どうひいき目に見てもナメクジのように気味悪い感じだ。

「どうしたんだ法界——お前も参加してえんだろう？」

と、せせら笑うように清次が念を押し、おれに委しとくと、愉快げに言うのだ。

ベッドの中央に埋れこむようになっている三人を等分に見較べて、

「どうだ、京子？ まんざらでもねえと、ちゃんど、その綺麗な顔に書いてあらあ」

京子は、くしゃくしゃに乱れた豊かな髪を掴み上げる清次に、テラテラと頬を紅潮させた美しい顔を伏せるようにして、

「い、いわないで……京子、もう……」

少しでも骨休めでもすれば、邸の男たちはどれ程、裸女たちに厳しいことか。京子は眩しげな、うるむ瞳を、そっと開いたが、大波のような、うねりは止める訳には、ゆかないのだ。押し潰されている乳房も妖しく動く。

「チエッ。安女郎もやらねえことをやりやがって……」

「い、いわないで……」身を灼く情焰と恥辱に息を詰まらせる美女は、その時、急に大きく顎を反らせ、「くうっ……」と喉をならす。

「ところが、そうは、いかねえのよ。法界がもう辛抱できねえんだってよ。おめえは、見たところじゃあふさがっているようだから、美津子を——」

息が切れるばかりの羞恥に美肌をかきむしられる思いの京子は、今は美津子を、そっちのけにして、一気に攻勢に転じてきた二人に押しまくられ、次第に爪先立ってくるのだ。

「だ、だめよ！」

「四の五の言わねえで、連れてゆくぜ」と清次は、身も心も消耗して呆然と氣を失ったかのような美津子を抱え上げてしまう。常軌を逸する手前にいる状態の京子に、どうすることができよう。だが、ようやく口走

った一言は、姉としての妹への愛情が、このような醜行爲を、一気に天使の行爲にまで昇華させる、けなげなものであった。

「美津子は、だめ！ まだ、京子の、お口がお口があるワ……法界さん……」

京子凌辱に三人目の男が加わる時には、特に女はかなり首をねじ曲げるような、か弱い不自然な努力をしなければならなかった。

このような美女を、このような方法で羞かしめ尽せる機会が、簡単に今後とも、やってくるとは思えないことを知る、やくざ共は、ここを先途と、豊満な一糸まとわぬ美肌を、遮二無二、責めたてる。

軀の奥底から湧き上がり、全身をくまなく駆けめぐる物の化のような眩暈は、どろどろに溶けてゆくような、狂いたつような悩乱をいや増させる。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号『花』

定価五〇〇円(送共)

脂汗にまみれ、男共の中に埋もれてしまった乳色の、たわわな美肉は、断末魔の前の最後の勉めを果たすべく、鼻をつく臭いの法界を舐めするのだ。ピンクの舌で、丹念に、丹念に……

身も心も完全に崩壊した京子、美しい横顔を見せ、睫毛の間に涙を一杯浮かべながら頬をふくらませ、大きく激しく打ち振る豊満な臀部。あまりにも酷な悦楽絵図のヒロイン。

三人の男に、根限りの奉仕を捧げつくすことが、至上最高のつとめであるかのように、後手にいましめられた裸身を躍動せしめる美女の哀れさは、そのまま、この邸の、この部屋が泥沼に、ほかならないことを教えているようである。

京子は悶絶する前の悲鳴を、鳩の含み鳴きのように上げる。この奴隷女は、世にも至福なことに、同時に三つの死を体験することになるのだ。この白いメスは……

「最後に、オレの番になったようだな。今度こそ完全にふさがっているぜ」

すさまじいような被虐シーンに見倦みかけた清次が、男たちの間から、ようやく見える京子の頬をつついたのは、その時である。

「何か、言いてえことがあるなら言ってみな

よ。フフフ……」

そう言いながら、興奮と恐怖で凍りついたように身をふるわせるばかりの美津子を抱え上げ、長く伸ばした黒髪を、しごく。

「この、くだらないヘアバンドなんか捨てちまえ」

といいつつ、荒々しく解き放ち、ぼいと捨てる。ふあっと扇のように拡がる髪に目もくれず、

「京子、お前の代りをさせてやるぜ」

濡れに濡れた瞳を、ぼーっと開いて、こちらの方を眺めている京子は、一体、何を考えていたのだろうか。すぐそばの壁には、死ぬような恥辱で押しつけた彼女の女拓が、流麗なサインを入れて、大きく貼りだしてあった。

「……………」

京子は、その時、ひととき大きく呻いたかと思うと、はげしい勢いで、上半身を弓なりの形に、ぐっと、そらせた。彼女の激しさにあふられる三人の男も奇声をたてる。

ちょうど、タイミングを合わせるような恰好で、美津子を組みしいた清次も、その可憐な裸身に、悲壮な呻きを挙げさせたのであった。

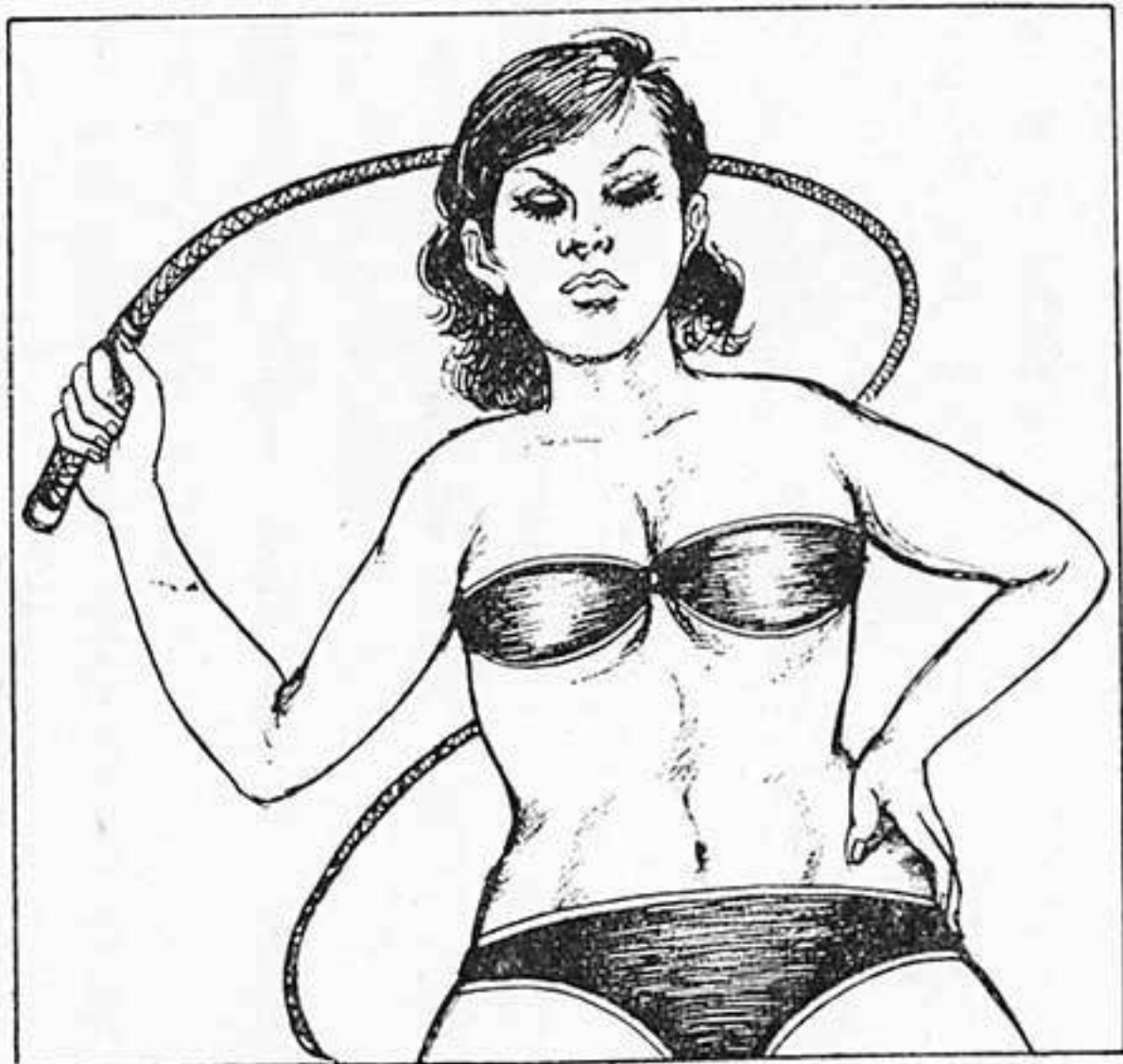
——(つづく)——

〓男 奴隷の告白〓

あるマゾヒストの一日

カット・春川ナミオ

大 西 信 二



私は半年前から一人の女性の奴隷にされ、辛い日々を送っている二十一才になる大学生です。奴隷という身にされた原因は、幼い頃から芽ばえたM性の為ですが、現在の女王様に奴隷にされるまでMの経験のなかった私は現実に奴隷の身にされ、その辛さと苦しさには今では一刻も早く現在の境遇から逃がれ、自由を得たいと、この頃は、それだけを願っております。

しかし、女王様に恥かしい写真を撮られ、私のこの人には決して知られたくないMの秘密を知られてしまった今、逃げることは出来ません。と申しますのは、もし私が逃げたりすれば、私の家や友人に私の秘密をあばくと女王様は申されるのです。

そのようなことは、私にとっては死んでも耐えられないことです。これというのも、自分がマゾであった為ですが、大学生活も二年目の正月を迎えた時に、同じ下宿にばかり、ずっと居るのも興がないと思い、学校の紹介で真柴という家に下宿を変えることにしたのが、そもそもの原因です。

私が下宿をした家は、数年前に主人に先立たれた三十六才になる実千代様という未亡人と、お手伝いの光子という二十五才の女性との女二人の世帯で、薬剤師の資格を持つ実千代様が薬局を経営されておりました。

女世帯なので私は大変、歓迎されたのと、お手伝いの光子様がグラマーで美人でしたので、私は良い所に下宿出来たと喜んでおりました。その頃、私は奇クが発行されると毎月待ちかねたように買って帰り、それを読むのが、なによりの楽しみでした。

そして夜になると、それまでに買い求めた奇クのM画やM読物のスクラップブックを机の奥から取り出し、それを見ながら、自分のM性を満足させ、いやしておりました。

そして、いつの間にか、私は、M画やM読物の中で男共に君臨する女王様に、光子様をおきかえて、光子様の奴隷にされている自分の姿を想像して、自分自身のM性を、いやすようになっていました。

実際、光子様はお手伝いなどしているのは勿体ないような色白で均齊のとれた姿体は女王様として、ふさわしい美人でした。私は毎夜、布団の中で光子様を想い、もんもんとして寝つかれず、ノートに光子様の奴隷にされたいという気持を書き綴ったりして、気持をなぐさめていました。

勿論、これは自分一人の秘密で、そのノートはMのスクラップブックと共に、机の奥にかくしておりました。

ある夜のことです。私は、その夜も光子様の姿が頭の中をかけめぐり、夜中になっても眠ることが出来ませんでした。

私は、もしかしたら光子様の寝姿が見られるかもしれないと思いつき、そっと布団を脱け出し、階段を忍び足で下りて光子様が寝ておられる部屋の前まで行きました。障子のすき間から中をのぞいて見ましたが、真暗で何も見えません。

私があきらめて、すぐごと引きかえそうとした時、奥の実千代様の部屋から灯りがもれており、そして何か人の呻くような声が聞こえました。

私は忍び足で実千代様の部屋の前へ行き、そっと障子のすき間に顔をよせて中をのぞきました。ベッドに全裸で寝ている実千代様の足の方に、光子様がうずくまり、両太股の間

に顔を、うずめているのです。思いがけないその光景に、しばらく私は、その場を動くことが出来ませんでした。

そのうち、実千代様が上体を起こされたので私は慌てて階段の方へ行こうとし、廊下においてあったゴミ捨てのカゴに足をひっかけ、てしまいました。私は、はっとしましたが、その時、実千代様の部屋から人が出て来そうな気配がしましたので、私は急いで階段を上がり布団へ入って、そっと息をこらしておりました。

階下では、何やら声がしておりましたが、その内、静かになり、私は、ほっと、いたしました。今見たショックな光景が頭をはなれずに、とうとう、その夜は一睡も出来ませんでした。

次の日、私は朝早く家を出て、学校へ行きました。そして夕方、何気ない様子で帰り、二人の様子を見てみましたが、別にいつもと変わらず、その上、夕食の時にはビールまで出て大変な、ご馳走でした。しかし、ビールを飲んで、しばらくすると、私は急に睡魔におそわれ、食事をしていることも出来なくなり、やっと自分の部屋へ辿りつくと、そのままだ引きこまれるように眠ってしまいました。

目を覚ました時は、もう夜が明け、辺りは明るくなっておりました。そして私は、自分

が真っ裸で手足をさらされているのに気付いたのです。

私が驚いて跪いていますと、実千代様が部屋へ入ってこられ、私の頭の所に立って無言で私を見下ろしていましたが、急に足を上げて私の顔を踏みつけるのです。

「光子はね、本当は私の奴隷なんだよ。光子の奴隷になりたいと思っていたらいいが、生憎だったね。今日からはお前も私の奴隷にしてやるから覚悟しておおき。お前がマゾだということとは、もう判ってるんだよ」

そう言って、私の机の抽出の奥にかくして秘密にしているノートやスクラップブックを取り出しました。

「こんなことばかり書いたり、読んだりしてお前は死んだ主人以上のマゾだね。私はお前のように若くて、いい男をいじめたくて、うずうずしていたんだよ。これから、みっちり仕込んで、死んだ主人と同じように完全な奴隷にしてやるからね。いっておくけど、私はきびしいよ。泣いたりしないように、今から覚悟を、きめておおき」

私の顔をふみにじりながら、申されるのでした。それから光子様を呼んで、私が光子様に散々恥ずかしめられる様子を、何枚も何枚も写真に撮りました。

「逃げようと思っても無駄だよ。もし、そん

な気をおこせば、お前の親や知合いに、この写真をバラまいてやるからね。さあ、奴隷の誓いに、私の足をおなめ」

この日から、私の辛いみじめで苦しい奴隷としての生活が始まったのでした。

それから半月もしない或日、光子様は自動車事故で亡くなりました。同じ奴隷の身でありましたが、私が理想の女王様として描いていた女性は光子様でした。しかし実際に私の女王様になられた実千代様は、光子様と比べることも出来ないような女性なのです。

三十六才という大年増で、一六〇センチ、七〇キロの脂ぎった、ぜい肉のついた肉体からは、美というものは全く感ずることは出来ないし、毒々しい赤い唇は淫らな場末の飲屋の女将にふさわしい下品な女性なのです。

私は光子様が恋しくてなりませんでした。

しかし、そんなことを考えていることすら許されない辛い日常が待っていました。

光子様が亡くなった次の日から、全ての用事は私に命ぜられ、朝早くから家の掃除、実千代様の下着の洗濯、薬局の店番、そして、三度の食事の仕度と後片付けなど、休む間もなく追い使われる日々がはじまったのです。

そして、学校へも一週間に一度だけ、それも昼から夕方までしか行かしてもらえなくなりました。そして、私が何よりも辛いのは、

夜の奉仕です。実千代様は毎夜、自分の欲望を満たす為、私に恥ずかしい、みじめな奉仕を強要されるのです。

異常なまでに欲望の強い実千代様は、私の舌による奉仕を一番好まれ、私は毎夜二時間乃至三時間の舌奉仕をさせられます。

その上、全身のマッサージまでさせられ、何か気に入らない時は、私の体がミミズばれになるほどムチ打たれるのでした。そして、私は毎夜、実千代様のベッドの下にヒモの付いた首輪をはめられて寝るのでした。

夜中や朝方、尿意を催されたりすると、実千代様はヒモを引っばって私を起こし、私の口を便器の代りにお使いになるのです。

こんなみじめな私の或一日を書いてみましたので、マゾヒストのお方は、心してお読み下さい。マゾはプレイか空想の世界かで楽しむもので、本当に奴隷となってしまうては、とても我慢出来るものではございません。

自由のない生活。人生なんて、とても人間としては耐えられないことです。

〇月〇日

今日は学校へ行かしてもらえる日だと思つと、朝から多少は楽しゅうございました。

いつもの通り、五時前に起きて掃除と洗濯を済まし、実千代女王様の御食事の仕度も、とどこおりなく終え、洗面道具とお湯を洗面

器に入れ、女王様のベッドの下に土下座してお目覚めになられるのを、お待ちいたしておりました。女王様は、お目覚めになった時、

私が洗面の用意をして待っていないと、大変お怒りになり、辛い責苦を与えられます。

私は毎日、用心に用心をして、必ず八時までに朝の用事を片付け、洗面の用意を整えてお目覚めを、お待ち申しているのです。

今日も八時過ぎにお目覚めになられた実千代女王様は、ベッドへ上半身をお起こしになっただけで、私に手伝わして洗面をすまされました。そして、そのまま朝食をおとりになられました。今日は珍しく御食事についてのお小言もなく、ほっといたしました。

いつも御食事について、お気に召さない点があり、その時は私の頬が赤くはれ上がるほど打たれるのが常でした。食事を終えられたあと、女王様は、「排泄物を与えてやるから早く仕度をおし」と申されました。

私は急いでトイレへ行き、木で作ったトイレの台（女王様がお部屋で御用足をされる時に用いられる西洋便器の形をした枠）と私の食器（中華用の大きな浅い丼）とを持ってまいりました。床にビニールを敷いて、そこへトイレ台を置き、女王様へ一礼をしてからトイレ台の前の割れている所から食器を捧げ持って、這いつくばりました。

ベッドから降りられた女王様は、トイレ台を挟むようにしてお立ちになると、傲然とお坐りになられ、「さあ、尊い御物じゃ、心して受けよ」とおっしゃって、ぐっと、お氣ばりになりました。今日はなかなか、おすみにならず、私の鼻はつーんと、しびれるようななんともいえない臭いで、ひんまがりそうになりましたが、ぐっと我慢していました。

「よし、終わったら、お前の舌で清めよ」

そうおっしゃって、腰を浮かし氣味にされました。私はその下へ体を寝かせ、女王様のアヌスを舌で清めさせられたのです。

勿論、こんなことは、以前、空想の世界で想像したことはありましたが、実際、現実こんなことをさせられますと、普通では、とても耐えられないでしょう。しかし、私はどんな辛いみじめなことも、絶対に女王様の命令に背けないのです。もし背いたりすれば、それ以上の、辛い苦しい目に合わされるからです。

それから女王様は、「さあ、この食べのこしを、それに入れて、いつもの様にお食べ」と申されました。私は女王様の朝食の食べのこしを、自分の食器に入れ、部屋の入口へ下がると、廊下にひざまずいて、

「奴隷信二は、只今から女王様の御恵みにより、尊い御物をいただくさせていただきます」

私は、それから昨夜、女王様がお寝み前に下しおかれた御神水入りのマホービンとを持って女王様のお部屋の直ぐ外にある裏庭に降り、土下座して女王様からの頂き物を、手を使わずに食べねばなりませんでした。ベッドに寝ころんだまま窓を開けられた女王様は「どうだ、おいしいかい。ありがたく、よく味わって食べるんだよ。残したりしたら、承知しないよ」と言われます。

「はい、大変おいしゅうございます」私は言葉とは反対に、あまりのみじめさに、涙が出てきそうになりました。私は女王様の御神水を口に含み、口の中をきれいにゆすぎましたが、そのゆすいだのを吐き出すことは許されません。それも、ぐっと飲みこまなければならぬのです。

その時、部屋の中から、「早く顔を洗ってここへおいで」とお声がかかりました。

私はトイレへ行き、水洗便所の流れ出る水で顔と口の中を洗い、女王様の部屋へ戻りました。私は今日は学校へ行ける日だから、これでもう、お許しが出るとばかり思っておりましたが、その私が耳にしました言葉は、

「今日は久しぶりに、なにか体がうずいて仕様がな。今日は店を休むから、お前もそのつもりで、せいぜい私の氣に入るように氣をつけて奉仕するんだよ」

その言葉を聞いて私はゾーッとしました。私の顔に出た不満気な様子を見ると、「学校へ行けるかと思っていたのかい。人がお情けで、週に一度、学校へ行かしてやると云えばそれをあたりまえのように思っている。お前を学校へ行かそうと行かすまいと、私の氣分次第なんだよ。この身の程知らずが……」

激しい平手打ちが、私の頬に飛んできました。よりによって私が学校へ行ける日、そうです。少しは自分の自由がある日が、逆に辛い日になるのです。というのは、欲望の異常に強い実千代女王様は、夜の私の奉仕だけでは満足されず、月に二、三回は朝から晩まで終日、私に奉仕を強要される日があるのです。

その日は、店も休業して、自分が完全に満足するまで、私は辛いみじめな奉仕をさせられるのです。それは本当に辛い一日です。

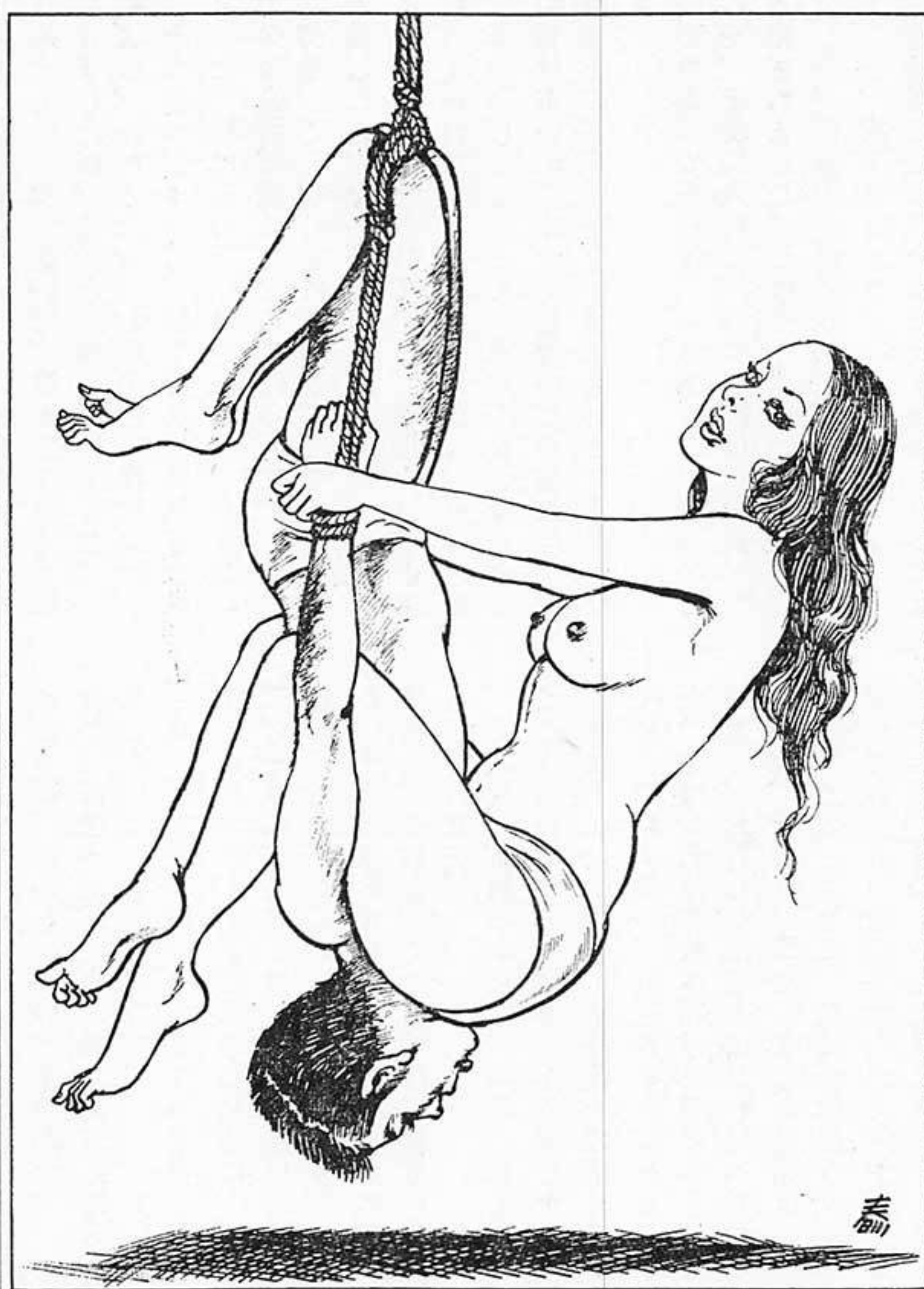
私は悲しさに涙が出そうになりましたが、ぐっと我慢をし、「申訳ございません。私が悪うございました。お許し下さい。お許し下さい」と、私はベッドの下に這いつくばって、お願いしました。

ベッドに腰をかけておられた女王様は、私の頭を、ぐいぐいと踏みにじられながら、「今日のところは許してやる。しかし、今日もし、お前の奉仕が、私の氣に入らない時は

ナミオM画廊

『ある愛の表現』

春川 ナミオ



今後、学校へは絶対に行かさないから、心して、おつとめ。いいかい」
 「はい、有難うございます。奴隷信二は、女王様の慈悲深いお心に対し、決して背かないよう心から御奉仕申し上げます」

「よし、その言葉に、いつわるようなことがあれば、又この前のように、ひどい目に合わすからね。さあ、足の方から、心をこめて、お舐め」
 私は二〇日程前に実千代女王様がお昼寝を

~~~~~  
 されている間に、自分も少し睡ってしまったことがありました。その日は朝から激しい責めと辛い奉仕を強いられ疲れきっていたためですが、私は体中がミミズばれになるまでムチ打たれました。その時の痛さは、今でも忘れることが出来ません。

私はベッドに横になられた女王様に、今日とは何とか、お氣に入ってもらおうと、足に舌をつけて忙しく動かして足舐めをはじめました。だんだんと足の裏から上の方へ唇を這わしていった私は、急に女王様の手で髪の毛を、むんずと掴まれ、遅しい両股の間で、ぐいと挟みつけられました。

女王様は強い体臭の持主ですので、その臭いの強烈なこと。私はすえたような、なんともいえない異臭に吐き気を催しそうになり、思わず口を、つぐんでしまいました。

「早くしないかッ、この奴隷メ」

女王様の罵声が私の背に飛び、私は、それから昼過ぎまで、二時間近い間、舌による奉仕を寸時も休むことなく、つづけさせられました。その間、実千代女王様は何度か身をのけぞらし、そのたびに私の顔は押しつぶされるほど、両太股でしめつけられました。

そのあと、実千代女王様は大きく伸びをされると、足で私の顔を蹴とばされるのです。これが女王様の休憩の合図でございまして



私は床に這いつくばって、次の御命令を待っておりますと、体を拭くよう言い付けられました。私は熱いムシタオルを作り、女王様のお体をお拭きしました。脂の浮いた浅黒い肌は汗で、ぬめぬめと光り、私に体を拭かせ乍ら煙草を吸っておられる実千代女王様の姿は淫らで私は目を背けたくありませんでした。

女王様は煙をふーと吐きかけながら、「お前は私のことを美しいと思ってるかい。正直に思っている通り、お言い」と申されたのです。私は心にもない言葉を言わねばならない自分自身を、悲しくみじめに思いつつも、なんとか女王様の気に入ってもらったのをお願いながら、「はい、女王様は大変お美しいです。このようにお美しい女王様にお仕え出来る私は、本当に幸せ者です」

言葉とはうらはらに、私の心はみじめでした。そのあと、昼食をおとりになった女王様は、私にマッサージを命ぜられました。そのうち、女王様はうとうとなさいましたが、いつお目覚めになるかわかりませんので、私は少しも休むことは出来ません。今日は昼寝から覚められたのが、もう四時を、まわっておりませんでした。

「風呂へ入るから早く仕度をおし。それから夜は、ちょっと出かけるからね」

風呂が沸くと、私は四つん這いになって実

千代様の肥え太った重い体を背中にのせて、浴室までの廊下を這ってゆきました。女王様が背で少し弾みをつけられた時に、私はとてもたまらず、押し潰されてしまいました。「なにをもたもたしてるんだ。このうすのろが。この罰はあとで思い知らしてやるから、覚悟をしておくんだな」

私を罵倒して足蹴にしながら、女王様は浴室へ入って行かれました。タライにお湯を汲んで私が洗い終わると、そのタライの汚れた湯を飲むように言われるのです。私がそれに口をつけて飲む様子を冷たい目で見下ろしていられた実千代女王様は、私の顔を蹴ってタイルの上へころがしてしまいました。

「さあ、口を開け。私の尊い御神水を与えてやるから、有難くお思い」

ぐっと腰をかめられると、私の顔に巨大なお尻をのせ、ぐりぐりと顔を押しつぶすようにされました。

私は息苦しさで気が遠くなりそうでした。腰を少し上げられた女王様は、ボーッとしている私を見られて、

「なにをしてるんだよ。ちゃんと口を開けないかい。一滴でもこぼしたりすると、ひどいよ」と言っ私の鼻を、ぐいとひねりながらつまみ上げるのでした。息たえだえに開いた私の口の中に、その時、女王様の御神水が、

ざあっと入って来たのです。

私はすぐ坐り直すと女王様の前に這いつくばり、御神水をお恵みいただいた御礼を申し上げます。

御入浴のあと御夕食をおとりになられた女王様は、お出かけになれ、帰宅されると私は女王様のアヌスから始めて全身にわたっての舌による御奉仕を命ぜられました。これは女王様が気持ちよくなられて、快眠されるまで休むことが出来ませんでした。

私はベッドの上で全裸で寝ていられる実千代女王様の脂ぎった体を見えますと、その残忍さを身にしみて感じました。

これは、私のある一日の事を書いた日記ですが、毎日が、こんな辛くてみじめな日々の連続でございます。こんな哀れな奴隷の身になったのも、自分のM性のためですから、今は、すべて諦めて女王様に仕えております。それでも、時には、こんな自分のM性が怨めしくてなりません。

もし仮に、自分の理想の女王様の奴隷になることが出来たとしても、現実には奴隷という身は、とても耐えられたものではないでしょう。

私は、この頃、マゾというものは空想の世界か、あくまでも、一時的なプレイとしてのみ、耐え得るものと思っています。





△手

記▽

# モデル志願

小こ

松まつ

裕ゆう

子こ

私が御誌をはじめて手にしましたのは、今から、二年程前のことでした。

その頃、私は郊外のあるトルコに勤めていたのですが、ある時のことです。一人のお客さんが、奇クを持ってきて私に「この本、面白いよ。読んでおいて、くれないか」と言って、手渡して行ったのです。

三十五、六才のお客さんでしたが、蒸し風呂のあとで、マッサージュはいらないから、背中を足で踏んでくれといって、うつ伏せになりましたので、私はカーテン・レールにつかまりながら、足の裏から踏んでやりました。

特に、踏んでくれと言われなく

ても、うつ伏せになって伸ばしたお客さんの足の裏を踏むことは、よくあるのです。

そのお客さんは足の裏だけでなく、胫やお尻、背中、腰なんかも踏んでくれと言いますので、私は転げそうになるのをこらえながら足の指に力いっぱいこめて、背中の肉に喰い込むくらい踏んだのを覚えています。

そのお店は、指名制でなかったもので、それっきり、そのお客さんには逢いませんでしたが、置いて行った本が、私が御誌を知るきっかけとなりました。

その時は、何の気なしに、ペラペラとページをめくっていたのですが、自分で買って読むようにな

ってから、だんだん興味を持つようになってきました。

私は今年二十四才で、もう五年ほどトルコに勤めています。別にこの商売が好きだったわけではないのですが、島根県から一人で大阪へ出てきて、泊るところもないまま「寮完備」という言葉につられて、腰掛けのつもりで、この商売に入ったのが、今にまで、ずっと続いているわけなのです。

身内といっても、弟一人があるだけです。去年、高校を出て滋賀県の栗東にある会社に勤めております。離れているので、たまにか会うことはありません。

最初は十三にあるトルコに勤めていたのですが、今までに四回、

お店を、変わりました。まあ一年一寸で変わったことになりましたが私は殆ど指名制のないところばかりでしたから、固定したお客というものを持っていませんので気分転換としては、よかったです。

大体、「お客さん」と呼ぶ人ばかりで、特別に「何々さん」と名前前で呼ぶような客は、絶対につくらないようにしていました。

チップは別にしても、固定給だけでも、月にすれば十数万円になりますから、寮なんかにおれば、当然、貯金が出来る筈です。

私は、今、アパートにおりますが、晩番、早番にしても、もうただ、ぐっすり眠れたらいいので、そう高級な家賃の高いところは借りません。

彼氏とか、お客さんを呼ぶんだったら、見栄をはって高級マンションも必要でしょうが、私はただ一人で、ゆっくりと眠ればよいのです。日当りが悪くても静かなことと、それに、晩番、早番となると、夜晩くなったり、朝早く通わなければならぬので、お店の近くが便利なのです。歩いて行け



るぐらいのところが、何かと便利なのです。

寮には、通勤用のバスが出ていますので、その通り路だったら、便乗させてもらうことが出来ますが、私は今、歩いて五分ばかりのところ、アパートを見つけています。タクシーを利用すると、毎日のことで足代も馬鹿になりませんし、それに、朝早くだとか、深夜なんかですと、仲々つかまらな

いのです。普通の勤務時間は、午後一時から九時までですが、晩番おそばんになりま

すと、午後九時から翌朝の五時まで、早番は朝五時から午後一時まで、やはり疲れますが、割増金がつきますので、この方がミイリが多いのです。

私は晩番専門で、三月ばかり続けたことがあります。どうして

も深夜勤めばかりですと、昼間は十分眠れないのと、日光に当たることが出来ないため、余り長く続け

ていますと身体をこわしてしまいます。まだ寝静まっている街を歩いてアパートへ帰りますと、食事をす

ましてから、ベッドで眠るのですが、お昼頃になりますと、どうしても目が覚めてしまいます。それで、午後は買物をしたり、友達を訪ねたり、自分の用事をすませるのですが、午後九時前に、お店に入らねばならないと思うと、夕食後は、テレビを見たりしてしまっ

て、うつうつとすることも出来ません。やはり、昼のお客は、サラリーマンとか、商店主とかいう大人しい人が多くて楽ですが、深夜のお客さんとなりますと、がらりと変わって、酔ってくる人が殆どで扱い難いのです。殊に、二時、三時、四時という頃になりますと、麻雀で徹夜したというような人が多いです。

私たちはトルコ娘は、大体貯金している人が多いのですが、中には男に

入れあげて、下着を買うお金もなくてピイピイ言っている人もあります。また、親しくなっ

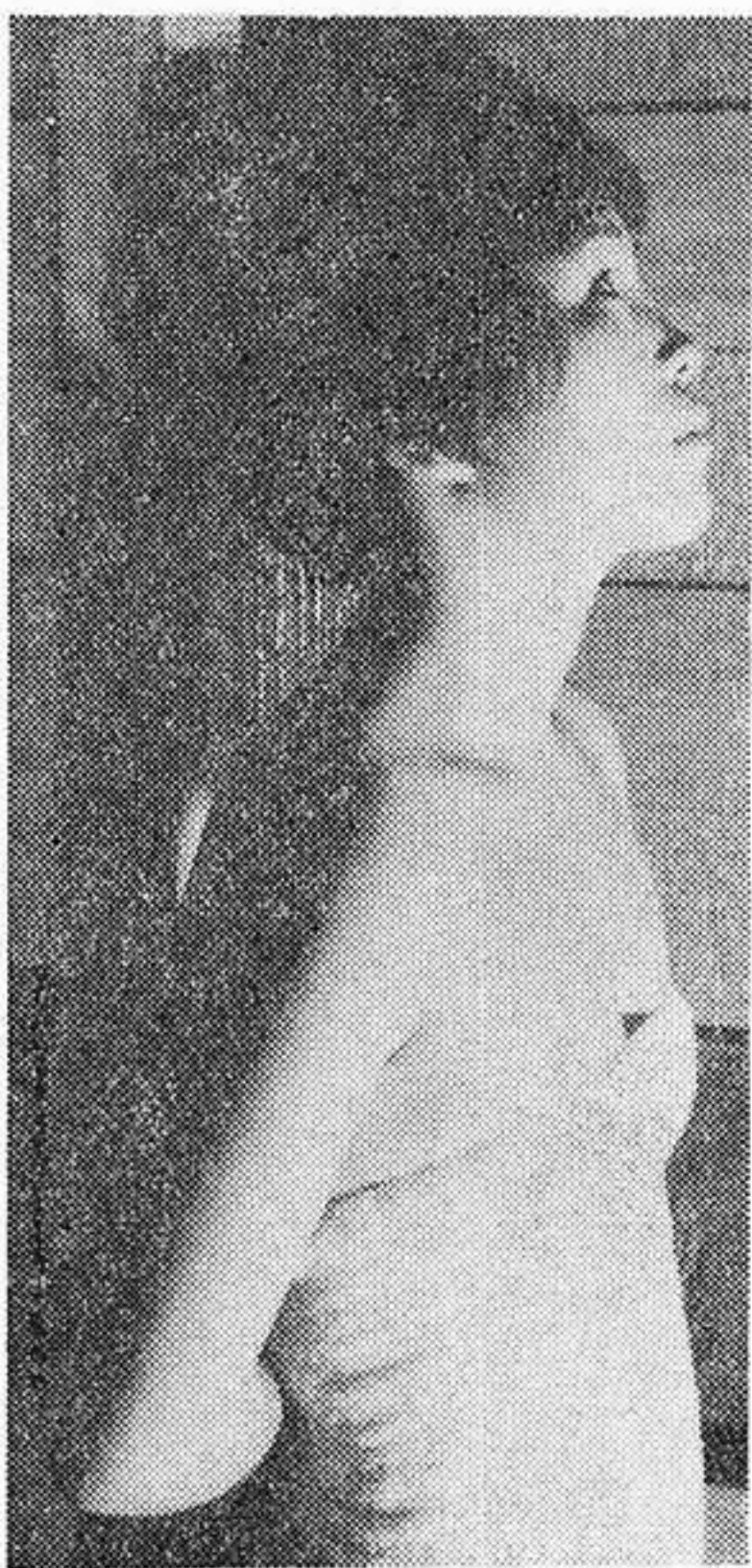
たお客に、お金を貸して返してくれなくて困っている人も案外、多いのです。

結婚するからといって、皆に祝福されてお店をやめていった人物の三月もしないうちに、再び勤めに出だしたので聞いてみますと男が少しも働かず、パチンコや競輪ばかりして遊んでいるので、私が稼ぐんだ、と言っていました。余り悲観した風ありませんでした。

私は、お金が貯まったら、自分で喫茶店かスナックをやりたいと思っていますので、それまでは、派手にお金は使わないようにしています。朋輩の中には、私のような考えを持っている者も案外多い

のです。仕事大切に、休まずに勤めますので、マネージャーも喜んで

います。時折、お店の名前を大きく書いた宣伝カーで、市内の宣伝に行くことがありますが、そんな時、車に乗ってビラ配りのマネキンに駆り出されるトルコ娘は、大体、こうした真面目人間が多いです。カーに乗ったからといって、一円も日当をくれるわけではないのですが、マネージャーに頼まれるとイヤとは言えないのです。マネージャーに気に入られてい



と、いろいろと便利な時もあります。大体、私達は八時間労働ということになっていますから、その間に、二人のお客でも、四人、五人のお客をこなしても固定給には変わりはないのです。ですから、出勤してすぐお客がついたり、また、もう二十分で交替時間がくるといふ時に、



お客がついたりすることを大変、嫌うのです。

こんな時、マネージャーに気に入られてる者と、嫌われている者とでは、大分、割りふりが違ってきます。それに、晩番、早番などの希望も、その時々で、希望通り割り当ててくれることもあります。

毎日、毎日、変わった男性の裸と接しておりますと、男の人って者がよくわかってきますし、自分でも、時には好ましいという男性に、ひかれることもあります。私は、どちらかと言えば、若い人よりも中年の男性の方に、より魅力を感じます。

そして、世間一般の人が考えておられるように、身も心も、すれっからしにはなっておりません。私には、そうした機会もなく、また時間もありません。いや、作れば、いくらでも、時間はあるのですが、今までの私にはそんな気持は起こりませんでした。

一回だけでしたが、指名制のトルコにいたことがあります。その頃、私のところへ、三日にあげず指

名で遊びにくるお客があったのですが、私はうるさくなって、深入りしないうちに、三月ばかりで、そのお店をやめてしまいました。つまらないお客に、かわりたくないといった私の気持でしたが、それほど、私は用心していたのです。

私は、今のお店では、どうやら古株になってきました。といっても、そう永いわけではないのですが、ふた月か三月で変わる人が多いので、一年以上、勤めていますと、結構、古株になってしまうのです。

それで、いろんなことに相談にのられたり、いつの間にか世話焼きと言われるようになってしまい、午後の半日をつぶして、友達の貸金の取り立てに行ったり、男

の所へ別れ話の交渉に行ったり、無駄じみたことをしています。

御誌を読みはじめて、私は、男と女のこと少しは、わかってきたような気がします。こんな商売をしていますと、男女間の性について、何でも知っているように思われ勝ちですが、案外、無知な者が多いのです。私もそうですが、聞きかじりの中途半端な耳学問ばかりで、本当のところは知らない場合が多いのです。

幸いに、私は御誌を愛読しておりますのでお客さんには、直接、

会って得られなかった知識を知ることが出来ました。そして、それを自分の心に照らし合わせて、いろいろと考えてみたのです。

何故、私は、御誌にひかれるのだろうか。私が、どんな所に魅力を感じるのだろうか、ということ

を、よくよく考えてみました。最初は、なんとはいなしに、どことなく、自分の心に、ほのかな温いよるこびを与えてくれる雑誌だ、と思っていました。それが、この頃では、自分の心が、はっきりと、わかってきたような気がするのです。



『パロディ花と蛇』を読んで、その文中に、知らず知らずに、ひき込まれてゆく私――。

そうです。私も、あの京子のように、耐えられないような羞かしめを受けてみたい、という大それた気持が、次第次第に、芽生えてきたのです。

羞恥責めというのでしょうか。そんな目に



合わされている自分のことを想像しますと、思わず胸が、かあーっと熱くなるのです。

一度でいいから、そんな目に合わされてみたい——と思います。

やはり、それには、御誌のモデルに志願して、思いきり、いじめられたい、いや、いじめてもらえ——と、そう考えただけでも、口の中が、からからに乾いてきます。

私は、こんなことを考えてみました。

私は、こうして、トルコに勤めている娘ですから、御誌の方々に、読者の方々に、きっと、男

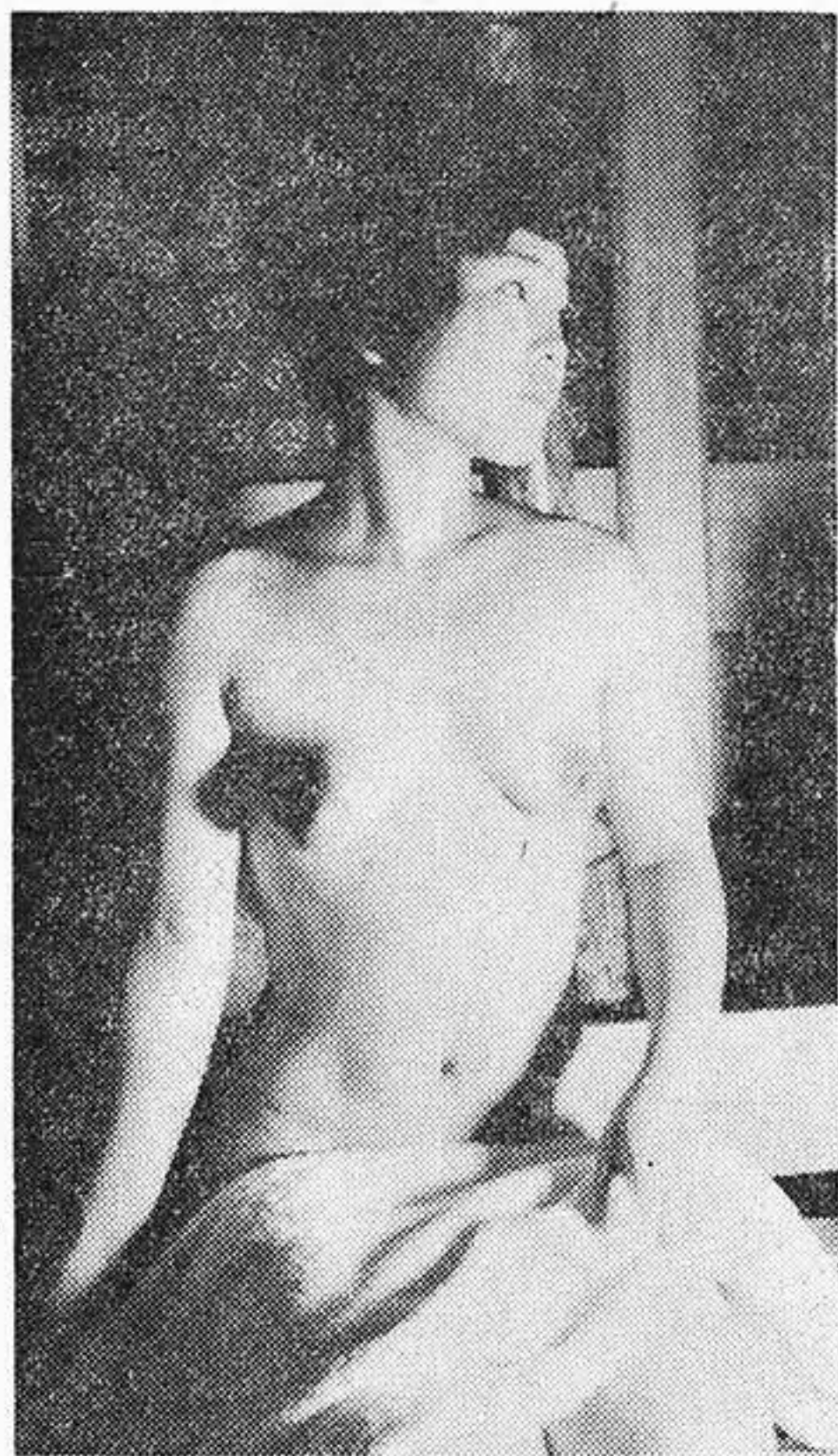
ずれのした女だと思われるでしょう。実際は

そうではなくて、男に

すぐ騙され易い純情な

者が多いのです。

ですから表面は、す



れているようにみえて、心の中は実は純情な女を、面白半分に弄んで、思いのままに、いじめてやろうという気持ちで、この私を、責めてほしいのです。

『パロディ花と蛇』に出てくる場面のように、私の身体ばかりか、心までも、土足で踏みこむように、羞かしめてほしいのです。

勿論、私は二十四才になる現在まで、男を知らなかったといえは嘘になります。トルコ娘という、こんな商売をしているのですから生娘だなんて言っても、通らないことは、百も承知しています。でも、本当のことを申しますと、私

は女の悦びなんて、今まで味わったことはないのです。

空想の中で、自分が羞恥責めにあっていると考えた時の方が、余程、楽しいのです。そんな時、私の責め手として空想の中にあらわれる男性像は、小説『花と蛇』の中の人物であったり、時としてはお客のなかで印象に残った人の顔であったりします。

それほど、責められることを望んでいながら、縄で実際に縛られたという経験もなく、また、縛られたら、自分の身体はどんなになるだろうか、ということにまで、考えが及んだことはありません。

ですけれども『パロディ花と蛇』にありますように、やくざやチンピラに、責められるということだけは嫌です。いや、それは心の中で、嫌だと思っただけで、身体の方はいじめられたい、責められたいと思っているのですから、不思議なものです。

私は十九の年から五年

間、ずっとトルコに勤めて、買いたいものも買わずに貯金をしてきました。貧しい田舎の生活を知っているだけに、お金というものが如何に大切かということを、身にしみて知っていたからです。

洋服も季節の変わり目に新調するだけで、ボーイフレンドも作りませんでした。食事の時折、お店で食べる以外は、殆ど自炊してきました。デパートの地下で、閉店間ぎわの安い食物を買ったり、市場の安いところを探して買い溜めたりしました。

昼のあいた時間を利用して、半年ばかり料理学校へ通いましたので、外食するよりも、安くて美味しいものが作れます。

こんな私でよければ、一度、私をモデルに使って頂けませんか。写真を数枚、同封しておきます。もし、御誌の読者の方の中で、こんな私を責めてみようと思われ人がありましたら、写真を見せてあげて下さい。もしも、そんな方がありましたら、その方の詳しいことや、私をどんな方法で責めるのか、知りたいと思います。



## S 小説三部作

## 残酷・スター誕生

カット・マエダヒオミ



## ◆あけみの新生活◆

あけみの新生活は、さゆりの家の地下室で

い。

着物は、さゆりの着物が、びっしりとタン  
スにも洋ダンスにも、つまっていた。一度は  
本人が着たものだが、今は着てないという。

始まった。地下室といっても  
豪勢なつくりだった。八畳と  
六畳。六畳は居間、八畳は客  
室を兼ねていた。作りつけの  
タンス、洋ダンス、水屋、簡  
単な炊事場、それにバス、ト  
イレ付きである。何一つ持た  
ず、トランクづめで失踪した  
あけみにとっては広すぎるく  
らいだったが……それでも住  
んでみると、なかなか住みよ

久留木 栄

第二部

残酷行路

衣裳持ちと聞いてはいたが、それでも、びっ  
くりするような量である。これを全部、着こ  
なせたら、すばらしいと思う。

イタリア風のもあればカルダン仕立てのもの  
もある、またアメリカで流行のワンダラーブラ  
ウス式のものもある。また日本の振袖も紋付  
もある。あけみは、成人式で多くのおとめた  
ちが和服を着て行くのを見て、自分も一度、  
行きたいと思っていたが——それ以上に豪勢  
な装いが身近にあった。そして今一つ、それ  
らの世話を一切、しないでよいことが有難か  
った。

炊事、洗濯など一家の家事回りは、親の代  
からの、さゆりの家つきの女中の、おまつ小  
母さんが、やった。おまつ小母さんは、行か



「ず後家」の、いじわるばあさんという、さゆりの話だが、そんな素振りを感じられなかった。常に緊張し、常に同性を敵と見、張り合っている必要のない月花星の生活にくらべると、天国と地獄の差である。

だが、その天国にも悩みはある。

それは失踪中を装うためと、代役専門のため、この一年間は自由行動を禁じられていることである。

一、大島さゆり家に起居し、大島さゆりと親族および映画の撮影関係者以外の人には顔を合わせないよう努力する。これは大島さゆりが二人いることを世間に知らせないためで、その秘密保持には厳重、注意する。

と、契約書にも書かれている。したがってトランクに詰めこまれて、この部屋に運び込

### ——第一部のあらすじ——

清纯スター大島さゆりの残酷・ポルノ路線出演にともない、西映はそのシーンの吹き替えを必要とし、キャバレー月花星のホステス諸岡あけみに目をつけ、これを口説きおとした。一行と契約を交し失踪のかたちで同道したあけみは、さゆりの家にあずけられて、その一挙手一投足を真似することになったが、さて、その生活は——

まれて以来、外出するときは一切、トランクに入っていくという契約を重ねて、とられてしまった。

あの日は一度、箱根でトランクの蓋をあけてはもらったが、結局は出してもらえず、午前十時半から午後五時半まで七時間、正味たつぷり、箱詰めに使われていた。

恥かしいことだが、出されたとき小用は、もう限界に来ていた。だが体の手足はしびれて自由がきかず、初対面のおまつさんに抱かれて用を足したものである。

なにしろ、それが自分の新生活のスタートであるから、という気負のあったのも事実だが、それより、縛られての箱詰めという状態に追いこまれていては、恥かしいもクソもなかった。

そのままバスを使われ、新しい下着をもらい、身じたくをし、さゆりの衣裳を着て、皆の前に出てきたときも、足は、ふらふら、からだは、がくがくしていた。

「相当、こたえたらしいな」

「そりゃ、そうじゃろう」

と岩村とクツが話していた。そこで気付けないとブランドを少量、のまされた。

「私の部屋と同じ間どりに設計してあるの。」

衣裳も化粧も同じ物よ。そうしないと代役には、ならないのよ。言葉も、まねてちょうだいネ。当分は岩村と私と、おまつがマネジャー兼ティーチャーね。厳しく仕込むわよ。それでOKだったら撮影開始になるでしょう。それから、あなたの契約金と給料は、すべて貯金に振り込むわよ。本物は金使いが荒いで、そこだけは違うけど、あなたには、それが一番でしょ。月花星での後始末は飯田さんに頼んでおいたので、いずれ処理されるでしょう。アルバムや日記など、とくに必要なもの以外は、全部、売り払うように言っておいたワ。なにしろ、生活が一変するんですものネ」

と、さゆりが説明する。

そのあとで、あけみは改めて女中のおまつさんを紹介された。家の中の調度は一つずつ見せてもらうとして、その夜は佐藤監督をまじえ、岩村、クツ、さゆりらが、あけみの、ささやかな歓迎会をしてくれ、楽しい、ほんとうに忘れられない一夜となった。

### ◆訓練開始◆

だが翌日の訓練は、きびしかった。目が覚



めたときからが、もう訓練だった。起き方がさゆりらしくないと、五度も六度も、やり直させられた。顔の洗い方、着物の着方、みなり直しである。

その先生は、おまつさんで、小さな竹の根のムチをもっており、容赦なく、そのムチがあけみの、しなやかな肩を襲った。文句を言おうにも、だれもない。そんな気配を見せるだけで、再びムチが襲う。

「さゆりお嬢さんの言いつけですよ。泣かせても、いいから、きびしく、しつけなさい、ってさ。さあ、もう一度」

と、おまつさんは何度も、やり直させる。

その一言で、あけみは、赤いネグリジェを着て寝台に、もぐり込み、さっと起きる。ネグリジェを、むしるようにとり、戸棚から下着を出して全部、着がえ、脱いだものを洗濯機へ、それからハミガキ、洗面。洗面だけで、もう六回目である。そのたびに石鹸を使うので、皮膚が、かさかさになっていた。

「ま、きょうはこれ位にしておきましょう」

という、おまつさんの言葉で、やっと食事「あすから食事も、さゆりさんのマネをさせます。きょうは普通に食べて、いいよ。それから、さゆりちゃんのお父さんは、きびしい

人で、徹底的に昔風なしつけをしたのです。逆らうと柱に縛りつけたりして折檻したそうよ。だから、さゆりちゃんは、いまでも私生活は厳格ですワ。幼いときから日記を、つけているので、それも読んでもらいます」

と、おまつさんは、そう脅す。

だが、それは、おどかしばかりではなかった。ひとしきり、訓練がすんだ十時ごろ、さゆりが、ひとりで入ってきた。同じ衣裳、同じ髪型にしてあったので、さゆりが二人いる感じだった。

「あら、さゆりさん。ねむれた？」

本物のさゆりが、聞いた。

「はい、どうやら」

「そりゃ、よかった。ところで、どう呼ぼうかしら。これから、あなたは、さゆりと呼ばれるのよ。あけみじゃ都合が悪いワ。私も、さゆり。だから何だか変ネ。——それで私はあなたをユリちゃんと呼ぶことにするけど、あなたは私を、なんと呼ぶ？」

「はい。お嬢さま、——お嬢さまでは？」

「お嬢さま？ フッフフ、まるで古風ネ。でもマツも、そういつているんだから、そう、きめましょうか」

さゆりは明かるく、美しい顔を、ほころば

せて笑った。全く羨ましいくらい、くったくのない、現代少女だった。

おまつさんの仕つけの話を聞きながら、ニコ笑っていたがやがて呼び鈴を押した。すると岩村四郎が現われた。

「きょうの日程は？」

「午後四時からパーティです」

「それまでは自由なの？」

「ハイ。レッスンも、お休みです」

「じゃ、いまから二時間ほど、ゆりちゃんにレッスンを、つけてあげようと思うの。それからあけみちゃんを、これから皆は、さゆりと呼ぶように、いつて。わたしは、あけみをゆりと呼んで区別することになっています。いいわね」

「はい、お嬢さん」

「じゃ、レッスンの準備をして。準備といってもロープを用意するだけで、いいのよ。きょうは早口言葉を練習させるの。東京都特許許可局といった、たぐいネ」

岩村が一礼して出て行った。ロープを取りに行ったらしい。

「ユリ。訓練は、きびしいワよ覚悟なさい。

きょうは基本的な発声法を教えようと思ったけど、先生が旅行中なので、早口言葉を上手



に言う法を教えます。これも、俳優の仕事の一つです」

「ハイ、お願いします」

「私がいうから、最初につけて。それから四五回、練習して、テストよ。そのテストに失敗したら岩村がロープで柱に縛りつけます。最初が手だけ。つぎが足だけ。続いて胸、腰頭と、つぎつぎに縛りつけるワ。それで、三度つづいて、うまく言えたら、一本ほどいてあげる。ロープは全部で十本、あるワ。十本全部で縛られるようなら当分見込みなしよ。サルグツワかけて、飼い殺しの奴隷にするワいいこと？　これが、さゆり流の教え方よ。これから、どんな先生がきても、この教え方は変わらないワよ」

かわいい顔をして、言うことは憎かった。訓練のできてない、あけみが、うまく行くことはない。それを知っての無理難題だった。だが、それで、へこたれてはいけないのだ。

あけみは、黙って、うなずいた。

岩村が、ロープの束を持って、ひっかえしてきた。

「じゃ、はじめるわよ。最初は、やさしいのから。生むぎ、生ごめ、生卵」

と、さゆりは言った。こんなことは、やさ

しいと、あけみも思った。それが油断で、最初のとき、はやくも、とちってしまった。

「生むぎ、生ごめ、生タガモ。あら、しまった」

と言ったが、もう遅かった。

「岩村。お仕置き」

の一言で、あけみは後手に床の間の柱に縛られてしまった。岩村の縄目は容赦なく、思わず、あけみは「痛いッ」と叫んだ。「痛くなくちゃ、お仕置にならないか」と、岩村は言う。

そのあけみの前にイスを二つ、並べ、そこに、さゆりと岩村が坐って、いよいよ本格的なトレーニングが始まった。

ついで、二度目の文句は「東京都特許許可局」だった。これは、やさしそうで思うように行かない。あけみは何度も失敗した。そのたびに縄目が、ふえる。最初、手首だけだったのが、足首、膝、太股、胸、腹とふえて、まさに雁字搦めとなる。

しかし、そうなるとクソ度胸もでき、案外すらすら行くもので、そのころからナワは、ふえたり、へったり、し始め、ざっと二時間の訓練を終えたときは、手首のナワだけになっていた。

「さ、これで、おしまい。——わたしは昼寝の時間だわ。おまつ、あとを頼むワ」

そういつて、さゆりは、岩村を連れて引きあげた。残されたのは、あけみと、おまつさんだけになった。

ところが、そのおまつさんは、手首のロープを、なかなか、ほどこいてくれなかった。

「ねえ、もう、ほどこいてちょうだいよ」

あけみは懇願した。すると、おまつさんは「さゆりさんは、そんな、わがままは、おっしゃいません。自分で、しでかしたことは、自分で責任を持ちなさい。自分で、ほどこくまで誰も、ほどこいてはあげません」

「そんな殺生な——」

「ユリが承知で縛られたのでしょ。私は買い物に行ってきます」

じらすだけでなく、おまつさんは本当に部屋を出ていった。あけみは、ひとりになると心細くなり、思わず涙が頬を濡らした。しかし、その半面、なにくそと斗志が、わくのを覚えた。

だが、そんな斗志も束の間の斗志だった。だれもない、人の足音もしない。そんな中で、どうにもならない。それじゃ斗志の向けようもなかった。あけみは、さめざめと、



泣いた。

× × ×

あけみの手の縄を、ほどいてくれたのは、やはり、さゆりだった。午後四時すぎ、パーティに出かける前、あけみの部屋に入ってきて、まだ柱にもたれ、もがいている、あけみを見ると

「ユリ。だいぶ骨身に、しみたようネ。きょうは、このくらいで解放してあげるけど、あすからは、そうはいかないわよ」

と、艶然と笑った。

あけみは、その気迫に押され、つい「どうもすみませんお嬢さん」といつてしまった。あやまるものか——と、思っていたが、あとのまつりだった。

「きょうは、夜はゆっくりテレビでも見るのネ。役者は忙しいのよ。いよいよ撮影が始まれば、わたしは毎日、夜二時ぐらいになるのよ。あなたも、それにつれて忙しくなるワ。佐藤監督が千代姫受難を撮影するときに、あなたを先ず使うといっていたから、あと一カ月間しか、間がないワ。だから訓練も突貫工事よ。そのつもりでハラをすえてないと、あなたも、やっていけないワよ。私がテレビ出演で忙しいので、背後姿や、とくにアップで

ないところは、あなたにやってもらうの。それから、これは責めシーンの多い時代ものだから、アップでも、さるぐつわのはめられたシーンは貴女でよかろうと言っていたワ。縛られるのも、その訓練になるのよ。時代劇に出演するとなると、縛られるのは仕方がないことよ。早くなれなさい」

「はい——」

そう返事をして見たものの、あけみは、なんとなく、やりきれない思いだった。

さゆりは、それから予定どおり、パーティに出て行った。

そのあとで、おまつさんと二人だけの食事をした。ひっそりとした家の中は、火の消えたような寂しさが、ただよう。

御飯を、よそおってやりながら、おまつさんは、赤くなったあけみの手首をみて「ユリさん、痛かった？ さきほどは、ごめんなさいネ。本当は、解いてあげたかったのよ。だけど、お嬢さんやクツに嚴重に言われているの。当分くらいでしょうけど、あなたも、お金もうけのためと、割り切ってちょうだい」

と、いう。その顔には下積みの者、苦労を重ねてきた者の暖かさが、にじみ出ていた。

「いいの。男のお客さんのご機嫌をとって、た事にくらべればなんでもないんですから」といって、あけみは明るく笑った。

## ◇歌の練習も◇

翌日、声楽家で有名な門野広人が来た。門野は、さゆりの親戚でもあり、さゆりのファンだった。

門野は、あけみに一曲、歌わせ、いろいろしゃべらせたり、早口言葉を言わせたり、していたが、

「カンは、いいネ。練習すれば、ものになるよ、さゆりちゃん」

と、お嬢さんの方に向いて言った。

「それから、こちらのさゆりさんは毎日一時間ほど、鏡のまえで口の形をみながら、発声を、練習して欲しい。本当のさゆりさんの、鼻にかかった甘え声を真似るとき、あなたの本番の声を出すとき、それを使いわけよう努力して下さいネ。母音の練習はアエイオウを、はっきり、やること。それから子音の練習は、英語の子音並みに口を大きくあけて正しく発声すること。それができると、もっと言葉が、さわやかになるし、誰の声でもマネ



できるようになるでしょう」

と教えた。

それから約一時間、熱心に、真剣に練習が行なわれた。その練習が終わるとテスト。さゆりは、きょうはロープについて何もいわなかった。あけみは幾分、リラックスしていたが、十問あったうち、できたのは三問にすぎず、あとは、みんなダメで「あすまで、もっと、みっちりやんなさい」と叱られ、門野は、さゆりに送られて引きあげていった。ほっとしたのも束の間、約十分後、さゆりは岩村を連れて引きあげてきた。

「十問中、七問がダメ。三問が、よかったので、差し引きロープは六本、使えるわけネ。岩村、お仕置き」

さゆりは冷酷に、つけた。

あっという間もなかった。

あけみは、うむを言わず、うしろ手に縛り上げられてしまった。

大きな鏡の前にイスをすえ、顔がアップでできるようにし、そのイスに嚴重に後ろ手に縛りつける。ロープは六本も、あったので、ゆうゆうと縛り上げられる。手首、足首、それに胴体も、まるで、おもちゃのように括られるのだ。

それが終わると、さゆりは、おまつさんを呼んで二人に言った。

「ロープ一本が一時間。だから六時間たったら全部ホドいてよいわ。わたしは、これからテレビのビデオとりだから、夜の十時は過ぎるでしょう。私の帰る前に寝たら、バツを加えてもいいが——ま、きょうのところは大目に見ます。鏡と睨めっこして上達しなかったら、あすは一日中、縛りあげて天井から、ぶらさげるから、そのつもりで。門野先生のテストは、あすの朝十時の予定ですよ。おまつさん、ユリ、わかった？」

「はい」

と、あけみは、うなずいた。おまつさんも承知した。

× × ×

訓練は、このようにして毎日、くりかえされた。一つの練習が終わると、つぎのが始まった。発声練習は嫌だったが、ダンスや踊り体操は楽しかった。動作を伴うものは、やっている間だけは自由だったが——それも束の間で、すぐ難題を吹っかけられては縛りあげられる。

一週間たつと、縛られていない時間の方が少なくなっていた。夜ねるときまで縛られた

のには閉口したが——それも訓練と言われてみれば、逆らうわけには、いかなかった。だが、そうになると、食事や便所まで、おまつさんの手を、わずらわせねばならなかった。

なぜ、かくも縛られるのか？ 縛らなくても、あけみは十分、代役をこなせたと思う。だが、それを、あえて縛る魂胆は何か。あけみは次第に、そんな風に考え始めていた。縛り手は、さゆり、クツ、岩村の三人である。この中で岩村が一番、きびしかった。クツは上手である。さゆりは優しかった。同じ縛るでも人によって違うことが、あけみには少しずつ、わかってきた。

「ともかく、あの日以来、何かが狂った」

と、そう、あけみは思った。

そして二カ月目、ついに撮影所入りの日が来た。

## ◇そっくりさん登場と

### あけみの初仕事◇

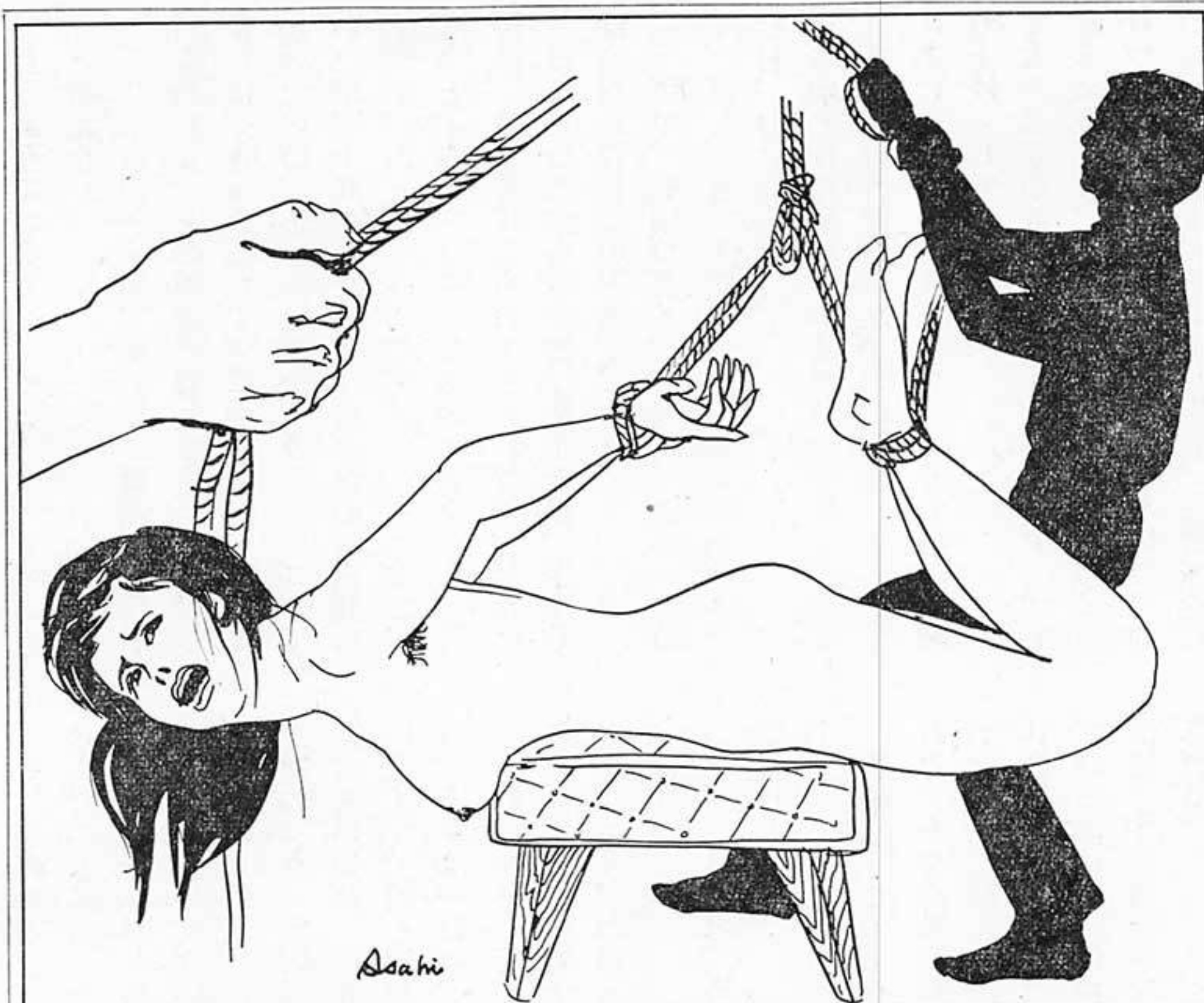
その日、朝から、あけみは準備に、追われた。午前十時、撮影所の佐藤監督室到着というのに、午前六時から起こされた、あけみはおまつさんの命令で、まるでマラソンレース



イメージ  
ギャラリ

『滑車の軌み』

須坂 旭



に出発するときのように準備体操から、させられた。一汗流すと洗面、食事、それから朝風呂を使い、出発前の全身化粧という、念入りのスケジュールである。

髪形も、さゆりらしくカットされていた。従って、さゆりが迎えに来たとき、全く、そっくりの一人の女性がそこに立っていた。

「まったく、よく似てるワネエ。これじゃ誰が見ても、わからないわよ」

と、さゆり自身が感心した。

「私も、そう思いますワ」

という言葉のアクセントも、さゆり調である巻き舌で、音質も似

ていた。

「それじゃあ約束どおり、トランクに入ってもらおうワ。いまから、ざっと一時間後、佐藤監督の部屋で、あけるから、それまでは我慢してちょうだい」

さゆりは、そう命じた。

あけみには到着以来、初めて、ざっと十四日ぶりのトランク入りであった。

足首を固定され、膝を、かかえるようにして胴と両手さらに頭をしめつけられ、口に酸素ボンベを、くわえさせられると、トランクの蓋は錠の音も高く閉められ、中は全くの闇となる。

あけみは、もう観念していた。いや、それより佐藤監督らに会うことの方に興奮していたのかもしれない。同じ闇でも今度の闇は白夜だと思った。白夜行路！ なんとというロマンな人生だろう……と考えもした。

このトランクを岩村と、おまつさんが抱えクライスラーに運んで、そのトランクに入れそれから岩村は運転席に、さゆりは客席に納まった。まさに女王さまの出発である。

車は、ゆったりと進行、撮影所の正門から入り、佐藤監督らのいる第一スタジオの近くの第三監督室付近の広場についた。それから



岩村は車のトランクをあけ、かけつけてきた男の事務員に、あけみの入ったトランクを佐藤監督室に運ぶように言った。

「こんどの新企画、千代姫受難の衣裳類なんだ。重いぞ。ワレモノもあるので、落とすんじゃないぞ」

「ハイ」という雑役夫たちの元気よい返事がかえってきた。さゆりと岩村は、それを聞きつつ、皆のあとから監督室に入った。佐藤監督は目を、くるくる回して二人を出迎えた。

「いらっしやい、さゆりさん。岩村君、これは本物だろ？」

「もちろんです。ニセモノは、まだ例の中に入っています」

「わかったよ。どれ、さっそくに、そのニセモノを拝見しようか」

と監督は、難役夫たちが床の上に置いて出ていった、あけみ入りのトランクに近づき、さゆりからキーを受けとると、おもむろに蓋をあけた。

パッとトランクの中に、まぶしい光がさしあけみは夜の人から昼の人になった。あとでトランク詰めになれてから、これじゃまるで天の岩戸の神話そっくりネと笑った、あけみである。だが、このときは、そんな余裕はな

く、体中をかたくしていた。

「またまた嚴重に固定したものだネ。こりゃたまらんだらう。早く出さねば……」

そう言いつつ、佐藤監督は、さゆりに手伝わして、あけみを引き出した。

あけみは、よろよろしながら立ち上がるとさゆりそっくりの動作で、ちょっとハニカンで見せた。それから教わっていたように、「大島さゆりですの。こんどは私のために骨折ってもらって有難うございました。これからも、どうぞよろしく、お願いします」

と、さゆりそっくりのイントネーションであいさつした。

「これは素晴らしい。全くそっくりだな。これなら社長も驚くぞ」

「え、社長に会うのですか？」

「そうさ。最初に君が、ついで本物の、さゆり君が、そして、あとで二人そろって、というわけさ。そのあとで千代姫受難の制作スタッフを紹介しよう。この人たちだけには二人さゆりがわかってもらいたいんだが、この人たち以外の人に会うのは禁物だ。ま、一応そういうルールだから。じゃあ社長のところに案内しよう。まず、あけみの、さゆり君から……」

と佐藤監督は、さゆりと岩村を、その場に

残して出ていった。

社長室は別棟になっていた。そこまで約二百メートル、散歩道を歩いていると、見学の女学生たちと、すれちがったが

「あ！ 大島さゆりさん。さゆりさんだ」

という声が耳に、とびこんだ。あけみは、それらに、にこやかに会釈を返ししながら、まるで自分がスターになったような、感じだった。

わずか二カ月間足らずの突貫訓練。ちょっと失敗すれば縛られるという、全くきびしいものであったが、こうした動作が無意識に出るのも、そのためと、驚きもし、あきれもする、あけみだった。

社長は西田幸平という、ずんぐりした小柄な男だった。さゆりの父山村元右衛門には、ずいぶん可愛いがられたという、たたきあげの経営者だった。商売上手というより、持ちまえのファイトで、現在の西映を、こしらえた努力者でもあった。

「お嬢さん。いつも、美しい。ご機嫌は、いかがですか」

と、というのが社長の口ぐせだった。あけみは、それを、よく聞かされていたので、すぐ答が出た。



「ぼちぼちですわ、社長さん。一生懸命、撮影に努力してますのよ」

「それは有難い。こんどは時代もので、佐藤が世話をかけると言うが、よろしくやって下さい」

「はい、せい一杯つとめさしてもらいます」

そういう会話で社長とのあいさつは終わった。佐藤監督の部室に引きあげてくると、こんどは岩村と本物のさゆりが会いに行った。

そのやりとりの内容は、わからなかったが、岩村と本物をみて、初めて最初のさゆりが、にせ物とわかったらしく、大笑いだったというのを、後日、あけみは、さゆりから聞かされた。あけみたちが監督室で待っていると、ほどなく岩村と、さゆりが社長をつれて帰ってきた。

「いやー驚きました、新さゆりさん！」

と言って、西田社長は、あけみの手を固くにぎった。そして二人、並べてみて、つくづく感心したという感じ入り方だった。歌手に双生児の姉妹がいて人気者となっているが、それくらい似ていたのだ。それで座は急に、うちとけたものになり、あけみの代役は決定的なものとなってしまった。

千代姫受難は、文字どおり千代姫の受難劇

で、戦国悲話（エレジー）ものである。モデルは淀君といわれているが、脚色したのはエロティック・ユーモアで知られる花木敏郎なので、すっかり史実とも異なり、ただ高名な家に生まれたばかり戦国女性が落城の悲運にあい、荒くれ男性の中を転々としながら、お家再興の望みも空しく犠牲になって、やがては責め殺されるという筋であった。

だから、実際のさゆりの出番はブライトサイドの五分の一たらず、あとは皆、あけみさゆりでよからうという事になったという。だから、大島さゆり主演というより実質は諸岡あけみの、さゆり主演といった方が、よい。それというのも、カメラテストの結果、どうしても諸岡さゆりの方が色っぽく、責めのシーンに向いているということから、そうなったのと、いま一つは、専門家がみても、わからないほどの、そっくりぶりだったからである。

しかも、監督らにとっては、大島さゆりはいわば恩師の娘である。だから残酷シーンはとる方でも気がひける。ところが諸岡さゆりは、キャバレーから引っこぬいた馬の骨。いっこうに遠慮はない——それで作り易いという点も大きかった。

このため、撮影にも、さっそく翌日からとりかかることとなり、諸岡さゆりは、大島さゆりとの約束どおり、トランクづめ撮影所がよいをすることになった。だが、大島さゆりテレビ出演などで多忙なため、いっしょの撮影ということは、まずなく、朝早めにとった、夜おそくとったりだ。しかし、諸岡さゆりの方は、それ専門だからシーンが決まれば演技も自由に、いつでも撮影できるという利点があった。

こんなわけで波乱の多い諸岡あけみの新生活がスタートしたのである。

## ◆責めモデルのあけみ◆

社長が引き上げると佐藤監督は、さっそく製作スタッフを紹介した。助監督の潮六平と通称六さん。スクリプターのタヌキこと山田多津子。カメラ主任の林田輝夫。同助手の今村勲、池田房夫。共演者の東竜之介、山神信太郎、花房ユリ、楠千代など、とても一度では覚え切れない数である。依田よし子は、あけみの腰元で千代姫同様の責められ役となった。こうしたスタッフ紹介のあと、道具方小道具方、衣裳方、メーカーシップ係などにも



紹介され、本物のさゆりと共同で使える個室あけみには岩村のような付け人がいないので撮影所での付け人に大野木良子になった。

こうした一切の紹介が終わると脚本が渡され、助監督が一応のあらすじを話し、細かに二人さゆりの分担の説明があった。

撮影はコマ切れで行なわれることを、あけみは、このとき始めて知った。

たとえば、あすから撮影に入る落城シーンでは、落城を知らせる城主、今村勲の顔がみえるシーンと、さゆりのアップ。これがワンカット。右往左往する腰元たちがワンカットというぐあいである。したがって、脈絡をとって演技するわけでなく、ワンカット、ワンカットを撮影し、あとでつなぐので、実際に頭の中にあるのはスリリプターや助監督ぐらゐのもので、演技者は、ついて行けないこともある。敵兵につかまり、大将の前に、引き出されるシーンでも、敵兵に見つかったときの恐怖シーンをワンカット。そのあとは後ろ手にしばられ、大将の前に押さえつけられたシーンという、ぐあいだった。

だから撮影になれない、あけみにとっては全くチンプンカンプン。悲しみも、腹立ちも表現のしようがなく、監督、助監督の言われ

るままということになる。

もっとも、こうした、しくみがわかったのも、ずっとあとのことで、あけみは、ただ無我夢中で大役に、ぶち当たることになった。

「映画というものは、お客さんに見せ、お客さんを笑わせ、泣かせるもんなんだ。本人がフニャフニャで何ができるか」と

というのが、佐藤監督の持論だった。だから撮影第一目に、早くもあけみは目を見はらされた。それは千代姫の腰元、楓の責めシーンだった。

楓には依田よし子が紛っていた。いま売り出し中というこの女は、プロポーションがよいのと、平気で肌を露出させるということとで知られていた。腰巻、長襦袢姿に剥かれた楓は、嚴重に高手小手にされ、口にも、つめ物をされたあと、舞台に引き出され、雑兵らの手で足蹴にされ、舞台中を転がされるという責めを受けたのだが、情感が出ないというので、本当に割れ竹で打たせたり、バケツで水をぶっかけたりしたので、楓は、みるも無残ナワをとかれても立ち上がることもできず、寒さにふるえていた。それを容赦なく、前手しぼりにして天井から吊るし、長襦袢を破り腰巻を剥いで露出した乳房をカメラが追う。

思わず、うつむきかけるのを、カミを握って仰向かせ、苦しそうなポーズにすると、まったく、楓の意に逆らって、演技なのかどうか区別がつかぬほどの激しさだった。

あけみは、これだけで、すっかり驚いてしまった。だが、佐藤監督らは、

「こんなことで驚いちゃ映画にならないよ」と笑っていた。

それだけに身の、ひきしまるのを覚えた。

あけみの出番は二日後からだった。

この日、撮影所入りしたのは午前十時。むつかしい表情のシーンは後回しにし、地とれるシーンからという佐藤監督の主張で、敵将東竜之介の前に引き出される場面から撮影に入った。この場面は、後ろ手にしばられながらも昂然と見上げる、さゆりを敵兵の山神信太郎が髪を持って地面に押しつけるシーンだった。

さっそく、縄を打たれた、あけみは東竜之介の前にすえられ、その髪を山神が、つかんだ。なれない、あけみのため、最初一、二、三の号令を小声でかけて行なわれ、あけみは米つきばったのように頭を下げさせられた。呼吸があうまで、五、六回、やらされ、それができると、いよいよ本番前の打ち合わせの



予定だったのだが、佐藤監督は、呼吸が合わないからダメといって、十回も二十回も練習させた。それだけで、あけみはグロッキーになってしまった。

最初、道具方が、ゆるく縛ったせいもあって、縄がとけかけたため、監督自身が力いっぱい縛り直したので、十回もくりかえすころには手首は、しびれてしまっていた。汗が流れ、目がくらみ、うまく呼吸が、あわないと髪が、ひきずられ、思わず「うっ」という呻きが出るほどの苦痛に襲われた。

しかも、おさえつけられるときには抵抗をし、相手の手を振りはらうようにして上向けといわれているので、そのためには体中に力を入れねばならなかった。そうすると、急造の土間に坐った足に砂が、めりこみ、坐りなれない、あけみは、たちまち足が、しびれてしまった。

小一時間も米つきばったをさせられた挙句に、佐藤監督は、そんなことじゃダメだ、当分ひとりで練習するように。と命じ、東や山神は、そのシーンをやめ、別のシーンの撮影にかかった。そのため、そのそばで出番を待っていた腰元姿の花房ユリに髪をつかまれ、それから、さらに一時間も米つきバツタをさ

せられたのだった。

その苦しさはともかく、しまいには目先がくらんで、ふらふらになり、佐藤監督から呼ばれ、立ち上がろうとしても、そのまま、よろけて、こけてしまった。

それをみて、佐藤監督は、いまがチャンスと雑兵姿の男たちに手どり足どりさせ、よろめく、あけみを右から左にひき立て、そのあとで大将、東竜之介の前に引きすえた。侍大将の山神が頭を、こづく。

あけみは、もうこれは演技ではないと思っていた。佐藤監督に一言、文句を言おうと顔を上げるのだが、その出鼻を、こづき落とされる。半分、泣きながら必死になり、全力をひきだして、ぶつかったが、後ろ手に縛られた女の力では、大の男に抗しがたかった。万策つきて泣き出したところで、カット。

ところが、その泣くシーンが、いいというので、六平がカメラマンを叱りつけて、あけみの顔を雑兵二人がかりでカメラの方に向けまた撮影開始。あけみは、その残酷さに根尽きはてた感じだった。

その日の撮影は、それで終わったが、あけみは大きなショックで、縄から解放されても泣きやまなかった。

だが、それを見ても誰も慰めてくれず、ただ付け人に指定された良子がオロオロしながら、しきりに世話を、やいてくれるのが気のどくなくらいだった。帰りに小道具の小母さんが「映画というのは体当たりだからね、見栄も外聞もなくなるわよ。そうならなくっちゃ、とれないものネ。まがなばって下さい」というのが、妙に実感を持って、あけみには受けとめられた。

あけみは、そのあと夕方近くまで休息。その日は迎えに来た本物のさゆりの前でトランクづめにされ、家に運ばれた。そのトランクの中が楽園のように感ぜられたのだから不思議なものである。

## ◇残酷・撮影記◇

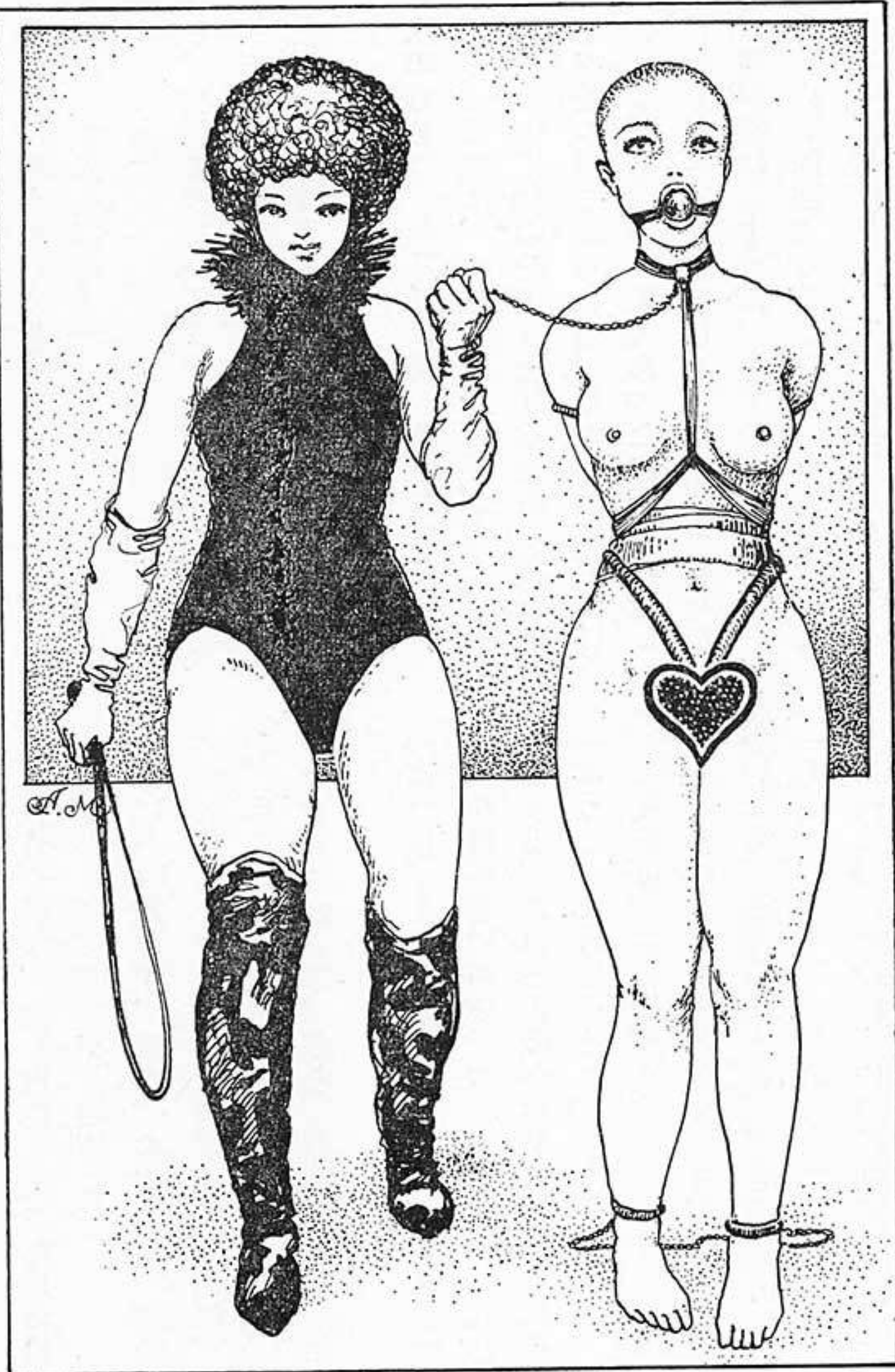
翌日は吊り責めのシーンである。大将東竜之介の尋問に素直に答えなかったため、責められるシーンである。最初は、いのしし縛りだった。手と足を、いっしょに縛られ、天井から降りてきた滑車で吊りあげられた。この責めには太目の縄が使われたため、ぎゅっとしまる苦しみは少なかったが、手と足に全体重がかかるのでやはり並の苦しみではない。



吊りあげられると体の安定感がなくなり、あけみの体は、ゆっくり左右に回った。それをとめるため山神が、あけみの髪をつかんで引きすえた。頭が下がり苦しいのに、髪をつかまれると首が伸び、ねじきれるのではないかというほどのショックがあった。

「がうッ！」

思わず、あけみは、うめいた。しかし撮影は容赦なく進む。山神は髪を強くふり、別の雑兵が竹で尻をつつく。叩く者もいる。その刺戟が痛味を感じさせないくらい、あけみの痛みは手足と首に集中していた。



僕のイメージ画集

『気の合う二人』

室井 亜砂路

その体を、はうようにカメラが、なめる。ぐいと山神が髪の毛を、ひっぱる。

「あうッ」

と、のたうち、顔を、しかめる。それをアップで追う。ざっと一時間半余り吊られて、降ろされたときは、足も立たなかった。

次の撮影までの間、あけみは良子の肩に、つかまってトイレに行った。

「かわいいそうに、お姉さま」

と、良子は目を、しょぼつかせた。聞いてみると高校を出て、この撮影所の雑役係として採用されたばかりだった。

「いいのよ、心配しなくても。これが仕事なんですもの」

そう言いながら、あけみは手足に残るナワの跡を、さすり、寂びしそうに言った。

「だって、あんまりですわ。まるで見せ物みたい」

「そう。見せ物なのよ。さらしものよネ。映画って、そんなものでしょ」

「そりゃそうですけど——」

良子は、さゆりと、あけみの差が、ひどすぎると言いたかったのだが、さすがに、そうは言えなかった。

「私は、うれしいのよ。良子ちゃんが、そう



いってくれるだけで。私は代役でしょ。それを承知でスカウトされてきたのだから、いまの私には、耐えぬいて生きていくことだけ。それだけが人生なのよ」

「……………」

「さ、次がまっているワ。水を一杯のましてね。ありがとう——」

と、あけみは良子に励まされ、気を振るいたたせた。

次の責めは、後ろ手に縛り直されての吊りである。これは、ナワだけでは手がもたないので、背中に体中を引き上げるための背負いのワクをつけさせられる。したがって実際はいのしし吊りよりは楽であったが、いのしし吊りとちがって、きびしく縛り上げられるため、肩が抜けるように、うずいた。その上、この責めは前回より苦しいという表情を、とらされる必要があるので、佐藤監督は、アップの表情に、きびしく注文をつけた。

二度、三度と竹で、尻をつつかれながら、そのたびに苦しい表情を作るのだが、実感がない表情というのは、どこか力がない。カメラが、あけみの体を一応、うつし終わると、あけみは両足首もそろえて、括られてしまった。

「そんな顔つきじゃあ困るじゃないか！ できなれば非常手段だ」

というや否や、全く自由を失った足の裏を三人がかりで、くすぐり始めた。

あけみは思わず、身を、ゆすった。頭のとっぺんまで、くすぐったさが、つきあげ、顔が、ほころび、全身で、もがいた。だが、そのくすぐったさは、忽ち、苦痛に変わったのだ。

「ようし、その調子！ カメラ、カメラ」

と佐藤監督は叫ぶ。カメラが回りはじめ、苦悶する、あけみの顔が容赦なく撮られる。

「ようし、ようし。それ、もう一息！」

と叱咤は、さらに続く。

あけみは全身で、もがく。もがいても、もがいても、逃げることは、できない。

「あーっ、あーっ。やめてえ」

と叫んでいたのが、いつの間にか、

「あーっ！ あーっ！ 殺してえ……」

に変わり、悲鳴も、とぎれがちとなった。

あけみは、そのうち、気が遠くなるような感じがした。そのとき、やっと天井から降ろされたのだが、あけみは負い子をとられたのにも気付かなかった。

いつの間にか、さゆりが来ていた。

「いい恰好ネ。千代姫さま」

土間には降ろされたけれど、まだ手足の縄は、ほどかれないうまま、放置されていた、あけみは、その声で、ハッとわれにかえった。さゆりの顔をみて思わず身を、すくめる。

「お嬢さん」

「わたしが少し、くすぐってあげようか」

さゆりは、そういつて、何となくバカにしたような嘲笑を浮かべ、近づいてきた。あけみは思わず、縛られたままの体を、よじってあとずさりした。

「こわがらなくても、いいのよ、ユリ。きょうは、もう終わりよ。いまから帰るのよ。だけれど、きょうは、そのままトランクに入ってもらっても、いいわネ」

と笑う。さゆりが、めくばせすると、小道具方がきて、あけみは、本当にそのままの姿でトランクづめにされてしまった。縛られているので、どうすることもできなかった。また、暴れる気力も残っていなかった。三人ががりで思うように小さなハコに押し込められる。——ただ、むやみと口惜しく、トランクの中で、あけみは声をあげて泣いた。



## ◇オモチャにされる

## あけみ◇

あけみが、そのトランクからひき出されたのは、それから約二時間後だった。

「おまつ。ユリの、御帰還だよ。おまえが見たいというから、舞台衣裳のままよ」

と、さゆりの声が耳に、とび込んだ。

「へえ。これが千代姫ですか、お嬢さん」

「そうよ。こうして、なぶられるの。まだまだ、表情が固いそうよ。佐藤監督が、もっとリラックスするよう、おまつに仕込ませるといっていたワ」

「じゃ、お嬢さん。わたしが、あけみを、かわいがってもいいのですか」

「煮ても焼いても、いいのよ。手も足も、しばったままでしょ。ほどこなければいいの。勝手にしてちょうだい。私もかせいするワ。おまつは、こんな若いこを責めるのが、好きなんだろう？」

「ありがとうございます——」

あけみは、そのやりとりを聞いて、たいへんなことになったと思った。

「聞いた？」

さゆりは、あけみの肩をつかんで、顔を上向けながら、いった。

「ハイ」

「覚悟することネ。男とちがって、女は女同志よ。いじめ方も、ちがうワ」

そういつて、かわいい声が、より一そう、あざやかに、冷酷に輝いた。

ずっと後になって、あけみが聞いたところによると、さゆりは、女性には珍しいサジストで、高校時代「S」で声名をはせていたという。だから一度、ぜひ美少女を飼育したいと考えていたところ、あけみの出現で、その念願がかなったというわけであつたらしい。

さゆりの目はキラキラ輝いていた。あけみは、ただもう、ぞっと背筋に膚寒いものが走るのを覚えて慄えるだけだった。

× × ×

なにしろ二人がかりだから抵抗しようにもどうにもならない。しかもこの日、あけみは午前と午後と二回も吊り責めを受けていた。だから、一たん手首をほどこかれても、抵抗するだけの余力は残っていなかった。だから二人が新たな細引きで、がっちり、ていねいに手首、足首を縛り直すときも、あけみは、いっさい抵抗をしなかった。

千代姫の舞台衣裳だから、腰巻、長襦袢姿で派手な色模様の着物を着せられていた。大柄なボタンをあしらったこの着物は、いかにも大名の娘らしい姿だった。それだけに手首足首を背中に折り曲げられて縛り合わされると、文字どおりの落花狼籍となる。

「ふ、ふ、ふ、よく似合うワ。自分でといてごらん。とけないの？ だらしないワネ」  
 そういつつ、さゆりは、あけみを向仰けたため、手首足首がひきつり、体中にズキンと痛みがはしった。自分でとけといわれてもとける道理はなかった。

「かんにん、お嬢さん。かんにんして……」

と訴えるのが、せいじっぱいである。

「うるさいワネ。そんなに苦しかったら、私に上手にキスしたら許してあげるワ」

と、さゆりはいう。そうして、あけみの唇の前に、自分の唇をつきだす。だが距離はわずかに保たれ、自由のきかないあけみは口をあけ、必死になってもキスはできなかった。

「おや、したくないの？ じゃ、私の下着とキスさせてあげようね」

そういいざま、さゆりが手で合図をした。するとおまつさんがいきなり、あけみの口にさゆりの薄いパンティをつめこんだ。あつと



いう間もない手ぎわよさだった。その上から赤いシゴキを口にわり込ませて二まき三まき最後は広げて鼻の上からかけると、力いっぱい締めあげた。巧みなサルグツワだ。

「グーッ! ム、ム、ム」

と、あけみは何かいおうとしたが、言葉にならず、のけぞった。

「あら、何か言いたいのだってよ、おまつ。」

言いやすいように、腋の下をくすぐってあげるといいワ。私も、くすぐります」

命によっておまつさんが、あけみの左半分を、くすぐりはじめた。さゆりが右半分を受けもつ。忽ち、あけみの体は、ピーンとのびきった。のびきったといっても手足は折り曲げられ、自由になるところは一つも、なかった。体中の筋肉が硬直したといった方が適切な表現かもしれない。

「ウワ、ウワ」と、わからない言葉をあげ、顔を力一ぱい左右にふる。いかに強くふっても、くすぐったさから逃げる方法はない。まして二十一歳、どこをさわられても、くすぐったい年頃である。二人の女は、それをよいことに、手を腋の下にさし込み、じわじわとくすぐる。男がカッと燃えて、くすぐるのではない。また責め舞台の責めでもない。まぎ

れもない陰湿な、くすぐり責めなのだ。「ふふ、ずいぶん楽しそうネ。余り一度にやると面白くないわ。一息いれましょう」

そういつて、さゆりは、おまつさんの手をやめさせ、舞台装置を作るのだと手伝わせてあけみの寝台を部屋の中ほどにひき出し、二人がかりでその寝台の中央に、あけみを移した。寝台は、ゆったりねられるようにと、ダブルでとってあった。小柄な、あけみの体はその中央に沈む。

「疲れた? もう、といてあげようネ」

さゆりは、あけみの髪をなでつけながら、優しく言った。あけみは素直に、うなづく。その頬は紅潮し、膚には汗がにじんでいた。

「じゃあ、といてあげて」

と、さゆりは、おまつさんに言う。

「はいはい、承知しました」

と、おまつさんが、ほどこ始めたのは、なんと、あけみの着物のオビだった。

「やめて……」と、思わず、あけみは叫ぶ。

だが、声にはならない。抵抗してもムダと知っていながら、思わず、からだをゆする。

「あら、まあ、うれしいの? このこ、スケベエよ」

と、さゆりは、わざと、からかう。顔を細

い手で押えつけ、ぐっと、くちを近づけ、舌で、あけみのひたいをなめたり、目をとじたり開いたりさせながら、かたときも、じっとせず、どこかに軽いタッチで刺戟を与える。

あけみが全身で抵抗しているのを、楽しむようなそぶりだった。あけみの顔がこうしてさゆりになぶられているうちに、オビは一本一本抜きとられてゆき、あけみの体は右に左にゆさぶられ、しだいに着物を剥がれ、ついには胸が、はだけられた。

「うわあ、きれい!」

おまつさんは若い娘のような声をあげた。

「ほんと、きれいなね」

と、思わず顔をなぶる手を放し、さゆりもあけみの豊かなバストに見ほれた。乳房は、こんもりふくらみ、さゆり以上に色白の膚は再三、加えられた刺戟で、さくら色に紅潮して輝いていた。二人が一瞬、いきをのんだのもむりはなかった。

それから二人は、餓えたケダモノのように襲いかかった。

あけみは、さゆりが右、おまつさんが左の乳房に唇を寄せてきたのを知った。乳首がかるくかまれて、乳頭に舌のさきが、ゆっくりと這い回る。その鋭い刺戟。



あけみはホステスだったので、これまで、かなりの性的遍歴は経ていた。男性の経験も女性の経験もないことはなかった。だが、それは楽しさというには程遠かった。それとい

うのも商売に徹していたからかもしれない。だが、こうして極端な姿勢、極端な刺戟をしいられたのは始めてである。快感とは程遠い世界で、強烈な酒をあびるほどのまされた

苦い経験が思い出され、あけみは、これが現実の世界とは信ぜられなかったが、全身であえぎながら、夏病みのような嵐にしたいに巻き込まれて行くのを、防ぎようもなかった。

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 四〇〇円(送32円) |
| 三月分 | 3冊  | 一二〇〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二四〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四八〇〇円(送共)  |

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

× × ×

責めは、こうして深夜にまで及んだ。女同士のねばっこさ、いやらしさ、場所は居間からフロ場、便所へと及び、一たん裸にむかれたあけみは二度と着物を着せられることはなかった。羞恥心などというものは、とうに消えていた。体力の限界もとおりこしていた。完全な生きたオモチャになりさがっていた

だから、さゆりが乳房をすえといえ、いわれるままに、縛られたからだをくねらせて奉仕した。おまつさんに対しても同じことである。そしてそのあげく、三人仲よく並んでドロのようにねむった。三人というより三匹といった方がよい。そんなていたらくだった。

翌朝、さゆりやおまつさんが元気に目をさましたとき、あけみはまだぐっすり、ねむりこけていた。二人とちがい、手も足もいぜん縛られたままでありながら、それだけ熟睡できる。あけみはそういった逞しさをもっていた。それが何よりの救いだったのでもある。

——(つづく)——





カッタ・神戸狂四郎

「エキセントリック・コント集」

## 淋しい情欲

陶山祝生

## 孤独の営み

臆病な加害者の手には一枚の写真があるばかりだ。それは彼が当惑に顔を赧らめ乍ら懇願して、漸く手に入れた唯一つの彼女の面影であった。

穏やかな遠浅の海を背景に、彼女は波打際に佇み、口元に、一瞬のうちに消え去りそうな淡い微笑を宿している。

焦点の定まらない、その目は遙か彼方に向けてられているようでもあり、レンズを透して直かに彼に語りかけているようでもある。

風が、さり気なく彼女の全身を愛撫しているらしく、びんの巻毛が一条、頬に流れ、純白のブラウスの乳房の下あたりに小さな斑をつくっている。唇の潤いは、この僭越な愛撫が彼女の官能を操っている所為だろうか。

彼は厚手の半光沢の印画紙に焼きつけられた少女の姿を、くまなく指で、なぞって見た

まるで指先に靈感が生じ、ある感覚が全身を貫ぬいて伝播するのを、期待でもするかのように。

彼は少年らしい感傷になど、酔ってはいなかった。今や、自分が実行に移し得なかったあの計画を丹念に検討し、自分の弱さを羞じるにまで至っていたのだ。

その苦しさを嘸み下すと、今度は一つの小さな冒瀆の愉しみが湧き上がって来た。

今度こそ出来る、と彼は思った。これが出来なかったら、俺は男じゃない……。

机のへりの辺りに両手で据えて、もう一度写真を見た。

少女は、先刻と変わらぬ微笑を洩らしていた——。美しいものを瀆すこと、それが快樂

なんだ。

慥かに、その、そこはかとなない微笑は美しかった。静まりかえった海も、風のそよぎも、彼女の美のために統合され、一つの図柄を完成するために、足なみを揃えているように思われた。

ズボンのボタンを外す手が、小刻みに慄えた。かすかに色づいた若い仏塔は、この英雄的な行為の誇らしさを予知するかのように、遅く吃立していた。

彼は、ゆっくりと指を動かし始めた。熱い潮が次第に容量を増し、胸の中に溢れた。今こそ、という思いが、彼の心を感動に慄わせた。

そうして、彼は少女の名を呼んだ。幾度も幾度も繰り返し、呼んだ。



——温かい白濁の飛沫が少女の姿を覆っていた。彼は欲喜の眼差しで、それを眺めた。

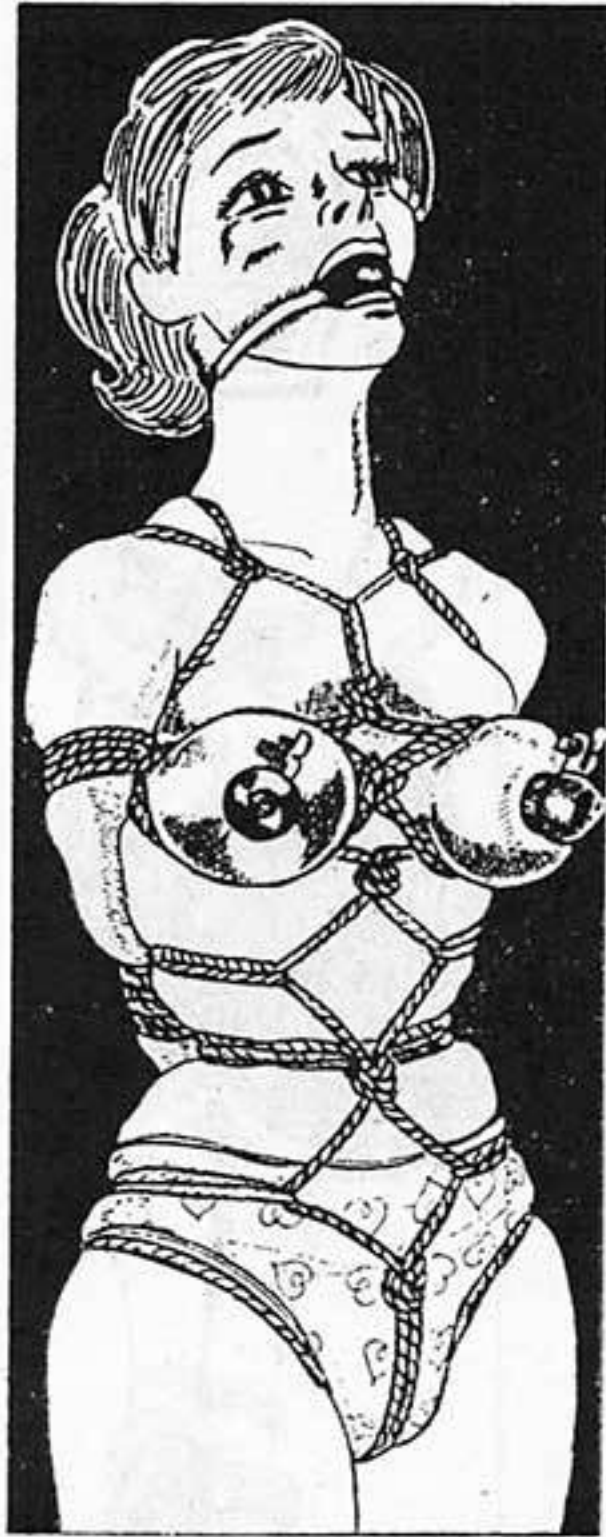
### 小さなサディスト

土曜の午後のラッシュ時——。

ホームは人、人、人で、ごったがえしている。電車を待つあいだ、彼はベンチで適当な犠牲者を物色していた。

春の、しのび寄りを告げる陽ざしを浴びて若い女たちの健やかな肢体は、軽くなった衣服の下で、既に弾んでいるように見える。

明るい花柄のスーツを、纏った少女。思いきった超ミニから覗いている、すらりとした脚。下着の線が透けて見える程、軀に張りついたストラップス。どれも、まばゆい許りだ。満足そうに眼を細め乍ら、彼は立ち上がった。目にとまったのは、若草色のスカートの



名古屋S生・画

色白の少女だ。

豊かな髪が肩まで垂れて、やわらかく波うっている。

ちらりと、盗み見た横顔も、胸のふくらみも、今、背後から仔細に観察する腰から脚にかけての曲線も、充分に彼の条件にかなっているように思われた。

——よし、あれなら、良い。彼は一人、頷いた。

少女の年齢は二十歳くらいだろうか。彼より二つ三つ年上な事はたしかだ。

——あいつのお尻の弾力を試してやろう、俺の爪を阻む程、強靱なら、きつと、鞭にも耐えられるだろう。

十七歳の彼は最年少のサディストたる事を自負している。然し、今のところ、彼は空想の中でのみ歯牙を振るう「卵」であった。

それにしても、ニキビ面の童顔の下に、こんな夢の潜んでひそいている事を、誰が見てとるだろうか。

電車が来た。

扉が開く。大勢の乗

客が、どっと吐き出される。彼は少女を目指して突っ込んだ。

ひどい混み様だ！ 小さな彼は、もみくちゃにされて反対側の扉の脇へ押し込まれた。首を巡らせる……、が、少女の姿は見えない。彼の周囲は皆、彼より背の高い男性である。

「畜生！」

折角の獲物を逃がした少年は、唇を尖らせた。電車が揺れる度にギューギュー圧され、まるで彼が犠牲者である。

前に立っている労務者風の男から、臭い息を吐きかけられて、彼の不平顔はしかめっ面に変わった。

次の駅で扉があいた時、彼は中途半端な態勢をなおして、扉の脇へ、ぴたりと軀を寄せた。

女学生が、四、五人、乗った。後から乗り込んだ連中に押されて、うち一人が後向きに彼の方へ身を、すり寄せて来た。

紺の制服をつけた、中学生くらいにしか見えない少女である。顔は見なかったが、後姿を見る限り、魅力ありとは、お世辞にも言い難い。背は少年よりも、もっと低い——そのことが彼を安心させた。





JOE・画

「まあ、これだが、マン、するか……」

気付かれぬように気を配りながら、彼は手

を傾合いの位置へ持って行って待ち構えた。

少年の方で力をこめずとも電車の震動に従って、彼女の尻は確実に掌へ押しつけられる。

今度は少し勇気を出して、尻が近づいた瞬間に、その肉づきの良い丸味のある所を、そっと掴んでみた。少女は相変わらず無頓着な様子で、電車の傾くままに尻を、ぶつけて来る。

「やっぱり、まだ子供なんだな」

と彼は思った。

動かす指先に、少しずつ力を入れてゆく。

矢張り反応がない。斯うなると味も素っ気もない。

そこで、彼は更に奥へ指をすべらせて見ようと思いたった。

「声を立てるだろうか？」

から――

ぴったり尻に添えていた掌を、彼は度胸を

据えて、そろそろと這わせ始めた。

ひだの大きな、厚手の布地を、たくし込んで、指は分け入った。

一瞬、少女の肩がピクッと動いたのに驚かされたが、後には何の抵抗もなく、指は悠々目的の場所に達した。

少女の軀の揺れが心なしか、ぎこちなく感じられたが、それでも彼女は声をたてない。

「行為を容認したんだ！」

彼は勝ち誇った心の中で、斯う叫んだ。

指は次第に大胆さを加え、少女のおぞましい窪みを、良いように撫でまわした。

「終点で降りたら、話しかけてみよう。斯ういう従順な女なら、扱い易い」

少年は放縦な空想に涵<sup>ひた</sup>り乍ら、少女の今の表情――恐らくは、途惑いと羞恥のために紅

潮している筈の表情を愉しく想像した。

終点に着いた。

扉が開くか開かないかに、彼は少女の顔のぞき込んだ。少女が心もち顔を上げて振り向いたのが、殆ど同時だった。

おかつぱ頭の切り揃えた前髪の下で、まるい惻巧そうな目が笑っていた。そうして少年と目が合うと彼女は、軽く睨む真似をした。

口もとは、優越の微笑にほころび、白い八重歯が、のぞいていた。

驚いた少年は顔をあからめ、開いた扉から逃げるように、すべり出た。

## 落 紅

駅前バンの小さな店で可愛い縁どりの付いた下穿タイを買った。

まるで娘の買いものでもしているような顔をして、私はその品物を受け取った。

そこからT川の川渕までは、十五分を要さない。

この駅に降りたとき、いや、あてもなしに電車に飛び乗ったときから、私の足は、あそこへ向いていたのだ。

あの日を想い出させる雨催もよいの空だった。――下腹の温かい感じは次第に深く浸しみ渡っ





保曾剣次・画

てゆく。

一足毎に呼び醒まされる、ひりつくようなあの日への想いが不知不識のうちに、私の足を急がせていた。

霧雨になった。川渕には誰もいない。

流れに沿って上ってゆくと、道はゆるやかな勾配を成して、左右を芝草に覆われた土手へと続いている。

更に奥へ進むにつれて、小径の両端の草は丈を増し、まばらな木立が入り混じって、川からの見透しを、ほど良く遮断する。

しっとりと湿った下草を踏みしめ乍ら暫く進んで、私は立ち止まった。

白いモルタル造りの小さな、たたずまい。なつかしさが、堰をきったように私の胸に溢れた。

私は近寄り、中へ這入った。

水道の蛇口が、ひねられた俣で、水が勢い

よく、ほとばしっていた。……それは、小綺麗な公衆用の手洗いであった。

私は洗面台の辺りを見廻してみた。ひょっとして、あの時、置き忘れた私の手巾が、その俣、残っているのではないかと思われた。

それほど、時は夢のように記憶の底へ融け去り、その永い空白を、それと感じさせない静謐を湛えていた。

——そんな筈はないわ。あれから十八年になるのだもの——。

十八年……。そうだ。そうして私は今朝、三十六才の誕生日を迎えたのだ。

私は扉の一つを開けて中を、のぞいた。

建物の外観は同じに見えたが、中はすっかり改築されて、清潔な水洗式になっていた。

錠を下ろし、バッグを前にある台の上へ置いた。それから、汚れた下穿を下ろそうとスカートを、たくし上げた。

——いや！ いや！ 今日だけは、どうしても駄目なの。だって私、今は……。

——知っているよ、そのことは。だけど、そういう日の君が見たいんだ。

——いやよ、やめて！

彼は強い腕を伸ばして、私の軀を不器用にまさぐった。私は懸命に彼を押しつけ、扉の外へ飛び出した。

彼は、直ぐには追って来なかった。

私は逃げるのを、ためらい、入口の手洗い場のところで立ち尽くした。

腿が汚れていた。水で洗っては丹念に、手巾で何度も、きつく擦った。

暫くして彼は出て来るとポツリと言った。

——帰ろう……。

秘かに、それを希いながら、到々、私は彼のものにはならなかった。その日以来、私は只一度の抱擁、ひとにかくれての、やさしい口づけさえも、彼から受けていない。

私は汚れた下着を容器へ捨て、上質の化粧紙で、そこを、そっと拭いた。

見ると紙は丁度、花卉状を成して、鮮かな赤い花蕊を有った花のように見えた。

花はクルクル廻り乍ら水の上へ落ち、一面に薄紅い色を滲ませた。

——ねえ、宜いだろう？ ほんのちょっと、見るだけだよ。





第五十七回

## オンザロック

およそ世の中に、こんなに惨めな出会いがあるだろうか。姉は妹を愛しみ、妹は姉を慕って、共に一刻も早く再会を希っていた。その時が、ようやく与えられたというのに、事もあるうに、赤裸の身を隠すことも出来ず、あまつさえ変形96縛りで、背中合わせに首足を異に拘束されていたのでは、言葉を交すことはおろか、お互いの恥辱を、いたわり合うことすら、出来ぬ。しかも、組み合わされた

肉体を留めるポイントは、それぞれの指であり乳首であり、そして耳たぶであった。糸のように細い紐で、くくり合わされているとはいつても、場所が場所であるだけに、鋭い痛みが走って、幽かな身じろぎでも、相手を喚かせるに充分であった。

下剤が効いてくる間を待ったために、有明は王美齡を呼ばせた。

彼女とて、もはや昔日の傲慢さは片鱗さえ残していない。脱ぐことの出来ぬプラスチックの肉体衣裳のまま拷問檻に下げられて哀哭の限りをつくして苦しみ抜いた旬日が、彼女

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集した数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。フランスの美人女医、ジョセフ・イーヌ・フリーエールは健気にも有明に抵抗したが、F作戦で連行されてきた妹マリイを責めるとオドされて、遂に全面降伏する他は、なかった。絶世の美女といわれた王美齡もエステルに来て、はじめて有明の軍門に下った。このように、有明の手法は力づくで奪うのではなく、徐々にではあっても精神的な苦痛の中で否応なく城門を明け渡す機会を作り出すことにあったのである。



の自我を粉碎してしまったのだ。

悲しい諦めが、彼女に、この国で生きて行くことを決心させた。そのためには、絶対主である有明に奴隷の如く仕えなければならぬ。彼女は、その通り、努力しようとしていた。そして、それこそ、この国において、少しでも自由を増進させることのできる唯一の方途であることを痛感していた。

それでも、王美齡は全裸の姿が恥かしくてたまらなかった。

リフトをあがって、高橋待従に迎えられたときも、いつもとちがって、いきなり拷問室へ入るように言われたときも、そして、怖ろしい有明を、その中に見出したときも、一心にその恥かしさを、こらえていた。

そのため、コンクリート床の上で、連縛の苦痛にあえいでいるジョセフとマリーのフランス娘姉妹に気づいたのは、ずっと、あとのことであった。

美齡は寝椅子に横坐りしている有明の足もとに平伏して、

「僞好啊（今日は）」

と、頭をコンクリート床に打ちつけるようにして、拶挨を繰り返すのであった。それは

丁度、一時代前、彼女の祖先が絶対君主である皇帝に仕えたときの作法に、皮肉にも酷似しているといわなければならない。

「仰向けになって床に寝ころべ」

有明の歯切れのよい福建語が、聞き間違えない明瞭さで彼女に伝わる。

「是懂（はい）」

従順に答えて、長椅子の下に長く、ねそべる。ザラザラした打ちっ放しのコンクリートが脊中に喰いこんで痛むのを、歯をくいしばって、こらえるのが、いじらしかった。

寝椅子の上から、有明の足がおりてきて、右の足のうらが美齡の仰臥姿勢で、やや、つぶれたようになったが、それでも依然として恰好よく盛り上がった双の乳房をギュッと踏みつける。そして、左の足首は自然に、やわらかな脛のあたりに落ちた。

一瞬、美齡が顔を、こわばらせた。有明が全体重を彼女の上にのせたら、彼女の細い肋骨などは、粉々になってしまいそうだと感じたからである。しかし、幸いにも有明は寝椅子の上に起き上がっただけであった。

「ウイスキーを持ってきてくれ。氷も、いっしょに」

有明の命令を高橋淑子は鞠躬如として従うのである。彼女のような高官でさえ、有明の前では一個の召使いに、すぎない。

「口を、いつぱい、開けてごらん」

氷をつまみながら、有明が眼下の美齡を見下ろしていた。

言われた通り、するしかない。彼女は口を大きく開いた。

ポトンと氷片が落とされて、美齡の口中を塞ぐ。

「ウッ」

目を白黒させながら、われ知らず口を閉じようとする。存外、大きな氷片は、ギャグと成って、口を結ぶことを許さなかった。

冷熱は、たちまち、美齡の口中を痺れさせてゆく。吐き出すことは出来ても、そんなことをしたら、大変なことになる。

「オン・ザ・ロックが、いいだろう」

ウイスキーの滴りが、真っ直ぐに美齡の口に降り注いだ。

たちまち、咽がつまって、思わずグイと、それを呑み干してしまう。胸がカッカと熱く燃えてくる。

酒を飲んだ経験のない王美齡は、強いウイ



スキーを強いられて、それこそグデングデンになってしまった。胸がムカムカして、夢中で手足をバタバタさせはじめた。有明の両足が、彼女の胴をシッカリとおさえつけていたからである。

胃のあたりが圧迫されて、胸がムカムカしてくる。ググッと喉元まで噴き上がってくる。嘔吐感。泥酔者は、これをこらえる意力さえ失いかけていた。

「吐きたいか？ 吐くなら、アッチでやれ」  
髪のをつかんで、引き起こされて、そのまま、ズルズルとフリーエール姉妹のところまで引きずられた。

ドロンとした美齡の目が、ようやく惨めな姿勢で、くくられているフランス人姉妹を視線の中に、とらた。だが、その目は、もはや理非善悪を識別する能力を喪失していたのである。

「ゲエーッ」

姉妹の脊中が作っている楕円形の中に美齡はアリッターケのものを吐瀉した。

それは丁度、二姉妹の我慢が限界に達している時であった。予め服用させられた下剤が二人の下腹部を猛烈に荒しまわっていたから

である。

爆発しようとする圧力を、必死に堰きとめようとするのだけれども、その圧力は次第に括約筋の力を越えはじめていた。それは、丁度、決壊する直前の堤防に似ていた。どこからか、チヨロチヨロと洩れ出て行く水が一層破局を早める原因に、なろうとしている。

二人とも冷たい汗を流しはじめたところである。アヌスは、それぞれ相手方の後頭部、首すじに密着している。粗相をすれば、とりもなおさず、姉を、妹を、穢すことになる。そこへ、襲いかかったのが酔っぱらい裸女の王美齡であった。

なま温い吐瀉物が、ヌルヌルと二人の脊筋を濡らした。

一触即発の状態だったから何でたまろう。

「アッ——」

「オオッ……」

嗚咽とも怒号とも知らぬ叫び声を発しながら、二人は互いに相手の頭に夫々の汚物を噴射しはじめた。

ジョセフィーヌは西の対、マリーは北の対と、再び姉妹は離ればなれに引きさかれるのであった。折角、再会したというのに、人間

らしく手を握り合い、抱き合うことすら許されなかった。しかも、二人とも、姉の、妹の汚物で髪を穢して帰って行った。出迎えた黒人奴隷が、あまりの臭気に、目をまるくして驚いていた。

泥酔のあまり、何やらわけのわからぬことを口走っている王美齡も、自分の房に投げ込まれた。

こうして、三人の美女たちが、それぞれの汚物で、互いに責め合うという凌辱の辛さを嘆き悲しんでいる間に、有明はサッサと次の決楽を求めている。

五品（ほん）の奥女中（人位の最下位、軍人であれば尉官相当）に指揮された下使（婢）数名が汚物で臭気紛々となった拷問室を清掃し、営めるように拭き清め、その上、強い香水を吹きつけていった。

マリーは気違いになったかのようにシャワーに、かかり続けていた。氷のように冷たい水であった。その冷たさが、何とも言いようのない、あの不潔感を消毒してくれるような気が、したからである。事実、その冷温すらなまぬるいと思うくらい、彼女の心は冷えきっていたともいえよう。



姉の汚物が自分の髪を濡らしたことは、まだしも我慢出来る。しかし、何とも悲しいことに、自分もまた、自らの排泄物を姉の、えり首に噴きかけてしまった。そのことは、今、思い出すだけでも、肌が栗立つような恥かしさだった。どうしても、こらえきれなかった自分の括約筋が、いっそ恨めしかった。

どんなに強制された罠であつたとしても、生じた現象は、まぎれもない現実である。二人が、アブノーマルな性向を有するフェチストならば、それも許されよう。だが、兩人とも余りにも正常で、健康だった。それだけに、お互いに受けた屈辱感は激しく、耐え難かった。

マリーはポロポロと涙を、流しつづけていた。際限もなく涙が、あふれてきた。はげしいシャワーの滝が、それを洗い流していたけれども、その水全体が彼女の涙であるような気がする程、泣きたかったのである。

フト気がつくと、自分の裸像が正面の鏡に映し出されている。



その首のところに細いロザリオが、かかっていた。有明が、さっき、かけたままになっていたのである。

このロザリオこそ、マリーが姉の死を疑いはじめたキッカケであつた。無残に焼け爛れた屍体に、何故かロザリオがついていなかったからである。肌身離さず着けていた黄金の鎖。黄金なら火に焼けても残されていなければならなかった。それが無いということとは、この屍体から、何者かが取り除いたのか、或は又、この屍体そのものが姉ではないのではないかという疑いの根本になった。

国際警察機構のピエール警部にしても、こうした一見、些細に見える疑惑の集積の上に立って、はじめて不気味な美女大量誘拐組織の存在を臆気ながら推定しはじめたのである。それはマスコミにも気付かれず、極秘裡に進められていたから、一般の人々は夢にも考えなかったことだけれど、就中、日本の警察は特別なグループに依って、

一見、自然死とか失跡と思えるような事件に対しても、ガイシャが若い美女である場合、特にそれを別な角度から洗い直すという作業を強力に進めることになった。そして、その先達を承った新津謙介は香港に行ったまま、杳として、その足跡を断ってしまっている。

## 白い芋虫

あるいは自然のままに、あるいは地底を忘



れさせる程の数奇をこらした造りに、場所場所に応じて贅沢な設備が、ふんだんに使われているパレスエリアに比べて、ここポートエリアは機能一点張りであった。その比較は、個性的な邸宅に対して、何か工場か病院かを思わせるコントラストだった。

ここで働いている囚人たちは、悉く断種され、情緒機能を洗脳手術で、とり除いてしまった、いわば生けるロボットともいうべき男奴の集団であった。その上、ヘルメットに内臓された発信器でコンピュータ・コントロールを受け、定められた作業をサボることも出来なければ、作業に必要な範囲で最少限、許された地域以外に出ることすら、チェックされてしまう。(第23回、参照)

ポートエリアは、原子力潜水艦ネプチューン号の基地であったし、それによる補給の中核でもあった。すべてが、パレスエリアを維持し、数千の美女たちに君臨する有明の欲望を支えるためのものである。そして、これを支配するのが、奇才ウィリー博士を頂点とする管理グループであった。

「ミスター、ニイツも完全に、あなたの軍門に降ったようですね」

久しぶりに訪ねてきたマスターを、例の重厚なイギリス風調度の部屋に迎えながらウィリーが話しかけた。

「それは、もうテスト済みなのですね」

流暢な英語で、有明が聞きかえした。

「そうですとも。こう申し上げるからには、考えられる、あらゆる手段を使って、彼の供述が心からのものであるのか、そうでないかをチェックしました。そして、そのいずれもが白でした。何でしたら、データを、ご覧に入れましょうか」

「いいえ、ウィリー博士。あなたが、そうおっしゃって下されば、それで充分です」

「それにつけても、愛の力は偉大なものですね。イーラを救うこと、一点に集中して、その他の一切を放擲してしまったのですから」

「新津は立派な青年です。私は彼を、何の手術も強制も行わずに心服させたいのです」

「それは無理ではありませんか」

ウィリーだけは、絶対者の有明にも遠慮せず、こういうことが言えるのである。

「マスターは、すでにイーラを囚にして新津を屈服させておられるのですから」

「勿論、その通りです」

有明は平然と答えた。

「だが、たとえ動機が、そうであったとしても、彼が、われわれの原則を心から肯定したとすれば、それは強制ではなくなります。むしろ強制されて、ここまで引っぱって来られた運命を感謝するようになる筈です。私は、彼の心情の変化を注意深く見守りながら、その段階に応じて、彼に自由とデグニティとを返してやって行くつもりです」

「マスターは、物ずきだ」

ウィリーが冗談めかして叫んだ。

「可愛がった熊に叩き殺された男の話がロシアにありますよ」

「敵を愛せ——というのがキリストの教えではありませんか」

有明が反撃した。二人は顔を見合わせて哄笑した。

「君のレポートを見たよ。よく書けている。

大いに参考になった」

床に平伏している新津を見下ろしながら、有明が声をかけた。

新津は有明に心服したという証拠を、示さなければならなかった。そして国際警察機構と日本の麻薬監視に関する機密の一切を洗いざらい白状するように要求されたのである。



隠しても又、嘘をついても、すぐに分かってしまうだけの資料は、この国に、ととのっている。激しい自責の念に、さいなまれながら新津が書きあげたレポートは大学ノート一冊分に及んだ。これによって、彼の警察幹部としての誇りは泥土にまみれ、裏切りの烙印は永久に消えなくなったといえよう。

「監査部が綿密に真疑を照合したんだが、大体、正確に書かれていることが立証された。そればかりか、われわれが裏をかくのに都合のよい機料が豊記されている。これから色々なことで活用させて貰うよ。ハハハハ」

傷けられた良心の痛みに、唇を噛む新津の顔は、床の絨氈に埋もれて、有明には見えない。有明の嘲笑は、新津の心をえぐるように切りきざむのであった。

依然として赤裸のまま、獣檻に放り込まれていたのだけれど、レポートを書くために、後手錠が前手錠になっただけでも大変な待遇の変化だった。たとえば、その手錠が30センチばかりの鎖で、首輪につながられていて、思うように手が伸ばせなかったとしても、その範囲内だけでも、自分の意志で勝手に動かせる自由が嬉しくもあり、又、貴重だった。足

首も、20センチの鎖で繋がってはいても、ヨチヨチ歩きが出来ただけでも有難く感じられた。

まことに、人間の感じ方などは、その時々で、当てにならないものであると新津は、つくづくと思う。極端な拘束に呻吟してきた彼には、わずかな緩和でさえ、有明に感謝したくなる気持が動くのである。

「お気に召しまして有難く存じます」  
こんなセリフが、自然に自分の口について出てしまうのが、情けなくもあり、何とも、やり切れなかった。

「よし、よし」  
有明は満足そうだった。新津に対して彼が試しつつある実験は万事、予定通り、進んでいた。

「それで、今日は君に褒美をやろうと思って来たのだ」

運ばれてきたモノを見て、新津は呆然自失してしまった。地獄のどん底に堕ちたような体験から、大抵のことには驚かなくなってしまうかと思っていたのに、これは又、想像を絶するムゴタらしさだった。

それは、脱走アマゾン女兵、元中尉、杉本

美知子の、なれの果てであった。(第212240 52回、参照)

すでに0号生存刑は相当に進行している。それに伴って刑架も段々と簡単なものに変えられていた。

つぎつぎと切りとられて行った彼女には、もう首と胴しか残っていなかった。一寸刻みの苦痛に哭いた手足は、付け根から既になくなり、丸くなった断痕が盛り上がっているに過ぎない。その上、残っている顔や胸乳にしておからが、すでに読者も、ご存知のように傷だらけなのである。

手足の重量を喪った肉体は、首輪でブラさげても息がつかまらないから、今の杉本美知子は車のついた一本のスタンドに、肉屋に下がっているハムのように取りつけられて運ばれてきた。

杉本美知子脱走のいきさつは、新津も前々から聞かされていた。そして、0号生存刑の残酷さも話としては知っていたのである。

それにしても、聞くとは大違いだった。慄然となると同時に、無性に吐き気がして、こらえるのに必死だった。

ウィリー博士は、そんな新津に頓着なく、



美知子の断痕を、なでさすりながら、むしろ自慢そうに有明に言った。

「マスター。この切り口は実にうまく、つきましたよ。いかがですが……」

「そうですね。おっしゃる通り、仲々綺麗じやありませんか」

「傷口は完全に癒着しました」

「健康状態は、いかがですか」

「申し分ありません。その上、頭もちゃんとしております。狂わせては何にもなりませんからね」

こんな会話を杉本美知子は悲痛な表情で聞いていた。但し、

英語だったから殆ど内容は、わからない。固くつぶった双の目から、泪があふれ出て、頬を濡らしている。その頬には0号重拘束の時、突き刺された金串の痕が傷々しく盛り上がっている。それを指で、つつ突きな

がら、ウィリー博士が言葉をつづけた。

「マスターは、これに、いつまで生存刑を、つづける、おつもりですか」

「最後まで」

有明がキツパリと答えた。

「つぎは、どこをなさいますか」

「まだ片方の乳首が残っていますね」

「ハイ。それは、よろしうございましょう。ですが、顔だけは最後まで残しておいていただきたいのです」

「どういう意味ですか」

「実は最近、成功したばかりですが……」

ウィリー博士は、怖ろしい内容を日常茶飯事のように語りはじめた。

「私の生体実験室が人間を頭だけで生かす技術を開発したのです。アラビアンナイトの魔法がホンモノになったわけです」

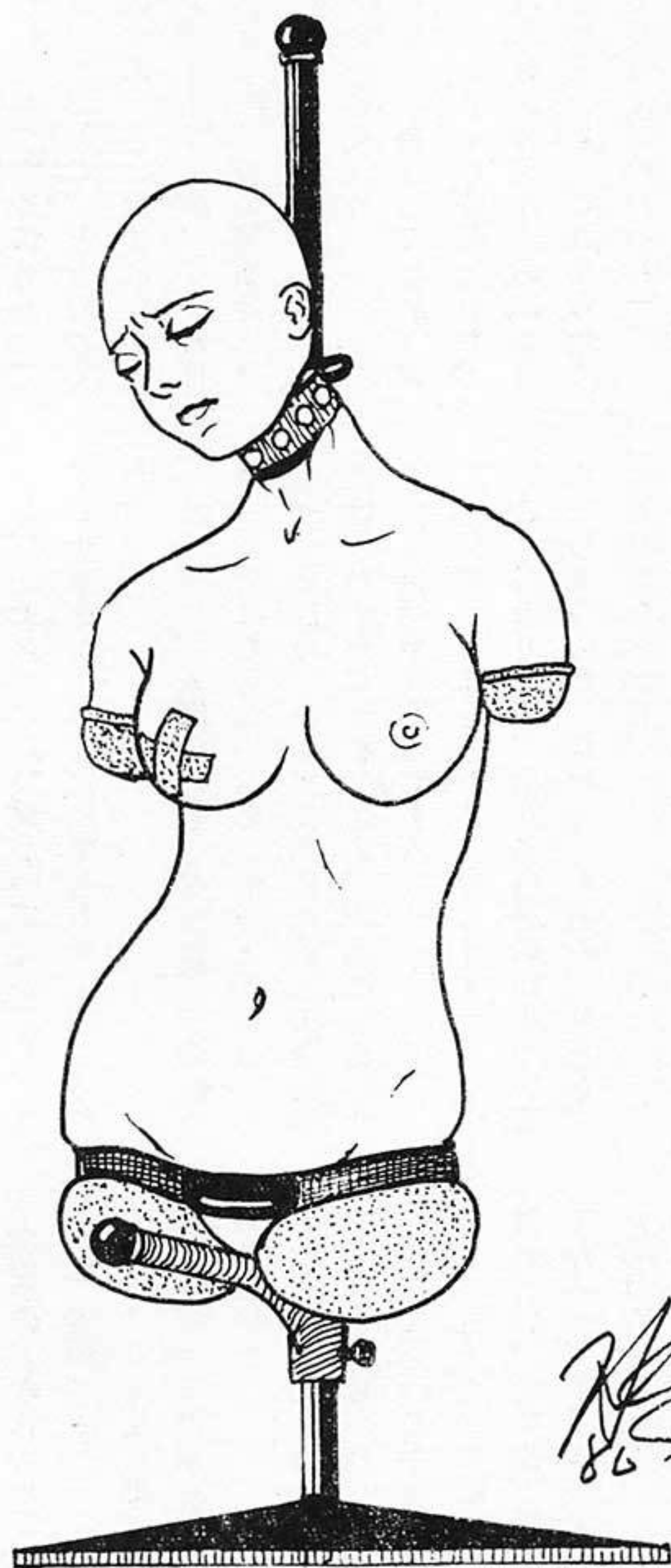
「ホウ……」

さすがの有明も、驚いたような顔をした。

「頸の血管を人工心臓に直結して、必要な養分や酸素をドンドン送り込んでから、徐々に切り離すのです」

「そうすると首だけで生きられるのですか」

「そうです。しかし厳密な意味では人工内臓が別にあるわけですから首だけというわけには……」



新津には二人の会話が、よくわかるだけにただただ押しつぶされるような気持だった。この哀れな女は最後に首だけにされて尚、生きつづけさせられるのか



と思うと、暗澹とした想いに囚れて行く。

ハッと身を固くして逃がれようとした。

いきなり、有明の手がのびてきて、彼の体を掴んだからである。

「逃げるな。サア、床に仰向けになれ」

卑屈なまでに新津は従順だった。自分のものを握られたまま、彼は有明の言いなりの姿勢をとった。

新津の若い肉体は、一寸した刺戟でも、スグ反応した。

「レポートの褒美というのはコレさ。女を抱かしてやろうと思ったんだ」

有明が嗤った。

「イヤ、イヤッ」

白い芋虫のように、胴体をくねらせながらそれでも弱々しく抵抗を示す杉本美知子を、遅しいウィリー博士は軽々と刑架から外して首吊りのまま、新津の上に乘せた。

「アッ、イタイ」

呂律ろれつのまわらない悲鳴をあげる美知子。何度なんどもも痛めつけられた彼女の舌は、もはや発声機能を示していない。いきなり押し込まれたのでは、二人とも難行以外の、何ものでもなかった。

「フッフ、新津。いい気持だろう。オイ、い

つまで私に持たせておくんだ。自分のオタノシミは自分でやれ」

スラングで言われたので、よくわからなかったけれども、新津にはウィリー博士の言葉の意味だけは想像できた。

不自由な手錠だったが、辛うじて上体を起こして、胴体だけの美知子を胡坐の中で支えた。

屈辱感もさることながら、相手が相手だけに何としても、やり切れなかった。それでも尚、若い男女ではあった。健康な体は互いに反応して忽ちに熱く潤ってくるではないか。

くねくねと、うねる白い胴体を抱えこんで新津は今まで体験したこともない感覚が突き上がってくるのを知った。

手や足で、からみ合う普通の清事とは、ひどくかけ離れて、何とも頼りのない、軽い刺戟だった。ニコチンをとった水煙草のような味でもあろうか。

みるかげもなく、やつれ果てた美知子の顔が目前に揺れていた。

「アッ、アー、アッ」

美知子は、くぐもった喉声を洩らし、はじめている。

さぞかし無念だろう。みじめだろうと新津は思った。

突然、今まで固く閉じ合わせていた美知子の目が開いた。それだけは素晴らしく綺麗な瞳が、新津を見つめた。一ぱい涙をたたえ瞳だった。

それが、新津を責めるのではなく、何か許しを乞おうとしているようなのが、一層、彼をやり切れなくさせた。

新津は、たまらなくなつて、その首をギュッと抱き締めるのであった。

互いの鎖が、その人情をアザ笑うように不協和音を立てるのにも気づかなかった。

事は終わった。

ぐったりとコンクリート床に横たわり、腥めやらぬ余燼に息づいている胴体だけの女を新津はボンヤリと見つめていた。

有明の冷たい声が飛んだ。

「奴隷にも罪人を罰する権利はある。新津、おまえにも、そのチャンスをやろう。コレの残った乳首を喰いちぎってやれ」





私

見

プレイとしての S M を考える

## 現代 S M 考

那 智 薫

カット・マエダヒオミ

S M の根本は、「いじめることの喜び」と「いじめられることの喜び」とから成り立っていると思われませんが、ここでは「いじめることの喜び」、つまりサディズムを中心に、現代の S M プレイを私なりに考えてみようと思うのです。

「いじめることの喜び」には、大別して二つあると思います。一つは「嗜虐することの喜び」。もう一つは、辱かしめること、つまり、「凌辱することの喜び」です。

「嗜虐の喜び」は、サディストのみならずマゾヒストを除く一般の人々誰しもが、味わうことのできる喜びではないかと思いま

す。なぜなら、それは、自分が君主的な立場に立つという、一種の優越感に浸る喜びにほかならないからです。（その優越感に浸る喜びがあるからこそ、人類が進歩を遂げて来たとも、言えると思います）

例えば、本能が率直にあらわれる子どもたちは、弱い者いじめや、仲間はずれ、あるいは、蟻などの小動物を残酷に殺すことによつて、「嗜虐の喜び」を味わっていると思えますし、また、大人においても、日頃憎々しく思っている知人や会社の上役などを身動きできないうように縛り上げて、体中を鞭で打ったり、針でさしたり、あるいは、それ以上の残酷

虐な方法で、苦しめてやりたいという心はその程度に差こそあれ、誰しもが持っている心ではないでしょうか。

しかし、この場合の「嗜虐の喜び」は、コンプレックスを持っている人間が、他の生き物を嗜虐することによって、そのコンプレックスを、いやすことの喜びであり、くり返し言うように、それは一種の優越感を味わうことであります。ですからサディズムを生む元始的な感情であるかも知れませんが、真の完成されたサディズムというものではないと思います。つまり、性と無関係な嗜虐の世界は、ほんとうの意味での



S Mの世界とは言いえなのではないかということなのです。

この単なる嗜虐において、嗜虐する本人が、もし性的興奮を感じるとすれば、それは一種の精神異常者であると言わねばなるまいと思いますし、正常な社会生活を営むことは、到底不可能ではないかという気がします。なぜなら、この場合、対象となる生き物とは、あらゆる人間、及び、あらゆる生き物を指すからです。

しかしこの場合において、その対象となる生き物が、人間の異性であり、女性（男性が行為者である場合）を嗜虐することによって、性的興奮を感じるならば、それは S プレイと言えるでしょう。

また、その対象がマゾ女性であり、嗜虐に対して性的興奮の反応を示し、その反応を知ることによって、男性が性的興奮を感じるならば、まさしく、これこそ真の S M プレイと言うものでしょう。（プレイとしての S M では、まず考えられないことです。が、行為者が女性で、その対象が男性である場合、又、男性対男性、女性対女性の場合でも、同じようなことが言えると思いま

す）

つまり、サザイストというのは、精神異常者ではなく、性倒錯者であるということです。

いいかえるならば、サディストにとって、女性を嗜虐するということは、女性とセックスをすることに匹敵することです。

ですから、そのセックスにおいて、その相手が、男性であろうと、女性であろうと、あるいは、人間であろうと、他の動物であろうと、何に対しても性的興奮を感じるならば、それは精神異常者であるというわけです。

ところで、ホモは、セックスにおける対象を同性の男性であると、無意識のうちに錯覚しているのであって、これも又、性倒錯者と言えるわけです。

以上、「嗜虐することの喜び」について、長々と述べて来ましたが、要は、嗜虐における S M の喜びは、セックスにおける喜びに、準ずるものであると言うことです。

さて次に、「凌辱の喜び」についてですがこれは、さらに「肉体に対しての凌辱」と、「精神に対しての凌辱」とに、分けることができると思います。しかし、これらは、切り

離すことのできないものであり、二者共存と言ったような形を、とっていると思われる。しかも、その共存形態には次の二通りがあるようです。

つまり、精神に対しての凌辱が主となり肉体に対しての凌辱が従、すなわち、精神の凌辱を引き出すための手段となるような形態と、それとは逆に、肉体に対しての凌辱が主、精神に対しての凌辱が従となる形態です。

まず、精神に対しての凌辱が主となるものには、その好例として、緊縛プレイと浣腸プレイがあります。中でも浣腸プレイは、その最たるものでしょう。女性のエイナスに浣腸器を挿入するという肉体の凌辱によって、男性の眼の前で排泄させるという強烈な精神の凌辱。また、緊縛プレイにおいても、女性をあられない開脚縛りに処して、その肉体を凌辱し、そのことによってその精神をも凌辱する。まさに、これこそ S M の極致と、現在においては考えられているようです。

しかし、この浣腸プレイや緊縛プレイを S M の極致であるとする考えには、いささ



か疑問を持たずにはおられません。確かにそれらのプレイには、サディストのみならず、まともな男性ならば誰しも、性的興奮に駆られるでしょう。なぜなら、女性の羞恥心は、男心（それは、とりもなおさずサディスティックな心）を刺激せずにはおかないからです。これについては、落語家の小円遊師匠も、女性の最高の魅力は羞恥心だと言っておられましたし、これは多くの男性が認めることでもありましょう。

しかし、ここにおいて、なぜ私が疑問を持つかと言いますと、それは前にも述べましたように、『SM』とは、性の世界に他ならないからです。

浣腸プレイ一つを取り上げてみしても男性は、なるほど性的興奮を感じます。しかし、女性が性的刺激を受けるかどうかと言うことです。もちろん、女性は羞恥心を持ちますが、羞恥心と性的興奮とは根本的には異質のものであり直接的なつながりはありません。ところで言うまでもなく、相手の女性が正真正銘のマゾ女性であれば、羞恥心イコール性的興奮ということになり本格的SMと言えますでしょう。

しかしながら、プレイとしてのSMにおいて、その王座の地位をしめるには、（一般にマゾヒストの傾向を持つと言われる）女性すべてと（一般にサディストの傾向を持つと言われる）男性すべてが、性の喜びを味わえるようなものでなくてはならないと思います。

そこで今度は、肉体に対しての凌辱が主で精神に対しての凌辱が従となるものについて考えて見ようと思うのですが、その最もよい例として、バイブレーターによる責めが挙げられるでしょう。

このバイブ責めは、女性に、一本の棒切れによって、おもちゃのようにあしらわれ、侮辱されているという被凌辱感を与えますが、この場合は、前述の緊縛プレイにおけるような単なる被虐感ではなく、その被虐感の奥には、バイブレーターという一個の器具によって、女の生理のもろさを露呈させられてしまうという、一種の予感めいた自覚があるので、これは肉体が精神的凌辱感の拠所になっているということであり、常に、肉体の凌辱における生理的反応が主体となっているわけです。

ところで、このバイブレーターによる肉体

の凌辱においては、たとえマゾヒストであろうとも、女性である限り性的興奮を感じないわけにはいきませんし、エクスタシーに到達することも容易なことです。また、女性をエクスタシーに導くことこそ、本来の男性の勤めであり、喜びでありますし、それによって自ら、男性も興奮します。

ですから、バイブ責めとは、精神的にはアブノーマルな『SMプレイ』をすることであり、肉体的には、ノーマルな『セックスプレイ』をすることであるというわけです。これこそ、現代に適したモダン『SMプレイ』ではないでしょうか。

現在、SMブームを、まき起している背景には、現代社会のひずみからくるストレス、また、それによって起こるノイローゼが挙げられるのであって、そのストレスを解消するために、日々我々はSM的なことを求めているのです。そして、そのストレスやノイローゼは、きわめて精神的なものでありますから、それらを解消するにも精神的SMプレイで十分事足りるのであって、鞭打ちなどをして女性の身体を傷つける必要は、まったくないわけです。（これ



は、あくまでもSMプレイ愛好家諸氏についてのことであり、真のサディスト、マゾヒストにはかわりあいのないことです。

その点において、このバイブ責めのように精神的にはSMプレイを、また、肉体的にはセックスを行なうという、肉体が主で精神が従のSMセックスプレイが、現代によくマッチした、現代SMプレイの花形と言えるのではないだろうか。

また、肉体が主となるということは「飽き」が来ないということでもあり、その意味においても理想的ではないでしょうか。

これは特に、長年連れ添った夫婦などに言えることですが、緊縛プレイや浣腸プレイなど、精神的なものが主となるプレイは、初めのころこそ、強い刺激となり、一種の清涼飲料水のような役目を果たしますが、何と言っても、その嗜虐の中心をなすものは女性の羞恥心ですから、羞恥心が薄れていくにつれて、その刺激も弱くなります。

(マゾッ気の強い女性においては、さにあらず)

ところで、A感覚なるものについて述べるのを忘れていましたが、実を言いますと

私自身、A感覚については、わからないことが数多くありますので、ここで新たに考えて見ようと思うのです。

さて、まず第一に、A・快感なるものが、存在するかどうかということですが、生体学的に見ますと、エイナス及び直腸には、性感帯なるものは存在しないようです。

しかし、女性は、生体学的に見て、無感覚であるとされているバギナ(出産において、母体の苦痛を和らげるために、バギナは無感覚にできているのです)において、V・快感を肯定しますから、バギナよりは、神経が集中して、感覚の鋭いエイナスにおいて、快感を感じることは当然、有り得ると思います。

もっとも、V・快感にしてみても、その快感のおこる原因は、男性の性器の挿入感とバギナの周辺にある性感帯にあると思います。が、このことは、エイナスにおいても、同じであると思います。

また、A・快感が存在するということは、長谷田真知子さん(奇ク一月号誌上)らの実例やホモの存在からしても、明らかであると思います。(長谷田さんにお会いして、A・快感肯定説を一度、じっくり、お聞きしたいもの

です)

さて、その他に、エイナルセックスについて考えてみたい事項を挙げて見ますと、「男女それぞれ、行為中に、どれほどの肉体的苦痛と快感を、感じるものなのか?」「事前に、浣腸を施す必要があるのか?」「大腸菌などの、雑菌による影響はないのか?」

「エイナルセックスを行なうと、その女は男から離れられなくなると聞くが、ほんとうか?」等々、全く切りがありません。

これらは偏<sup>ひとえ</sup>に私がエイナルセックスの経験がないために起こる数々の疑問であります。が、今後の研究課題として、経験者らの話をもとに、できれば、私自身、経験をして、解き明かしていきたいと思います。

ところで、エイナルプレイには、強烈な嗜虐感がつきものですから、その他のあらゆるSMプレイに飽きられた方は一つ試してみられるのも、おもしろいと思います。

ただし、初めての場合には、女性は強烈な苦痛と嫌悪感を感じられると思われますから女性の理解と、十分な下準備をすることが当然、必要だと思えます。





|| 八深田菊子の巻V ||

塚つか

本もと

鉄てつ

三ぞう

足<sup>あし</sup>の裏<sup>うら</sup>の温<sup>あたた</sup>かい女<sup>おんな</sup>

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

燃えつきない情熱

「私って、思いきり、恥かしい目にあわせてほしいのよ」

私が深田菊子を責めることに夢中になって  
いるとき、ふと、彼女の口から、男の心を妖  
しく、くすぐるような言葉が洩れた。

真白い、あどけない顔つき。つきたての餅  
のような柔らかい肌の女の身体のなかに、こ  
んな魔性が、いつから宿ったのであろうか。

丸い肩も、胸も、腹部も、殊に皮下脂肪の  
厚い臀部は、ひんやりと冷たかった。

縄で縛られて、裸のまま、長い間、空気に



触れていたのだから、肌が冷たくなるのも、また、当然のことだった。

私は、自分の肌に彼女の肌の冷たさを感じながら、右手を伸ばして、彼女の左足を握った。掌に彼女の、ねっとりとした足の裏の感触が吸いつくようだった。

お尻の冷たさに引きかえ、菊子の足の裏はほんのりと温味ぬみを持っていた。

それに、この羽二重餅のような足の裏の柔らかさは、どうだろう。

私は、自分の掌にべったりと粘りついた彼女の足の裏を握って、膝頭が脇腹に当たるほど、引き寄せた。

「どうせ、SMプレイをするんだったら、行きつくところまで、行かなくちゃ、つまらないわ。私だったら、いいんですよ」

縄を解かれたばかりの両腕で、ガバッと私の胴体を力いっぱい抱きしめてきた菊子の口から、そんな言葉が洩れた。

思えば、二十才そこそこの若い女性である深田菊子が、始めて奇クを見たときの感想を通信に寄せてきたのを読んだ私は、単なる気まぐれ娘の好奇心ぐらいに思った。

雑誌に書いてある文字や文章の一部を、そのまま書きうつしたのではないかと疑える、

その通信が、真実、彼女の心のなかを表現しているものとは、どうしても思えなかった。

最初、深田菊子に逢ったとき、私は街路でスナップを十数枚、撮影しながら、この女性の、このあどけない女体のなかに、謎のM性を秘めているのだとは、どうしても信じられない気持だった。

こんなに明るくて、美しいお嬢さんが、私の縄の下で呻吟し、思いのままに翻弄されつ

くすなんて、考えられないことだった。だが――。

女のサガ(性)なんて、全く考えてもみない不思議なものである。

洋服を着ているとき、あんなに、しおらしく、淑かだった菊子が、一度、密室へ入って衣服を脱ぎすててしまうと、内面女夜叉のMの本性が俄然、迸り出てきたのだ。

それから、幾度かの激しいSMプレイ。







「もう、私の身体なんか、隅から隅まで、見  
てしまわれたでしょう。まだまだ、見るとこ  
ろがあつて？」

私が縄で縛った菊子に対して、更に新しい  
責めを加えようとしていたとき、彼女の口か  
ら、そんな皮肉が飛び出した。

そりゃ、そうだ。お尻の脇にある小さな黒<sup>ほく</sup>  
子、恐らく、彼女自身でさえ、知らないので  
あろう身体的特徴を私は、すっかり知ってし  
まっているのだ。

「責めというものは、汲めども尽きぬ泉を掘  
りだすことなんだよ。君の心と肉体には、い

くらでも、未知のものがあろうと思うナ」

私が彼女にも、自分にも、さとすように、  
そう言ったとき、菊子は、囁言<sup>うわごと</sup>のように、M  
の本性を、あらわす言葉を吐いた。

「私って、思いきり、恥かしい目にあわせて  
ほしいのよ。こんな私でよかったら……」

この言葉を聞いたとき、私は、はからずも  
彼女が他の男性に責められているのを、襖越  
しに気配で感じたときのことを思いだした。

それは、私が、深田菊子の『水車小屋緊縛  
記』の載っている三月号を、手渡した覚えが  
あるので、今から丁度、一年前にもなるだろ

うか。深田菊子を是非、直接、責めてみたい  
という読者の一人と同行して、郊外の観光旅  
館で会食をしたことがあった。

そこは、大きな岩風呂があるので有名で、  
観光案内なんかに派手に宣伝していたが、  
なにしろ都心から車で三時間以上もかかる  
という足場の悪さから、設備が整っている割  
りには、客足は少なかった。

勿論、ウィークデイのせいもあったが、客  
が三人だというのに、玄関、控えの間つきの  
十帖の部屋へ案内された。襖の向こうには、  
更に六帖の奥部屋があった。

食事が終わると彼は、もう待ちきれないと  
いう風に、深田菊子を擁して隣室へ消えてい  
った。一人、残った私は彼等二人に見せるた  
めに持参した六ツ切りに伸ばした作品、数十  
枚を一枚一枚、揃えて袋に入れ直していた。

そのとき、襖の向こうで、菊子の如何にも  
艶なる嬌声がした。

「いやよ、そんなことしちゃあ」

あたりを憚るというような語勢ではなく  
て、甘く、とろけるような、鼻にかかった声  
であった。相手の手を拒否するというより、  
むしろ挑発するような響きがあった。

私は写真を袋へ入れていた手を止めて、卓



へ両手をつくくと、中腰のまま、襖の向こうへ思わず聞き耳を立てた。

宿の女中さんへ食事の終わったことを知らせる、その一寸の隙に——と、いうわけで、二人は隣室へ入ったのだが、なんと早いプレイの開始ではなからうか。

一瞬、静かになったが、直ぐ、二人が揉み食うような布ずれの音がして、それから、急に押し殺したような深田菊子の呻き声が、ときれとぎれに私の耳に入った。

もう既に深田菊子は、すっかり衣服を脱がされてしまったのだらうか。今度は、彼の荒い息づかいが、しだした。

私は襖を開けて、飛び込んでみたい衝動にかられた。

だが、私が最初に一緒に責めてみないかと提唱したとき、彼は、自分一人で責めさせてくれと、固く断わっていたから、私は聞き耳を立てるだけで、ただじっとしていた。

時々、畳に身体が当たるような忍びやかな物音がしたかと思

うと、菊子の喘ぐ声に混じって、彼の押し殺したような低音の囁きがした。襖越しなので、何を言っているのか、意味はわからなかったが、また、それだけに至極、気にかかった。

自分が手なずけて飼育した女性が、目の前で、他の男に責められている、SMプレイをやっているということは、自分が直接、その

女性を責めているよりも刺戟があった。

それは、嫉妬という男性特有の身勝手な欲望の変形かもしれない。

勿論、辻村隆氏のカメラハントに深田菊子を提供したこともあったし、彼女自身の希望からしても、私が彼女を独占するという、いわれは、いささかもなかった。

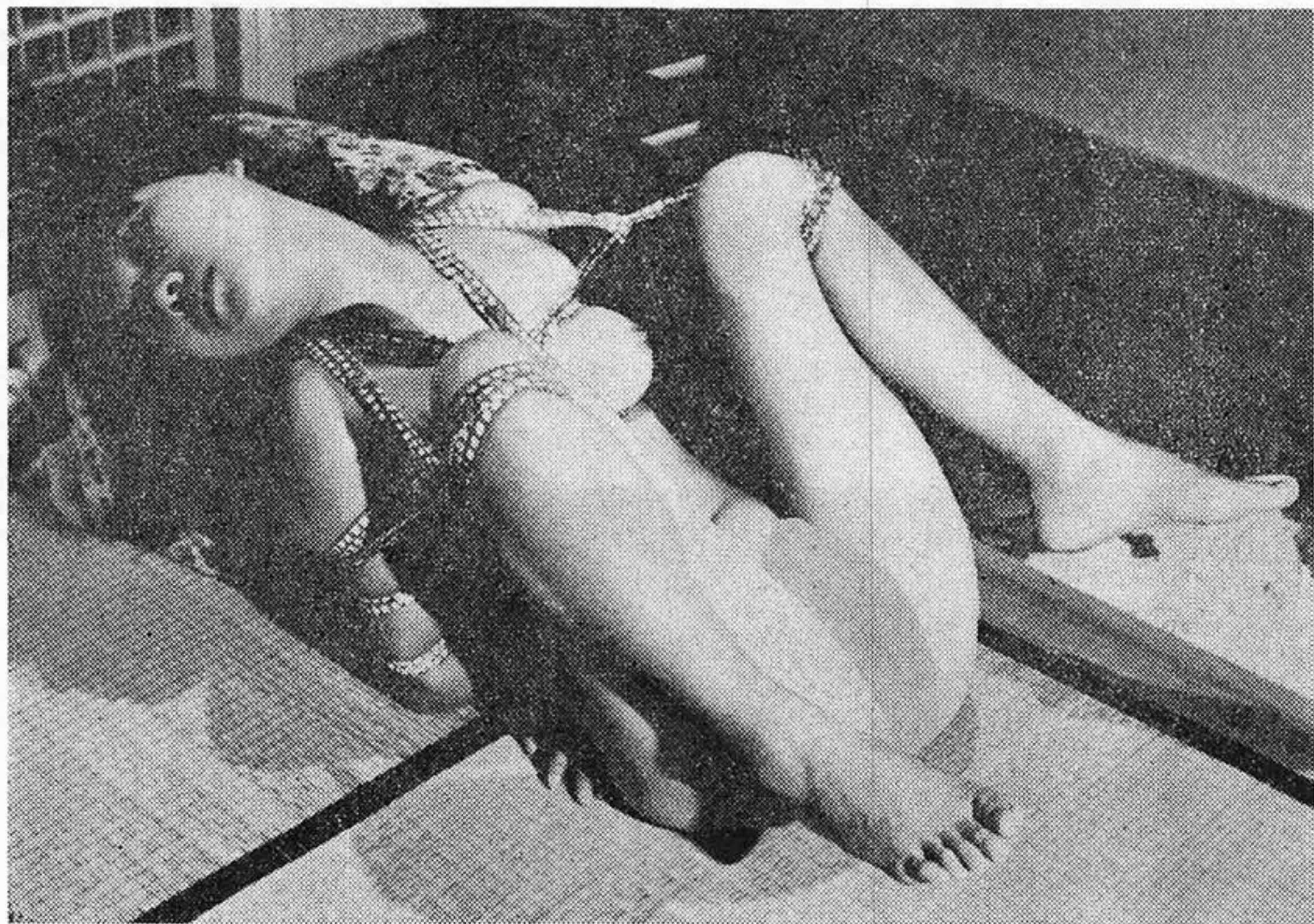
それなのに、今、襖一枚を隔てた向こうの部屋で、深田菊子<sup>はらわた</sup>が他の男性とSMプレイを展開して、歓喜の嬌声を挙げているのかと思うと、理屈抜きで、腸が煮えくりかえるような、もやもやしたものが胸につかえてきた。

一体、どんな責められ方をしているのか、見てみたい——という強い衝動と、何を、はしたない——という気持が激しく交錯して、私は腰を下ろしたり、中腰になったりを繰り返していた。

隣室は静かになった。静







かになればなったで、私の妄想は嫉妬のルツボと化した。

「よし、今度、菊子を責めるときは、これを材料にして、思いきり、いじめてやるゾ」

私は心の中で、そう堅く決意した。

大体、私は深田菊子に限ったことではないが、SMプレイをやる際は、緊縛した美しい女体をフィルムに印したいという考えを、いつも念頭に、おいていた。プロポーションや容貌の

美しい女性であれば、これは縄で緊縛されることによって、更に一層の哀婉美が加ってくるのは当然のこととして、仮に、そうでない女性でも、縛ってみると、カメラアングルやライティングによって、いくつかの緊縛美が生まれ出てくるも

のである。

だから私は、SMプレイに熱中しているときでも、美しい表情や姿態を発見したときは時を移さずカメラに収めたい意欲にかられるのだった。羞恥責めに悶える、なまめかしくも艶なる表情が、責めの手を緩めてカメラを向けた途端、一瞬にして消滅することも、しばしば、あった。

そんな私に引き換え、襖の向こうの部屋で深田菊子を責めている彼は、カメラなんか、持ったことのない男である。飽くまでも、女体責め一筋の実践派である。

どのような緊縛用具や責め道具を手の内に秘めておったか、私は知る由もないが、そのうち、隣室から洩れてきた深田菊子の甘い声を聞いて、私は愕然とした。

「ああ、あ、もっと、もっと責めて。思っきり羞かしい目にあわせて……」

それは、襖一つを隔てて、私という者がいることを忘れたかのようなM女の妙なる絶叫であった。今まで、私が彼女の口から聞いた言葉の中で最も、なまめかしかった。

私は耳を掩いたい気持で玄関の錠を下ろすと、脱衣室へ入って洋服を脱ぎ、部屋備えつけの風呂へ飛び込んだ。



部屋へ戻ってきてみると、彼は上気した顔で、「ここは落着かないから、場所を変えよう」と言っていて、そわそわしている。

私は後部座席に二人を乗せて都心へ向かって車を走らせると、駅に近いモータールに送り込んで別れたのだった。

○

そんなことがあってから、私は暫く深田菊子からは遠ざかっていた。

責める口実を作っておいたので、次に逢ったときは、彼女の願っている通り、『思い切り恥かしい責めを加えてやろう』という考えを忘れていたわけではなかったが、折柄、妊娠した福井桃子の太鼓腹を撮ったり、臨月妊婦の責めをやったりしていて、その方に一時的に熱中していた。

福井桃子に引き続いて『東京の踊り子』鈴木千鶴子が彗星のように、私の目の前に現われて、体当たりの、その柔軟な肢体と、深淵なM性とを展開してくれた。さすがの私も全く鈴木千鶴子の型破りの底抜けに明るいマゾには、ド肝を抜かれてしまった。

鈴木千鶴子が東京在住のため、SMプレイのチャンスが少なかったが、次に、若さ溢れるポリウムある肉体を誇る笠井奈保子が、

私の取材範囲の中に飛び込んできた。

それからは、もう各人各様の特徵を持った前田真知子、松本たえ、江口淑子、玉木章子というマゾの麗人が、私の手で縄に喘ぎ、カメラのレンズの前に、その絢爛たる緊縛姿態を開陳したのであった。

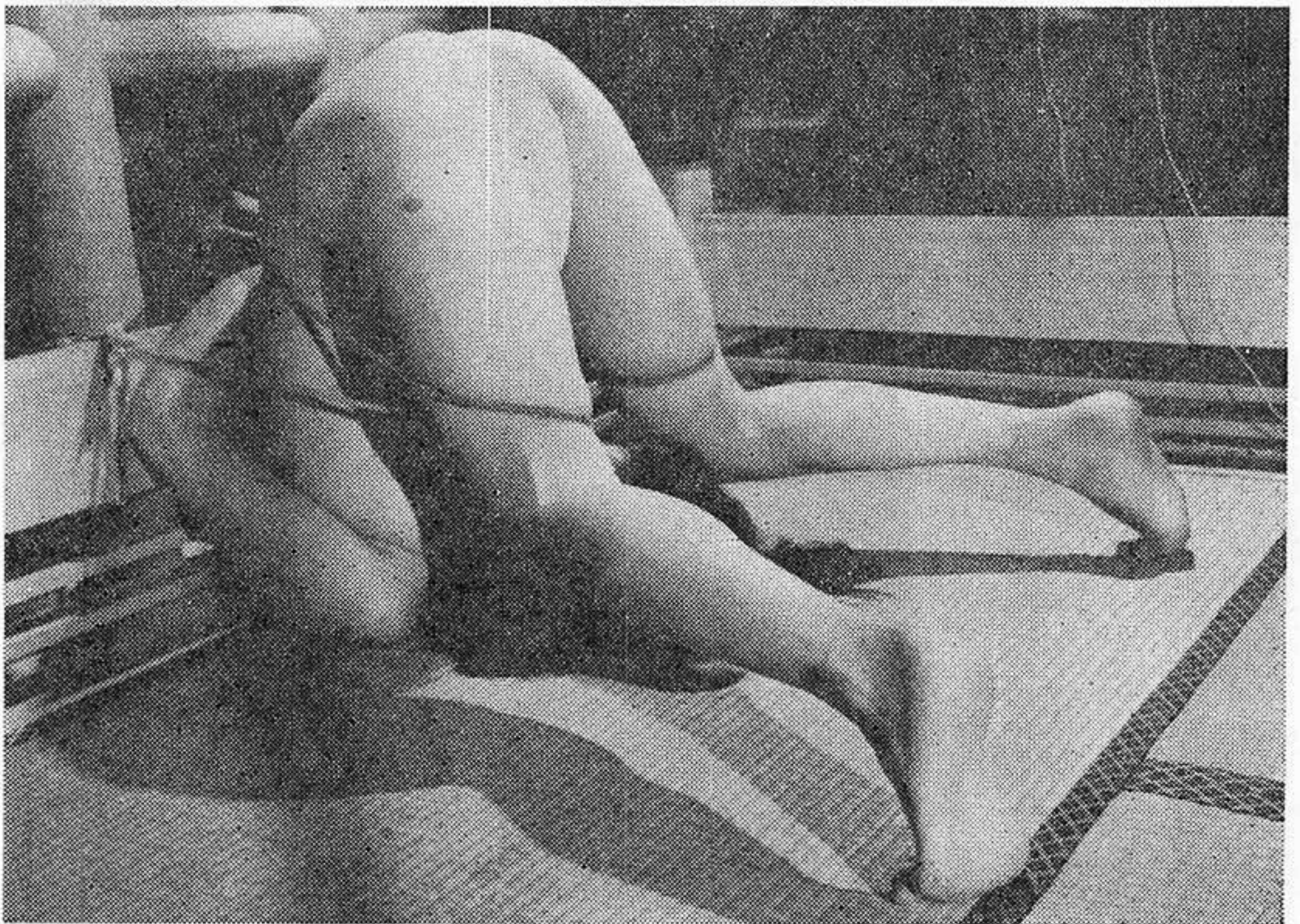
いずれにしても、案外暇をとられるカメラ・ルポの取材ばかりだったので、気になっていながら私は深田菊子に対する責めを、お留守にしていた格好になった。

因みに、私がカメラ・ルポで取材した彼女たちの足跡を辿ってみると次のようになる。

松本 たえ (47・1)

全日空機で

来た女





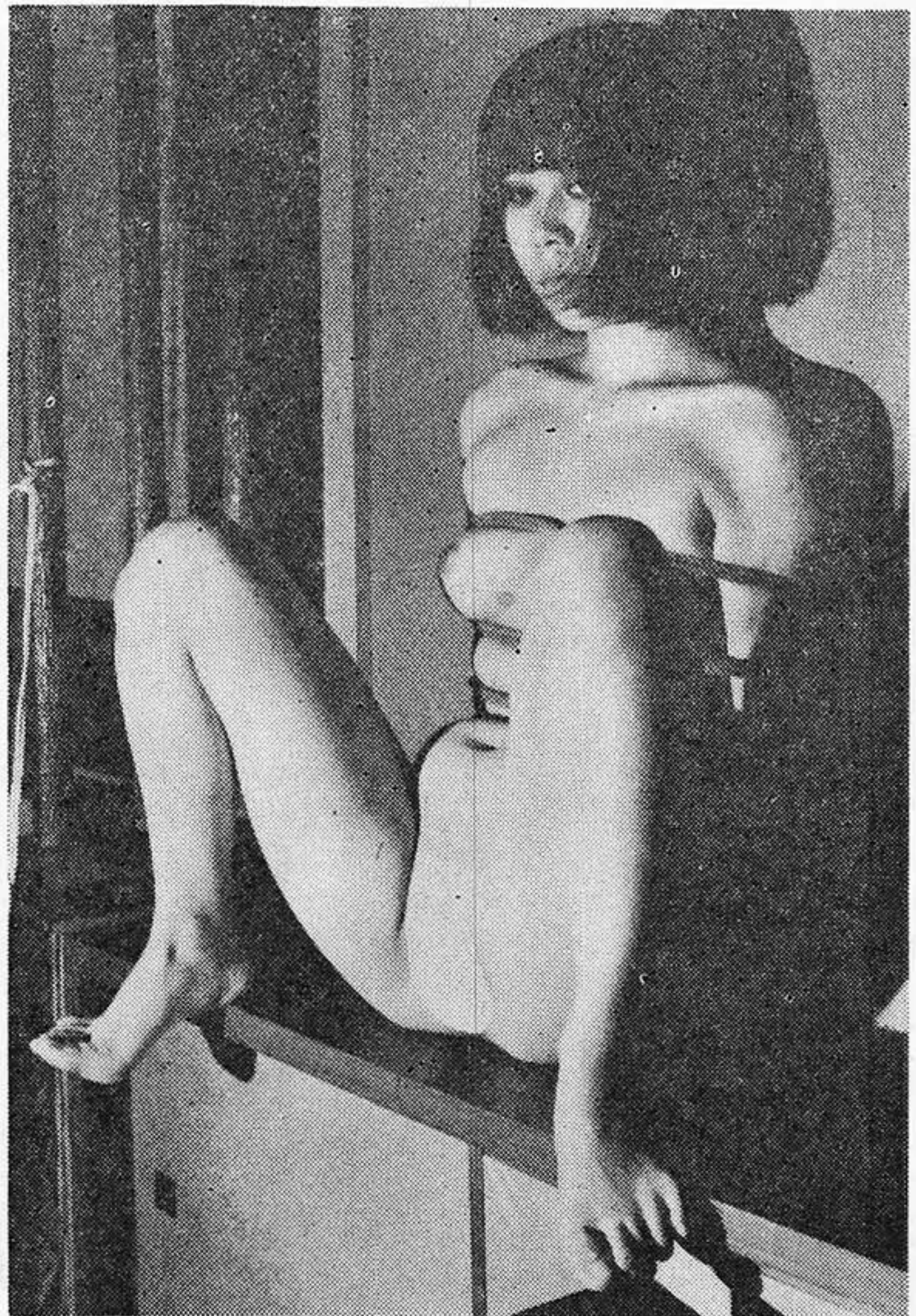
松本 たえ(47・2) 縄に恋した女  
 深田 菊子(47・3) 水車小屋緊縛記  
 鈴木千鶴子(47・4) 東京の踊り子緊縛記  
 笠井奈保子(47・6) 春宵一刻値千金  
 松本 たえ(47・7) 観世音菩薩の化身  
 福井 桃子(47・8) 美しい五月の黒髪  
 前田真知子(47・9) 霖雨余情  
 鈴木千鶴子(47・10) 東京の踊り子浣腸記  
 江口 淑子(48・1) 爛れた溺に溺れた日  
 玉木 章子(48・2) 美しい責めの記録  
 西条 紀代(48・3) 別嬪じゃないけど

# 木枯しの吹く街角で

深田菊子からは、他の男性とSMプレイをしたことを、時折、手紙で知らせてきた。ホテルの部屋にある冷蔵庫から取りだして飲んだコーラの空瓶で責められたということなどを、キワどい言葉で歯にキヌをきせず、詳しく書いてきたりした。

今の若い女性は、こんなにも天真爛漫に、思ったことを、そのまま、あからさまに書いてしまうものだろうか、と、私は深田菊子の手紙を読んで驚くと同時に、掌中の珠を奪われたような淋しさと後悔の念に襲われた。

深田菊子の冷たい肌と温かい足の裏の感触



を知っている私としては、大柄で、なやなよとしていて、縄を掛けると、倒れるように、もたれかかってくる彼女の真白い肌の肢体が目につかなくて仕方なかった。

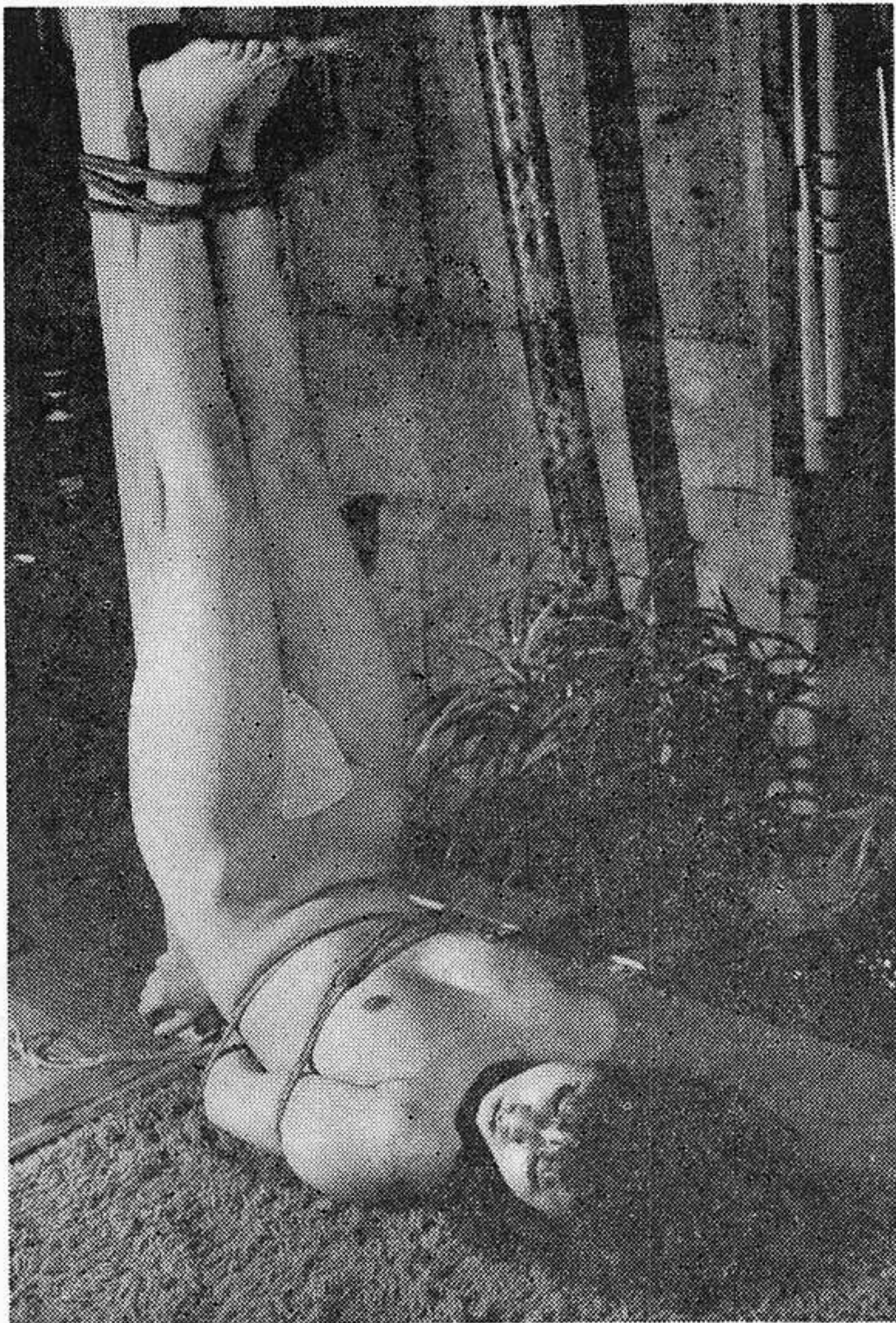
その手紙が、私に対する誘いの手紙であったのかもしれないが、そうと思いつつも、私は彼女の便りを読むと妖しい嫉妬の念が、激

情となって胸の中で渦まいた。

私の責めの手の中で、呻き、泣き、喚き、果ては喘ぎに喘いだ、あの深田菊子が、私が紹介してやったとはいえ、他の男性に責められて、歓喜の叫びを挙げているということは、私にとっては、たまらなかった。

深田菊子にしたら、限らないマゾの願望を





手紙に托して私に言って寄こしたのかも知れない。電話では喋れない、あからさまな思いを露骨とさえ思える文面で、吐露しようと考えていたに違いない。

当然のことながら私は、いたく挑発され、刺戟されて、彼女を責めたくて、もう矢も楯もたまらなくなっていた。SMの好き心が、

今や彼女によって最高にかりたてられ、一日中、ぶっ通しでも、責め続けたいという気持ちになってしまっていた。

私が深田菊子と久方ぶりに逢ったのは、薄曇りで底冷えのする日の午後であった。

待合させた喫茶店では食事は出来ないというので、連れだって数軒先のレストランへ向

かった。今まで彼女と逢ったときは、逢うたびに着てくる洋服が変わっていて、そんな深田菊子の屈托のない明るい表情を見ているのは、至極、楽しかった。

今日は黒いスーツに、その長身を包んでいたが、その地味な黒一色が、また、色の抜けるように白い彼女には、よく似合っていた。

私は肩から提げていたブロニカを構えて、二枚、三枚と菊子をスナップした。

曇っていた空からは、今にも雨が降りだし、そう、襟元を通りすぎる風も、なんとなくうそ寒く、ペーブメントを這ってきた風は、砂塵を巻きあげていた。

△仏蘭西△という名のレストラン。珍しく漢字だけの名前だな、と思っていたところ、テーブルの上に置いてあるマッチの字を見て彼女は無邪気に私に問いかけた。

「これ、なんて読むの？」

彼女の声は甘ったるく、私の心の中に手を突っ込んで、ゆさぶるような響きがあった。原稿用紙に書けば、変哲もない文字の羅列なのだが、深田菊子の口から出てくると、たまらない魅力で、私は全身で、もたれかかってくるように思える色気があった。

「仏蘭西か、これはフランスと読むんだ。そ



う言えば、この店のどこにも仮名では書いてなくて、皆、漢字なんだナ。菊子が読めなかったって、不思議はないさ」

「へーエ、これが、フランス？」

彼女は大きな目を、くりくりさせた。

それから、食事をしながら、例の人なつこい語り口で、今までの自分のことを、あれこれと喋りだした。またまた、ガソリンスタンドでのパンク修理剤のPRに駆りだされた話や、そこでドライバーの若い男性から、手を握られたこと等を面白おかしく話した。

初めて一人で郊外をドライブしたときの恐ろしかったことなどを、身ぶり手ぶりおかしく喋っている深田菊子からは、SMが好きな女だという片鱗さえも窺うことは出来ない。

事実、彼女はSMがかった話題は、少しも話の上には載せてこない。私は隙があったら彼女から貰った手紙のことを言いだして、深田菊子の真白い頬が、ぽっと染まるところを是非、見たいと思った。しかし、彼女は次々と話題を変えてゆくので、私は、そのことを言い出す、きっかけがなかった。

週刊誌に出ている歌手や芸能人の噂話、それに若い女性の服飾の流行のことなど、私の知らない知識を、彼女は豊富に持っていた。



私は深田菊子のお喋りを、ただ、フンフンと言って聞いているばかりであった。

木枯し吹きまくる街を離れて、暖房のよくきいた奥まった密室に落着いたのは、それから一時間ばかり経ってからであった。

窓という窓には、厚いカーテンを降ろして極度にルクスを落とした部屋は、深海のよ

うに静かであった。深田菊子は、その深海で泳ぐ深海魚のように妖しく見えた。

私は、彼女から貰った手紙のことなど、今更ここで話すのが、まどろしくなった。

彼女の手紙の内容を、今、直ちに実践にうつし、スキニシップ的なSMプレイを激しく展開させてゆきたかった。





「菊子。この前、Kさんに責められたときはどうだった？ 大分、泣いてたじゃないか」

「ええッ？ それ、なんのこと——」

「とぼけるナ、俺が隣の部屋にいるのに、Kと二人で、いちゃつきやがったじゃないか。あれを忘れたとでも言うのか」

「ああ、あのこと。だって、あるとき、あん

たが、この人に、一度、責められてみないかって言うからよ。それに、あのKさんったらしつこくて、しつこくて、隣に聞こえるからいやって言うてるのに、無理に……」

「責められたって言うんか。そりゃ、一寸、責められてみるかって、言ったことは言ったさ。でも、目の前でSMプレイをやって、

言った覚えはないゾ。それに、いやだ、いやだって、言ってるが、大分、嬉しそうな声を出してたじゃないか」

「知らないッ。みんな、あんたが仕組んだワナだわ。私ね、本当は、あんた一人に責められたかったのよー」

「何をヌケヌケと今更、言ってるんだ。あれから、Kに、どんな責められ方をしたんか、言ってみろ。手紙に書いてあっただけか」

「そうよ。だから、正直に告白したでしょ」  
「そんなことはあるまい。今日は、これからお前の身体にきいてやるからナ。責めて責めて、グの音も出んくらい、責め抜いてやる」

私は深田菊子の衣服を忽ちのうちに脱がしてしまおうと、たおやかな肌に縄を掛けていった。彼女の手の指が花卉のように動いて、縄を捌く私の手の甲に、まつわりついてきた。

柔らかく、そして、ねっとりとした掌の感触であった。ねばりつく様な、その掌の粘りが、今の彼女の心の中を暗示しているようだった。これから展開される、あくなき羞恥責めに対する期待が、徐々に燃えだそうとしていく兆しが、そこに見えたような気がした。

縄は面白いように、よく締まった。  
締めつければ締めつけるほど、きゃしゃな



菊子の胸や胴体が、縄によって、くびれていった。菊子は一言も痛いとは言わない。

諦めきったように、私のなすがままになっている。私は要所要所を、しっかりと縄で締めつけ、緩まないように堅結びで縄止めしていった。

大体、女の身体というものは、あらゆる個所が性感帯であるといつてよい。個人差があるので、こんな所が——と驚くような場所であつたりするが、とにかく、縄という責めの小道具が、女の身体の各所に散らばっている性感帯に対して、どのように微妙な刺戟を与えるか、これは計り知れない。

それと、もう一つ、縄の忘れてはならない効用がある。縄によって自由を拘束することは、もう、どうしようもないと諦めさせ、観念させるところに、女体の良さと美しさが現われてくる。観念した女の美しさ——というものは、縄によってこそ、縛りによってこそ現出されるのではないだろうか。

羞恥責めの効果は、逃げだすことの出来ない



い／＼緊縛／＼によって倍加され、更に、責め手の執拗な視線が、責められている女体に注がれることによって、一層の被虐心を、あふりたてることになる。

／＼見られている／＼ということは、これは、あ

ながち、露出癖のある女性に限らなくとも、女には性的な強い刺戟であるものだ。

Sに限らず、男性にとっても、見る——眺めるといふことは、これはまた、激しい感激を呼ぶ刺戟でもあるのだ。

『見られたい』という女性の側と、『見てみたい』という男性の側の期待が、この一筋の縄を媒介として、ここに火花を散らすのだ。

もし仮に、緊縛というものがなかったならば、／＼見られたい／＼という内心の期待を抱いている女性でも、直ちに、その場から逃げだしてしまふに違いない。

一筋の何の変わりばえもしない、この縄が男性と女性の心の釣り橋となつて、絆の役目を果たしてくれることになるのだ。

更にその上、相乗効果を狙って、視線によるいたぶりに加えて、言葉に依る揺さぶりをネチネチとやったならば、羞恥責めを受けている女は、感極まって思わず声を挙げ、しど、濡れそぼってしまうに違いないのだ。



上半身だけを、きっちりと縄で拘束しておいて、下半身は、自由にしておけば、露出癖が強くて羞恥責めの好きな深田菊子が、どのように、うっとりとした表情になって、悶えるだろうか。そのときの身体の各部分の変化も見逃がすことの出来ないものだ。

### 虐待のSMプレイ

熱気を帯びた、この密室は、普段の平凡な日常生活の中では、とても出来ない空想の所産を、SMプレイという虚構のうちに現実とダブらせてくれる場所でもあった。

「菊子。今日は、これから、お前が今まで他の男と、SMプレイをやった様子を告白させるからナ、正直に答えるんだゾ」

私はそう言って、彼女の縄尻を握って奥の部屋へ連れてきた。今日はいつもと違って写真撮影の準備は、していない。というのは深田菊子から、この前に手紙を貰ったときからカメラなんかは、かなぐり捨てて、滅多矢鱈に、何時間も、ぶっ通しで

責めてやろうと決意していたからだ。

憎い気持は、いささかもないのだが、この胸の中に、フツフツと煮えくりかえってくる

嫉妬の思いは、やはり、このなよなよとした深田菊子が滅法、可愛いからか？

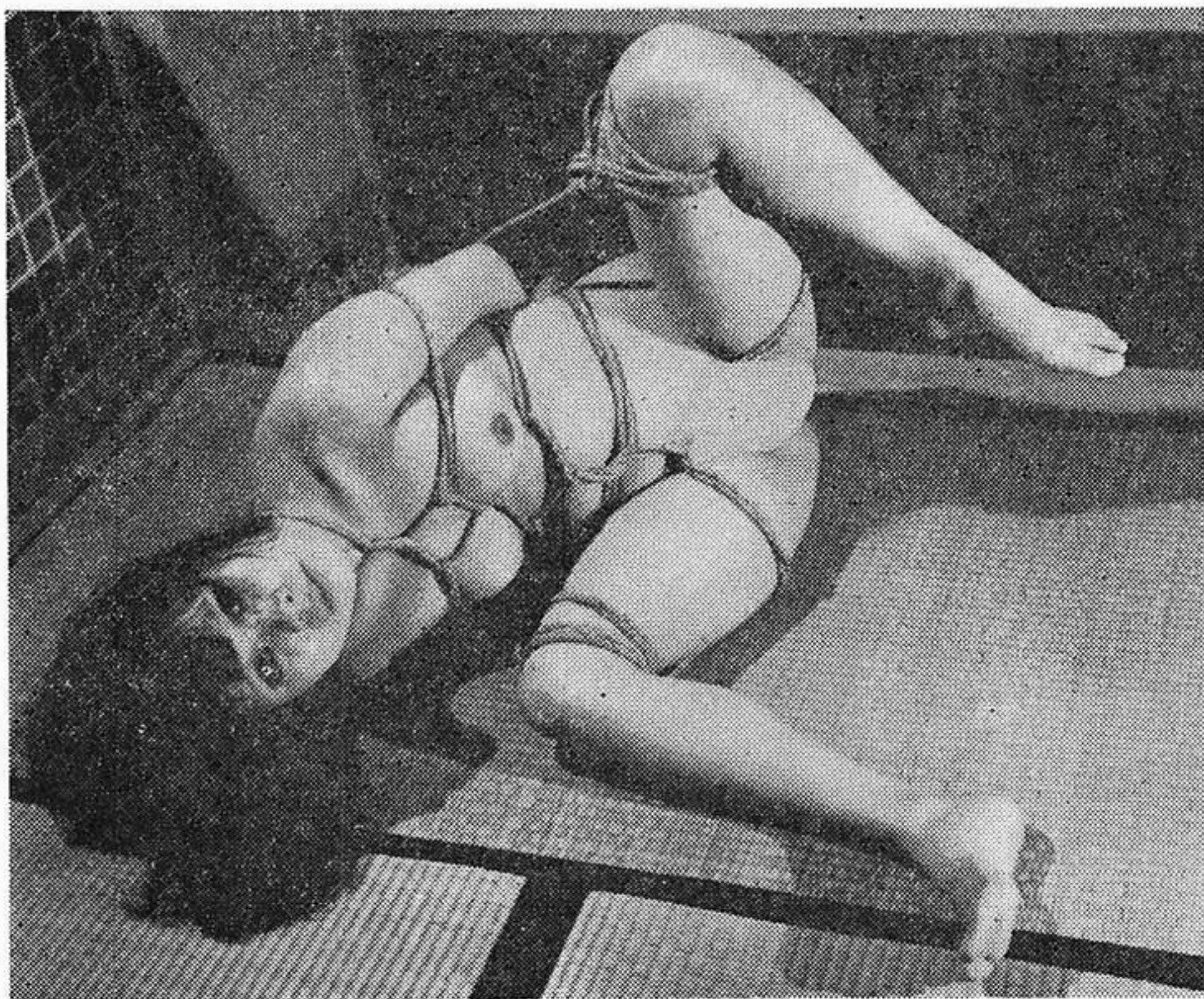
可愛いくて、可愛いくて、仕方のない菊子

が、自分とは他のS男性に、責められたということが、いや、責められただけではない。責められた上で、歓喜の声さえ挙げたことが許せないのだ。達観した気持でいた私なのに今、菊子を目の前にして、縛られてしおらしい風情をしているのを見ると、ムラムラと怒りにも似た感情が湧き上がってきたのだ。

唇を、きゅうと噛んで、縄尻を邪慥に引き寄せると、マットレスの上に敷いた布団の上へ彼女を荒々しく転がしていた。

私が、鈴木千鶴子を責めたり、笠井奈保子を飼育したりしていた数カ月のあいだに、深田菊子は、何人かの男とプレイを楽しんでいたのである。何人の男に、一体、どのような責め方をされていたというのだろうか。

私の疑心は、暗鬼となって胸のうちに、黒い雲のように、ひろがって





きた。

この白くて、たおやかな手も足も、いや、もっと女として大切なところも、さんざんに責められたのに違いない。自分が一人で独占しておきたかった、この麗わしい女体が、知らない間に、他人によって、いたぶられ、責め抜かれていたのだ。自然、彼女を扱う私の手にも力が、こもってきた。

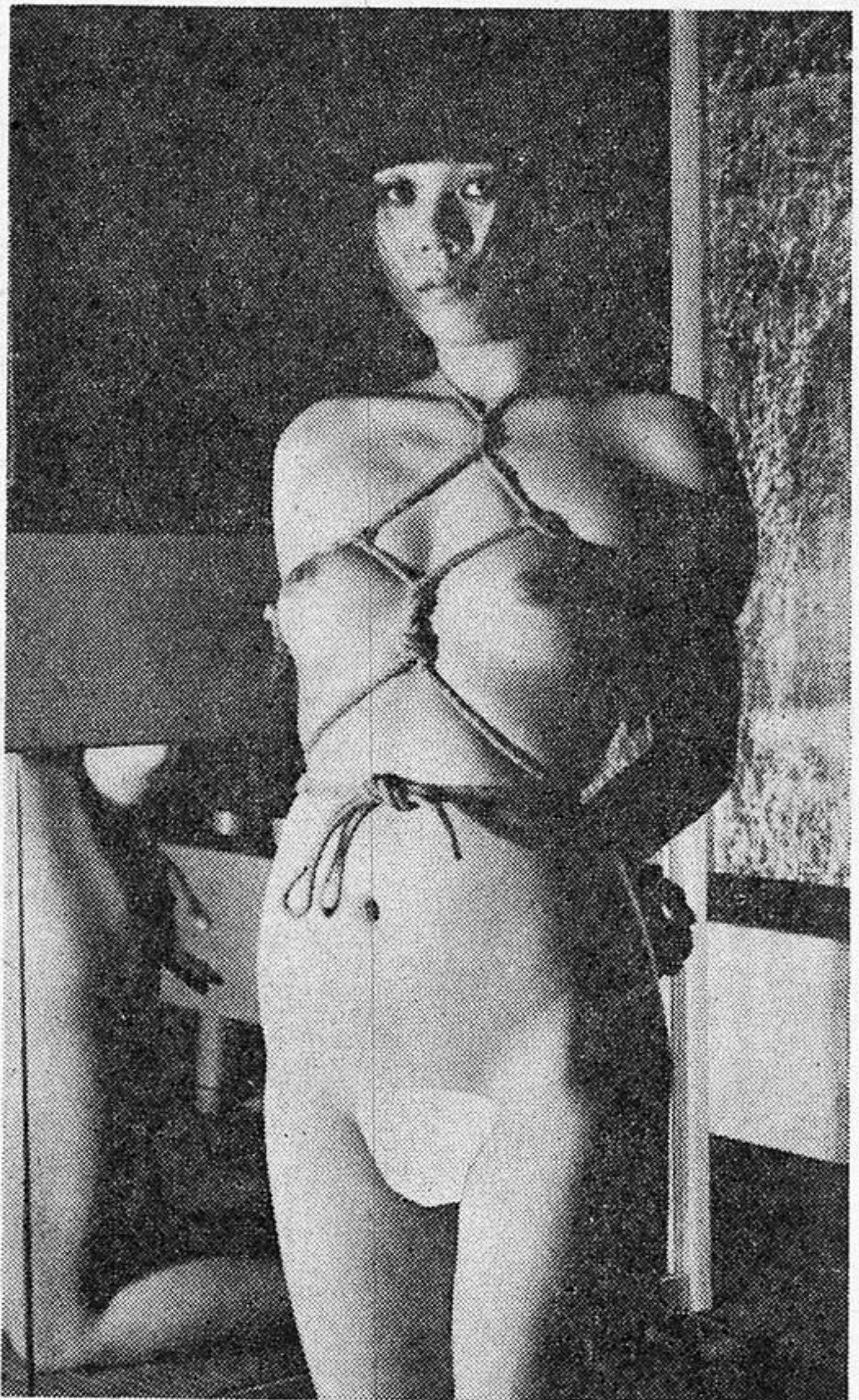
深田菊子は、蒲団の上に仰向けに倒れ、両足を開いたような格好で調子をとってから、右へ倒れた。躍動した脚の太股のあたりが、薄暗さに馴れた私の目に、白い矢のように光り、足の裏が銀鱗の躍るように見えた。

二の腕や胸に掛かっている縄は、恐ろしいほど強く締まって柔肌に喰い込んでいる。きつと後手首を括った縄も、じりじりと喰い込み、締めつけているのに違いない。

私は、がばと彼女を抱き起こしていた。ゴツゴツとした縄の感触が、私の掌に、腕に、胸に伝わってきた。

一瞬、菊子の全身が、ブルブルッと私の両腕の中で痙攣した。私は右手で彼女の背を抱え、左手をお尻の方へ回していった。

温い。冷たい筈の、お尻が温いのである。夏は冷たい肌の女が良い。そして、冬は、



温い肌の女が最高なのだ。

冬の寒い日に、ゾツとするような冷たい膝小僧を、すり寄せられたりしたら、千年の恋も一遍に冷えきってしまう。やはり、ほかほかと温かい肌を寄せられてこそ、最高の気分を味わうことが出来るのだ。と、同様に、夏には何といっても、冷たい肌の女がよい。

歌舞伎の女形おやまなんかは、舞台に出る前には氷で掌や肌を冷やしてから、相手役に接する

そうだが、深田菊子は生まれながらにして、そんな男心の機微を知った女だった。

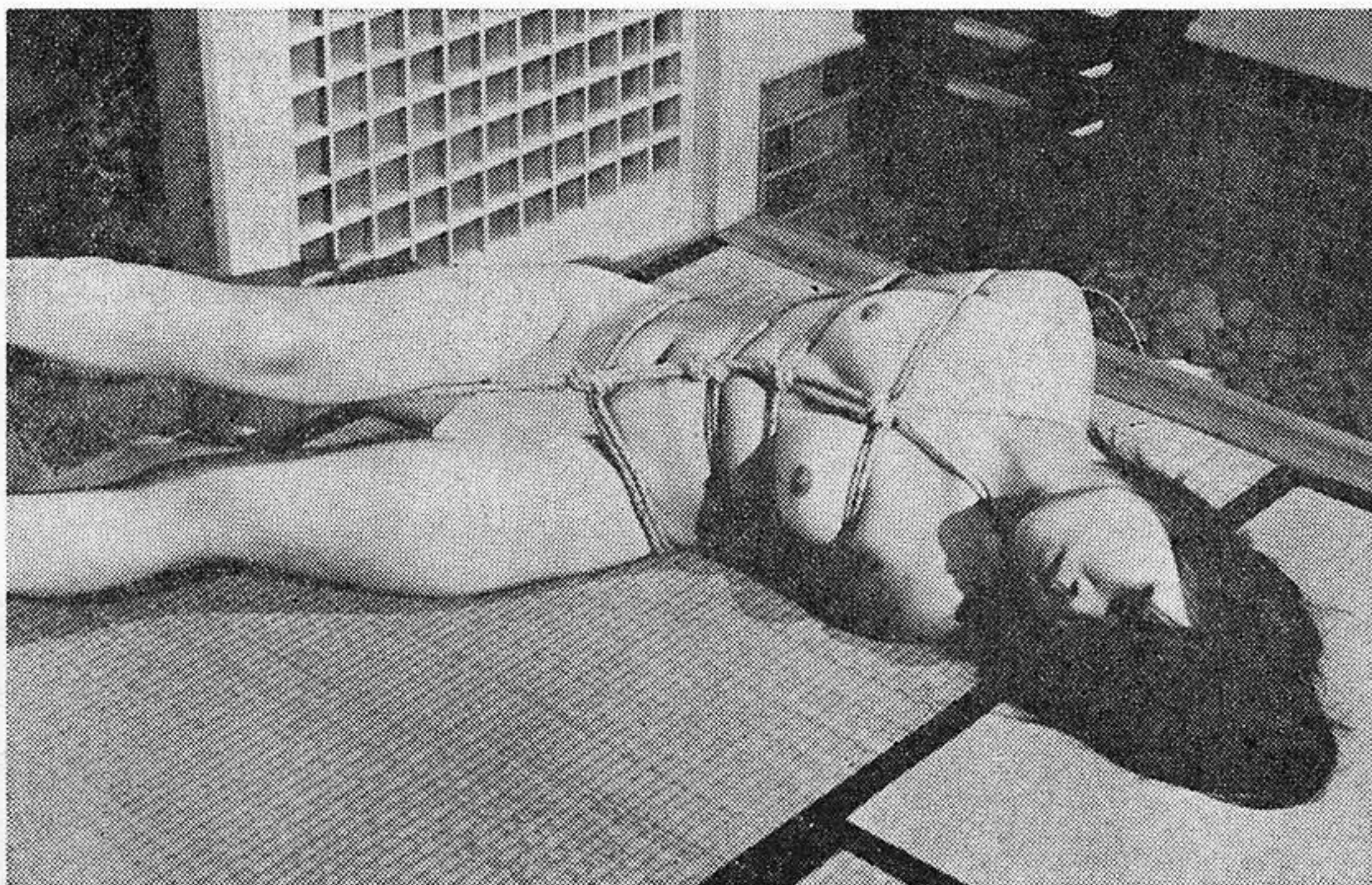
私は菊子に頬ずりをしてから、顎の下、首筋へと、唇を這わせていった。

「く、くすぐりたい。やめてエ」

彼女の口から、甘ったるい声が洩れた。

でも、上半身を縄で、がっちり縛られていたのだから、どうすることも出来ない。いや、縛られて、どうすることも出来ない状態





の中で、気味の悪い唇を、自分の肌に這わされているということに被虐心を最高に燃え上がらせているのに相違ないのだ。

きつと、次に自分の身体の上に加えられるであろう羞恥責めに対して、限らない期待を抱いて、胸をわくわくさせているのに違いな

いと、私は思った。  
さっきの全身の痙攣だって、その期待の、あらわれではなかったのか。

だが、私は、ここで彼女の期待する羞恥責めへと、一気に突き進んでゆくことはしなかった。

深田菊子の甘ずっぱい体臭を存分に吸いながら、唇を肌に這わして、彼女のとろけるような嬌声を存分に楽しんだ上で、突き離すように布団の上へ転がした。

ぶざまに倒れた菊子を見届けてから、立って、天井の間接照明のスイッチを入れた。

途端、部屋は深海魚の棲家より一瞬にして、昼のように明るい舞

台に変貌した。

深海魚から人魚に変わった深田菊子は、白い裸身を掛布団の上で、くねらせている。

「菊子。責められる覚悟は、十分に出来ているナ。俺の留守に、さんざん、他の男とプレイしてきたんだから、責められても仕方あるまい。身体が、どのように変化しているか、これから調べてやる——」

私は躍りかかって彼女の脚にとりついた。  
しなやかな長い脚を、思いきり左右に、おっぴろげて、羞恥の花芯を徹底的に調べあげようというのだ。

芳紀まさに二十一才。花にしたら、今、開いたばかりの瑞々しい菊子の肢体である。それに、肢体のどの部分をとっても美しい。私は心はずませて、手をからませた。

「いや、いや、いやいやいや」

菊子の脚が激しく動いた。仰向けになりながら、私の手を脚に触れさせまいとした。

ねっくりとした足の裏が、幾度も私の頬に当たった。片方の脚にとりつくと、一方の足で蹴られた。私は蹴られないように、左足の外側から足首に、とりついた。今まで、派手に両足をバタつかせていた菊子は、私が足首を捉えると、両膝を閉じて静かになった。



私は彼女の足の裏に指を這わせていった。

「くすぐったいから、やめて、やめて——」

菊子の口からは許しを乞う言葉が洩れていたが、身体の方は、諦めたのか素直に擦り責めを受けている。

足指のつけ根に、もぞもぞと指を這わせると、たまらなく擦ったいのだろう、足の指がひくひく、ひくと指人形のように動いた。

足の裏から踵、そして脛から太腿へと、私の執拗な魔手は、這い上がっていった。

真白いお腹が、激しく起伏するだけで、菊子は、ただ、じっとしていた。先程の、あの激しい脚の抵抗が嘘のような落着きようである。嵐のあとの静けさというのであろうか。

私は彼女の肌に指を這わせながら全身に亘って、その表情の変化に、じっと視線を注いでいた。

菊子は、うすく口を半ば開けて顔をのけぞらせていた。顔の表情は、うっとりとして、涎でも、たらさんばかりの風情である。



はつきりと見せて、稚さの中に、ある種の情熱を秘めているように思えた。

皮下脂肪の少なそうな、ぺしゃんこに凹んだ真白いお腹の真ん中に、可愛いお臍が、何事もなかったように鎮座している。

私は、いつか、若い女の屍体を見たことがあるが、ほんの二、三時間前まで、ピチピチと活動していた女体が、今は一個の物体として冷たく横たわっていることに、奇妙な感動を覚えたことがある。

マニキュアした指一本にしても、小さなスリ傷のついた膝頭にしても今、目の前の物体が数時間前には生きて動いていたということに、何かしら切ないまでの激しい感情を持つと共に、その肢体の各部の一つ一つが妙にエロチックに感じられた。

乳房は無雑作に掛けた縄で、ひしゃげて、乳首が僅かに、縄と縄の間から頭をもたげていた。何人かの男の手で、弄ばれたかもしれない、そのピンク色の乳首は、乳頭の窪みを

る深田菊子は屍体ではないが、身動き出来ない身体であるということに、私は一つの共通点を見出して、いろんな妄想を逞しくしていた。こんな感情は、私一人だけのものだろう





か。

足の拇指の爪を見してみる。これが、深田菊子という女性の爪なのだ。綺麗に切りそろえてあるが、いつ、切ったのだろうか。

私は、そんなことを考えつつ、縄尻を左足の膝頭に、からませて締めつけていった。

自分の意志で、積極的に、そうしているのでは、決してない。菊子にしても縄で縛られて、無理矢理、そんな恥かしい格好をさせられているのだから仕方がない、という口実が

ほしいけれど、実際は、自分から、進んで見せたいのが本心であろう。

『見られたい』『見せたい』という熾烈な露出癖が、今や、縄という一つの小道具を媒介として、満足させられようとしているのだ。

私としても、数カ月の間に、深田菊子の身体が、どのように変化しているか、見てみたかった。泣きながら、私の目の前で排尿して見せた、あのときの感激を、今ここで再現してみたい気持であった。

——一番恥かしい責め方——というのは一体どんな責め方なのだろうか。

深田菊子は、真実それを願っているのだ。

私は、右と左の膝頭に縄をからませて、ぐいぐいと、引き絞っていた。

### 嫉妬の羞恥責め

もう今までに、何十人、何百人もの女性のソノ部分を見てきたことだろうか。全く千差万別といってよかった。人の顔が、それぞれ各人違うように、いや、それ以上に、際立った個人差で、各々その特徴を見せていた。

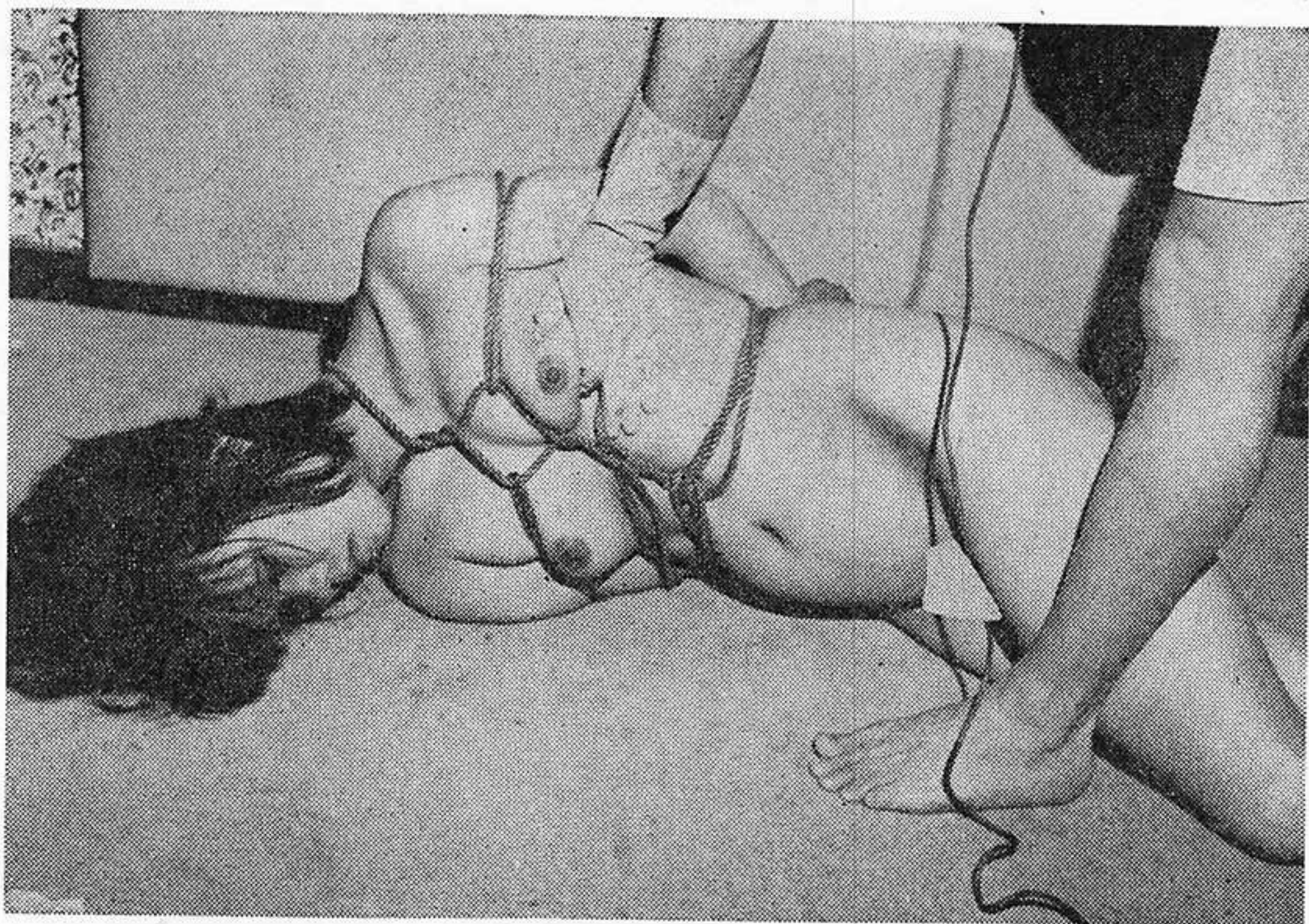
附属物にしたって、濃さ、薄さ、生え際の部分の様子なんかは、一人一人、すべて異なっていたが、大別して、眺めてみて、上品で可愛いものと、下品で憎々しげなものに、分けることが出来るだろう。

深田菊子のは、比較的、薄くて可愛いかったが、それは一種の稚さにも通じていた。

嘗て、読者通信で、彼女が自分の好きなSMに関連した言葉を挙げていたが、それらの言葉を分析してみると、どうやら、菊花とか排泄について、より強い関心を抱いているように見受けられた。

初々しい羞らいを見せて、堅く締まった蕾





の菊花は、深窓の姫君のオチヨボロのように可愛いく、美しかった。

私は両足に手をかけて起こし、お尻を天井へ向けるようにした。菊子の長い脚が宙に浮いてバタバタし、お臍のところが、ぽこんと窪んで女体は二つ折りの格好になった。

両膝に縄が掛けられているので、両股は、いやでも開かねばならなくなってくる。

私の足下で仰向けになっている菊子の顔が次第に紅潮してくる。

「菊子、今までに私以外とSMプレイをやったのは、何人ぐらいになるんだ」

「あなた、よく、ご存知なんでしょう？」

「いいから、その名前を言ってみろ」

「辻村さんと、Kさんと、それに、乃美さん。く、苦しいわ。そんなに足を曲げたら、

胸が締まって、息苦しいのよ」

「ゴマ化すな。その三人だけじゃないだろ。まだ、もっと、ある筈だ」

「Sさんに、小杉さん。それから、いや、いや、足の裏、くすぐらないで……」

「小杉さんといえば、小杉千恵さんのことだな。まあ、女性はいいとして、まだ、あったろう。ホラ、車で菊子のあとをつけてきて、喫茶店へ誘ったという男——」

「あの人とはプレイなんか、しないわよ」

「正直に言わないナ。かくすところを見ると、益々怪しいゾ。言え。言え。言わんか」

菊子の脚を手で支えているだけでは、まことに不安定だった。私は生温かくて、すらりと長く伸びている足を、ぐぐっと、逆に頭越しに蒲団の方まで曲げた。足の裏が菊子の顔の両側に、大きく開いた格好で、ついた。

左右に花を開いたような足の裏に、私は自分の足の裏を、ぴったりと、のせた。脂足の私の足の裏と、菊子の、ふくよかな足の裏とが、吸いつくように合わさった。

深田菊子のお尻は、天井に向かって高く、その姿を誇らしげに晒し、その羞恥の部分は私の目の前に見事に開花していた。

「どうだ、その男ともプレイしたんだろう」



「喫茶店へ一緒に行って、別れしなに、ここへ電話してくれて、メモに番号、書いてくれたけど、電話しなかったわ」

「なぜ、電話しなかったんだ？」

「メモの紙きれ、失ったからよ」

「失わなかったら、電話してたんだナ」

「そんなこと、知らない」

「こいつ、なめやがって、真面目に返事をせんかッ。痛い目に合わすゾ」

私は、背中に挿していたムチを抜いて右手に持ち、まんまるい菊子のお尻めがけて、発止と打ち下ろした。だが、両足を開いて菊子の足の裏に乗っている不安定な姿勢からムチを振りおろすのと、それに、余りにも距離が近すぎて、さっぱり、力が入らない。

まるで真似事のような打擲になった。

それでも、不意打ちをくらって、菊子の全身がピクッと緊張した。その動きが、足の裏を通して、私の身体にも伝わってくる。

「だって、電話しなかったの、本当なんですもの。いくら聞かれたって、仕方ないわ」

「言わないナ。言わなきゃ、こうしてやる」

私は目の前に花開いた部分へ、先が十数本に分かれたムチの先を垂らして、触れるか触れないかの軽いタッチで弄んだ。

「いや、いや。擦りたいから、やめて——」

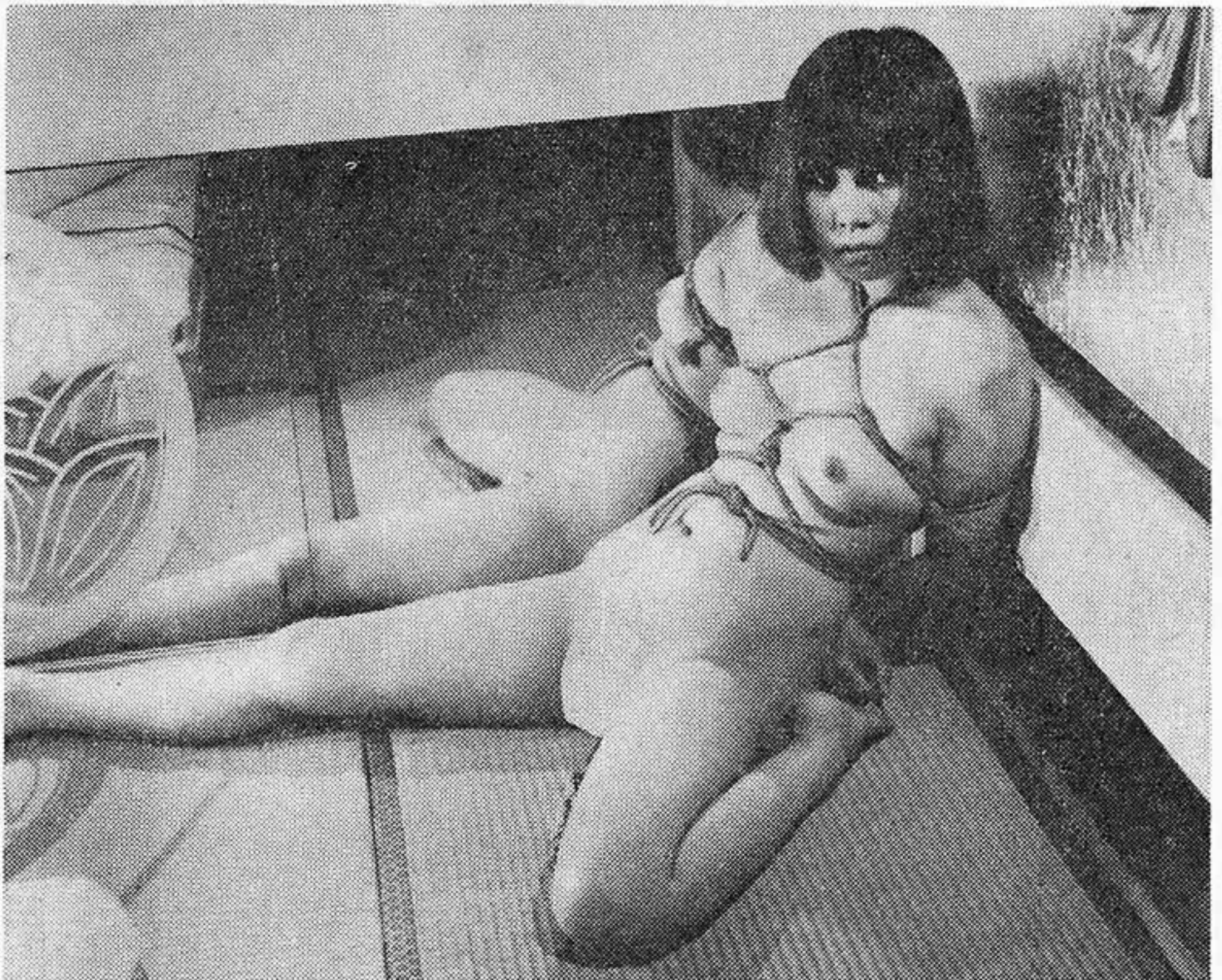
柔らかいナメシ皮の細い紐は、太腿から、お尻そして陰翳の深い部分へと、ナメクジのように執拗に這っていった。

「それだったら、正直に言ってみな」

「なんにも、言うことななか、ないわよ」

ナメシ皮の紐は這うだけではなく、陰微な個所で軽い踊りを、始めた。ムチ打つよりもこの方が余程、責めの効果があるようだ。その効果は、私の目の前で、テキメンに結果を報告してくれた。樹液が次から次へと、溢れ出てきたのが、その証拠である。

今や、緊縛の苦痛が、限らない愉悦と、すり変わっていったのであろう。



この女体の、いちじるしい変化は、私にとっても至極、責め甲斐があった。反応が激し



ければ激しいほど私の胸も燃え、責めの手にも力が、こもっていった。

一人相撲ではないのだ。

菊子と、一身同体となって、今や一つの目標に向かって真っしぐらに邁進しているのだ。

私は責める悦びに身を灼き、彼女は責められる歓びに、身を焦しているのだ。

私は△プレイ▽という虚構の世界のなかに没入して、現実の煩しさを忘れていた。

△女体責め▽というものは、よし、その責める理由というものがなくなってしまうにしても、その対象の反応が著しければ、著しいほど、責めの口実は見つかるものだ。

いや、口実なんて、今の場合は、どうしてもよかった。とにかく自分の触手の一挙手一投足によって、この深田菊子という美少女が、どのように、呻くか、見たかったのだ。

私が、ムチを振り上げて、熟しきった菊子の臀部を打とうとしたのと、彼女が、それを避けようとして、身をよじったのが同時であ



った。なにしろ、マットレスの上に布団を敷いてあるのだから、フワフワとしていて安定性が少しもなかった。

私は右足に力をこめた途端、左足が浮き上がってしまった、窓のカーテンにつかまろうとした手が滑ったかと思うと、どっと、右倒し

にころげ、はずみで右肩を、したたか、壁で打ちつけてしまった。

「どうしたの、大丈夫？」

仰向けの二つ折りの姿勢から横倒しになった深田菊子は、私の方を見て、心配そうに甘く、いたわりの籠った声で尋ねる。

「いいや別に大したことはないよ」「だったら、この縄解いて。膝のと

こが縄ですれて、それで痛くって」今日は写真撮影を主に行っているのではなくSMプレイ、なかでも羞恥責めを狙いに行っていたので、特に軟らかい縄を用いたのだが、それでも彼女が、もがきにもがいたため、膝頭のうしろの方が赤くなっている。

私は、その縄だけを解いた。

「今まで、ずっと仰向けだったから後手首が痛かったろう。今度は、うつ伏せにしてやるから、布団に胸をつけるんだ」

私は菊子の腕に手を借して、抱き起こす。

顔を右に向けて頬を布団に、ぴったりと付け、縄で縛られた胸も、布団に付いている。膝を立てているので、いやでも、お尻を突き





出しているような恰好になる。

縛った後手首の縄を調べてみる。

縄は緩むどころか、益々きつく手首に喰い込んで締めまり、菊子の手全体が真白くなって触わると冷たい。揉んでやりながら言った。

「どうだ、辛抱できるかい？」

「ええ、手はしびれてるみたい。でも、まだ

まだ、辛抱できるわ」

「そうか、それだったら、これから、アヌスの検査をしてやるから、両膝を、もっと大きく開いてみるんだ。その方が安定するゾ」

「アヌス？ そんなの、いやヨ、いやヨ」

私は深田菊子の背後へ回った。私が何をしようと企んでいるのか、何をしているのか、

彼女の方からは、少しも見えない。

私は双丘に手をかけて押し開いた。

「いやーアン、やめて、やめて……」

彼女の悲鳴が続けざまに起こった。

それから、私が菊子に加えた責めは、皆様の御想像にまかすとして、最後に、感極まった私は、菊子の水蜜桃のような真白い臀部に思わず齒型をつけてしまったことだけを、正直に告白しておこう。

私が、そこに至るまでには、皆様が妄想されるであろうほどの、あらゆる羞恥責めを加えたことは事実である。それで、空想されるよすがにもと、次に、そのときに用いた小道具だけを挙げておこう。

メンソレタム、ネジを切ったように筋が入って先の尖った赤色のキャンドール、小型バイブ二本、イチジク浣腸三個、携帯用ビデオ、クスコ、オシメ二枚、オシメカバー、大筆一本、クリップ五個、などなど――。

私が深田菊子の縄を解いたときは、完全に放心状態になっていて、全身に力がなく、ぐったりと布団の上に、のびてしまっていた。

お互いに、SMプレイに熱中しているときは、汗びっしょりで、ムンムンとした熱気が部屋中に充満しているようだったが、そうし



た空気が、すべてが冷めてしまうと、かいていた汗さえも、ひんやりとして、布団をかぶらないではおれない気持ちになっていた。

静かで、物<sup>う</sup>嫌いひととき、早く、SMプレイの後始末をしなければいけないと思いつつも、いつしか、深い眠りに陥ってしまった。それは、快い暫しの休息であった。

### 股間縛りの散歩

どちらが先に目が覚めたのか知らないが、二人共、布団の中で現実に戻っていた。

快眠のあとでは、私の頭は軽く、目は冴えていた。寝起きのよい私は、目が覚めれば、すぐにでも、次の行動を開始したかった。

私の傍の同じ布団の中には、縄を解かれた深田菊子が裸のまま横たわっていた。

私は、彼女の方へ、そろそろと手を伸ばしていった。

「もう、早くから起きていたの？」

「いいえ、今、目が覚めたわ。トイレへ行きたいと思っていたとこなの」

菊子は寝返りを打って私の方へ向き直り、手をさしのべてきた。

柔らかくて、温かい肌であった。

手を肩から背中へと、すべらせてゆくと、

さつきのSMプレイの名残りのオシメカバーが彼女の腰に巻かれているのに触れた。

「この女は、すべて俺のものだ」

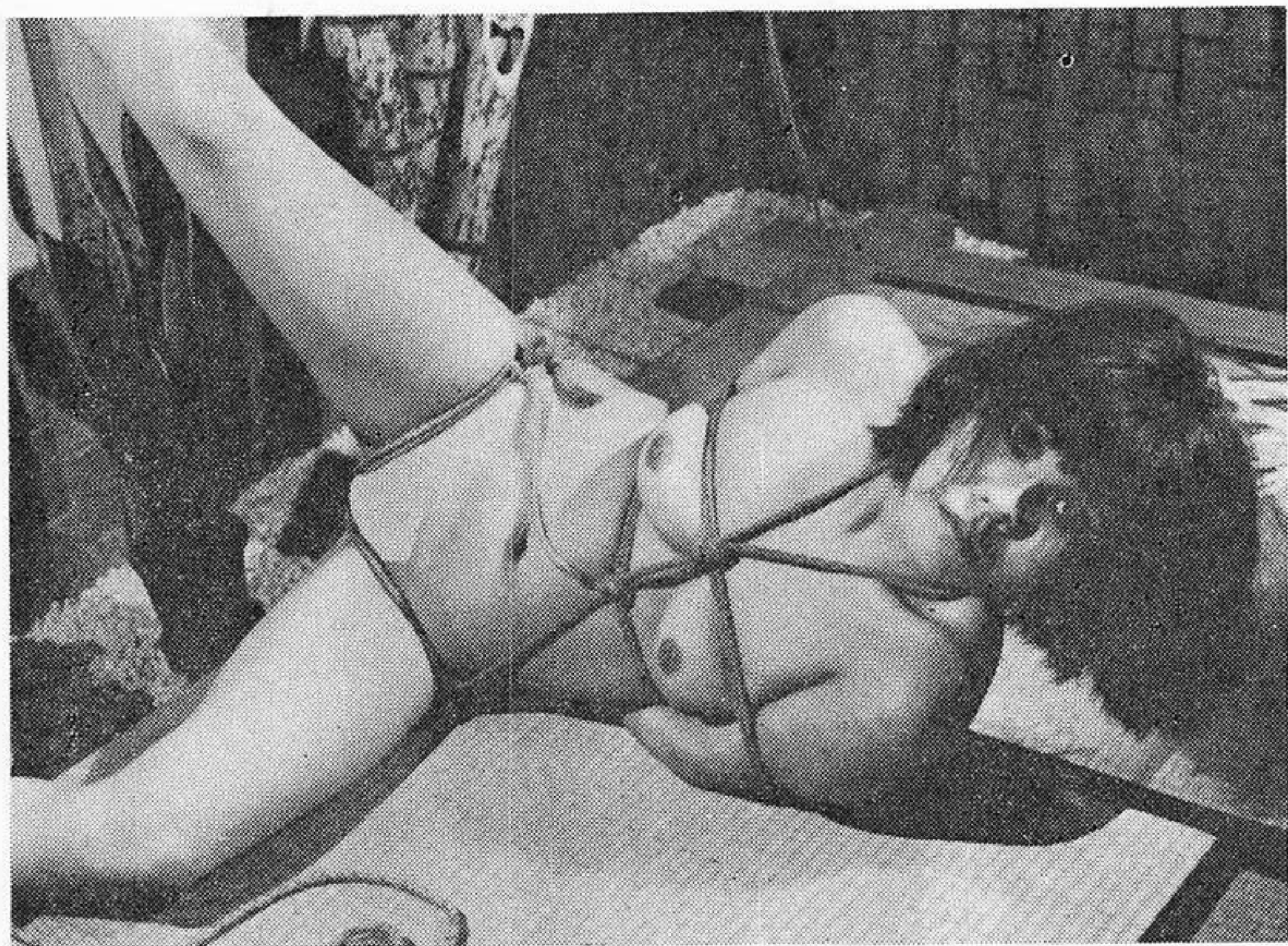
私は両腕で力いっぱい菊子を抱きしめていた。

責められる喜びを、身体を挙げて、ぶっつけてきた菊子の、先程の激情を思い浮かべると私は、いとおしくて、ならなかった。

二十一才になるこのSMに対して限らない理解を示す深田菊子という女性は、私の手中にあって思いのままに戯弄することが出来るのだ。この丸やかな肩、このすべすべとした二の腕、蒼白く鈍い光を放つ腹部。この女性<sup>せい</sup>の持っている女体の、どの部分も、すべて私の







所有物なのだ。

生きている一個のM女の身体を一時的にもせよ所有して、完全支配出来るということが、一体どんな快味であろうか。

「菊子。もう、お前を、誰にも渡さないゾ」

私は自分の所有物である女体を、もっと詳細に観察したいと思った。かくれた皮膚の、どんな微妙なヒダの一つ一つに至るまで自分の眼で、じかに確かめてみたいと思った。そう、確認しないではおれない気持だった。

入浴を終わった菊子は浴室で洗ってきたオシメを、手に、ぶらさげて言った。

「これ、今から干しても帰るまでには、乾かないわネ。どうしようかしら？」

つい、さっき、イチジク浣腸を三本、施したときに示した彼女の大仰な、あわてようを今更のように私は思い出していた。それなのに彼女は、そのオシメを、何喰わぬ顔をして手でぶらさげているのだ。

私の目の前で排泄するのを、あれほど嫌がって大騒ぎをした菊子が、そんなことがあったのを忘れたように平気な顔をしている。

女という動物は、全く不可解である。

「まさか、屑籠に捨ててゆくわけにもいかなから、ビニールの袋にでも入れておくさ。僕が帰りに始末するから。それより、これから、公園を散歩してみないか。面白いゾ」

「散歩って、今頃から？ 変ね。何のため」

「君がね、どれだけ、緊縛に対して辛抱できるかと思ってネ。一度、股間縛りにして、公園を歩かそうと思っているんだよ」

「なアーンだ、それだけのこと？」

「それだけって、菊子、これは大変なことなんだよ。途中で歩けなくなつて、路傍へ、しやがみこんでしまった女だってあるんだせ。

もっとも、菊子は縛りには強そうだから、他に、もう一つ、仕掛けはするがね」

「なんなの？ その仕掛けって——」

「ホラ、この二本のバイブさ。これを前と後





へ仕掛けてスイッチを入れ、オシメカバーを穿かした上へ股間縛りをするんだヨ。そうして、公園を散歩するって寸法さ」

「ひやー、そんなの勘忍。とても、辛抱できないわ。考えただけでも、冷汗が出るワ」  
「まあ、出来るか出来ないかは、やってみないことには、わからんヨ。僕の見たところじ

や菊子だったら、出来ると思うナ」

「いやヨ、いやヨ。出来ない、出来ない。そんなこと出来るわけじゃないの」

「だからさ、出来るか出来ないか、一遍やってみようじゃないか。公園を散歩する前に、今、ここで実験してみようよ。そして、OK となったら、外出してみるって、いうのは、

どうかね？」

「ダメ、ダメ。そんなうまいこと言って、私を、まるめ込もうたって、そんな手には乗らないわ。そんなことしたら、私の身体が、どんなになるか、よく御存知なんでしょ」

「だったら、一つ賭<sup>かけ</sup>をしようか。君は辛抱できんと言うし、僕は辛抱できると思っているんだナ。だから、若し菊子が、前後にバイブを装着して股間縛りにされて三十分も辛抱できずにダウンしてしまったら、菊子の勝ち。三十分以上、辛抱できたら僕の勝ち。これでどうだい？ 君が勝ったら、ホラ、この前、欲しいって言ってた、あの時計、買ってやるよ。やってみないか？」

「なんだか、変な賭だけど、やってみようかしら。自信は少しもないんだけど……」

「自信なんて、誰でも持ってないさ。それに人生は、すべて賭だって言うからね。きっと面白い勝負になるよ」

「そうかしら」

深田菊子は気のない返事をしながらも、私の方へ近寄ってきた。私は彼女の気の変わらないうちにと、せかして、トイレへ行かせてから、奥の部屋へ招き入れた。

襖を閉じると、この六畳の寝室は、一瞬に



して陰微きわまりないプレイの舞台に早変わりする。菊子は、その被虐劇の舞台で主役を演ずる哀れなイケニエなのだ。

私は彼女に仰向けになるよう命ずる。よく飼育されたM女は、素直に言われた通りのポーズをとる。次に起こる責めを心の中で期待してか、いそいそと手や足を運ばせているようにさえ見えた。

赤ん坊にオシメを当てる姿勢にさせておいて、私は前と後に、リモコン式のバイブを素早く装着した上で、生理用のT字帯で、きっちり止めた。彼女は、もう、すっかり観念してしまって、私のなすがままに、身をまかせきっている。いや、むしろ、私が作業し易いように、腰を浮かしたり、T字帯の締め具合を直したりして積極的に協力している。

T字帯の上にナプキン一枚を当てて、更にその上から生ゴム製のスキャンティを穿かせた。この全部、生ゴムで出来ているスキャンティは、少し小さ目だったので、菊子の腰部にピッタリと密着して、まるでノーズロのようになんて見え、見える。

「うわアー、きついわ」

立ち上がった菊子は、驚きの声を挙げたが伸縮性のある生ゴムなので、動作に支障をき

たすことはない。

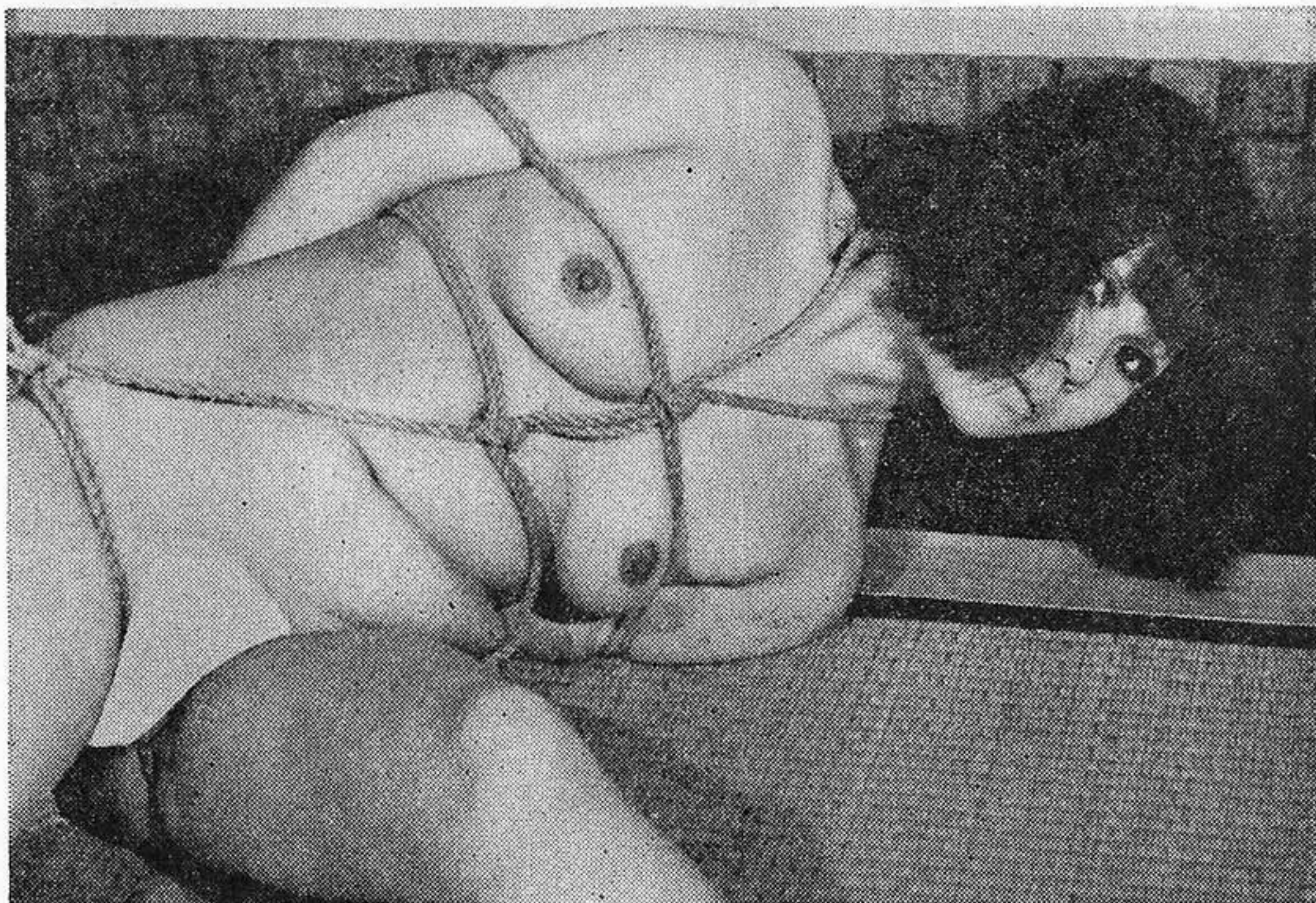
「よし、これで仕上がりだが念のために、この上から、股間縛りにしておこうかな」

「いいのよ、いいのよ。このゴム、物凄く締まるのよ。これで十分だわ」

「そうか、それだったら、股間縛りと後手に縛るのは、今は許してあげよう。でも、これからテストをするから、そのテストの結果如何では、股間縛りと後手縛りをやるからね。覚悟をしておくんだナ。さあ、スイッチを入れるゾ」

「ちょっと、待って。こんな裸のまま外へ行こうって言うんじゃないでしょうね。ここでだけのテストだったら後手に縛っておいてほしいわ。その方が、なんだか、責められてるって気分が出るもの」

「そりゃ、外へ出る時は寒いから洋服を着せてあげるよ。もっとも、御希望だったら、





このまま廊下を歩かせてやってもいいが、人通りのある雑踏の方が面白いと思うナ」

私は菊子の腰に二重に巻いた腰縄を打って、おいて、その腰縄に、うしろへ回した両腕の手首を、つなぎ止めて

固定した。やはり、両手が自由でない方が、より被虐心が満たされるらしい。それはM女としての深田菊子の先天的なものか、或は飼育によって啓発された後天的なものなのか。

恐らくは、その双方が競い合って、今の彼女のマゾを形成しているのだろう。

私は縄尻を握って彼女に歩くよう促す。

「どうだ、歩けるか。歩けたら、歩くんだ」

「ええ、どうやら歩けそうよ。少しは、なんだか、変な具合だけど……」

「どこが、どんなに変なんだ？」



「バカ、そんなこと言えないワ。いじわる」

途端に、私の手元のリモコンスイッチが、前のパイプに入った。そろそろと歩いていたら菊子の足が急に止まって、その場で両膝を合わせて、及び腰になった。

「イー、イーイー」

何かを、こらえるように、じっと全身を強

直させて佇んでいる。

スイッチを切る。ほっとして歩き出す菊子に、後のスイッチが入る。歩調は小幅だが、よちよち歩きをしている。

同時に前にもスイッチを入れると、もう立っておれなくて、壁に寄りかかろうとする。

「う、ううう、うー」

もう、立っておれないくらい、足元が危くなる。私は両方のスイッチを同時に切った。倒れかかるように、もたれてくる菊子の身体を支えながら、後手首を腰紐から解いた。

額に、うっすらと汗を浮かべて首筋のあたりから、ほのかな体臭を匂わせている。

「テストの結果は上々だ。さあ、これから外へ出よう。私の見えている前で、洋服を着るんだ。その上で股間縛りが必要かどうか、考えてみようじゃないか。いいね」

### 雑踏の中のプレイ

それから五十分程して、私達二人は、よう



やく賑やかさを増してきた駅前舗道を歩いていて。冬の日には暮れるに早く、公園の散歩道は、暗くて人通りも、まばらなので、勤め帰りの買い物客で人の溢れる盛り場へ歩を運んでいた。ここには、エレベーターやエスカレーターも備えた六階建てのスーパーマーケットがあった。ボーリング場が併設されているので、広大な無料駐車場もあった。

行き交う人は夥しい数である。だが、私と菊子と、二人だけの秘密、雑踏の中でのSMプレイを誰も知る人は、いない。

二人だけの秘密。その共通の秘めたる絆は二人の心と心を、一層、緊密なものにしてしまっていた。腰縄もしなかったし、私は縄尻も持っていない。でも、私の手元にあるバイブのリモコンスイッチは、深田菊子を完全に支配しているのだ。

深田菊子にすれば、自分の身体の奥深く、二個のバイブを埋没されたときから、リモコンスイッチを持つ私によって、完全に支配されてしまっているのだ。

一階の食料品売場の色とりどりのお菓子が山積みされているところへ来たとき、私は深田菊子の耳元で、ささやいた。

「賭の時間は三十分だよ、わかったナ。それ

までに君がダウンしなかったら、僕の勝だ。これから、一階の売場を回ってエスカレーターで二階、二階の売場を一周してから三階へという具合に、六階まで行って、再び順々に一階まで降りてくるんだ。これで丁度、三十分ぐらいになるだろう」

「ええ、わかってるワ」

菊子は人混みに、もまれて至って従順だ。私は先ず、後のスイッチを入れた。

よちよち歩きながら、彼女はエスカレーターの方へ向かって歩いてゆく。私は、あとをつけて追い立て追い立て、雑踏を掻き分けてエスカレーターのところまで来て更に前のスイッチを入れた。前後同時に作動である。







一瞬、菊子はビクツとして立ち止まりそうになったが、人の波に押されてステップに足をかけた。前、後、同時、前——という風に私は、せわしくスイッチを切り換えて、深田菊子の様子を、じっと窺う。背後から見たところでは別に異常は、なさそうだ。

二階のフロアーに、足をのせたとき、菊子

が私の方へ、よろめいてきた。

「ネエ、トイレへ行かせて。お願い」

「トイレだって？ さっき行ってきたばかりじゃないか。そんなの駄目だよ」

「そうじゃないのよ。もう、とても辛抱できないの。だから、お願い、トイレで……」

「何を言ってるんだ。まだ賭が始まって、五

分も経っていないんだよ。プレイは、これからじゃないか。今はタイムにしてやろう。だが、これから辛抱するんだ。さあ、歩いた歩いた。まだまだ、道は遠いぞ」

私が両方のスイッチを切ったので、彼女は渋々歩き出した。人が増えてきたので、二階を一周してエスカレーターの所へ戻ってくるのも中々、大変である。

スイッチが入ると、途端に彼女の歩調が乱れ、極端に歩幅が狭くなる。

そんな菊子が入る波にもまれていたのを見ると、私は嗜虐心にかられて両方のスイッチを同時に入れる。彼女が願って私の方に、うるんだ瞳を投げかけてくる。私は目顔で、ダメダメと顔を振ってみせる。

三階、四階、五階——と、やっと辿りついて、人の少なくなった売場の片隅で、二人は向きあって立っていた。

「ヒドイワ、ヒドイワ。こんな責め方をするなんて。私、もう、なんとか、なりそうよ」

菊子の顔が紅潮しているのは、あながち、雑踏のせいばかりではないらしい。汗ばんだ額に、おくれ毛が、べったりと、へばりついているのが、如何にもセクシーである。

「今で、丁度、十六分になるところだ。もう



少しの辛抱だ。菊子だったら、きっと辛抱できると思うヨ。三十分ぐらいならね」

「でも、三十分、辛抱できたら、私の負けになるんでしょ？」

「まあ、そういうところだな」

「いじわる。とっても、ずるいんだから」

「さあ、歩いた、歩いた。時間が経つゾ」

六階は家具売場で、至って

人は少ない。それに閉店間際で、お客は下へ下へと行っているのかもしれない。陳列したダンスとダンスの間へ、深田菊子を誘い込んだ。

「どうだ、こんな責めも万更じゃないだろう」

「知らない。いくら私がマゾだからっていったって、こんなヒドイわ」

「これだけ、沢山の人達がいあって、君の身体に、こんな仕掛けをしてるなんて、誰も知らないんだせ。面白いじゃないか」

「面白くなんかないわ。責められる身にも、なってごらん

なさい。そりゃ大変よ」

「いいから、いいから。これからエスカレーターで一直線に一階へ降りよう」

下りのエスカレーターで、私は思いきり、

リモコンスイッチの面白さを楽しんだ。

狭いステップの上で、他のお客に囲まれて身動きも出来ない菊子に対して、複雑な、と

り合わせで、前、後、同時を組合わせてスイッチを操作した。

六階から一階まで、降りてゆくエスカレーターのステップの上で、菊子は生地獄の責苦を味わっていたに違いない。私だけの耳にはブルン、ブルンというパイプ特有の鈍い響きと、彼女の熱い吐息が、はっきりと聞こえてきたように思えた。しかし、

雑踏の中の騒音は、他の人達には、何も聞こえていないのに違いなかった。

やっと一階まで辿りついたとき、菊子は、よろよろと、よろけてウィンドーの端に、つかまった。私は、そんな彼女に寄り添うようにして前に立った。帰りを急ぐ人達が、足早やに次から次へと通り過ぎてゆく。

「ねえ、まだ三十分にならないの？」

彼女は賭に勝つことよりももう一刻も早く、このあくなき責苦より解放されたかったのだろう。私は、そんな彼女





の表情が、たまらなく可愛いくて、スイッチを入れたり切ったりする手を止めなかった。「よく頑張ったナ。もう、とくに三十分は過ぎているよ。僕の言った通り、三十分以上は辛抱できるだろう。今やっているのは、まあ余興だよ。君が、あと何分、耐えられるかと思ってネ。試してみたのさ」

「イヤ、ずるい、ずるい。賭は私の負けだから、ね、もうやめて頂戴」

そのとき、閉店三十分前を知らせるチャイムが鳴って、アナウンスが始まった。

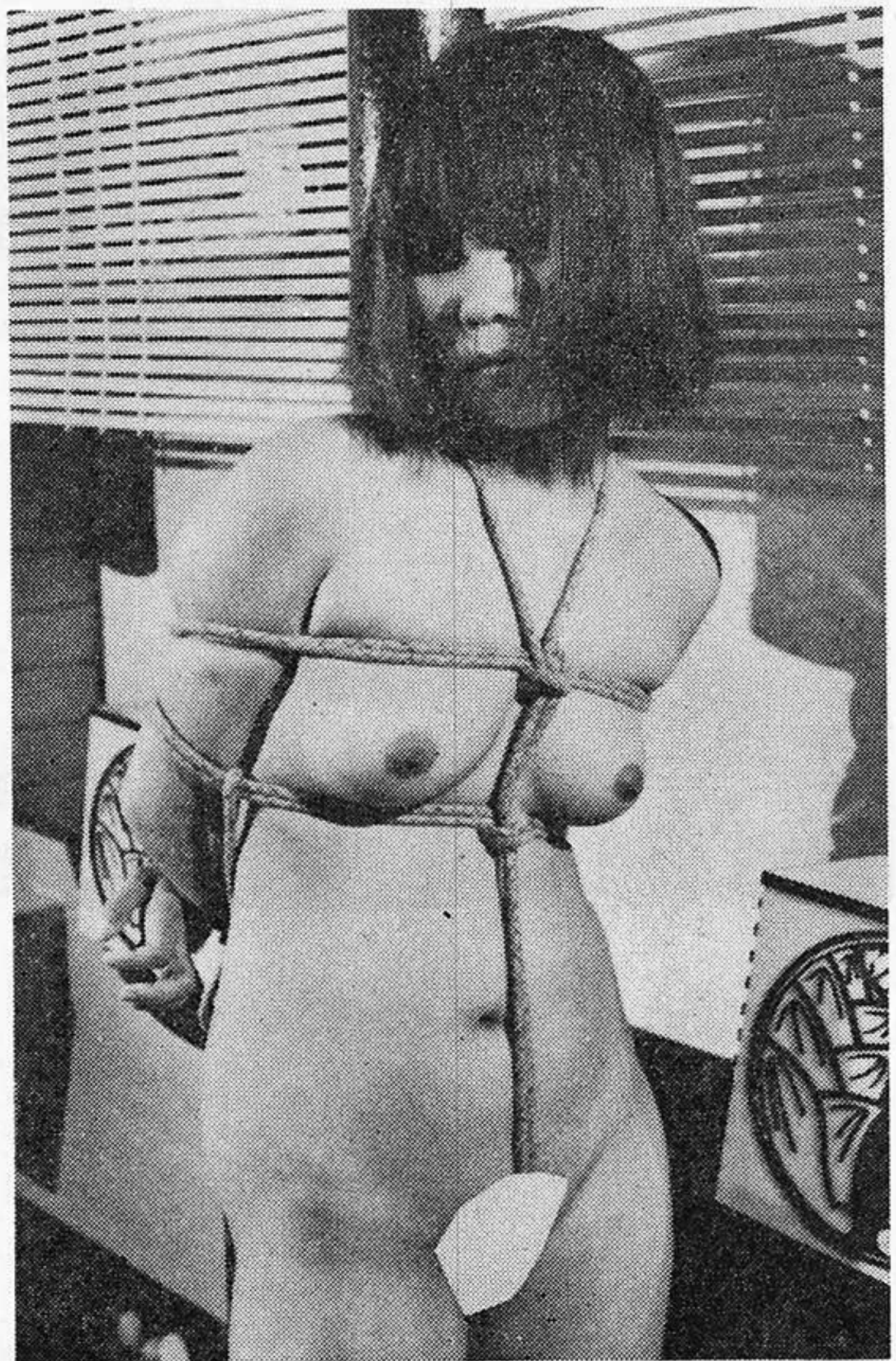
「さあ、もう出よう」

「その前にトイレへ行かせてヨ」

「トイレへは、いつでも行けるからサ、ここで、もう一つ面白いプレイをしてみないか。君がロボットになって、僕がそのロボットを操縦するんだよ。それが終わったら、すぐ、喫茶店でも、レストランへでも入って、トイレへ行かせてあげる。約束してもいい」

「それ、どんなこと？ プレイって？」

「前と後と同時にスイッチが入ったら、ロボットは真直ぐ歩くんだ。前だけのときは右へ歩く、後だけのときは左さ。両方共、止まったら停止というわけ。どう、面白いだろう。バックはないけど、まあ、いいだろう」



「いやヨ。そんなこと、出来ると思って？」

「出来るよ。君が僕のスイッチの通りに動けばね。雑踏の中で、と思っっているだろうが、人ごみだからこそ、面白いんだよ」

「うち、かなわないわ。そんなに言われたら断れないもん。ちょっとの間よ」

私は、ロボットを出口の方へ向けておいて両方のスイッチを同時に入れる。静かに歩き

だすロボット。舗道へ出るなり前のスイッチが切れて、左折して再び直進。人が多くて、なかなか前に進めない。

「止めて、止めて。歩くから止めて——」

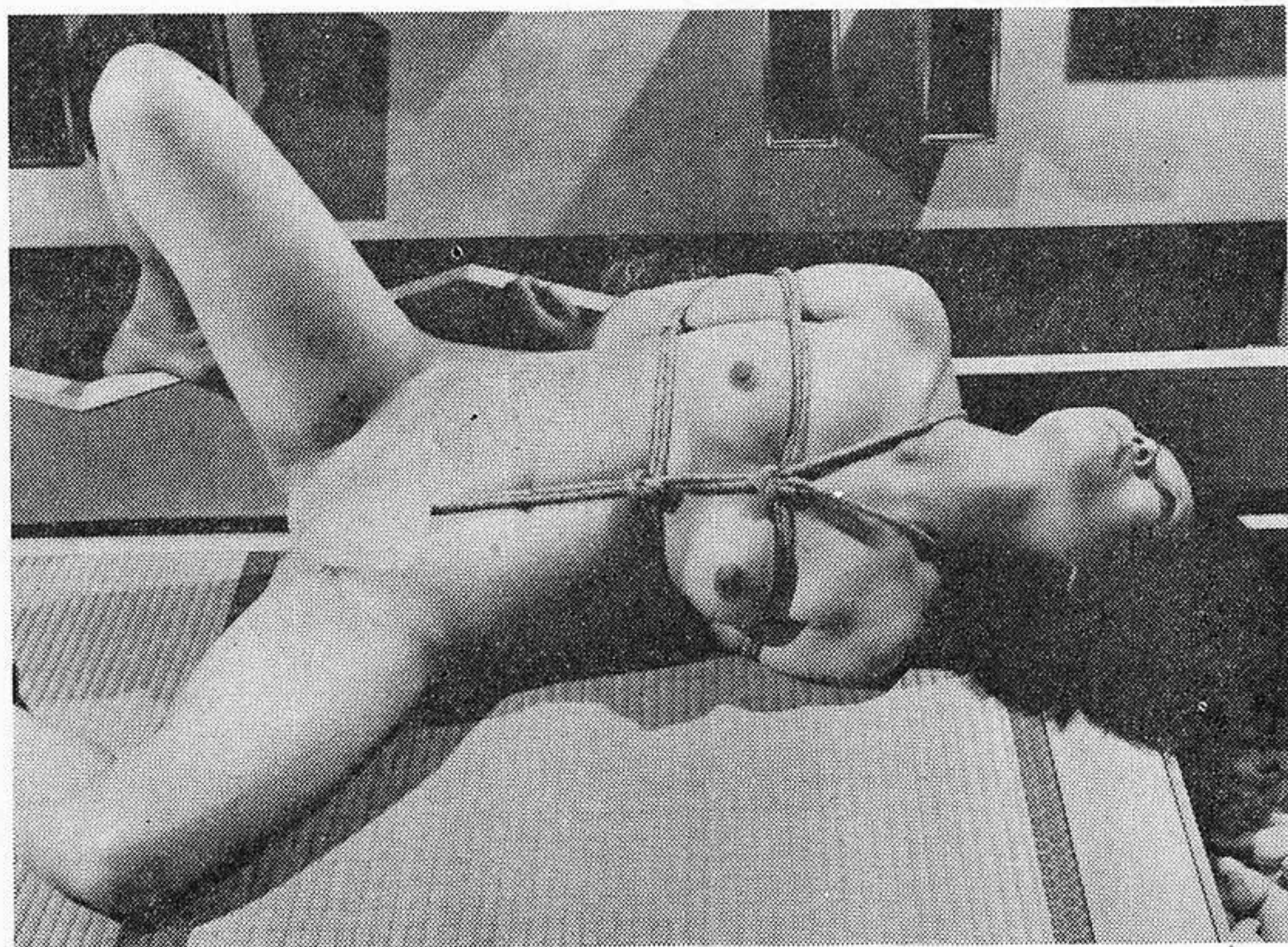
菊子は盛んに私に救いを求めてくる。

生ゴム製のスキャンティの中は、きっと、

蒸れに蒸れているに違いない。

人ごみで立ち止まったのをシオに私はレス





トランの方へロボットを導いた。テーブルへ落着いてから彼女に言った。「今日のプレイは、これで終わろう。さあ、約束通りトイレへ行ってきたら、どうだ」

菊子は紙袋とバッグを持つと、足早やに化粧室へ消えていった。暫くして戻ってきた彼女は晴々とした表情で、

「すうっとしたわ。これで落着いて食事が出るというものよ」

「きつかったか？」

「そりゃ凄いいもんよ」

「凄いつて言うのは、ゴムのなか？ 後始末は十分にしてきただろうナ」

「この中へ入れたワ」

彼女は床へ、じかに置いた紙袋を指さした。

「お写真は撮らなかったようね。構わないの？」

「そりゃ、君が、思いっきり恥かしい目に合わせてほしいって言うもんだから、写真の方まで、十分、手が回らなかったな。でも、四本か五本は撮ったからね。まあ、いいさ」

「今度、いつ、逢って下さるの？」

「これだけ責められても、まだ懲りないと見えるナ。一週間あとの今日だったらどうだ」

実際は、ペンもカメラも、かなぐり捨てて菊子との爛れたようなSMプレイの泥沼の中ただで、その妖しい旨酒に、身も心も酔い痴れてしまいたかった。彼女から誘いかけられるまでもなく、自分の方から強引に呼び出すべきであったかもしれない。それなのに、なんとはなしに深田菊子を他のS信奉者の手に委ねてしまっていたのは一体、どのような気持ちだったのか。今、菊子から、いつ逢ってくれるかと尋ねられると、悪い気持がしないでもないが、反省の気分が湧かないでもない。

「だったら、来週の水曜日ね。いいわ。アルバイト、休んでしまうから。ブーツ穿いてるけど、薄着だから、案外、寒いよ」

無邪気そうに、笑いにまぎらわしている深田菊子の表情からは、さっきの、あのバイブ責めの余韻は、いささかも窺うことは出来なかった。



マエタヒオミ画



&lt; 手 記 &gt;

## 妻と恋人を

## 縛るの記

 求<sup>もとむ</sup> 楽<sup>ら</sup> 知<sup>とも</sup> 遊<sup>よし</sup>

私が「縛り」に興味を持つようになったのは、幼い頃であった。何がきっかけで興味を持つようになったのかは、よくわからないが、物置等で同じ年代の女の子と強盗ごっこと称しては縛っていた八才頃の事である。

物かげにかくれた女の子を見つけ出す時のワクワクするような興奮。「見つかったわ」とキャアキャアさわぐ女の子を、物かげから引き出して、後手に縛る時のゾクゾクとした快感。そんなものから出発したように覚えている。

ある時は絵本をやるから、といっっては強盗ごっこをしたり、おもちゃをやるといっては縛っていた。縛った女の子を見たり、さわったり、かかえたり、縛り直したりしていると、いつまでも飽きなかった。

八才の少年だから縛り方も幼稚だった。短い紐で後手に縛り、長めの縄で胸を二、三巻きする程度のものだった。勿論、SM雑誌等の存在は知らなかった。

オナニーを覚えたのも幼い頃だった。コタツで何げなしに、自身のものをさわっていたら、快感を覚えた。

少年時代には誰もが経験すると思うが、オシッコをしたくても出ないような、くすぐったいような、むずむずして落着かず、いらいらすることがある。

丁度、そんな時に、前に経験した快感があれば落着くように思った。どういう作業をして、その快感を得たか忘れてしまったが、とにかく、その快感を得たいと思い、オナニーを覚えたのだった。快感といっても耳をほじられたりする時の、睡くなるような、う



つとりするような気持のよいものであったが、映画や雑誌等で縛られた女性を見て興奮すること、オナニーの結びつきが、どこにあったか、さだかではない。

いつの間にかオナニーする時には縛られた女性を想像していた。それは麻薬のように私を、むしばんでいた。

自分は、おかしいのだ。変人だ。やめなければ、いけない。と、いつも自己嫌悪していた。自分の性格が形作られていく一番、大事な少年時代に、精神は健全でなかった。オナニーとか、SMとかに興味を持つ事に罪の意識を感じていた。自分の性癖が、のろわしく思われた。

恐らく、こんな、いやらしい性癖を持っているのは、この世で自分だけだろうと思った。それでも、なお、少年雑誌等に縛られた女性の絵を見たり、映画に縛られた女性が登場したりすると、うずくような、いらだたしさを感ずるのを、どうする事も出来なかった。

SM（少年時代にはSMという言葉は知らなかった）の善悪の問題でなしに、自分の性癖を異常なものだと感じ、そういう自分に厳しく自己嫌悪していた少年の精神生活が健全であるわけがない。自己嫌悪から、より崇高なものを求めて難解な書物の世界にひたり、気がついてみたら、いつの間にかアウトサイダーとなっていたのだ。

従って、少年時代から学校教育等で心理学を学ぶ機会があったら私の人生は違うものになっていたかも知れない。少なくとも縛りに興味を持った少年時代に、そういうことについての知識を得ることが出来たら、自分の性癖を異常なものと感じ、自己嫌悪におちいることもなかったような気もする。

中学三年の時だった。その頃は、いっぱしの、愛書家になっていた。いつも行く三軒茶屋の古書店で書物をあさっていると、雑誌が並んだところに、裸の女性が手首だけ後ろで縛られ、兵隊のようなガイコツが、やりを持って引きずっている表紙の雑誌があった。

くだけた軽い物語を読みたいと思っていた折だったので、その雑誌を手にとってみた。その当時の私は、そういう、たぐいの絵を見ると、SM誌の存在を知らない悲しさで、冒険物語を連想したのだ。

現在ではSM誌の氾濫で、あまり感じないが、K誌、F誌全盛の頃は書店でSM誌を手にする時の一種、うしろめたい気恥かしさを感じたものだが、冒険物語だろうと思ったF誌を手にした時は、少しも気恥かしいとは思わなかった。SM誌との最初の出合いである十五才の時だった。

SM誌との最初の出合いは、驚異、不安、安堵、自己嫌悪、あきらめ、であった。つまり自分と同じような性癖をもった人間の存在に驚き、やはり自分はアブノーマルであったということに対して、これから自分は、どうなるのだろうかという不安と同時に、一人ではないんだという安堵感であった。

しかし一人ではないにしても、やはり自分の性癖は、いやであった。この性癖のために兄妹からは、何かおかしいぞと感じられ、私自身の精神は、どれ程、むしばまれたことであろうか。そして、どれ程、自己嫌悪しようと、この性癖から逃がれることは出来ないという、あきらめであった。

それからの私は二十才になるのが待ちどおしかった。二十才になれば、大っぴらにSM誌を手にすることが出来ると思ったからだ。



自分自身の内にある二人の私が「お前は、おかしいのだ。アブノーマルだ」「いや、そんな事を言ったって好きなものは、仕方がないじゃないか」と争う声を聞きながら。

それから二十七才で結婚するまでの十二年間、私のS願望を満たしたのは奇クを始めとしてF誌等であった。

## ☆

成人した女性を初めて縛ったのは、現在の妻である。恋愛時代に恋人の彼女と公園の暗やみで愛を語る時に、ハンカチで後手に軽く縛った。初めての時は、彼女は非常に驚いたようだ。二度と私とのデートに応じないと思ったが、信頼してくれたようだ。

それ以来、暗やみでのデートの折には、彼女はハンカチで縛られる、はめになってしまった。手首だけハンカチで縛った位では、それ程、緊縛感はないようだ。上野の森の暗やみでの事だ。ネクタイで手首を縛り、あまったので胸を一巻きしたが、かなり、きつく縛った。

彼女は、「こんなの、ひどいわ」と言っていたが、抵抗は、しなかった。乳房の上をかなり、きつく縛ったので、豊かな胸が一層、盛り上がって、ぷりぷりと、ゆれていた。

縛った上から、カーディガンを引っかけて、彼女の背後から、万が一、人にのぞかれても、わからないようにした。それから三十分程、ネチネチとネクタイで、くびれた胸を愛撫したり、固く、とがった可愛らしい胸の先端を、つまんだり、くすぐったり、キッスしたりした。

たった一本のネクタイで胸を一巻き、ただだけで、彼女にしてみれば、かなりの緊縛感を受けたようだ。私に縛られて、ネチネチと

した愛撫を受けていた時には、だまって耐えていたが、サディスティックな愛撫を受けた後の彼女は、ひざがガタガタふるえて、階段を降りる時には片方の、ひざがガクンと折れ曲がった程だ。

その時の彼女は、どう感じたか、いまだに聞いていないが、恐怖とか不安は感じたのだろう。その後も暗やみに誘い出しては、手首を後ろで縛る愛撫を続けていたので、てっきり私のSM談義が効を奏したのかと思ったが、そうではなかった。

初夜の晩に彼女を浴衣のひもで、がんじがらめに縛って犯し、その後も縛りは続いているが、現在では、よほどのことがないかぎり妻を縛りたいとは思わない。たまに、はげしい欲情を感じて求めることはあるが、腰紐で胸を二巻きする程度のものだ。

団鬼六氏が、縛るのは情婦のような恋人がいい、と記したものを讀んだ記憶がある。SM談義だったか、その他の雑感(花と蛇について)だったか失念したが。辻村隆氏も、よく単に金を得るだけのモデルは味気がない、といっている。

それと同じかわからないが、妻を縛っても河岸に上がったマグロのように、どてつと横たわっているだけだ。

結婚して一年目位までは、まだ楽しかったが、私の教育が悪いのか、妻には、まったくマゾ気はない。その方がいいのかも知れないし、実際に妻がマゾ女性だったら、SMプレイを楽しむよりも、興ざめする方が多いかも知れない。

奇クに登場するM妻は、夫以外の男性に縛られたがっているではないか。ということは、たとえ妻がMになったとしても、お互いに新鮮さは失われてしまうのだと思う。

## ☆



最近になって、独身時代に親しくしていた女性と、おつき合いをするようになった。

突然、私に年賀状をくれたので、なつかしくなり、電話のやりとりをしていたが、妹のように可愛い女性である。ふとした、はすみで縛る機会を得たが、実に新鮮で激しい快感と興奮を感じたものである。

事のおこりは、こうだ。六本木でシャブシャブでも食わないかと誘った。約束した当日、一万四、五千円を持って家を出た。ところが、サイフを持たずに一万円札だけ手帳に、はさんでいたのを、手帳ごと落としてしまったのだ。

彼女とは新橋で落ち合った。新橋からタクシーを拾って六本木まで行った。四千四、五百円は裸でポケットに入れていたので、ポケットから小銭を無造作に出して支払った。セリナの前へ来て、貧乏人に生まれた悲しさで、一万円札の、はさまっている手帳が入っているはずのポケットに手をやった。

九月下旬の事とて日中は、いくぶん、汗ばむが、シャツの上にカーディガンをつっかけた軽装だった。手帳はズボンの腰のポケットに入れてあった。

上野から山手線へ乗る時に、確かにポケットに入っているのを確認している。それは学生時代からの、くせだった。学生時代から、よく腰のポケットには岩波文庫とか、岩波の新書版を、つめこんでいた。そして時々ポケットの上から本をおさえてポンと、たたくのが、くせだった。

上野駅から山手線へ乗った時に一種のくせで、それを行ない、手帳の存在を確認している。ところがセリナの前では、くせではなく

て、金が間違いなく、あるかどうかを調べるために行なったのだ。食事をしたり、買物をしたりする時に、必ず金を間違いなく持っているかどうかを確認するようになってしまっている。貧乏人の悲しさか、そうしないと不安なのだ。確認もせずに店に飛び込んで、食事が運ばれてから、確かに持っていたはずだが、まさか落としたり、しないだろうか、と不安になるのだ。

金を持たずに食事を注文して、さて勘定という時に金がなかったという経験を、幾度か、しているからだ。うっかりしてサイフを忘れていたり、買物をしたのを忘れて、まだ金があると思ったり、金を持たずに家を出たのに、金を持っていると思いこんでしまったりすることが、あったからだ。

手帳を何げなくのぞきこんで、一万円札の存在を、確かめようとした。彼女の手前、金があるかどうか、確認するのに気が、ひけたからだ。手帳を出そうとしてポケットに手をやると、確かに入っていたはずの手帳がない。素早く他のポケットも探したが、やはり手帳はない。電車の中で落としたのか、タクシーの中で落としたのか……。

二人は、もうすでにセリナの前へ来てしまっている。今さら金を落としたから、やめようとは言えない。さりとて、このまま入って食事して、さて勘定という時に金がないとは、なおさら言えない。その時程、貧乏人の自分を、のろったことはなかった。一万円札が十枚も入ったサイフを持てたらなアーと思った。いや二、三枚でもよい。そんな身分になりたかった。

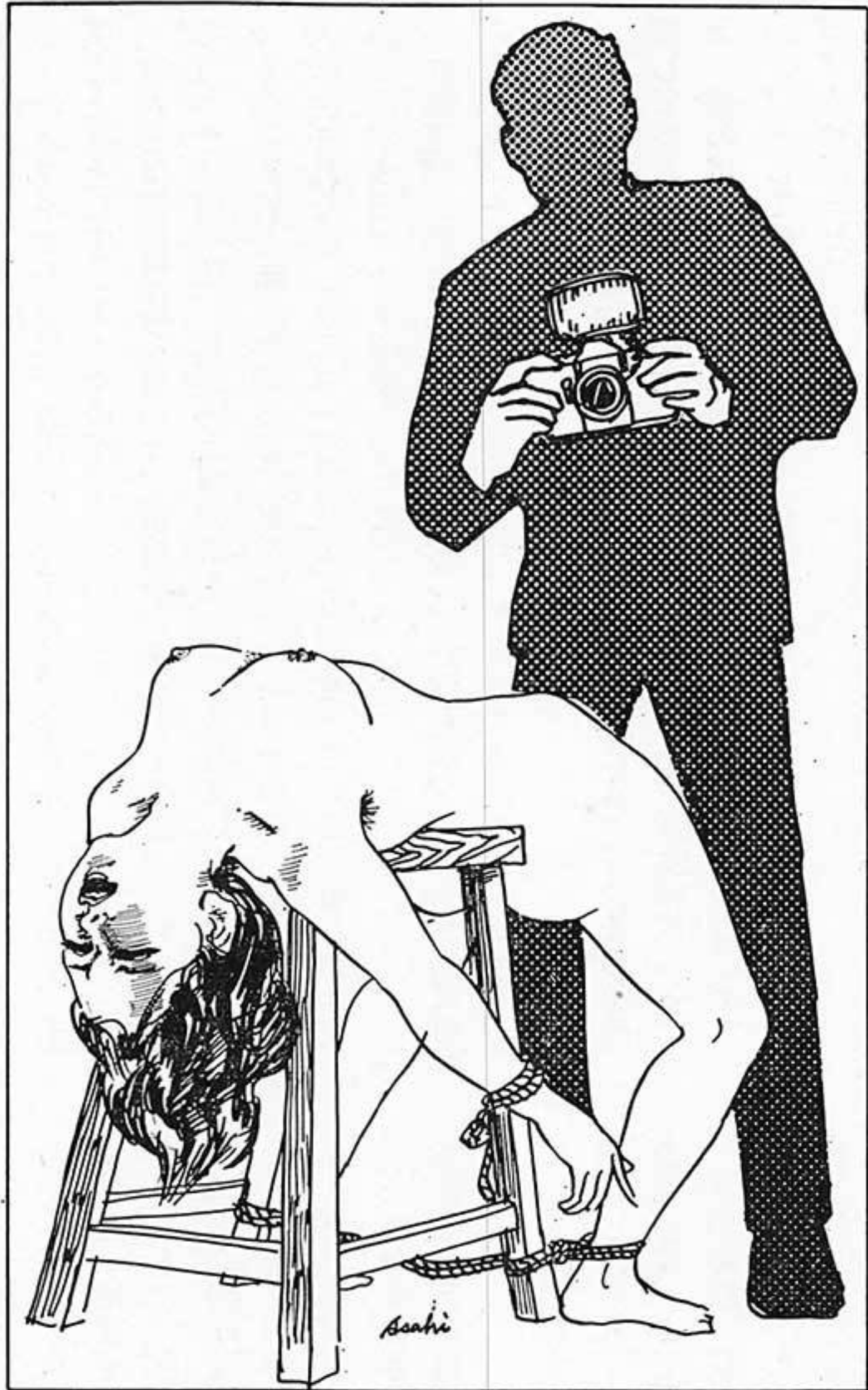
裸で持っている千円札の中に、一万円札がまじっていないかとも思った。たった一枚の一万円札が。しかし、そんなことは絵空事の



イメージギャラリー

『撮られるッ!』

須坂 旭



夢でしかない。四枚の千円札と何枚かの百円玉と、わずかな十円玉と一枚の五円玉、それに三枚の一円玉が、その時の全財産だったのだ。新橋駅前の喫茶店で勘定の時に、はっきりと見ているから、間違いはない。

セリナの自動ドアの二、三步手前に、二人は来ていた。どっちにしても、俺は貧乏人なのだ。いまさら、いいかつこうしても仕方がないじゃないか。そう思って覚悟をきめた。

ウィンドーをのぞくふりをして、セリナへ入るのを一瞬ずらし、「俺、四千円しかないんだけど、少し持ってる?」と聞いた。

落とした自分が悪いとはいえ、まったく、きまりが悪いやら、はずかしいやら、その後のセリナでの何と味気なく、気まりの悪い食事だった事か。セリナを出た時に、彼女にすまないような、気まりの悪い思いで、何か埋めあわせをしたいと思った。

今日は土曜日。我家の女房殿は実家に泊まりこみで、お帰りあそばしている。「支払いがあったら、払っといてね」と、いくばくかの千円札をタンスの引出しに入れて言った。

彼女と実に気まりの悪い思いをしてセリナを出た後で、ふと、それを思い出した。そう、彼女を我家へ、ともない、お茶等、御馳走して、それから渋谷へ出て食事でも、思った。タクシーを飛ばせば、わけはない。そ

れに渋谷での食事なら、五千円もあれば充分だと思った。

六本木のバス停から幡ヶ谷行のバスに、彼女は不審がる様子もなく乗りこんだ。あたかも、それが当然であるかのように。

彼女を我家へともなったのは、別の下心もあったからだ。それは女房殿の留守に、彼女を我家へ連れ込み、縛りごっこをしようと思ったからだ。

勿論、最初からSMプレイなどやったら、びっくりしてしまうだ



ろう。だから自然に縄目を受けられるように、策をめぐらせたわけだ。小道具にモデルガンと、おもちゃの手錠、それに投げ縄だ。モデルガンを、つきつけて、手錠をからませるという寸法だが、もう一つ、別の策があった。

歴史の話が始めることだ。特に江戸時代の風俗の様子を面白おかしく話すことである。そして、その話に引きこまれた頃を見はからって、突然「ところでテレビの時代劇なんて風俗とか時代考証が、まったくメチャクチャだね。例えば西部劇に出てくるピストル、コルトピースメーカーという、やつね。あれが出来たのが一八七三年なんだよ。日本では明治七、八年かな」

ここまでいうと、大抵の女の子は、ふうんと私の博学ぶりに感心する、ことになっている。そして、さらに、たたみかけて

「ところがだよ、黒ずきんを、かぶった、ものすごく強い侍が二丁拳銃を、ぶっぱなす映画があったね。幕末の話になっているが、史実だとしても一九六一年代のことだね。この侍がだよ、ピースメーカーよりも、さらに、あとに出来たコルトオフィシャルポリスというのを、ぶっぱなしてるんだよ。たまも、こめずにね。そういうとこなんか実際メチャクチャ。勿論、一八五〇年代に連発銃は出来てるんだけど、コルトドラグーンという、ピースメーカーになる前のコルト拳銃の出来たのが一八五四年。又ウェッスン社で作られたポケット用の五連発が一八五七年。三船主演の「荒野の素浪人」で使われている銃が、これだから、この作品は時代考証を大事にしていると言えるわけだね。密輸品として日本に持ち込まれたものだろうが、果たしてアメリカで製造されたものが、日本に直ぐに持ちこまれたものかどうか疑問だね」

ここまで話すと、歴史は弱いなアーと言った顔付きになるか、よほどカジをうまくとらないと、他のテレビ番組だの映画だの、芝居だのの話を発展しかねない。

そっちの方へ、うっかり行こうものなら、三十分から一時間は、やれ、あの映画がどうの、今度のテレビの新番組は面白そうなのという、とりとめのない話を、たっぷりと聞かされる、はめになる。そのへんが、かんじんなところだ。彼女が、よく見ていそうなテレビ番組の話をして興味を持たせ、最後のつめを、やるわけだ。

「こんな具合に、全く時代考証なんて無視する映画やテレビ番組が多いわけだ。ぼくは、よく江戸時代の風俗に興味を持って時代劇なんかを見るんだけど、罪人を扱う場面なんてのはメチャクチャも、いいところだよ。江戸時代には罪人を縛るんでも、罪人の身分によって縄の種類が違ったんだよ。なんでもかんでも白いロープで申し訳け程度に胸に縄を巻きつけるけど、さむらいとか身分の高い人などを縛る縄は、色のついた上等な縄で、身分の低い町人とか農民とかにだけ、白い縄で高手小手に、がんじがらめに縛ったらしいよ。ところで高手小手に縛るって、どういうことか、わかるかい」

必ずしも正確でなければならぬという事はない。もっともらしく学問的に聞こえて、高手小手という言葉が出てくれば、よいわけだ。いかにも江戸時代の風俗に興味があって、多少の知識があるということを、わからせれば、よいわけだ。

話のつながりが、なんにもなしに、いきなり高手小手に縛るということを若い女性に言ったら、まず話に乗って来ない。それだけでなしに、いきなり、そんな話を何も知らない(SMについて)女性に話したら、それこそ変人と思われてしまうだろう。



このことは何名かの女性に試みてみたが、江戸の風俗に興味をもって云々と、やり出して「高手小手に縛るって、どんなことか、わかる？　こんなふうにやるんだよ」と両手を背後にねじ上げて、手首と腕と一緒に縛って「胸を、こんなふうに、しめあげちゃうんだよ」と、乳房の上下に、縄をまきつける動作のまねをしても、一向に、おかしい顔を、されない。

縄をまきつける、まねをして、乳房に手がふれても、背後にねじ上げられた手を、ふりほどこうともしないのだ。「おなじ後手でもこのほうが、楽でしょう」と言って、ねじ上げた両手を腰に下ろしたりしている、ずいぶん長い間、若い女性の両手を後手に、ねじ上げることが出来るものだった。

それは実際に縄をからませて行なうSMプレイよりも、より新鮮な刺激があるようにも思えるのだ。

彼女に対しても、そのような話をもっていって、小道具の手錠をからませるつもりでいた。

彼女を室へ招き入れてから、ピストルなどを見せ、こんなものでもたまには気分転換を、はかるんだよ、というようなことを、話し始めた。テレビをつけると「お笑い頭の体操」の始まったところだった。いつも見ている番組だが、画面を、ながめているだけだった。紅茶を飲みながら、とりとめのない話をしていた。楽しかった。

時は刻一刻と過ぎていく。例の江戸時代云々と、はじめようと思うと、何故か胸がドキドキした。渋谷で何かを食うつもりで彼女にも、そう話してあったから、そろそろ腰を上げないと彼女も、おかしく思うだろう。いつも何の気なしに言っているように、ふるまえるのだが、何か興奮しているようだった。時に言葉が、つかえる。

そのうち、彼女が「千両箱って、あるでしょう。テレビの時代劇で見ると、ずいぶん大きそうでしょう。あれ、もっと小さいんですってね。私、興味があって図書館で何か、むずかしそうな本だったけど、読んでみたわ。千両箱の絵もあってね」

思わぬ時に思わぬことを言われて、虚をつかれたとでもいうのか心のうちを見すかされてしまったようで変に、しどろもどろしてしまった。しかし、この際、彼女から話の糸口を与えてくれたのだから、これに、のらない手はない。そう思って彼女の話にあわせながら、自分の知識を披露していった。

しどろもどろに、うわずった声で（多分、彼女は、そう感じたろう）あたかも心のうちを見すかされたかのように、彼女から話の糸口を切り出したので、私の方は完全にノックアウト。話をするのが精一杯で、「高手小手に縛るってどんなことか、わかるかい」と不自然に質問したもの、彼女の手に、さわることも出来ない始末。

とうとう、九時になってしまった。「求楽さん、渋谷にでも出てみる？」恐れていた言葉が、とうとう彼女の口から、とび出した。「そうだなアー」しぶしぶ同意の返事をして、戸締まりを始めながら、未練たらしく手錠を、ながめていた。

室の真中に、つつ立って、トイレから戻った彼女に、「うちの娘は、こんなのが好きだね。面白いよ、おませだね」と言いながら、「こうやっちゃうんだよ」と彼女の両手を後にまわして、かけてしまった。

思い切って、やってしまうと、意外と落着いたものだ。われながら、あきれるくらい、落着いている。一度、手錠を、はずしてから「あ、さっきの高手小手は、こういうふうにするんだよ」と彼女を



後手に、ねじあげて手錠をかけた。

腕時計が邪魔だ。時計をはずして彼女に恐怖心を抱かせるのを恐れて時計は、そのままにしておいた。手錠をかけたままで、後手にねじあげた両手を押えるようにして、「こうやると、一寸きついでろう」と、そのまま、わずかに、ねじ上げて、手のひらに伝わる彼女の手首の温かく柔らかなのを楽しんだ。

押えている手を離すと、彼女の両手は腰のあたりに下がって「あ

らっ、さっきと同じよ」と言った。かねて用意のロープを、しごく

と、手錠をはずして、「これで、やってみよう」と言った。

彼女はロープを見てとまどい、うろたえて「いやよ」と言った。一瞬だが、彼女の顔には、あきらかな拒否反応が認められたが、それにかまわず「いや、大丈夫だよ。変なことは、しないよ。一寸、やるだけだよ」と言って両手を、ねじあげた。両手を、ねじあげた時、手のひらに彼女の抵抗を感じたが、すぐに私に、まかせきったように従った。

ロープを真中から二つにして、彼女の両手に、からませ、ふりわけに分けて肩から前に廻し、腋の下を、くぐらせ、そのまま腕の上から胸を一巻きした。

腋の下から両腕に一巻き、からませて、胸の縄目で、しぼるつもりだったが、長い髪の毛が邪魔になると、さばききれないロープのために思うように、いかない。

先輩諸氏が本誌上で記しているように、若い女性は確かに素早く縛らなければ、いけないようだ。胸に回した縄を再び後に戻して、ふりわけた肩からのロープに、からませ引きしぼり、前で結んだ。

縛られている間、彼女は「こんなふうに縛られるなんて、私、ずいぶん悪いことをしたのね」と言ったり「こんなに、ゆっくりしていたら、逃げられてしまうわ」と言ったりし



イメージギャラリー

『牝ブタ料理』

仲乃 ハルミ



ていた。

縛り終わって彼女の前へ立つと、彼女は私の顔をキツとした、それでいて笑みを含んだ目で、にらんで「ほどいてっ！」と言った。

彼女の縛られた姿は、やはり想像していたように素晴しかった。

憂いのある表情に縄目は、よくあった。せめて、上衣だけでも剥いで縛りたかった。形のよい乳房は縄目に、ゆがんでいた。

裸にして縛ったら、どんなにか素晴らしいことだろうか。憂いを含んだ目元に、長い髪が乱れかかっていた。それを両手で、ゆっくりとなおして、顔をはさむようにして引きつけ、唇を吸った。

髪をなおしている間に、彼女は目だけで笑って、（さも、いたずらしたら、だめよ。と言いたげに）にらんでいたが、抵抗は、しなかった。すっかり私に、まかせきっているようだった。

電気を消して、縄でくびれた胸を愛撫し、豊かな乳房を縄目から掴み出していた。服が邪魔だ。それに、ただ無茶苦茶に縛ったので縄も、ずいぶん邪魔だ。しばらくの間、そんな愛撫を続けている間に、彼女は切なげに、甘くうめいた。

何という刺戟的な、うめき声だろう。縄目の間の乳房をさすり、のどにキスする度に彼女の口から切なげな、うめき声が洩れた。腰を抱き、後手の彼女の手を握りしめ、乳房をつかみ、唇にキスした。その度毎に彼女はアツとか、ハァーッとか、うめき声を発した。

もう、がまんが出来なかった。

彼女の着ているものを全て剥がし、乳房に厳しく縄目をかけ、縦縄で充分に彼女に、うめき声を出させたかった。服を脱がすために彼女の縄目を一度、といた。胸の縄がとかれて、片手が自由になる

と、自由になった手で、もう片方の縄を素早く、とくと、抱きついてきた。

彼女の手を、ゆっくりと振りほどいて、上衣を脱がせにかかると思ってもよらず、はげしく抵抗した。

「奥さんに悪いわ」

「いいじゃないか。上衣だけ、とれよ」

「いやだわ。奥さんの、いる部屋で」

彼女の両手を背後にねじ上げて、肩から上衣を脱がせようとしたが、なかなか、うまくいかない。

彼女は、後手で私の腰のあたりを、くすぐりながら「だめよ、だめよ」と抵抗した。やっと片方の肩から、上衣を、ずらせて、もぎ取った。片方のそでが彼女の腕に残っているのを、強引に引っ張って剥いでしまう。

その時に、ぴりっ！と布地の裂ける音がした。一瞬、しまった！と思った。独りでアパート住まいをしている彼女の事だ。上衣一枚でも大事にしている事だろう。上衣を剥ぎ取られて「ワァー」と泣き伏す彼女に

「いけねェー。上衣が破けたみたいだぞ。ぴりっ」と音がしたろう」

私は彼女に、そういつて電気をつけた。彼女と顔を見合わせながら上衣を調べると、裏地が少しばかり、ほころんでいたのだった。

私の気持は、すっかり冷えていた。冷えていたというより、何かおこりが落ちたような気分だった。確かに彼女が嫌がっていない事は、わかっていた。全く、せっかくの千載一遇のチャンスを、自分で放棄してしまったわけだ。

何と、まぬけな事か。しかし、どういうわけか、その事に対して



悔いはなかった。それより、何か、ほっとしたような安堵感があるのだ。

不思議な事だ。このように感じることは、どういう事だろう。彼女を裸にして縛れなかった事を、ちっとも悔いていない。それだけでなしに、チャンス逃がした事を、ちっとも悔いていないばかりか、依然として裸にして縛りたいという気持ちを持ち続けながら、何か、ほっとした安堵感があるのだ。

幼い頃、近所の女の子を物置へ引っ張りこんで、強盗ごっこをして縛り、薄暗い物置きで縛られた女の子を、かかえたり、縛り直したりした後で、物置から表へ出た時の、暗い所から明るい所へ出て

ホッとしたような、何かそんな気分似ていた。

妻を愛していて、妻以外の彼女と愛欲の淵に沈まなかったことに對する安堵感だろうか。そういうものではないようだ。奇クや、その他のSM雑誌を読んだ後で、難解な哲学書を読んだ時に感じる気分が一番、近いようだった。SMと全く関係のないようなSF的なものとか、ミステリー、冒険物や感想文等を読んだ時のホッとした安堵感に一番、似かよっているようだ。

「結婚しても、純情な人っているのね。だって大抵、結婚している人って、強引になるんじゃない」

お茶を飲みながら話している彼女の様子からは、SMに興味を持

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆ 賞金 ☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 五万円 |
| 良作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 貳万円 |
| 佳作 | 一篇につき | 壹万円 |
| 可作 | 一篇につき | 五千元 |

### ☆ 規定 ☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

っているようには見えなかった。多分、気まぐれな情事にしか思わなかったのだろうか。しかし今まで妹のつもりで接していた彼女が私を好いていたのだという事が、くしくも、わかってしまったのだ。

出来る事なら彼女を苦しめる事なく、SMプレイを、やってみたい。ずうずうしくも、すぐに、そんな事を、考えてしまうのであった。

そしてその時には、もうすでに、あたかも一条の光の如く、さし込んだホッとした安堵感、あとかたもなく消え失せてしまっているのだった。



三回分載・M体験小説

# 亜矢様をめぐる不思議な夜 (2)

写真・本誌撮影部Mシリーズ



沢井和雄

(四)

数日後、私はいつものように「魔女の館」に、おりました。ひと

りの時は、サロン風の部屋の左奥の席へ坐って、頬を敷かれていた男の画を見て、飲む習慣になっていましたので、その日も、そこへ坐りました。

順子が、ほかの席から、ずっと来て、話した。緑色の支那服のよ

た順子は、この前のプレイの時と、がらりと変わり、言葉遣いの丁寧な、とても礼儀正しい女でした。私は順子にもオールドを、すすめながら、この前のプレイの話などを、取りとめなく、交し合っていました。

亜矢様は右側のソファの席におられ、荒木が同席していました。私は、そっと目礼を送りました。傍へ寄って跪いて、ご挨拶申し上げたのですが、亜矢様を「変わった女」に見せてはいけけないので、その程度にしますと、亜矢様は鷹揚に、うなずいて下さいました。

しばらくすると、今度は亜矢様が私の席について下さいました。荒木の処には、別の女がついています。

「荒木さんのところに行ってあげて下さいませんか」



と私が申しますと、亜矢様は、ふふと、お笑いになりながら、

「同じ事を言うものね。あたしも、お前なんか、つきたくはないのだけど、そういうことになったのよ」

と、おっしゃって、ご自分のコップを指さし、ビールを注ぐ事を催促されました。

荒木の方を見ると、別の女と平静に談笑していましたが、時々亜矢様の方へチラチラと視線を向けていました。トイレの行き帰りなどは、振り向くようにして荒木は、じっと亜矢様を見つめ、浮かない顔をしていました。

その夜は、亜矢様とも話をするだけで「魔女の館」から引き揚げました。少し先に荒木が重そうな足取りで歩いていましたので、私は声を掛けてみました。

「荒木さん。いつも、どうも。長尾です」

「やあ、長尾さんですか。いや、こちらこそどうも。荒木です」

二人は挨拶を交わすと肩を並べて歩きはじめ、どちらからともなく、一緒に飲もうという事になりました。こういう店では私は、いつも長尾という名前を使うことに決めていました。

「亜矢さんは、いいですねえ」

私が、ふっと、そういうと、荒木は堰<sup>せき</sup>を切ったように大きな、ため息をついて、

「いいですねえ」

と、繰り返しました。亜矢様には悪いのですが、何か二人は、滅多に見られない名工の手による陶器に魅入るような調子で、少しもライバルのような感じはしませんでした。

「この前、ダブルでプレイした時は、あんまり、乗りませんでしたね」

と、私は亜矢様から聞いて知ってはいたのですが、荒木に訊ねてみました。

「ええ、あれはね、あの子たちが、どうも私の趣味に合わないのよ」

荒木は、さも何でもない事だと、いわんばかりに答えました。

「亜矢さんとは、お長いんですか？」

と私が聞くと、荒木は、ぐっとグラスを空けてから、

「一年ほどです。ずい分、追っかけただけ駄目らしいですなあ」

と、ぽつんと言うと、又、黙りこくってしまいました。

話の継ぎ穂に困った私は、私には言いにくいのかと思って、

「ねえ、荒木さん。私の事はどう思います」

と、たずねてみました。

「ええ、長尾さんは紳士だし、いつも拝見して、いい方だなと思っています。それに亜矢ちゃんからも聞いていて、私とは次元の違う人だと思っています」

と荒木は、すっと言ってくれました。

「嫉きませんか」

と私が言うと、荒木は即座に、  
「嫉きませんとも。こうやって、お知合になれて、本当に、よかったと思っています」

と、卒直な調子で答えました。

「亜矢さんの話が、したいんですけど」

私は荒木なら話が出来るだろうと思って、ずばりと言ってみました。荒木は、ちょっと坐り直す恰好をしてから、ぽつりぽつりと話し出しました。

荒木は奥さんに死なれてから、もう十年以上も、ずっと独身で暮らしていて、周りから何度も再婚を奨められてはいても、亡くなった奥さん以上のひとでないと、その気持が湧かないため、端<sup>はた</sup>の世話の範囲の女性では、なかなか再婚に踏みきれないのでした。

その上、持って生まれた性<sup>さが</sup>とでもいうのかMの性格のため、Sの女性へのあこがれが捨て切れず、亡くなった奥さんに対する愛情を



忘れるとすれば、Sの女性を選ぶしかないと強く思うようになったとのことでした。

そして、亜矢様とは一年來の交際で、はじめはMの対象としてだけでいられたのですが今は結婚を想っているとのことでした。

「何もさせない。家の事などは全部、私がやるから、来てほしい。と何べんも頼んだんですが、彼女に、全然その気がないんですよ。たまにデートしてくれたって、すぐに電話、

電話でしょ。何しろ気が多いし、男も大勢いるようだし、どうにもならないんですよ。会ったって本当に、ゆっくり話をしてくれるわけじゃない。諦めよう、諦めようと、いつも思うんですよ。でも別れると、すぐにでも会いたくなってしまうんです」

荒木は煙草の煙を深々と吐きながら、ふっと言葉を切りました。

「男のつき合いが多い事は、Mの男にとっては、快感につながるという人もいますが、あなたは、どうですか？」

と私は、思わず医者問診の調子になって聞きますと、

「頭の中では、確かに、そうなのですが、現実には苦しいですね。そりゃあ、私の処にいてくれて、必ず帰って来てもらえると思えば

結婚の形式だけで、あとは亜矢ちゃんのお自由にしようつもりだし、その立場なら出来ると思うんですがねえ」

荒木の答から、この人のMは、どんなところにあるのだろうか、私は、いささか専門的な興味を抱きはじめ、もっと掘り下げてみたくなりました。

「荒木さんは、K・Kを、いつ頃から、お読みになつていますか？」

「あれは丁度、白表紙の頃ですね。神田で手に入れてから、それまで潜伏していたものが一度に噴き出したような気持ちでした」

「なくなった奥さんとは、どうでしたか？」

「家内とは普通の結婚生活で、Mの行為は、しませんでした」

「SMのプレイは、亜矢さんと二人だけの事を望んでいるんですか。それとも多勢の方がよいですか」

「そりゃあ、やっぱり二人だけで会いたいですし、それにSM、SMっていつてみたって時には普通のデートも、したいですしね」

私は荒木が、まだ変に気取っているような感じがするので、話題を変えてみました。

「亜矢さんと結婚するとしても、荒木さんの現実、うまく整理出来ますか」

「それが、やはり家の方で抵抗があるでしょうね。自分で上手くやるつもりですが、何しろ田舎ですから」

「結婚生活のなかで、亜矢さんを女王に置いてくつもりですか」

「亜矢ちゃんがしたいというのならば、それで、いいと思うんですよ。でも女だから、自然に女らしくなっていくと思うし、それを期待して待つてゐるんじゃないでしょうか」

この男は、やはり恋愛感情を向けているんだと思うと、私はちょっと言葉に詰まってしまいました。こんどは荒木の方から、ぼつぼつ話を始めました。

亜矢様には、荒木の他に表面に上がっている男だけでも数人はいるし、秋山という画家と婚約している事。別に、亜矢様の方で好きな男が、原という何か卸し問屋の若主人だという事などを、くどくどと言ひ出しました。

「亜矢ちゃんが、はっきり結婚してしまえば諦めもつくと思うんですが、それまでは、どうにもならないんですよ」

と荒木は椅子の背に、もたれるようにして「私はね、いっそのこと、彼女が交通事故か何かで顔でも怪我して、誰も男が寄りつかなくなったらいいと思うんですよ。そうしたら



私が一生懸命、尽くしているのが、わかってもらえると思うんです」

と、言い続けました。

四十を過ぎて、こんなにも女を想う荒木をみて、私はまるで二十年以上も前の学生時代に戻ったような気持ちになって、今夜はどうしても荒木を慰めてやらなくてはならないと思いました。

「亜矢さんの、どこがいいんです」

と私が言うと、荒木は頬杖をついたまま、

「どこもかしこもですね」

と、ぶつと答えました。

「亜矢さんのサジスチン振りは、どうです」

「たまらなく、いいですね。亜矢ちゃんという女は後を引くんですよ。コンピューターみたいに計算が、しつくされていて、いつも、お預けを喰っているみたいに、一回のデートのなかで、必ず何か心に残るままにして置かれるみたいで……」

という荒木の述懐を聞くと、同じ感じを、いつも持たされているので、私には荒木の気持ち、よくわかりました。

「それでも、長尾さん。人間には限度というものがありますよ。最初の頃は何でもしてくれたんですが、今じゃ、蛇の生殺しなんです

よ。人間、息を止められちゃったら、どこかで息をするより仕様がなくなりますからね」

と荒木が言い出したので、

「そんなら、トルコさんか何かで、プレイしてもらったらどうですか？」

と私が聞きますと、

「空しいですね。いつも自分が厭になってしまってますよ」

と荒木は、ふっと何遍目かの、ため息をつきました。

「ああいうところでMのプレイをしてみても、結局は自分で号令を掛けなくてはならないからじゃないですか？」

と、私が自分の経験から聞いてみますと、  
「そうかも知れませんが、でも、それで済まして置かなければならない時もありますね」  
と荒木は実感の籠った言い方をすると、  
「こゝろは私の方を、まともに見ながら、

「長尾さんは徹底していますね。亜矢ちゃんから聞いていますけど、たかが中小企業の事務員に、亜矢様、亜矢様って、外でも言うそうですね」

と聞きました。私は、ちょっと顔が赫くなりましたが、こんな時に理屈をつけてしまうのが私の癖で、

「荒木さん、私はもう、部屋の中だけでするプレイには飽き飽きしているんですよ。自分の書いた脚本で自分が奴隷役をやって女王や色男を配置してみたって、いつ何が出てくるか全部、自分でわかってちゃっているんですよ。そんなプレイなら、その気になれば、いつでも、相手してもらえ人は、いますものね。亜矢さんには、そんなプレイは、してもらいたくないんですよ。脚本は亜矢さんが書く。それに従って、私は奴隷の役をやるわけで、私が今までの癖で、他の人達の配役に口を出すと、とたんに、こっぴどく叱ってくれますよ。あのひとは実生活の中でも、男を支配して行けますものね。あのひとに気に入られるようにするほうが、期待と不安を楽しめるというものじゃないでしょうか。荒木さんも、そんな気持ちで割り切ってみたらどうですか。亜矢さんが益々、すばらしく見えますよ」

と言うと、荒木は

「でも、亜矢ちゃんの云う通りにして、捨てられない保障があるでしょうか。女の奴隷になるって事は、女の傍に必ず居させてもらわなくてはならない条件があるでしょう」と、聞き返しました。

「そこは信頼しなくっちゃ、プレイにならない



いんじゃないですか。プレイとは、必ず安全に帰って来る事が、わかっている旅行みたいなものでしょ。陸の旅に飽きれば、海へ空へと夢は無限に拡がって行きますよ。でも、帰れるという事が決まっていないと、それはもう、遊びではありませんね」

私が言い続けるのを、荒木は黙って、うなずいて聞いていましたが、ロジックを楽しむ余裕は、とてもなさそうなので、私はそこで言葉を切りました。

しばらくすると荒木は、机にうつ伏したような姿勢のまま、私の方には顔を向けずに、「私はねえ、長尾さん。四、五年も前ですがある貸馬場へ行ってみたんですよ。女のひとが馬に乗るのを見たくって、坂道を上がって物蔭に隠れて、何時間も待っていました。パカパカと来るから、期待して見ると男だったり、たまに女の姿が見えれば男がついていたり、がっかりしながらも、そこから、なかなか離れられないんですね。もう諦めて帰ろうと思った頃に、やっと、やって来ましたよ。女連れが二人で、堂に入った乗りこなし振りでした。私はもう夢中で女のアートを追っかけて行っただけですよ。馬の足は歩くんでも早いですからね。走るようにしてついで行くと、

二人は峠を越えて下がって行くんですね。二人の通ったあとの躑躅が実に美事だったんです。下がり道に、さしかかると、真っ青な海が目の前に拡がって、私はもう二人のお供になったような気がして、浮き浮きしていました。全部で一里位、歩き廻りましたか、馬がやっと止まると、月桂樹が二、三本、立っているところで、写真屋に記念撮影してもらっているんですね。二人共、はっとするような美人で、ポーズも、すばらしかった。私は、ぼーっとしたまま、すぐ傍で立ちすくんだようにしていますと、若い方の女に、蓮葉な声で、「邪魔だからどいてよ」って声を掛けられて、ふっと気がついて、そのまま、すぐ帰って来たんですが、たったそれだけだったけれど、忘れられませんねえ」

と、ひとり言のように言うのでした。四、五年前というと、荒木は多分、三十八九だったろうか。或は、四十を過ぎていたかも知れない。そんな中年になって、馬に乗る女を見るために、それだけの行動が出来る荒木を、私は呆っ氣にとられて見つめていました。

荒木の顔は上気して、目は酒の酔いも手伝って、とろんとしていましたが、その話にな

ると、荒木自身が馬になったような、もともと細い目を一層、細くして女に「邪魔だからどいてよ」と言われた、たった一言だけのMを懐かしんででもいるかのように、垂れ下がった眉を益々だらんとさせているのを見ると身につまされて、いじらしい気がしていました。マゾヒズムとは、絶対の美を追い求める芸術する心とでも言ったなら嘲られるでしょうか。

「ねえ、荒木さん。結婚とSMは別々に考えた方が、いいんじゃないですか？」

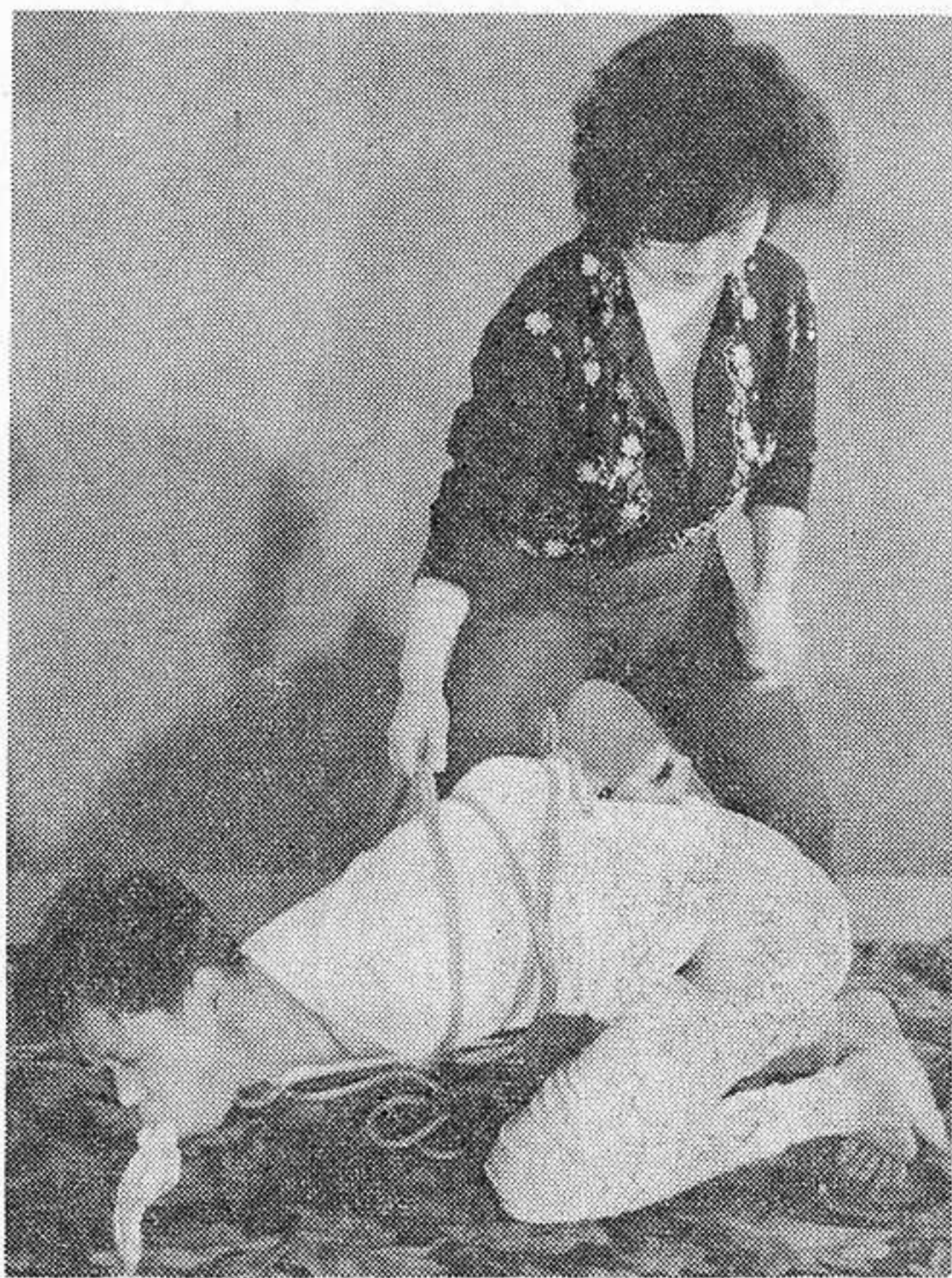
私は励ますような調子で、荒木に言ってみました。

「そうでしょうねえ、多分。でも、その辺が何ともならないんですよ」

と荒木のため息は、さっぱり止みません。

「私も、妻を十二年も追いかけて一緒になったんですよ。私は妻の三番目の男なので、最初はSの対象になっていたんですよ。でも結婚というのは現実ですから、女王には、して置けませんよ。女王が女になり、女房になつてしまうのを、ただ、じっと見ているより仕方がないという事は、たまたまなく、やり切れないもんですよ。妻がデパートの特売場か何かで買い漁っているのを見ると、家の中で大





事に飼っていた犬が、そこらの、ごみためあさりをしているような、もっとわびしい気持ちになってしまふんですよ。結婚って、そんなものだし、まあ、Mの男の求めている女王なんて、青い鳥を追っかけているようなものですよ」

と、私は自分の事を言ってみせて、荒木を説得したくなりました。

「青い鳥ね。そうかも知れませんか」

荒木は何べんも、うなずいていました。

「荒木さん、それからセックスとSMは、分けて考えなきゃ、いけませんよ。SMなんかおながが空いている人には毒ですよ。腹が空いたら飯屋、酒が飲みたかったら酒場と、ちゃんと決まっていますよ」

と私は結論づけて見せましたが、荒木は、「長尾さんが羨ましい。奥さんが居て、しかもM的な気分になれるのに、他にイメージを

追いかける事が出来るんですものねえ。私は亜矢ちゃんに振り廻されて自分ひとりでは、どうにも止まれないう独楽みたいなんですよ」

と、自嘲する様な調子で、さっぱり駄目でした。

「偉そうに言ってみたって、私が荒木さんの立場で、あなたに、そう言われたとしても、

やっぱり同じように言うでしょうねえ」

そんなふうに相槌を打つしか、私には荒木を慰めようがありませんでした。

深夜の酒場から外へ出ると、盛り場の空はもう明け初めて、辺りに散らばった塵芥の、むれむれが、前夜の淡い夢のわびしさのように露わになって、私の心は、その日の現実には押し戻されていました。

## ——(五)——

それから、また二、三日たった、風の吹きまくる寒い晩に、私は亜矢様を、ご指定の別の酒場に訪ねて行きました。

約束の時間より、やや早く着いたのですがもう亜矢様は来ていました。亜矢様ひとりだと思っていたのに、高木と、とし坊が同席して、みんな、かなり酔っぱらっていました。

とし坊は、かなり荒れていて、普段は男装の割には、大人しい感じの子でしたが、「この野郎！ もっと酒を持って来い」

などと、べらんめえ口調で怒鳴ったりして亜矢様に、たしなめられていました。

私は荒木を相手に、この前の挨拶など、しながら一、二本の酒を空けると、亜矢様が「さあ、もう出ましょう」



と立ちかけたので、慌てて、お愛想を済ませにレジーの方へ小走りで行きました。亜矢様のお世話は、当然、荒木がする事になり、みんなが仕度を整えて出ようとすると、とし坊が、また、怒鳴り出しました。

「いいよ。みんな帰って。あたしはママさんと飲むんだ。ママさんが大好き」

などと、そのママさんに抱きついたり、し始めました。亜矢様はママさんと知り合いらしく、しきりに謝っていました。

私は荒木に、

「とし坊は、ずいぶん、荒れてますね」

と言うと荒木は、

「私がいると、いつも、ああなんですよ。亜矢ちゃんとレスなもんだから、嫉けるんでしょうかね」

と、意外な事を言いました。

「へえ、そんなふうに見えませんか」

「今に、わかりますよ」

荒木は慣れた調子で私を促すと、ドアの外へ出て、知らん顔をしていました。五、六分もすると、亜矢様が、お顔を見せられて、

「荒木さん、とし坊を連れて来て」

と困り切ったように言われました。私も手伝って、何とか、とし坊をなだめて外へ連れ

出すと、亜矢様は、いきなり、

「いい加減に、しなさい、とし坊。私の知ってる店で、恥をかかす気っ！」

と、怒りで、いつもは白いお顔を真赫になさって、とし坊をパンパンと平手打ちになさいました。

「なんだ、亜矢公。いい気になりやがって」

と、とし坊は荒木の押さえているのを振り切るように体中で暴れ、亜矢様を蹴飛ばすような恰好をしました。

「とし坊、大人しくしなさい。みっともないじゃないか」

荒木が言うのと、とし坊は、ますます、

「何さ。荒木さんの方が、よっぽど、みっともないじゃないか。だいたい、あんたが一番いけないじゃないか」

と、からみ始めました。

「その子を放さないようにして。長尾さんも一緒に押さえて」

亜矢様に言われて、私と荒木は刑事のように、とし坊を抱えながら亜矢様の後について行きました。

裏通りに入ると、亜矢様は再び、とし坊の頬に平手打ちを浴びせながら、

「どうして、あたしの言う事がきけないの」

と、激しい口調で、おっしゃいました。

人が、たかっても困るので、荒木と私は両側から見張るような恰好をしていました。と向こうから軍歌調の歌を、うなりながら、千鳥足の男が、やって来ました。

「<sup>なぐ</sup>撲れっ。撲りたきゃ、もっと撲れ」

とし坊は、なおも毒づいて、亜矢様の怒りを挑発しました。亜矢様は、ぱしぱしと、お続けになっています。怒りを露わになさった亜矢様は凄まじいような魅力を湛え、私は思わず見とれてしまい、酔っぱらいが近づいているのを忘れてしまいました。

「なんだなんだ、女の子の癖に。撲り合いなんて、男のするもんだ」

男は亜矢様に注意しました。

「すみません」

女らしく謝っている亜矢様に向かっては何も言わず、男は、

「お前ら、この女の連れか。連れだったら、黙って見てないで止めてやったら、どうなんだよ。大の男が二人も揃って、だらしない奴等だ」

と、今度は私たちの方へ言い捨てて、通り過ぎて行きました。

「ああいう単純な男には判んないわねえ。男



が二人いて、何故、止めないかを、考える気にはなれないのね」

亜矢様は、ちょっと気持ちがおさまったよう  
な言い方をなさいました。とし坊も大人しく  
なり、荒木が傍に、ついていました。

「どこかホテルへ行こうよ。寒くって仕方が  
ない」

と亜矢様が、足を踏みならすような恰好を  
なさったので、私が、

「私のコートでよかったら、お召しになりま  
すか」

と、すすめますと、

「あたしのコートが汚れるわよ」

と、つんとした顔に戻って、スタスタと歩  
き始められました。

少し行くと、とし坊は急に、もと来た道へ  
かけ出しました。亜矢様が叫ぶように、

「とめてっ！」

と、おっしゃいましたので反射的に私は駆  
け出して、とし坊を捕<sup>つか</sup>まえて連れて来ました。

やっと押さえると又、逃げ出す。荒木と私が  
代る代る追いかける。まだ人通りの多い街中

で、見つともないのを我慢して、私たちは亜  
矢様の言われる通りにしましたが、亜矢様は

なかなか、とし坊を離そうとなさいません。

その日は、車で出掛けて行っただけですが、  
丁度、駐車場の傍へ来たたん、とし坊は又  
さっと逃げてしまいました。

亜矢様は、やっと、

「もういいよ。とし坊は帰そう」

と諦めて下さいましたので、私達は、ひと  
まず車の中で風を避けることにしました。

亜矢様は助手席に坐ると、靴をお脱ぎにな  
って、私の膝の上へ、両足を載せるようにな  
さいました。

すっかり冷えきった、おみ足を、抱えて擦  
ってみましたが、とても暖まりません。

「早くヒーターを入れてっ！」

と亜矢様は、駄々をこねるような言い方を  
なさいましたが、エンジンを掛けたばかりで  
は、冷たい空気しか、入って来ません。仕方  
がないので、というか、それにかこつけてと  
いう事になりますが、私は背中を、まるめる  
ようにして、亜矢様の足指の処にハアハアと  
息を掛けてさし上げました。

「まだあ？ お前の息じゃあ、ちっとも、あ  
ったまらないよ」

亜矢様は、じれったそうにしています。私  
は懸命になって、足指から足の裏、踵から足  
首の方へ、息を掛けつづけました。靴下の、

むれた匂いが、私の鼻をくすぐると、亜矢様  
のおみ足を、口一ぱいに頬張ってみたい衝動  
に駆られ、私は、じかに唇を足の裏に当てな  
がら勤めました。

「さあ、どこでもいいから走って頂戴」

と催促されて、私は亜矢様の足の裏の感触  
を惜しみながらアクセルを踏み始めました。

亜矢様は、私の膝に両足を、お預けになっ  
たまま、

「お前のブレーキの踏み方は乱暴よ。あたし  
に不安を与えないように練習しときなさい」

とか、ちっとでも道を間違えそうになる  
と、

「もっと地図を、よく見ときなさい。お前は  
頭が悪いんだから努力しなくちゃダメよ。三  
時間も地図を見て置いたら、いくら奴隷だっ  
て、わかりそうなものよ」

とか小言ばかり、おっしゃっていました。

やがて私たちは、盛り場を少し離れた、ム  
ードのあふれるホテル街に着くと、亜矢様の  
お好みの一軒を選びました。

玄関で亜矢様が、すっと立ったまま、目で  
私に合図をなさいました。私は、す早く蹲む  
ようにして、亜矢様の靴のフォックを外ずし  
ました。いつもの、チョコレート色の、先の



まるい平たい靴で、ロングシューズやブーツは持つてはいるが、御使用にはならないとのことでした。

私の動作をみて、荒木も亜矢様の右足の傍に、うずくまりました。

フロントから、係の人が現われましたが、亜矢様は、そのまま、きびきびした調子で、部屋を指示されていました。

部屋へ入ると、亜矢様は、坐り椅子に背をもたれて足を伸ばされたまま、

「荒木さんはビールの支度をして頂戴。冷蔵庫に何が入っているか見て、あたしの好きなものを選んでよ」

と指図されたあと、私の方を向いて、

「お前は、風呂の支度をして。石鹸の位置をよく覚えて置くように。それから、あたしはぬるい方が好きだからね」

と、言いつけられました。

湯加減を済ませて次の間に戻ると、奥の間の電話台のところで、荒木は、こちら向きに馬になっていました。受話器をお持ちの亜矢様は、さっきの酒場のママに、とし坊の事を頼んでいる様子でした。

「済みません。あたしから、よく言って置きますが、お言葉に甘えて、今晚、お世話にな

ります。それから、あの子は、おみおつけを造るのが上手なので、明日は、どうぞ使ってやって下さい。お手伝いでもさせないと、あの子が気まり悪がりますので。いずれママさんには、別にご挨拶に寄せて頂きますから。では、ご免下さい」

と、そのない挨拶を済まされると、受話器を置いて、

「もどれ」

と、四つん這いのまま、かじこまっている荒木に命じて、次の間の坐り椅子の傍まで、跨がって行かれました。

馬の役をつとめ終えた荒木が、顔をひきつらして、堪えかねたように仰向けの姿勢をとりますと、亜矢様はチラッと荒木の表情をみやり、すいと座蒲団を荒木の胸に当てがってから、その上にお坐りになると、私に指でビールを注ぐように促されました。

亜矢様は、ふふと、お笑いになりながら何か考え事を楽しんでいるらしい、ご様子でしたが、急に、

「お風呂に入るから、お前も支度して」

と、おっしゃって、服を脱ぎながら荒木の方へ、ぽんと放り出しました。荒木は、ぴょんと坐り直すと、慣れた手つきで、上着や下

着を、たたみ始めました。

亜矢様には何も言われていないのに、目かくしをしなくては、恐れ多いような気がして私はタオルを巻いて目に当てがってから、風呂場へ入りました。何となく荒木には済まない気がしていました。

風呂場の入口は段になっていますので、私は自然に四つん這いの恰好になってしまい、手探りで亜矢様の傍まで行くと、

「石鹸を、たくさんつけてよ」

と亜矢様は、ぽんと濡れたタオルを放り出されました。私が、まごまごしていると、

「だから、覚えとくように言ったでしょ。あたしのする事を、先へ先へと、いつも考えるようにしなくちゃ、ダメじゃないの。そっじゃない、右の方。もっと手を伸ばして」

と又、お小言です。やっと石鹸を手で見つけ、私はタイルに土下座しながら、

「申し訳ありませんでした」

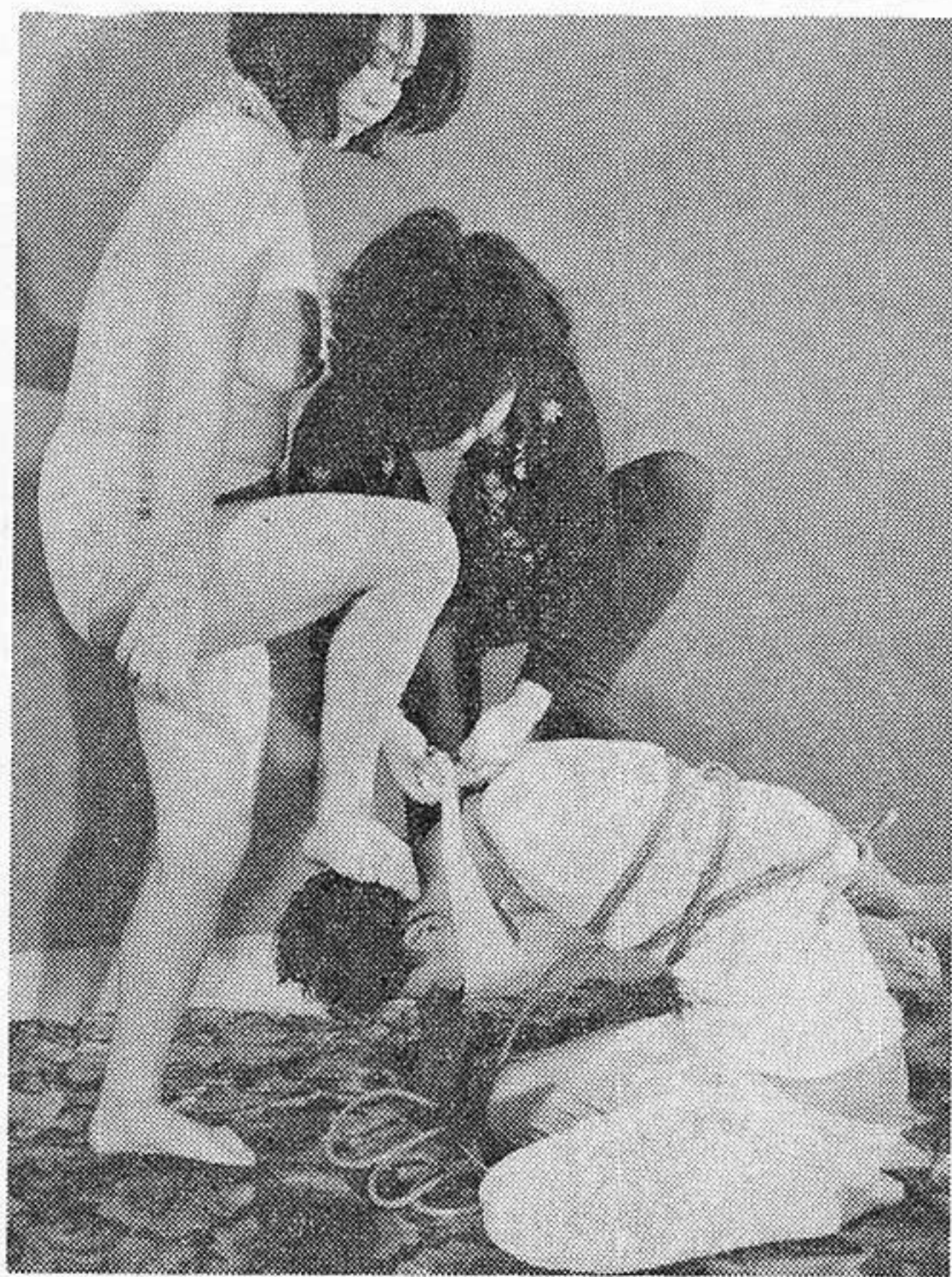
と謝りましたが、かえって亜矢様に、

「早くしてっ」

と厳しい、お叱りを頂いてしまいました。

目かくしのタオルを、ぽんと指で、どけてしまいたい衝動を押さえながら、私は亜矢様の肩から背中を流し、手足の指の股の間を、





一本一本、丁寧に洗わせて頂きました。

「前の方は、あたしがやります」

と亜矢様は、そこで私を押しとどめられました。ちょっと待っていると、

「さあ、こんどは、ここよ」

と、すっと立ち上がられた、ご様子です。

やわらかい腿の肌ざわりが、見えないだけに私の手に、やるせなく伝わって来ます。そこを辿りながら、上って行くと、亜矢様の、し

こしこした、お臀の豊かさが感じられましたので、私は、お叱りを受けない範囲で、なるべく、ゆっくりと洗わせて頂きました。

「お前も顔を、お洗い！」

と、おっしゃると、亜矢様は、お臀を私の顔に当てて、二、三回、腰をゆすって石鹸をまぶして下さいました。感激して舌を伸ばそうとしますと、その間もなく亜矢様は、すつと洗い桶に腰掛けてしまい、

「さあ、お湯を掛けて」

と、お命じになりました。顔にまみれた石鹸の残り香を楽しみながら私は亜矢様の体に何ばいも湯を掛けつづけました。

部屋へ戻ると、

亜矢様は又、荒木を馬にして電話を掛けています。バスタオルを、きゅっと巻いていましたが、なだらかな

肩から首すじの線が、思い切り露わになっています。

電話の相手は、やはり秋山と原でした。荒木の姿勢が、今度は横向きになっていましたので、今にも泣き出しそうな顔つきが、私からは、はっきりと見えて、彼のいじらしさと共に、私自身も、ジーンとしびれて来るような興奮を、同時に感じていました。

荒木は再び仰向けになって、亜矢様の座蒲団をつとめ、私はビールを注ぐ係をしていましたが、亜矢様は荒木の両腕に、ご自分の足を載せて、じっと見おろしながら、

「荒木さん。もっとズタズタになるのよ。それも他人にしておうたってダメよ。自分でズタズタになって来なくっちゃ。そこから這い上がって来たら、もっと、いいもの上げるわ」

と言うと、ビールを口に含んでから、器用に細く長い線にして、荒木の口に落としてやるのでした。

ビールの線が消えると、亜矢様の唇の先に唾液がたまり、一生懸命に口を開けて待っている荒木の口に、あわや落ちそうになるほど垂れかけた頃、亜矢様は、すいと、ご自分の唇に戻してしまいました。そんな事を何回も



くり返すのですが、荒木は今度こそは唾液をもらえらると思って、真面目に口を開けつつけていました。

「荒木さんを、もっと苛めて上げて下さいませんか」

と私が助け舟を出してみますと、

「ダメ。荒木さんが、もっと純粹にならなくっちゃ。不純な人を苛めたら、あたしの心が傷つくもの」

と亜矢様は、おっしゃいます。

「でも、精神的に苛めていられるじゃありませんか」

と、私が思わず口に出しますと、亜矢様はちよっと間を置いてから、

「あたしの目の前で男が、おいおい泣くのはとっても可愛いいわ。でも泣きながら、ついて来るんじゃないければダメ。それに荒木さんなんか、精神的に苛めているうちに入らないわ。もっと精神的にだけ苛めてる男だっているんだもの」

と遠くの方を見るような目つきで言うと、今度は私の方に、ぞっとするような真顔を向けて、

「分不相応なことを言うと、お前も精神的に苛めてやるよ」

と、凄みをつけた静かな言い方をなさいました。私は、とたんに畳に這いつくばるようになって、

「済みませんでした。分際もわきまええず、どうかそれだけは、お許し下さいませ」

本当に、おろおろ声を、出してしまいました。ふふふと亜矢様は、例の含み笑いをお続けになりながら、いかにも楽しそうに、指先でリズムをとるようにして、炬燵板を叩いておられました。

「トイレ」

急に亜矢様が荒木に命令されました。荒木は再び馬になって、亜矢様をトイレまで運びましたが、そのまま大人しく控えて待っています。亜矢様の方も何もしてやらず、ただ行き帰りに荒木を使うだけでした。

「さあ、あたしは寝るからね。お前たちは、あたしの裾の方へ入って寝るのよ。蹲って、あたしの方に足を伸ばさないように。荒木さんは枕の場所を代えて置いて」

しばらくしてから亜矢様は、そう言うと、

「今度は、お前の番よ」

と私を促して、馬にさせました。トイレのドアを開けて、私も荒木のようにじっと蹲って待っていますと、亜矢様は、

「そこに仰向けに寝て」

と、仰言います。私は胸をときめかせながら、トイレの前の石畳の廊下に、仰向けになっ

ていますと、亜矢様は、

「荒木さん！ 覗いちゃダメっ。唐紙も、しめてっ！」

と、激しく奥の間の荒木を怒鳴りつけられました。

「もっと。まだまだ。こぼしたら承知しないわよ」

と言う亜矢様の叱り声は、実際、目の前を亜矢様の下穿きで塞がれて、真っ暗になっていましたので、まるで天から聞こえて来る声のように感じながら、私は必死になって努力するのでした。

亜矢様が先にお寝みになっても、次の間で荒木は惘然とした調子で、胡座をかい煙草を吸っていました。私も、なんとなく、ぼつが悪いので黙って坐っていますと、荒木が、

「さっき確か、お前たちって言うてくれましてよ。ねっ？」

と、ぽつんと切り出しました。私は荒木の言う意味を察して、

「荒木さん、もっと哀願泣訴なさったら、どうです」



と慰めますと、

「ええ、そうですね。そうかも知れません。でもねえ、それが……」

と、荒木は言葉を濁すように言いました。心の中で、男が斗っている姿でした。私は、もう何も言えず、黙って奥の間に行き、亜矢様に言われた通り、裾の方から入って、体を小さくしていました。

荒木も、そっと蒲団に入ってきました。亜矢様は、くると寝返りを打つようにすると両足を伸ばして、荒木と私の胸の上に載せるようになさいました。

私は、そのまま、そっとしていましたが、荒木は、亜矢様の足の裏に唇を当てて、音を立てて吸い始めました。亜矢様は、

「そんな事しろって、言っていないでしょ」と、荒木の胸を踵で、とんとんと、お叩きになりました。荒木は亜矢様の足を、じっと見つめながら、されるようにしていました。

朝になって、ふっと目が醒めると、荒木は亜矢様の横の方へ並んで寝ていました。しかし、荒木の右足は蒲団の外へ、はみ出したままでした。

## —(六)—

その頃になると、私の家の方でも、妻の久江が感づきはじめました。それまでは余り外泊をしたことがなかったのですから、仕方がありません。私も適当に嘘をついて置けばよかったのでしょうか、この時ばかりは、それだけの、ゆとりが持てず、ただ、

「済まない、済まない」

と、謝るばかりでした。

「浮気をするぐらいなら、あたしは、あんたの処へなんか来なかった。若い時の仕返しを今になってするなんて、ひどいじゃないの」

と泣きじゃくる久江に、私は、

「違う。遊び半分の浮気じゃないんだ。久江と一緒にいる前から、Mの気持は持っていたんだ。だから次元が違うし、現実の結婚生活では久江だけを愛している。ただ私の心の中のMが、求めているひとに会ってしまったんだ。どうしてMなんか捨てられないかと言われれば、済まないと言うしかないんだよ」

と真顔で謝りますと、久江は、

「真面目に言われれば言われるほど、あたしが情なくなってしまうのよ。それだけ心が、女の方へ行ってしまうって事だもの。」

女のところへ行かないでくれなんて、そんなこと、あたしが言うのは情ない……ほんとに情ないわ」

と、益々泣きくずれてしまいました。

久江は「もう別れる。財産を半分ずつ、しよう」などと言いました。私は、ふっと荒木の事を思い出して、自分のみじめな姿が浮かんで来て、慌てて、

「勘弁してくれよ。久江が居なけりゃ、おれの処へなんか誰も来てくれないよ。財産全部を久江にやったって、あの人が拾ってくれるなら、どうか知れないが、そんなにしたら拾ってくれない事は分かってるんだから」

と言って、SMの世界と現実の結婚の愛情の違いを説明しましたが、久江は、とうとう声を上げて泣き出しました。

少し冷静になると久江は、

「財産全部を、くれても、その人が拾ってくれるなら、それでいいと思うほどなら、もうどうにもならないわね。でも、あたしに、なるべく、わからないようにしてよ。女房にく嘘を考えるぐらいは、苦勞して頂戴よ」

と、静かに言い出しました。

その夜は二人共、燃えました。久し振りでキスまでして、私は、



「久江を愛してるからね」

と、何べんも、くり返しました。久江は、うっすらと涙を、にじませて、

「別れることになるんなら、やさしくしないでね」

と、目を瞑ったまま、つぶやくように言うのでした。

自分で言うのも何ですが、妻の久江は、眉の恰好がよく、小皺こそ寄っています、肌の張りは、まだまだピンとして、知的な顔の感じは、十二年も追いかけた若い頃のまま残っていて、頬をつけ合っていると、中年もいいところの私に今でも、やっと手に入れた女という実感がこみ上げてくる女なのです。

亜矢様とお会いしてから、私の方は今まで以上に久江にやさしくなってしまう、むしろ房事の数も増えていきますので、SMを感覚的には理解していない久江には現実の愛憎の、とまどいで、かえって心を痛めていたのです。ようか。もちろん私のわがままは、自分でも悲しいほど、よく知っているつもりですが。

× × ×

三人で泊まった晩の数日後、私は亜矢様のいいつけで、亜矢様の勤務している会社の傍にあるビル街の、川添いの道に面した喫茶店

に出掛けました。

いかにもサラリーマン向きの喫茶軽食という感じで、夜になると、あれほど男を従える亜矢様が、昼間は、こんな所で食事をしたりするO・Lだとは、とても信じられず、私はこの前の夜の事などを、思い返しながら待っていました。

十分ほどして亜矢様は、三十才ぐらいの男を連れて現われました。最初から、会わせた人がいると聞いていましたので、私は平然として迎えました。

どんな態度をとったらよいか戸惑って、いかにも紳士風に椅子を引いて、亜矢様に奨めたりする程度にしていた私を、

「この人よ。長尾さんという私の奴隷」

と、亜矢様は男に紹介して、

「この人、増本さん。あたしが精神的に苛めている人」

と今度は、私に男を紹介しました。

挨拶を交わしてから、私は増本と向き合った位置に坐り、亜矢様は増本と並びました。

亜矢様の紹介の仕方が、あまり唐突でしたので、増本と私は顔を見合わすと、お互いに気まわりが悪かったのか、照れかくしのように笑い合いました。

増本は、眉が太く、顔の輪郭は、やや小造りで、全体に小柄な感じでしたが、見るからに骨太で、がっしりした感じでした。後から聞くと、学生時代に拳斗をやったこともありフライ級の何回戦とかまで行ったほどだったそうです。

「増本さんはね、あたしのことを追っかけ廻して、光夫さんと決まってからも、毎晩、あたしを光夫さんの処に送ってくれて、自分は一人で、タクシーもなしに歩いて帰ったりした人。今でもこうやって、あたしから離れられないでいる一人」

と亜矢様は言いながら、増本の頬を突ついたりしましたが、増本は、人のよさそうな笑顔を私に向けたままでした。

「増本さんは、亜矢さんの、どこがいいんですか？」

と私は訊いてみました。実際、私もこの頃になると、亜矢様の魅力がどこにあるのか、もう、わからなくなっていました。

「わかりませんねえ」

増本の答を聞いて私は、増本も、やはり惚れきっているのだらうと思いました。

「この間、長尾さんを馬にして電話してあげたでしょ。増本さん、嫉いた？」





と亜矢様に、からかうように言われると、  
「嫉かないさ、君が嬉しい事なら。それに長  
尾さんって、なかなか物わかりのよさそうな  
紳士だもの」  
と増本は答えて、亜矢様のことを君と呼ん  
でいました。

「でも、あたしの奴隷よ」  
と亜矢様が、こくんと頷をかしげる様なポ  
ーズをとりながら、おっしゃいました。自信  
を持った女の美しさが溢れるポーズでした。  
運ばれて来たビールを二、三本、空けると  
打ち解けた感じになり、第一印象は、お互い  
に悪くないと思った

私は、亜矢様から離  
れられないという増  
本の心に興味を持ち  
ました。

「いろんな事を伺っ  
てもいいですか。私  
は、どうも商売柄、  
他人の心の覗き趣味  
があって、申し訳な  
いんですが……」

と私が切り出しま  
すと、増本も、  
「どうぞ。私も、ど  
うも頭がおかしいん  
じゃないかと思う時  
がありますので、診  
てもらいたいぐらい  
ですよ」

と好意的な態度を示してくれました。  
「好きな女のひとを、恋人の家まで送って行  
くのは、さぞかし辛かったでしょうね」

と聞きながら私が、増本の目を覗き込むよ  
うにしますと、増本は相変わらず、人なつっ  
こい笑い顔をしていましたが、意外にも臉を  
しばたたいていました。悪いことを聞いたか  
なと思っていたら、亜矢様は、

「それが一回や二回じゃないの。半年も続け  
てなのよ。あたしのアパートの外で、灯りを  
見てたこともあるわよね」

と増本の目を、わざと見つめて、睫毛の濡  
れかけたのを確かめると、いかにも嬉しそう  
に唇元を、ゆるめていました。

少ししてから増本は、

「好きだから仕様がななんですよ」

と、普通の調子で私に返事しました。もう  
すっかり、にこにこしています。

「亜矢様のファンって、みんな、いい人たち  
ですねえ」

と私が言うと、亜矢様は、

「そうよ。人間的にやさしさを持った男でな  
いと、あたしは興味ないの。金や地位を、み  
せびらかされたりすると頭に来るわ。それに  
あたしの人生観に干渉したりする人も嫌い。



あたしの言うことをきいたり、じっと見守っている人だけが、あたしの傍にいられるの。増本さんは、どっち？ 言うことを、きくほう？ 見守るほう？」

と、増本のほうを、まともに向いて、おっしゃいました。

「両方だろうね。何でも君の言う通りに、しているもの」

増本は苦笑いを混ぜながら答えました。

「光夫さんとも仲よく出来るわね。あたしの傍にいたいと思ったら、光夫さんを嫌いになったらダメよ」

亜矢様は追い打ちをかけるように、念を押すと、増本は、うん、うん、と何遍も首を縦に振り続けていました。

「魔女の館へ行ってみようか」

と亜矢様が、増本をお誘いになりますと、「今日は止しとこうよ。秋山さんが待っているもの」

と増本のほうで、亜矢様のほうを留めていました。

「魔女の館」へ行くとすれば、増本もMの心を持っているのだろうか。恋に耐え忍ぶだけで、Mが満たされるものだろうか。若しそうだとすれば、私の想像もつかない美しく苦し

い世界を、増本は持っているに違いない。そしてまた、増本や荒木や私などに取り巻かれている亜矢様の妖しい魅力は、いったい、どこから、どうやって醸し出されてくるのだろうか——そんなことを考え始めると私は益々わからなくなって来るのでした。

しばらく雑談をしてから、亜矢様は増本にすすめられて、

「たまには、光夫さんの処に早く帰って上げましょう」

と、腰をお上げになりました。私たちは、亜矢様のフィアンの秋山の処まで送ることになりました。

ビールで一杯機嫌になった亜矢様は、夜道を、うろついている野良犬を見て、突然

「あの犬を轢き殺して！」

と無理な事を命令なさいました。私が、ゆっくり除けて通りますと、私の耳を引っ張りながら、

「お前は、どうしてそんなに用心深いの？ だから奴隷にされちゃうんじゃない」

と嘲笑うように、おっしゃいました。

「亜矢様のように才能がある方と、育ちが違うのです。仕方がありません」

と私が返事しますと、

「そんな言葉で、ご機嫌を取ったつもりなのお前は」

と、ちょっと、からみつくような言い方をなさり、靴のまま、私の膝に足を載せて、後ろ向きになって増本の首に抱きついていたりなさいました。

「わがままだなあ、君は」

増本が、亜矢様の腕に首をまかせたま言うと、

「わがままが好きなくせに」

と、亜矢様は甘い声を出していました。私が、そっと車内灯を点けて、バックミラーを曲げて二人を覗いて見ますと、亜矢様はキスする振りをしてみせ、増本のほうで、それを避けていました。

そうこうしているうちに、私たちは郊外にある秋山のアパートに着きました。亜矢様のアパートは、すぐその裏で、窓越しに見えるほど近くだとのことでした。そのまま帰るつもりでおりますと、亜矢様が、寄って行くようにと誘って下さいました。増本は慣れた足取りで、亜矢様と一緒に、すいすい部屋へ入って行くので、私も秋山に会ってみたいと思っていましたから、そのまま、ついて行きました。



秋山は三十そこそこの、ちょっと苦味走った感じで、ごつごつした、からだつきの割合に、色もののスポーツシャツや無難作に羽織った薄茶色のカーディガンが、寛いだ感じの普段ばきのズボンに、よく似合う男で、画家とか芸術家とか、気取った感じのしない、むしろスポーツマンのような感じでした。

表情を、殆ど変えず、何を話しかけても、「そうですねあ」と言う程度で、掴みどころがありません。亜矢様には、「おい、コーヒーでも、いれろよ」などと呼んでいましたが「光夫さん、いれてよ」と断られると、別に何も言わず、むっくりと立って自分でいれて来て、むつりしたまま、みんなに奨めたりしていました。私たちを、ことさらに、もてなすふうでもなく、さりとして、妙に思っているふうでもなく、ごく淡々とした態度でした。

亜矢様は平気で、

「光夫さん。この人、この間、あたしの足のところを寝かせた長尾さんよ。あの時は、荒木さんと一緒に寝かせて最高だったわ。荒木さんたらね……」

とホテルでのことを私たちの前で、秋山にばらしてしまうのですが、秋山は相変わらず

無表情に聞いています。特に興味を持つふうでもなく、そうかといって嫉妬を押さえているようにも見えませんが。

秋山の机には、蜘蛛の絵が画きかけになっています。二、三品、普通の絵を見せてくれた後、亜矢様が、

「この人、M画も描くのよ」

と教えてくれましたので、改めて、その方の作品を見ますと、彼は、雑誌で相当に、名の売れた画家であることがわかりました。

私は以前から彼の作品のファンだっただけに、若し亜矢様が彼の作品のイメージだとすれば、多くのMファンのあこがれの女の傍にいる訳ではないか、と浮き浮きした気分になって、あらためて亜矢様の横顔を、じっと見つめていました。

しかし秋山は、いっこうに、そんな話題に触れず、増本とボーリングや野球の話などを淡々としていました。

二人共、亜矢様を挟んで、勝者とか敗者とかいった感じは全くなく、いかにも楽しそうにしていました。

私は辛抱しきれなくなって、ふっと、

「秋山さんの描かれるものは、亜矢様がモデルなんですか？」

と、確かめるように訊くと、秋山に、

「とんでもない。モデルなんかいませんよ」と、あっさり否定されてしまいました。

「私も実は創作の真似事をした事があるんですが、描いているうちに、絵の女の方に惚れてしまうことはありませんか」

と訊くと、秋山は口癖のように、

「そうですねあ」

と返事して、しばらく間を置くと、

「惚れなきゃ、描けませんものね」

と武骨な笑い声を混せて答えました。そして今度は私に聞き返しました。

「小説は、むつかしいでしょうね。やはり筋を先に考えるのですか？」

「私などは、シーンが先ですね。後から話をくつつけるんです。場面と場面の継ぎ方に、一番、苦労しますね」

と私は答えてから、

「亜矢様には、創作意欲を、かきたてられますねえ」

と、感嘆をこめて言うと、秋山は平然と、「そうですねあ。普通の、どこにでも居る女だと思うけど」

と言ったきりでした。

秋山という画家の世界には、とても私など



の、踏み込む余地がない感じでした。或は、がっちりした城壁を巡らせて、惚れた女さえも立ち入らせないのかも知れない。だから、亜矢様の男づき合いを、悠々と眺めていられるのかも知れない。などと思ってみたりしました。

「私たちが、こんなにしている、気になりませんか？」

と私が無<sup>ぶしつけ</sup>に、たずねても秋山は、「そうですね。遊び友達だと割り切つてさえくれば」

と、ゆっくり応ずる調子でした。

「この人は、面倒事が嫌いなよ。この前、荒木さんが、秋山さんは羨ましいなんて、本人に向かって言うもんだから困ってたわ。その点、増本さんは、泣きながらも黙っているだけ、ましね」

と亜矢様が、つけ足すと、増本は困ったような顔のままで済ませていました。

「増本さん。今夜は、どうするの。あたしの部屋に泊まって、恵美ちゃんの世話でも、してみる？ それとも帰る？」

と亜矢様が増本に訊きました。

「うん、どうするかな……やっぱり帰ろう」  
増本は、ちよつと考えてから答え、間もな

く私と車で帰ることになりました。  
増本とは帰り道の車の中で、いろいろと話してみました。

それによると、亜矢様が会社へ入ってから増本は、それこそ、つきっきりのように傍にいて、朝、牛乳を飲む時も、昼食の時も世話をやき、亜矢様の傍を離れなかったとのこと。

何かで亜矢様が癩癩を起こして、デスクの上から定規などを放り出した時も、そつと元の位置に直してやったり、上役面で亜矢様を誘おうとした上司を撲りとばし、会社を辞めてしまつてからも亜矢様が忘れられず、向かいのビルの会社にコネを、たぐつて、頼み込んで、やつと入り込み、窓越しに、亜矢様を眺めていたことなどを、ぼつぼつ話してくれました。

一番、辛かったのは、亜矢様と秋山との婚約が、きまり、毎日、秋山の処へ泊まる亜矢様を送つてやり、そのまま去りづらく、秋山の部屋の灯りを、窓の下で、じつと見ていた事だったそうです。

風の寒い日に、とうとう一晩、明かしてしまい、それから亜矢様の部屋のほうに、ひとりで泊まることだけを許されて、窓越しに秋

山の部屋の灯りが消えるまで見つめつけ、亜矢様のいない蒲団を被つて、おいおい、泣いた事などを、私は、感動的に聞いていました。

「どうして、今のような気持ちに落着くことができたんですか？」

と私が訊きますと、

「落着いてなんか、いやしません。こうやっているのが、せい一ぱいなんですよ。これ以上になつても、これ以下になつても、あのひとに厭な思ひをさせますからね。あのひとの傍にいたためには、こうやっていることが、たった一つの生き方と言うものなんですよ。あのひとが朝起きれば、あのひとのほうを向き、あのひとが動けば、それについて動き、あのひとが好きになれば、私も好きになり、あのひとが寝<sup>やす</sup>めば、そつと、ため息をついて寝む。まあ、あのひとという太陽のほうを向いて廻る、日まわりのようなもんですよ。あんまり可愛く見えませんか」

と、増本は静かに答えました。

こうして、亜矢様の前で泣いた男を、私はまた一人、発見したのでした。



— &lt; 告 白 &gt; —

長くて短い・・・

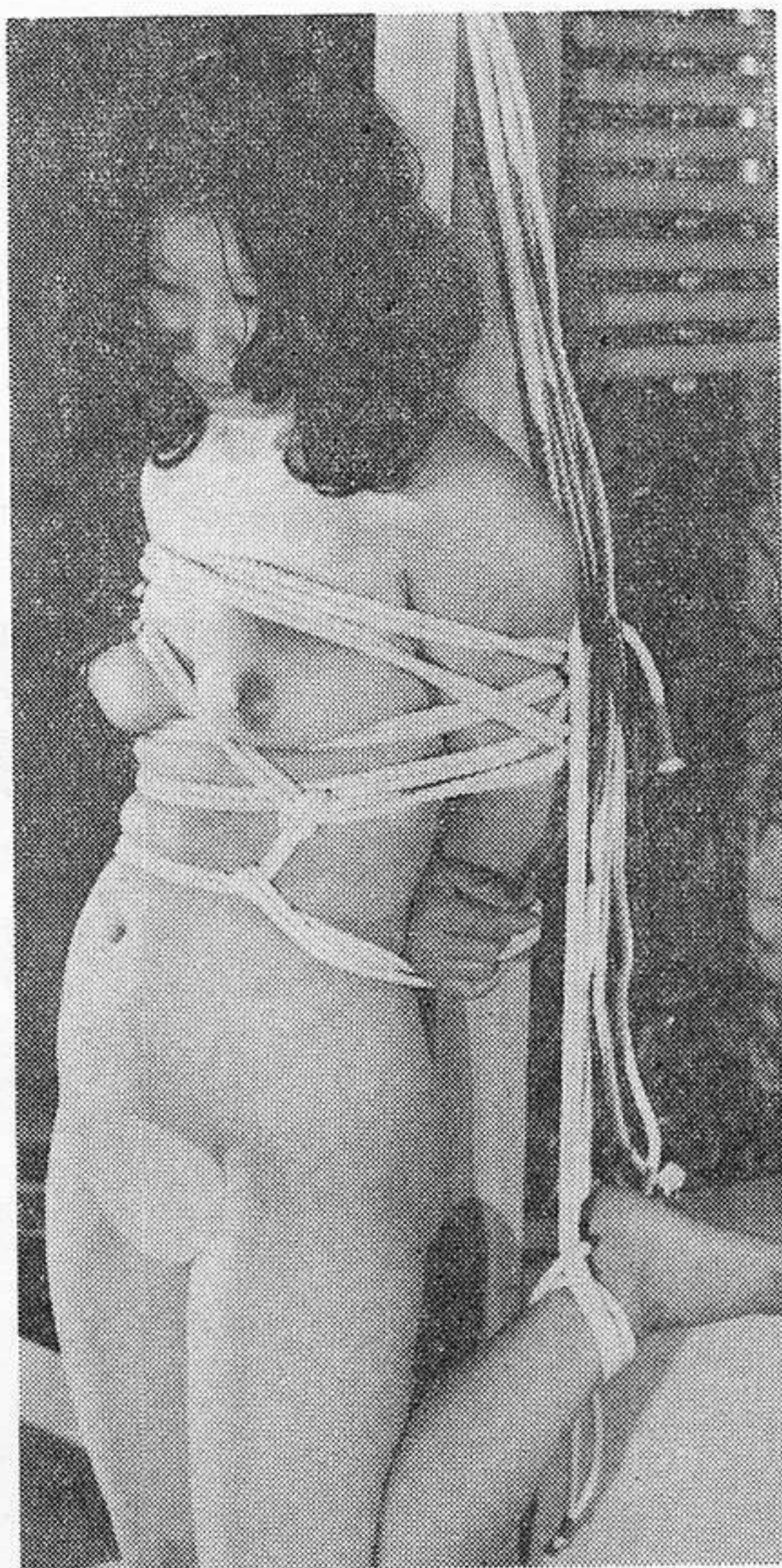
・・・一年の思い出

笠井奈保子

私は三月十八日の日曜日、お店が休みだったので、久しぶりに、彦根の父のところへ遊びに行ってきました。お正月に帰って以来、始めてのことでした。

お彼岸の入りだというのに、ミゾレまじりの氷雨が時折、降ってくるという寒い日で、私は父の家に一寸、ただけで、元気そうな父の姿を見ると安心して電車で大津へ戻り、それからバスで石山寺まで行きました。

山門の前のみやげ物店で、狸の土鈴どれいを見つけたときは、本当にうれしく、思わず手にして、チリチリと振って、いつまでも鳴らして



いましたら、店番のおばあさんが、「それは信楽焼しがらきやきで、大層珍しいものおすえ」と、言ってくれましたので、すぐに買い求めました。

旅をして、お寺やお宮さんに詣りますと、すぐに土鈴を探します。友達のエイコが旅行に行ったとき、お土産みやげに買ってきてくれたりしましたので、私の土鈴集めも、今でやっと七十八個になりました。

机の上や茶ダンスの上に並べたり、部屋の隅から隅へ渡した紐に、土鈴をぶら下げたりしています。ひとり淋しいときは、鈴をコロ



コロと鳴らして慰めています。やはり自分で特に気に入ったものは、机の上に置いて、手ざわりを楽しんでおります。時折、並べ交えることで気分を変えたりしています。

土鈴って、本当にかわいいものです。余りお金がありませんので高いものは、よう買いません。でも、小さくて値段の安いものなかに、かわいいものがあるのです。

私の秘密の玉手箱の中味は、その後、余り増えてはおりませんが、最近、お友達から珍しい外国のシャシンを見せてもらう機会があつて、ほしいといったら、下さいました。

何か、ヨーロッパの北の方のポルノとかいうシャシンで、私には大変、珍しく、今では私の玉手箱の一番、底の方に大切に、しまつてあります。こんなシャシンは、今までに見たことがありませんでしたので、時々独りで部屋にいるとき、取り出して眺めています。

雑誌に載せだすようになってから、すっかり書けなくなっていました日記帳も、今年のお正月から、再び書いています。

思えば、私が始めて奇ク編集部気付で塚本鉄三様宛に、お便りを書いたのが、昨年のお正月に父の家へ帰っていたときのことですから、あれから丁度、一年になるわけです。

そのときのことは、カメラ・ルポの六月号で「春宵一刻値千金」として書かれています。が、昨年一年は、私にとっては、十年分ぐら

いにも相当するほどの密度の高い思い出の多い、三百六十五日でした。

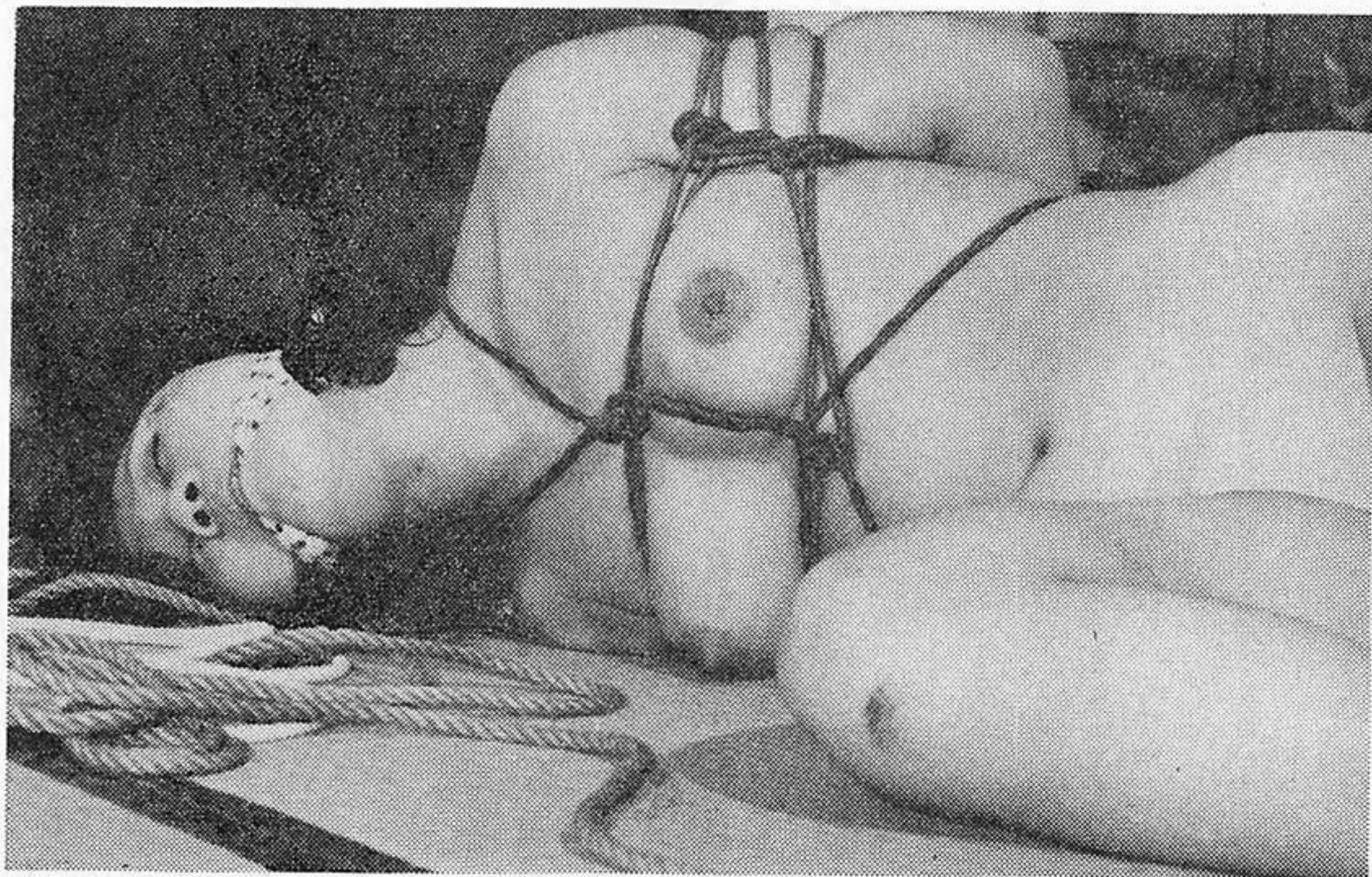
お人好しの私は、おだてられるまま、他人に見せる筈のない日記帳を、ついつい、お見せしてしまひ、そればかりか七月号には「私の玉手箱」と題して、とうとう誌上にも載ってしまいました。

それからというものは、憑かれたように、自分の生活や気持を、洗いざらい、何のかくしごともなく書いてしまいました。

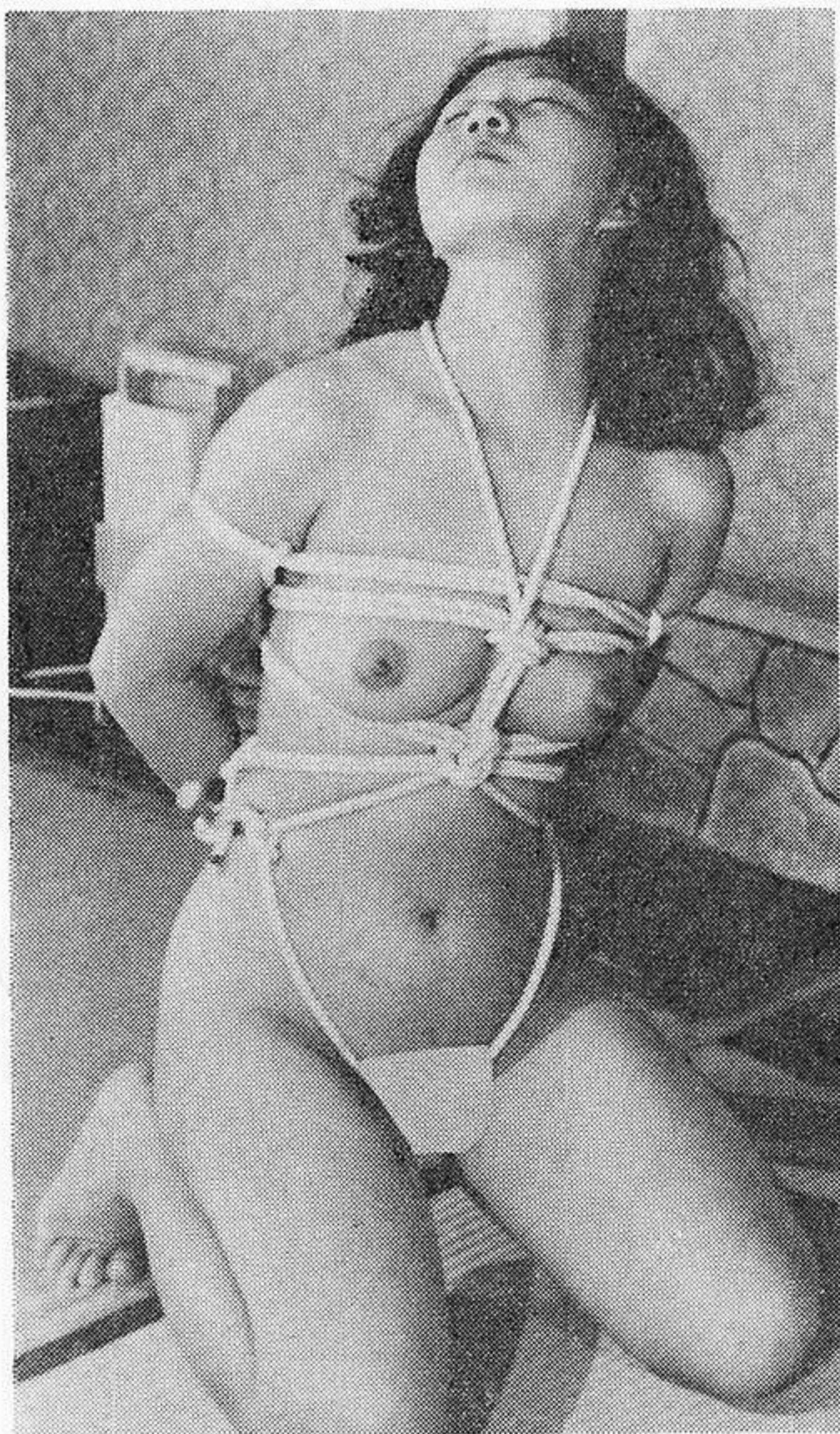
そんな一年を顧つてみて、甘酸っぱい、泣けてくるような思い出のなかに、これでいいのかという一抹の反省も、当然のことながら心の片隅に淀んでいるのです。

私は、もう自分の日記帳を他人に見せたくありません。まして、雑誌に載せてもらうなんて、とても辛抱できません。

男のお友達も何人かできた此の頃、日記帳は、やはり自分一人の秘密にしておきたいのです。誰にもしゃべれないことを、どんなことでも、好きなときに書きとめておきたいのです。それで、書くこ







とによって、自分の気持が幾分でも晴れるんです。

この頃、私は家庭のことや、自分のことを余り知られたくないという気持が、だんだん強くなってきましたし、それに、他の人達の興味のないような内容が殆どです。

あれほど、女の人の縛られたシャシンを見たいと思っていた私ですが、やはりあれは、乙女心の物珍しさと、好奇心からだったでしょう。

見るもの、すること、なんでも珍しかった

あの時代から、実際に、自分が縛られてみますと気持も、がらりと変わってしまうものなのですのね。私も成長して大人になったのでしょうかしら。

最初の頃は、そんなシャシンだったら、胸をかつかせて、なんでも、むさぼり見たものです。今は、自分が縛られたときの心のうごきなんか考えて、ああだったろうか、こうだったろうかと、気を回してしまいます。

奇クの雑誌で、玉木章子さんや西条紀代さんのシャシンやルポを見ますと、なんとなく

嫉<sup>や</sup>けてくるような気持が先に立って、平静には見ておれないのです。たしかに、最初の頃とは違った目で、それらのシャシンを見るようになって来ています。

人間というものは、年をとるにつれて成長してゆきます。私も、何人ものお友達とお知り合いになり、文通をしたり、また、プレイめいたことをしたこともありました。そのたびに、私も成長してゆきました。

シャシンを見ていたときと、実際にプレイしたときの気持が、大変かけはなれたものであるということとは、今頃になって、やっと分かったような気がします。

それと、もう一つ、私は自分が非常に気ままなせいか、その時の気分によって大変、楽しかったり、妙に沈んでしまったりすることがあるのです。動かないシャシンを眺めて楽しんでいいる時と、生きていいる人間との、おつき合いは、また別なものです。

カメラ・ルポのシャシンをとられている際でも、お天気屋の私は、その折々の気分が猫の目のように、くると変わって、相手の方を困らせてしまうのです。

何故、そのように気持が、めまぐるしく変わるのか、それは自分でもわかりません。そんなことは、してはいけないと思いつつ、自然に、そんなになってしまうのです。

陽気で、おしゃべりの明るい娘でいるとき



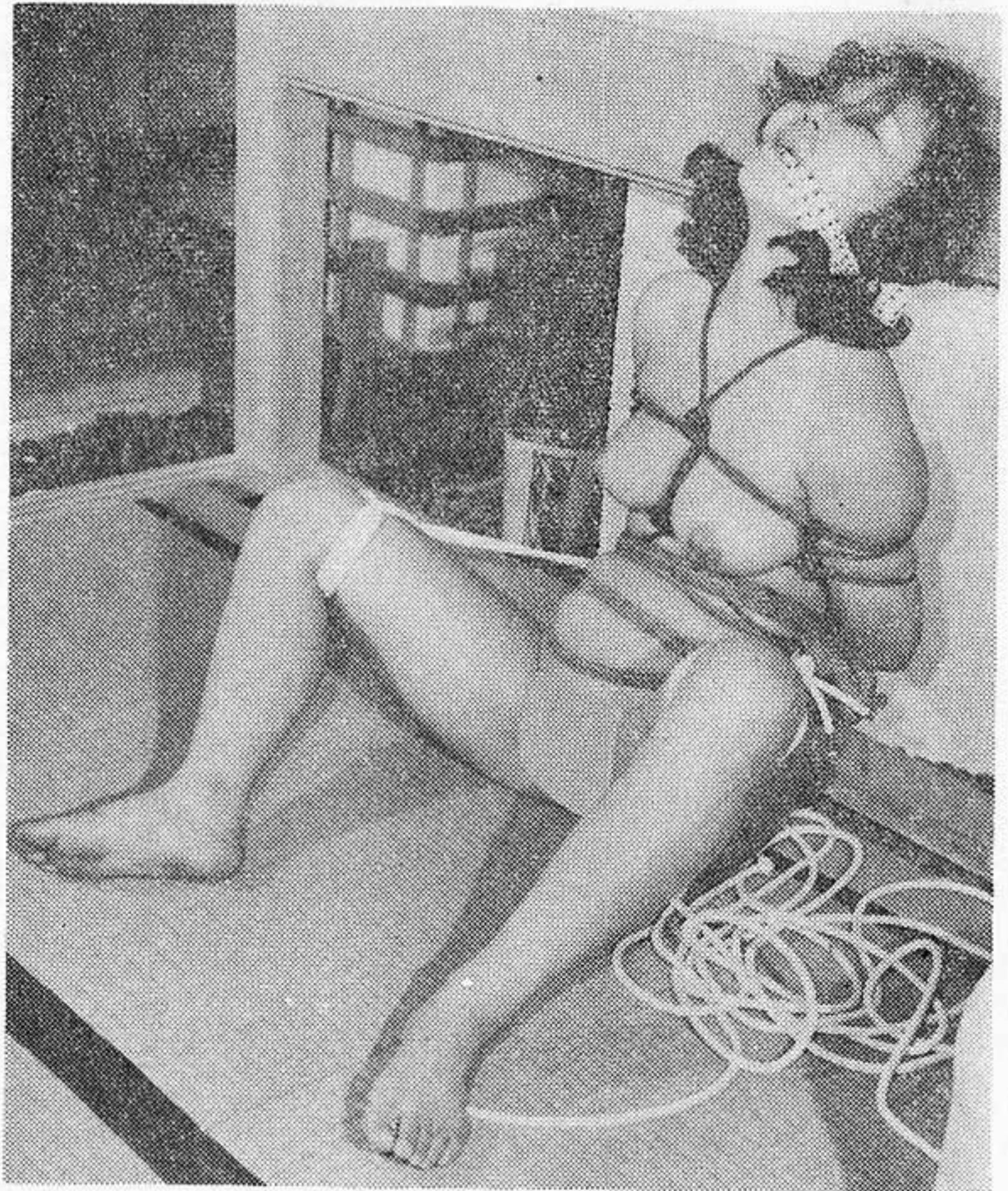
が、ずっと続いているといいのですが、時々理由もなしに、お日さまに雲がかかるように不意に気がめ入ってしまうのです。

自分が美人でないとか、肥りすぎであるとかいう劣等感が、ふっと、胸のなかに起こってきますともう極端に悲観的になってしまうのです。そんなときは、真実、力づよい男性の手で、自分の身体を縛りつけて、思いきり責めてほしいと思うことがあります。

最初の頃は、ついぞ、そんなことを考えたこともなかったのに、縛りのモデルを経験してからは、夜、一人で静かな部屋に戻って、座布トンの上に坐っておりまうときなど、すき間風のように、空虚な私の心のなかを通りすぎてゆきます。

時には、葉にもすがりつきたいような寒々とした気持ちになることがあります。好きな人の名前を、メモ紙に、幾十回となく書いたこともあります。

力強いものに、隷属れいぞくしたいという気持ちが、今ほど、私の心を強く支配しているときはありません。私は、縄で自分の身体を、ぎゅうぎゅう縛りつけられていないことには、安心



できない気持ちなのです。

こんな、ふつつかな私でも、奴隷妻としてめとってやろうという親切な方がおられることは、涙が出るほど嬉しい気持ちです。

後手に縛られた私は、立っておられる、その方の前に膝をついて、足に接吻あしづきしたい気持ちです。そんな私を、どうか、足蹴あしげにして下さい。私は気まぐれで、お天気者の罪深い女で

す。塩からい貴男の足の裏を縛られたままの不自由な身体で舐めさせていただければ、こんな嬉しいことはありません。

でも、きっと貴男は、こんな私の秘かな願いを、お聞き入れは下さらないでしょう。

私は、貴男のお身体から排出される体液、足の裏の汗の一滴でも、私の口から私の体内へ、お恵み下さるなら、途端に私は従順になり、どんな言いつけでも背かない奴隷妻になって、心からお仕えいたします。

私は、SMについても、人生についても、何の経験もない二十一才になる女性です。二十三才になるまでには、どうしても結婚したいと考えていますが、よい相手さえあれば、今にでも嫁よめぎたいと思っています。

身体の方は至って丈夫ですが、少し肥り気味です。御飯は余りたくさんは食べません。時には食事を抜くこともあります。それでも、なかなか痩せません。

一週間か十日、一室にとじ込められて、ぶ



っ通しで責められ続けたら、少しは痩せるかもしれません。私は、わりかし身長がありますので、これで五キロばかりでも痩せたら、大分、スマートになると思います。

新婚旅行には、私を『責めの旅』につれて行って下さるという方がありましたが、さぞ楽しいことでしょうね。そんなことを空想しておりますと、私の心も、だんだんと明るくなってきました。

そうです、春です。机に向かってエンピツを走らせていますと、東の窓が、ほんのりと明るくなってきます。ゆうべは宴会があつて晩くなつてしまひましたので、しまひ風呂へ入ってから、ずっと起きていたのです。

窓の外では雨の音がしだしました。

今日は彼岸の中日。それなのに、朝から雨とは、なんということでしょう。私は、今日は一日中、眠るつもりですから、雨の方が落着いていて、いいの

ですが、折角の休日を郊外へでも遊びに行かれる方は、お困りでしょう。

私に、お手紙を下さった奇クの読者の方々は、今頃は、どうしていらっしゃるかしら。きっと、まだ、寝ていられるでしょうね。

お返事を出した方、出さなかった方、いろいろありますが、お幸せで、お暮しになるよう、東向きの、この小さな窓から、お祈りし

ています。

この次には、私は、どなたとお会いし、どなたの手で、縛られるか、それは分かりません。

或は、もう二度と責められるというような機会が、ないかもしれません。それは運命というものでしょう。今から、私にも予測できないことです。

宵っぱり好きの私も、さすがに少し、ねむくなつてきました。

もっと、ましな文章を書くうと思つてエンピツをとりましたのに、才能がないばかりに、こんな、とりとめもない女の、くり言になつてしまひました。

冗漫なところは、どしどしお削りになつて、雑誌の片隅にでも、お載せいただければ幸せに存じます。

お正月から書きだしました日記帳を見せろとのお話でしたが、あれは、どうしても、お見せしたくない個所がありますので、ご勘弁下さいませ。

——(おわり)——





連載・時代S小説

## 紫 蘭 の 門

(22)

カット・須坂旭



風 流 極 道 軒

女の痛覚とは――  
 法悦に至るための一里塚  
 女の受縛とは――  
 快楽を呼び起こす一道程  
 男たるもの――  
 女を喜悦せしむるべし。

いた。

爪先で全身を支え、  
 軽くあげた踵の上にふ  
 っくらした双臀をのせ  
 て、いかにも、くりく  
 りっとした感じの形の  
 よい乳房を、こきざみ  
 に震わせている。

いく。

無論、お景は、一糸も、まとはは、いな  
 かった。  
 「小紫の。これからが、肝心なところだぜ。  
 心機を静めて、よく、親分のいうことを聞  
 くこと。それ、それ、そんなに震えていちゃ  
 あ、穴沢流・四つ搦み」が、うまくかかるか  
 どうかかわからねえ」

淫 紋

小紫のお景は、股をひらいて中腰になって

白い肩から脇腹へと流れる肌の動きは、周  
 りをかこむ四人の男の眼を楽しませ、乳房か  
 ら腰のくびれへとながれる鋭角の曲線は、よ  
 りいっそう鞭兵衛たちを興奮へと駆りたてて

お景の顔をのぞきこんだ青蛇が、含み笑い  
 をうかべながら、いうと、  
 「いうことをきくからさ。なんでもいわれる  
 とおりになるから、早く、早くやっておくれ



でないかえ」

じれったそうに、お景が叫ぶ。

よこから、斑猿が、

「やっておくれって、いったい何をやるんでしような、姐御」

と、正絹博多であろうか、匂うような裸身を後手に縛りあげている真紅の伊達巻きに沿って長い指で、肌をまさぐると、

「そりゃあ、兄貴。『四つ搦み』にきまってる。まさあ。ねえ、姐御」

どこか抜けたところのある白豚が、のっぺりした顔を上気させ、ぶよぶよに肥えた軀をお景の前でかがめて、

「ヘッヘッヘッ、姐さん。ここんところを早く、なんとかしてほしいのでがしょう」

芋虫のように白く太った指が這い寄るのはどこ隠すすべもなくあらわにされている花園である。

前号まで——元禄屋の麻布の別邸に捕えられている怪盗徳夜叉の情婦である小紫のお景は、羅卒の鞭兵衛たちに穴沢流綱渡りの拷問をうけ、さらに淫器・夫面恋や媚薬・櫃をつかって責め廻られる。そして今度は、四つ搦みというおぞましい責苦にかけられることになる。

「そ、そこだよう、白、白豚さん。早く、その四つ搦みとやらに妾をかけておくれでないかえ、早くつたら！」

いま受けおわったばかりの穴沢流・女独楽廻しの錯乱からまださめぬせいであろうか。

それとも三刻ほどまえに撒きちらされた秘薬「櫃の粉」が、ふたたび妖しい余香を燻らせはじめたとでもいうのであろうか。日頃、そよ風にきものの裾をめくらただけで頬をポーッと染めるほど羞恥心のつよいお景からは想像もつかぬ言葉が、つぎつぎにとびだしてくる。

「ヘッヘッヘッ、それじゃあなんですかい。なんでも、あつしたちのいうとおりになるとおっしゃるんですかい」

色といい艶といい、逆さ富士の見事さとい、まったく申し分のない柔肌から指々をはなそうともしないで白豚がいう。

「そうだよう、勝手におしつたら！ ど、どうすればよいのだえ。その四つ搦みをうけるためには！」

「受けるんじゃない、神妙にお受けするのだ。いや、掛けていただくんだぜ。親分にしっかりと誓いを立ててからな」

青蛇の眼が、裸蝨燭のあかりをうけて、鬱

金色に輝いているお景の太腿に、ねっちりと注がれた。

「誓いって……何といえ、よいのだよう。」

じらさないで早くおしえておくれよう。妾はもう、軀中が……」

「軀中が、ほてってたまらない——とおっしゃりてえのでしょう。つまり、姐御は、スキなのだな」

「スキ……スキって、何がなのよう！」

「いま、白豚の撫でているその肌を、フッフッフ、責めてあげてもらうことがよッ」

一瞬、おおきく見ひらかれたお景の瞳。そのぱっちりした瞳のおくには、なんともいえない媚が溢れていた。そして青蛇の細い目をじいーっと見つめながら、

「そ、そう、そうだとさ！ 妾は、妾は、責められるのがスキ、スキだとさ！」

ゴクツと生唾をのんだのは、周りをとり囲む男たちではなく、囲まれている、お景自身であった。

「こ、こんなにされて、スキでない女がこの世の中にいたら見せてもらいたいものだよ、青蛇さん。ア、アッ！ アアア……」

白豚の指が、柔肌を捻りでもしたのであるうか。突如、やるせない悲鳴をあげて、上半



身を前に傾けようとする、お景であった。

「おっとっと、その姿を崩しちゃあならねえよ。女が誓いを立てるときは、股をひらいていなくっちゃあね」

斑猿が長い腕をさしのべて裸身を支えるのを眺めながら青蛇は、

「さきほど親分と相談したのだが、姐御の立てる誓いとは、これだ」

と懷から巻紙をとり出して、もったいぶって、お景につきつけ、

「こいつを、心のそこから読んでみな。その上で得心がいったら、印を押してもらおうじゃあないかい」

美濃紙であろうか、眼前にひろげられた純白の紙面に墨くろぐろと書かれてある文章に視線を走らせていたお景の頬が、みるまに紅く、そまっていた。

「こ、これを妾が、読むのかえ」

「そうだと。もう、読んでみるかい」

それは、女にはとうてい口にすることのできない卑猥このうえない言葉の羅列であり、ふだんのお景なら口が裂けても拒否したことであろう。

が、いまのお景は、違っていた。正面でニタツニタツと相好をくずして眺めている鞭兵

衛と、その三人の子分たちの手で、どうしようもなく燃えたぎらされてしまっている<sup>なま</sup>生身の女体<sup>み</sup>であった。

「読、読めばよいのだろう、青蛇さん」

「ただ読むだけじゃあいけねえ。心のそこから詫びを入れるつもりで読むことさ。そのうえで、印を押す」

「印だって……妾はそんなもの、持っていないよ」

「持ってるさ。この世にふたつとない立派なものを、お持ちになってるさ。フッフッフッあとで、そいつは教えてやらあな。ともかくさあ、読むか、読まねえか」

「よ、よむよ。よむからさあ、ア、アウ、白豚……さん。もう、よ、よして！」

豊かな双臀をくねらせ、うっとりとお景が瞳をとざすのをみた青蛇は、

「白豚、斑猿！」

と二人をお景から離れさせると、

「さあ、読んでみな。早く読みなよ！」

青蛇とのやりとりの間も、白豚の芋虫のよきな指々は、お景の肌を、いたぶりつづけていたのである。現代風にいえば、白豚たちの巧妙なSMヘビー・ペッチングとでもいうべきであろうか。

その悩乱のなかで、

「妾こと、徳夜叉の情婦・小紫のお景……ここに皆さま方によって捕われの身になり、こうして縛っていただきまして以来、夜を日についでに御寵愛を辱うし心から嬉しう存じております。妾の躰が、こうも皆さま方のお気に召すとは思ひもよらぬことにて、お景、心から御礼を申し上げます」

がつくりと乱れてしまつて、乳房に振りかかる黒髪を、頭を振って払いあげながらお景は読み続けた。

「女は由来、皆さま方も御存知のとおり一人の男にては満足できないもの。とくに妾はそうでございまして、徳夜叉ひとりを相手にしての閨房のくらしでは……、い、いつも物足りませず、なんともはや味氣のうて……」

ここでお景が悩ましそうに吐息したのは、夫の徳夜叉の顔を想いうかべたからに相違なかった。

が、とめてとまらぬ熾烈な被虐への願望がお景の濡れた唇をひらかせ、

「妾はいつも悶えており、ひそかにわれとわが……」

と、頬から乳房の谷あたりまでを真赤にそめてふたたび声をつまらせたが「アウ！」と



のけぞってから、

「われとわが身を、慰めることが多うございました。妾の××は、いかがでございますたでしょう、鞭兵衛親分様。幸いにも絶品だなどと過分のおほめの御言葉を頂戴し、お景はもう天にもおぼる心地でございます。賜つて下さいませ。御存分にもて遊んで下さいませ。妾は、スキな女でございます。殿方になぶられるのが、なによりもスキな淫らな女でございます。青蛇さま、妾の縛られましたこの裸は、いかがでございますでしょうか。あなたさまのい<sup>ひ</sup>としい女と較べてどちらが素敵でございますか。妾、青蛇さまのおためとあらば、この体を、すべてお捧げしても悔いはありません、どうか。お気の召すままになさって下さいませ……」

ここで疼痛がこみあげてきたのであろう。ひらかれている股を、さらに、いっそう一直線になるくらいにひろげて、お景は、もう酔ったように、

「妾、拷問されることがスキでございます。とくに片足吊り、あぐら縛り、磔責めなどに掛けられたまま賜られるときの感激は、身も心も、とろけてしまうようでございます。それも男は一人では駄目。三人も四人も五人も

……そうです、男の方は多ければ多いほど妾の喜びは、いやまसरるのでございます。斑猿さま、あなたの奥さまは、いかがでございますしょう。あなた一人で満ちたりていらっしゃるでしょうか。いいえ、いいえ、決して！

白豚さま、あなたの場合は、あなたの恋しい人といえども、あなた一人では、満足してはいらっしゃらないはず。女には、数多くの男に同時に愛されたい、それも強姦されたい、輪姦されたい、責め虐められたいという本能的な欲望がございます。女である限り、誰にでも、どんなに、おしとやかに着飾っておられる高貴の女人にも、かならず、あるものでございます。見せたい、見られたい……賜りたい、賜りものにされたい……あ、ああ」

お景はもう、恍惚となった表情で、何かに憑かれたように読みつづける。

「妾は、皆さま方によってその願望を果たすことができるのでございます。これは、何となく嬉しさでございます。さあ、妾を縛って、鞭打って、責め苛んで下さいませ。決して、あとで後悔するようなことはありません。どうかこの妾を楽しませて下さいませ。早く、お早くなさって……」

裸蝋燭が、ふうーっとゆらいだのは、お景

の吐きだした、やるせないような大きな息のせいであった。

ながい時間をかけて、一言一言ゆっくりと情感こめてここまで読みくだしてきて、あますところは、わずか二行――

紅珊瑚のような乳首をふるわせ、右太腿のつけねの小さなほくろを耀かせたお景は、

「ど、どうか、皆さま方。御存分にこの妾を賜りものにして下さいませ、慰みものとして思う存分に凌辱して下さいませ。さあ、穴沢流・四つ搦みの御拷問を徳夜叉の情婦・小紫のお景、神妙にお受けいたします」

読みおわると、さすがに美しい顔を羞恥にほてらせて、肩ふるわせて俯向いてしまうお景であった。

しばしの沈黙が、八畳ほどの広さをもつ拷問部屋を包んだ。

と――

「姐さん、ご立派、ご立派！ まったく感心してしまひやしたぜ。姐さんが、そんな気持ちでいなすったとはねえ」

白豚であった。根が単純なだけに、青蛇が思うがままに書き綴った文章を、お景の偽りのない心境だと早合点をしたらしい。

「さあ、親分、四つ搦みといきましょう。俺

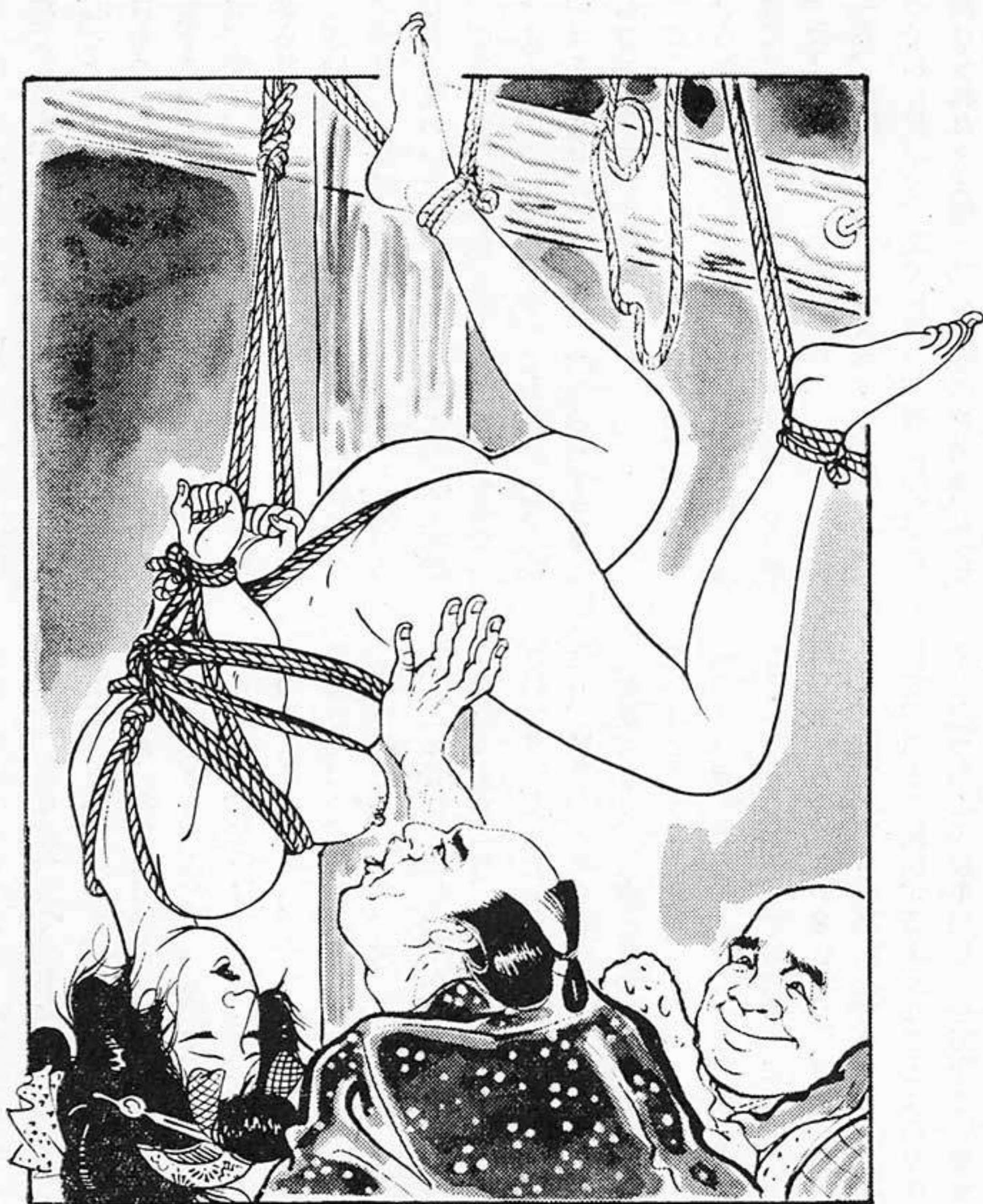


イメージギャラリー

『千登世の悶え』

岡

たかし



はもう、うずうずして、たまらねえ」

小倉地のきもののまえを、うずたかく盛り

あげている白豚に対して青蛇は、より巧妙であつた。いや巧妙というよりも、より淫らで

残忍であつたというほうがよい。

お景が、いま、被虐の炎に白い裸身をやきこがしているということはわかるし、読みあげる素振りや声音からも、その炎がいかに烈しいものであるかも察しがつく。が、青蛇はさらに、とどめを、さしておきたかつた。

「小紫の」と、あらたまつた口調で「じゃあ印を押してもらいましょうか。証文には、つきものでござんしてね」

「印……などは、持っておりません。たしかさっき、そう申しあげたはず……」

下を向いたままお景が、すすりあげるように答えるのを、

「ところが、ちゃんど持っていなさる」

「な、なんですって……妾は、どこにも」

「ほ、ほれ、ここにさ、姐御！ここにちゃんど、この世にふたつとねえ印鑑を、お持ちじゃあ、ありませんか」

青蛇の病的に青白い顔に、赤味がさしたかとみると、その右腕が獲物を狙う青大将のよう躍つた。

それは、白豚や斑猿の技巧を遥かにこえた凄まじいばかりの攻撃であつた。

「ヒ、ヒアアアア……」

いままで、あんなに、罵られたいと言って



いた女とは思われないほどの驚きぶりをお景が示したことから、青蛇の右手の指々の鋭い効果が、わかうというもの。

「ヒ、ヒアアッ……青蛇さん。そ、そんなそんな理不尽な！」

中腰になって爪先立ち、もちあげた踵の上に双臀をのせて膝を開いている——というお景の体勢が、一挙に崩れ、真紅の伊達巻の縄目も妖しく、裸身が、黒い拷問部屋の床に、横倒しとなった。

「ここですよ、お景姐御。女の印鑑は、ここですと相場が、きまっているじゃあござんせんか。白豚！ 左脚をもちな、斑猿！」

「合点、兄貴。右脚を、ほれ、こう抱きかかえて、ぐいっと、よこに、ひき裂く」

とぎれとぎれの斑猿の言葉は、行動をともなったものだけに迫力がある。

「ア、アッ、アッ……な、なにをするのだよう！」

突如、躍りかかってきた男たちの暴力にお景は、われ知らず抵抗の姿勢を示したが、それとても心からのものではなく、どこかに甘えるような媚のある事は、いなめなかった。

左脚を白豚に、右の太腿を斑猿にと、ちょうど「逆Tの字——つまり「上」の字」なりにさ

れたお景は、そのままの姿で、正面、ニタニタッと酒盃をあげている鞭兵衛の前に、かっぎ出されていったのである。

「ア、アレッ……こ、こんなにして、何を妾にさせようとするのさ！」

「印を押すのさ。その前に、署名してもらわなくっちゃあな」

青蛇が、いつ準備したのか、たつぷりと墨を含んだ大筆をもち出し、その軸を……。

「ひ、ひどいことをするじゃあないのさ。ほんとに、いけすかないったら！」

直径一寸ちかくもある竹の軸から身をまもらうとしたが、両脚を一直線になるくらい開かれていくうちに、白豚と斑猿が右左から押さえつけているのでは、どうにもならない。

蜂蜜に浸した菊の花、あるいは極上の酒に漬けた桜鯛のような——と白豚が形容したお景の裸身であったが、責め罵られて、すでに数刻。菊の花の匂いは、男たちのむんむんと発散させる精気の前に、うすらいでいた。しかし、桜鯛のような鮮かな色彩は、ねっとりとした蜂蜜とまじりあって、いよいよ男たちを惹きつけてやまない。

「ひとりで文字が書けるようになるまでには年期がかかる。手伝ってやるぜ、小紫の」

青蛇が、軸のなかほどに手をかけて、ぐうっと下に押す。

「アレッ……ム、ムツムムッ……」

斜め上へと突ったっていた穂先が下にさがるということは、青蛇の手を支点として、反対側の軸の先が下から上へと、こじあげられるということになり、男たちの目には入らないが、お景にとっては、大きい衝撃であったのか、朱い唇の端をかみしめて呻く。

「フッフッフ、よく見ておきな。俺が書くんじゃあねえ。お前さんが自分で、ほれ、書くのだぜ。まず「小紫」の「小」の字と書くか」

巻紙の末尾の一尺ばかりの余白に、青蛇は穂先をゆっくりと、おろしていった。

「いや、いやだよ。こ、こんな……こんなひどい。あ、あんまりだよ！」

「暴れるなっこと。見ろ、字がゆがんでしまったじゃあねえか」

「小」という字を、かきおわった青蛇は、

「「紫」という字は難かしいから動くんじゃあねえぜ」

「ア、アッ、いや、いやだというのにさ！」

真紅の伊達巻に上と下を締めつけられている乳房が、ブルッ、ブルと、ふるえた。



「いまさらイヤもなにも、あ、あった、ものかね。ほれ、この穂先は、こう右へ、今度は左だぜ、姐御！」

一糸まとわぬ身を三人の男によりたかられて、手習いでもするように自分の名を書かされる、お景であった。

「やっとすんだぜ。さあ、次は印鑑だ。しっかりと押すのだぜ、姐御！」

どうやら「小紫のお景」と読める程度にはあったが、ともかくも署名しおわって、白い肩を波打たせるお景の桜貝のような耳元に口をあてた青蛇は、

「こちらから紙を押しつけるような野暮な真似はしねえ。自分で、この上に乗せつけるのだな。だが、そのまえに、こいつを塗らせてもらうよ。大切な書状には朱印を押すものとしまっているからさ」

どこまでお景を罵り抜こうというのである。青蛇がとり出したのは、紅花から採った紅（べに）であった。

紅壺の蓋をひらいて紅附指（べにつけゆび——くすり指のこと）で、すくいあげ、

「こいつを塗るのは唇ばかりとは限らねえ」  
目の前につき出された鮮かな紅を、みとめたものの、お景は、もう口をきく気にもなら

なかった。それでも青蛇が、ニタツと陰気な顔をゆがめて、自分の太腿に顔を寄せてくるのを、みとめると、

「ど、どうともするがいいさ。妾はもう、お前さんたちの罵りものだからね」

せいっぱいの反抗の言葉をかけたが、その瞬間、

「アッ、アッ、アアア……」

黒髪を、ふり乱して悶えるのであった。

「あれほど、早くう！ と叫んでいたじゃないか。じたばたするな」

青蛇の指が、這う。ねちねちと這う。

いままで乳房の上で、よこにつきでていた紅珊瑚の乳首が、ななめ上へと、もたげられたとき、

「これでよからう、白豚。おろしてさしあげな。巻紙の上へ、べったりと押させるのさ。

斑猿もお手伝いして、さしあげな」

「へイ、兄貴」

異口同音に答えた二人が、両手で抱きかかえていた太股を、開いたままのかたちで、ゆっくりと、おろしていく。

「ア、アッ、イ、イヤだよう。こ、こんなことをするのは、イヤだってば！」

言葉なかばにお景は、太腿の外側に、冷た

い巻紙が、ひんやりと触れるのを覚えて、思わず下を、みた。

墨くろぐろとした淫らな文章。

「そのまま、上体を屈める。いいな、お景姐御。ぴったりと、そら、ぴったりと巻紙に押すんだ」

「い、いやだ、いやだよう、こんな！」

「いまさら、何を云ってるんだ。それ！」

背後に回して縛りあげられている二の腕を白豚と斑猿がつかんで、

「手伝ってやるぜ。このままで上体をまげ、額を床にくっつけるのは、ちょっとばかり難しいだろうからな」

ぐいっと押えつけられたポーズは、上からみると「矢印・↑」を逆にしたように見えるにちがいない。

「もうちょっただぜ、姐さん。ほれ、ほれ！」

白豚が声をかけ、青蛇が、ここぞとばかり双臀を押えつけたものだから、

「ヒ、ヒアアア……」

悲鳴とともに、お景の裸身は蛙が、ひしゃげたように床に、へばりついてしまった。

が、それも一瞬——、

左右、後方からのびた六本の腕が、サアッとお景を抱きあげると巻紙からひき離す。



「フッフッフ、いい色じゃあねえか」

いままで子分たちのいたぶりを眼を細めて眺めていた鞭兵衛が、はじめて口を開いた。

「結構、結構！ 形といい艶といい、青蛇よ申し分なしだぜ」

「まったくですねえ、親分。この『淫紋』というやつを女が押すということは知っておりましたが、実際にみるのは、おっと違った、女にやらせるのは始めて。こいつは、面白い趣向でしたよ」

斑猿が素直に心の中を被露すると、白豚が「こんなに綺麗に押せるものとは、あっしはもう、おったまげてしまいやした。それにしても、女は、いろいろなところに印鑑を備えているものでござんすねえ」

純白の巻紙に、墨くろぐろと書かれた淫らな文字。その末尾に、小さく輪を描いたくれない色の淫ら紋――。

床にうつぶせて、すすりあげているお景の裸身を、あかあかと数本の裸蠟燭の光が浮かびあがらせていた。

## 断崖の白蘭

同じ頃――

いまお景が責められている麻布六本木から

北に一里と十一町、大江戸のどまんなか日本橋に間口二十間、奥行百間はあるう豪勢な敷地を誇る元禄屋の本邸では、菊亭貴子が丈長の黒髪を、あおあおとした備後置に波打たさせて主人の折檻を、うけていた。

湯浴みをさせてつかわせ――と番頭の昭吉と和吉に命じて主人の元禄屋が出かけていったあと、二人の番頭は忠実すぎるほどのまめしきで、その命令をはたし終わると、今が好機とばかりに高貴な女主人である貴子を木馬に追いあげて、前と後から二人がかりで存分に責め廻ったものであった。

帰宅した元禄屋が、それに気づかぬはずはなかった。

「お帰りなされませ……」

と、木馬責めから解放されたあと、わずかに許された白綸子の湯文字ひとつの身で、うやうやしく三つ指をついた貴子に、

「昭吉と和吉に廻りものにされたりしいの」  
ずばり云って、貴子の頬を赤く染めさせる

と、  
「よいわ、叱りはせぬ。フッフッフ、酒をすこし頂くとするか」

と、女中頭のお松をよびよせて酒肴を用意

させたあと、

「貴子」と、あらたまった口調でよびかけ、  
「ハイ」と、ふし目がちに端正な顔をあげるのを満足そうに見やり、

「僕には五人の妾がいるが、京都からおまえが下ってきてからというものは、お前に一番興味を持っている。どうじゃ、嬉しいかな」  
憂いを含んだ切長な眸のおくに艶めいたものが、ながれた。

「フッフッフ。ときに、のう、貴子。いつも縛られてばかりいるようじゃが、ひとつ今夜は、自分で自分を縛っては見ぬか」

白蘭の花びらを偲ばせる裸身が、菊灯台のあかりのなかで揺らぎ、

「ハ、ハイ……」

「僕の云いつけどおりにするというのか」  
かすかに頷いてみせる貴子の風情には、自棄的なというよりも、すべてを元禄屋に捧げるほかに自分の生きる道はないとでもいう、献身的な美しさが滲みでていた。

「ほれ、これじゃ。これでまず、あの柱に右足首を括りつけ、左足首はあそこ、股をひらいてな」

元禄屋があごで示したのは、床の間の右手の丸柱とその反対側の乱れ竹であった。その



あいだは一間半もあろうか。猛宗竹を五、六本、無造作に植えこんだ乱れ竹の飾りは、この豪華な部屋のなかに乱調の美とでもいうべき優雅さを、ただよわせていた。

これじゃ——と投げ出された荒縄を見やっ  
た貴子の頬が、ポォーッとあかく染まり、

「旦那……ま……」

消え入るような声であった。

「な、なんじゃな」

「はしたない女とお思いになられるのが、貴子は、つろうござりまする」

「なぜ、はしたないのじゃ」

「自分で、自分を縛るなど……貴子は、イヤ、イヤでござりまする！」

いまにも裸身をあずけるかのように乳房をおおったまま、にじりよってくる貴子からはほのかに蘭麝の香りが、たちのぼっていた。

「イヤなら、イヤでよいわ。昭吉と和吉を呼びよせて……」

元禄屋の言葉を、あわてて貴子が遮った。

「イヤ、イヤ！ そ、そのようにお願ひあそばされましては！」

あの二人の番頭に、この上、ねちねちもてあそばれるなど、考えるだけで鳥肌が立つ。

「旦那さま。貴子は、自分で、ひとりで

やりまする！」

「そのほうが、よさそうじゃな。さあ、ゆっくりと見せてもらおうかの」

おおきく胡座をかきなおした元禄屋であったが、ふと、背後の戸棚に手をのぼすと、何本かの物干ばさみを取り出して、げげんに眉をひそめる貴子にニヤッと笑って見せ、

「フッフッフ、この説明は、あとじゃわ。

早う縛ってみなされい！」

鷹に睨まれた小雀という言葉があるが、貴子にとって元禄屋は、もはや残酷な鷹ではなかった。江戸に下ってきてもう半年。いつのまにか元禄屋の不思議な魅力に捉えられ、その掌中で、もてあそばれることに少なからぬ楽しさを感じ始めてさえいる貴子であった。

それは、縄の魔力とも云えた。

女は、自分を強く抱きしめてくれ、縛りつけてくれるものに、われ知らず惹きつけられていく。アームレット、ネックレス、ミニ・

スカートの膝を飾る花型デザインのレッグ・アクセサリ。いずれも、そのあらわれであり結婚式に際して新夫に、はめてもらうエンゲージ・リングが、そもそも女奴隷となったことを示す「指鎖」なのだ。しかも女たちは、その自分を縛りつける各種の「鎖」を自分の

手でつくり出すことに愉悦を覚えている。背中を丸出しにしたイブニング・ドレスのバックポイントのネックレスを、せっせと透かし彫りにする人妻たち。ブレスレットの唐草模様をすり板や、やすりをつかって製作するの喜びとする乙女たち——女は先天的に、緊縛され束縛され、締めつけ、責められることを待ちのぞんでいるのだと云えよう。

いま、元禄屋が投げ与えた毛羽の多い荒縄で、自分の右足首を縛っている貴子の姿は、それらの女たちに似ていた。

縄をかけるのが、いたいたいほど華奢な足首に二巻きされた荒縄は、丸柱のねかたにおずおずとおされて、くるくると連結されていき、ついで崩れた膝を立て直して、チラッと元禄屋に羞恥にみちた顔をあげた貴子の白魚のような手が、別の荒縄を摘みあげると左足首へと泳いでいく。

身動きするたびに五尺近い黒髪が、むき出しの背中に艶やかに波打ち、富士額の生えぎわが、なまめかしく菊灯台の光に映えた。

ものおとひとつしない夜の静寂のなかに、ただ、貴子の喘ぎだけが甘ったるく響交い、元禄屋が盃を口に、はこぶのも忘れたように熱心に、それを見つめていた。



夜鷹であろうか——はるか遠くで、鳥の哭  
く声がひびいたとき、

「旦那さま……あとは……あとは、旦那さま  
に……」

貴子の唇から、忍び音が洩れた。

「妾……こ、これ以上は……」

左足首を縛ったものの、その縄尻を乱れ竹  
に絡ませることができずに、白綸子の湯文字  
から膝をこぼれさせての訴えに、元禄屋が二

ヤツと頷いたのは云うまでもない。起ち上が  
るまでもなく腰を浮かせば貴子に手が届く。

「手伝ってやろうかな」

「ハ、ハイッ……」

乳房をサアッと手で覆う所作からは、えも  
云われない雅びさが、ただよう。

「儂が手伝うと、その股が一直線にひらくこ  
とになるが、それでよいのかの」

羞恥をあおりたてるために、元禄屋は、右



イメージギャラリー

『ムチ音交響楽』

市原 幸三郎

手を湯文字にかけて、太腿の方へ、めくりあ  
げていきながら、さらにこの高貴な育ちの姫  
を、いたぶるように、卑猥なことばで、

「おまえの太腿が、まる出しになるのだよ。」

それでも本当にかまわないのだね」

一瞬、頬を真っ赤にして眸をそらした貴子  
であったが、

「ハ、ハイ……旦那さまのなされることでし  
たら、貴子は、貴子は……どんなことでも、  
つつしんで、お、お受けいたしまする」

「よし、よし。では、手伝って進ぜよう。ど  
うするのじゃな、まず」

「あ、あの、あの乱れ竹に、この縄を、とお  
して下さいませ」

「よい、よい、たやすいことじゃ」

龍文のきものの裾を払った元禄屋は、ゆっ  
くりと巨軀をおこして、貴子の捧げる荒縄の  
一端を、乱れ竹の上部の節へ、ととおす。

「下へ、もそっと、下へ……」

そんなに上へ結びつけられたのでは右足が  
上に吊りあがってしまう。あわてて居ずまい  
を正して憐れみを乞う声をあげたが、聞こえ  
ぬふりをした元禄屋は、

「つぎは、この縄をひけば、よいのじゃろ。」

さあ一緒に、貴子、それ」



と、乱れ竹におして手もとにもどった縄尻を貴子の胸もとにつきつけて、乳房をおおっていた右手をとり、無理に握らせると、

「じゃあ、懸声をかけるよ。一、二、三！」

ギューッとひきしぼられた荒縄から、毛羽が幾つもとぼれ散ったが、それよりも早く貴子の左足は、ピクピクッと膝から下が釣りあげられる魚のように躍って、やがてはピーンと足の裏を天井に向けて逆立ってしまう。

いままでは、かくれていた、ふくらはぎや太腿の内側が、まるで雪洞でも点ったようにくると、こちらを向いたときの美しさに、元禄屋は、おもわず生唾をのんだ。

(得難い女よ……)。

まさしく、右足を斜め上に、左足は丸柱のねかたへ真横にと、大股開きにされて、双臀で必死にバランスをとって倒れるのを防いでいる貴子の姿態は、千仞の断崖に咲く大輪の白蘭の花を思わせるものがあった。

「ほれ、今度は、こう、腰を……」

床の間に上がりこんで、背後から豊かな腰に手をあてて双臀を、しっかりと安定させてやった元禄屋は、ことのついでに触れなくてもよいところへ単刀直入に右手をさしのべ、

「アアッ、旦那さま！ お、おいたは、

おやめ下さいませえ！」

と悲鳴をあげさせてから前に迫り、<sup>〃</sup>幅の広いVの字<sup>〃</sup>になっている両脚に、わずかにまつわりついている湯文字を指さして、

「さあ、その布をとって！ いいかい、自分で脱ぎとって、そのあと、これを儂のいうところへ挟むのだよ」

さきほど戸棚から取り出した物ほしバサミの使いかたを、始めて知らされた貴子の顔からサアーツと血がひいた。いくら前右大臣菊亭政房の息女に生まれて従三位中納言押小路高明のもとに嫁いだ、やんごとなき身であっても、物ほしバサミの使用法や、その弾力くらいは知っていた。それで、いったい、どこを挟めと命令されるのであろうか。

「旦那さま……」

不安におびえる顔を覗きこんだ元禄屋は、  
「大丈夫、安心なさい。大事な大事なおまえを傷つけるようなことはしない。ほれ、そんなに強い力ではない」と、自分の小指をパチンと挟んで見せてから、「さあ、いつまでも胸をかくしていないで、湯文字を取りさりなさい。それとも和吉と昭吉を呼んでもらいたいのかえ」

「また、そ、そのようなことを申されて、妾

を、おいじめにならなくても！」

怨ずるような眸をあげた貴子は、ホオーツと溜息を、はき出してから、諦念したように元禄屋を、みあげ、

「旦那さま。はしたない女だと、お考えになりませぬように……」

左右の手が、湯文字の紐をとくために胸を離れた。あらわれでた、いくらか上に反ったなめらかな乳房は、見るたびに、あらたな魅力を覚えさせる麗しさであった。

桃色の乳暈の中心の紅真珠のような乳首に元禄屋が見とれているあいだに、震える指先が紐をといた。

「旦那さま……」

白綸子の湯文字が、白蘭の花びらが散るように、乳白色の腰のまわりに拡がったとき、貴子は、われ知らず、いま紐をときおわったばかりの双手を、元禄屋の首に回していた。

「旦那さま……」

「貴子……」

と、いったんは、それに応じたものの、すぐ裸身を押しやった元禄屋の視線が、Vの字型におしひらかれた股間に、注がれたことは云うまでもなかった。

どこまでも白い雪のような肌に、まるで黒



曜石を鑲めたような花園が、菊灯台のあかりを浴びて艶めいている――。

その白と黒との妖しいばかりのコントラストを喰いいるように眺める元禄屋の耳に、まったく思いがけない声が、きこえた。

「お、お好きになさってくださいませ……」

媚に濡れた言葉と、云えた。そして、春風にそよぐように裸身が揺れる。

「好きにしても、よいのかの」

「ハ、ハイ……旦那さまの、お好きなようになさってくださいませ」

「フッフッフ、愛いやつよう」

つと、身をよせた元禄屋は、ただよう蘭麝の香りを、胸いっぱい吸いこむ。

「旦那さま……」

貴子の双の腕が、ふたたび、首筋へと回ったが、今度はそれを振り払おうともせぬ元禄屋であった。

久我雅子に較べれば、「反応」のおそい貴子ではあったが、元禄屋はすでに「哭かせどころ」を心得ていた。その「ツボ」を存分に攻めたてられては、上にいくらか反りかえっている貴子の乳房も、柔らかく、なまめいてくるほかはない。

「ア、アア……」

喘ぎが、いちだんと長く尾をひき、開かれた唇からは、熱い呼吸が吐き出されてくる。

「可愛い女じゃ、可愛い女じゃ」

乱れかかってくる黒髪に、すっぱりと包まれるような恰好で、どのくらい愛撫しつづけたことであろうか。

やっと、簾をかくくぐるように黒髪のなかから身をおこした元禄屋は、うっとりとし瞼を閉ざしている貴子を見やりながら、

「ほれ、ほかならぬ自分自身の香りじゃ、知っおくのがよからうて」

骨太の扇のようにひらかれた右手のうち、人さし指と中指が、やさしく開かれている鼻孔へ、あらあらしく突ったてられていった。

「ム、ムム……」

思いがけない急襲に、貴子が奇態な呻きをあげると、せいっぱいの力を華奢な両手にこめて、それを取り外そうとした。

「無駄なことじゃて」

なおもグイグイと、鼻の形が変わるほど二本の指を喰いこませながら、あいている方の左手で、物干ばさみを拾いあげた元禄屋は、  
「それぞれ、ここにスキが出来ておるて！」  
音はしなかった。

が、貴子は、呼吸が困難なうちにも、右の

乳首に灼けつくような痛みを覚えて、身悶えた。

両手で、鼻孔を責めつけている元禄屋の右手をとり、のぞこうとしているあいだに、無防備となった乳房の頂に、物干ばさみが、くり出されたのである。

「アウ、アウ、アウ！」

つづいて、左の乳首にも同じ衝撃をうけてそれを払いのけようと右手を動かしたとき、急に、鼻孔から二本の指が抜けた。

「旦那さま！ い、痛とうござります」

白い指が、物干ばさみを摘みあげようとした寸前、

「ダメじゃ、ダメじゃ。いくら痛とうても我慢する、我慢してみせるのじゃ」

烈しい叱声とともに、元禄屋の腕が、貴子の両手を、がっちりと捕えて離さない。

「で、でも……」

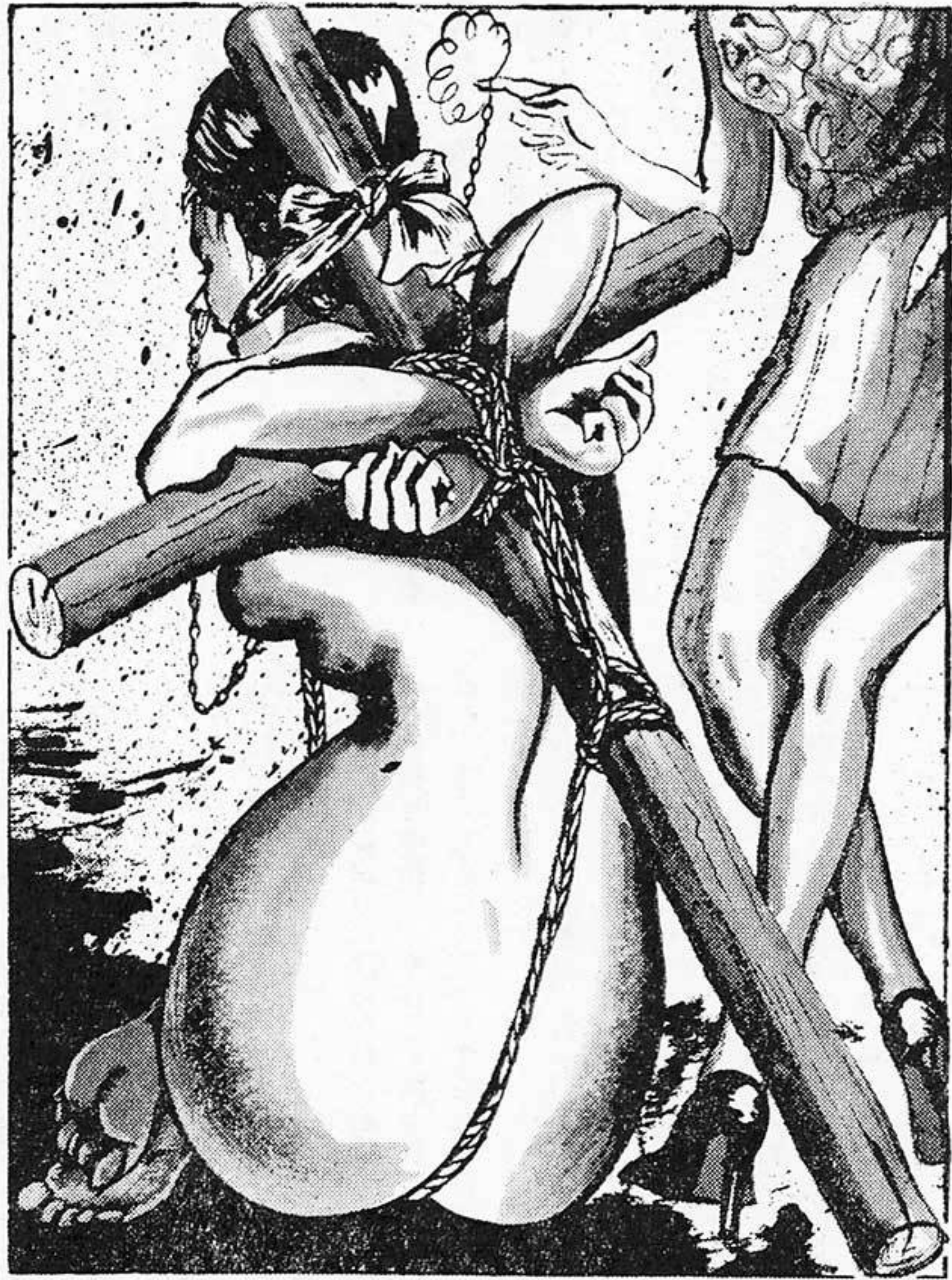
奥歯を、かみしめているのであろう。唇をゆがめて、あらがう貴子の苦痛に歪む顔を、のぞきこんだ元禄屋は、

「一、二……三、四……五……」と、ゆっくり数を、かぞえ始めた。

奇妙なことに、その声をきいていると、次第に苦痛が柔らいでくるように思われる。



## イメージギャラリー……『十字架の女』……三 鷹 I・O



「それ、十、十一……どうじゃな。少しは、らくになったろう。十二、十三、十四、十五……」

じいっと耐えている貴子の耳に、やがて、

「三十」という声がひびいてきたとき、いままでの苦痛は、夜霧のようにはれて、そのかわりに、ジーンと、乳首のさきから「ここちよい慄え」が伝わってくる。

「旦那さま……」

「云ったとおりであろうが。フッフッフ、三十一、三十二、三十三……」

なおも楽しそうに数をかぞえようとする元禄屋に、

「もう、もう、よ、よろしうございます。貴子は、なんだか、なんだか……」

「なんだか——どうなったとおいしいじゃな」返事のかわりに、潤んだ眸から、にじみでた宝石のような涙が、スウィットと、ほんのりと桜色に、いろづいた頬に伝わった。

それが、決して、苦痛の涙ではないことを知っている元禄屋は、しっかりと捕えていた華奢な両手を自由にすると、あらためてねっとりとした骨太の右手を、貴子の鼻さきにつきつけて、

「いかがかな、よい匂いじゃろうが。もちろんの雲南とかいう国にすむ麝香鹿の香囊からとれる、この世に並ぶもののない香りに、そっくりであろうが」

あおざめていた貴子の頬がポオーッと、そまったのは、この香りが、自分の、炎をともしられたときに崩えでる香りに、ほかならないことを知っていた、せいであつた。

「フッフッフ、さあ、挟んでみなされ。こ



の芳わしい香りの源に、この物干ばさみを、しっかりと挟んでみなされ」

元禄屋の声には、有無を云わさぬ強いひびきがあった。

## 物干ばさみ

「イヤ、イヤでござりまする！」

貴子の声はふるえていた。いくらなんでも自分自身が、自分に、物干ばさみを挟むことなどできるはずがない。

が、もろにぶつかった元禄屋の眼には、寸分の妥協の余地もなかった。

「旦那さま。ど、どうしてもでございませるか……」

すすりあげるような貴子の最後の訴えも、

「なんなら、昭吉、和吉をよびよせて、挟ませてやってもよいのだよ。二人とも大喜びをするじゃろうて」

という一言で、空しく拒まれた。

(あ、あ、ああ……)

心の中の叫びが、いよいよ羞恥をあおりたて、みるまに貴子の頬が、色づいてくる。

「ほれ、これで、やってみることじゃ。恥かしがることはあるまいに」

パチン——と、元禄屋の掌の上で音をたてた物干ばさみが眼前につきつけられたが、それは、真紅に塗られていた。

「白い肌に黒い色どり。そこを飾るのは赤色が似つかわしいと思ってな、特別に誂えさせたもの。決して、傷をつけるようなことはないから、安心して、さあ、やってごらん」

押しつけられるまま、手にとったものの、貴子は、悪寒にでもかかったように震えた。

左と右に、一直線にひらかれて縛りつけられている両脚の痛みも、もはや感じる余裕はなかった。

そんな貴子に、元禄屋は、もう一度、

「呼ぶのかな、昭吉と和吉を！ あゝ二人にもっともっと拷問してもらいたいというのなら、それでもよいのだが……」

言葉の調子から、怒りに近いものを感じてた貴子は、いまはこれまでと観念するほかはなかった。

うらむような凄艶な眸をあげて、元禄屋を仰ぎみたとおもうと

「よこそ！ 旦那さま、よこそを向いていてくださいませ！」

一刻も早く羞恥からのがれたいとでもいうふうな、かん高い声をふりしぼった貴子は、

黒髪をふり乱して、上半身を前に傾けると、われとわが手で、真紅の物干ばさみを、使用したのであった。

が、刹那！

「ヒ、ヒアアアッ……」

すさまじい悲鳴が、ほとばしった。

「ど、どうした！」

いまだかつて物に動じたことのない元禄屋が、あわてて叫んだのは、どこを挟んだのか見ていなかった、せいであつた。

他見をしていたのではもちろんなかった。

せめても「見られまい」という女心から、貴子が両手でおおいかくしたので、見ようとしても見えなかったのであつたが、考えてみると、貴子とて、どこを挟めばよいのか、知るはずもなく、たとえ知っていたとしても、よく見て、挟むことなど到底、できないことであつた。

サア——とさしのべた右手で、物干ばさみをとりのぞいた元禄屋がホツとしたように、「よりによって、一番敏感なところを選んだものだ。これじゃあ、痛いのも無理はなからうて」

はさみは、木製であつたが、はさまれると当然のことであるが、痛い。



「どうやら、貴子は、ただ単刀直入に、物干ばさみを繰り出して使用したことは明らかであった。」

「旦那さま……」

泣き声をあげて取りすがってくる貴子の眸からは、大粒の涙が、あふれでていた。

「よし、よし。やはり、ひとりでは無理なのじゃな。可愛いやつじゃて……」

ひたすら命令に従おうといういじらしさにグウーッと熱いものさえこみあげてきて、元禄屋は、思わず、貴子を抱きしめた。

が、やろうと決めたことは、とことんまでやり抜かねば気のすまないのがこの七尺豊かな大男——三百諸侯をふるえあがらせるほどの財力をもつ元禄屋の性格であった。

「手伝ってやろう。それで、いいな」

涙に濡れた顔で、うなずいて見せる貴子のしつとりと汗ばんだ太腿に掌を這わせた元禄屋は、ふと、

「やはり、両手を縛っておこう。そのほうがやりやすからうて」

と、ひとり言をいうと、畳の上にちらばっている毛羽の多い荒縄を拾いあげ、

「さあ、おとなしく手を出して」

いたわるようなその声に、貴子の心も和ん

だ。が、そっと、さし出した右手首を捉えた荒縄は、するどく肌を噛む。

「アッ、アッ、旦那さま」

「すこしくらいは、我慢することじゃ」

縄尻が、右手の丸柱にからみつき、ついで左手を縛った縄が、一間半もあろう床の間の左方にある猛宗竹のなかほどを一廻りすると貴子は、身動きひとつできなくなる。正面から見て、ひらかれきった両脚と、左右に伸ばして張りつめられた双の腕は、「エ」の字に見えた。

そして、その「エ」の字に向かって元禄屋は、真紅の物干ばさみを握って立った。

「始めるよ」

と元禄屋が云う。

「ど、どうぞ……」

「かまわないのだね、ほんとに……」

「……」

返事はなかったが、かすかな身動きは、あきらかに許容を示すものであった。

すかさず元禄屋の右手が、手槍のように繰り出され、正確に……。

「ア、アッ！」

黒髪が乱れ、白い咽喉が、のけぞった。

ついで、左手が、貴子の右太腿のつけねを

摘みあげると、第二の物干ばさみが……。

「アウ、ア……ア……だ、だんなさま！」

瑞々しい、弾力に溢れる内股の肉が、ヒクヒクッと蠢き、裸身を締めようと悶えるにつれて、左右に張りつけられた四肢が、妖しくくねった。

荒縄で縛りあげられている手首や足首が、ちぎれるように痛むはずであるが、貴子にはそれを感じる余裕はなかった。

第三の衝撃が襲ったとき、身体中の血が、みな、その部分に吸いとられるようで、貴子は、口のながか、すっぱくなる。

「旦那さまア！」

喰いしばった歯ぐきの間から、かなきり声をあげたとき、濡れた布を棒でたたくときのような奇妙な音がして、いままでと違った痛みが突きあげてきた。第四の物干ばさみが噛みついたのである。

「ア、アウアア……い、いいい……」

ともすれば、せきをきったように迸るであろう絶叫を必死の思いで耐え抜く貴子の広い額には、玉のような汗が、にじみでていた。

よくとおった鼻筋が、菊灯台に映え、乳房の谷を伝わった汗が、へその窩へと滑りこんだが、そこで、くるりと一回転して、なめら



かな下腹を、すべりおちる。

と――

その汗の滲みこんだあたりへ、右手をあてた元禄屋は、

「フッフッフッ、第五！そして、これで、

最後じゃ！ほれ、行くよ！」

真紅の物干ばさみが、虚空に小さな弧を描いたかと思うと、

「ウ、ウウッ！」

貴子が、烈しく四肢を縮めた。

しかし、それは、苦痛のためというよりも多分に「これが、最後だ」という元禄屋の言葉の、せいであつた。

実際に、痛さは、もう、すでに、痲痺してしまっているためであろうか、さほどではなく、

（もう、おわったのかしら……）

とでもいうように、貴子が、うっすらと眸を見開いたほどであつた。

「どうだい、気分は……」

のぞみをはたした元禄屋は、そばの徳利をとりあげると、

「さあ、一杯、飲むと、苦痛が柔らぐよ」

黒髪をかきわけて、貴子の首頸を抱きかかえるようにして、乾いた唇へと、酒をながし

こんでいくのであつた。

「だ、だんなさま……」

ゴク、ゴクと咽喉をとおっていく冷たい酒に、いきをふき返す思いで貴子は、元禄屋を見上げた。

始めて、飲まされた酒であつたが、それが胃の腑に、しみとおったあと、眼の前が、明かるく、パァーッと、輝いてきたところをみると、貴子の体質は、酒に合うのかも知れない。

ほんのりと頬が、若桜色にそまるにつれて物干ばさみの痛みが柔らぎ、ほどよい刺戟に感じられてくる。

「旦那さま……」

もう一度、誘うような声で貴子はいったがそのとき、真紅の物干バサミが、かすかに揺れた。

狙っていた「白」「黒」そして「赤」という色彩効果が、鮮烈な官能美をかもしだしている。その艶かしい光景を、盃を唇にはこびながら、しばらく満足そうに眺めていた元禄屋は、

「貴子。かまわないのだね」

と、柔らかい耳朶に口をつけるようにして囁いた。

元禄屋が何を求めているかは、察しのつくことであつた。

「わしに、任すというのだね」

ふっくらとしたおとがいが、羞かしそうに引かれる。

「え……え、旦那さま……」

「このままだよ」

「えッ？」

「このまま、縛ったままでだよ」

返事はなかった。が、頬がみるみる紅く染まった。

「じゃあ……」

薄鼠色の紛織の帯を解き、龍文のきものを脱ぎ捨てていく元禄屋は、「エ」の字に縛りつけられている貴子に、はたしてどのような挑むつもりなのであろうか。

その総計は、四十八手を遥かに超える七十七型があると云われているが、どうやら元禄屋は、「色道大鑑」にもない「攻め手」をつかうものとおもわれる。

夜は、長く、二人の秘戯をみまもるものとは、ただ、乱れ竹にかかった白綸子の湯文字だけであつた。



——〔女体緊縛美各論〕——

# 妖艶の美女、絹川文代

——小<sup>お</sup>雅<sup>が</sup>田<sup>た</sup>

勇<sup>いさむ</sup>——



SとMとの理解者である美女といえば、先ず絹川文代に、指を屈する必要がある。

こわれ易い繊細なガラス細工のような肢体の中に、強靱なSM的な意欲が秘められている絹川文代は、我々SM愛好者のメッカであるような気がする。

ダンサーをしていたとかいう、あの伸びやかな肢体は、殊に、その足の美しさに於いて抜群なものを見せている。

私は、どちらかといえば、S8分、M2分くらいのSM愛好家であるが、若し、絹川文代に逢うことが出来たとしたら、その足下に跪いて、足の甲や脛に接吻の礼をとっていたかもしれない。



彼女のグラビアの中に、足首を黒い縄で縛られて、拇指がピンと上に反り、四本の残りの指が内側へ曲げられている写真があるが、私は、この写真を見ていると、この素足を舐めたくなくて困ったことがある。

これは、絹川文代が、時折、サドの女王として誌上に君臨したからであろうか。

SとMは表裏一体と、よく言われるが、緊縛女体愛好家として自認している私にしては、相手によっては、このような気持ちになるのである。彼女が男性を責めるときの奔放で大胆な姿態が、私の頭の中に強く印象づけられていたからであろう。

その上、私は絹川文代が縛られ、責められている時のポーズに、たまらない魅力を感じ、緊縛写真を眺めることによって、撮影している時の様子を、あれやこれやと、妄想を逞しくして、ああだろうかと、こうだろうかと、思いを、めぐらすのである。

雨戸の前で絹川文代がころがされ、滑車で両方の足首を吊られようとしている写真が、これも、私の大好きなものの一つである。口を半ば開けて、喘いだような表情も、いかにも責められているといったムードが出ていてよかった。

私の写真鑑賞の一つの方法として、顔だったら顔、乳房だったら乳房、足だったら足だけを出して、他の部分を、すべて掩ってしまふといったやり方を、することがある。

この足吊りの写真でいえば、顔の表情と足首から先の表情に、素晴らしい美しさを感じることが出来る。

もう一つ、私の緊縛写真鑑賞の方法としては、拡大鏡を用いる方法がある。これは部分鑑賞と関連しているのだが、自分の見たいという部分だけを、拡大鏡でアップにして眺め







るわけである。この方法は、印刷物だとアミ目が出てきて拙いので、専ら印画紙焼付の写真、この方法で迫力を増幅して眺め、心の中に鬱積したS心の、もやもやを昇華して、解消を計っている。

多くのS傾向の男性、殊に若い男性では、絵や写真、それに文章などだけでサジスチッ

クな欲求不満を解消させることには不得手であるようだ。未知の世界への導入の道しるべとして、当初は、むさぼるようにして、眺め読むものだが、いずれ、そのうち、自分も実行してみたいという気が起こるものだ。

私も若い頃、初めて△奇ク▽を手にした時の驚きと喜びは、今でも忘れることは出来な

い。それが、二冊三冊と手にしてゆくうち、『この世の中に、こんなにも、自分の気持ちにぴったりの雑誌があったのか』という感激の念で、いても立ってもおれない程の興奮を覚えたものである。

自分のためにだけ作られたと真底思える雑誌奇クに惚れ込み、愛読から熱読、そして、熱狂的なファンになってしまった。奇クの発売日が近くなれば、買い付けの書店へ日参する始末で、遂には、その書店主は、私の顔を見ると奇クを出してくれる位になった。

そうした知識吸収の時代から、自分のS精神の整理といった過程を経て、必然的に、私も、一度でいいから、自分のこの手で、若い女の肌を縛ってみたい、という悲願めいた気持が湧き起こってきた。

それは少年時代に、胸に描いていたお伽噺のようにメルヘンの世界のことのように、甘くて懐かしく、現実逃避には、もってこいの空想の、ひとときであった。

これほどまで、△女体の緊縛▽に憧れているのだから、自分にも、きっと、そのワンチャンスは訪れる、という強い希望が、私の前途を、きわめて明るくしていた。

そして、そのチャンスは、案外早く、私の





前にやってきた。

大学を卒業し高校教師として就職した私は世間並みに言えば、結婚適令期、まあ、総べての点で、妻を娶ることの資格を備えていると見なされたのである。

私は知人の紹介で、一人の女性と見合いをした。容貌といい、学歴といい、家柄といい

すべて申分なかった。只、強いて欠点といえ、余りにも、何もかも、整い過ぎているといった点だけであった。

私は直ちにOKした。

これで、天下晴れて自分のこの秘めたる念願を、この女性によって果たすことが出来ると思った。最初は、やわらかい腰紐のような

ものでもいい、ほんの真似事でも、この自分の思いを生まれて始めて遂げさせて欲しいと願った。私にとって、結婚は、唯一無二のチャンスであったのだ。

私は新婚の妻の前で、自分の性傾向を、何一つかくすことなく告白し、奇クをはじめとしたコレクションまでを見せ、一身同体の夫婦になったのだから協力してほしいと、心から頼んだ。しかし、結果は完全に失敗であった。新妻の強い拒否に合ってしまったのだ。

その時のことを、今、思い出しても、私は心の萎縮するのを覚える。

軽蔑しきったような、冷たい妻の目を見ていると、所詮、私の考えは理解して貰えまいと絶望した。妻は体質的に、私の傾向を全面的に受け入れることが出来ないようだった。

そこで私は、自分の心の中の永遠の恋人を妻に求めることは諦め、それを奇ク誌上で活躍する緊縛女性に求めたのである。

いわば、私の心の逃避場所を、そこに求めたのであって、それ以来、妻には、私の趣味は趣味として認めさせてはいるが、お互いにその点に言及することは、意識的に、避けているようだ。趣味といえ、私のこの秘かな「女体緊縛写真愛好趣味」は、今流行のゴル



フウイドー程の害毒を、家庭に及ぼしてない事を確信している。

そんなわけで、私は自分の固い殻の中に、完全に閉じ籠って、メルヘンの世界の甘いムードを楽しんでいる。他人や世間に何の迷惑や悪影響を与えることなしに、そうした私のひそかな楽しみは続いている。年をとるにつれて、この傾向は深まってゆくようだ。

今更、自分の手で、若い女性の肌を縛ってみよう等とは思わない。それは他人に委しておけばよいのである。

私は、△緊縛写真▽という抽象化された画面の上に現われるメルヘンの世界の国でだけ自分の空想を働かしてゆく事にするのだ。

絹川文代は、そんな私の空想を、美しくも豊富に、絢爛と花咲かせて呉れる匂うような価値のある麗人であった。

私が絹川文代に心奪われた、もう一つの理由は、縛られた時の眼の美しさであった。特に猿ぐつわをされた時の、うるんだような彼女の眼の輝きは忘れる事が出来ない。

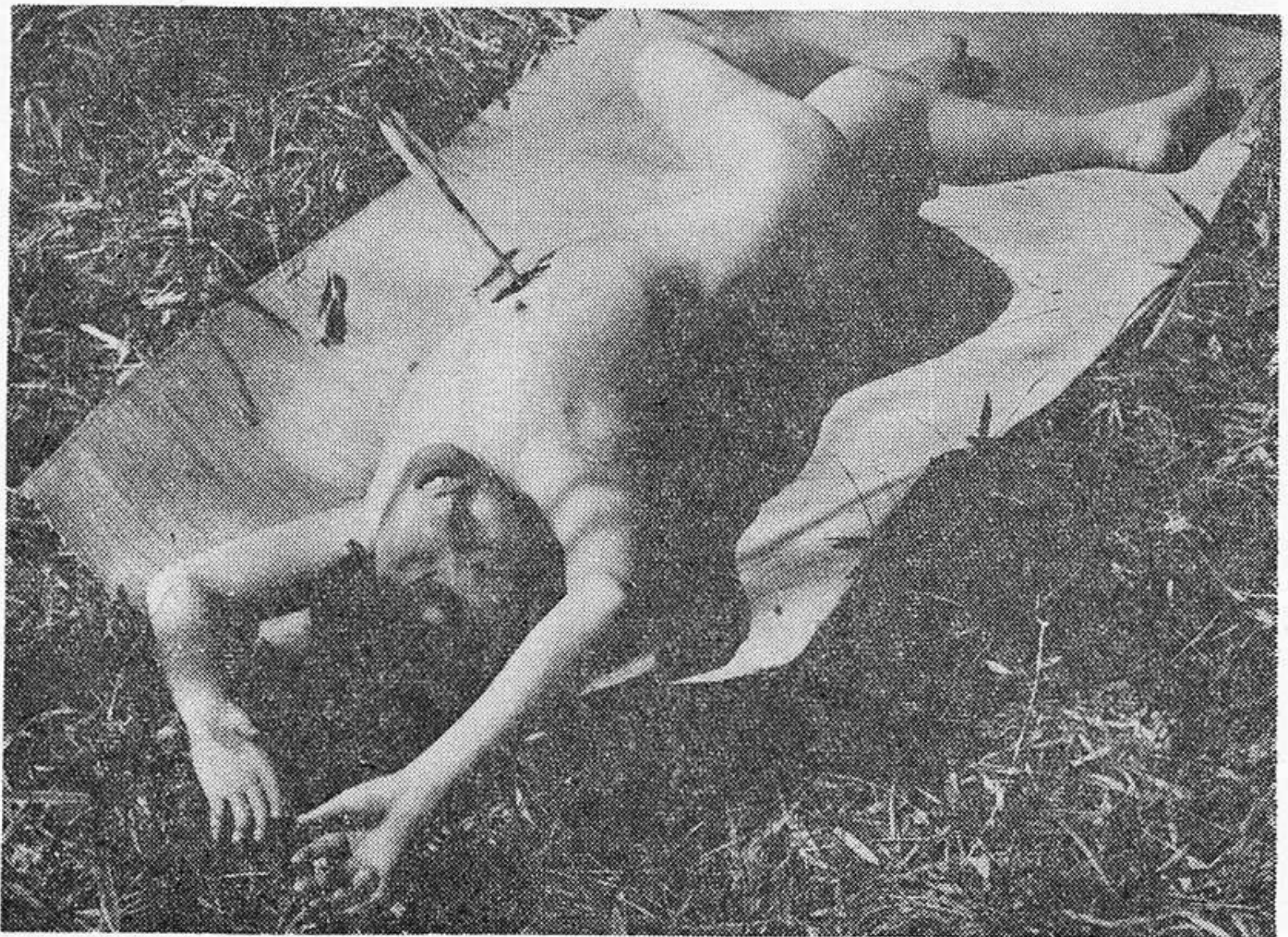
妖艶な流し目の時もあれば、牝豹のような鋭い目の時もある。じっと、こちらを凝視する円らかな瞳、睨みすぎるような冷たい目。千変万化する絹川文代の表情のなかに、私は魂

を抉られるような衝撃を受ける。

「目は心の窓」と言われるが、縛られた時の絹川文代の眼の表情は、その時その時の心の動きを、鏡のように外部に向かって映しているように思えてならない。

私は、緊縛姿態の絹川文代の眼を見て、そして限らない空想を彼女の心の中にまで推測してゆくといった遊びを、よくやる。そうすることによって、私の満たされきれないS心は、徒らに、くすばり続けることなく、パツと一挙に発散してしまうのだ。

絹川文代の裸身を、よくよく見てみると、目ばかりでなくて、まん丸く程よい膨らみを見せた乳房。臍酒にして飲めば、







さぞ美味しいだろうと思える深く窪んだお臍なだらかな肩。かぶりつきたいような瑞々しさに溢れる真白い太腿。どこを取り上げても魅力的な女体であるが、それが縄によって、一層、女らしい魅力と、汲めども汲めども尽きぬ被虐味が盛り上がってくるのだ。

そう言えば、彼女の鼻もまた、よく責めら

れている。絹川文代の顔は整っているばかりでなく、高くて大きな鼻に代表されるようにいわば舞台顔であって、眉毛、眼、鼻、口、という道具立ては、ダイナミックで、鑑賞用女性としては、梨花悠紀子と共に、奇ク緊縛女性の中の双璧といってよいだろう。

私は以前、塚本鉄三氏宅を訪問して、数多

くのコレクションを見せて貰った事があるがその時、絹川文代が舞台で出演している時の写真や、野外でのスナップ、或は水着姿で海岸に立っている写真等、縛りのないフォトを数十枚ばかり見た事がある。

いわば、絹川文代の緊縛の写真を見るのは私にとっては、普通なのであって、このように、一本の縄も掛けられていない彼女を見ることは、一見、奇異の感じを受けた。

縛られているのが普通で、縛られていない姿が奇異に見えるとは、私もまた、絹川文代という女性を、メルヘンの世界に導き入れていたものだなあ、と、我ながら、あきれた。

やはり、余りにもSMに身も心も打ち込んでしまうと、このように呆けてしまうものなのかと、自分のことながら、おかしかった。

私がもし、絹川文代のような女性を妻にしていたなら、毎日のように四六時中、縛ってばかりいるだろうか、と、ふと思ったりすることがある。誌上に発表されている多くの夫婦プレイ実践者の記録を見ると、真実羨望の念を禁じ得ないし、自分もまた、出来得ればそうした楽しいSMプレイを夫婦睦まじく実行して、その結果を奇クに投稿したいものだと願わずにはいられない。



だが、現実には非情なものであって、夫婦プレイを実践するどころか、趣味で蒐めた貴重な資料をさえ、妻の目に晒すことは、憚られる、という有様である。だから、現在の妻を相手としてプレイすること等、絶望といってよい。もっとも、新婚当初はいざ知らず、現在の愚妻の年令としては、よし、プレイを承諾したとしても、誌上に発表すること等は、その鑑賞価値からいって落第であろうが。

そこで私は、絹川文代を自分の妻にして、縛ってみようと思いついた。

それは、さっきも書いたように、仲睦まじく夫婦でSMプレイを楽しんでいる人達への羨望から私が空想した一つの夢でもあった。

絹川文代のような、SMに関して絶大な理解を持っている美女であったなら、私の生涯の伴侶としては理想的であり、私のパッションもまた、最高にハッスルする事だろうと考



えると、思わず胸が、わくわくしてくる。

着物を着て縛られているところの絹川文代のフォトを見る事が多いので、私は「家庭婦人」として落着いている所の彼女の姿を、そこに見出して、自分の空想について、一つの安堵のようなものを覚えるのである。

それ程、和服姿の絹川文代の縛られ姿は、哀婉美に溢れていたし、着物に包まれている

女体の身のこなし方が、如何にも成熟した女という体臭が、むんむんしていて私は大好きだった。和服で縛られて、これ程大胆に女の色気というものを露出させるという事は、並大抵の修業では出来るものではない。

更に野外や室外の白日の下で縛られている絹川文代の裸身を眺めていると、そこに明るさに満ち満ちた健康的なマゾを知った思いがしたものだ。それには、彼女の容貌や肢体が預って大であった

ろうけれど、人間としての彼女の内面生活の中にも、SMの背景にある倒錯とか、異常とかいったイメージから来る暗さや陰惨さが、いささかもないのが、大いに影響していたのだろう。

「女体緊縛愛好者V」としての私は、自分の性格から来るのか知らないが、SMについて、宿命的につきまとう暗い日陰者的な印象を極





力、嫌っていた。例えば斯界の大先輩である伊藤晴雨の作品に対して、基本的には共感を持ちながらも、その陰惨さの故に、どうしても好きにはなれなかったものだ。

私達同好者の中の殆どは、「責めは好きだが、血を流すようなことは嫌いだ」と言っているのは、この事をよく物語っているものだと思う。私が奇クを愛するのも、倒錯をテーマとして取扱っていないが、常に明るさを失わない点にあるのだと考える。

絹川文代は、天性の美貌もさる事ながら、太陽の光が降りそぐ戸外で縛られた姿態を晒している底抜けに明るい雰囲気、私をしてSとMの理想境を妄想させてくれる。

私は、此処に絹川文代を媒介として、私の性とSMについての生活を、反省してみようと思う。私が如何に明るい

サドとマゾが好きだ。また、女体緊縛写真を美として鑑賞しているのだと言っても、それが全然、セックスと関係がないと言えば嘘になってしまう。

思えば、私が物心ついた時、既に、 $\wedge$ 縛られていた女 $\vee$ というものに、一種の罪悪感めいた関心を抱いていたのだから、こうした傾向は生来のものだと思っている。

それが、やはり家庭環境とか教育とかいった関係で、直接 $\wedge$ 性 $\vee$ に短絡しないで、絵とか写真、文献とかいった方向に走っていったのであるが、思春期とか、独身の段階では、「異性」に対する未知のものへの憧憬が、私なりに $\wedge$ 夢 $\vee$ を形作っていた。

その少年時代の純情ともいえる $\wedge$ 夢 $\vee$ とか $\wedge$ 憧れ $\vee$ が、今の妻と結婚する事に依って、無惨にも潰え去ってしまった事は書いた。

それからの私は、一見して、 $\wedge$ 女体緊縛 $\vee$ オトの蒐集 $\vee$ という方向に逃避してしまったように表面的には見受けられた。文献に依って昇華された私の心の中のSMの念は、これで平穩無事であつたろうか。

奇クの歴史と共に歩んで来た私の半生は、奇クが苦難の茨の途を辿って来たと同じように、内面的には、血みどろの人生であつたこ



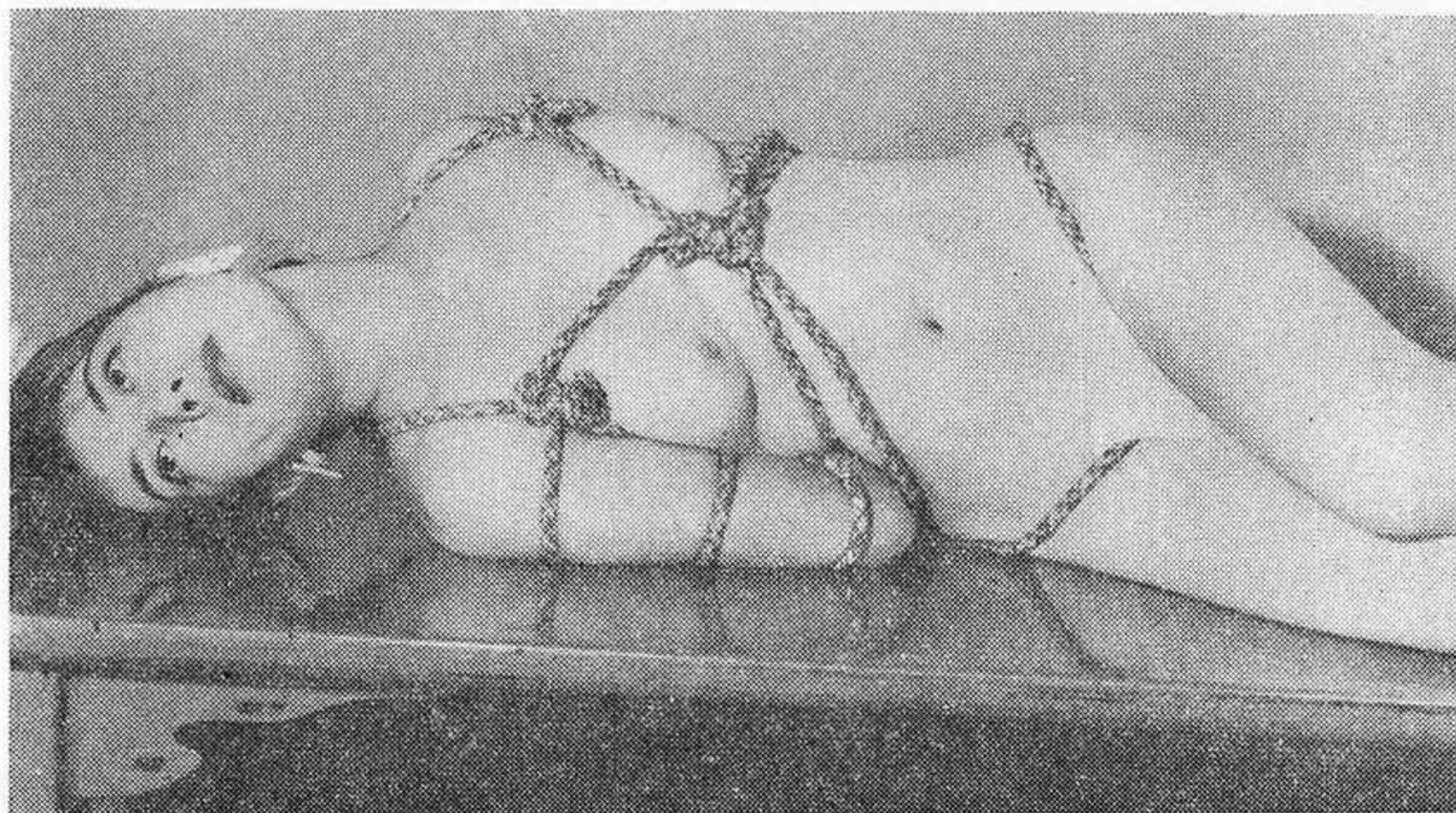
とを自覚している。今、此処に、絹川文代の幾十枚かの緊縛フォトを目の前に並べて見ると、<sup>うた</sup>転感慨深いものが、胸の内を去来するのである。

大体、私は、内に限らない女体緊縛に対する憧憬を秘めながらも、セックスそのものは凡そノーマルであると自認している。ましてや、連れ添う妻にしても、SMを全面的に拒否している位だから、私の微妙な心の動き等その時に臨んでも察知する筈がない。

一見して、平穏で波風の立たない夫婦生活が続いていった。時に些細な事で口喧嘩する事はあっても、それは世間一般の夫婦にでもよくある事で、SMには関係はない。

新婚時代の蜜月が過ぎてしまえば、当然の事ながら、平和で、平穏な日常生活の積み重ねが、倦怠期という夫婦生活の一時期を迎える事になる。それでも、まだ子供の無い時は夕食後、二人で連れ立って、音楽会へ行ったりして、隣近所にも仲の良い若夫婦という印象を残していたものだ。

それが、長男、長女と、二人の子供が続いて生まれ、妻の手が子供の方に奪われ勝ちになってしまうと、益々私は孤独の殻の中に閉じ籠ってしまふようになった。



情性で続けている、こんな夫婦生活で、果たしてよいのだろうか、という猛烈な反省が私の心の中に暗雲のように燃えひろがって来る事があった。

夜半、ひとり眠れぬ床の中で、そんな思いに脅迫されると、自分達の性生活は、これでいいのだろうか、という疑心が湧いてくる。

それとても、他人と比較出来るわけではないのだから、自分自身が納得しない限りは、満足なのか、満足でないのかさえも、判断する尺度は、ないわけである。

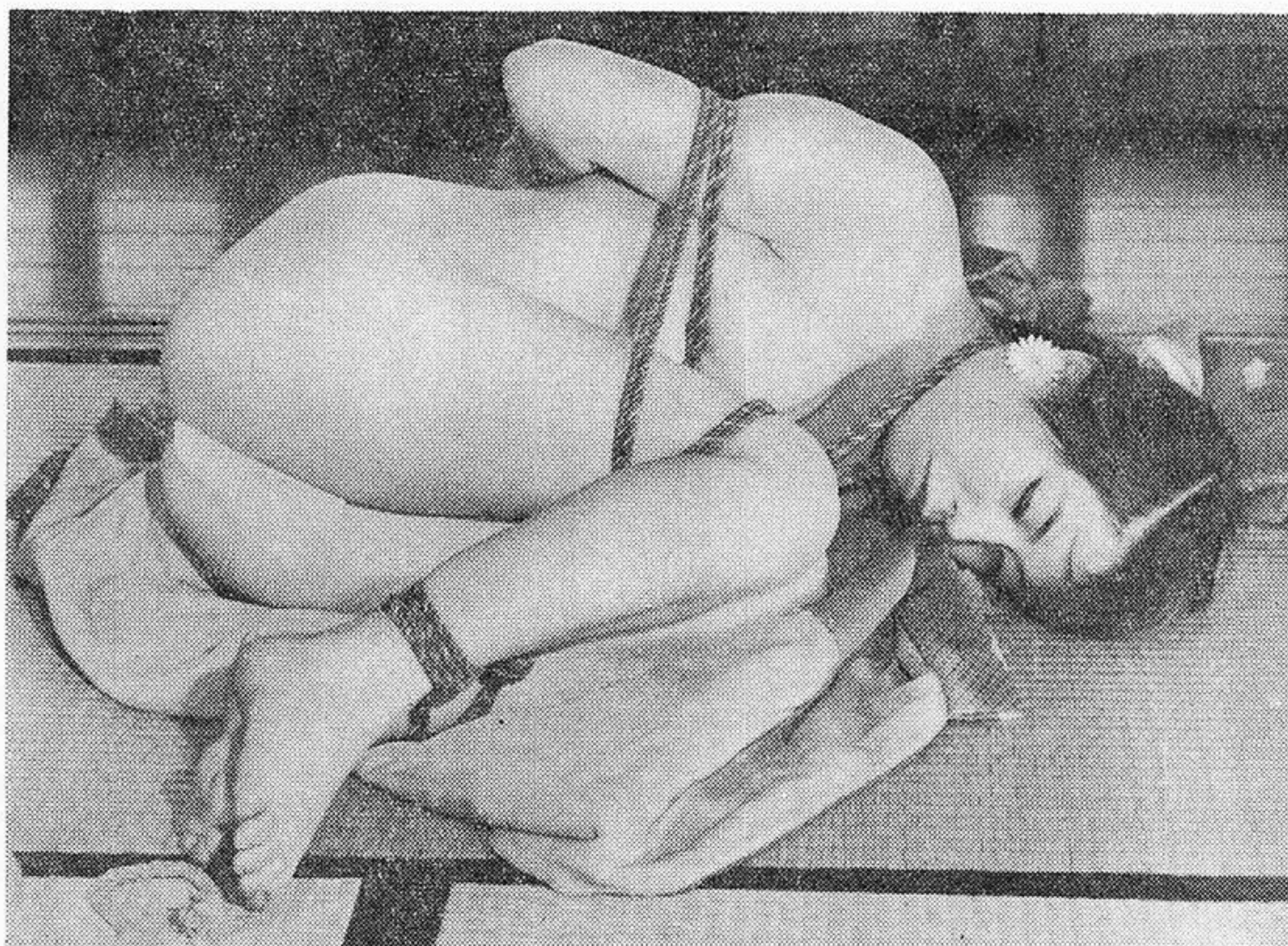
自分には、もっともっと身も心も、とろけるようなセックスがあるのでないか、という不審感が私を、さいなみ苦しめた。

悩みに悩んだ末、私の手にしたのは、絹川文代の縛られた写真であった。それは、ゴツゴツとした麻縄で二の腕と胸とを幾重にも縛られ、普通だったら、ふっくらとした盛り上がりを見せている筈の乳房が、縄によって、むごたらしく押し潰されているのだった。

押し剥かれたレースのついたシュミーズの裾から、こぼれ出た膝、太腿の輝くばかりの美しさが、私の目を射た。

そればかりではなかった。背後から迫った責手の男の革の手袋が、むんずとばかり、絹





川文代の口を強引に掩っているのである。

私は、その責めている男に、自分を置き換えて一種の安堵の心境に達した。

絹川文代こそは、私を迷いの境地から解脱させてくれて安心立命へと導いてくれた女神のような気持になった。

彼女の前にだったら私は跪いて、足の甲に接吻をしてもよいとさえ感激した。

その女性を縛りたいと思うのは、所詮、愛情表現の一つの変形に過ぎないものだろう。とすれば私が心の片隅に、絹川文代の裸身の前に、ひれ伏したい、という強い気持があったとしても、あながち、それを、奇異とするに足りないかも知れない。

い。

嘗ての一時期、そんな心の葛藤に苦しんだ頃の事を思い浮かべて、今、目の前で絹川文代の緊縛フォトを眺めていると、まさに私にとっては感慨無量なものがある。あの時、すがりつきたいような気持で手にした写真が、私にとっては、あたかも救世主のような役割を果たしてくれたからである。

思わず知らず、筆が走ってしまつて、人には知られたくない自分の内面生活を、つい告白してしまつた。

奇クの愛読者の方々だったら、きっと、こうした私の気持は、よく判って呉れる事だろうと思うが、同病相憐れむの譬の通り、私は他の同好者の中で、私と同じような悩みを抱いておられる方々の話を、是非承りたいものだと思っている。

私もまた、他の緊縛女性、中河恵子や関谷富佐子、それに、大塚啓子、左近麻里子、花坂道子なんかに、稿を改めて言及する際に、自分のセックスとSMの面について告白を試みたいと思っている。

他の同好者の方々からの感想や意見を投稿して下されば、これに過ぎる励ましはないと思っている。



カット・岡 たちし



### 初恋のイメージ

麻布のマンションは十階で、六畳二間、八畳、十畳、各一間に、浴室とベランダが、ついていた。

六畳一間のアパートから越して来た植座たき子は、橋本宇吉のスケールの大きさと、厚意に、感謝の念を深くした。

十畳の部屋が寝室になっていて、豪華なダブル・ベッドが据えられてあり、三面鏡や洋

服ダンスまで、すべて高級な調度が揃えられていた。

どの部屋にも高級な家具が入っていて、アパートから古びた洋服ダンスと机などは、とても羞かしくて運べず、アパートに置いてきてしまった。

「どうかね、気に入ったかね」

橋本老人の微笑に、たき子は感激して、「どれを見ても、みんな素敵！ パパ！ほんとに、ありがとう」

たき子は宇吉老人の首を両手で抱え、顔中

## M 派交友録 (39)

# グラマーな猛女

## 植座たき子の巻 (2)

鬼 山 絢 策

にキスの雨を、ふらせた。

宇吉老は一瞬、とまどい、泣き出しそうに顔を、ゆがめた。たき子は構わず、その口へ唇を合わせ、激しく吸った。

宇吉老は重心を失って、房々とした毛足の長い、じゅうたんの上に倒れた。その上に、のしかかるようにして、たき子は、なおもキスを浴びせた。

たき子が顔を離れた時、宇吉老は涙を流していた。

「まあ、このひと、泣いてるわ——」



そんなにまで、あたしを愛してくれていたのか。

「パパ、ほんとに、ありがとう。いつまでも可愛いがってちょうだいね。あたしを捨てないでね」

たき子は老人の頬に伝わる涙を吸いとり、流れたあとを舐めた。

「おう、捨てるものか。君は、ぼくの宝だ。

君こそ、ぼくから離れないでくれよ」

「パパ、大好き！」

力の限り、老人を抱きしめる。

「苦しいよ」

老人の心臓が、ドキドキと激しく脈打っているのが、たき子の豊かな乳房に直接、感じられた。

「君のことを何て呼んだら、いいか？ 君は

外国の女のような、ひとだから、サリーと、

呼ばせてくれないか」

宇吉老は若い頃、シカゴ大学に苦学して通った当時、下宿の娘のサリーに恋したことがあった。宇吉の初恋のひとであった。これは片想いに終わってしまったのだが、宇吉の脳裡には、いつも、このサリーの面影が離れず今、容貌と言い背丈と言い、サリーにそっくりな、たき子を見出して、宇吉は六十七にな

って、はじめて実りある恋が、芽生えたのである。

日本に帰ってきてからは仕事一途に全身全霊を打ち込み、遊びとして女性とは、つき合ったが、恋というものは、したことがなかった。宇吉にとって、今はじめて探し求めた女性に、めぐり合ったのだ。

その事を、くどくどと、たき子に話した。

たき子は村中二郎から、あらかじめ、その話は聞いていたが、宇吉がこんなにも熱烈にサリーという娘に憧れていたのかと、直接、話を聞いて、その感を深くした。

「いいわよ。サリーって、とってもいい名前じゃないの。あたし、今日からサリーになるわよ」

「ありがたい。サリー、君は、ほんとに、いい子だ」

宇吉老は、やさしく、たき子を抱き、その

乳房の谷間に唇を、あてた。

「中年の男に肌を、さわられるのは大嫌い！まして、年寄なんかに触られたら、ゾーッとするわ」

と口ぐせに言っていた、たき子が今、宇吉老の唇を乳房に触れた時、ポツと熱いものを感じた。それは恋人の唇に触れたと

同じ感覚だった。恋人というよりも慈父の暖かさにふれた、それと半々のような気持だったかもしれない。

今まで、たき子は何人かの男と寝た。

みな、若い男ばかりだった。若い男の唇に触れられると、ジーンと感じるが、それは性的な快感だけで、愛情の加味されたものではなかったのだ。

たき子は、これまで男を愛したことはなかった。モデルをしていた頃、ホステスを、ちよっとやった頃、もののはずみで、誘われるままに、つきあったが、それは、お互いに欲情を、はかすだけのものだった。

今、たき子は橋本老人を愛する気持になっている。今まで自分に対して、これだけ誠意をもって愛情を示してくれた男は居ない。

「死ぬほど好きだ」とか「君なしでは居られない」とか、歌の文句のような口先ばかりの愛の言葉を吐くが行為で示した男は居ない。

もっとも、若い男では、示したくとも示すだけの実力がないのだ。

「お風呂へ入ろう」

宇吉は、たき子を風呂場に連れて行き、火のつけ方を教えてくれた。

「こうやって、もし火がつかなかったら、五



分ぐらいは、ぜったいに、いじっては、いけないよ。中にガスが、たまっているから、爆発することがあるからね」

老人は囁んで含めるように、いろいろ注意してくれた。銭湯にばかり行っていた、たき子にとっては、「家庭を持った」という気持ちが実感となって湧いてきた。

「一緒に入っても、いいかい」

「もちろんよ。洗ってあげるわ」

「いや、ぼくが君を洗わせてもらうよ」

宇吉は楽しそうにオールドブラックジョーなど口笛を吹きながら、陶器でできた浴槽の湯を、かきまわした。

宇吉老も、かなり背は高い。一・六八メートルぐらいは、あるだろう。テニスとゴルフで鍛えた皮膚には皺がなく、老人にしては引き締まった身体をしていた。

宇吉が先に浴槽につかっている時、たき子が現われた。タオル一つ、持たず、天井につかえそうな見事な裸身を惜し気もなく、さらして立った姿は、ヴィーナスの化身かと思われた。

あまりにも開けっぴろげな、たき子の姿態に宇吉は、まぶしそうに見た。

「今の若い女は、これだけ開放的になったの

か。イヤ、たき子は特別なのだろう。モデルをやったことがあるから、きっと、ヌードに對する羞恥心はないのだ」

宇吉は、すぐ理解した。

「これだけ見事な身体を持つ者が、羞恥心などあったら、却って、その美しさを、こわしてしまふ」

とも、思った。

「凄いくらいの身体だねえ。君ほどの見事な肉体美をもった女性は、日本には、そうザラには居ないよ」

肉体美などという古い言葉を使うところが年寄だと思ったが、ほめられて悪い気は、しない。

「一緒に入らない？」

「うん」

たき子は、ためらわず、老人の目の前で足をあげて浴槽を跨ぎ、小さい浴槽に向かい合って入った。ザッと、お湯が、おびただしく、あふれて、こぼれた。

たき子の肌は、滑らかでやわらかく、しかも弾力に満ちていた。

スポーツをやったことがないから、スポーツ選手のように、男よりもカチカチの筋肉をしているというような肌ではなかった。と言

って、運動不足の中年女のようなブヨブヨというのでもない。

水に濡れて、ぬめぬめとした肌は、ねばりつくような、いわゆる餅肌と言われる美しい肌をしていた。

浴槽の中で宇吉老は、宝物にでも、さわるように、両腕の外側から、バストのあたりを撫でた。

湯舟から上がって宇吉は身体を洗うと、

「背中を流してあげる」

と、たき子も出てきた。

「いいよ、ぼくが君を洗ってあげるよ」

「いいから、いいから。先に洗ってあげるわよ」

たき子は宇吉の肌が意外に若いのにも好感が持てた。年寄なんて、皺だらけの、がいつみたいたいものか、ブクブクに肥った河馬のようなものだと思っていたのが、こんなにも壮年と変わらない皮膚をした人も居るのだ、と今までの老人観を見直したほどだった。

たき子が背中を流し終わると、今度は宇吉が、たき子の大きな身体を洗う番だった。

「サリ、君は素晴らしいベビードールだ」

背中から両腕、プリンプリンとした乳房、くびれた胴と、宇吉は丹念に洗い上げた。



「サ、今度は、あんよ」

「いいわよ。足ぐらい自分で洗うわ」

「洗わせておくれよ。素敵、あんよを」

「フフ、くすぐったい」

宇吉老は、たき子の太い足をヨッコラシヨと持ち上げて肩へ、かついだ。

洗うと見せて太腿へ唇を寄せ、キスした。

「ウフフ、いやあよう」

宇吉老の唇は太股の前方から内側の方へとずらして行った。

「ダメよう。それは、あと」

宇吉老は次第に、かがみこんで、太股の深いところへと、唇を這わせて行く。拒むのは簡単だが、老人の好きなようにさせてやろうと、たき子は足を開いてやった。

宇吉は、唇から舌を出していた。

舌は開かれた新しい丘に向かって急速に進んで行き、ツンドラを、ものともせず前進し希望の扉へと達した。

老人の舌は扉を開くべく、上から下まで、昆虫のように這いまわった。

たき子は、これまで四、五人の男性と、この体験を、もっていた。

「老人のテクニクが、どの程度のものか、ためしてみよう」

とあって、じっとしていた。

上から眺めると白髪の多い頭のとっぺんはかなり薄く禿げて地肌が鈍く光っているのが毛の中から、すけて見えた。

「やっぱり、年は争えないわねえ」  
と思った。

舌は、ようやく目的に近づいてきたが、それは、まだ幼い感じで老人は経験が少ないのか、研究心が足りないのか、大した動きは、していなかった。

それでも、老人は一生懸命だった。

たき子は、このままでは老人に悪いと感じた振りを装うのが、老人に対する好意だと思った。肩に乗せた足を、くの字に曲げて首を巻き、グッと締めてやった。

大して力を入れたつもりはなかったが、老人は苦しうに、うめいたので、すぐ弛めてやった。

老人は首を上げ、たき子の御機嫌を、うかがうように見上げた。

「フフ、もう出ましよう」

たき子は立ち上がって、また浴槽にザブツと、とびこんだ。

### よみがえる機能

まだ陽は高く、四時ごろだろうか。寝室はカーテンが閉められて外光を、とざし、夜と昼の区別が、つかなかった。

たき子は風呂から上がってバスタオルを巻いたままでベッドへ寝ころがっていた。

宇吉老人は、おしゃれで、三面鏡の前で、顔にクリームを、すりこんだり、頭へ養毛剤やローションを振りかけて、何度も櫛で、なでつけていた。

「パパ、いらっしやいよう。早くう」

宇吉が見ると、匂うばかりの裸身がベッド一ぱいに、のびている。大型のベッドが、たき子が寝ると、小さく見えた。

宇吉は、今日は室を見せる程度で、一緒に寝る、つもりはなかった。昼間のセックスというのは宇吉は、あまり経験がなかった。

だが、たき子の微笑と裸身を、目の前に見ると、まるで磁石に引き寄せられるように、ベッドへ上がった。

それに宇吉は、たき子が、こうも自分に対して積極的に出てくるとは、期待していなかった。それだけに嬉しさが、こみあげてきた



のだ。

「パパ、好きよ。大好き」

たき子は、宇吉の身体を軽々と乗せた。

「あ、それは、だめだよ」

宇吉は恥かしそうに言った。

「なによう。ダメな、わけないわよう。パパの身体、こんなに若いんですもの」

たき子は、さっき浴室で、ほんのしばらくではあるが、宇吉のものが垂直になるのを見たのだ。

しかし今は、乳房を潰れるばかりに圧しつけて抱き締めたが、どうにもならない。

宇吉の身体が、ズルズルと下へ下がって行った。

「待って！」

たき子は老人を、はねとばすようにして起き上がると、ためらうことなく口に含んだ。

「あ、サリー、君のも……」

たき子は、上から老人の顔を跨いだ。

これは、効果があった。

「ホラ！ 大丈夫じゃないの」

たき子は、大きく方向転換した。ベッドがグラグラ揺れた。

「あっ、サリー」

「たき子と呼んで！」

「たき子。君は、ほんとに、いい子だ！」

老人は、夢中になっていた。

短い時間だったが、そして、ほんの僅かではあったが、たき子は手ごたえを感じた。

「あ、今、何時だろう」

「五時よ」

「六時に約束があるんだ」

「あら、今夜は、ずっと一緒に居て下さるんだと思ったのに」

「すまないね。今度、来る時は、泊まって行くよ」

宇吉は気だるそうに洋服を着た。

「送ってくわ」

二人は寄り添うようにして、まだ陽のあかるい街頭に出た。

街を行く人々が、二人を振り返って見て行くので、宇吉は得意だった。どこを見ても、これだけの娘は歩いていないからだ。

「おなが、すいたろう」

「うん、昼間、食べないからペコペコよ」

「学校を休ませて悪かったね」

「いいの、今日は何もないから」

「ぼくは、ほんとに感謝しているよ。まさかあんなになるとは思っていなかった。ぼくの

人生は今日から再出発するんだ。これも君のお蔭だ」

銀座へ出て食事をし、料亭「遊桐」で車を降りた宇吉は、名残り惜し気に手を振って、玄関の中に消えた。

「遊桐」の宴会場には三石銀行の頭取をはじめ重役が居並び、立石商事の豊田社長以下役員が総出で接待していた。

村中二郎の活動によって、立石商事が三石銀行から十億円の借入金が成立した、その祝宴であった。

正面上座、三石銀行頭取の隣の席が空席になっていた。そこが今夜の立役者、中央生命の橋本宇吉専務の席であった。

「やあ、遅れまして、失礼しました」

橋本宇吉は鈴木頭取に軽く会釈して、悠然と坐った。宇吉が三石銀行の常務だった頃は鈴木頭取は後輩だったからだ。

立石商事の豊田社長が下座から恐る恐る進み出て橋本専務の前に出て、

「この度は専務さんのお蔭で滞りなく契約も済みました。まことに有難うございました。これは粗品ですが……」

と風呂敷包みを差し出した。菓子折りであるが、中には五百万円のリベートが入っている



るはずだった。

芸妓が入ってきて一座は、くだけてきた。

村中二郎は頃を見計らって橋本専務の前に出て盃を、もらった。

「専務。最近、ますます、お元気の御様子でございますね」

「やあ、アハハ。ぼくもね、六十七才の今日から人生の再出発をすることにしたよ」

「今夜は殊のほか、お顔色もよいようで」

「アハハハ、お蔭でね」

「たき子との間が、うまく行ってるな」

村中は嫉妬に似た感情を、もった。

「いや私の方こそ、お蔭さまで次長に昇進させて頂きました。これも専務さんのお蔭と、心から感謝しております」

「今に見ている。たき子を、盗んでやるからな。この好色爺いめ」

村中は心の中は、おくびにも見せず、笑顔で丁寧に頭を下げた。ついで村中は三石銀行の鈴木頭取の前に席を移して挨拶した。

「村中君。橋本専務は、ばかに御機嫌だが、何か、わけがあるのかね」

さすがに敏感だ。

「サア、私には分かりませんが、最近ますます、お若くなったようで」

「そう言えば、そうだな」

鈴木頭取は、橋本宇吉を見る。

「鈴木君。君は、この方は最近、どうかね」と、宇吉は小指を出した。

「いやあ、ぼくには、そんなものはないよ」

「そうだった。君は堅物の君子で有名だったな。一穴主義を主張してたっけな」

「それがね、最近、家内が、あの方も、あがってしまったのでね」

「そりゃいかん。刀を錆びさせてしまったはいかんよ」

「と言うと、君のは、まだピカピカかね」

「失礼な事を言うな。だから言ってるだろう。ぼくは六十七才から再スタートするって」

「ハハア、さては、いいのが出来たな」

「アッハハハ。まあ御想像に委せるよ」

「ひとつ、ぼくにも紹介してくれよ。ぼくもそういうのが欲しくなったな」

### 乱交パーティ

たき子がバニーガールを、やっていたレストラン「コルベール」の同輩達が、たき子のお別れパーティをやると言っていたのが延び延びになっていた。たき子は橋本宇吉がマン

ションを買ってくれると言うので「あたしの家で、やってもいいわ」と言っておいたが、たき子がバニーガールの花井ゆう子に電話すると、早速パーティの話が出た。

気の合ったボーイ三人とコックが一人。それに三人のバニーガールが、手に手に酒や料理や、お菓子を持って、たき子のマンションを訪れた。

「ワア、凄い、お部屋」

「たき子さん、えらくなったのね」

牛や豚や鳥の肉料理をコックの山田は山のように持ってきた。

「チーフが、君のお別れパーティならいいと言ってくれたから、作ってきたよ」

皆はワイワイ、はしゃぎながら、酒盛りをはじめた。

話題は、たき子の身边に集まった。バニーガールをやめて今は何してるのとか、このマンション、いくらだとか、欧州へは、いつ行くのかとか、言ったものだった。

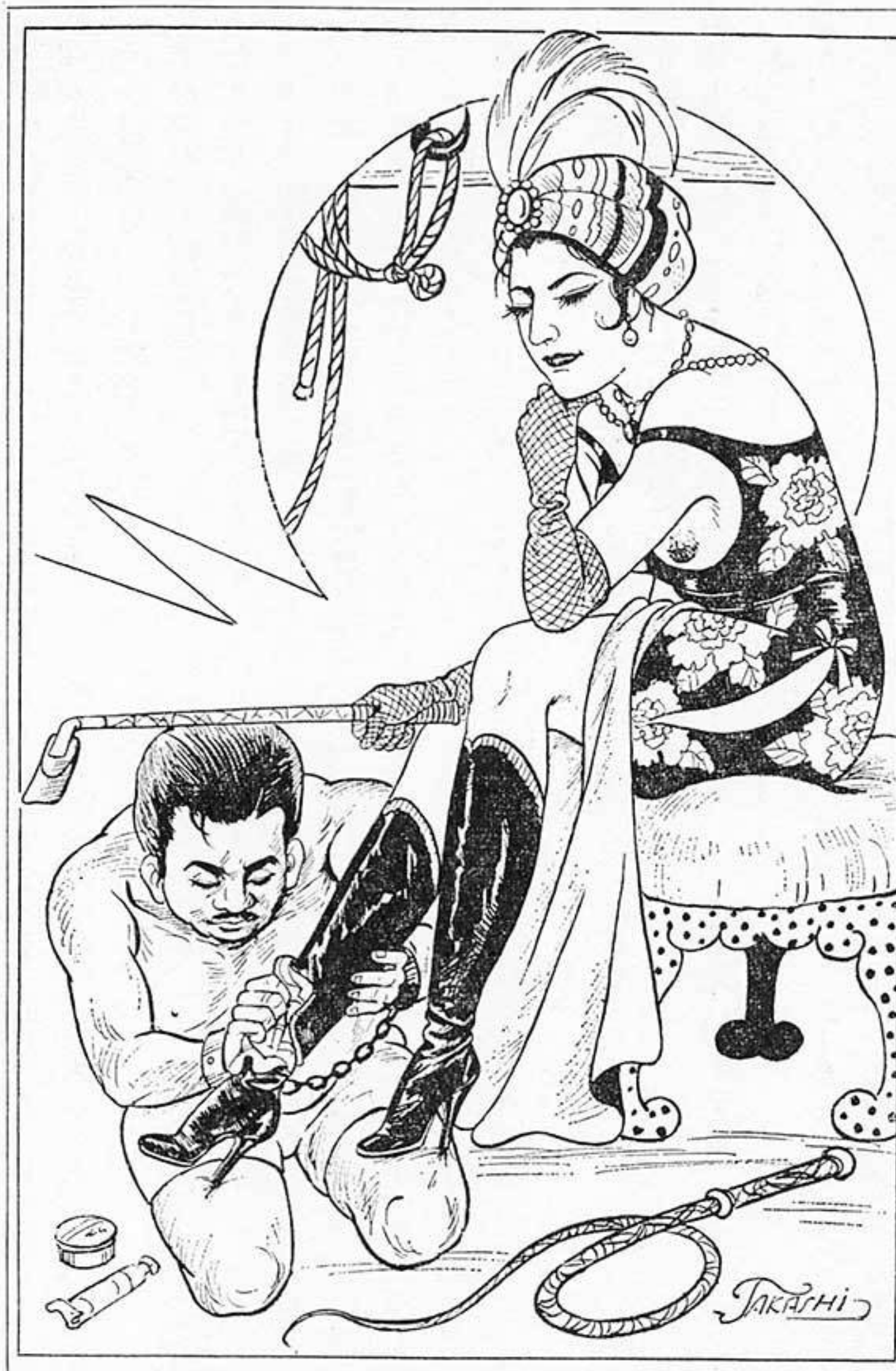
「あら、このダイヤ、凄いわねえ。いくら、した？」

たき子の指輪を、花井ゆう子は羨ましそうに見つめる。

「もらったのよ」



イメージギャラリー 『ブーツ用下僕』 岡 たかし



「あんた、まさか結婚するんじゃないでしょうね」  
「フフ、結婚なんか、しないわよ」  
「いいなあ、あたしも、あんたみたいに、なりたいわ。バニーガールなんか、早くやめたいよ」

「そうね、あたしも、やめたい。あのイヤなマネジャーに、いじめられるのを我慢してるの、いい加減、イヤになっちゃった」  
「あんた、口説かれたでしょ」  
「それを蹴ったら、いじ悪してくるんだからね。売上げが少ないとか、もっと愛嬌を振り

まけとか、うるさいのよ」

「あたしも口説かれたわ。もちろん、蹴ってやったわ。そしたら、お客からチップもらっちゃ、いけないって言うのよ。今までは黙ってたくせに」

話題は一転して、野木マネージャーの悪口に移った。

「だから今日も彼だけは断わったのよ。今夜あるの知ってるのに、何もしないんだから」  
野木マネージャーの評判は女にも男にも悪かった。

「サア、皆で踊ろうよ」

ボーイの一人が、ステレオのレコードをかけた。

「冗談じゃないよ。ボーイ風情と踊れるか」  
花井ゆう子が、どぎついことを言ったので座は、ちょっと、しらけた。

「ボーイ風情とは、何だよ。俺達、ばかにするのか」

「あたし達は、いいよ。でも、たき子さんは今や、フェアレディよ。失礼だよ」

「あら、あたしは、いいわよ。踊るわよ」

「それより、もっと面白いこと、しよう。競馬、やろう」

女達が騎手、男達は馬になる。女達はジャ



ンケンで勝った順に馬を選ぶ。花井ゆう子が勝って一番、頑丈な身体をしたボーイを選んだ。

「優勝したら何か、もらえるのかい」

「馬にはライター。騎手には、この香水、あげるわ」

たき子が賞品を出した。

「オッ、凄え。じゃ、張りきろう」

「しっかりね。勝ったらキスさせてやるからね」

花井ゆう子が「馬」に言った。

「ウォーッ。頑張るぞーッ」

六畳の和室から八畳の洋室の端までがゴールと、きめられ、男達は和室に四頭、揃って四つん這いになった。皆、酔っぱらってシャツもズボンも脱ぎ、パンツ一つの裸だった。

女達が、その背中に跨がった。

「ウワー、重いなあ」

たき子に乗せたボーイは殊の外、痩せ馬だったので、乗せただけで悲鳴をあげた。騎手が65キロ、馬の方は50キロしか、ないのだから土台、無理だ。

「だめよ、いまからヘコたれちゃ」

花井ゆう子に乗せたボーイは、

「痛えな。そのストッキング脱いでくれよ。」

ザラザラして痛いよ」

「ダメだよ、これパンストだもん。これ脱いだら、ノーパンになっちゃう」

「ノーパンだって、いいじゃねえか。それだけの度胸はないのか」

「言ったな、この野郎。よしッ脱いでやる。」

その代り、お前もパンツを脱ぎな。パンツはいた馬なんて見たことないよ」

「パンツ脱いだら、丸出しになっちゃうよ。」

君の方はスカートで隠されてるから」

「こんな短いスカートだもん、落っこちたらまる出しだよ。同じじゃないか」

「よし、脱いでやる」

花井ゆう子と、その「馬」が、それぞれ、はいているものを脱ぐと、他もそれにならって男も女も皆、脱いだ。パンストの下に、パンティをはいているのまで脱がされた。

そのパンストやパンティをゴールの前に並べて、

「ゴールに入った馬はパンティを口に、くわえるのよ。そうしないと失格だよ」

何と言っても、ゆう子は店の古株だし、ゆう子のリードに皆は、ついて行った。たき子も、こうしたワイルドパーティー式の乱痴気騒ぎは、画学生仲間でも何度も経験していた。

「サア、スタート。いいわね。GO！」

馬は一斉に這い出した。たき子の馬だけが遅れて、他の三頭は頭を並べて力走する。

「ホラ！ 走れ。もっと早く。この野郎っ」  
ゆう子は馬の尻を、平手でペタンペタンとひっぱたいた。

途中で一頭の馬はゲラゲラ笑い出してスピードが鈍った。

「どうしたのよう」

「エッヘヘ。背中が、くすぐったくて、どうにも走れないよ」

「なんでよう。早く走んなさいよ」

「だって背中の上で動くんだもん。くすぐったいよ」

「バカねえ、しょうがないじゃないの。ノーパンだもん」

残った二頭は、いい勝負だった。ゆう子が一番ファイトがあった。

「ホラ、走れ、こん畜生。もっと走れ」

両股でグイグイ締めつける。

「おい、そんなに締めないでくれよ。かえって走れないよ。楽にしててくれよ」

「何言ってるやがんだ。ホラホラ、追いつかれる。早く行けよ」

ピタピタ尻を引っぱたかれて、馬は「痛て



え、痛てえ」と悲鳴をあげながらも、どうやら一着になった。

「ホラ、早くパンティを、くわえて」

次々とゴールインしたが、たき子の馬だけは、まだ半分も走っていなかった。とうとう途中で、へたばって、じゅうたんの上に長々と、のびてしまった。たき子は笑いながら、その背中へ、ドッシリと65キロの体重を、のせていた。

「これ、ほんとにもらって、いいの？」

ゆう子は、たき子に念を、おした。

「どうぞ」

「あら、シャネル5番だわ。うれしい」

ゆう子はシャネル5番の黒い、びんにキスした。馬になったボーイも、ロンソンのライターをパチパチ、火をつけて喜んだ。

「さあ、約束のキスさせてくれよ」

ボーイは坐ったままでゆう子を見上げた。

「おぼえてたの」

「当たり前だよ。ゆう子ちゃんにキスできるなんて、こんな時でなけりやできないもの」

「よし、キスさせてやる。ホラ」

ゆう子はボーイの顔の前に立ちはだかり、短いスカートを、ほんのちよっと捲くって、顔に突きつけた。

「ウエツ、凄え！」

「何言ってるんだよ。早くキスしなよ」

「エッ？ 此処へ、すんの」

「当たり前だよ」

「口へ、させてくれないの」

「何言ってるやがんだい。口へキスさせるとは言っていないよ。何だい馬の分際で大ソレたこ言うんじゃないよ。此処が分相応だよ」

ゆう子はボーイの頭へ手をかけてグイと手前へ引き寄せた。密着した粘膜に、ゆう子は尻を上下に揺すった。

女も男もキャアキャア騒いで笑った。ゆう子も笑いながら男を放した。

「どう、よかった？」

男は、しかめ面をしながら、

「ゆう子ちゃんも平然としてるようで、やっぱり昂奮してるんだな」

「どーしてさ」

「だってビチャビチャだもん」

ワア—と、みんなが笑い出した。

「この野郎っ、よけいなこと、言うなッ！」

ゆう子は怒って足を上げ、ボーイの頭を蹴とばした。

「痛てえ。お前さん、サジストだな」

ゆう子は自分にあつめられた視線を転換さ

せるために、室の中央で、ようやく半身を起こした、たき子に乗せたボーイのところに歩み寄った。

「お前、どうして完走しないの。ゴールまで来なかったの、お前だけだよ」

「とても重くって……」

「そりゃ、たき子さんは重いだろうよ。でも男だろう。男なら、齒を喰いしばっても頑張らなきゃ、だめじゃないか」

「男だから走れなくなっちゃったんです」

「何、言ってるんだよ。だらしのない」

「重いでしょう。だから姿勢を低くしたんです。そしたら、たき子さんが気の毒がって、

両足をつけて歩くようにしてくれたんです」

「そんなら、なお、楽に走れるじゃないか」

「それが、かえって、いけなかったんです」

「馬鹿！ 走れなかった奴は罰をくれるよ」

「でも、どうして、いけなかったの？」

たき子が質問した。

「だって、ぼく、男だもん。このじゅうたん房々としてるでしょう。それに、こすられたもんだから……」

ワッハッハと、みんなが爆笑した。

「まあ、いやねえ。あんた、そそうして、じゅうたん、汚したんじゃない？」



「大丈夫です。この上等な、じゅうたんを汚しちゃ、いけないと思って我慢したんです。だから、なおさら、走れなくなつて……」

「何言つてやがんだい。そんなの、言い訳にならないよ」

ゆう子は意地悪な性格を出してきた。

「出せよ。俺達だって出してるんだぞ良夫」仲間が一斉に足を、ひろげて見せた。良夫というボーイもテレながら、足をひろげた。

「それじゃ無理ないわよ」

と女達から同情の声が上がった。

「でも、完走しなかった罰は受けるべきよ」

### 狂った牝獣

三人の女達が寄ってきた。バニーガールだけあって、たき子ほどのボリニームは、ないにしても、みんなグラマーな女達だった。

坐っている良夫の周りに立ちはだかり一斉にスカートやパツパツとおおって、ムンムンする女の体臭を良夫の顔に浴びせかけた。

酔っぱらって羞恥心をなくした女達が、貪欲なセックスをムキ出しにしたように見せびらかした。

良夫の体は、みるみる異状を呈してきた。

良夫は、それを両手で、かくした。

「なぜ、かくすのさ。女の、あたし達だってこうやって見せてやってるんじゃないか」

「やっちゃえ」

ゆう子が良夫の後に回り肩を両手で掴んで仰向けに倒した。

「あ、やめて。やめて下さい」

ゆう子は構わず頭の方から顔へ跨がって、両の太股でピッタリと顔を、はさんだ。もう一人が前をおさえている右手をとって、ひっぺがした。その手を頭の方へ持って行くと、ゆう子が膝で手を、おさえつけた。女は更に良夫の左手を、ひっぺがして自分の膝に、おさえこんだ。

「相当なもんじゃないの。たきちゃん、この男、可愛がつてやる？」

ゆう子は、たき子に聞いた。

「いいわよ。あんた達で、やんなさいよ」

今夜は、たき子のお別れパーティであり、たき子の部屋で、やっているのに、主人公はゆう子に移ってしまっている。でも、たき子は別に不愉快ではなかった。ゆう子という女は、いつも自分を中心に動いていかなないと承知できない性格の女であることを知っていたからだ。

「じゃ、エリ子。お前、ためして見な」手空きのバニーガールが、良夫の腰に跨がった。

「凄え女達だな。おい、俺もゴーカンしてくれよ」

「こっちも頼むよ」

他のボーイ達が、ウイスキーを飲みながらヤジった。

「イヤなこった。そんな貧弱なのは、魅力がないよ。お前達は指をくわえて見てな」

女上位のファックは、猛烈だった。あつという間に男は果てた。

「何だ、モノのわりにモロイわねえ」

飢えた女獣は、次の男にワーツと襲いかかった。今と、まったく同じスタイルで、一人の男に三人掛かりで、ゆう子が顔へ跨がり、手をおさえていた女と、腰へ乗った女とが交替しただけだった。

たき子はブランデーを飲みながら、女達の狂態を眺めていた。

もともと、こういう乱痴気さわぎは大好きで、前にも店の連中で慰安旅行に行った時はゆう子に負けずにハッスルして先頭に立ってやったものだった。

だが今夜は最初に、そのきっかけを外して



ナミオM画廊 『最高のもてなし』 春川 ナミオ



仲間に入らないの？」

「フン……」

「やっぱり出世すると、俺達みたいな下賤の者共は相手にしないというわけか」

「あら、そういうわけじゃないわよ」

「じゃ、パトロンに操を立ててるわけだな」

「そうでもないわ」

「じゃ、仲間に入ったら、どう？」

「何だか、入りそびれちゃったのよ」

男の手が、たき子の太腿を撫でてきた。

「お互いに若いんだから……」

男はパツと唇を太腿に当てて、強く吸ってきた。

「この男、あたしに挑んできたわ」

たき子は、この男が次に、どんな行動に出るかを予知して、拒もうか、許そうか、と迷った。

男は唇を太腿のあちこちに這わせ、吸っていたが、やにわに、たき子の胸に抱きつき、乳房に顔を、おしつけてきた。

たき子は、何となしに不快感が、つきまとった。

「この男は、さっき、ゆう子に唇を汚されている」

「もしも、男が口にキスを求めてきたら拒否

しまったので「乗り遅れた」感じだった。

それと、今までは全く同格のバニーガールだったのが、今はマンションに住んで、一段上に出世したと、みんなが思っている。何か敬遠されている風が見えた。

ピラニアのように獐猛な女達は、二番目の

男を犯すと、直ぐ次に三番目の男に襲いかかった。

たき子の傍には、ゆう子の馬になった田島というボーイが、いつの間にか、すり寄ってきていた。

「今夜は、たきちゃん、おとなしいんだね。」



しようと、きめた。そう思っただけで身体がかたくなった。男は、たき子の警戒心を察したように、ふと顔をあげて、たき子の顔色をうかがった。

「この男、相当、女を、こなししているわ」

ますますたき子は、この男が無価値な男に見えてきた。

その時、三人目の男を潰し終えた女獣の群れが、最後の一人に向かって突進してきた。

「やあ、たきちゃんを犯そうとしてるよ。太え野郎だ」

たき子は乳房を、ゆすって笑い出した。

二人の女の手が男の肩にかかって、ひっぺがすように男を引き離した。

「おい、よせよ。俺は、ごめんだ」

「何言ってやがんだ、この野郎」

二人の女に引きずられて、両手をとられて仰向けに寝かされた。ゆう子が男の腰に跨がった。ゆう子は最初から、この男とファックしようと、きめていたらしい。

「おい、顔の上は、だめだよ。御免だよ」

「生意気言うな」

女の一人が手を押さえながら顔の方へ、にじり寄った。そして、ゆう子の顔色を見た。

「いいわよ。皆と同じにやっておやりよ」

ゆう子の許可を得て、女は男に跨がった。すっぽりと顔全体を包みこんでしまつて、男の顔は肉体の中に埋没してしまい、何か叫んでいる声も消えてしまった。

ゆう子は、激しく男を責めた。

さすが、ゆう子が目をつけただけあって、この男は他の三人に比べると、はるかに持久力があつた。

他の三人の男達は、女達に思う存分に犯されて死んだように、のびていた。だから傍観者は、たき子一人になってしまった。

次々と目の前で、なまなましいファックシーンを見せつけられて、たき子も心のうちは大いに燃えていた。いつもの、たき子なら、とっくに飛び出して行って仲間になっているのだが、今夜は何となく躊躇して、はぐれてしまったのだが、その原因は橋本宇吉の存在が、何割かを占めているのだと、たき子は気がついた。正式に結婚したわけではないから、たき子が浮気をしようとか何をしようと構わないと言えは構わないのかもしれない。だが、たき子は宇吉に済まないような気が、したのだ。それは宇吉を愛しているからかもしれない。

みんなも、たき子を仲間に加えようと、積

極的に動かなかったのは、やはり、たき子が「旦那持ち」であることと、急激な生活環境の変化に、ちょっと近寄りがたい（セックスの面のみ）ものを感じ、遠慮したのだった。若者達は、遊び疲れてゴロゴロと雑魚寝のかたちで、てんでに寝てしまった。

最後に残ったのは、ゆう子と、たき子の二人だけだった。たき子は蒲団を出してきて、それぞれに、かぶせてやった。

「今夜は、みんな狂っちゃって、ごめんなさいね」

「そんなことないわ。とても楽しかったわ」「ねえ、あなたのパトロンって、いつか店へよく来ていた、橋本さんとかいう人じゃないの」

「フフ。誰だって、いいじゃないの」

「べつに人には、しゃべらないわよ。実は、あたしも、そういうひとが欲しいのよ。誰かいいひとあったら、紹介してね。ヨボヨボのおじいちゃんだって、いいのよ。お金さえあればね」

### 恩の売りっ

村中二郎は、植座たき子の部屋に電話がひ



けた頃だと思って、電話をかけた。

その電話も橋本宇吉から頼まれて村中が手続きして、ひいてやったのである。

だが村中は、たき子がマンションに移って以来、まだ一度も会っていないのだ。二人の仲が、どんな風に行っているのか？ それとたき子を抱くチャンスを見出すために、もう三日も電話しているのだが、ベルが鳴っているところを見ると、電話はひけたが、たき子は、いつも留守のようで、話をする事が、できなかった。いっそ、いきなりマンションへ行ってみようかと思ったが、橋本宇吉と鉢合わせするのは、まずいし、やはり電話するのが順序だと思い、多少、焦燥を感じながら今日も電話したのだった。やっと、たき子の声が聞かれた。

「やあ、どうしたい。うまく行ってるかい」

「まあね」

「おっさんは毎日、来るの？」

「フフ、まあね」

「おいおい。ばかにそっ気ないじゃないか。久し振りで会いたいんだがな。行ってもいいかい」

「今日はダメよ。出かけるんだから」

「毎日、よく出かけるんだな。じゃ明日なら

いいかい」

「明日もダメ」

「おい、どうしたんだ。じゃ、いつなら、いい？」

「もうあなたと会う必要なんてないでしょ」

「何だ、冷たいこと言うなあ。君と会う用があるから、電話してるんだぜ」

「だったら、今、話してよ」

「何だ！ その態度は。君を、ここまでにしてやったのは、ぼくのお蔭なんだぜ。そう思わないのか」

「思わないわ。あなたはあなたで、パパからうまい汁を、さんざ吸ったでしょ。あたしから、あんたに頼んで、こうなったわけじゃないんだからね。それを恩着せがましく言うてくるなんて、あんたも安っぽい男ね」

「とにかく用事があるんだ。君自身に関する重要な用件がね」

「あんた、バカね。同じことを何度、言わせるの。だから電話で言ったらいいと言ってるじゃないの。あたしは、あんたが土下座して頼むから、あんたの願いを、きいてやったのよ。それがために、あんたも、お金もうけができたんですよ、あたしの方が恩人なんだから。そうでしょ。そう思わないなら、あんた

とは絶交よ」

「分かった、分かった。とにかく、ちょっと会いたいんだ。電話じゃ、ちょっとと言えないことだよ」

「会ってもいいけど、パパに話すわよ。蔭でコソコソ会うなんて御免よ。パパの居る時に会いましょ」

「何言ってるやがんだ、バカ野郎ッ！」

村中は怒ってガチャン！ と電話を切ってしまった。

カッとして、叩きつけるように切ってしまったものの、すぐ後悔した。

どうも村中は、たき子を見損う、くせがあるのだ。もうこれで、三回目である。

大体、たき子と最初に会った時――。

たき子が会社の企画部にモデルとして来た時、たき子から態度が不謹慎だと、なじられ「なにをモデル風情のくせに生意気な」と怒って喧嘩し、皆の面前で、彼女の秘部を顔へこすりつけられる屈辱を受けている。

その事件が却って、たき子の価値を高め、企画部の幹事が、たき子に謝って、たき子がモデルをやめるまで仕事は続いたし、村中の方も、この事件が会社中に知れわたったが、却って好転して係長に出世した。



二度目は、橋本宇吉からパトロンの件を頼まれ、村中は、たき子が二つ返事で飛びついてくるものと見てびびって話を持って行ったところ、にべもなく断わられた。それから本腰になって一生懸命に、とりもって、やっとOKさせた。

お蔭で社の借入金が成功して彼は課長と、トントン拍子に昇進できた。

たき子とトラブルがあるたびに、その禍が福に転じて、双方とも、うまく行く――

“たき子とは、奇妙な因縁じみたものがあるんだなあ”

と村中は、つくづく思い返した。

たき子に言い返されてみれば、確かに、恩

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

恵を受けたのは村中の方かもしれない。しかし、たき子だって村中のお蔭でパトロンを得たのだ。

癪にはさわるが、怒ってしまったのでは何もかも、ぶちこわしである。

橋本専務に、たき子を、とり持つ時には、社運を賭けた使命が、かかっていたし、村中としては真剣だった。

それが成功して昇進し、橋本専務からも謝礼金をもらい、更にマンションまで見つけてまた、金をもらった。にもかかわらず、万事が、うまく行った時点で、急に橋本専務が憎くなった。

結局、それは橋本専務への嫉妬なのだが、村中自身は、それに気づいてはいない。憎むには憎むだけの、他の理由を、くっつけているのだった。

橋本専務を嫉妬するということは、とりも直さず、たき子が好きだということになるのだが、それは飽くまでも精神的なものではなく、たき子の肉体に惚れているのだった。

“ようし、どんなことをしても、俺は絶対にたき子を射落としてやる。気位ばかり高くていばってやがるけど、元をただせば、裸のモデルじゃないか。そして、今だって年寄の妾

風情じゃないか。あんな女の一匹や二匹、この俺がモノにできない、はずがない。あの女の肉体は、すばらしい。年寄なんかに、委せておくのは、もったいない。だから、俺が盗んでやるんだ。たき子を、俺なしでは居られないようにしてやる。俺の奴隷にして俺の前に、ひざまずかせてやる。

あの女さえ、うまく掴めば橋本を、どうにでも利用できるだろう。そうなれば、またうまい金もうけもできる。そうだ。どうしても俺は、たき子をモノにしなければいけない。それには怒っては、いけない。短気をおこしてはダメだ。女に短気は禁物なことぐらい分かっているのに、この前は腹を立ててしまった。俺も、まだ若いな。だが今に見ている。あの女を蔭であやつって、橋本のヤツを踊らせてやる”

村中は改めてファイトを、もやした。だが、あの調子じゃ、並みのことでは、たき子は会ってくれないだろう。何か策を構じなくては――”

村中は会社の机に向かっていても、そのことをずっと考え続けていた。



小説「命預け

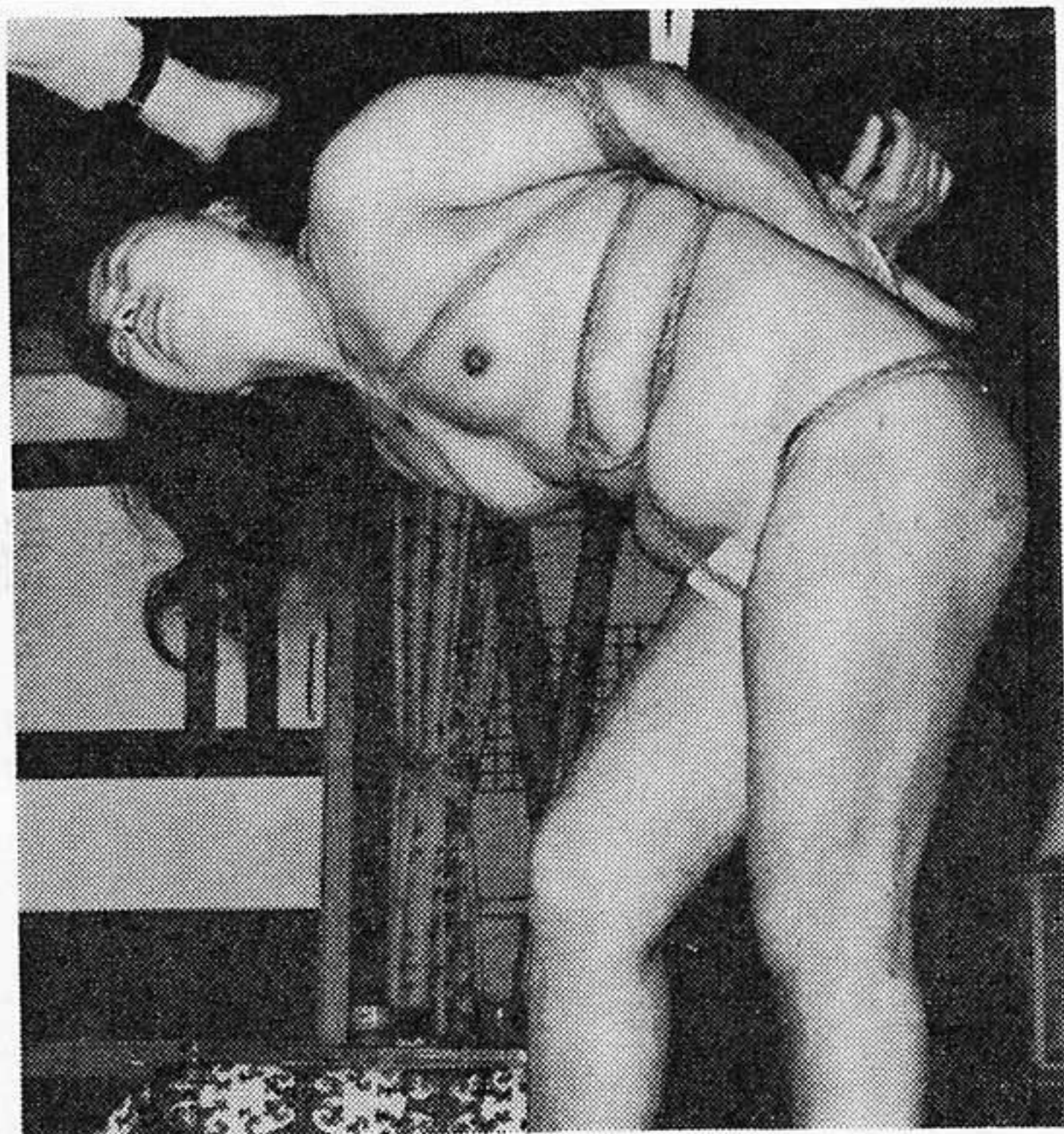
ます」余話

|| S M P に於ける奴隷妻の本義に就いて ||

# 奴隷妻覚え書

柴

利 好



プレイ中の関谷富佐子夫人

## 一、本能としての S M

そもそも S M 感覚は、我々が例外なくその本能の一部として内蔵する、人間感覚の一形態であると考ええる。即ち我々は、全てその性向の内側に、こうした倒錯的嗜好を、生来の資質として多少なりとも持って生まれているに違いない。ただそれが、個々の総合的性情や社会環境の差異、又は S M 本能そのものの強弱多寡による個人差のために、人によっては顕在的とも、潜在的ともなるのだと思う。しかも多くの中には、それが本能としては余りに稀薄な存在のために、こうした自らの有する S M 資質をすら、意識せずに過ごす人もあるかも知れない。或は何等かのヒントや衝動に原因して、自動的に卒然と覚醒する事もあるうし、他動的誘導によって漸次、本格的な S M 感覚として顕現化される場合も起こり得る事である。

かつては、S M 的行為は社会的規範の上から、世に恥ずる醜行としか見られていなかったようだ。従って、その行為者は、明らかに厭わしい変態性慾者として疎外され、例外なく世人から顰蹙されていたのであった。こうした非難は、現今でも依然として広く根強く



伝承され、未だに人間本然の姿の現われの一つとして、卒直に受け容れられてはおらない。

それにも拘らず現在では、それ等の行為を夫婦合意の下に、その生活の一分野として勇敢に取り入れ、SMPと言う形態を取って、日常生活に変化と刺激とを求めている人達が増えつつある事實は、すこぶる興味深い。こうした現象は、逐年、尖鋭化し複雑化しつつある現代の外的環境と、それに対応して、自己主張を遂げようとする人間に残された恣任性とに照らして、必然的帰結であるといつて良いのではなからうか。

## ——二、嗜虐妻の呼称——

SM行為は、元より同性同志、又は異性間で実技されるものである。が、同じ嗜好者の結合縁故を得る機会と場に於いては、夫婦と言う単位形態が最も自然であり、且、事実問題としても相応しい事は誰しも諒解されるであらう。それは、つまりその行為の内幕性と親近性から見て、夫婦である事が一番、手取り早いからである。加えて、夫婦には、他人同志には見られない愛情の流露があるから尚更なのである。

ところで、一般の夫婦関係を類別すると、男女対等、男上位、女上位の三種に分けられる。SMPの上でも、これと同様の分類をする事が出来る。これ等夫婦のSMP上の三形態の中では、男上位のケースが最も普遍的である。それは、男女の本質的特性と、夫婦そのものの成り立ちから見て、至極、妥当な結果として認められる。

さて、この男上位に基づくSMPに際してその妻を特別な呼称で呼ぶ慣習が、いつとはなしにマニヤの間で行なわれる様になった。

即ち「奴隷妻」「女囚妻」「家畜妻」が、それである。これ等の呼び名は、申すまでもなくSMPの基本形態である緊縛や鞭打ちと言う被虐生活の原点を、奴隷生活や囚人生活、又は家畜生活の中に求めたものである。これ等の呼称を称える事で、プレイヤーは嗜虐の觀念を夫々の意識の中に、一層強く呼び醒まし、それによって、より以上にSMPの効果を高めようとする、演技者の智慧の現われなのである。

最近、右の呼称の外に「玩具妻」という新語が誌上に現われている。これ又、如何にもマニヤらしい可憐な名称である。むしろ、奴隷や女囚の持つ固有の陰惨な雰囲気や、家畜化と言う非人間的概念から程遠い、至極、明朗なSM意識の発現が見られて好ましい。

由来、女が玩具になる(玩具にされる)と言うことは、女がその肉体を異性に蹂躪される謂である。従って厳密な意味では、SMと関係なく用いられても差し支えはない。がこの場合「玩具になる」とは、一切の自分の意志を殺して、相手の(夫の)言いなりになると言う、自我の放棄、自意識の否定を意味する。これを基礎としてそこに行なわれる倒錯生活の内容がSMPなのである。つまり、その言わんとする事柄の内容は、上記の奴隷妻、女囚妻等と何等、選ぶところはない。ただその表現が現代的で「玩具」という文字から受ける幼い感じが、明るく感得される点で、気持の良い響きを持っている。多分、若い方の新造語なのであらう。

## ——三、奴隷妻の本質——

これ等、嗜虐妻の呼称の中では「奴隷妻」が今の処、最も普及しているようである。それかあらぬか誌上でも、SMPに耽ける嗜虐



妻の間に、自ら奴隷妻と名乗る、良妻賢婦が増えて来た。奴隷というからには、そこには是非共、奴隷意識が必要である。SMPに於いて、この奴隷意識が、どのように発現されるかによって、奴隷妻としての素質の良否や飼育の高低などが決定づけられる事になる。

この奴隷意識とは、SMPに際して夫の言うが儘に、なすが儘に全てを許容肯定し、従属する徹底的自我の放棄に要約される。即ち全く自己の意志を放擲した奴隷そのものの本質が、SMPの実際の行為の上に求められるのである。しかもそれは、奴隷専有者としての、絶体的権位に立つ夫に対する奉仕の念によって、常に裏付けされていなければならない。それは最早、厭々乍らの卑屈な服従ではない。征服され、従属する事の悦びを伴った絶体的服従と、奉仕の觀念の定着こそが、奴隷妻として必須の精神的資格条件となるのである。

更にこの服従と奉仕の献身的奴隷意識を、只SMPの限定された時点に於いてのみならず、実生活の全ての内に求める、強烈な専制大権の主張者すら現われている程である。これは、徹底したSMPマニヤの生活と意見として、傾聴に値すると思われる。

奴隷妻としての完全な資質は、右に述べた夫に対する追従性だけに止どまらない。彼女の資格を決定する不可欠の要件は、言う迄もなく被虐の快楽を享受出来る悦虐嗜好の存在に係わる。単に従順な性質の良妻は世間に多い。この従順さは、当然奴隷妻になり得る基本的条件には相違なくとも、これだけでは奴隷妻であるとは決して申されない。彼女が夫のS的嗜好に共鳴馴化し、その心身を惜し気もなく被虐の淵に投げうった時にこそ、初めて真の奴隷妻として認知されるのである。

SMPに於ける奴隷妻の生活は、そのプレイ内容を表面的に見れば、如何にも夫と言う名のサディストによる、一方的暴虐の様に見える。做される事が多いかも知れない。しかしその実情は決してそうではない。否、そうであってはならない。愛する夫のS的嗜好に適合しよく夫と表裏一体となって、受け身の悦虐生活に陶醉するM女の倒錯的歓喜が、そこに在ると言う厳肅な事実を、見逃がしてはならないのである。奴隷妻の心にこのマゾヒスティックな喜び無くして、どうしてSMPが満足に成り立ち得ようか。

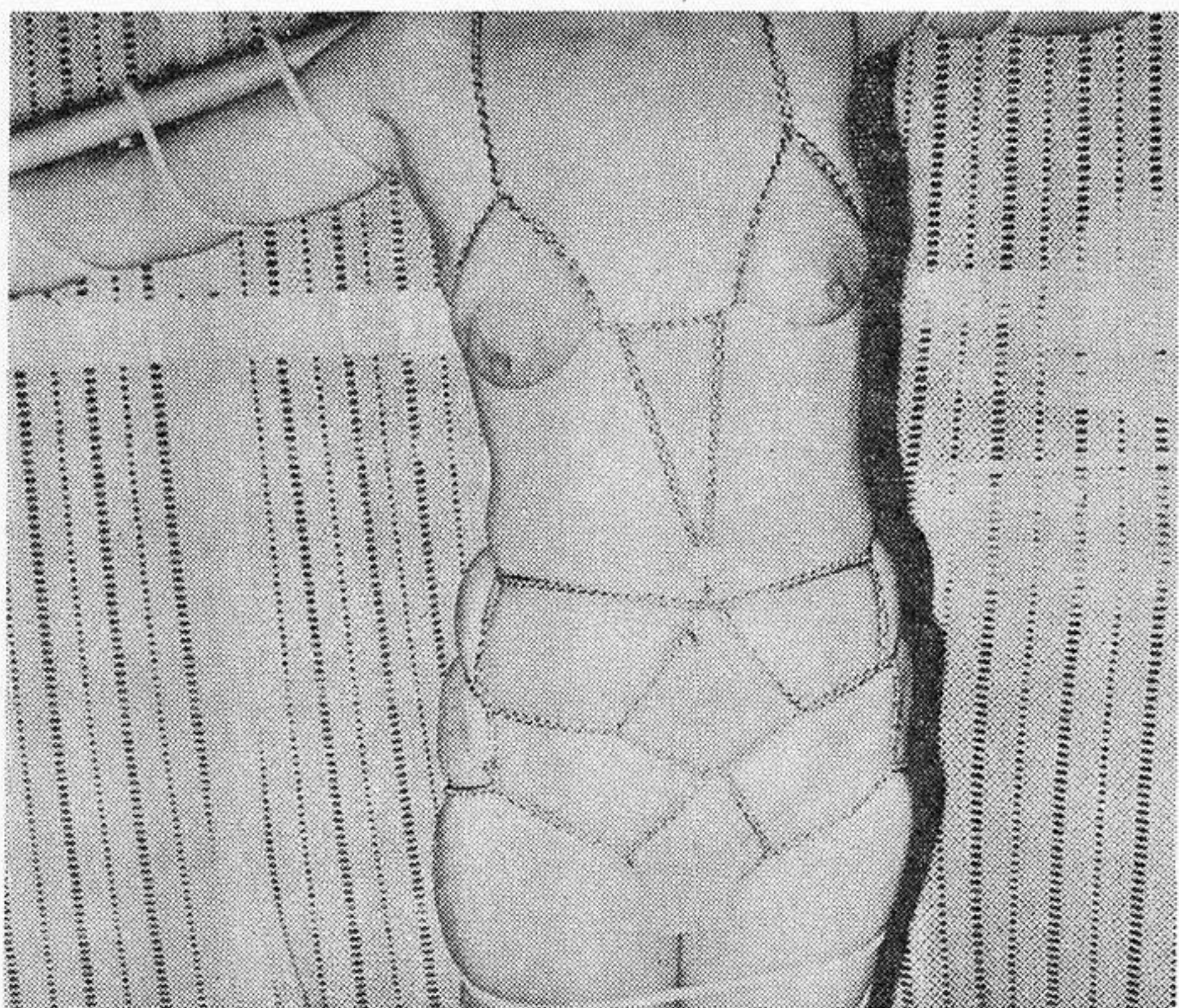
然かもSMP嗜好は、本来万人の心に内包されている物であるにも拘らず、人によって、それが他の多くの資質の陰に隠れ、或は他の何らかの事由によってその顕現が妨げられる場合がある。こんな時嗜虐嫌悪、SM拒否の形となって表面化される事も有り得るのは己むを得ない仕儀であろう。従順な妻必ずしもSMを好まず。この場合は当然、奴隷妻への馴化は望むべくもなく、従って「憎縄の記」の書かれる所以ともなるのである。

#### 四、悦虐の限界

ところで、SMPと一口に言っても、それには微笑ましいママゴトの様な初步的段階から、それこそ一命の存亡にさえ係わる程深刻苛烈なもの迄、ピンからキリ迄数えられる。嘗て小口末吉と言う人は、妻の嗜虐願望を叶える為に、彼女の肉体をまるでナマスの様に切り苛んで殺人罪に問われた。このグロテスクな事件は、無残に硬直した女の全裸の遺体写真と共に、近世日本犯罪史中でも、最も疎ましい出来事として我々の脳裡から離れる事はない。我々には仮令愛する者の懇請に因る故を以てしても、この様に相手の肉体を毀損



しても良いと言う、出鱈目な自由を決して持ち合わせてはいない。それではSMPの場合、一体何処迄が犯罪と認められるかの問題



鎖下着で締めつけられる紀川正信氏夫人

に就いては、数年前誌上に、具体的に有益な識者の見解が発表されていたから、諸賢は既に詳細をご高承の事と思う。しかしそれが犯罪にならないと言う事だけが、つまり、法的規制のギリギリの線を守りさえすれば、全ての暴戾が正当化されるか否かに就いては、多くの疑問が残るであろう。毎々述べる様に、SMPの在り方、従って奴隷妻の所遇の問題に就いては、全てが当事者同志の良識と愛情を基盤とした、夫婦相互間の深い理解と信頼に係わる事を厳に肝銘しなければならぬ。これこそがプレイヤーとして、特に飼育者に課せられた当然の責務となる。此所に奴隷妻飼育のプレイとしての限界があり、奴隷妻の存在意義があると言わなければならない。

## 五、鎖 夫 人

奴隷と言えば「鞭と鎖」が直ちに我々に連想される。従って奴隷妻と呼ばれる限りは、観念的には奴隷の名に於いて「鞭と鎖」による調教と飼育が伴って然るべき筈である。とは言え、我々の現実社会で、鞭や鎖を実際に使用する事は、当然の事乍ら、殆ど不可能に近い。殊に「鞭」は外国は、いざ知らず、我々の生活環境上からして实际的ではない。そこで残された「鎖」が奴隷妻の飼育用具として役立つ事になる。だが、さりとて衆目の面前で、奴隷妻を鎖で繋ぐ事など、正気の沙汰ではあるまい。

そこで愚生なりの考慮で、奴隷妻の証としての胴鎖を、人目に付かない箇所に、秘かに着帯させる術を、前々から考えていたのであった。そして、この愚生の嗜好と考案に全く合致した実例の存在を誌上で発見する事が出来たのである。これに対する喜びが、先年来掲載を許された一連の奴隷妻シリーズとなって結実した訳である。



既に今田、山本、橋本、紀川各氏は、奴隷妻の証としての胴鎖を愛妻各位の細腰に常時、固く嵌め込んでおられる。彼女達は何れも奴隷妻である事の自覚に徹し、且、その悦びに燃え乍ら、今尚、昼夜の別なく胴鎖の締縛を続けられている。この様にして彼女達は、夫君の許し無くしては、この鎖の枷から、免れ得ない「全日制奴隷妻」としての生活に、心から甘んじておられるのである。今田夫人の如きは、胴鎖の継ぎ目をハンダ付けされて以来四年を経た今日でも、未だに一度もその解放を許された事がないと言う。この事を夫人は決して悲しんではおられない。その決意に満ちた美しい容貌を拝見する限りに於いて寧ろ誇りに思っておられるのではないかと推察される。山本富子夫人は、この胴鎖の緊締を、年老いる迄続けていたいとのご希望をお持ちの由である事は、マニヤに取って喜ばしい限りである。その上、山本、紀川両夫人は単に一本の胴鎖の着帯に止どまる事なく、鎖ブラジャー、鎖パンティーを製作され、それによって、全身を隈なく緊締された。又、佐原氏夫人が「太腿錠」と言う新工夫によって、奴隷妻としての悦びに浸っておられる事実は、誌上を飾って間も無いので、諸賢のご記憶に新しい事と思う。

尚、私は先に群列した四名の鎖夫人に対して、誌上に出られた順番に従って、「奴隷妻第一の女」から「第四の女」迄の尊称を勝手に奉呈している。が、これは別に他意があつての事ではない。単に愚生だけの独善的胴鎖嗜好に基づくものである。従って本稿に掲げた他の多くの奴隷妻諸姉と、格段の差別を意図したものではない事をご諒解願ひ度い。「第四の女」として最近で命名申し上げた紀川和歌子夫人には、この事を大変ご満悦のご様子に承わるのは反って恐縮に堪えない。でも若いお方の中に、こうした事象に関心をお持ち

ちの方がおられる事を嬉しく且、心強く思う。

## 六、縄 夫人

奴隷妻の中には、右に引用させて頂いた様な「鎖」愛好者の他に専らロープの緊縛を主としたSMPに幸福を追及しておられる方々が多い。それは毎号、誌上を飾る、ご夫婦による緊縛プレイの記事や写真により、その盛況を知る事が出来る。誌上に発表された方々だけでも左様に多勢なのだから、それ以外にも奴隷妻の実数が如何に多いかが推察される。と同時に、この様な奴隷妻の奉仕が、夫婦生活の営みの上に、幸福追及の方策として、どれ程、役立っているかに就いて、改めて思い知らされるのである。

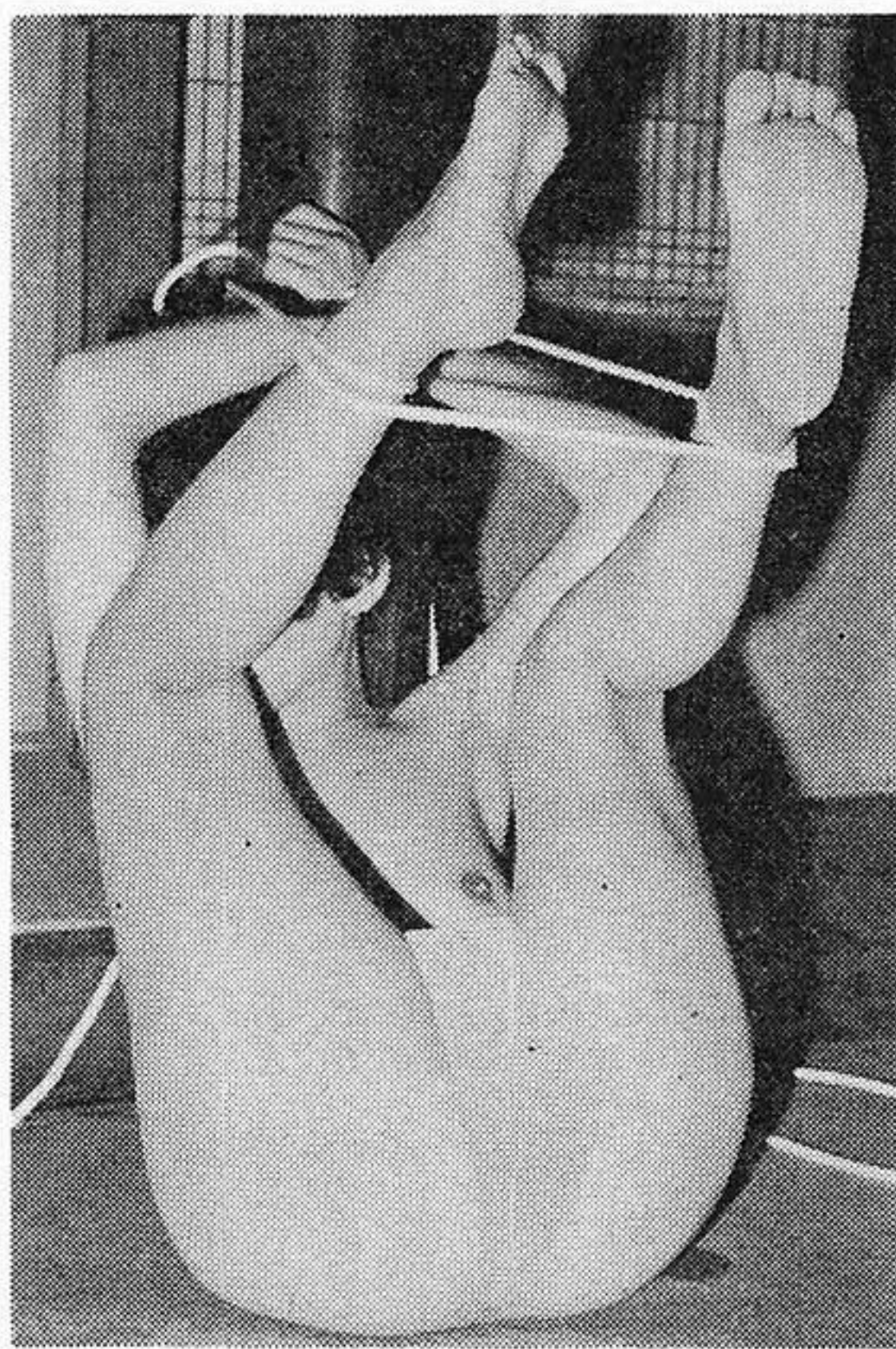
誌上で拝見するそれらの事例に、洩れなく当て嵌まる事は、全ての夫人方が、悉皆、奴隷妻の生活に心からの喜びを感じ、緊縛などのSM行為を以て、夫君に対する情愛の絆として確認されている事実である。即ち、夫君の愛の手によって裸に剥がれ、縛られ、吊るされ、或は鞭打たれる等々の嗜虐の生活を通じて、彼女達の家庭生活が、より豊かに明るく開けている事実なのである。その実例は枚挙に暇がないから、そのプレイ振りの詳述を略さざるを得ない。それ故、本稿では、これ等の縄夫人達の代表として、とりわけ印象的な活躍をなさっておられた大橋美代子、渡部好美両夫人の尊名を特筆させて戴く事にする。このご両人の数々の告白文を拝読する毎に「奴隷妻」である事のご当人のお幸せ振りが、在りの俚に拝察されて心が躍る程、楽しい。折柄、大橋夫人のご負傷を仄聞するにつけても、ご全快の早からん事を、従って誌上での再起の近からん事を切に祈念するものである。



右のご両所の様に  
卒直に自身で意見を  
開陳して下さる方々  
の他に、奴隷妻とし  
ての幸福を、SMP  
を通じて、しみじみ  
と味わっておられる  
方々は沢山、居られ  
る。その方々の中で  
それこそ典型的奴隷  
妻として忘れられな  
い佳人。それは田宮  
夫人その人である。

先にも述べた服従  
と奉仕との精神を、

奴隷妻は恒常的に持続していなければならないと言う主張を厳格に  
下命しておられるのは、奴隷妻第三の女橋本八重子夫人の良き夫君  
二郎氏である。思うにこの趣旨は、多分にメンタルな面を強調なさ  
って居るものと諒解される。ところが、単にそうした面のみならず  
行為そのものに於いて、ご主人の意志次第で、全く時を選ばず、奴  
隷妻としての実践を強制されておられるのが、この田宮寿子夫人だ  
と思われるのである。夫人は先項に掲げた鎖夫人達の様な、常時鎖  
で縛られた暮らしを送っておられる訳ではない。しかもその実生活  
の上では、完全な全日制奴隷妻である事を義務付けられているご様  
子である。



SMPプレイで羞恥表情を追及される田尻長洲氏夫人

普通SMPと言えば、特定の時期、時間を  
定めて行なわれる。例えば、土曜日の夜から  
日曜の朝迄と言うふうに、社会生活から解放  
された時間を見図って決められるのが通例で  
ある。ところが寿子夫人の場合は、そうでは  
なさそうである。夫君恭介氏がそうしようと  
思い付かれたその時点で、それは朝起きぬけ  
でも、昼日中でも、深夜の就寝中でさえも、  
全く時間的制限なしに夫権が強行される程、  
夫人に対する飼育が徹底しているらしい。

その飼育の徹底振りは、嘗て行なわれた第  
三者T氏を交えてのプレイの一部の中に十二  
分に窺知される。がその折に、偶々行なわれ  
ようとして遂に実行はされずに済んだ、或行  
為の内容に就いては、その事の余りの浅間し  
さ故に敢えて触れる事を避けよう。この時、夫人は僅かに悲し気な  
表情を見せられたに止どまり、決して拒否的態度を示されなかった  
事だけを記し、彼女の徹底した忍従振りの健気さを、お伝えして置  
く。

夫人が、このような奴隷妻の境遇に陥られた経緯に就いて、夫君が  
一、二の手記で言及されている事は真実だと思う。それにしても、  
この境涯に身を沈め乍ら、長年に亘って夫君の嗜虐の愛に応え、厳  
しいSMの道を歩み続けられる夫人の献身的なお姿を、私は心から  
尊いものと思う。それは単にいじらしいと言う表現では形容し切れ  
ない輝きに満ちている敬虔崇高な聖女の姿にさえ喩えられて然るべ



きではなからうか。夫人の心の内に潜むものが真に何であるかは、正直のところ私には分からない。しかしこの様に、夫君から全く時間的区別なく受ける嗜虐の愛のプレイを夫人は、きつと自らの業と締観し、素直に、何等の嫌悪もなく甘受し乍ら、被虐の陶醉に感泣しておられるに相違ない。これは偏に、夫人の心の底に蟠る嗜虐の本能が、完璧に迄喚び起こされ、夫君のS性と合一した結果であると解される。

以前に掲載賜った拙稿「吊るし責め」には、編集子のご好意で、この寿子夫人の得難い吊り写真数葉を載せて戴いた。が「妻は小柄で吊りには最適」との田宮氏のお言葉通り、寿子夫人は今も尚、相も変わらずその華奢な裸身を嚴重に縛り上げられては様々な吊るし責めに喘ぎつつ全日制奴隷妻として果たさなければならぬお仕置の数々を、ひたすら耐え続けておられるのであろう。所詮マゾの本能とは、斯くも甘く、苦しく、そして哀しい性なのであろうか。

## 七、鞭 夫人

奴隷妻の象徴の一つである「鞭」に就いては、先にも触れた通り嚴重な密室を持たない日本の住宅構造からして、その実行が憚られる場合が多い。つまり、鞭音が近隣に否応なく鳴り響くから具合が悪いのである。マニヤにとっては、肌面を朱色に染める鞭跡の美しさに見惚れる事は言うも愚か。ピシリピシリと高鳴る鞭音に和してその度毎に紅唇から洩れる悲鳴の哀れさも亦、SM享樂の源泉となる。従って一般家庭内でのSMPとしては、こうした楽しみを心ゆく迄味わいたくても、遂行不可能なのが実情なのではなからうか。この辺に、我が国で鞭打ちプレイが内密裡に出来る緊縛プレイ程に

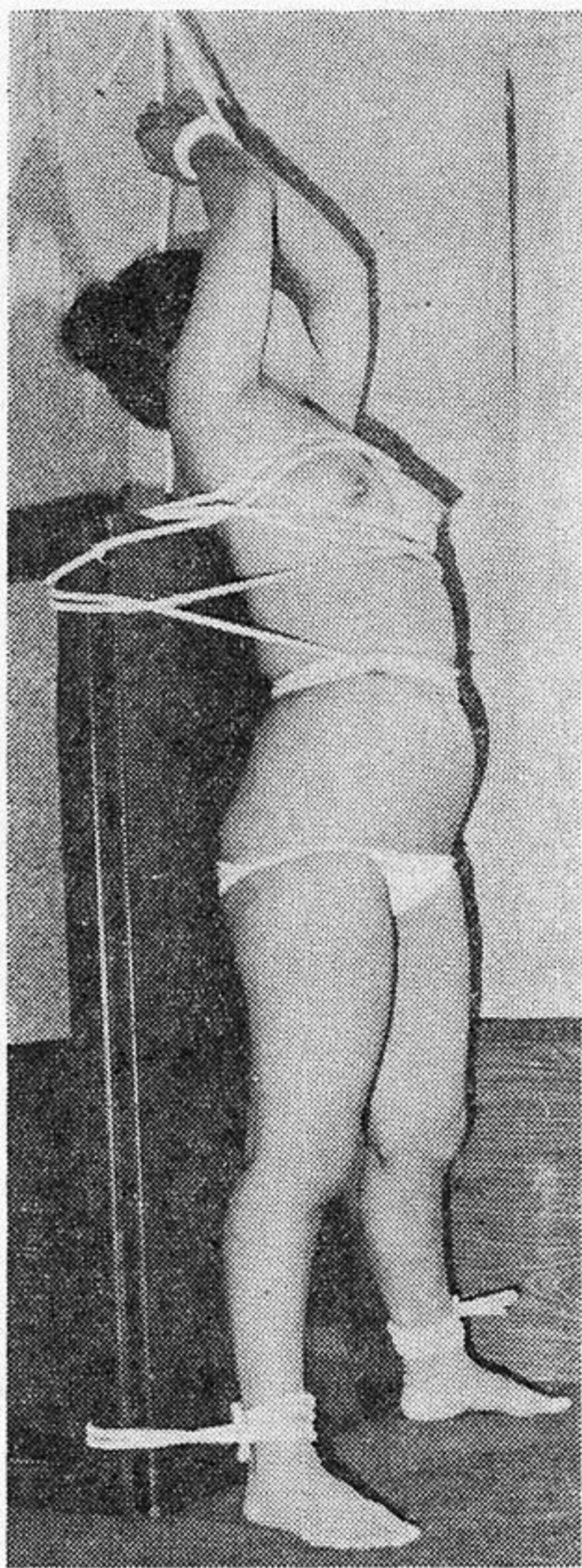
は普及しない真因がある様な気がする。

以上の様な理由から、鞭夫人として、夙に誌上にその麗姿をほしい俎に晒しておられる関谷富佐子夫人の存在は、得難い稀少価値を持つと言える。夫人は鞭打ちに際して他のM女と同様に縛られたり吊るされたりなさっておられる。しかもこれ等の事は、プレイの本番としての鞭打ちに付随する補助的手段に過ぎないと聞く。即ち夫人にとって、こうした緊縛や吊るしは、打擲による陶醉感を、より高める修飾的行為に過ぎないのである。彼女は本来、一本の鞭さえあれば、それで存分の満足を得られる程の純粋な鞭夫人であるらしい。誌上でお見掛けする緊縛M女性の中には、ケースバイケースで鞭打ちを受ける女性も相当数、居られるに違いない。けれ共、関谷夫人の様な鞭打ち一筋に生きるM女性是他に見当たらないと言えは言い過ぎだろうか。

夫人が通常、鞭打ちプレイをなさるお相手は、当然ご主人だろうと思う。この鞭打ち嗜好は関谷ご夫妻の何れが主であり、従であるのか、その辺のところが今一つ、明瞭ではない。燃えさかる鞭打ち嗜好を止め難く、その実行、をいつもせがまれる主客は、ご夫妻のどちらなのであろう。然して夫人の鞭打ち嗜好が呼び起こされ、M女として誕生なさった、そもその動機、その来歴は？そして、この激しい鞭打ちプレイは、何時、何処で、どのような舞台の上で実演されるものか。又使用される鞭の種類は何で、そのどれを最も好まれるのか。鞭打ちの数は普通、何本位か。それがエキサイトすると何本位になるのか。鞭打ちされる肉体の部位は何処が多いか。更にプレイの後に夫人の全身に残るであろう鞭痕の程度や、その治療は？ETC。普段は余り考えても見なかった疑問の数々が、次



悦虐の早坂信治氏夫人



々と思い浮かんで来る。願わくば適当な機会に、これ等の諸点に対する、ご返信を得たい。

ところで、誌上ではこの関谷夫人を奴隷妻とお呼びしている例を私は知らない。又、本稿で述べた奴隷妻の定義が、果たして夫人にその俚該当するかどうか分からない。しかし、夫人が誌上で身を以て示されている悦虐行動は、明らかに嗜虐妻の実態であり、典型的マゾヒスチンである事は否めない。即ち奴隷妻↓奴隷↓鞭と鎖と言う連想に従って、鞭打ち愛好者としての夫人を敢えて本稿にご登場願ひ、奴隷妻の定義付けに一役買って戴いた次第である。

そこで「鞭」が奴隷の必需品だとすれば、いっそのこと、同じ必需品である「鎖」の使用を、この際、夫人にも、お奨めしようと思ふが、余計なお世話だろうか。ここで言う鎖は、勿論奴隷妻の証としての胴鎖である。問題は夫人が奴隷妻である事を自認しておられるかどうか。そしてそうであるなら、その事実の確認の為に、鎖の

アクセサリーを快く受け容れられるかどうかと言う事でもある。しかし、そんな事は単なる形式に過ぎず、この際、重要な事柄ではない。何れにしても関谷夫人こそは、純粋な鞭夫人として、誌上で唯一と思われる程、貴重な方なのである。今後共ご自愛なさって、鞭打ちの中にM女としての悦びの追及を続けられる様に、呉々も念願するものである。

## 八、定時制の設定と、その二種別

一方、小竹夫人は、夫君一浩氏の調教下、永年に亘って厳しい緊縛を主としたSMPに励んでおられる。その上に、縄による緊縛のみならず、時には鎖の緊締をも受けられている。前掲、山本、紀川両夫人同様の鎖ブラジャー、鎖パンティーを、その豊満な全裸の肌深く着装なさっては、悦楽の時を過ごされている。この雪枝夫人の場合は、その道具が縄であっても鎖であっても、プレイ時間を、ま

る二日（四十八時間）を限度として決めておられる。即ちSMPに於ける定時制の厳守が特徴的である。定時制とは言えまるまる二日間、引き続いた緊縛が、どんなに苦しいかは、経験してみないから分からないが、大変な、ご苦勞と拝察される。けれども、この定時制の制度そのものは、被虐者の肉体保護の上に必要大切な事柄として十分に首肯される。夫君一浩氏に従えば、この定時制の方が、全日制よりも、その都度のSMPに新鮮



味が出て好都合との事である。これこそ一挙兩得と申されよう。但し、プレイとプレイとの間隔が大体どの位かに就いては、ご通知がないので分明しない。

兎に角、小竹夫人に対する緊縛と言うのは、全身を締め上げる全ての縄目が、宛も柔肌を絞り切るかの様に深々と肉棚の奥に、幾段も陥没する程の厳しさが通例である。従って肉体上のダメージも、人並外れている事だろう。夫君は、夫人の肌を彩る赤紫色の縄痕が次第に暗褐色に変わり、やがては皮下に吸収消滅して行く、全経過を、情愛を籠めて見守り乍ら、夫人の肉体上のダメージが完全に恢復する迄は、次のプレイの実行を差し控えておられるに相違ない。同氏の愛妻に対する温い心づかいが床しく思われる所以である。

扱て、定時制奴隷妻とは、プレイ実践上の時間的制限の訳だから小竹夫人はプレイ時間外に於いては、当然、奴隷妻としての行動から完全に解放された、言わば自由妻の筈である。しかし、夫人は永年の飼育によって、M女としての慣性が既に心身の奥底深く定着してしまっている。従って夫人から、定時制プレイ外の時間に於いて奴隷妻としての意識が完全に払拭され尽しているかどうか？それは疑問だと思う。つまり、ご夫妻が実践しておられる奴隷時間は、たとえ、制限された定時制であっても、夫人のM女としての本質そのものは、全日制奴隷妻と、聊かも、隔たりはないのではあるまいか。

右に就いて日頃のご懇意に甘えて、無難な比喻をお許し願えるならば、夫人の肉体と精神とに、チャンネル・スイッチの操作次第で瞬時に切換えが出来る、完全に機構調整された精密なTVと同様であると思う。即ち、夫人の心身の奥には、何時でもSMPに対応出

来る準備と決意が備わっているのであって、常に奴隷妻である事の喜びを、深く静かに内に秘め乍ら、次なるプレイへの待機に怠りないと推量される。これを逆説的に言えば、この待機の時期の設定こそ、ご夫妻の双方にSMPへの情熱を蓄積、培養する好結果をもたらしているものであり、それがその俚、プレイの新鮮味として反映しているであろうと思う。

小竹ご夫妻のこの時間制限の趣旨は、SMPの「最長時間限度」つまり「もうそれ以上はプレイを続けしないで中止する」事である。これを仮に狭義の定時制と呼ぶとしよう。そうすると、他面に於いて或一定時間を限った、広義の定時制が行なわれているのに気が付く。これは極くありふれた時間的特定であって、単に適当な時間を限ってSMPに従う遣り方である。

この定時制の狭義、広義の区別は、要するに「もうこれ以上は、SMPの時間を取らない」と言う、絶体度の強い方が狭義である。「この時間帯をSMPに費やそう」と言うのが広義である。表現を変えて、狭義の時間制限は、主として肉体上の限界懸念を基準としており、広義のそれは、主にプレイ環境の確保と適用にその基準が置かれていると言った方が分かり易いかも知れない。この様な定時制の持つ二種別に基づいて広義の意味での定時制を全日制と較べると、奴隷妻の献身性の深刻さの点で我々の受ける印象が大分変わって来る様に思う。広義の定時制プレイヤーは、同じ悦虐嗜好でも、飽く迄もプレイであると言う、語義通りの実践上の態度が色濃く感じられる様な気がする。奴隷妻各位の多くは、恐らくこの広義の定時制採用者の部類に属するのではなからうかと推察されるが、如何なものであろう。但し、これは愚生の相変わらずの無責任な当て推



量に過ぎず、何等の確証をも持たないことを附言しておく。

## 九、結

び

私は本稿に於いて、多くのM女の生態を、色々な視点から窺って見た。これ等の夫人達のプレイの内容がどんな形式であれ、或は彼女達の呼称がどう呼ばれようとも、そこに演じられるSMPの現実、は、所詮はその言葉の通りプレイなのである。夫婦双方にとっての楽しい遊びに過ぎないのである。それが、たとえ世俗的見解上から常規を逸脱した倒錯的な行為に見えたとしても、そのプレイに耽る全ての夫婦は、例外なくお互いを敬愛し、信頼と理解に満ちた思いやりの心を持つ。妻は夫の愛の心に報いるべく、その心身の全てを捧げつつ、自らもその悦虐の一時を酔い痴れる。そして夫は、愛する妻の献身的奉仕を真心から慈しみ乍ら、彼女の被虐の美しさを讃美するのである。従ってSMPのその窮極は、夫婦の強い結合と深い愛情交流の一手段であり、且、その成果の現われとなるべき性質のものなのである。

それ故これ等のSMPは、一概に変態呼ばわりされて、世間から指弾される非道な悪業とは、その本質が異なるように私には思われるのである。或は、そうした非難を受ける態の非情なものでは、決してあってはならないのだと考える。少なく

とも他人同志によって演じられる惨虐極まりないSMPに較べれば夫婦の間で持たれるこうしたプレイは、裸身をくびる一筋の縄にも柔肌を染める一打の鞭にも、深く優しい愛撫の影を、宿すものである。その故にこそ、これは、選ばれた二人の男女が、許し許されつつ睦み合う至福の姿なのであり、そこには他には味わえない心の暖かさが籠るのは当然の事なのである。これは度々述べるように、偏に夫婦愛と言う、何物にも替え難い美しい心情の絆によって、お互いが固く結ばれているからに外ならない。

最後に被虐妻に対する魅惑的な呼称「玩具妻」の名に、如何にも相応しいと思われるプレイヤーの代表として、みなみ洋氏のご通信の一部を引用させて戴き、かぐわしい夫婦愛に育まれる、可憐極まりないM女性の倅を偲んでみたいと思う。

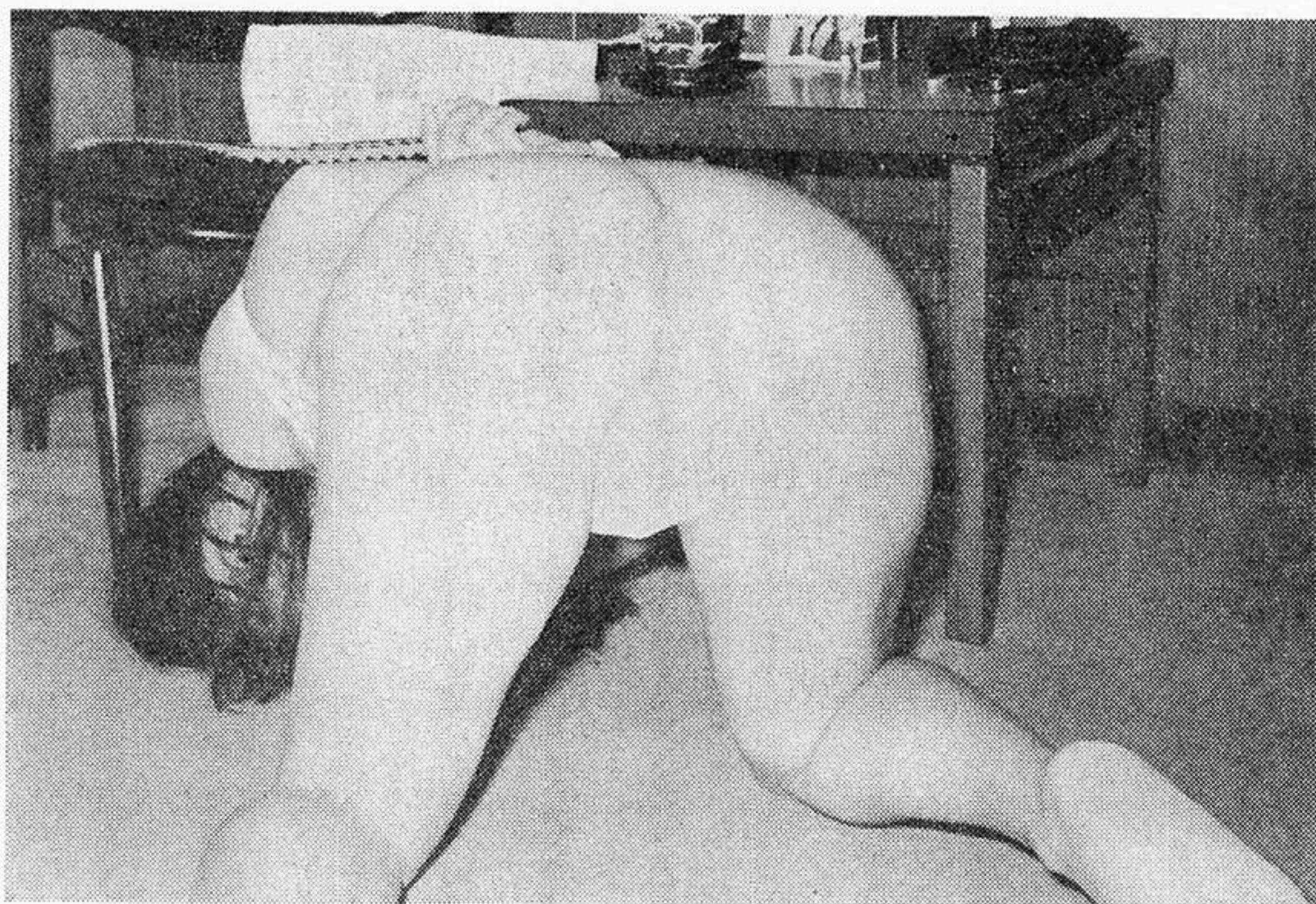
「縛られてゆく過程において、陽子はその痛さに思わず悲鳴をあげるが、その表情には、そろそろ陽子の心を占めはじめた陶酔感があらわれている。ぼくはそんな陽子を見ると、いてもたってもいられなくなる。縛り上げた陽子が、あまりにもかわいくみえるからだ。

「陽子」「アナタ」「愛してるよ」「いつまでもいつまでも、愛してね」「たとえ死んだってばなしやしないよ」ぼくは縛りあげた陽子とそのまま夜が明けるまで寝てしまうこともある」（甘いメロデューの流れるとき）

この一文に添えられていた陽子夫人の縛られ姿の、何と、あどけなく可愛らしかったことか。丸々と膨らんだ締めゴムのキツイ、ズロース一つで、高手小手の後ろ手縛りに、両脚を逆エビに繋がれた俯伏せのお姿が、微笑ましく思い出されて来る。全てのSMP愛好者各位に幸多かれと祈りつつ、この辺で擱筆する事としよう。

——ご投稿下さる方へお願い——  
各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。





〃耽奇房〃 我楽多控 〳第三回〵

# 幻の少女

〳後 篇〵

辻村 隆

書きたい放題の  
前置き

かつて、奇クにも数度寄稿  
したことのある若き前衛芸術  
家、葉山啓は、私の同好者仲  
間の一人でもあるが、或夜、  
一巻の8mmフィルムを携えて  
私宅を訪れてくる。

(儀式) (曼陀羅) (小笠原

流)と、三部に分括されたその小篇の、世に  
も妖しいスカトロ的魅力に、すっかり虜にな  
った私は、この映画の唯一の主人公、幻の少  
女ヤスコの幻影を求めて、このモノクロ映画  
の製作者、小西某を紹介して貰った。

隠れたカメラ・ハントの憧憬者であった彼  
は、葉山啓に、この一巻を託して、私に知己  
を求めたようであった。

彼は亡妻のスカトロフィルム一巻を私に披  
露し、自分の徹底した趣味を披瀝する。



幻惑された、幻の少女との手蔓を求めて、私は小西某に近づく。

奔放な少女ヤスコは、住所不明、所在不明の、気が向けば、一方的に、彼女の方から電話してくるという、掴みにくい存在であったが、そこに又、妖精めいた魅力が秘められていた。

卓球を通じて、旅の宿の一夜、知り合った少女に、彼は、それを機会に接近し、飼育を続けてゆく。

徐々に成果は実って、彼のスカトロ趣味は満喫されていった。

度重なる排泄シーンの積み重ねが、二十分そこそこの、彼の一卷のフィルムに結集され芸術的ともいうべき、見事な一篇を生み出したのであった。

それは彼の執念の凝固のフィルムである。

鶴首して待つ私に、遂に待望の日が巡ってきた。VTRに、幻の少女の排泄シーンをおさめるべく、勇躍して私は、小雨そぼ降るなかを、待ち合わせの場所に急ぐ。

幻の少女ヤスコの、華麗なる姿を現実に見て、私の心は騒ぐ。

羞恥心か——警戒心か、最初は私を拒否していた少女も、初対面の固さが、いつしかホ

グれると、私の介入を許容する。

ジャズのコンサートを抛擲して、少女は誘われる俚に、彼の事業所へやってくる。

土曜日の午後——。幸い、ガードマン以外には人気もない広い事業所内は、自由に使えるのである。

幻の少女ヤスコは、かっこいいヤツと称する青年と、適当に性戯を愉しんでいることをヌケヌケと告白し、私の予想通り「昼は聖少女、夜は娼婦」とヘンシンし、時と場合では夜昼の区別なく、聖少女と娼婦を使いわけているようであった。

化粧っ気もない、あどけない少女の口から中学一年生よりオナニーに耽った告白をきかれ、かっこいいヤツとの性の遊びを臆面もなく謳歌する反面、ヤツに操を立て、フリーセックスに走らないところに、現代に生きる少女のモラルがあった。

私の心は、激しい嗜虐欲に、かられる。

自ら称してマゾヒストという少女に、私は緊縛から浣腸、そして排泄のすべてを記録にとどめるべく、ガレージへと引き返した。

ビデオやSMプレイの道具を、持ち込むべく……。

——と、ここでも書いたら、既に七十枚。私

にとっては奇クへの掲載始まって以来の（未完）ということにして、ここで前稿を終わったのであった。

幻の少女ヤスコの、変幻自在の、綾に妖しきプロフィールを、この調子で書き続けると、とても一篇には納められそうにもなく、この先、何十枚、書かねばならぬかと思うと、心細くなって、残念乍ら、稿を新たにしたのであった。

前稿と共に、私は幻の少女の存在を知らせる意味もあって、箕田氏に、幻の少女ヤスコの、ナマのフォト数十枚を一緒に送った。但し、フォトは彼女の名譽の為に、一枚も掲載して貰っては困るという制約と共に。

果たして、箕田氏は残念がって、せめて、後ろ姿一枚でもと、折り返しいつてきたのだが、私は、かたくななまでに拒んで、返送して貰った。

何故ともなく少女ヤスコを、むざむざと大衆の眼前に曝したくないという様な気持と、彼女自身のプライバシー保持の思いやりからであった。

プレイのフォトは、私が選んで、彼女に諒解を求めた上で発表するという約束の為に稿を伸ばしたこともあった。ヤスコは、顔が判



っきり出ていないのならいいと快諾してくれて、私は筆を執った。

こうして、自由に、書きたい時に書くということは、何と愉しいことであろうと思う反面、真実を書くことのシンドサがある。一匹狼のサジストを自認する私の書いたもので、緊縛や責めの、全然、登場しない一篇も珍しいことである。

いよいよ本領を発揮させるべく、あの日の妖しくも甘美な刺激に酔い痴れた出来事を、静かに思い泛かべながら私は今、机に向かってる。さて……

昂奮のあまりビデオは故障し、やむなくカメラに切り換えること

暖房のスイッチを「強」にいれると、忽ちオフィス内は、ほのぼのと温まっていた。

勝手知った室内で、ヤスコは、深々とソファに腰を落とし、これから始まろうとする、未知のスカトロ的SMプレイに、心なし、危惧の思いを、はせているようであった。

誰にも怪しまれず、ビルの三階まで、ビデオやプレイ道具一式、エレベーターで運び込み、やっと私は一息つく。何しろ、初期のビデオであるから、本体が四〇K近くもあるし

カメラ・コードや附属品、モニターテレビなど入れると、大変な物量である。

当初は、稀少価値もあって、重さにもめげず、よく撮ったものだが、最近は、かなり御無沙汰勝ちであった。

今日に備えて、充分点検し、テストもしてきたから、万々手落ちはない筈であったが、長らく使っていないだけに、内心は、うまくゆくかどうか、些か不安である。念の為、カメラだけは準備してきてあった。

「私は今日は、オブザーバーですが、お邪魔しない程度に、ハミリを撮ってもよろしいでしょうか」

小西さんは遠慮勝ちに、私に向かって声をかけてきた。

三十才を少し越した、この技術畑の青年紳士の呼称に、私は困る。

小西氏と呼ぶには若過ぎるし、さりとて、小西君と書くと、軽々しい。ここはやはり、私が実際にそう呼んだ、小西さんと書くより仕方がない。小西某なら、世間にゴマンとある氏名でも、彼の名前を判っきりさせて、迷惑をかけてもならなかった。

「ええ、いいですとも。それは当然ですよ。彼女の主導権は、あなたが握っていらっしゃるのだし、こうして場所の提供もしていただいているんですもの、私に遠慮しないで、ドンドンやって下さい」

「そう仰有っていただくと嬉しいですよ。何しろベテランの辻村さんと御一緒というだけで何となく萎縮していたのです」

「とんでもない。少なくともスカトロ趣味に關しては、私などまだまだ、あなたの足許にも及びません。これから、もっと深く探究したいと思っています」

「いやお恥かしい。私など、スカトロジョのパラノイアで、それだけにしか能のない人間です。これがSMの一環とするならば、もっと幅広く、追究してゆきますよ。何分にも、辻村さんと違って、私の対象の女性は、亡くなった家内と、このヤスコの二人きりなんですから、タカが知れています。毎月の様に、変わった女性とプレイなさった辻村さんが、羨ましいと思います。私の念願は、そうした女性を一人でも多く発見して、スカトロジックな探究を試みてみたいことです。夢かも知れませんが、数多くの女性の、アナルへの憧憬と願望、懼らくは、その一人一人の容貌の異なるように、アナルも又、それぞれの個性が違うと思います。それは、考えただけで



も愉しいのです。若し許されるならば、辻村さんとお近づきになれて、そうした女性達のアナルへの発掘に、協力していただけたらと……いや、とんでもない、厚顔ましい願望を申ししてしまいました。どうか、気にしないで下さい」

それは、彼の本音かも知れなかった。

私の発掘してきた女性達へ憧憬を抱き、願わくば、アナルへの、あくなき探究を果たしてみたかったに違いない。

角度を変えて、過去のハント女性達を、そうした観点より眺めた場合、おのずから又、趣きは変わって行くことであろう。

「ええ、そのうち、御期待にそうよう努力してみましよう」

確約はせず、聞き流して、それよりも今の私の関心は、幻の少女ヤスコの一挙一動に集中されていた。

少女は、私達のやりとりを、黙って聞いていた。自分以外の、不特定多数の女性に、心を走らせようとしている彼に、少女ヤスコはどんな想念を抱いていたことであろうか——

「最初は、この部屋から始めましようか」

私は一つの構成を纏めて彼に声をかける。

「ええ、どうぞ御自由に——。ただ、この

事業所だと判つきり分かれるところは、なるべくお避け下さい。万一のことがあると困りますから……」

もっともな危惧である。数少ない、こうした事業所の一室で、想像もつかぬプレイが演じられていたと分かったなら、彼の地位も危くなることは必定であった。それくらいは、私も心得ている。なるべく普遍的な位置を選定して、いよいよビデオの準備を進めることにする。

ぞろぞろと器具をケースより取り出し乍ら構図は、私の脳裡に、一つのかたちを作り出していった。

儀式でも、曼陀羅でも、小笠原流でもない私独自のもの。それは、いつも行く、アベックホテルでは、撮り得ないものであった。うまい具合に、ここには、すべてのお膳立てが揃っている。

受話器をとり上げて応待している少女。

元の位置に戻った彼女は、ゼロックスを操作し始め、フト所長の机の方に視線を移す。

白衣をきた所長が、頭を下げて、うたたねしている（小西さんが、サングラスをかけ、白衣を着て、顔を伏せて、俄の代役を演じて貰う予定）

少女の頬に、妖しい笑みが浮かぶ。

静かに、所長の傍へ近寄ると、よく眠っているのを確かめて、ミニスカートをたくしあげ、薄いパンティをずり下げて、片足ずつ外して脱いでゆく。

大きなデスクの上に、所長専用のポットがのっている。（中味の湯は捨てておくが、勿論、実施すれば、私はそのポットを持ち帰り新品と交換する気であった）

少女は丸々とした、可愛いお尻を剥き出しにして、デスクの上に、よじ上る。眠りこける所長に正対して、そろそろと膝をかがめてゆき、ポットに跨がるようにして、落下点に位置をきめる。

爽やかな音色が流れて、ほの温かい生のジューズが、ポットにみたされてゆく。

ハッと眠りからさめる所長——。少女のいたずらは刹那、破られ、男の手がムズと少女の花園へと伸びる——。

これが、SMプレイへの導入部である。

緊縛の落花狼藉——裸身へのいたぶりやバイブ。

そして、排泄への強制手段の浣腸と、眼前での羞恥の排泄——。これを四〇分のテープに撮ろうという腹づもりであった。



私は、想像の演出にワクワクしながら、ビデオのヘッド部分に、テープを嵌めてゆく。既に三脚には、ビデオカメラを装填し、モニターテレビに輻輳する線をつなぎ終わって、あとはテープの装着だけとなっていた。

電源を入れると、モーターの唸りと共に、ヘッドが回転を始める。録画のボタンを押せば、音もなく進行する筈のテープが、ヘッドにへばりついて動かない。一体これはどうしたことだ。慌てて、よくよくみると、ヘッドがベツトリと汗を掻いている。

暖房の急激の温まりで、冷たい金属は、水滴に、ぬれそぼっていたのであった。よくあることであつた。

慌ててテープを外し、乾いたタオルでヘッドの回転部を、よく拭い、テープも拭いて、再びかけたが、依然としてテープは堅くへばりついて廻らない。少し熱を加えていたら乾燥するかも知れないと、電源のスイッチを入れ、ヘッドが高速回転を始めた時、私は一生の不覚にも、一秒に千数百回転もするヘッドの、湿った回転部分にタオルを押し込んでしまったのであった。糸の一端が、呀っという間もなくヘッドのピンに絡みつき、タオルの一本の糸を引き千切って、ヘッドの中へ巻き

込んでしまった。

ビデオの心臓部であるヘッドの重要な一本のピンが千切れては、もうお終まいである。

我にもなく、そんな不覚をしたところに、私が平静ではなく、早く撮りたい一心で、心逸らせていたことを、私自身、まざまざと知らされたのであった。

馴れぬ手付きで、ドライバーでヘッドを開き、何とかならぬものかと、万に一の夢を托して、あちこち点検してみたが、機器のヘッドの、人工頭脳なみに細密を極めた配置にはシロウトの悲しさ、為す術もなく蓋を閉じてしまったのであった。

折角、重いビデオを苦勞して持ち込んだのも、寸時の不注意で、忽ち水泡に帰してしまつたのである。誰を恨むこともない、自らの不注意は、私自身の逸り立っていた心を、自分で責めるより仕方がなかった。第三者がやった不注意なら、私は懼らく殴りつけていたかも知れない。

(バカバカ。お前は何という莫迦者だ。千載一遇のチャンスを、みすみす、おのれ自身の手で逃がしたじゃないか。このバカ者奴が) 私の心の中のハイド氏が、しきりに私を怒る。どうしようもない不手際に、私自身、自

分の頬を殴りつけた腹立たしさであつた。

この事態を、彼は憂慮した面持ちで眺め、数米離れたソファに凭れ込んだヤスコは、無感動の表情で、平然としたポーカーフェイスで、私の独り慌て、口惜しがる状態を、じつと見守っていた。

未練たらしく、尚も機器をいじっていたがもうどうにもならないとさすると、私は潔く諦めた。

「仕方がありません、私自身の不注意ですから……。万が一にとカメラを持ってきただけでも幸いでしたよ」

私はそれこそ、精一杯の苦い、ふてくされた笑いを泛かべて、立ち上がるとカメラを、とり出した。開始以前で、既に私の計画の大半は、挫折してしまつたのであった。

脳裡に描いていた、構図のすべてはオジャンである。

意欲を喪失させて、それでも私は、カメラにフィルムを装填し始める。

カメラ・ハントの取材という大行事を継続していたら、懼らく私は、ハナから、カメラ一辺倒で邁進したかも知れなかったが、彼にみせられたスカトロ映画の驚異に、我にもなくビデオに意欲を燃やしたのが躓きのもとで



あった。

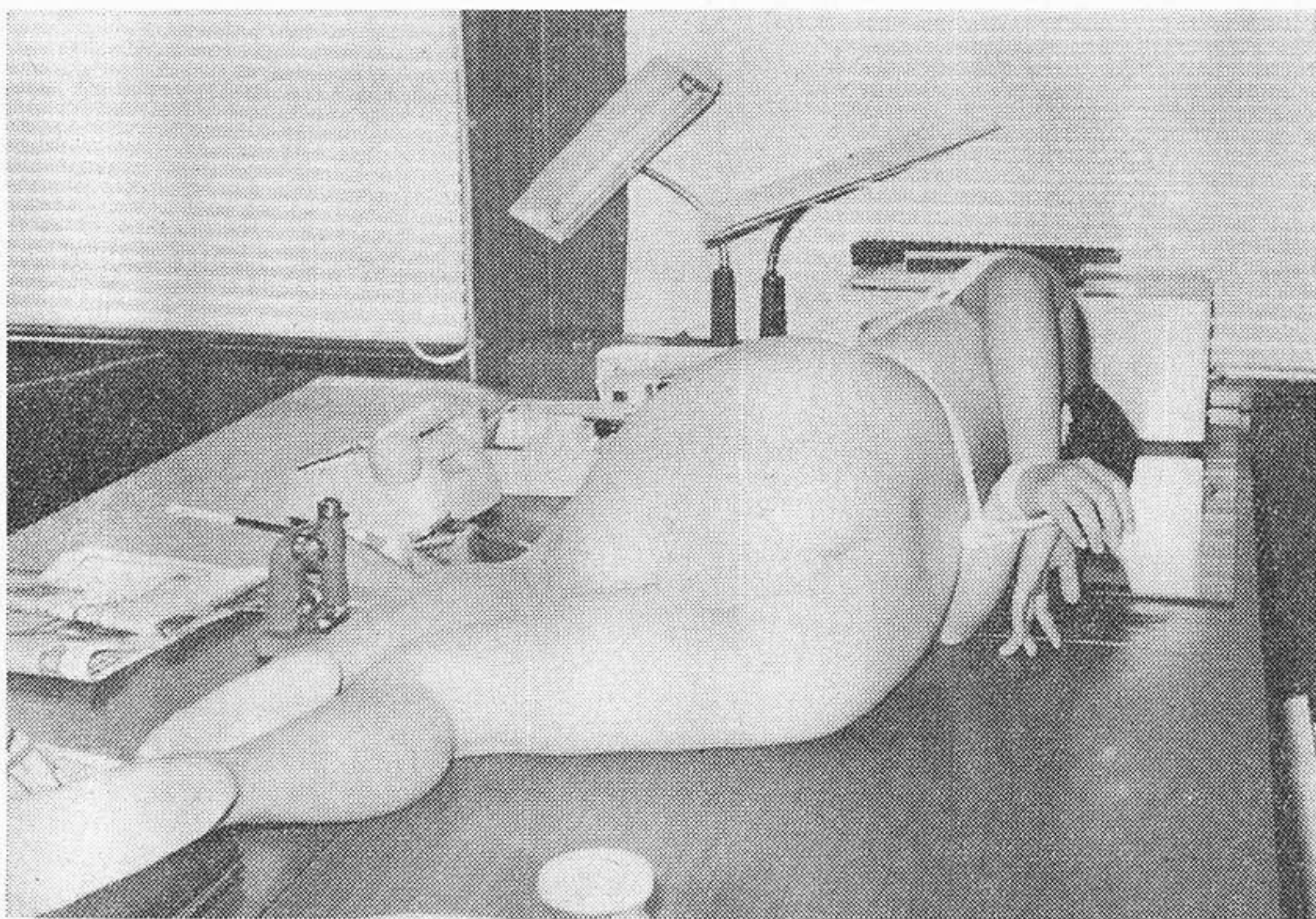
排泄シーンは所詮、フィルムかビデオのように、被写体が動かなくては意味がない。カメラでは、いかに、その排泄の瞬間を狙って撮ったとしても、その迫力の点では月とスッポン程の違いがあった。

それでも、私は撮らねばならない。幻の少女ヤスコと、相見える機会が果たして再来するや否や、その期待は一方通行の彼女だっただけに、次回には托し得なかったのであった。

小西さんは、わがことの様に、気の毒な表情になって、私の不手際を慰める術もなく、呆然として、私の顔をみつめていた。おそらくは、苦虫を噛みつぶしたような私に、とりつく島もなかったであろう。

「次といっても、いつとは日が、きめられませんし何とかやりましょうか」  
「ええ、ええ、もちろん、やりますとも。ストーリーは、すべて御破算にして、いきなりやりましょうや」

まるで彼に怒りをブチまけるような剣幕で私はかなり理性を失っていた。



自分自身に腹が立ってならないのであったが、おのずから、その気持が言葉に現われてしまうのを、どう制御しようもない。

私は焦立つ心を鎮めるべく、やっと一本の煙草を口に咥えた。

紫煙と共に、冷静さが戻ってくる。

「彼女、いきなりハダカにはならないでしようかねえ。あなたから口説いてくれない？」

私は、今更、着衣のヤスコをとる意志はなかった。ビデオの演出を一足飛びにとばして、早くも緊縛の、SMの行為に、かり立てられていたのだった。

「ええ、頼んでみます。多分、承知してくれるでしょう」

彼は、恐懼の態度で応えたと、ヤスコに近づいていった。既に、私達の会話は、彼女の耳に筒抜けの筈である。

果たして、

「オジサマ、勝手だわ。自分で壊しておきながらセンセに当たるなんて卑怯よ。私ハダカにならないでもないわ。だけど、オジサマの、そんな態度、き



らいッ」

ピシヤリといったのけて、すつくと立ち上がった。これは、ヤスコの言うのが当然である。非は、いうまでもなく私にある。

彼女にとって、私は初対面の、素姓すらも判っきり知らぬ中年男であるし、彼は、既に幾度かの愛情の交流のある、奇妙な関係で結ばれた間柄であった。私の態度に、恐懼している彼への同情もあって、そんな強い言葉が吐き出されたのであろうか。

肝心の、演ずる主人公を度外視して、私は独り、いきり立ち、逸り立っていたようであった。

「済まなかった。私の不注意でビデオが役に立たなくなり、自分が腹立たしくてならなかったものだから、つい理性を失ってしまっ……。本当に御免ね。私が悪かったよ」

素直に、この若い少女に頭を下げる。それは私の、いつものような演出ではない。真実すまないと思ったからに外ならなかったからであった。とりなすでもなく、小西さんは、私と彼女の間に立って、困惑の表情を泛かべている。

気拙く、シラけた空気を払拭するように、立ち上がっていたヤスコは、黙って、身に着

けていたものを脱ぎ始めた。

それは、私への許容の、何よりの意志表示であった。

羞恥の衞<sup>てら</sup>いもなく、胸の隆起を露わに曝し最後のとりでの、パンティを脱ぎ捨てると能面の眸が、私をみつめ、

「これで、いい？」

と、両手を自然に脇に垂らして、繁みを蔽いもせず、赤裸々な姿で、その場に立ちはだかったのであった。

眩しい少女の裸像が、私の瞳に灼きつく。

少女に似げない豊かな繁茂——そのふくらとした蒼丘が、私に挑戦するかのよう熱い視線を釘付けにした。

「ヤスコ、有難う。ボクは嬉しいよ」

白けた空気を、一挙に薔薇色に染めたヤスコの急変のポーズに、彼は、救われたような感激の言葉で、円くなだらかな、少女の肩をいとおしげに軽く叩いていた。仲に立った彼が、私以上に気を使っていたことを知り、私の胸は思わず、ジーンと熱く濡れる。

「どうも、本当に……」

我にもなくペコペコ、二、三度、彼女に頭を下げて、言葉にならぬ言葉を残して、私は急拠、カメラを取り上げていた。

幻の少女の心意気に、ヘナヘナと打ちのめされた私達は、少女の堅い心のシコリを内心感じつつも、バカのように、イソイソ、出したのである。

生ジュースの美味しさに

むせぶこと

思いつくままの、ナマのイメージーションをヤスコにぶっつけて、私は幻の少女の裸身をカメラに納めてゆく。

一旦、全裸を曝すと、彼女は奔放に、自由に振舞い、私の命ずる俚に、或はデスクにかけ上がり、広い事業所内を堂々と闊歩して、羞恥のかげらいもなく、むしろ、これみよがしに、女のしるしを、まるで誇示するかのように、露わにみせつけるのであった。

新鮮な少女の、美しい裸像に魅せられて、忽ち一本のフィルムを消費した私は、詰め替えを契機に、本来の嗜虐癖を発揮させて、「縛って、いいかしら？」

と、小西さんに一応の許諾を求めた。夢中でカメラを駆使する私を添景に入れて、折々ハミリカメラを廻していた彼は、ハッと我に返ったように、

「ええ、いいとは思いますが、ヤスコ自身に





聞いて下さい」

と、彼女の意志を尊重する。

デスクに腰を掛けて、両脚をブラブラさせているヤスコに、近寄ると、

「縛っても、いい？」

と、たずねる私。

「どうして縛るの？」

怪訝な表情で、澄んだ美しい眸が、私を直視した。

「君が、自分の口から、私はマゾヒストだなんて口走っていただろう。誰かに暴行されて強姦されている夢をみるって言ってたじゃないか。私はサジスチックな人間なんだよ。だから、マゾヒストだと自称する君を、縛って

虐めたくなったのさ」

「縛って虐めるって、どんなことするの？」

あたし、何だかコワイ」

「肉体の自由を束縛することによって、君はマゾ的な、被虐の快感を覚えると思うんだ。果たして、どの程度までマゾ的なのか、君のその心理を確かめてみたいだけさ。虐めるといったって、それは言葉のアヤだよ。体を傷つけたり、殴ったり蹴ったりはしない。どこ迄も君の意志を尊重して、むしろ甘美な歓びを与えてあげたいのだよ。緊縛という行為によって、私も又、嗜虐的にエスカレートしてゆくんだよ。こんなことって分かる？」

男性の眼前で放尿し、排泄するという行為自体、いい換れば、大いにマゾ的であった。

羞恥のすべてを見られているという観念が自虐めいたマゾの役割を果たしていることは確定的である。多くのM女性と接した私であったが、放尿は、しばしば、この眼で確かめても、浣腸による排泄を許容した女性は僅少である。

緊縛も強要も伴わず、自らの意志によって数々の排泄の状態を、小西さんのハミリに納めさせたヤスコの心理状態は、マゾ性の露出癖的なものを多分に包含しているように思え



るのであった。

スカトロ趣味の彼は、過去、さして緊縛という手段を使わなかったらしい。だが、関心がないから使わなかっただけで、排泄の折、彼がその気になって、やろうと思えば、懼らくヤスコは許容するだけのM性を持ち合わせていたのではなからうか。

それぞれの嗜好の違いによって、それぞれのアブニスト達が、自分の最も好むものに走るのは当然である。

彼と違って、私の場合、ヤスコに対して、同一の行為を求めるにしても、やはり、嗜虐の手段である緊縛という、最も嗜虐的普遍行為を、とり入れたいことは当然であった。

私の説明に対して、ヤスコは懼らく、深くは理解をしなかったであろうが、コクリと、うなずいて、

「要するにオジサマは、私のような女の子を縛りたいから縛るのでしょ。つまりは、アブノーマルな趣味を、持っているということだわ。いいわ、縛られてあげる。だけど縛って自由を奪っておいてゴーカンしないでね。そんなことすると、ハダカで飛び出して、ガードマン呼んでやるから」

と、ズケズケといいきって、勇ましい。そ

の言葉が、私の耳にはこよなく、天衣無縫に聞こえて、如何にも微笑ましかった。

「ハハハ……。ゴーカンなんて、そんな野蛮な行為は絶対にしないよ。だけど、後ろ手に縛っておいて、オシッコをしろと、命令するかも知れないぞ」

「そのくらいならいいわ。センセみたいに、ノマせてほしければ、ノマせてもあげるわ」  
傍に佇む小西さんが、いきなり、自己の嗜好を、ズバリ剔抉されて慌てた。年甲斐もなく照れて、頬を俄に紅潮させる。

やはり、そうだったのか——。私は、ここにも芳野眉美的神酒奉戴主義者が一人、存在していたことに、微笑したい気持ちであった。

彼は、その行為を私に語らなかったのは、日の浅い交際のせいもあるが、ネクタールの美味に、むせぶことは、秘かな自分だけの愉しみにしておきたかったからであろう。

ニヤリとして彼の顔を見、私は得たりとばかり、

「ああ、ヤスコのオシッコなら、私も是非、頂戴したいねえ」

と、それは、あながちカラカイではなく、私のもう一つの本音が、案外にそれを希んでいたのである。

私自身、時折、何かの折にM的願望が、チラチラ顔をのぞかせることに、私自身、うろたえて慌てることがあった。

嗜虐一辺倒だと、自他共に認めている私が案外、M的願望をも内潜させていることを感じて、ドキリとする時がある。

しかしその場合、私に被虐的願望を抱かせる女性としての、或種の要素が含まれていなければならなかった。

女性ならば、相手構わず、そんな気になるわけでは毛頭ない。

自らSを自称する女——。レズの女——。虐められたくて仕方のない女——。

緊縛モデルと割切って、報酬を主体にする女——などには、関心はわかない。

謂わば私のM性は、至って微弱なのであった。仄かなS性を漂わせて、SM両面のさがを兼備し、清潔で、美しく、女らしくて男心を、くすぐるような女性なら、顔にドツカと跨がられて、のまされてもみたい気持ちになるゼイタクさなのであった。

山本富士子、池内淳子、若尾文子、吉永小百合、三田佳子、佐久間良子、八千草薫のような日本風な酸いも甘いも、かみわけた美しい女性に、ノマせてあげようかと、媚をたた



えて誘われたら、君ならどうする？

秋月リサ、麻丘めぐみ、栗田ひろみ、森昌子のよう  
な、ピチピチした少女に、  
ノマせてくれる可能性があ  
った時、君は拒否するであ  
ろうか――。

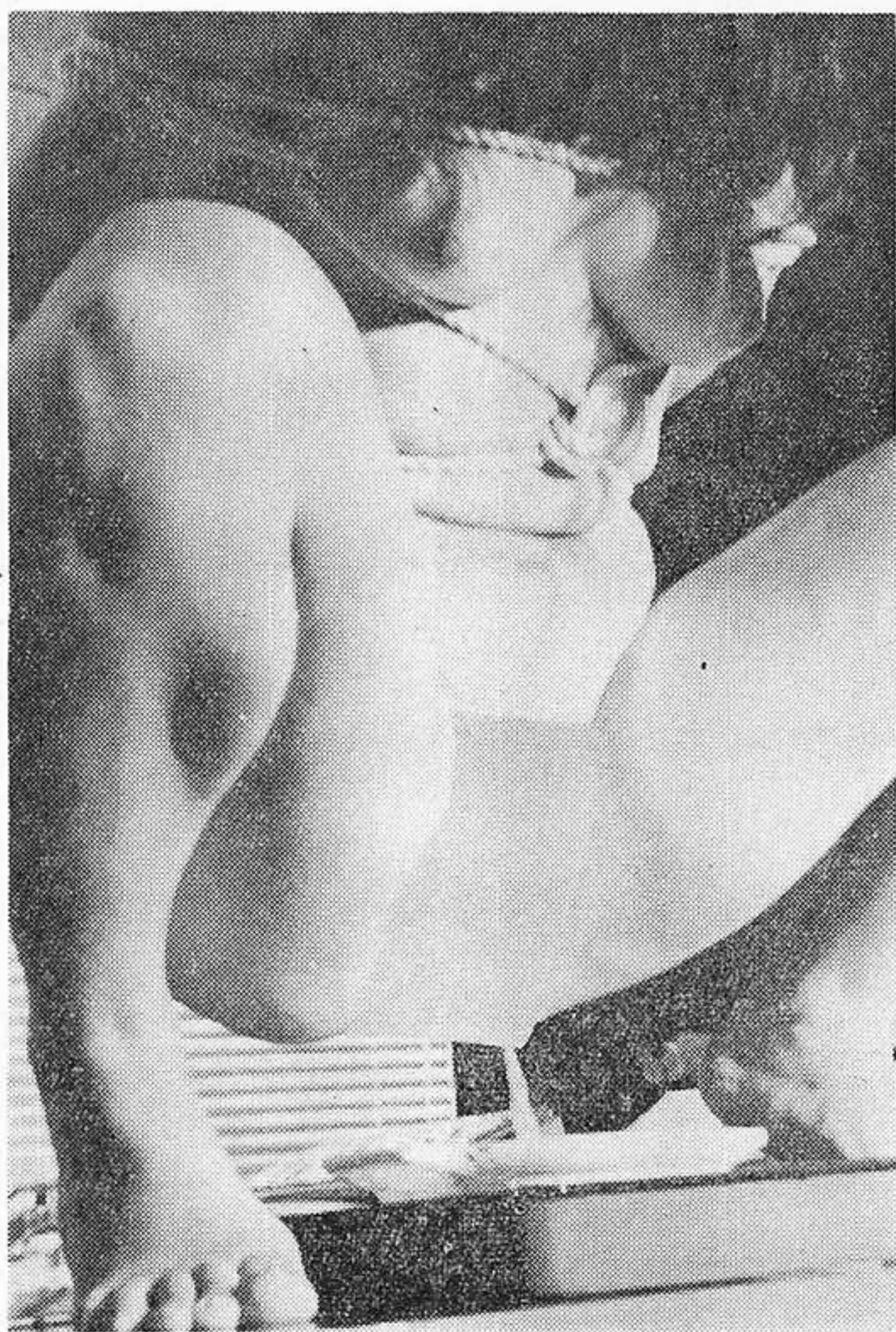
ヤスコの場合、謎の幻の  
少女めいた雰囲気もさるこ  
とながら、あどけないナウ  
な感覚が私の思考をしびれ  
させて、つい私自身、のみ  
たい願望を口走っていたの  
であった。

「あらッ、オジサマも？」

自分から、ノマせてあげるわと放言してお  
いて、私とその願望を口にすると、少女は、  
軽く意外といった表情を泛かべて、笑いを誘  
うかのように、唇が皮肉に歪んだ。

「センセやオジサマと一緒に時はトイレの必  
要なさそうね。代りバンコに、あーんと口を  
開いて貰って、すませるなんて面白いわね。  
だいいち、便利だわ」

あからさまに言っただけで、この美しい少



女は、大きく笑う。

「じゃあ、ヤスコのネクタールを御馳走にな  
る準備にとりかかろう」

私の胸は激しく弾み始め、イソイソと縄を  
とり出してくる。

小西さんは終始、無言でカメラを構え、何  
となくソワソワと落着かない。私がノムとこ  
ろを、撮るつもりでいるのか。或は又、ヤス  
コのネクタールを、自分以外の人間にノマセ

る事に、激しい抵抗とジェ  
ラシーを感じているのか、  
頬を紅潮させた俤、顔つき  
は強ばっている。その表情  
に彼の真剣さが、滲み出て  
いた。

ノム手段には三つあって  
私自身、転がって、その上  
に跨がられるか、若しくは  
立ちはだかった女体の前に  
跪くか、或は、机上か、高  
所に跨がってもらって、落  
下する豊醇な旨酒を顔に浴  
びて、拝閲の榮に浴しなが  
ら、いただくかである。

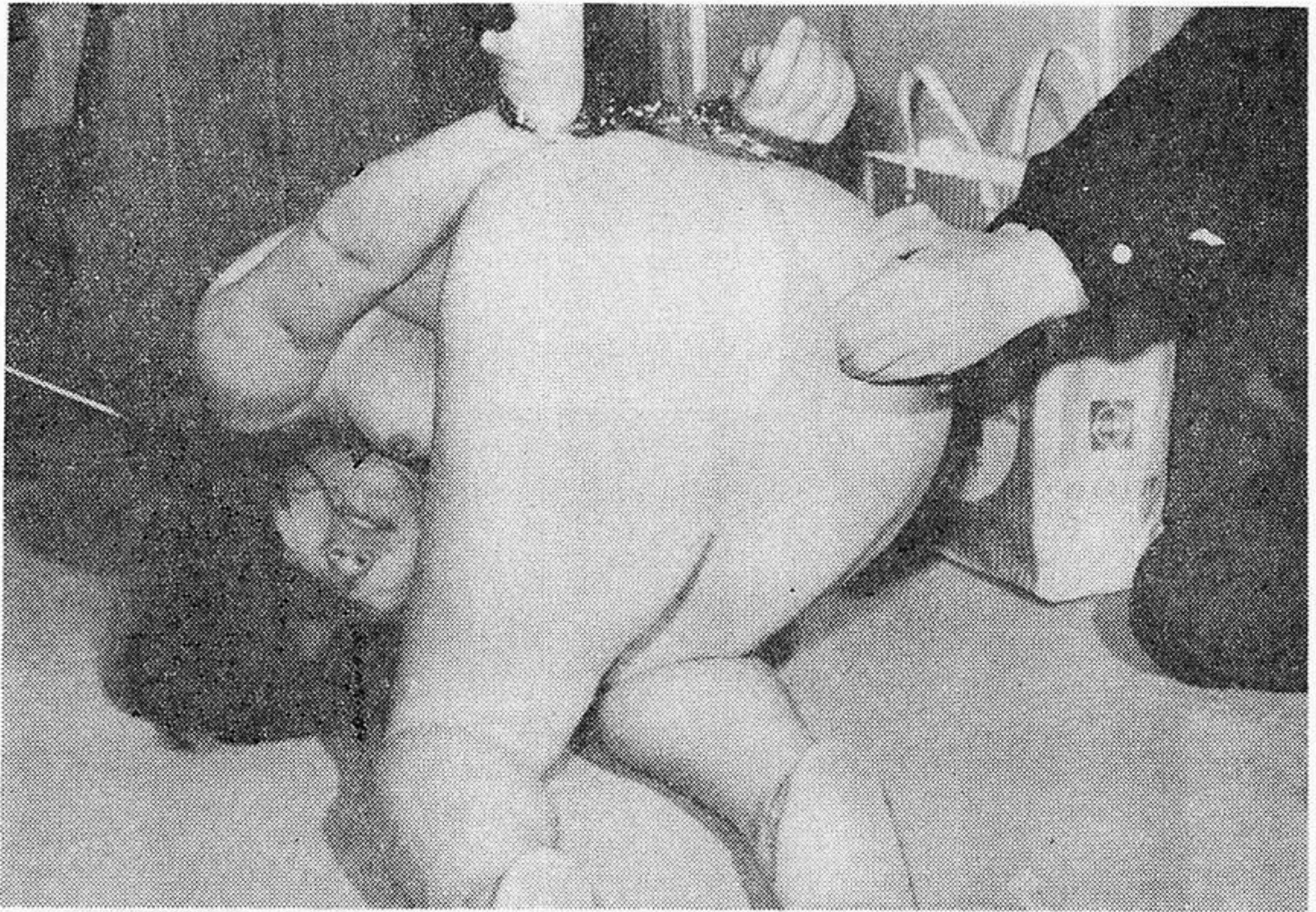
カメラに、その放出の刹  
那を納めたい気もあって、私は、机上へ昇っ  
てもらうことに腹を、きめていた。

彼女に試みる最初の緊縛そのものが主体で  
もないので、縄のかけ方には、さして凝らな  
い。

型通り首縄かけて結び、胸下で結び目をつ  
くって腰で回し、二の腕で縄を引き絞って菱  
形にすると、胸に一条かけて、後手に縛る。

この間、約二分足らずの速攻であった。





ヤスコは私の考えの間に間に、カーペットの上に転がり惜しげもなく秘境をさらけ出して、柔軟な裸身を、くねらせてくれた。

SMカメラ・ハントを終焉した今となっても、緊縛の裸身を眼前にすると、永年の習性の、ハント根性がムラムラと湧いてきて、思わず知らず忽ち、この緊縛の少女に、十数枚近いフィルムが費消されていった。

一旦その気になると少女は積極、且、協力的であった。

「どこも痛くない？」

と、問いかける私に、チラッと笑みを泛かべて、

「ウウン、これくらいなら大丈夫。どうってことも、ないわ」

と、机上で女体を、くねらす。その肢態には今迄にない色気が、そこはかとなく漂っていた。机上で大きく一杯に

開股し、下から覗き込んでカメラを構える私を、さながらジャイアントの女神のように睥睨している。

「そろそろ、放尿シーンをとりましょうか」  
いつ迄も、緊縛ポーズにとり組んでいる私に、彼は待ち兼ねたような声をかけた。

「ああ、いいですよ。あなたノミますか？」  
「ハイ、いえ、どうも……今日は、遠慮します。辻村さんこそ、どうぞ——」

第三者を加えてのプレイ経験のない彼は、私という第三者の存在に、やはり羞恥にかられるのか、本心はノミたくてウズウズしているくせに、心ならずも尻込みしてしまう。私の眼前で、ノムだけの勇気と図太さは、当然ながら、今の段階では持ち合わせていなかったようであった。

「じゃあ、私が頂戴することにしましょう」  
「どうぞ、どうぞ。何だか辻村さんが、そう仰有るなんてことは、どうも信ぐられないのですが……」

嗜虐一辺倒の私が、ノムというのだから、彼にとっては、真実そう思われなかったのも無理はない。

「彼女のような、あどけなく、可愛い少女だからこそですよ。正直いって、神酒の旨さ



は分からないのです。でも、ノム行為によって、彼女の秘果に、じかに、この唇を当ててみたいですからね」

私の言葉に、彼は判っきり、ねたましげな表情をした。

私達のやりとりを、机上の少女は、黙って聞いていた。

「じゃあ、何か容器を探して参ります」

彼が立ち去ったあと、私は二人きりになれたのを幸いに、

「ヤスコ、私にも電話してくれないかなあ」

と早速、交渉にかかる

「気が向けばネ。私まだオジサマを判っきり知らないんだもの」

「だから電話して、度々会ってくれれば、私が理解出来ると思うよ」

私は、ここを先途と口説く。

「ええ、でも大学でしょう。それに、あたしの家、とっても厳格なのよ。オジサマの想像もつかぬくらい」

それが幻の少女の原因の一つなのでもあろうか。厳格だから、尚更、反発してみたくもなる、理由なき反抗の年頃なのか。

「無理にとは、いわない。気が向いた時で、いいんだよ」

「考えておきますわ」

確約はせず、少女は、何と思ったか、立ちはだかった筈、これみよがしに蒼丘を突き出し、よくみると言わんばかりの挑発的なポーズをとって、妖しく笑った。

中年の男心を攪拌し、取乱させるのが面白くて堪まらぬのだろうか。

彼が戻ってくる。手に、一枚のパットと土鍋を提げている。飛沫が、机上へ放散しないよう、パットの中へ土鍋を入れて、頃合の位置を計っておいた。

少女の表情は能面に戻り、突き出していた腰は、元の姿勢に還っている。

「いいんですか、コレ？」

「ええ、洗って返しても分かりませんが、あとで割っておきましょう。うどん屋に弁償すれば、いいんですから……」

と、屈託がない。

私という眼がなければ、彼は、土鍋一杯の薄色の、うどんだし汁に似た、少女の神酒をゆっくり味わいつつ、啜ったかも知れなかった。

「ここへ、していいの？」

途迷った表情で、机上で躊躇するヤスコはセンセに視線を投げた。

「ああ、いいとも。うまくコボさない様に頼むよ」

「オジサマ、どうしてノム？」

「少し腰をあげて、前へ突き出してくれよ。うまくうけるから……」

「着ている物にかかったって知らないわよ」

「脱ぐつもりだ」

「顔にかかるわよ」

「光栄の、いたりだ」

「変な人ばっかし……」

呟くようにいったヤスコ自身、与える行為はヘンなことと思っていないうところが可笑しかった。

このプレイ、与える側も、戴く方も、粋の道の一つの遊びである。

少女は土鍋に跨がる。

「始めて、いい？」

「ああ、いいとも。ただ、途中で一度、止められないかネ」

「どうにもトマラない、かも知れなくてよ」

「そこを何とか——」

「努力してみるわ」

奇妙な会話が終わって、一抹の真剣な空気が流れる。私はカメラ、彼はハミリを颯々と構えた。



ポツリと降り出した雨の滴りが忽ち、沛然たる夕立に変貌してゆくさまに、さも似て、ぐっと下腹に力をこめて、押し出そうとする腹腔の力は、太い一条の清冽な透明の管となつて、浅い土鍋に、はじけて、おびただしくしぶきを上げていた。

夢中で手繰るレバーの速さに、ストロボの

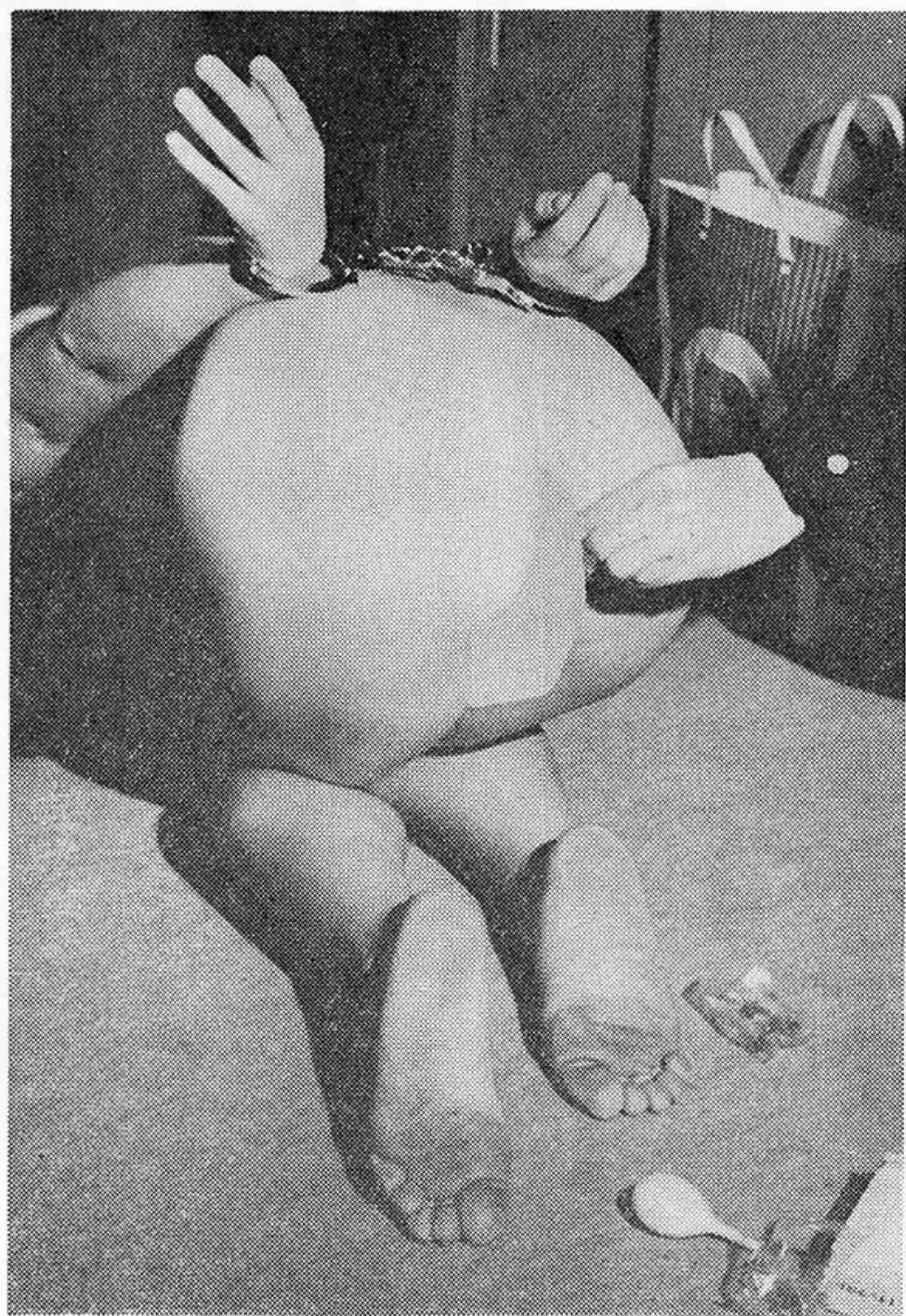
充電は、ついてゆけず、この決定的の瞬間に閃光は走らず、飛び飛びに、フィルムは、むなく、螢光の光の中に空を切っていた。

「一寸、待った、待った」

「ダメ、早くして」

「さあ、体を取り出して……」

腹腔と括約筋に、精一杯の圧力を与えて、



ヤスコは辛うじて、こらえて止める。

上半身裸の私は、カメラを投げ出すようにして、眼前咫尺の間に近々と顔を突き出す。

既に放射の勢いは弱まっていて、少女は、しぼり出すように腹部を蠕動させて力んだ。

チロチロと、残り少ないネクタールが、受ける私の口辺を伝わって、したたり落ちる。

何cc、いや何十ccかは、確かに私の口腔を満たしていった。

「ホホホ、オジサマの顔ったら……」

しずくを撒きちらしながら、少女は突然、静寂の空気を攪拌するかのように笑うと、何がおかしいのか、腰で加減をとって、ぐいぐいと蒼丘を突き出してくる。

口腔一杯に溜まったジュースを、ぐびりと食道におとし、私の唇は、まるでその挑戦に誘われるかの様に引き寄せらる。

嬌笑がピタリと止まり、この奔放な少女の唇から、愉悅に似た吐息が洩れ始める。

したたりおちる甘い蜜の味に、魂を天外に飛ばして、私はさながら吸血鬼のように、貪る。

チロチロと口辺を伝って、ジュースは私の鼻下を濡らしてゆく。最後の力を振り絞って少女はボーコーをエンプティにしようと努力



していた。それは精一杯の私に対する、サービスのつもりなのかも知れなかった。

仄温かい、出来たてのジュースの味にむせんで、少なくともその寸刻、私はすべての思考を停止させて、ひたすらに、願望に神経を集中させていた。

ジジジ……背後からパンして、そっと接近するハミリカメラの回転音を、私は心の片隅に意識しながら、このホロ苦く、やや鹹味からのかった、それでいて、濁りもなき無色に近い清澄のジュースに、心までもヒタヒタと濡らしていたのであった。

痺れるようなユニークな快感が、ジーンとどの奥につきささって、その興奮が、大脳神経に伝播してゆく。

ナマのジュースは、正直いって、さして旨いものとはいえない。それでいて、幻の少女ヤスコの現実のこの吐出のポーズに、私は、いつも小さくなって遠慮している、S性でないもう一匹の、心の中に巢喰うMのハイド氏を、珍しく欲ばせていた。

「終わったわ、オジサマ」

いつまでもヘバリついていた私に、ヤスコは腰を引いて、頭上で甘く囁いた。

「あたし、縛られてるもの、拭けないわ。セ

ンセ、拭いてエ」

甘えた声で、彼女は、私の背後の彼に声をかける。

「ああ、いいよ、いいよ」

出番が回ってきて、小西さんは、さも我意を得たという顔付きで、準備していた、柔らかい極上のペーパーを、とり出す。

「私が、やりましょうか」

内心そうしたいと願って、切り出すと、トンデモないという風に、彼は激しく首を振って、

「いえ、いえ、拭き馴れておりますから」

と、まるで宝物でも取り扱うかのように、慎重に、丁寧に、縛られたヤスコにペーパーを当てて拭っていた。

神酒と甘い蜜の混淆した、しめりを帯びたペーパーを彼は、そっとポケットに蔵める。

懼らくは、そのかぐわしい香に酔い痴れて噛みしめるのかも知れない。

「もういいでしょ、縄を解いて……」

ヤスコの眼が、私を見下ろしていった。

うなずいて、机上から抱き降ろすと、解いてゆく動作に、かこつけて、そっと背後から軽く抱きしめると、ヤスコは拒まず、じっと抱かれていた。黒髪に匂う、シャンプーの微

かな香りが、私の鼻腔を仄かに、くすぐって刺激した。

その時、少女はイチジクを

三個のみこむこと。呀々

クライマックス！

「センス、今日は、とっても嬉しい日なの。どうしてだか、分かる？」

「さあ、何かあったのかい、嬉しいことが」  
小西さんは、少女の言葉に首をかしげている。

「大学入試の発表があって、無事、うかったの。今朝のことよ。ホッとしたわ」

「そいつは、おめでとう。いいよ女子大生だね。早速、何かお祝いのプレゼントをしなくちゃ。それで、大学は、どこ？」

彼女は、京都では有名な、私大の名を挙げ文科系統であることを告げた。

「今夜は、家でそのお祝いをしてくれるの。だから、いい加減に帰らなくちゃ。合格したらホッとして、何だかセンスに会いたくなつたの。御免なさい、オジサマ。私達ばかりでハナシをして……」

「いいんだよ。そりゃ、よかったネ、合格おめでとう。私も何かお祝いしますよ」と私。



「そんなつもりで、いったんじゃないわ。気にしないでネ」

私にも声をかけ、少女は再び、小西さんへ向き直ると、

「今日、何故、センセに会いたかったか分かる？」

「試験がパスしてリラックスしたからだろ」

「それもあるけど、私、発表のことが気になつて、もう四日間もトイレに、行っていないの。だから、センセ、喜ぶと思って……」

私は内心ドキリとし、そして、呀っ！と思った。彼女は、あきらかに自ら排泄を露呈する願望を口にしてしているではないか。

排泄の行為を、彼の眼前で行なうというところが、最も喜ばれることだと、ヤスコは、さかしくも考えていたのだ。

最大の羞恥の、その異常な行為も、度重なる狎れが、彼女から、いつしか羞恥心を奪い去っていたのであろうか。

堆積する宿便が、溜まるだけ溜まり、いよいよどうにもならなくなった時、ヤスコは、彼の存在に想いを、はせるようである。

浣腸による排出のあとの、爽快感が、ヤスコにとっても、変型的なオナニーの感覚に、つながっているのではなからうか。

確かに少女は、あのグリセリン液が、ヌメヌメと、腸内に浸透してゆくときの感触を求めるようになっていたようである。

内潜する自虐的な願望が、独りひそかに浣腸するより、彼の手によって浣腸されることを希んでいるのであろう。

少女は、最高の羞恥のポーズをとり、覗かれ、みつめられて排泄する刹那、或は感覚的なオナニーは、その時、昇華して、オルガスムスの境地にひたっていたのかも知れない。

それは、彼の飼育による結果か、或は又、中学一年生よりオナニーを始めた、うそぶくヤスコの、時と処を得て、内潜していた自虐の願望を開花させたものか、それは分からない。現実の私にとって、燎らかに判断出来ることは、私という、初対面の第三者が、今ここにこうして存在しているにも関わらず、彼女自身の口から、婉曲に、浣腸と排泄を、願望したことであった。

彼を喜ばせようという言葉のウラに、彼女も又、秘かに、露出的な排泄を求めているという事実は紛れもない。

茲に到って、私の好色の探求心は、弥増して昂揚してゆく一方であった。

ヤスコの言葉に、予想にたがわず、彼の顔

面は、一瞬、異様なまでに輝いた。彼はもう喜びを隠そうとはしない。

スカトロロジイを発揮出来る時期が、彼女自身の言葉によって、忽ち到来したことが、彼にとっては、嬉しくて嬉しくて堪まらなかつたのであろう。

或は、私という人間の存在に遠慮し、羞恥に憚かつて、今日の幻の少女は、その行為を拒むかも知れぬと、彼は内心、危惧していたであろうだけに、目的を果たせる欲びは又、一入のようである。

「そいつは、よかった。ボクの為に、わざわざ溜めていてくれたんだネ」

「センセのためってわけでもないけど、近頃ずっと便秘し勝ちなの。ひょいとしたら、センセの浣腸を、期待しているのかも知れないなあ」

「いや、その通り。そんな時は、いつでも電話して、いらっしゃい。爽快感を味わわせてあげるからネ」

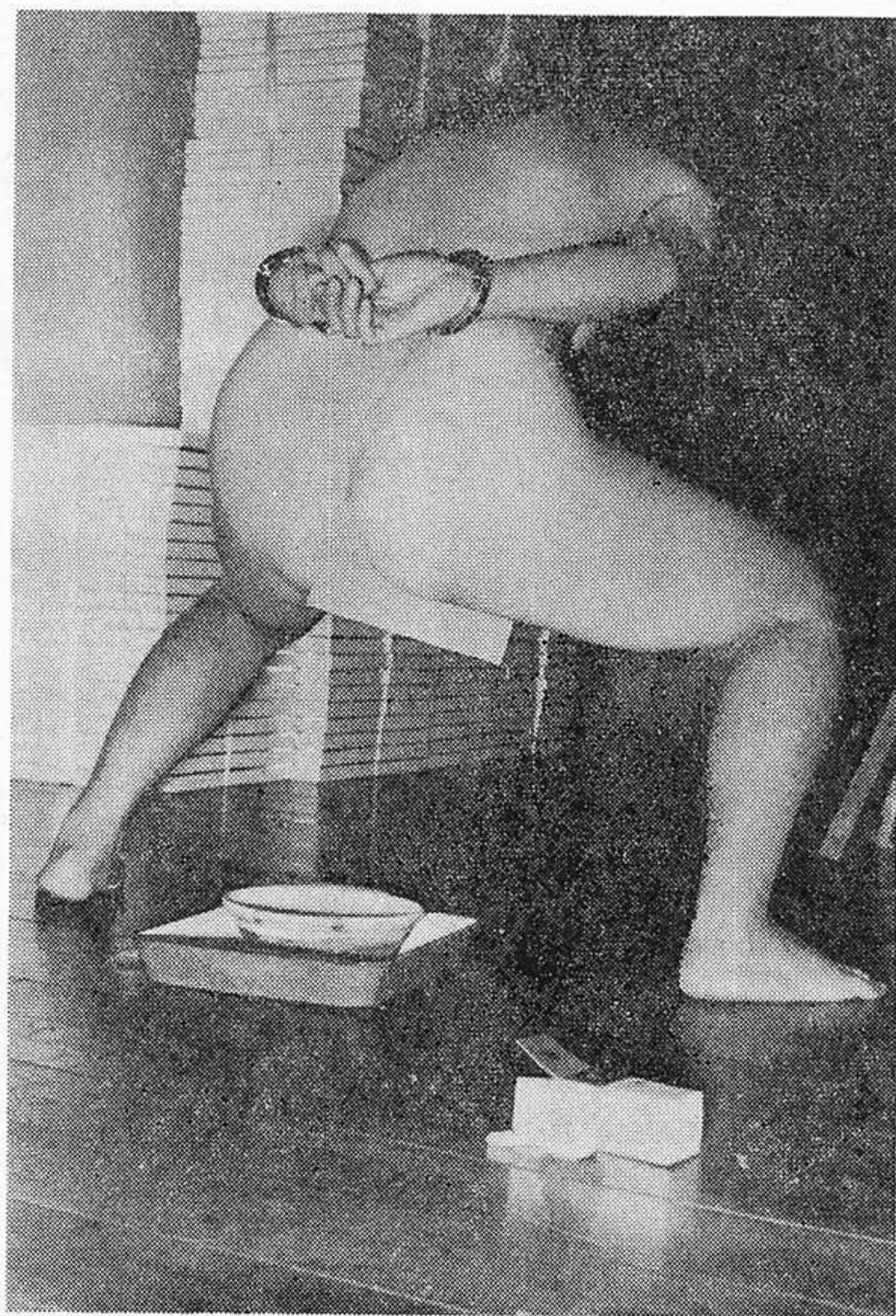
「浣腸って、くせになるのじゃないかしら。近頃になって、段々と、そんな傾向になってゆくよ。やはり、センセのセイかも知れないわ」

アルカイックに笑って、ヤスコの眼が、浣



腸の催促をしているかのように、彼を直視していた。

この際、彼は主人公であり、私はオブザーバーであった。ヤスコは、それを彼に求めていたからである。一面識の私と、排泄を通じて、互いの秘密を、わかちあう仲になった違いであった。



彼はイソイソと、洒落たブレザーを脱ぐと黒のカッター姿になって、傍の紙バッグから二箱のイチジク浣腸を、とり出す。一つの箱に、二個のイチジク浣腸が納められてある。

ビニール包みを破って、尖端のキャップを外すと、圧縮によって、グリセリン液は容易

に注入出来るよう改良されている。

排泄に、強烈な緊縛は、ふさわしくない。

さりとて、自由の女体に注入するのも、何となく曲がない。

咄嗟の思案をきめて、私は手錠をとり出し黙々と、ヤスコの両手を背後に回すと、ガチリ、ガチリと、両手首に手錠を嵌めた。

「おお、これは面白いですね。辻村さん、おそれ入りますが、少し撮っていただけないでしょうか」

彼は八ミリカメラを私に差し出す。彼の映画の中に、浣腸注入シーンのないのは、ヤスコ自身、やらない限り、注入して撮影するという、一人二役は出来なかったからであったようだ。

「いいですとも……あなたの顔は入っていいですね」

「ええ、構いません。御自由に、うつして下さい」

彼は、キャノンズームの、シングルエイトの操作を、簡単に説明してくれる。一昔も前八ミリカメラに熱をあげていた頃は、フィルムはダブルサイズであったが、カメラの操作は簡単である。問題は、その視角、アングルに、あるだけであった。



「じゃあ、ヤスコ。ここへ、四つ這いになるんだよ。手錠が嵌まっていちゃ、なりにくいかい」

「ウウン、大丈夫——。でも何だか囚人みたいだなあ」

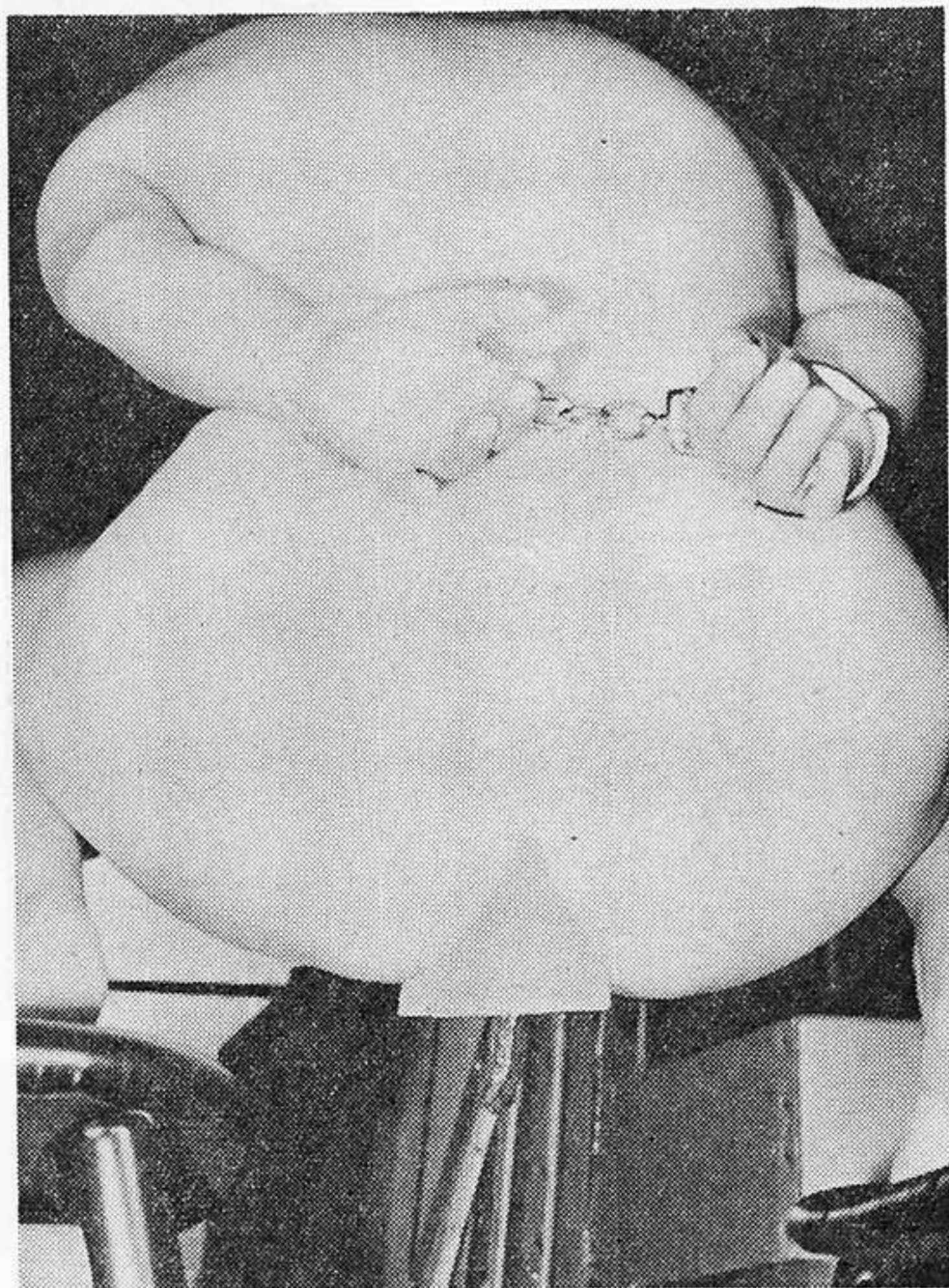
「ああ、そうだとも。ヤスコはボクの囚人だよ。自由を奪って、浣腸してやるのさ。一個にする？ それとも二個？」

「どちらでも、いいわ」

ヤスコは、イチジクに、かなり狎れているのか、平然とそう応えると、フワフワしたカーペットに両膝をつき、ジリジリと上体を落としていて、両肩がカーペットにつくと、ここちもち、浣腸をうけ易いように両足を開いた。

聖少女は消えて、そこには豊かに発育した、豊満な双臀が屹立し、彼女自身の口から下付という通り、成熟の娼婦を、ありありと感じさせるのであった。

悦樂のきわみに打ち震える彼の手に、ピンクのイチジク



浣腸が握られた。私の浣腸は、過去、カメラ的意識も手伝ってか、すべてが、イルリガートルや、エネマ、ポンプなどで行なってきたが、地味でも、カメラ的には冴えなくても、本来の意味からすれば、グリセリン液の、簡便で、手っ取り早い注入は、このオーソドックスな、イチジク浣腸が、目的達成には、最も早道であった。

キャップを外し、先端を上に向けて、二、三滴、出して先端を、ぬめらせ、彼は、手際よく、かたちのいい菊座に向け直す。指に力をこめて圧してゆく。忽ち一個のイチジクはペチャンと押しへしがれて、彼の膝許に、ころがる。矢継早に、もう一個を手にとると、続けて二発目を打ち込む。

ヤスコは微かに呻いた。いとおしむように、彼は、すべすべした、やわらかい双臀を愛撫する。

ありの尻を、私はシングルエイトに納めていた。イチジクを注入する刹那、三脚に固定した私のカメラのシャッターを押し、ハミリを駆使する両刀使いに、流石に頭は、カメラ撮影の方に切り換えられている。

注入する刹那の、握りしめるイチジクの感触に、彼は無上の喜びを覚えているのか、陶酔を泛かべるのであった。「ああ、おなかが痛くなっ



きたわ。早く準備して……」

既に、度々の行為で、ヤスコは心得ているのか、排泄の場の設置を彼に求めていた。

このソフトタッチのカーペットの上では、万一の汚染をおもんばかってか、排泄の場所は別に、しつらえるらしかった。

トイレへ駆け込めば、最も手っ取り早かったが、それでは、小西さんの、スカトロ趣味が、充分満足しなかったであろう。

彼は部屋の片隅の、邪魔にならぬところに置いておいた土鍋を、パットごと、とり上げると、半分ばかり溜まっているジュースを、部屋の中のタイルの洗面器へ、ザーッと無雑作に流し、蛇口をひねって、水で洗い流してこの部屋の奥につづく、作業場の方へ、先に立って入っていった。

板の間の中央に、先程のように、パットに土鍋を入れて置くと、

「じゃあ、移動しましょうか」

と、私に声をかけ、背後から抱えるようにしてヤスコを抱き起こすと、いたわるように肩を抱えて、次の部屋へと連れてゆく。

土鍋の上に跨がせて、彼は慌しく引返して、ハミリカメラを、とり上げる。

「もういい？　しても……」

「ああ、今日は、立った儘で、少し膝を落として、やってごらん」

いわれた通り、ヤスコは立ち姿の儘、腰を少し落として構えた。

私達は、決定的瞬間をとらえるべく、腹這いになって構えた。

ハミリカメラにとりつけた、フラッドランプが、あかるくヤスコの後ろ姿を、白く照らし出す。

両脚の疲れる不自然なポーズで、ヤスコは腹腔に力を入れて力んだ。

ポトポトと、グリセリン液が、鼠蹊を伝わって流れ、土鍋へと落下する。力む刹那に、思わず洩れたネクターが、細く一条、尾を曳いて受け皿の前方の板に潑ね返った。

「ダメ。いくら、きばっても、出えへんわ。どうしてかしら……」

ヤスコが、あきらめたような口調で、足を伸ばすと、振り返った。

「余程、ガンコな奴なんだな」

「精神的に、随分、緊張していた、せいかしらネ」

大学入試は、進学を希む少女にとっては、正に一大関心事である。全力をそれに傾注した結果、宿便は日に日に硬さをましてゆき、

石塊化しつつあったのではないか――。

「よし、じゃあ、もう一個、注入してあげよう。どんな頑固な奴でも、三発もぶち込めば大丈夫だよ。さあ、お尻をあげて、そこへ、しゃがんでごらん」

素直にうなずき、ヤスコは、じりじりと上体を前方へ傾けて、臀部を屹立させてゆく。

本番前のリハーサルは、長引けば長引くほど、本番が立派になるものである。浣腸という行為は、謂わば、排泄という本番の、リハーサルのようなものであった。

用意の浣腸液を手にして、圧縮し、手際よく注入する行為に、私は、早くも数度、閃光を走らせていた。

彼は事業所の方から、二脚の椅子を運び込んでくると、ポットを真中にして、椅子を正対させて並べた。

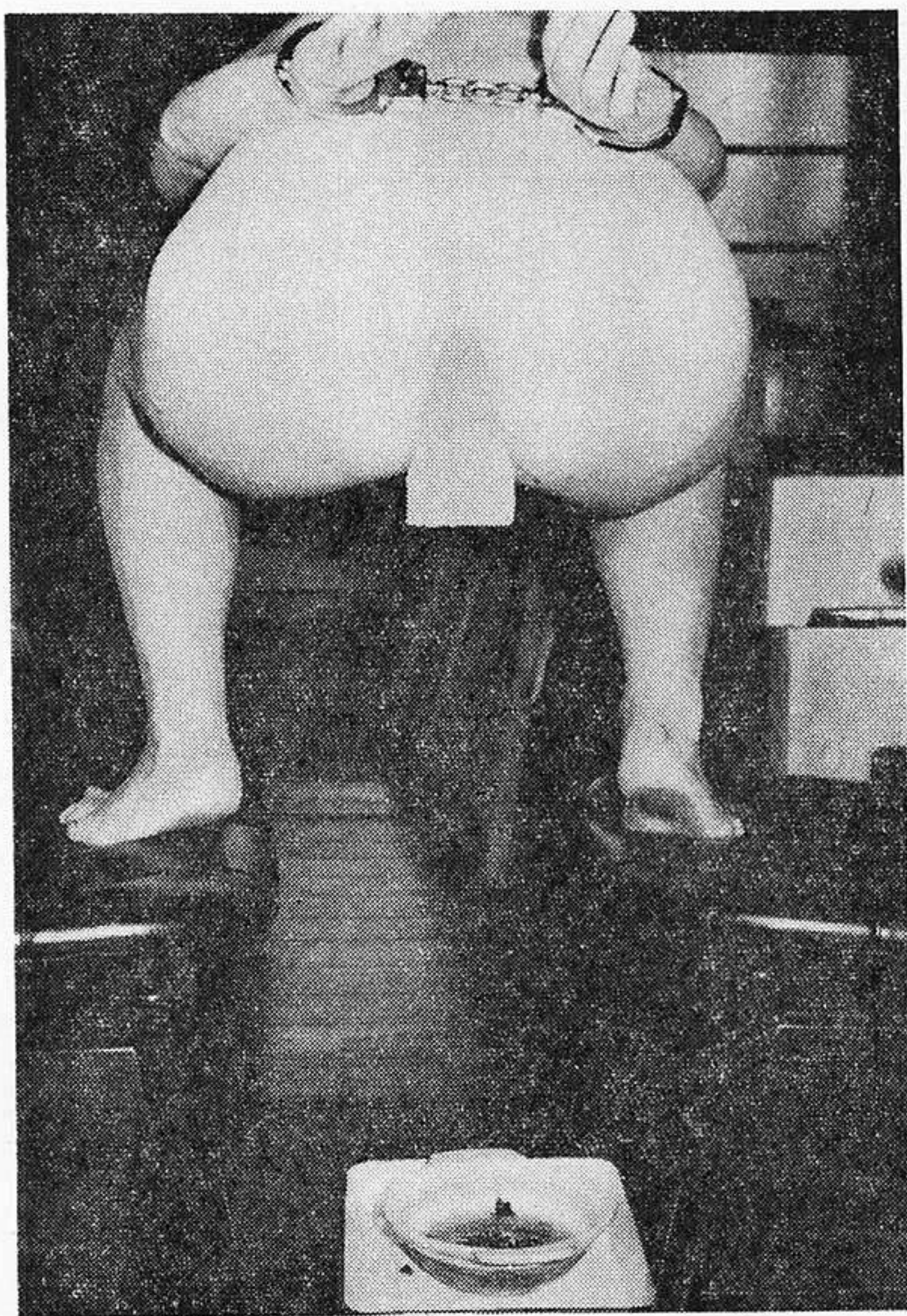
中腰では出るものも出ないと覚ってか、両脚を左右の椅子にかけさせて、しゃがませ、充分に下から観測する手筈を、ととのえるのであった。

彼は、ヤスコに、椅子に跨がるように命じる。意志を沮喪した人の如く、少女は易々とて言われる儘に跨がろうとし、両手の使えぬ不自由な体は、自己の意志で、両脚を左右



の椅子には、のぼらせることが、出来なかった。  
手を貸してやり、やっと両脚開いて、のっかった少女は、徐々に、深々と腰を落としてゆく。  
丸々とした豊かな臀部が、眩しく眼前に迫る。

「ああ、すぐくおなか痛い。もう出そうよ」「いいから、さあ、始めて……」  
うながす彼の声に、呻きが洩れる。  
スローモーションフィルムさながらに、蠕動を始める花の扉を妨害するかのように、黒塊が隠見し、しかしそれは徐々に、その姿を大きく現わしつづあった。



小さな胎児を生むに似た、陣痛めいた、生みの苦しみの呻きと力みが断続し、そいつがコロリと音を立てて落下した時、思わず私はホッとしたり、安堵の吐息を洩らしたのであった。

コロリ、又、コロリ……。黒光りする塊りが押し出されてゆくと、あとは、続々と後続部隊が、長く、又短く途切れて、土鍋の中へ珍味を盛り上げてゆくのであった。

「ああ、足に力が入っちゃって、すぐく疲れたわ。降りていい」

爽快感を満喫しながら、向こうをむいた俤ヤスコは、背後の私達に声をかける。

この見事なシーンを立て続けに撮り終え、私は存分に満喫していた。ストロボは、拙速の余り度々光らなかったが、彼のフラッドランプが、かなり光源を助けてくれているので幾分は軟調にでも撮れているに違いない。

カメラを措くと彼は、いち早くヤスコに手を貸して床へ降ろす。スカトロジックになって以来、私の出る幕は、すっかり閉ざされて彼の一人舞台であった。私は唯、この生々しい実況を、在りの俤とる、カメラマンに過ぎなかった。

ゆっくりと床にしゃがむと、ヤスコは、尚



も仕残した残滓を排除しにかかっていた。

この時も彼は、ヤスコの終焉の合図の声と共に、匂々にかけより、懇切丁寧に、幾度も幾度も拭うのであった。

最早、私の存在も、今の彼にとっては過重ではない。彼は自分のしたいように振舞い、私は私で、このめくらむような光景に、固唾をのみ込み、息を弾ませていたのである。

特有の臭気の漂いも、この幻の少女ヤスコの体内から排出されたものと思うと、何か特別の、かぐわしい香のようにも匂うのであった。

何処かへ羞恥をおき忘れてきたかの様に、難産を果たし終わったヤスコは、ポーカーフエイスで、土鍋をみつめていた。

オナニーの行為を、憚らず口にし、羞恥の極みの排泄のナマのシーンを堂々と披露して、尚、ヤスコはケロリとしている。

これは決して、ナウな現代娘の典型ではない。世にも稀有にして珍重すべき存在であった。それだけに、少女は一層、謎めき、幻の少女と感ずるのであった。

あどけなく、化粧ツギひとつない、稚々とした少女めいたヤスコのどこに、このような大胆奔放、放恣きわまる想念が、ひそんでい

るのであろうか。

私は唯々、憑かれたように、少女ヤスコの美しい裸像を見守るのみであった。

緊縛に協力はしてくれただけ  
れど——蛇足のこと。

小西さんの欲求の想念は、ここまでであった。堂々たるヤスコの排泄に取組んで、自己のスカトロロジーを満喫した彼は、既に充分にセックスを昇華させていた。

放尿と排泄——。この二つの、日常茶飯時に、若干のSMの味付けをした行為といえどもそれまでであるが、その日常茶飯事の行為が第三者の面前で行なわれることが、相手が少女の場合、いかに至難であるかは、関心を持つ同好の士なら、誰しも感じる事であろう。

私の心の中に燐<sup>くすぶ</sup>りつづける、今一つの欲求は、この少女を犇々と、からめてみたいことであつた。と共に、果たし得なかったビデオへの再度の挑戦である。

少女は、故意か、それとも、それが本来の気持なのか、私に対しては比較的、無関心のようであつた。

彼が伴ってきた第三者という程度の意識でそれが私でなくても、少女は同じように振舞

い、放尿と排泄を演じたことであらう。少女の胸中には、私への思惑よりも、センチと呼ぶ彼を欲ばせ、嗜好を満足させると共に、自己の秘められた自虐的な露出趣味をも併せて満たしているかのようであつた。

事実、土鍋を片付けてきた彼は、もうコト終わったかのように、ハミリカメラを格納し言外に、今日という日の終焉を、それとなく私に告げていた。

自己本位の、そうした無意識の行動が、私をムラムラとさせる。自ら、今日の私はオプザーバーだと告げておきながら、やはり彼は彼自身の性癖のみを、追究しているようである。広範なSM趣味の中の、それも一つのケースではあるが、私にとっては、このまま矛を納めることが、何となく不満に感じられたのであった。

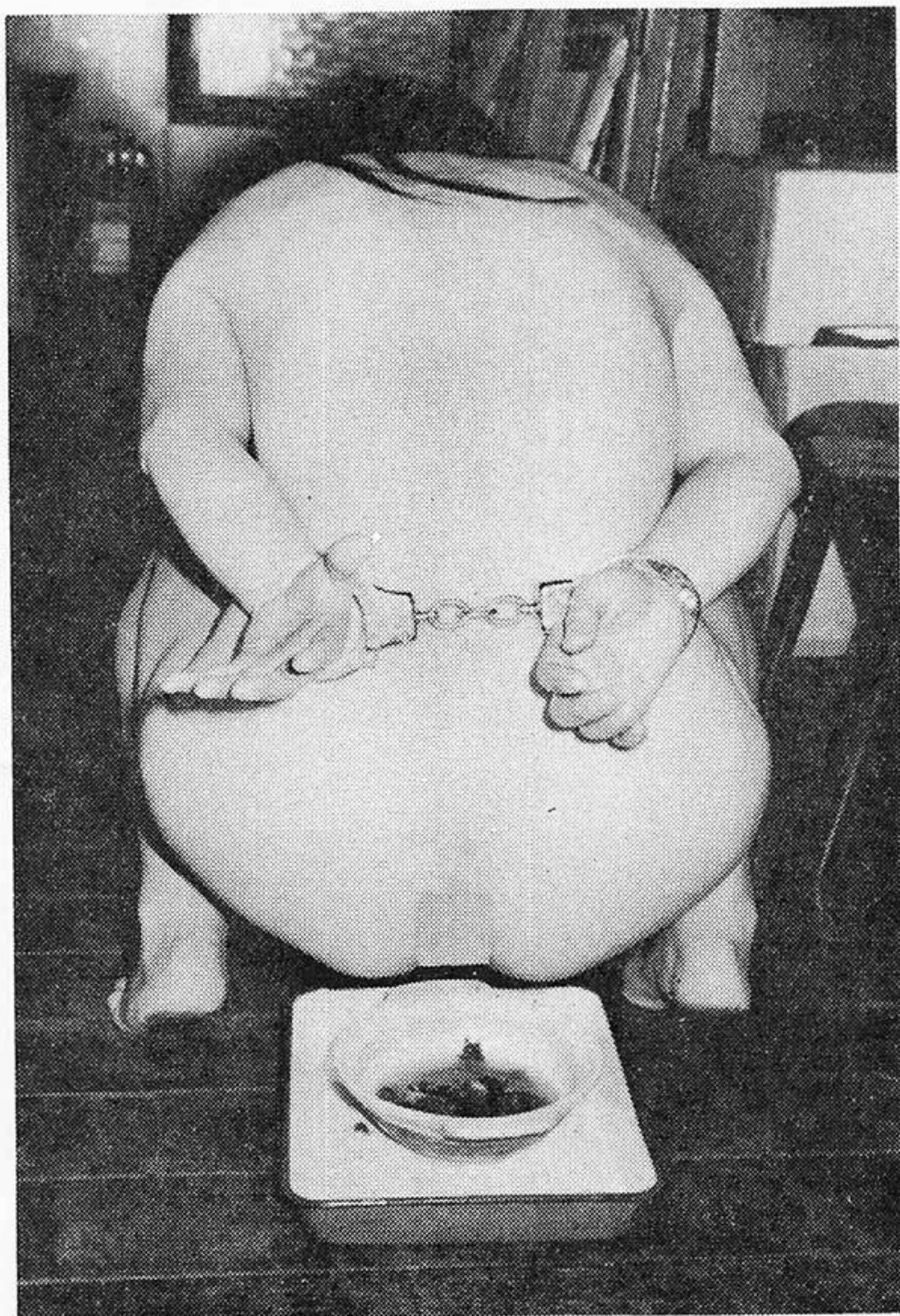
「では、そろそろ、緊縛を始めましょうか」  
私はわざと、二人の観念を無視して、むしろ意地悪さも手伝って、そう声をかける。果たして二人は、チラリと困惑の表情を泛かべて、顔を見合わせた。

小西さんにとっては、最大の山場である排泄行為の済んだあとは、緊縛のプレイなどもはや単なる蛇足に過ぎなかったのであろう



が、流石に、私の気持を忖度してか、  
「ヤスコ、協力してあげてくれる？」  
と情感の乏しい声で、少女に問いかける。  
「センセが、やれと命令するのなら仕方ない  
けど……」  
気の進まぬ言い方の少女は、言外に、私と  
は初対面だし、自由にされたくないという感

情が働いていた。今日のスポンサーが、私で  
あるということを、少女は彼から知らされて  
いなかったようである。  
「辻村さんは、緊縛の方のベテランなんだ。  
折角ボクが招いたのだから、一度だけ協力し  
てくれよ」  
「いいわ、センセが、そう仰有るのなら」



裸像の少女は、胸を両手で抱えて突っ立っ  
ていたが、意外にも、あっさりと許容した。  
「でも、出るものが出ちゃうと、私、何だか  
ホッとして疲れちゃった。一度だけよ」  
と、ダメを押すことを忘れない。

まるで、私が強要したような恰好になって  
しまったが、一方的に、少女ヤスコの方より  
電話がない限り、交流出来ぬ相手とあれば、  
この機会を見逃がすのも惜しく、今において  
は再び、嗜虐の欲望を果たすチャンスが、な  
いようにも思えるのであった。

半ば白けた空気の中で、私は縄をとり上げ  
ると、少女に向かっていった。

後手に、かなり強烈に縛り上げて、抱きか  
かえるようにして椅子に坐らせると、もう嗜  
虐の感情は齟齬をきたして、少女の気持を忖  
度する、いとまもなく、這二無二に両脚を開  
かせようとした。

「あッ、痛いわ。無理しないで……」

不安と危惧に襲われたのか、少女は叫ぶ。

「さあ、開くんだ、ぐっと大きく。股の力を  
抜くんだよ」

「いや、いや、乱暴しないで」

それに応えず、こじ開けるようにして一杯  
に開かせると、素早く椅子の肘掛けに、左右



の腿を、しっかりと縛りつけてゆく。

余った縄は、雁字搦目に、少女の胸や、腰に、蛇のように纏わりついていった。

微かな怒りが、能面の少女の頬をよぎる。

彼はハラハラした思いで、それでいて、言葉を挿し挟むのを遠慮して、私の粗々しい行動を、みつめていた。

「ハハ、思い切り愧かしい恰好をさせて、バツチリとカメラにとってやるからね」

いわずもがなの台詞が、ヤスコを不安に陥し入れてゆく。

いきり立つ私は、尚も嗜虐の手を加えるべく、柔らかい少女の、上下の唇に指をかけ、ぐいとこじあけて、縄をかませて、二重、三重に引き絞って、声を立てられぬよう猿轡をかませていった。

もう私の嗜虐心は、どうにも止まらない。更に追討ちをかけるように、眼隠しをするように双眸を中心に、ぐるぐる巻きに、顔面に縄を、かけてゆく。

可憐な少女の容貌は歪み、二重顎の白い肉が、苦しげにヒタヒタと、うごめいた。

無惨で、見事な、私の嗜虐欲を充分に満足させるポーズが、そこに展開されている。

夢中で、この不動のポーズを十数枚、とり

終わり、私は不躰けにも、M度測定の手を近付けてみた。そして、果たして予想通りの味わいを一杯に湛えていることに満足したのだった。

私は小西さんの意志を無視して、小型のバイブレーターを駆使することにした。

敏感に反応して、ヤスコは、大きく呻き、猿ぐつわの縄で遮断された唇が、ワナワナと震えた。

別の縄をとって胸の縄につなぎ、降下させてバイブに回し、脱落を防いで、後手の縄に連結させる。

鈍い羽虫に似た響きが、私の耳朵を刺激する。

紛れもなく恍惚が、少女に泛かんできた。縄でしめつけた口辺の奥から、喜悅の呻きが流れ、少女は身動きの出来ぬ緊縛の椅子の中で、精一杯に身悶えして、耐えようもなく全身に欲びを現わしていた。

その欲びは、既にすべてを知悉した悦樂の歓歡を、はらんでいた。

存分に甘い蜜を吸ったバイブを外すと私はいきなり跪き、オーラル・インターコースへの没入していった。

かぐわしい豊醇の旨酒に酔い痴れていた私

は、ありありと感じとった。緊縛の裸身から急に力の抜けてゆくのを――。

オナニーに耽溺し、唯今恋愛中の、ヤツと称する青年との交歓と比較して、この愛戯は少女に、どの様な感慨を、もたらしたことであろうか。

俄に縄目の苦痛が、そくそくと肌に感じられ始めたのか、少女は身をよじらせ、首を振って、しきりに苦悶を訴え始めた。縛った顔に苦痛の色が流れている。

少女の感情を無視して、SMのプレイを敢行した私を、彼は傍で、呆然とした面持ちで見守っていたが、ホーツと大きな吐息を洩らした。愛するペットを冒瀆されたような内心の憤懣と、美しく、あどけなく悶える少女の感情の起伏に、自己の欲情を抑圧しようとする、複雑な感情が交錯していたのか――。

存分にこころみて、ようやく縄を解いてゆくうちに、何故ともなく、私の心は、犯したという思いに、とり憑かれていた。

一挙に、少女を緊縛プレイの陶醉境へ走らせ乍らも、それは所詮、私の一方的な処置に過ぎない。

フォトを撮るだけなら、それもよからうが少女と私の間に、心の交流のない俚に、敢行



したことが、私に過誤を犯させたような、自己嫌悪の観念を抱かせていたのである。

心の空白を埋める、いとまもなく、少女は眉を、しかめて立ち上がると、チラリと私を一瞥し、黙って、部屋の片隅のロッカーを開いて、衣類を身に、つけ始めた。

強要のプレイのあとの、何かなし気拙い<sup>ます</sup>霧囲気の中で、私は気持を紛らわせるように、拡げ放しになっている不発のビデオ器具などを、片端しからゾロゾロ片付けてゆく。まるで、自分の犯した一方的なプレイ行為を、取り繕<sup>つくろ</sup>おうとでもするかのよう——。

この強行プレイによって、或は、もう二度と、この少女と出会う機会はあるまいと思えたりもする。

それを決定的にしたのは、私自身の蛇足の緊縛の唐突の行為と、思わず欲情の昂まる俤に走った、プレイの結果に起因するように思えるのであった。

かつての、ハント女性達との交流を思いうかべても、これ程の強烈な印象を与えた女性は少ない。

自らの官能のおもむく俤に、ハルンとコートの巧まざる演出を試みたこと自体に、私は満足しなければ、いけなかったようである。

緊縛とプレイの蛇足を求めて、反って幻の少女は、私の手から、判っきり隔たっていたように思われてならない。少女のプスとした、感情を殺した無言の抵抗が、じかに私の肌に突きささる。

「もう、帰っていい？」

元の可愛い、ナウなスタイルに還元した少女は、そんな私の心の葛藤など、何処吹く風といったポーカーフェイスで、刺すような眸を、私達に向けた。

「長い間ひきとめて御免よ。車で送ってゆくから……」と彼。

「いいの、いいの。タクシーを呼んでよ、センセエ」

未だ整頓中の私をみて、そういったのか、それとも故意に私を避けようとしてか。

ヤスコは、アーアと、小さくノビをして、ヤレヤレ疲れたといった表情で、大きなソファアに深々と凭れ込んだ。

片付けの手をとめて、黙って少女に近づく私——。

少女に、ソツと過分の報酬を握らせ、アラッという意外の顔に視線を合わさず戻ると、バッグにカメラを押し込んでゆく。

少女は、今日のスポンサーが私であるとい

うことを、その刹那、知ったようであった。タクシーが表にきたと、ガードマンが、ビルの内線電話で告げてくれる。

「じゃあ又ね。センセ、さようなら」立ち上がった少女は、フト振り返って、私に向かい、

「オジサマ、有難う」

一言の爽やかな声をあとに残して、ヒラリと身を翻すと、ドアの外に消えた。せめて、ビルの入口まで送りたい衝動を、ぐっと抑えて、私はサヨナラも言えずに、独り部屋に残った。

彼は慌しく、少女の後を追ってゆく。

未練心で窓を開くと、少女の姿は、まだ見えない。

身を乗り出して車を見守る私——。

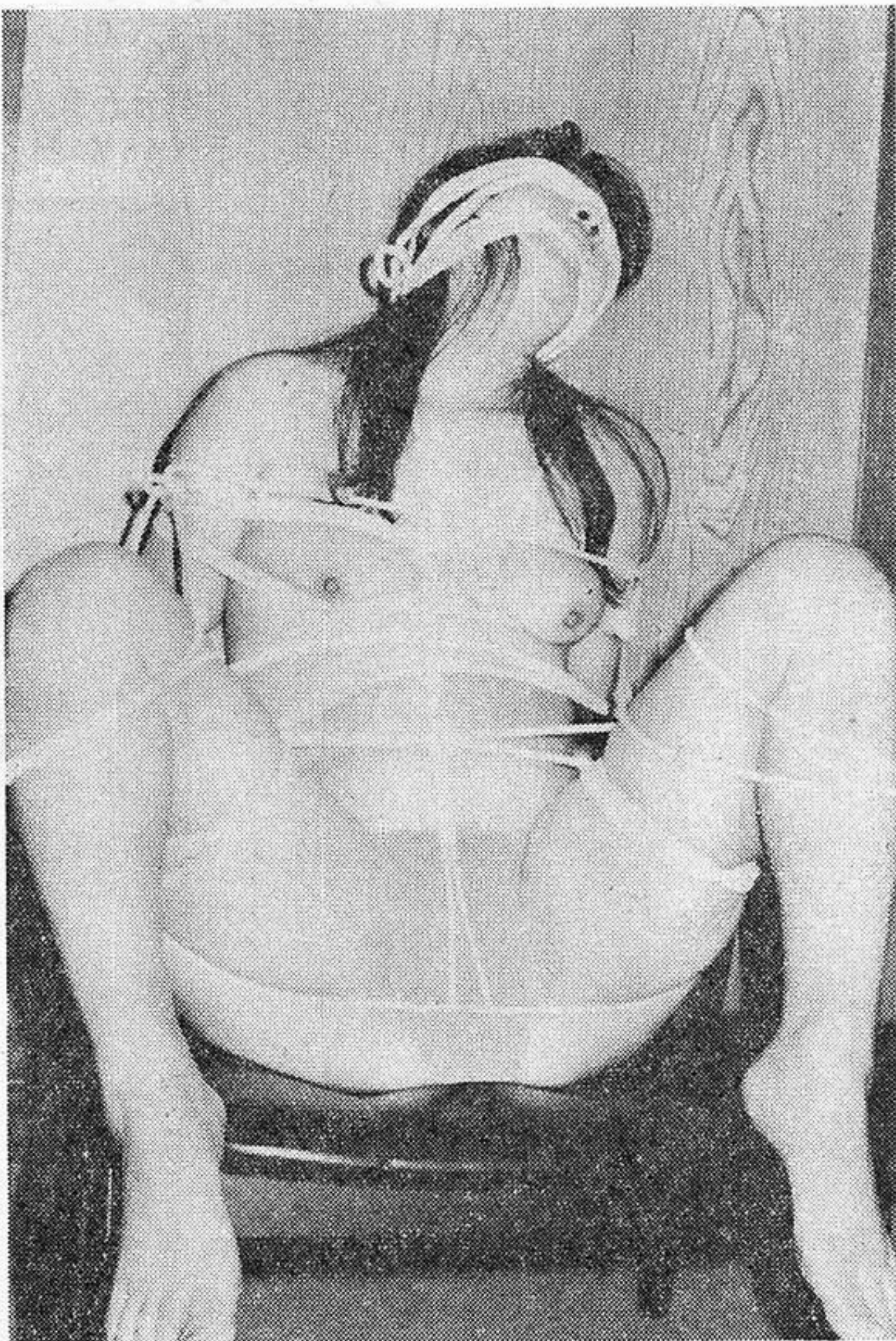
並んで、彼と少女の姿が舗道に現われ、二言、三言、何か言葉を交わしたあと、ヤスコはチラリとビルを見上げ、窓に私を発見して白い手を振って別れのサインを送った。

それに応じて、私も大きく、二度、三度、下へ向かって、円弧を描いて、手を振り返していた。

車と共に、幻の少女は去っていった。

じっと佇む彼——。





懼らくは、もう相まみえることもないであろう。

そんな感慨が胸をつらぬき、心の交流のなかった不覚さに、我知らず淡い悔いが、つき上げてくるのであった。

更に蛇足をつけ加えるならば、そんな私の

絶望的な観念を打ち破って、その翌日の午下が、それこそ思いがけなくも、幻の少女ヤスコから、直接、私に電話が、かかってきたのであった。

年甲斐もなく、ドキドキと俄に高鳴り、弾む心に、ヤスコの、屈託のない明るい声が響いてきた。

「強い力で、自分の思った通り、あんなことをなさるオジサマが好き——」

「怒っていたのじゃなかったの？」

「だったら電話なんかしないわ」

「でも、あの時は……」

「センスの手前、嬉しそうにも出来ないわ。あたしって、嬉しい時は、反ってツンとしているのよ。本当はそうされてみたかったの。ヘンな子でしょ、私って……」

少女は愉しそうに笑う。

「安心したよ」

「フッフフ……」

「又、会ってくれるんだネ」

「いいわ、今度はビデオしくじらないでネ。

関係ない人に当たり散らすの、よくないわ。

私ヒマが出来た時、又、電話するわ。だけど

大学一回生。一寸、忙しくなるかも知れない

な。でも、オジサマに興味がおりなら、そ

の時にはウンと溜めておくわ。イチジク忘れ

ないでね。じゃあバイバイ」

私はポカンとして、いきなり一方的に、プツンときれた受話器を、いつまでも、いつまでも、かたく握りしめていた。



# 奇譚クラブ

## それは女体への愧らい

—— 辻村さんをたたえる ——

きく・かおる（神戸）



ある夜の電話で、

彼女が一流化粧品会社  
のチャームガール  
になったことを知っ  
たが、私は胸底深く  
そのことを秘めて、誰にも話さな  
かった。悠紀子の幸せのために。

昭和三十七年度は毎号のように  
梨花悠紀子の艶姿、美貌のフォト  
がグラビアをうめつくしていた。  
しかし、それは既に過去のもので  
あった。彼女はモデル、女性の傷  
痕を、ひた隠しにかくして、その  
過去の実績から逃がれようと必死  
の努力を試みていたのである。私  
が点じた一つの火に、梨花は傷つ  
き喘いでいた。——昭和四十五年

十二月号——

辻村隆さんは、「奇譚クラブ」  
の『星』であった。奇巧の辻村さ  
んであり、それ以外に姿を見せぬ  
律義な辻村さんであった。

私をはじめて辻村さんの文にふ  
れたのは、昭和三十六年の奇譚ク  
ラブ三月号であった。この号は通  
巻第百五十一号である。この世界  
にあって、また、この時代におい  
て、百五十冊は、おそろしいぐら  
いの膨大な数でもある。

「鑑賞用緊縛女性」

それは梨花悠紀子さんのことで  
ある。古い読者には梨花悠紀子、  
大塚啓子、絹川文代の三人の名前  
は、何を与えるか。ひとりひとり

強く個性を主張していたが、その  
中でも、私には梨花悠紀子さんの  
登場——また、それは「出会い」  
でもあったが——は強い印象を与  
えた。

梨花さんとは何か。辻村さんに  
とって、梨花さんを語ることは、  
どういう意味をもつのだろうか。

——お定まりのここはホテル。和  
室の広い間。部屋にまで、湯気は  
もれて、その桃色の湯気の中に、  
彼女の桃色の肌があった。凝脂の  
ういた体を弾ませて彼女は浴室か  
ら現われる。

濡れた肩、むっちりとし盛り上  
った形のよい乳房——しなやかに  
伸びた腕、四肢——。

鑑賞用女性は、小輩の視線を、  
ものおじせず、すつくとそこに均  
斉のとれた女体を曝している。き  
ゅっと、くびれ込んだウエストか  
ら甘美な線を引いて流れる下半身  
……。 (以上、同、三月号より)

これが彼女である。どこにでも  
あるスタイルのよい女の子にすぎ  
ない。しかし、ほんとうに、そう  
であろうか。私にとっては、そう  
は思えない。同じように、辻村さ  
んにとっては、この女性とは、ど  
こにでもいるといった女性のひとり  
では決してない。彼女を得ること

が困難であったからか？ 決して  
そうではない。

十二月二十四日、クリスマスイ  
ブの夜のできごとであった。某デ  
パートのレジスター係をしていた  
彼女との、ひさしぶりのデートの  
日でもあった。

この日、辻村さんは、いつもの  
だんだらをやめて、真新しい白い  
キユツと堅くしまったロープを用  
意した。この時の縛りは、「先ず  
両手を後で縛って胸と腰に一回り  
して、床柱に括りつける立ちポー  
ズ。ついで太腿をも床柱に緊縛し  
て、体を前にこころもち倒す」ポ  
ーズ。それから、床柱から解き放  
し、首を床柱に巻きつけたポーズ  
紫色のシュミーズを剥ぎとったヌ  
ードのポーズ。また「胸と腰をき  
つくしめて二の腕を上げさせ、韓  
々と肉に喰い込む程に縛り上げた  
ポーズ」

そういった姿体を二時間あまり  
とった。

その後、辻村さんは梨花さんを  
つれてミナミのダンスホール「富  
士」で彼女と二人でおどる。この  
前に編集長の箕田さんと彼女は会  
っている。これも辻村さんの計画  
でもあった。辻村さんは、これら  
の行動を通じて何を考えていたの



だろうか。

彼女は、有馬稲子さんと、芦川いづみさんをたして、二で割ったような人だと、箕田さんが言ったと、辻村さんは梨花さんに言う。「ウワーツ、随分ヒトを莫迦にしているわ。この私が……、いやぁーだ」悠紀子さんは大きな声でコロコロ笑った。「だって、僕もそう思ってるんだぜ……」

○ 「僕もそう思っている」それが辻村さんの本音ではないか。社交的辞令と、他の人は、とるかもしれない。しかし私には、辻村さんがそういうやさしさ——女性に対する愧らい——を多分にもっているように思える。

奇譚クラブのもつ世界と、そういうやさしさと、どう共通するのか。私には、それが独占欲というかたちに、あらわれているというように思える。

愛するものを、自分のものにしたい。そして、そのもの全部をもちたい。知りたいという気持が、女体を緊縛して全部を知りたい、とさせるのではないか。

何よりそれを雄弁に物語るのは辻村さんの文章だ。彼は、この時の文章に、全て、「悠紀子さん」

と彼女を、「さん」づけで呼んでいる。「小輩は固い唾をのみ込んで」とか、「小輩は心にもない偽りを云った。臆て誌上に現われる彼女のグラビア写真を考えて、この時小輩の胸はチクリと、痛んだ」等々。

そして、彼女がグラビアにあらわれることによつて、彼女の将来をも、ひんま

げてしまうかもしれない一つの力の出現をも予想しつつ、自らが発見し、飼育しはじめた（もちろん伊吹真砂子さんの協力があつたのこともあろうが）緊縛女性第一号の梨花悠紀子さんを他の男性諸氏に誇りたいとする（これまた独占欲のうらがえしでもあるが）男性のひとりでも、あつたのであろうか。

そして、その不安さの故に、わたしは辻村さんの文章に強くひかれる。カメラハントの中において



台湾女性の写真撮影における辻村さんの決断に、喝采をおくる。

辻村さんにとって、梨花悠紀子さん（小生はなぜか由紀子さんと書きたくなる）は何であつたか。

そしてまた過去の彼女と、現在奇譚クラブを飾っている多くの女性との差異は何であるのか。小生は前田真知子さんが、ちょっと悠紀子さんにムードが似ていると思うが、梨花さんの方が、どの時期をとっても、すぐれていたと思えてならない。猪づりにしても、写真撮影風景にしても（昭和三十六年

三月号、鑑賞用の像、左ページは名作である。最近号に、この右ページが復刻された）、彼女は、その豊かさ、輝きにおいて、現代を拒絶している。

それ故に、彼女を純白の処女から、ここまで飼育した辻村隆さんの栄光は、きえることがない。また、それ故に辻村さんのもつ悲しみが、彼の文章から、うかがい知れる事によつて彼はまた偉大である。

ぎらぎらした世界なら他誌にまかせておけばよい。いぶし銀のような、そういう地道な文章の世界（これが本来の「緊縛美文」——といえるのではないか）こそ、われらが、めざす世界ではないか。

辻村隆さんの文章に母を感じ、塚本鉄三さんの文章に父を感じる時がある。

これは私だけか。

カメラハント完結を祝して、今後の健筆を期待して、辻村さん——私の感じる辻村さんを——書き誌した。

昭和四十八年三月二十八日。



△編集部への通信▽

## 玉木章子取材者立候補の弁

吉田遥

長い灰色の冬も終わり、漸く桃の咲き初める頃となりましたが、貴誌益々御清栄の段、お慶び申し上げます。

昨日、行きつけの書店で、四月号を買い求めましたところ、小生の拙い創作が懸賞入選作として採り上げられていましたので、まさかと思っていたことでもあり、非常に嬉しく、選出の労をとられた編集者の方々に、心から御礼申し上げます。次第です。

その上、執筆中には気付かなかった舌足らずの個所や、ワルノリし過ぎた点などに、適切な訂正補筆を加えて頂き、まことに有難うございました。それらの点については、貴誌のこれ迄の編集方針なども思い併せて、ひとつひとつ、思い当たり、色々と反省させられたことでした。

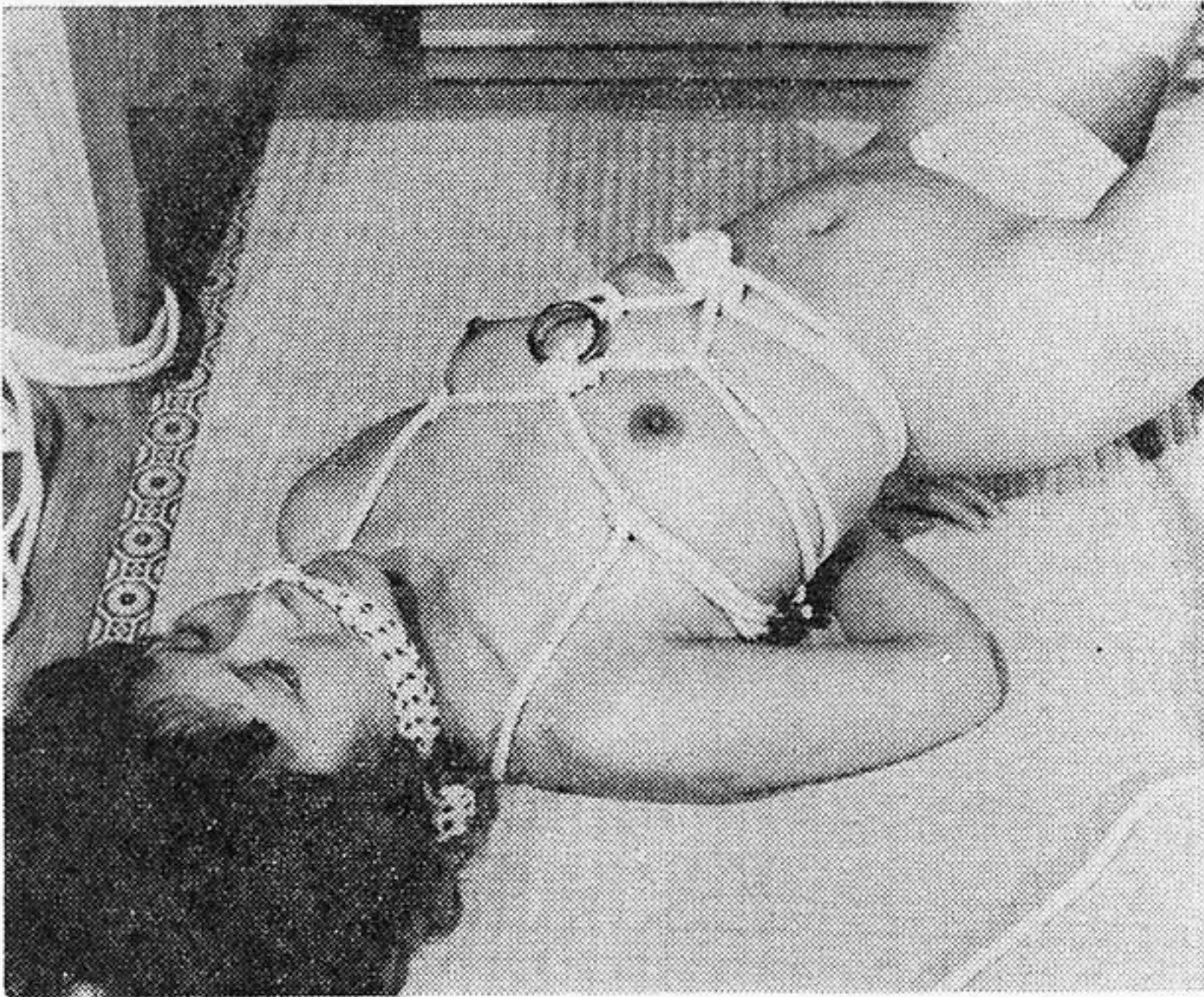
未熟な筆ながら、今後も書きたい意欲は旺盛ですし、プランや材料も少しは温めているものも有りますので、そのうちに、また投稿させて頂くつもりです。単なる売

場の羅列ではなく、物語性や状況の構成を、しっかりまとめて、でき得れば、その状況にふさわしいムード（ある時はロ

マンティックに、ある時は、スリリングに）を表現することにより、短篇の味み、たいなものをみせれば、などと望みばかり高いのですが……追伸。

最近、貴誌に登場された玉木章子さんの都会的なセンスの美しさに、小生は、とても心惹かれていて一人なのですが、四月号の「編集部だより」の最後に「どなたか取材してみませんか」とあるのを見て、厚顔を顧みず取材者として立候補する次第です。

今までに縛った女



性は六名程です。妻は理解はありますが、性向に欠けています。

(一)、行なったプレイの内容は、縛り上げての羞恥責め、羽毛などでの擦り責め、ベルトでの鞭打ち、ローソク責め、バイブ責め等の正統的？なもので、苦痛を伴う責めの合間には、なるべく快感を刺

戟する責めをはさんで、女体への不必要な痛めつけを、行なわないようにしています。

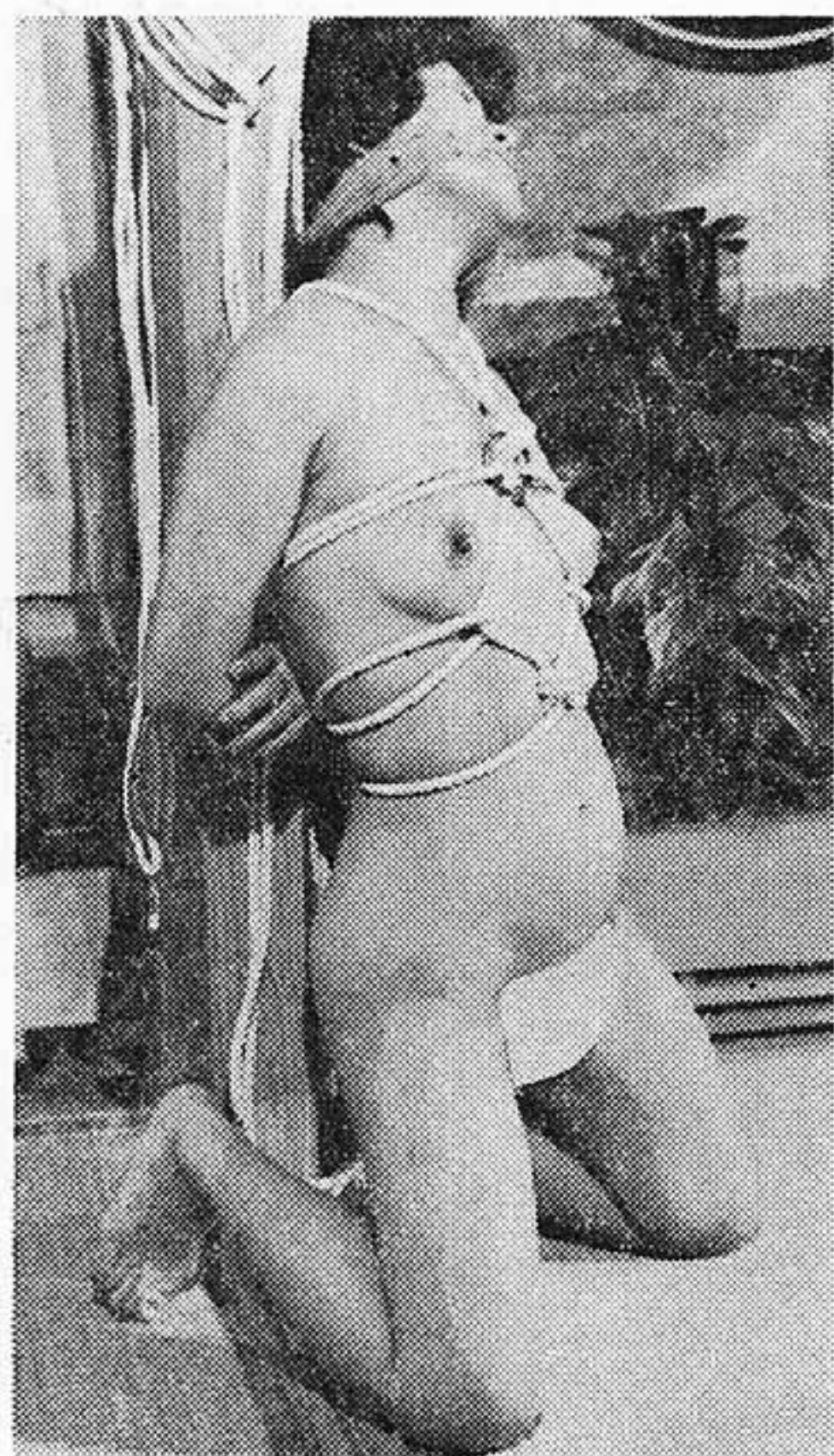
(二)、性向はSとフェチの混合です。幼児期に、『万寿姫』の絵本の中で、唐系が頼朝の家来に土牢へ引き立てられて行く場面を見て縛られた女の美しさに魅せられて以来のことです。

(三)、血は嫌いです。小生が惹かれるのは惨めな女の美しさであって、残酷性そのものではありません。常に女性の肉体が傷つかないよう、プレイ中は女性の肉体的限界を念頭に、オーバーヒートは絶対、避けるよう注意します。プレイを離れた場合は、当然の事ながら、相手の人格、人間性等を、あくまで大切にし、プライベートな生活に立ち入る事は厳に、つつしむようにします。

(四)、SEXの強要は、しません。

(五)、ルポの文章については、とても辻村氏や塚本氏のように華麗で迫力のある文は書けないかも知れませんが、私なりに努力したス





タイルの取材報告書を作りたいと思います。

(六)、写真は、これも前記の先生方のように行かないと思います。昔、天体写真等を撮ったりしていましたが、カメラアングルや構図も人並みには、いけるといいます。が、おそらく最初は、ついついプレイに熱中してしまい、緊張と感激のあまり、広角の甘いピントのままシャッターを切ったりする懸念は充分あります。これはもう下手な鉄砲を数打つ以外に、なさそうです。

(七)、プレイの小道具。縄は四色程、犬の首輪を、大小数本、手錠

一、ビニールレザー嵌口具一、鎖クリスマス用キャンドル、孔省の羽根、革ベルト、バイブレーター(残念乍ら、砲弾型ではありません)猿轡用の柔らかい布少々。浣腸は今までの相手に、その性向の女性がいなかったので、やっていませんが、研究心は大いにあります。

(八)、車は普通車のロメバンですが、野外撮影の際などは、用具の積載、リヤシートを倒してマットレスを置けば休息用にも非常に便利です。勿論、ボディに文字等は一切、書いてありませんので、どこへでも、気兼ねなく入って行けます。

## SMと……

## …フェチマニア

## ……の雑感

西原 浩

近頃は、皮、アメゴムのフェチマニアが多くなってきた。

メンス用ゴム薄物の臭いが、たまらなく性感を刺激するようである。外国では、ガータ復活のきざしが見えはじめ流行する気配を見せているので、真似好きの日本女性も、下着のチラリズムとしてのアクセサリーとして付ける日が、そう遠くないように思える。

吊る靴下止め用としての必要品が女性の魅力発場の小道具としての扱い方になるとは、この世界は何が流行するか、私は喜ばしいことだと賛成である。

私のような中年男性には、やはりパンストの魅力より、パンストの上に付けてガータをぶらつかせてミニの下よりのチラリズムの方がよいと思う。赤、青、黄と色とりどりのガータベルトの見えかくれする様は、かなりエロチック的でSM的気分にもとりつかれる。

時期が熟せば、これをSMプレイにとり入れてやってみたい。

それと異なるが、男性が女性の下着を集め下着プレイをするM的な男性が多くなった。これも流行の一種かと思うが今後コンスタントに続くことだろう。

それも女性の使用後の臭い付きが好まれ、オナニーというプレイに走る男が益々多くなっていることは、個人の自由だが、盗むという行為には私は抵抗を感ずる。この様なM的な男性は異性とのセックスよりも、異性が身に付けているものに愛着を覚え、性を満足させる。

これは男女共、異性の肌にふれて下着の性器周辺を中心とした臭気により、たまらない性的興奮を覚え、いろんな女性の汚れたパンティを蒐集したいという願望につながる。

男性の女性化、女装化、M願望が凄く多くなってきたことは、化粧品複雑な匂いとミックスしたこの種の倒錯化が益々エスカレートして、SM方式によるプレイが一世を風靡しそうである。



△サロン落穂抄▽Ⅱ(三)

# 屋 根 裏 棲 息 記

塚 本 鉄 三

## 娼婦ヤエ子の深情

人間には放浪癖というものが、もともとあるらしい。最近、山頭火の行状が見直されてきたのも、その一つの現われだろう。永六輔が雲水に身をやつして托鉢している様子を、テレビのカメラが追っていたが、芭蕉並みに一生の旅を棲家として暮すのも、我々の永遠の憧れでもあらう。一面、マイホームの温い安定を望みながらも、反面、浮草の如き放浪の生活にも又、魅力があるものだ。

私は下町の或パチンコ屋で一人の女と知り合った。私から誘ったのではない。女の方から、肘で私の脇腹をつついてきたのだ。余程飢えた助平面に見えたのだろう。おきまりのように、うす汚れた路地裏の小さな連れ込み旅館に、しけ込んだ。

年も余り若くなく、美人とも見えな、この娼婦との初対面で、物のハズミというものは不思議な

もので、私はなんということはないに、クニリングスをしてしまった。顔をのけぞらして、喘ぎなが

ら、その女は言った。  
「私のような女に、そんなことをするなんて、あんた、よっぽど、あたいに惚れとんのね」  
私も、ゆきがかり上、答えた。  
「そうさ、一目惚れしたのだよ。こんなに好きな女って、出会わなかったな」  
私の口から殺し文句がポンポン

と飛び出した。その方は、お手のものだった。

激情のひとつきが終わると、女は言った。

「あた、ヤエ子っていうの。この辺のパチンコ屋にいるから、また会ってネ。こんなお金なんて、もらえないわ」

さっき、私からまきあげた紙幣を、しわくちゃに丸めて、私の手に握らせた。

「俺も好きな女に会えて、凄く満足した。倍も三倍も値うちあったよ」

一旦、受取った金を倍にして、女の胸もとに押し込んでおいてから外へ出た。

お客をくわえ込んでいない限りヤエコはその街の一角、十数軒あるパチンコ店のどこかにいた。それから以後、ヤエ子は商売抜きだといって、私からは絶対に金を取ろうとはしなかった。それをいいことに、私はヤエ子との無銭プレイを続けていた。彼女に会いたいと思えば、パチンコ屋へ行けばよかった。パチンコ屋にいない時、角のタコ焼屋のオバさんに聞けば教えてくれた。

営業中か、映画館か、買物か、或は、朋輩との、お喋りか、その







いずれかだった。

数回、会った頃、ヤエ子が「あたいの部屋へ来ない。そりゃ汚いとこだけど……」と言って私を誘った。そこは、物置の屋根裏で、彼女が無断で、もぐり込んでいるドヤだった。

商品の置場に使っているらしく表は鉄のシャッターが降りていたが、裏に雨戸一枚が、はずれるようになっている、彼女はそこから出入りしているのだった。そこは軒ぎりぎりに、モルタル塗りのア

パートが建っていて、肥った私なんか、お腹をすぼめないと通れぬくらいの狭い、すき間であった。

雨戸をはずして中へ入ると、ヤエ子は、梯子をかけて、その倉庫の屋根裏へ上がった。そこは十帖ほどの板の間で、くたびれた綿の毛布が一枚敷いてあった。明り通りの窓が一つあるきりで、薄暗かったが、目が馴れてくると、片隅に蒲団が積んであるのが見えた。「汚いところですよ。ここが私のネグラなの。今、お湯沸かして、お

茶いれるわ」

コンセントに電熱をさし込んで薬缶をのせた。一通りの世帯道具も運び込んである。水は小さなカメに入れて貯えてある。トイレは大の方は近くの公衆便所へ行くが小の方はここへするのよ。といって、ポリバケツを見せた。明り通りの窓を開けると、そこは屋根であった。周囲はコンクリートの壁か、屋根また屋根である。

液体は専ら、その屋根から流すらしい。屋根瓦の一部に、それらしい白い筋がついている。誰も、こんな物置の屋根裏に、人が住みついていよう等は夢にも思っていない。ヤエ子は、ここへ上がってしまふと梯子を上へ引きあげてしまふので、下からは、少しもわからないのである。

私は、それから時折、この屋根裏の隠れ家を訪れては、ヤエ子との爛れた愛欲の、ひとときを持つた。彼女は商売柄ソノ方のテクニクはうまく、私を心から楽しませてくれた。ヤエ子が商売に行っている時なんかは、私は一人で蒲団にもぐり込み、スタンドの灯で文庫本を読み耽ったりした。彼女が帰ってきて梯子のないのに気づくと、「あなたなの？」と、忍びや

かに下から声を掛けた。

私は梯子を下ろして彼女を迎えようと、まだお客の肌のぬくもりの抜け切らないヤエ子を裸にして責めた。「この身体で他の男に抱かれてきたな。こいつ奴こいつ奴」ヤエ子は悲しそうな顔をして言った。「だって、商売だもん、仕方ないわ。でも、お客には心だけは許さないつもりよ」「そんなことわかるもんか。この売女、この助平女」私は柄にもなく、悪党ぶって女の頬を殴ったりした。

そんなあとでは、いつもよりは激しい愛欲の渦が巻いた。私はヤエ子を言葉ではよく責めたが、縛ったことは一度もなかった。

明り通りの窓に激しく雨の吹きつける日だった。こんな日は商売に行く気はしないと一言って一日中ヤエ子は屋根裏にいた。私も昨日の午後から、ずっと煎餅蒲団にくるまって寝そべっていた。幾度となく彼女の身体を求めて飽きなかったが満足もしなかった。

ポリバケツの中へ排尿するヤエ子をスタンドで照らしてから「臭いから、早く捨てんか」と怒鳴った。女は雨の吹き込む窓から液体を屋根の上へ流した。

「おい、タバコ買ってきてくれ」



私は不貞くされたように言った。

「煙草だったら、あたいの、のみさしで悪いけど、あるよ」「いやのみさしは嫌だ。新しいハイライトがほしいんだ」私は、この女に無理難題をふっかけて、みたかった。雨は益々激しく吹きつけていた。女は買物籠から財布をとって胸にはさむと仕方なさそうに、梯子を下ろして出ていった。

女が傘を持っていないことを、私は知っていた。もっとも、傘を持っていたって、この吹き降りでは用をなさないだろうけれど。

やがて、ヤエ子は濡れネズミになって帰ってきた。白い足に泥がいっぱい、はねていた。

「その足、どうしたんだ？」私は寝そべったまま、濡れないように胸元から女が出すハイライトを受けとりながら言った。「靴を濡らすのが嫌だから、ハダシで行ってきたの」私は、その言葉を聞いて彼女に対する、いとおしさが一挙に爆発した。

濡れた洋服を全部むしり取るように、脱がして、冷えきった女体を抱きしめていた。びしょびしょに濡れた足についた泥が、私の脛にも、ついた。ごめん、ごめん。煙草なんか欲

しくなかったんだけど、お前が俺の言う無理を聞いてくれるか、どうか試してみたかったんだ」

「あんたの言う事だったら、あたい、どんな事でも、きくわ」

私はヤエ子を精神的に、いじめること満了した。窓から直接、屋根の上へ放尿したり、新聞紙を敷いた上へ排便し、そのあとを女に紙で拭かし、拭き方が悪いといつて罰として舌の先で清掃させてりした。最初のうちは嫌がったがそのうち、それが当たり前のようになり、寝そべったまま排尿する私から、口うつしで、ポリバケツへ運んだりした。

何日も、その屋根裏に私が滞在する時など食事の仕度は勿論のこと、排泄物の始末まで一切、彼女がやった。電熱で沸かした湯で私の全身を拭くための蒸しタオルを作って、長い時間かかって、清めてくれたりした。

商売に行きたがるヤエ子を引き止めて、それでいながら、一銭の金もやらなかったの、彼女は、なけなしの着物を質草にしているらしかった。

外出した彼女の帰りが晚いと、私が商売してきたのだろうと怒るので、私とその屋根裏に居る間中

は、外へ出ず、私の足や腰を揉んでいた。

「私の秘密のドヤへ男のヒトをつれてきたのは、あんた一人よ」ヤエ子は、そう言って、私に身体をすり寄せた。「好きよ」私の耳元で囁いてから、身体をひるがえして、私の太股に、腕を、からませた。

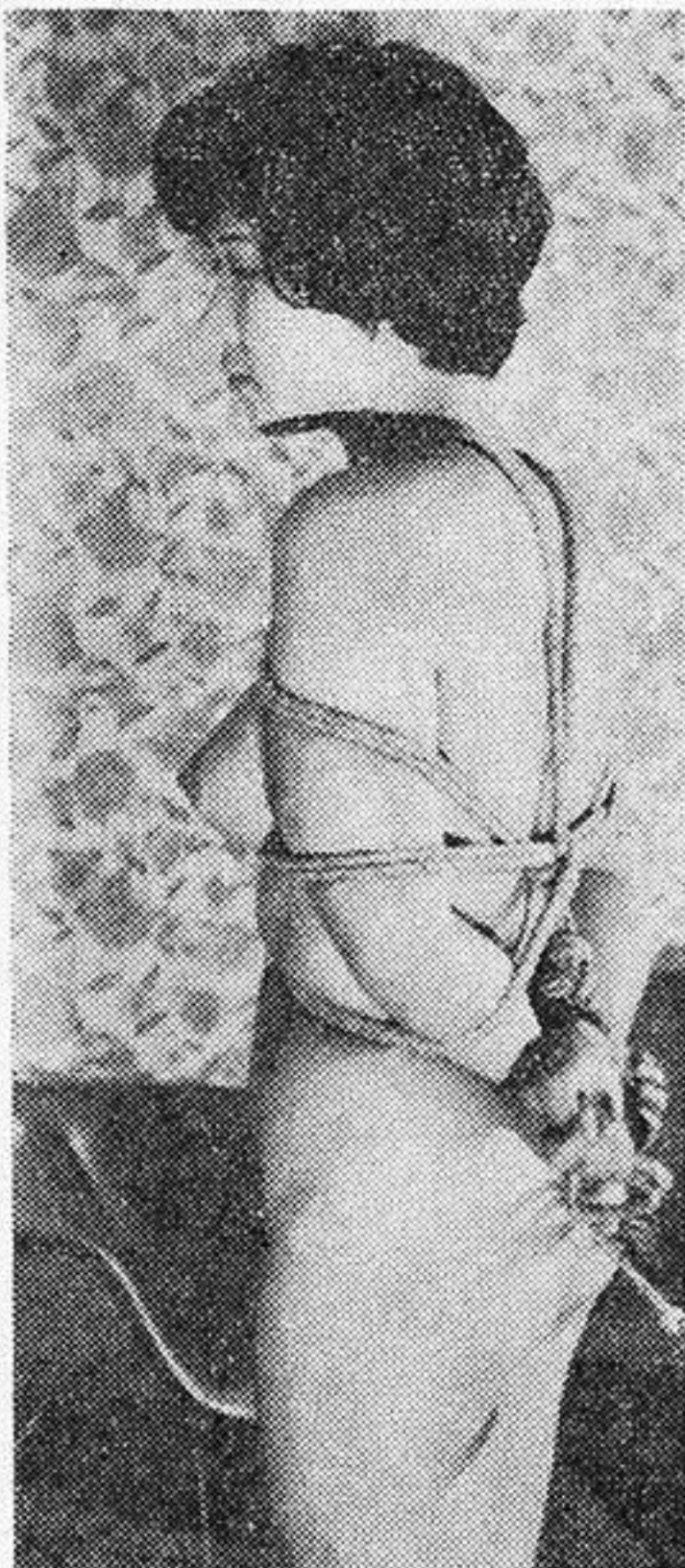
飽くなき二人の愛欲の行きつく所は、69だった。ヤエ子は、この変則的なプレイを特に好んだ。いつも私には一番楽な姿勢をさせ、自分は、苦しいポーズで、我慢した。

奇妙な事に、私は一度もヤエ子

を縛った事はなかった。縛らなくても、私の言うことは何でも聞く女になっていた。私は、そんな女を、いとしいと思いつながら、口では意地悪く、いじめ抜きたい気持ちが強かった。

こんなヤエ子だったが、そのうち、私は飽きて別れた。といっても、住所も名前も言っていない私だったから、その屋根裏を私が黙って訪ねなければ、それで、すべて終わりだった。

私は、その下町の近くを通る時今頃ヤエ子は、どうしているかと、あの屋根裏を、ふと、なつかしく思うのである。



荒尾慶子を恋うる唄

美 作 太 郎



## 羞恥のときめき

ハサロ告白V 小杉 千恵

五月号で、塚本鉄三様の「カメラとペンのルポルタージュ」(西条紀代の巻)を読み、たまらなくなってお手紙しました。

羞恥責めの最高の宴は、流腸にあると私は信じておりますが、下半身裸でお尻を高くあげ、うつ伏せで流腸中の紀代様の表情に、羞恥と恍惚の頂点を感じました。

26才の人妻である私の良心が、セックスを回避させてアヌスに、その救いを求めさせようと致します。だから、排泄を強要されたりアヌス責めの場に接しますと、具体的な欲求を覚え、羨望と衝動で胸が一杯になってしまいます。

ゴム管をお尻につきさして、カメラに向ける時の気持を思うと胸



がドキドキ致します。五月号の紀代様の写真は、本当に素晴らしく、特に便器にまたがる構図や流腸中のものの表情は、たまらない耽美さが感じられました。

私も絶対にアヌスに限る責めを約束できて、それが信じられる方となら、羞恥責めプレイを実現さ

私は46年7月号の奇ク誌上に初めて姿を見せた荒尾慶子さんの告白、「流れる雲に身を托して」を読んだときは、全身に電流をかけられたような衝撃を受けました。続いて、同じく9月号に「地平線の彼方に」そして11月号に、「行く川の流れ」という荒尾慶子さんの告白を手にして、私の彼女に対する憧憬の念は抜け難いものとな

せてみたいと願っております。

アヌスだけと申しましたが、勿論、全裸後手縛りにならねばM感覚の喜びはないと思いますので、そのような羞かしい姿にして戴いて結構です。アヌス以外の羞かしい箇所も、当然、お見せすることになるのは覚悟しております。

羞恥の瞬間というものは、字のとおり、その瞬間、瞬間に盛り上がって消えてゆくものだと思います。その昂まった瞬間の表情や、全裸の全身からあふれ出る羞恥の盛り上がった刹那を写真という固定の瞬間へと凝固させて下さい。

思わずあらわにしてしまったMへの耽溺、官能の渦への歓喜、官能四次元への別世界に悶絶する陶酔の瞬間。それらが永遠に消え去ることのない印画紙に固定され、

りました。

この世の中に、このような素晴らしい理想的なマゾ女性が存在するのかという驚異の念は、今でも禁じ得ません。写真で見た彼女の美しさもさることながらこのような告白を物される才人ぶりには心底から惚れ込んでしまいました。今どうしておられるか近況を知りたいものです。

私と貴方との最高の芸術秘録として、保存されることを祈ります。

私の望みます写真の構図は、背後に後手の縄目が痛まないように柔らかなお布団をまるめて、やや仰臥目に斜めに体をもたせかけて両足は大きく左右に開いて膝を折り、挿入便器をお尻の下に敷いた楽な姿勢で、ゆっくり、ねちねちとアヌスを流腸やガラス棒で責めて戴きたいと思います。

便器が挿し込んであれば、グリセリンが溢れ出ても、責めの途中で、少々のお洩しをしてしまっても、安心してアヌス感覚に、したることが出来ます。胸の鼓動が高まり体の芯を風が吹きぬけてゆくようなMの快感を求めて、私は悶えております。信頼できるお友達を求める次第です。



高村浩子さまへの手紙  
我が故郷への招待

秋 野 美 水

私の故郷は日本海寄りの山陰地方の山の中です。貴女の故郷が瀬戸内海の孤島であるのと対照的に、私の村は山又山の重なり合った山里です。最近ではディスカバー・ジャパンとかで田舎への旅が流行しているようですが、私の故郷はそれにふさわしいような風景の、至ってよい所です。

私の村は谷の西側にあり、東の町へ行くのには、今は少し川下に橋も出来、ダムも造られました。昔は私の家の前の細い道を登ってから一旦、谷へ降り、また、山を一つ登って、やっと向こう側へ出ていたので、行って戻るの一日仕事だったようです。

今はもう、この道を登る者として一人もなく途中で生い茂る草で消えてしまっていますが、その消えた先を、しばらく行くと、谷に面した崖っぷちの陽のよく当たる岩に、長さ数メートル程の、人がや



っと通れる位の穴が、開いています。昔の道の名残りです。

浩子さん。あなたは、こんな山奥には似合わない人のようにすがどうですか、一度いらっしゃって。そうすれば、私は、このトンネルに鉄格子を取りつけて待っています。

素っ裸にした貴女を、後手に縛り、山道を歩かせます。私は縄尻を持って引っぱりながら、小枝でお尻を叩いたりしながら、ついて行きます。穴の中へはワラを敷いてあげましょうか。ワラが裸の肌に触れると、チクチク痒くて、なかなか気持ちのいいものです。もし、あなたが、それで不満を言うようなら、野バラを身動き出来ない程、入れますよ。外へ出そうにも、手足を動かす事さえ出来

ないくらい。排便は岩に穴をあけて、谷へ落ちるようにはしておけばいいでしょう。穴は少し高い目につけておきましょうか。男のように立ったまま排尿するのも、案外いいものです。

食事は昼と夜の二度、持って行ってあげましょう。もちろん箸などありませんから、手で食べるなり、小枝を折って箸の代りにするなり、好きなようにして下さい。

お風呂はどうしましょうか。こちらあたりは、谷へ降りられないこともないのですが、慣れないあなたには無理でしょうね。仕方ありませんから、一時間程、奥へ入った所から、降りる事にしましょう。心配しないで下さい。ちゃんと靴を、はかせてあげますから。もっとも長靴だけです。

出来るだけ長い物にしましょう。腿までくるようなのが、いいでしょう。マムシが時々出ますからね。腰からは裸のままでもいいですね。かなりすり傷やカキ傷が出来ると思いますが、時々はお風呂へ入れてあげましょうね。板を沈めて入る五右衛門風呂ですよ。手は後手にしておきましょう。

足は正座に縛っておきましょうね。お風呂の中で正座するように、底へ沈める板なんか、いらないでしょう。お湯は少し熱い目にします。熱いなんて言わせませんよ。

このあたりは鐘乳石の多い所で私の家から山を三つばかり越した所に小さな鐘乳洞があります。山奥なのと長さも数十メートル程しかないのとで、まだ観光化はされていません。どうです浩子さん。夏でも氷のように冷たい鐘乳石を抱かせてあげましょうか。

手ごろなのがあらうたら、それを男に見立てて楽しませてあげましょう。いやだなんて言ったら、鐘乳石にあなたを縛りつけて、真暗な鐘乳洞の中へ、一日中、放っておきますよ。

高村浩子様

秋野美水





## サジスチンを待望する

京都 上田 光一

読者の皆さん、お元気ですか。

小生十数年来の奇ク愛読者の一人です。毎号のM記事、M画を、たのしみに行っているM男ですが、こ  
こ一、二回、S女性の投稿される  
記事がなく、少々さびしく思いま  
す。読者の中には、きっと素晴し  
いS女性も居られることと思いま  
すが、これらの方々の手記、特に  
男を完全に征服した体験記や、M  
男へのよびかけなど、どしどし寄  
せて頂きたいと願う者です。

小生の願いは、若いグラマー女  
性の方の巨大なおヒップの下に顔  
をしかれ、その重みによって押し  
つぶされ、お尻の強烈な臭気を思

いきり嗅がされ、気も遠くなるよ  
うな臭い目に合わされたいとい  
うことです。

「さあ、どうだ、重いか。女王様  
のおヒップ様が、どんなに貴く重  
いか、どんなに臭いか、思い知ら  
せてやる」

小生の顔の上に馬乗りに跨が  
れた女王様は、こう言いながら巨  
大なお尻を上下に、前後左右にゆ  
すられるのです。その度に小生の  
顔は、目も口も鼻も、ごりごりと  
押しつぶされ、強烈な臭気を嫌と  
いうほど嗅がされます。

それが終わると女王様は穿いて  
おられたパンティをお脱ぎになっ

て、再び小生の顔の上にお跨がり  
になります。丸く柔らかいおヒッ  
プが小生の顔面に押しつぶされ、  
聖なる重さが小生の口や鼻を、お  
おいます。

パンティを通して嗅がされる場  
合のとは、比較にならない程の、  
全く強烈な臭気が鼻に、しみ通  
ります。

再び女王様のお声。

「そろそろ、のどが、かわいた  
らう。お茶でも恵んであげよう」

と、おヒップを少し浮かされた  
女王様は、

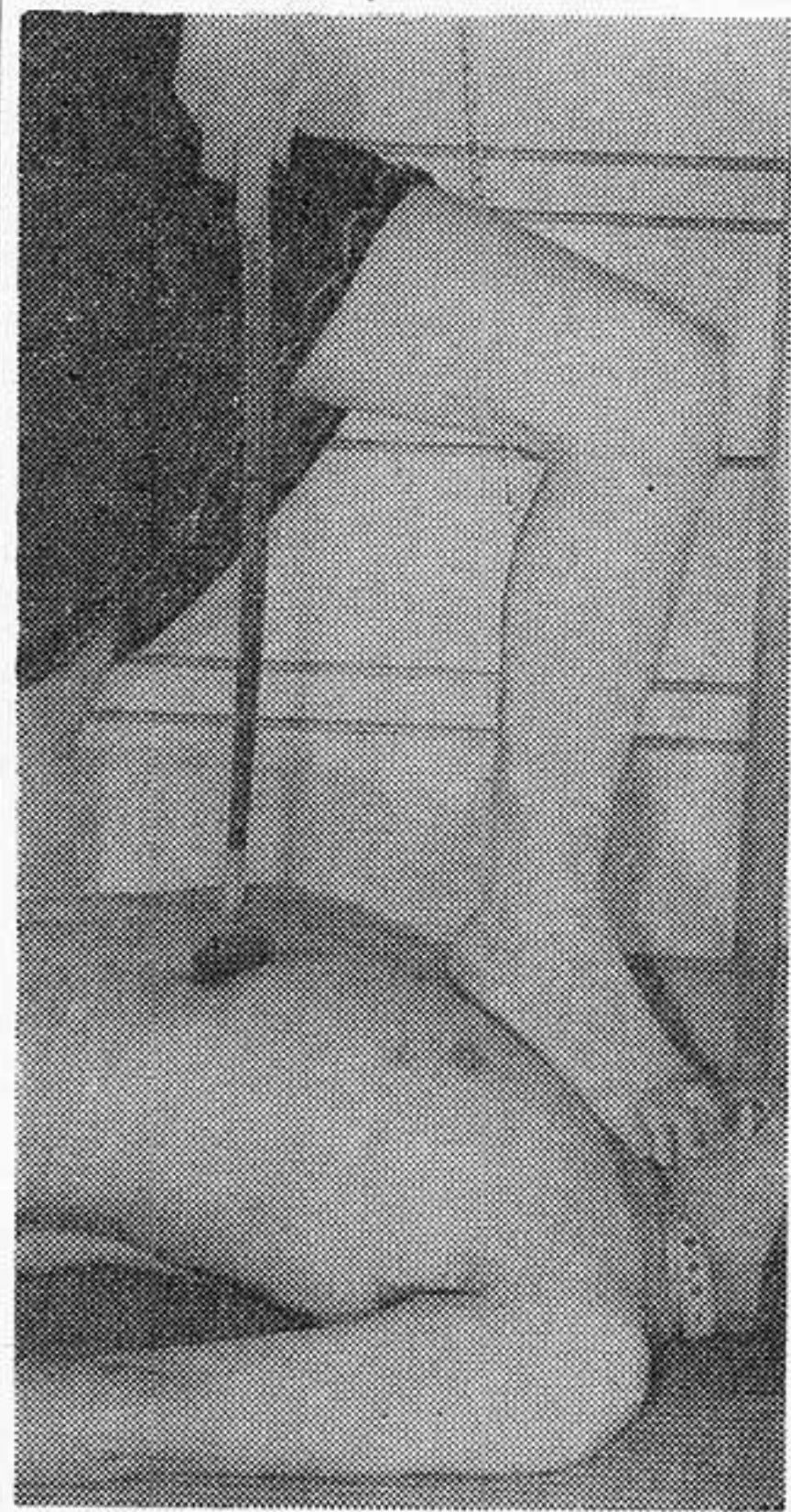
「口を、おあけ」

と言われ、小生が思わず口をあ  
けた次の瞬間、二つの谷間からシ  
ャーッと、一すじの温水が、ほと

ばしり出て小生の顔面に、たたき  
つけるように浴びせかけられるの  
です。

十センチほどの至近距離から、  
ほとばしり出る温雨は、すさまじ  
い勢いで小生の顔を痛いほどに打  
ちつけたのです。女性の小水のは  
げしさは今までも知っていました  
が、これほどに、すさまじいとは思  
いませんでした。さしもの強烈  
な雨も、ようやく衰え、最後のし  
ずくが二、三滴、落ちたあと「舌  
で、お拭き」のお声に、小生の舌  
は、しずくを、なめ取っていました。

こんな目に合わせて下さるS女  
性の方の、およびかけをお待ちし  
ています。





## 針灸院見聞記

## 灸をする女の子

奈良下 元三

スキーで足を捻挫したのを治療してもらったため、ある針灸治療院へ通院していた時のことである。足の電気治療は毎日、三十分ばかり受けなければならないので、その間中、治療室の片隅にいることになる。それで、次々と、いろいろな患者が入ってくる。

ある日のこと、若い女の子が入ってきた。真赤なセーターが、よく似合う愛くるしい色白の美人である。笑うと、えくぼが一段と可愛らしい。一見、健康そのもののようだが、一体どこが悪くて治療してきたのだろうかと思いをかきながら、ピチピチとした若さに溢れている。

先生の前の椅子に腰をかけて小声で恥かしそうに話をしている。私の方からは声が小さくて、よく聞きとれない。先生はウンウンとうなずいている。

「ハイ、それでは、こちらへ来てベッドに横になって」と、先生はうながした。ベッドは私と反対側の隅にあり、こちらからは白い布のスクリーンがしてあるので、その全部は見えない。しかし、ツイ立てのスキ間からベッドの大半がうかがえる。

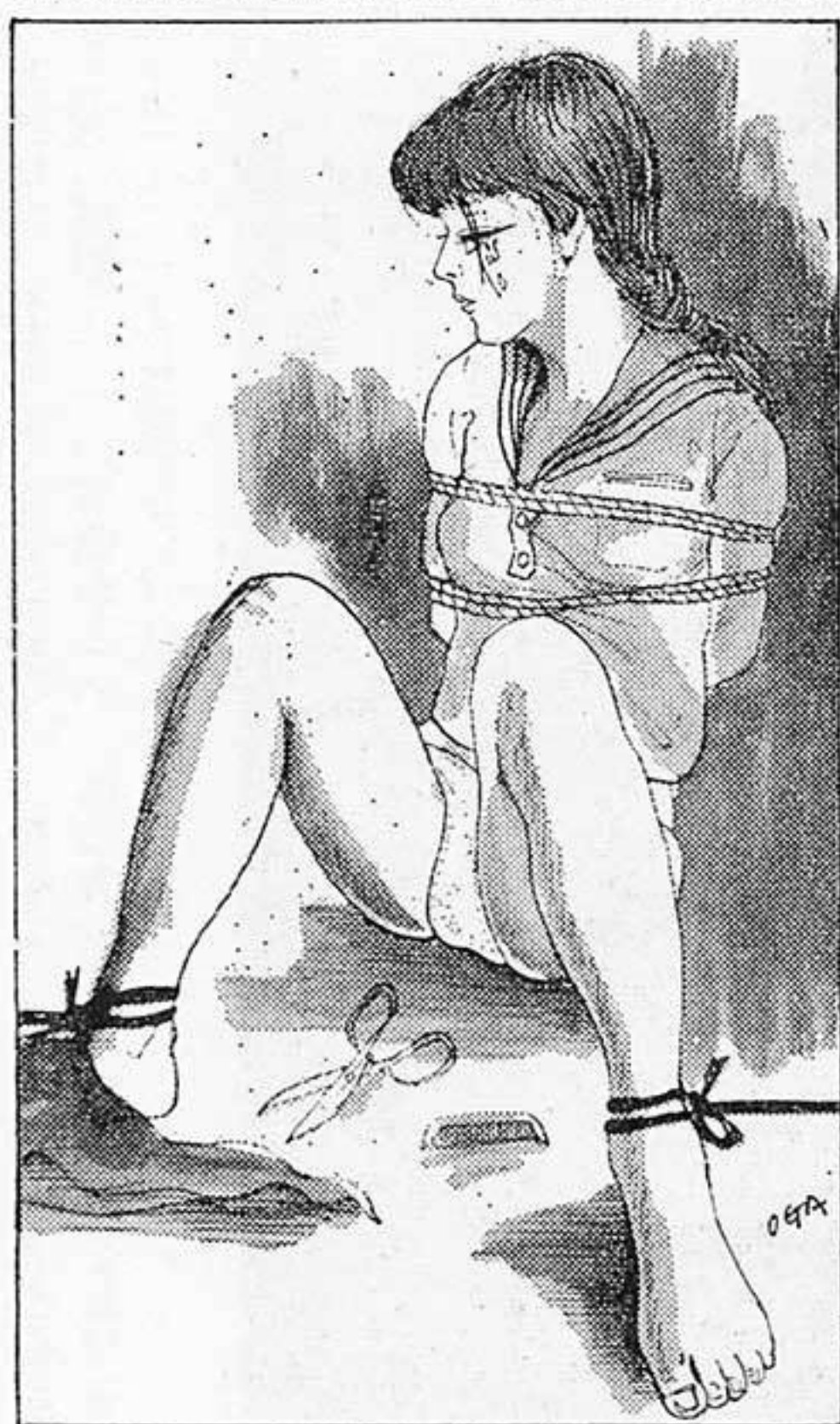
「まず腰からしようか。うつ伏せになって、ベッドに寝てごらん」先生の声で、俯伏せになった女の子の赤いセーターをまくった。セーターの下には何もつけておらず、色白の背中が、くっきりと、さらけ出された。思わず、かたずをのむほど美しい肌である。

スカートのホックをはずして、ずり下げると、色白の腰に純白のパンティが見える。そのパンティも心持ち、ずらした先生は、腰のあちこちを指で圧えながら背骨の雨脇に黒い印を四つ、つけた。そして小豆ほどのモグサを、もんでのせ、線香で火をつけた。

「一寸熱いが、我慢なさいよ」一体どこが悪くて、こんな若い女の子が、お灸など、するのかと考えた。赤いセーターを、まくりあげて、のぞいている色白の腰からモグサの煙は四筋ゆらゆらと立ちのぼっている。やがてモグサの火が、肌をこがし始めたのだらう。

「アアア、熱い、ウーム」と、女の子の悲鳴に近い声が洩れだし、しきりに腰を動かしている。「これこれ、そんなに動いたら、モグサが落ちるヨ」と先生は、たしなめながら、女の子の背中を押さえているが、必死で、もがくので体は大きく波打っている。「イー、熱い、熱い、アアア」

「あんたは熱がりだね。一寸、山本さん、手伝って」と先生は声を挙げた。山本さんと呼ばれたのは二十才ばかりの助手で、すぐ室に入ってきた。「山本さん。ここをしっかりと押えて下さい」やっと第



イメージ画 『整髪式』 小川茂正

一回のモグサが燃えつきて腰に四つの跡が灰白色に残っている。そこへ今度は第一回目より、やや大き目の大豆ぐらいのモグサを次々と並べ、線香で火をつけた。「ウーン、アツ、アツ、熱い」女の子は、さっきよりも一層、熱がっているが、今度は助手が背中を、しっかりと押さえ、先生が足の方を押さえているので、余り派手に身動きができない。「アツ、アツ、熱い、イー」と、うめき声だけが私の耳に伝わってくる。それで終わりかと思ったら



「さあ、今度はお腹だ。あおむけになつて」と先生にうながされてクルリと体を転がした彼女の顔からは涙が、ぼろりと、こぼれた。

可愛いおへソが食いつきたいような恰好でチョココンと色白でふくよかな、お腹の真中に位置を占めている。そのおへソのすぐ下へ二つもモグサが置かれ線香の火がついた。助手は胸のあたりを押さえている。やがて女は「ウーン、熱い、熱いワ」と悲鳴をあげて、のけぞった。顔を真赤に紅潮させて熱さをこらえている。腰よりも腹の方が皮膚が薄いので、より熱いのだろう。「もう少しの、我慢だ。病気を直さないと、いけないからナ」と言いながら先生は燃えつきたモグサの灰を払いのけては新しいモグサに火をつけている。

小指の先ぐらいの大きさのモグサに火がついた時、彼女は恥かしさも忘れて、必死に体を、くねらせては「ウ、ウーン、熱い」と呻き声を洩らす。助手は無言で力一杯、押さえつけている。

私は足の治療も忘れて、その若い女の子のお灸療治をスクリーン越しから眺めていた。彼女の悲鳴を聞いていると、こちらの体までがホテッてくるのを感じた。

彼女が熱さに苦しめば苦しむほど、私は自分の身体中がもえるような異様な興奮におちいるのに気づいてハッとされた。やっと腹のお

灸が終わってベッドから立ち上がり、向こうを向いてスカートを直す時、腰の四つの灸痕は黒々として余りにも痛々しかった。

部屋の隅で私が足の治療をしているのに気づいた彼女は、恥かしそうに顔を赤らめて、そそくさと部屋を出ていった。



△M女の告白▽

## 奴隷妻の呟き

北川 まりこ

日夜を問わず、それこそ主人の

お気の向くままに、奴隷妻としてSMプレイに馴染まされ、それがごく普通の生活になってしまいましたが、まりこは、もちろん、もう素裸で後ろ手に縛られることは当たりまえの日課として、少しも嫌だなどとは思いません。むしろ縛られない日は、もの足りなくて何か、主人のご気嫌を損じるようなことをしたのだろうか、不安で

たまらないのです。つまりまりこは、この肌に、きびしい縄掛けをされている間だけが、本当に安心して主人の愛を確認しながら、心の底から落着いた幸福感に浸ることができなのです。

ですから主人が在宅中は、たとえ、ご気嫌がよろしくても、早く「縄を持ってこい」という、ご命令が出ないかと期待しながら、ついそれとなくおねだりするような態度が出てしまうようなのです。

主人がイジワルして、さんざんじらされるのも、そんな時なのですが、それだけに、やっと縛り上げて頂けた時の嬉しさは、ただ、

議論な味でございまして、完全に飼育された、まりこには、主人や、時々主人の命令で、お相手させられる殿方たちの肌触り以上に、刺激的な味と感じとれるのです。

奴隷どころか、畜生として扱われることにも慣れさせられましたが、それではございしますが、それでもやはり、縛り上げられた裸身を念入りに眺めまわされて、急に能動的に廻り責めにかけて頂いたり、抱いて頂いたりしますと、女として認めて貰えたという実感で、とても嬉しく思います。

まりこがマゾ女だからというばかりではないような気も致します。

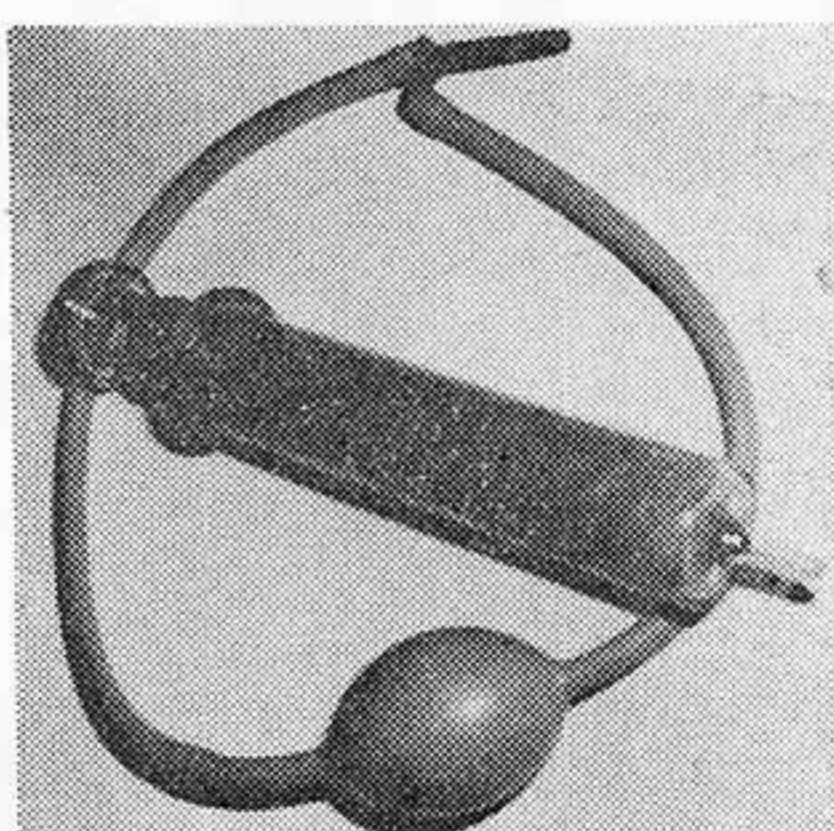
でも、やはり肌に喰いこむロープの味は、いくら慣れましても飽きることもない、不思議な味でございまして、完全に飼育された、まりこには、主人や、時々主人の命令で、お相手させられる殿方たちの肌触り以上に、刺激的な味と感じとれるのです。



## 短 信 往 来

拝啓。毎月毎月、すばらしいS  
M写真や文面、とてもたのしく読  
ませて頂いて居ります。私は浣腸  
プレイの大好きな男性です。今月  
4月号の前田真知子さんの浣腸写  
真とてもすばらしく思いました。  
それと、一九二ページから一九九  
ページのの前田真知子さんの、あの  
告白の記事、息もつがせず読みま  
した。

彼女と私が、今すぐプレイ出来  
るといふ様な事は、とても無理で  
そんなことは、とうてい考えられ  
ませんが、前田真知子さんの様な  
浣腸の好きなM女性と交際できた



すばらしかった浣腸プレイと告白の記事

前田真知子さんへ

大阪T・H  
(浣腸マニア)

ら幸せと思っています。もしも、前田  
真知子さんの様なM女性とプレイ  
出来た時は、浣腸プレイのほか、  
私の舌を使って彼女のアヌスを責  
めたり、最高の気持ちにしてやりた  
いと思います。その後でバイブレ  
ーターで責めます。プレイの時は  
もちろん両手は縛ります。

4月号の五二ページから六一ペ  
ージに、「愛妻への特訓プレイ」  
という告白を書いておられる早坂  
信治さん御夫婦も、すばらしいで  
すね。羨ましい限りです。もし、  
私と三人プレイができれば楽しい  
と思います。私には、妻は居りま  
すが、妻とはSMプレイや浣腸プ  
レイなどをするには、ぜったい

に出来ません。妻には、ぜったい  
にヒミツです。

ですから、私は早坂信治さんの  
ような御夫妻を見ると羨ましくて  
なりません。夫婦としては最高で  
す。浣腸プレイは、あまりやられ  
ない様ですが、私のようなベテラ  
ンを一枚加えて頂ければ、きっと  
プレイにも変化が出て、マンネリ  
も打破出来ると思います。

前田真知子さん。

4月号のグラビア写真で、貴女  
の浣腸プレイを興味深く拝見しま  
した。私は37才、あの様な写真を  
見ると、とても、すばらしく思っ  
ます。私は、浣腸器具としては、  
一〇〇CCと二〇〇CCのガラス

製浣腸器と、ゴムのエネマシリン  
ジを、それぞれ一つずつ持って居  
りますが、イルリガートル浣腸器  
は、まだ持って居りません。

私は、ごく軽いS好みの男性で  
すが、貴女のような、素晴らしい浣腸  
プレイを好まれるM女性の方のア  
ヌスに、私の手で、やさしく責め  
てあげたいと思います。

貴女と、もしもプレイ出来るチ  
ャンスがあれば、浣腸だけでなく  
アヌスをバイブレーターや私の指  
や舌を使ってプレイしたいと思っ  
ます。

本当に、貴女はすばらしい。  
もし、よかったら、お手紙だけ  
でも下さい。私の住所、氏名は編  
集部に知らせておきます。よきお  
便りを待って居ます。

大阪市此花区・T・H生  
前田真知子様

## 夢を持つ浣腸強要

竹 迫 誠 也

浣腸強要なるものは、浣腸好み  
の男性の最大の願望であることは  
いうまでもない。激しい拒絶反応  
と抵抗を排して腕づくで、あるい  
は強引に浣腸するということは、  
確かに我々の夢でもあるのだ。  
如何なる女性も喜々として浣腸

させてくれる人は殆ど、いないと  
思う。大体、いやいやながら浣腸  
されるのが、当初の例である。そ  
れなら、深窓のウラ若い令嬢を、  
最近はやりの催眠薬で眠らせて強  
引に浣腸しても、これは浣腸強  
要とは、いえぬ。

私も知人の妹に、この催眠薬  
を使って浣腸を試みたことがあ  
る。眠っているときに浣腸した  
場合、無意識の中に排泄するの  
か、それとも、押し出す力がな  
いので排泄できないか、私は大  
きな疑問を持っていたが、それ  
も、はっきり分かった。すなわ  
ち、薬がきいて眠っている間は

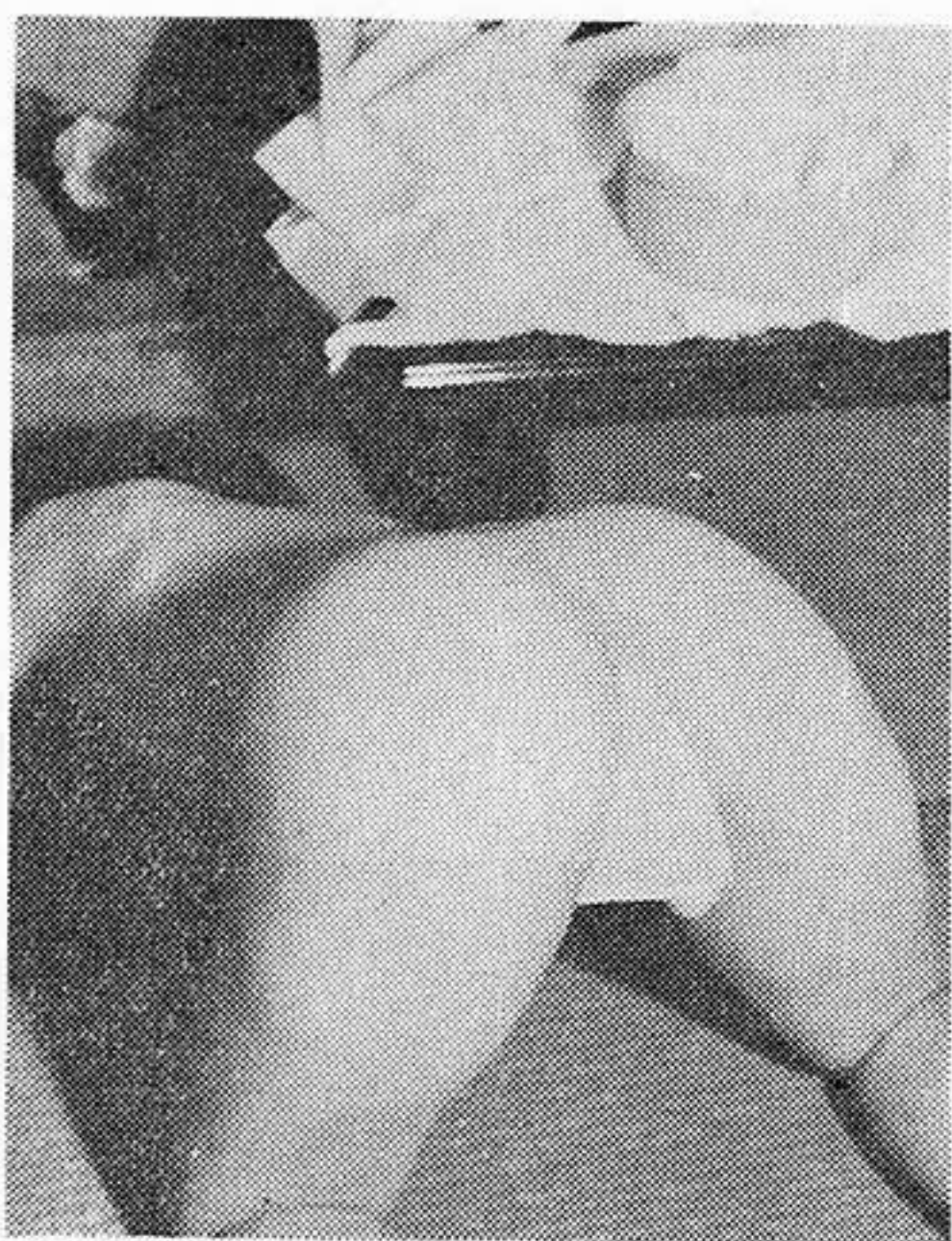


玉木章子さんに憧れて

## 浣腸責め雑感

大川 昌 弘

SMプレイの数々のパターンの中で、仮に「浣腸責め」を最終コースと考えるならば、私の場合、緊縛を省略して、いきなりバイブ併用で浣腸責めに入るので、或は単なるSM的な前戯と考えるべきかも知れませんが、SMブームも手伝ってか、最近の女性には浣腸を受け入れる被虐性や露出性が備わっているような気がします。しかし「奇ク」も知らない素人



垂れ流しのようなかたちで、全く無意識のままか、あるいは夢うつつの中で排泄するということである。しかし、下腹部を襲ってくる強い排泄感で意識がさめることはない。

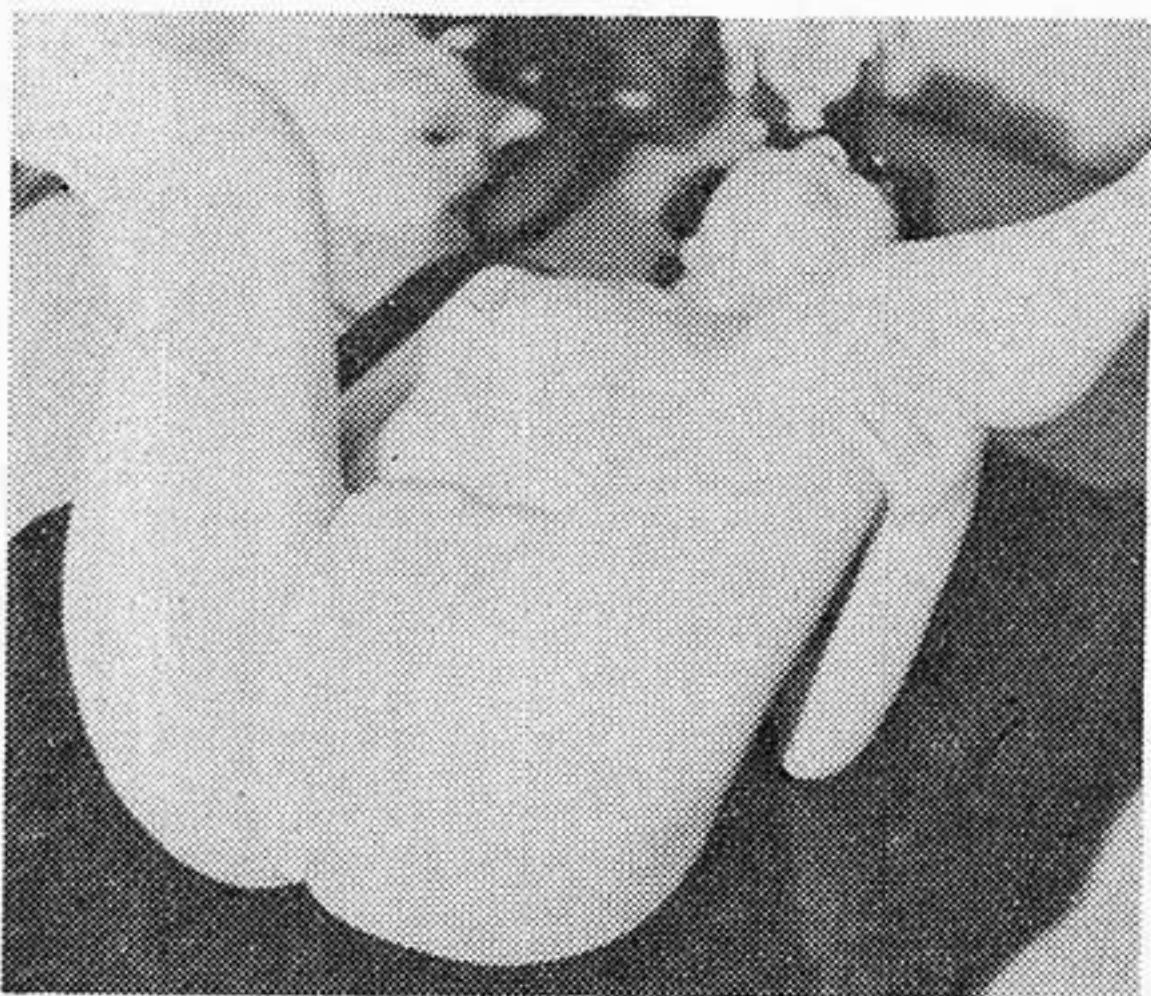
だが、なんといっても浣腸は、いやいやのうちに施し、羞恥のもとに排泄する処に醍醐味があるもので、全く眠らせた意識のない排泄は、あとの汚い感じのみ残って、後味の悪いものであることは否めない。だから、催眠薬によるものは浣腸強要とは、いえぬ。

女性に、最初から責めや写真撮影などを要求するのは、やはり困難

で、私自身、どうやら浣腸に成功した場合でもただ、排泄観賞が、せいっぱいで、せっかく持参したカメラは取り出しも出来ない状態で終わってしまうことが、殆どなのです。ここに同封しました写真は、

泣きわめき、激しく抵抗し、舌を噛んで死にはしないかという位の最大の羞恥をあらわにし、顔を引っかけようが、なにされようが、おさつけ、ねじ伏せ「ヒューッ」という悲鳴もものは、彼女の菊蕾に無情にイチジク浣腸薬を注入するところに浣腸強要のよさとやり甲斐がある。「イヤイヤ、ヒドイッ。許して！」と足をばたつかせて、さわぐであろうが、さわげばさわぐほど不思議に薬が早くきいてくる。排泄感が急に下腹あたりを襲い、今にも出そうな気が

最近知り合った三十四才の人妻で、何回かのデートの末に、ようやく撮影にこぎつけたものの、どうもウマク撮れずに残念がったものでしたが、敢えてお送りする気になったのは、四月号の「玉木章子のSM生活」に刺激されたからです。彼女のような女性に浣腸責めを行なったら素晴らしいでしょうね。なんとかして彼女に、「浣腸体験告白手記」を書いてくれるようなチャンスを与えてあげて下さい。期待しています。



がするし、さりとてトイレへ行かせてくれとは金輪際、言いたくないという、複雑な気持ちになる。

しかし、自然の排泄感には抗すべくもなく、死んでも口にはしたくないと思った「トイレへ……」という言葉が吐かざるを得なくなる。もうこうなると、敗北感がヒシヒシと迫り、抵抗をやめ従順にならざるを得なくなる。

私は浣腸強要こそ、世界最大のショーと思っている。



## 責め随想

## 縛り心

早木夢二

春がくる。夏がくる。

緊縛シーズン到来という処。

カゼに弱いので、どうも冬は困

る。部屋中、暖めていても、ほん

の隙間風にでも、やられたように

カゼをひいて仕舞うことがある。

慶子は部屋々々暖めておけば、

全裸の縛りも平気で、こなししてい

る。どうも女は強い。昔から女は

拷問に強い、というが、強いのは

拷問だけじゃない。

やむにやまれぬ縛り心を、いか

んせん。

冬場は、入浴の時、縛ってもら

うことにしているのだ。

裸になると、手早く菱縄股間縛

りをかけてもらって、慶子に縄尻

を引かれて風呂場に入る。

あとは、お任せ。慶子が何から

何まで、やってくれる。私は、じ

っと湯につかって、じっと濡れ

て裸身に喰い込んでくる縄を、湯

のたゆたう中に見入っていればよ

い。

慶子は私の縛られた全身を限な

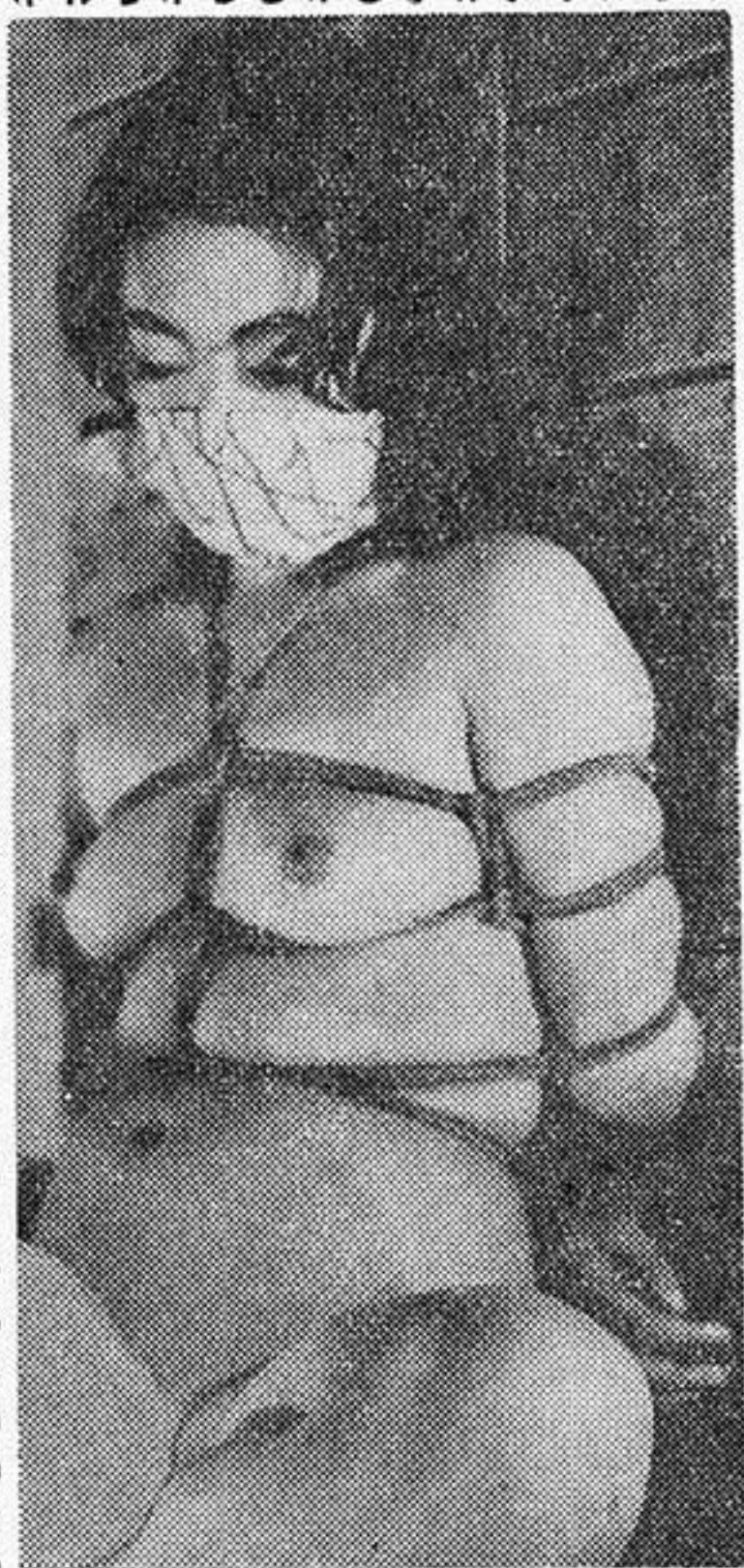
私がするように、ちょいちょい、戯れる。

シャボンだらけの肩から、洗い湯よろしく、温い神水が私の体の前と後に分かれて、したたり落ちたり、立たせた私の前に、しゃがみこんだ慶子は、がっちり縄掛けされた囚人を含み込む。

しかし何といても、何の心配もなく心ゆくまで、お縄を受けられる身が一番。

外から帰ると、何もかも取って仕舞って、好きなタオル一枚を腰に巻いて寝そべる。素晴らしい解放感。

心得ている慶子が、縄ふんどし（股間縛り）をしてくれて、それだけの姿で食事後の本格的な縛りまでの時間を過ごすのである。



『くびれ肌』中河恵子

## 編集部だより

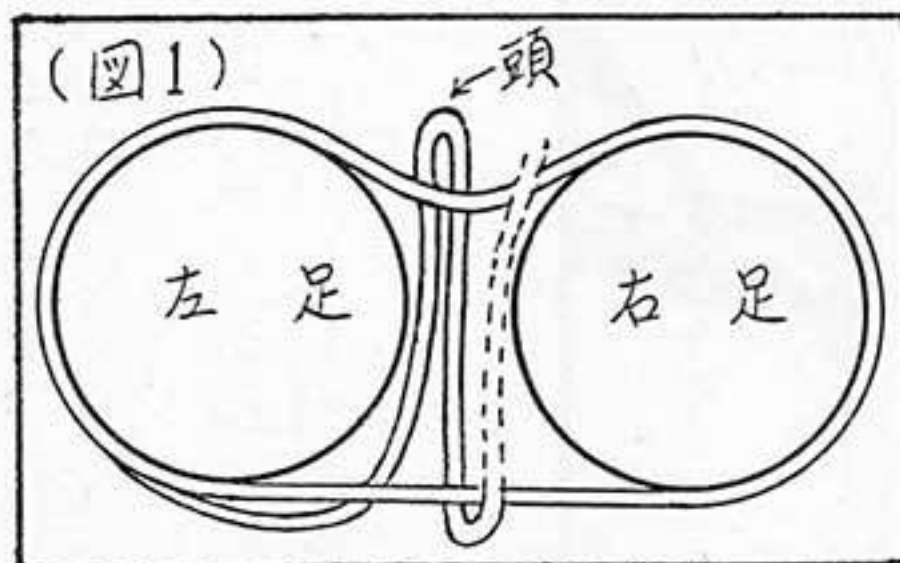
○「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」と歌われた桜の季節も、あわただしく過ぎ去って、世はまさに新緑の好気候となってきました。SMプレイの好シーズンでもあります。ゴールデンウィークを迎えて、レジャーに狂奔する人達も多いでしょうが、夫婦のSMプレイやスワップینگに平常の趣味を活かされるのも、今が好機でしょう。

○夫婦プレイといえば、最近の早坂信治氏のプレイに対する熱情と華麗なるフォトに対する絶讃、且羨望の便りが陸続として参っております。他の夫婦プレイ実践者の方々も早坂氏に負けじと、どうかハッスルして下さるよう、近況報告を是非お待ちしております。

○五月号で、「北欧のポルノより見たSM随想」という随筆を書かれた長谷田亀治氏は、度々本誌にも寄稿された大の愛妻家でもあります。夫婦SMプレイの信奉者でもあります。先般はからずも氏制作にかかると8ミリ作品を拝見する機会を持ったのですが、中でも『珍芸披



# 「高もも自縛法」の訂正 〜へヤピン〜の訂正 岩井 たけ子



貴誌四月号に、私の投稿しました「高もも自縛法」を發表していただきましたが、私の説明や略図が、まずかったためか、掲載されたものに少しばかり違うところがありませんでしたので、改めて御説明申し上げます。

第一図から第三図までは間違いないのですが、第四図の「へヤピンのお化け」みたいなのは、別に

く思うのだった。

やがて、しおたれた紙片を、こ  
とさら私の目の前で、ひらひらさせながら、

「どう、いいでしょう」

と、いく分、顔を赤らめながら誇らしげに言う慶子は、十分、可

愛い女であった。

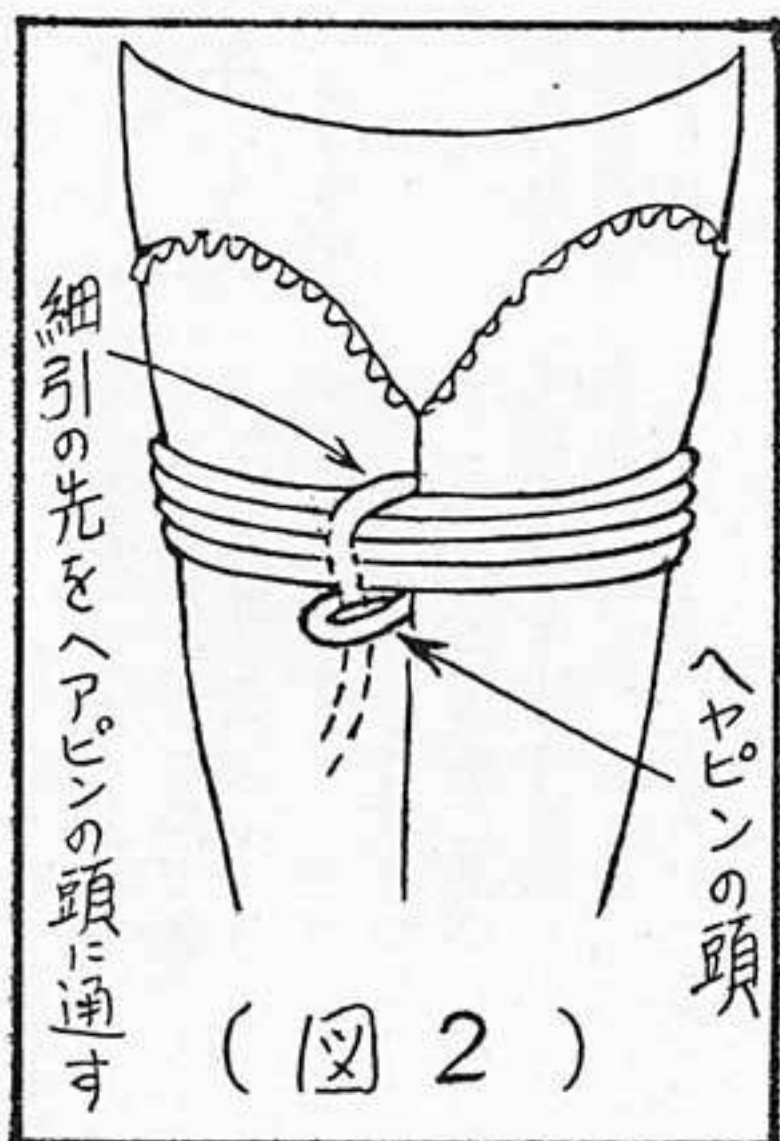
一年中が、そんなシーズンであ  
ったら、どんなにいいことか。い  
やいや、そんなぜいたくは言うま  
い。

何事にも四季がある。それだか  
らこそ、楽しみは大きい。また、

作ってある物ではありません。私  
がお送りした略図で、強調する為  
に線を太くしたのが、塗りつぶし  
たようになっていたので間違われ  
たのだと思いますが、私の申しま  
す「へヤピン」とは、細引の一部  
で作るのでして、「へヤピン」のよ  
うに折り曲げる」だけです。

図1のように、細引をへヤピン  
のように二ツ折りにして、太もも  
をグルグル巻きにした細引束の上  
を通し、へヤピンのような頭にそ  
の細引の先端を通して  
て締めつける訳なの  
です。

図2のように細引  
を通し、へヤピンの  
頭を左手でおさえ、  
右手で通った細引を  
引っ張るのです。だ  
から、締めつけ具合  
は、いくらでも加減  
できる訳です。



その時々楽しみの考えられよう  
というもの。

全裸に縄がけという、ある意味  
では単調な行為にも、こうして自  
然が色々な智慧をつけてくれる。  
ありがたいと思ひ、一そう励まな  
くてはなるまい。

適当に締めつけたら、あとは縄  
止めです。私は、締め終わったへ  
ヤピンの横へ細引の先を通しまし  
て右足の方から左足の方へと、ぐ  
るぐる巻いた細引に掛け合やす  
うにして、余った細引の先は、締  
めつけられた高ももの間に隠すよ  
うにしています。

こうして私は、高ももを、膝ま  
での間に四つの自縛をして、四段  
にくびらせて楽しんで居ります。

露』の花電車には、その美しさと  
いい、迫力のある見事な演技とい  
い、本当に圧倒されました。

〇ところが今度、愛妻の真知子さ  
んから、『あたしの演じたライブ  
ショー』という文章が寄せられて  
きました。夫婦プレイの8ミリを  
見せて貰った直後だけに、大いに  
感激して読みました。今月号では  
誌面の都合で載せられなかったの  
ですが次号には御覧に入れます。

〇四月号から新しく発足しました  
辻村隆氏の「耽奇房我楽多控」は  
早いもので第3回を迎えて、幸い  
にして好評、辻村節依然として衰  
えずというところだ。今後の展  
開が大いに期待されます。

〇小雅田勇氏が「女体緊縛各論」  
を書くための資料を求めてまいり  
ましたが、こうした「緊縛論」や  
「SM論」をお考えの方は、どし  
どし御寄稿下さるよう、お願いし  
ます。告白、体験なんかも、永続  
性のある本誌へお寄せ下さい。

〇ルポライターとして身辺の余暇  
を捻出された塚本鉄三氏が、新し  
い構想の責めのアイデアを練って  
おられるそうなので、SMに関心  
をお持ちの女性愛読者の方、どう  
か、編集部気付にて、お便りをお  
寄せ下さるよう、お待ちしております。



イメージ画『艶夢』黒田 縛



## 私とSMプレイをしませんか

宇 野 真理子

私は表向きは白衣を着た普通のマッサージなのです。生まれつきのマゾなんかでは決してありません。田舎の素朴の女として暮している筈だったのですが、家出、不良少女の仲間入り、ヘルス嬢、ヤクザの女なんかを、転々としていくうち、このような境遇になってしまったのです。

私がこのようにマゾの性格の女になってしまったのは、忘れもしません、上六のマッサージクラブに所属していましたときの、あの

考えても、おぞましいリンチを受けてからなのです。

丁度、夜の十時頃です。客から呼ばれて順番で、私が出かけました。ホテルの部屋へ入りました。目の鋭い若い男がヤクをうち終わったらしく、アンプルを畳の上にとらばしたまま、一服吸っているところでした。当時の私はまだこの道に入って間なしで、まごまごしていますと「お前か。早く、こちへ来て、もまんかい」と凄権幕で言います。

私が、いざり寄って、その男の肩へ手を当てようとしたら、その手首を大きな手で握って、ぐっと引き寄せ「ふん、ちょっとハクイメンしとるぜ」そう言っ、強引に手を回して抱きつこうとしました。私は背筋に悪感のようなものを感じて、手を振り払うと立ち上がろうとしました。

でも、手首は握られたままだったので、いきなり足払いをかけられて、その場にひっくりかえってしまいました。やっと起き上がったところを、三つ、四つと頬に激しい平手打ちを、喰いました。「ナメると承知しねえぞ、このアマ」男は私がおとなしくなるまで、殴るのを、やめませんでした。

私の目からは口惜し涙が、とてももなく流れました。お客商売の私たちの立場は弱く、そんな無法に對しても声一つ立てられませんでした。もし警察沙汰にでもしてそのホテルの顔をつぶしたら、もう二度と呼んでももらえないことになるのです。

私の涙を見て、私がすっかり諦めたと思ったのでしょうか。男は、「俺をフルとは太いアマだ。そこへ手をついてあやまらんかい」と言いました。

私が両手をついて、「どうも、すみませんでした」と詫言ますと「そうかい、素直に、俺の言うことを聞いてりゃ、それでいいんだよ」と、急に男は、おとなしくなりました。ホッとした私に、男は「風呂へ入れ」と、強制するので

断わったら、何をするかわかりませんので、トイレの前で、そつと洋服を脱ぎました。お風呂へ入ろうとしますと、待っていたように、男は、「こちへ来い」と言います。結局、そんなことを言った男の目的は、私を裸にするためだったらしいのです。

お風呂へは入れてもらえず、素裸のまま、部屋の中を犬のように這いまわされ、這い方がおそいと云って、壁にもたれたまま秘所の検査をされ、さんざん弄ばれました。アヌスのまわりの毛まで指でむしり取られてしまいました。そんなにされても、私はじっと辛抱していました。すべて生まれて始めての体験だったので我慢するのが、せい一杯だったのですけど、そんないじめられ方が終わってしまいますと、なんとなく、ほのぼのとした快美感が身体に残っていました。



## 「素描」よみじどり



交際を始めて五カ月。まだ、改  
ってプロポーズもしていないけれ  
ど、彼女のもう一人の彼女にお目  
にかかってもらえないけれど、僕は

もう、彼女の滑らかな肌の九分通  
りまでは知っている。  
残る一分の未知区画はあるけれ  
ど、僕は彼女に打ち開けている。

## 焦らされている僕のS

## 保世 きんじ

それ以来、私はもう一度、あんな目にあつてみたいと思いましたが、あの男は一度と私の目の前にはあらわれませんでした。こんな商売をしておりますから、時にはスペシャルや口でのサービスをさせられる事がありますが、あんなにして、私をいじめるお客は一人も見えません。一度、バイブを使って、私を楽しませてくれた人がありました。とても、あの男に

経験したあの事が今でも忘れられないのです。夢の中では御誌にのっている様な責められ方をしている自分を想像ばかりしています。あの男に、あんな目にあいさえしなければ、こんな気持ちにならないものをと、時には栗の花のニオイのする男の物を口にしたりしますが、この気持は慰められません。真理子は、いま黒門町の近くのマッサージクラブで、源氏名を松尾といつて働いています。もし読者の方の中で、私をいじめてみようと思われる方がおられましたら

どうか、お願いします。私はもう空想しているだけでは我慢できないのです。一人暮らしで生活がかかっていますので、只というわけにはまいませんが、マッサージ代（一時間千二百円）だけは払って下さい。こんな女でもよろしければ、SMプレイしてね。

私は昼はある新興宗教の信者なので、そちらの方の手伝いに行つていてダメなのですが、午後六時以後でしたらクラブの方に行つています。電話番号は06・六三〇二×一九松尾と呼んで下さい。

僕のSM願望の性向を……

彼女はピンク映画でも付き合つてくれる。わざと縛り場面の多そうな映画を選んで誘う。もう二年も前からの奇ク愛読者である僕のことを知っているからだろうが、映画館を出たあと、「面白かったでしょう」とか「お目当てシーンが少なくてお気の毒さま」とか云って、くすくす笑う。

「きみは縛りをどう思う？」と訊くと、「女優さんみたいへんね」など云って、カンジンの縛りについてのことは、はぐらかす。もちろん僕は、余勢をかってキスをし、柔肌をまさぐる。彼女は

私は三十一才、同棲したことは一度ありますが結婚したことはなく、今は一人暮らしなので私の生活をつぶさないで、その場かぎりのSMプレイを楽しみたいような方と、めぐりあいたいと思っています。

私はまだ、一度も縛られたことはないのですけれど、身体に傷あとか残らないようにして下さるのだったら、縛られてみたいと思つています。どんなにいじめられ方をしたいかという事は、自分でもよくわかりませんが、それは、すべ

ておまかせします。よろしく。

立ち入り禁止区域外なら、ある程度までじつとして任せてくれる。但し、車の中でだけだ。いくら暗い公園で、お仲間があちこちに居ても、絶対に戸外ではイヤだと云う。それなら、というので僕は、何度もホテルに誘ったが、これも僕のアパートに来ることと共に、まだ一度も実現していない。

「縛られるのはまだ早いわ」というのが決まり文句だが、僕はじりじりしてしまふ。女子大生の彼女は、僕を、ある観察材料にしているフシもなくはない。もし本当にそうなら、容赦なく縛り、責めてやることも出来るのだが……



## 大塚啓子さんに憧れた頃

西行 呷次郎



懐かしい大塚啓子さんの手記を四月号に発見して、彼女が誌面狭しとばかりに、あの豊満な裸身で活躍していた頃の熱烈なファンとして大変に嬉しく思いました。

その手記が、花田一郎氏に対しての返書であることには、すこしばかりひっかかるんですが、返事が貰えるような呼びかけもなかった自分を恨むより仕方がないことと諦めるべきでしょう。

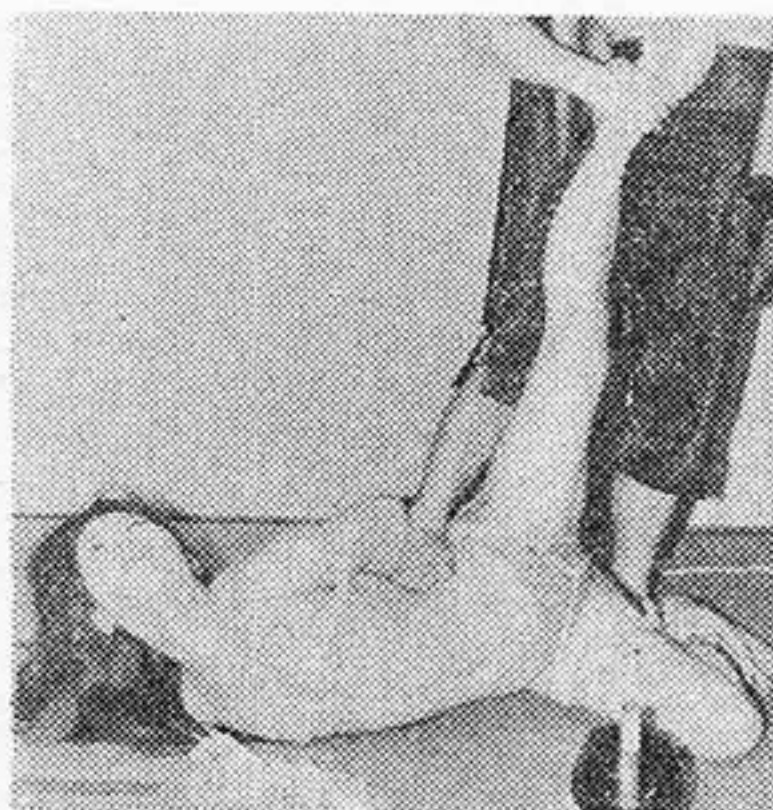
あの頃は、自分のことながら、全く頭が、どうかしていたようです。麗しの被縛女体に憧れて悶々とし、ついに決心して一束のロープをポケットに忍ばせ、唯一人のガールフレンドを呼び出したもの

＜感想＞スクリーンの  
秋山夫妻を見て  
広野 比徒理



「耽奇房我楽多控」で、わが辻村隆センセイが、秋山夫妻再起のアドバイスの折に「失望と落胆」した旨を書かれていたが、私もあの

映画「エロスの女王」を見て、期待を裏切られた思いだった。なぜならば、かつて夫妻が「11PM」出演の際、奥さんは「舞台が私のセックスです」と発言されて、大変に私を喜ばせてくれたのだが、今回の映画中に流れた、秋山氏の「残酷ショーに取り組んだ動機」の言は、「当時どの週刊誌にも縛りが採り上げられていたもので」ということで、それが例え公け向けの辞句にしろ、SMによる愛の表現というニュアンスは、少しも感じられなかったからである。曰く云い難いものを期待した私がワルカッタらしい。



私は、画面の辻村氏を含めた三人の「縛りショーの研究」場面を冷静に見、「果たしてこの芸が大衆に理解されるだろうか」のナレーター言葉を佻しく聞いた。

## ＜告白＞オシメカバーは

小さかった

小西 一嘉

私は自分の子供の頃の事について、かなりな程度に自分自身で偽って生活してきました。それ故、自分の過去の事について告白する事によって、自分自身の精神面に於ける偽りをなくす事が、私の今回の告白の目的です。

小学四年の夏休み前の事です。

当時、私は一人の同級の女の子が好きになっていました。私のクラスで一番の美人でした。彼女を見る事が私の唯一の喜びでした。男が女を好きになるのは自然の事で別に変わった事でもありませんが好きになればなったで、彼女の顔を見るのさえ、恥かしくなる状態でした。

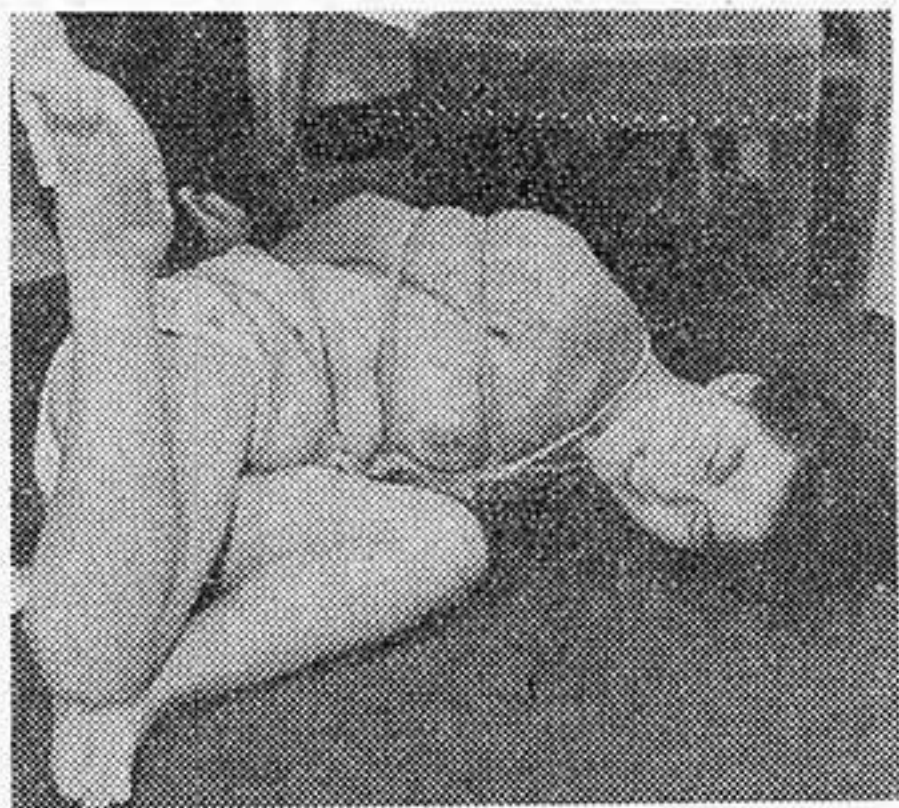
そんな私は、ある日、学校の帰りに川の中で、オシメカバーが石の上にあるのを見つけました。田舎の事ですから、洗濯でもしてい

て残し忘れたのでしよう。

私は、なんとなく自分の心が弾むのを覚えました。当時、私は授業中、朝、便所へ行かなかった日は必ず、便意に悩まされていた。それのみならず、時には耐えられず漏らしてしまう事さえあったのです。赤ちゃんの時のオシメカバーの効能を知っていた私は、そんな時、オシメカバーをしていたらと考えました。

私は夢中で川の中へ入ってゆきました。この機会を失ったら再び





の、顔を見ると口説の切り出しも出来得ず、果たせぬ欲望の吐け場を娼婦に求めて、ようやく形だけの縛りを行なったまではよかったとしても、事後、法外な別途料金を要求されたのでした。

しかも、一度で懲りればよいものを、余り美しくもないが、金さえ出せば縛らせてくれるというところだけに釣られ、無理算段して通った一時期のことは、苦い記録として脳裡に灼きついていきます。

金の続かぬこともあって、自慰専門に戻った時のオナペットが、数ある緊縛裸女の内、大塚さん、貴女だったのです。ご健在なら是非一度……と願う気持ちを察して下さい、お話だけでも……。

## 最近の緊縛シーン

### —東山映史—

#### —映画通信—

任侠路線からポルノ路線に転向した東映では、池玲子や杉本美樹らを先頭に、「女番長」もので、緊縛シーンやムチ打ちなどSMを盛り込んでいる。

「不良姐御伝・猪の鹿お蝶」は、池玲子の女バクチ打ちに、スエーデンのポルノ女王、クリスチーナ・リンドバークを女スパイとして取り組ましている。池玲子のお蝶は父親の仇討ちを目指す、その父の仇の河津清三郎に逆に捕えら

せてみました。ところが私の体に比較して余りにも小さくて、オシメカバーとしては何の機能も果たさない事がわかりました。

オシメカバーの形はしていても母との思い出の形はしていても、今の私には何の役にもたたないです。私はオシメカバーを必要としましたが、今は体が成長してしまつて、もはや、どうする事も出来なかつたのです。

本誌を見て、オシメカバーに興

れる。裸にされ、豊富な乳房をクサリで喰い込むほど緊縛され、床にころがされている。それを、長いブーツをはいたサジスティックなスタイルのクリスチーナ・リンドバークがムチでピシピシ打ちまくる。さすがの池玲子も苦痛で、のけぞるというSMシーンは圧巻である。その後、太縄で縛られ吊るされている。やはり東映のナンバーワンの緊縛女優だろう。

また、クリスチーナ・リンドバークは、別の作品「ポルノ女王、にっぽんセックス旅行」では麻薬の運び屋で、荒木一郎にアパートに閉じ込められ、猿ぐつわをされ手足を縛られている。そして、手

味を持っている方が、私の他にも沢山おられるとわかって本当に驚きました。大人用のある事を本誌で知り数枚、買い求めました。

現在、その大人用のオシメカバーを交互にはいて、亡き母を偲びその感触を楽しんでいます。独身男性として、オンリー・ビジネスの『おねしょう防止用』（夢精のこと）に使っています。同好の方々の誌上での、お呼びかけを、お待ちしております。

クサリ、足クサリもされる。

ピンク映画のナンバーワンはもちろん、谷ナオミだろう。「猟奇色情絵図」では、妹の行方をさがす女バクチ打ちの浮草のお京で仇つばい姿を見せるがシビレ薬のために捕えられ、責め小説家のモデルにされる。腰巻一枚の半裸にされ、菱縄縛りで吊るされる。乳房を責められ、打たれ、さんざん責め抜かれるところは、本当にマゾを感じさせる女優だ。そして、お京の妹と、もう一人の女の三人が責め小説家の餌食にされる。

その他、最近の傑作は、日活の「秘天御開帳」「混血児リカ」などの緊縛シーンである。



☆四十八年新版SM蒐集品資料写真☆

本誌のカメララルポに登場した数々の魅惑のSM女性たちが、その奔放なSMに喘ぐ姿態を、その方々の手で開陳して、その目を、しませて参りました。今回更に、その強い要望に、今更には、華麗で若々しいアブな捧げ御機嫌を伺うことにしました。

イルリガートル責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八たふV  
一〇〇〇Cのイルリの微温湯が白いアヌスへ注ぎ込まれる。

変った浣腸の姿態

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八たほV  
二〇〇C硝子製浣腸器とエネマシリッジ、イルリの三種の浣腸器でそれぞれ変った姿態の浣腸

漏斗で温湯を注ぐ

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八たてV  
お尻を高々と天に向けて差し込んだ漏斗に次々と温湯を注いで、お腹の中は今やポンポコポン。

二〇〇CC圧入す

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八たちV  
グリセリン溶液が二〇〇CCのポンプから一挙に圧入されて直腸にしみ渡る浣腸液の凄い感触。

三種の神器活躍す

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八たわV  
浣腸の三種の神器、エネマとイルリとポンプ。中でも二〇〇CC硝子製浣腸器が大活躍をする。

浣腸液充分に入る

大手札三枚一組 五〇〇円  
前田真知子 略号八たゆV  
今や浣腸液は思い切り直腸に入り襲いくる強烈な便意と戦いつつ全裸の肢体を余すことなく晒す。

責めの味に泣く女

大手札三枚一組 五〇〇円  
玉木 章子 略号八れりV  
激しい責めを受けてじっと耐えながらい、裸身に流れる電流のようなショックを噛みしめる。

憂愁の麗人を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円  
玉木 章子 略号八れおV  
責められて責められて、尚その良さに燃えあがる裸身のなかに、ベテラン女性の片鱗が見える。

激情に悶える全裸

大手札三枚一組 五〇〇円  
玉木 章子 略号八れかV  
一糸まとわぬ裸身を晒して強烈な縛り地獄の中で、のたうちまわる此のひとときの激情は何にか。

エビ責めと足縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たひV  
柔軟な肢体に加えられたエビ責めに、若さに漲る肌は激しい反応を示して微妙に蠢動を続けてゆく。

手足縛りと後手吊

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たえV  
猪吊りの準備に手足を揃えて縛られると、淫ましい臀部がきわで強調され、淫らにさえ見える。

逆手になった手首

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たよV  
後手に縛り上げると両手首のよくなる娘の拳を逆手にして高々と吊った絶妙の高手小手後手縛り。

片足吊り羞恥責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たつV  
嫌嫌というのも構わず片足だけ、が頭上よりも高くあげてゆけば、あられもない姿が展開される。

逆エビ責めの苦悶

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たとV  
若さと肢体の柔らかさを利用して情容赦なく逆エビに吊って、ばて流石の紀代も悲鳴を挙げた。

強烈な全裸の開股

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たみV

全裸に剥れた彼女は今や観念し諦めきったように命ぜられるままに開股のポーズをとった。

蛇のような縛り女

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たまV  
縛られながらも、うねうねと全裸の姿態を妖しくも淫らにくねらせて縄付きのまま悶えてゆく。

飼育されゆく裸女

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たせV  
股間縛りで引き回すと、次第に縄の快感にむせびながら、にじみ出るような媚態を展開するのだ。

マニア好みの緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八たもV  
縛りマニアこそ、こうした後手の方の良さを心から知ってくれる。

菱縄に身を委ねる

大手札三枚一組 五〇〇円  
西条 紀代 略号八ためV  
菱縄で裸身に喰い込む縄目の痛さに転々として、ろくにうねうねが、がてマゾの心境にひたってゆく。

◎送料はすべて当方にて負担いたします。故、御希望品の略号をお書きの上、前金にて、大阪市阿倍野局私書箱第14号、天星社へお申込み願います。



## 天然色(カラー) S M 資料

## 極彩色印画紙焼付プリント

## 柱縛り女体強烈ムチ打ち

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みあ▽  
臀部に炸烈する激しいムチ

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みこ▽  
ムチにのけぞる豊満女体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みけ▽  
悦虐に悶える妖艶な女体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みて▽  
鞭打ちに泣く美貌の女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みも▽  
転り回って悦虐に泣く女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みひ▽  
鞭に喘ぐ美女の全裸全身

カラー三枚一組一〇〇〇円  
関谷富佐子 略号△みの▽  
双胎の臨月蛙腹の写真

カラー六枚一組二五〇〇円  
増田みゆき 略号△れや▽  
双胎の臨月腹強烈縛り

カラー六枚一組二五〇〇円  
増田みゆき 略号△れゆ▽  
双胎の臨月太鼓腹の媚態

カラー六枚一組二五〇〇円  
増田みゆき 略号△れえ▽  
股間縛りの開股羞恥責め

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れよ▽  
股間縛りの開股羞恥責め

## 股間縛りに羞らうM女の生態

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れに▽  
黒縄縛りの羞恥媚態

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れぬ▽  
立縛りにあう全裸の女体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れね▽  
開股された股間縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れの▽  
豆絞りの猿轡で強烈責め

カラー三枚一組一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れむ▽  
独りで遊ぶ浣腸プレイ

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△るむ▽  
美少女に淫らな開股縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るの▽  
責めぬかれた美少女の諦観

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るお▽  
高手小手後手縛りの裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るや▽  
真紅の腰巻姿での緊縛姿態

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るま▽  
羞らしいの裸女正面縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るけ▽  
若肌に喰い込む無惨な縄

カラー三枚一組一〇〇〇円  
一宮百合子 略号△るふ▽  
若肌に喰い込む無惨な縄

## 美しき緊縛の裸女立姿

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なひ▽  
転落寸前の緊縛された裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なも▽  
羞恥の椅子責にあう裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なす▽  
緊縛の裸身を長々と横たえる

カラー三枚一組一〇〇〇円  
左近麻里子 略号△なえ▽  
女相撲迫力投業の連続動作

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△なる▽  
高手小手の全裸の美しき肢体

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なゆ▽  
豆絞りの猿轡での全裸緊縛

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なめ▽  
赤い絨氈に悶える緊縛裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なさ▽  
豊満な臀部を晒して悶える

カラー三枚一組一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△なし▽  
真赤な腰巻姿での緊縛

カラー四枚一組一二〇〇円  
大塚 啓子 略号△うこ▽  
真赤な腰巻着用フェチ写真

カラー二枚一組八〇〇円  
大塚 啓子 略号△うお▽  
悶える二女の緊縛色模様

カラー二枚一組八〇〇円  
大塚・東浦 略号△うて▽  
悶える二女の緊縛色模様

## 柱縛りにあえぐ裸女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やか▽  
高手小手縛りに悶える全裸

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やき▽  
緊縛に喘ぐ刺青の美女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やく▽  
脱された着物の中で悶える女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やも▽  
縄にのたうつ全裸の妖女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やし▽  
腰巻一つで縛られる刺青女

カラー三枚一組一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やみ▽  
ポリウムの女体を縛る

カラー三枚一組一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てん▽  
猿ぐつわに呻く強烈縛り

カラー三枚一組一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号△てめ▽  
後手高手小手縛りの裸像

カラー三枚一組一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△てま▽  
豊麗な裸身に縄目がむこい

カラー四枚一組一二〇〇円  
大塚 啓子 略号△てこ▽  
全裸後手柱縛りの構図

カラー四枚一組一二〇〇円  
大塚 啓子 略号△てか▽  
刑罰足枷開股縛りの責め

カラー三枚一組一〇〇〇円  
愛知 葉子 略号△ゆな▽  
刑罰足枷開股縛りの責め



## Mフォト決定版と画集

思わずMファンをワクワクさせる迫力溢れたマゾの素晴らしい写真と絵とを特集しました。お申込み次第即刻焼付けてお送りします。

二人の女の餌食になる男

大手札36枚一組 六〇〇〇円  
山原清子外 略号△ほや▽

M男が屈伏するまで

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふそ▽

女の臀の下に呻吟する男

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふれ▽

二人の女になぶられる男

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふた▽

二女の股責地獄に泣く男

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふぬ▽

逆エビとムチ打ちで責める女

大手札12枚一組 三〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふち▽

鞭の強打で男を責める女

大手札10枚一組 二五〇〇円  
山原清子外 略号△ふよ▽

口中の汚水処理器(唾吐き)

大手札9枚一組 二二〇〇円  
山原清子外 略号△ふり▽

M男の顔を玩弄する美女

大手札8枚一組 二〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふわ▽

二人の女の馬になるM男

大手札7枚一組 一八〇〇円  
山原清子外 略号△ふる▽

女の臀臭をかかされる男

大手札6枚一組 一六〇〇円  
山原清子外 略号△ふお▽

男の口中に痰唾を吐く女

大手札6枚一組 一六〇〇円  
山原清子外 略号△ふね▽

縛り人形を踏むサジスチン

大手札5枚一組 一四〇〇円  
山原清子外 略号△ふつ▽

男の顔を踏みつけるS女

大手札3枚一組 一〇〇〇円  
山原清子外 略号△ふあ▽

股責め地獄に狂う女

大手札4枚一組 八〇〇〇円  
大塚啓子 略号△まそ▽

牛男をのりこなす女

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△はま▽

夫を責める新妻

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△はや▽

肩車の下にうごめく男

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らと▽

奴隷の誓いを契る男の生態

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らき▽

ハイヒールの足下に呻吟男

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らる▽

女に縛られるM青年

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らに▽

M青年をいたぶる女王様

大手札5枚一組 一〇〇〇円  
大塚啓子 略号△らへ▽

女が女に責められるまで

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
山原・鈴木 略号△さる▽

女が女を縛りあげる

大手札10枚一組 二〇〇〇円  
山原・鈴木 略号△さあ▽

女が屈伏させられるまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円  
鈴木・山原 略号△さや▽

啓子をいじめ抜く清子

大手札8枚一組 一八〇〇円  
山原・大塚 略号△うの▽

啓子を厳しく縛る清子

大手札8枚一組 一八〇〇円  
山原・大塚 略号△うな▽

清子を責める華麗なプレイ

大手札8枚一組 一八〇〇円  
大塚・山原 略号△うね▽

二女の馬にされるM青年

大手札8枚一組 一八〇〇円  
清子・啓子 略号△うま▽

二女のなぶりものになる男

大手札3枚一組 八〇〇〇円  
清子・啓子 略号△うろ▽

女を縛り上げて責める女

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えの▽

強烈くすぐり責め

大手札4枚一組 六〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えぬ▽

くすぐり責め地獄の女

大手札3枚一組 五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えな▽

手吊り股間縛り責め

大手札5枚一組 七〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△えお▽

豊臀の下に喘ぐ(マゾ画)

大中判五枚一組 一五〇〇円  
春川ナミオ 略号△こね▽

女体下敷力作M画決定版

大中判七枚一組 二〇〇〇円  
春川ナミオ 略号△ぬけ▽

女学生の浣腸悦虐姿態

大中判二枚一組 六〇〇〇円  
四馬孝画 略号△せか2▽

女体浣腸美の媚態

大中判三枚一組 一〇〇〇円  
四馬孝画 略号△のゆ▽

全裸妊婦の媚態画集

大中判三枚一組 九〇〇〇円  
四馬孝画 略号△にん3▽

強制浣腸に泣く責め図絵

大中判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△しき▽

緊縛女体の浣腸責め図絵

大中判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△しえ▽

凄絶妊婦の切腹図絵

大中判四枚一組 一二〇〇円  
四馬孝画 略号△せつ4▽

女体浣腸と排泄画集

大中判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△えい▽

女体吊り責め特集画録

大中判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△えほ▽

女性の鼻責めと美貌汚辱

大中判五枚一組 一五〇〇円  
四馬孝画 略号△えは▽

女体浣腸嗜虐場面図絵

大中判八枚一組 二〇〇〇円  
四馬孝画 略号△かき8▽



## 妊婦資料と妊婦責資料

妊婦のヌードと妊婦の責め写真

未婚の妊婦の両手吊り

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△わさ▽

突き出た若妻妊孕美の腹部

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△わし▽

麗わしの妊婦責めの魅力

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おひ▽

身籠った美しき裸身縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おも▽

裸身縛り恵子の妊孕美

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おす▽

初妊娠の裸身を羞らう

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△おぬ▽

妊婦全裸の羞恥フォト

大手札三枚一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△やま▽

妊婦全裸縛りフォト

大手札三枚一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△やむ▽

妊婦の九カ月腹フォト

大手札三枚一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△にみ▽

妊娠六カ月のヌード

大手札三枚一組 四〇〇円  
安原さゆり 略号△にそ▽

双胎妊婦腹全裸の鑑賞

大手札二枚一組 四〇〇円  
増田みゆき 略号△にえ▽

膨満双胎の腹部強調縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にく▽

妊婦の豊かな乳房と腹部

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にま▽

羞らいの妊婦媚態をさらす

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほこ▽

便々たる腹を突き出す妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△ほろ▽

双胎臨月腹の威容を誇る

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りて▽

見事に垂れた太鼓腹開陳

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りな▽

臨月の蛙腹のアップ写真

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りに▽

仰臥する臨月の蛙腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りね▽

双胎の臨月の剝玉子腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りふ▽

堂々と誇示する双生児腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りま▽

素晴しく巨大な臨月の蛙腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りは▽

豆絞り猿轡をされた妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りの▽

蛙腹に腹帯をする妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りへ▽

臨月妊婦を革具で責める

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りむ▽

全裸の見事な臨月腹を鑑賞

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△りす▽

出産間際の垂れた太鼓腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
安原さゆり 略号△りみ▽

臨月妊婦腹のヌードフォト

大手札二枚一組 三〇〇円  
安原さゆり 略号△りく▽

臨月腹の背面ヌードフォト

大手札二枚一組 三〇〇円  
安原さゆり 略号△りも▽

膨隆七カ月妊娠腹を見る

大手札五枚一組 七〇〇円  
増田みゆき 略号△にひ▽

妊娠七カ月の妊娠線

大手札五枚一組 七〇〇円  
増田みゆき 略号△にほ▽

七カ月の妊娠腹大写真

大手札四枚一組 六〇〇円  
増田みゆき 略号△にも▽

孕んだ若妻裸身に羞らう

カラ一四枚一組 一二〇〇円  
中河 恵子 略号△ぬね▽

孕んだ美女の妊婦腹観賞

カラ一四枚一組 一二〇〇円  
中河 恵子 略号△ぬめ▽

羞恥を晒す女体棒縛り

カラ一三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すそ▽

柔軟肢体二つ折り緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
美木乃々子 略号△ぬに▽

全裸正面の縄掛け艶姿

大手札三枚一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れる▽

柔肌の高手小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れほ▽

後手首を縛られた全裸体

大手札三枚一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れへ▽

飼育された可憐な美少女

大手札三枚一組 五〇〇円  
小池 美喜 略号△れと▽

猿ぐつわ着用全裸縛り

大手札五枚一組 七〇〇円  
美木乃々子 略号△ぬへ▽

真紅の腰巻着用縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
美木乃々子 略号△ぬち▽

可憐な表情の全裸縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆめ▽

股間縛りの柔肌いじめ

大手札四枚一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆも▽

雁字搦目の後手縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
金原奈加子 略号△ゆあ▽

浴室での全裸刺青さらし

大手札五枚一組 七〇〇円  
山原 清子 略号△よな▽

全裸の高手小手童女縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
長井葉津子 略号△よの▽



|               |                    |
|---------------|--------------------|
| パイプ責めに呻めく女    | 大手札三枚一組 略号△きわ 五〇〇円 |
| 両足挙げ柱宙縛り      | 大手札三枚一組 略号△きろ 五〇〇円 |
| 強烈黒縄縛り悦虐地獄    | 松本 たえ 略号△きろ 五〇〇円   |
| 羞恥責めに陶酔する女    | 大手札三枚一組 略号△きろ 五〇〇円 |
| 猿轡と縄に涕泣する瞬間   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 柱宙縛りと逆さ縛り責め   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 足を吊られた悦虐に泣く   | 松本 たえ 略号△きた 五〇〇円   |
| 浣腸溶液を圧入される    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 全裸で受ける三種の浣腸   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| イルリの嘴管挿入浣腸    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 突き刺さる浣腸器の恐怖   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 自ら施す浣腸の悦楽     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 体内に奔流する浣腸溶液   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 浣腸プレイを楽しむ美女   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| オシメから生ゴムカバーへ  | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| おムツに排便する乙女    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 生ゴム製のオムツカバー着用 | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| メロン腹白縄縛り      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 正面柱縛りの蛙腹      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 開脚縛り妊娠腹       | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 蛙腹を晒す開股責め     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 太鼓腹強調片足吊り     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 妊孕緊縛美の極致      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 美しき妊孕腹緊縛      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 八カ月の妊婦裸身開陳    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 柱縛りの九カ月腹妊婦    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 引き回された妊婦腹     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 膨隆妊婦腹の股間縛り    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 鏡に映る太鼓腹縛り     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 蛙腹誇張の緊縛美      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 足挙げ縛り蛙腹妊婦     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 卓の脚に縛った蛙腹妊婦   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 九カ月妊娠腹の緊縛美    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 豆絞りの猿ぐつわ哀情    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 逆エビ地獄の美女      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 麻縄亀甲菱縄縛り      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 後手高手小手縛り三態    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 卓上の緊縛悦虐姿態     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 全裸浴室での股間縛り    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 悶える踊子の欲情処理    | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 美しき全裸の縛り      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 柱縛りと脚挙げ縛り     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 荒縄強烈エビ縛り      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 荒縄悦虐羞恥責め      | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 悶える強烈海老責め     | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 柔肌をくびる厳しき縄目   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |
| 緊縛の全裸女体をいびる   | 松本 たえ 略号△きは 五〇〇円   |



|                                                |                                                |                                                |                                              |                                               |                                               |                                                |                                                |                                                |                                              |                                                |                                               |
|------------------------------------------------|------------------------------------------------|------------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------|------------------------------------------------|------------------------------------------------|------------------------------------------------|----------------------------------------------|------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| 血紅女体切腹絶命ポーズ<br>大手札四枚一組 略号八せんV<br>六〇〇円          | 女体切腹シリーズ<br>大手札12枚一組 略号一八〇〇円<br>大塚 啓子 略号八せい12V | 血紅切腹祭壇に果てる女体<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>大塚 啓子 略号八せぬV | 首桶に落ちる女的首<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>水野加代子 略号八せへV  | 愛妻の切腹を介添えする<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>水野加代子 略号八せほV | 切腹する女体を介錯する<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>水野加代子 略号八せはV | 血紅使用介添え切腹<br>大手札五枚一組 略号八〇〇円<br>大塚・東浦 略号八きつV    | 介添え切腹の女<br>大手札四枚一組 略号六〇〇円<br>甘木 春子 略号八あかV      | 自刃した血まみれ屍体<br>大手札10枚一組 略号一五〇〇円<br>山原 清子 略号八えしV | 自らの腹を切り裂く女<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>大塚 啓子 略号八やいV | 自ら柔肌を切り裂く場面<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>大塚 啓子 略号八やえV  | 自らの下腹に突き刺す刃<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>大塚 啓子 略号八やおV |
| 血紅女体切腹苦悶悦楽表情<br>大手札五枚一組 略号七〇〇円<br>大塚 啓子 略号八くえV | 哀婉美女の血紅切腹<br>大手札五枚一組 略号七〇〇円<br>大塚 啓子 略号八るなV    | 絞首刑に果てる女体<br>大手札二枚一組 略号四〇〇円<br>新宮夫人 略号八るくV     | 引回しと晒の処刑<br>大手札二枚一組 略号四〇〇円<br>新宮夫人 略号八るにV    | 血紅使用血まみれ切腹<br>大手札五枚一組 略号七〇〇円<br>大塚 啓子 略号八わいV  | 殿中の自決女体切腹<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>大塚 啓子 略号八わこV   | 切腹美態から絶命ポーズへ<br>大手札五枚一組 略号七〇〇円<br>大塚 啓子 略号八わはV | 女体自刃の美態<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>細川アヤ子 略号八ねにV      | 女体切腹媚態<br>大手札二枚一組 略号四〇〇円<br>細川アヤ子 略号八ねはV       | 肉体美少女全裸切腹<br>大手札五枚一組 略号七〇〇円<br>長野 良子 略号八なせV  | 禪裸女血斗凄惨場面<br>大手札五枚一組 略号七〇〇円<br>絹川・大塚 略号八らはV    | 和洋争斗場面展開<br>大手札六枚一組 略号八〇〇円<br>田中・愛川 略号八らりV    |
| 血紅使用斬られる美女<br>大手札七枚一組 略号一〇〇〇円<br>絹川 文代 略号八らふV  | 鎌腹を切られる女<br>大手札二枚一組 略号四〇〇円<br>愛川・田中 略号八らくV     | 咽喉笛を刺される女<br>大手札二枚一組 略号四〇〇円<br>愛川・田中 略号八らみV    | 斬首の瞬間<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>新宮夫人 略号八のきV       | 晒台の女の生首<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>新宮夫人 略号八のくV      | 全裸正面切腹姿態<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のみV    | 切腹に悶える悦虐裸身<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のそV   | 切腹した裸女の屍体<br>大手札12枚一組 略号二〇〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のいV  | 美しき裸女の屍体<br>大手札12枚一組 略号二〇〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のりV   | 屠腹される女体<br>大手札12枚一組 略号二〇〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のるV  | 立腹切腹に悶える女体<br>大手札10枚一組 略号一八〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のさV | 切腹に苦悶する裸女<br>大手札10枚一組 略号一八〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のむV |
| 絞首された女体<br>大手札六枚一組 略号一二〇〇円<br>大塚 啓子 略号八のひV     | 斬首処刑場面<br>大手札二枚一組 略号四〇〇円<br>新宮夫人 略号八くしV        | 絞首刑にされる女<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>新宮夫人 略号八こけV      | 血まみれ血斗場面<br>大手札12枚一組 略号二〇〇〇円<br>山原清子外 略号八えみV | ゴムフエチの美体<br>大手札四枚一組 略号六〇〇円<br>梨花悠紀子 略号八こまV    | ゴム包みの束縛女体<br>大手札四枚一組 略号六〇〇円<br>東浦ひかる 略号八こはV   | メンスバンド只今着用<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八もかV   | 白禪刺青女体脇差切腹<br>大手札10枚一組 略号一八〇〇円<br>山原 清子 略号八ひにV | 白禪刺青女体短刀切腹<br>大手札10枚一組 略号一八〇〇円<br>山原 清子 略号八ひぬV | ゴム衣着用緊縛<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>水本 茂美 略号八みすV    | メンスバンドを脱ぐ女<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>遠藤百合子 略号八ゆおV   | 月経帯を着けた緊縛<br>大手札三枚一組 略号五〇〇円<br>遠藤百合子 略号八ゆすV   |



|               |                  |       |
|---------------|------------------|-------|
| 両足首括り逆さ吊り     | 大手札五枚一組<br>略号ハさか | 八〇〇円  |
| 梨花悠紀子         | 大手札五枚一組<br>略号ハさか | 八〇〇円  |
| 手足逆さ宙吊り       | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 梨花悠紀子         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 逆さ吊りの女体を析檻    | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 梨花悠紀子         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| メンスバンド着用替ゴム見せ | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 股に喰い込む黒フンドシ   | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 股を開いた黒フンドシ姿   | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 開股逆さ吊り姿       | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 左近麻里子         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 左近麻里子         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 強烈責め被虐の果て     | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 梨花悠紀子         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 踊り子の美しき緊縛     | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 絹川文代          | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 股間縛りの法悦境      | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 絹川文代          | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 相撲着用の艶姿       | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 美木乃々子         | 大手札五枚一組<br>略号ハさと | 八〇〇円  |
| 六尺褌着用の艶姿      | 大手札七枚一組<br>略号ハぬお | 一〇〇〇円 |
| 美木乃々子         | 大手札七枚一組<br>略号ハぬお | 一〇〇〇円 |
| パリスSSバンド着用    | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| サカエメンスバンド着用   | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| サカエ軽便型バンド着用   | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| パリスメンスバンド前開き  | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 携帯用白色メンスバンド着用 | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| パリスバンド着用縛り    | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| パリアメンスバンド着用   | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 相撲褌を締めた女      | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| メンスバンド着用開股ポーズ | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 黒ゴム衣後手縛り      | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 木村洋子          | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| ゴム衣緊縛悶悦姿      | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 木村洋子          | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| ゴム衣とゴムの猿ぐつわ   | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 木村洋子          | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 甘美なる椅子ブレイ     | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 中河恵子          | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 開股拷問椅子の正面責め   | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 中河恵子          | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| オムツ着用の股間縛り    | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 東浦ひかる         | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| オムツ着用フエチフォト   | 大手札七枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| 大塚啓子          | 大手札七枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| オシメをつける二人プレイ  | 大手札六枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| 山原・東浦         | 大手札六枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| ゴムのオムツカバー強制着用 | 大手札六枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| 山原・東浦         | 大手札六枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| 生ゴムの猿ぐつわ責め    | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 木村洋子          | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| オシメ着用と女学生     | 大手札七枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| 大塚啓子          | 大手札七枚一組<br>略号ハおこ | 一〇〇〇円 |
| 六尺フンドシの女性像    | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 関谷富佐子         | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 黒フンドシを着用した女   | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 大塚啓子          | 大手札四枚一組<br>略号ハおこ | 六〇〇円  |
| 黒フンドシの女(背面)   | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 遠藤百合子         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 黒フンドシの女(正面)   | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 遠藤百合子         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 黒フンドシを誇る姿     | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 遠藤百合子         | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 黒フンドシ背面刺青模様   | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 山原清子          | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 黒フンドシ入墨姿      | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 山原清子          | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 黒ふんどし媚態の魅力    | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 山原清子          | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 白晒六尺フンドシの姿    | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 山原清子          | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 黒六尺フンドシを締めた女  | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 刑部典子          | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| フンドシ姿の羞らしい    | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 栗本ミチ          | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| フンドシ姿の女の魅力    | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 栗本ミチ          | 大手札三枚一組<br>略号ハおこ | 五〇〇円  |
| 六尺褌の羞じらい      | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 横尾峯子          | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 双臀に喰い込む褌      | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 横尾峯子          | 大手札五枚一組<br>略号ハおこ | 七〇〇円  |
| 褌美に羞じらう女      | 大手札六枚一組<br>略号ハおこ | 八〇〇円  |
| 玉田美佐子         | 大手札六枚一組<br>略号ハおこ | 八〇〇円  |



## 最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

S M組百態

大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚

八〇〇円

十組十枚

一五〇〇円

二十組二十枚

二八〇〇円

五十組五十枚

五〇〇〇円

百組全部百枚

八〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社  
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新し  
いマゾ女性の方が、清純に或は妖  
艶に、それぞれその個性にマッチ  
した縛られ方責められ方をされて  
甘い吐息を洩しています。マニア  
の方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な  
資料を加えて頂きたく、ここにS  
Mの香ぐわしい魅力に溢れるニ  
ュフォートを提供いたします。

☆

1 片足吊りに喘ぐ(玉木 章子)  
2 柱に晒す全裸女(玉木 章子)  
3 猿轡に呻く縛女(玉木 章子)  
4 開股縛りの片足(玉木 章子)  
5 菱縄縛りに泣く(玉木 章子)  
6 右足挙げ柱縛り(玉木 章子)  
7 日陰の女の羞恥(玉木 章子)  
8 開股責めの正面(玉木 章子)  
9 八の字開脚責め(玉木 章子)

10 乳房縛り真正面(玉木 章子)  
11 開股縛りの強要(玉木 章子)  
12 正座正面晒縛り(玉木 章子)  
13 バイブ責め姿態(玉木 章子)  
14 絶叫！開脚責め(玉木 章子)  
15 手吊り足吊り責(玉木 章子)  
16 臀部からの苛虐(玉木 章子)  
17 正面で足を開く(玉木 章子)  
18 卓上の開股痴態(玉木 章子)  
19 縄は女を泣かす(玉木 章子)  
20 強烈縛りに開脚(玉木 章子)  
21 強烈海老責縛り(江口 淑子)  
22 鞭打ちにもがく(江口 淑子)  
23 強制する開股責(江口 淑子)  
24 辱恥をさらける(江口 淑子)  
25 奴隷の誓を開陳(江口 淑子)  
26 排泄姿態の強制(江口 淑子)  
27 耐久力ガシ責め(江口 淑子)  
28 排便姿態で縛る(江口 淑子)  
29 欄間に晒す開股(江口 淑子)  
30 答で強要の汚辱(江口 淑子)  
31 縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子)  
32 浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子)  
33 凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子)  
34 大の字開脚晒し(鈴木千鶴子)  
35 棒責め裸女失神(鈴木千鶴子)  
36 両足首開脚吊り(鈴木千鶴子)

37 全裸手吊り正面(鈴木千鶴子)  
38 エビ責にあえぐ(鈴木千鶴子)  
39 艶美椅子に悶ゆ(鈴木千鶴子)  
40 全裸緊縛浣腸責(鈴木千鶴子)  
41 足の裏の温い女(深田 菊子)  
42 亀甲縛乳房責め(深田 菊子)  
43 足を吊るのは嫌(深田 菊子)  
44 強制開股椅子責(深田 菊子)  
45 交叉した手首結(深田 菊子)  
46 伸びやかな肢体(深田 菊子)  
47 のけぞる両の足(深田 菊子)  
48 開股で見ないで(深田 菊子)  
49 縄猿轡海老責め(三浦 純子)  
50 令夫人緊縛横顔(三浦 純子)  
51 引回された裸女(福井 桃子)  
52 色気発散の脚線(福井 桃子)  
53 さあどうするの(福井 桃子)  
54 寝乱れたマダム(福井 桃子)  
55 臀部晒し柱縛り(福井 桃子)  
56 高小手臀部晒(福井 桃子)  
57 長髪の美女緊縛(福井 桃子)  
58 縛られてお喋り(福井 桃子)  
59 縄が痛いんだよ(福井 桃子)  
60 高々と上る手首(福井 桃子)  
61 ポリウムを括る(笠井奈保子)  
62 逞ましき臀部責(笠井奈保子)  
63 太股に喰込む縄(笠井奈保子)  
64 飛出す乳房責め(笠井奈保子)  
65 柔肌に喰込む縄(笠井奈保子)  
66 豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子)  
67 首縄高小手縛(笠井奈保子)  
68 縄の束に埋れる(笠井奈保子)

69 開股強制を拒む(笠井奈保子)  
70 喰い込む股間責(笠井奈保子)  
71 美少女逆エビ責(前田真知子)  
72 足吊りくの字指(前田真知子)  
73 股間縛りで開脚(前田真知子)  
74 交差した後手首(前田真知子)  
75 強烈股間縄涕泣(三浦 純子)  
76 バイブ責で悶絶(松本 たえ)  
77 高々と後手縛り(松本 たえ)  
78 強烈海老開股責(松本 たえ)  
79 柱縛り正面晒し(松本 たえ)  
80 後手両手逆吊り(松本 たえ)  
81 責められた乱髪(大塚 啓子)  
82 後手縛り足吊り(大塚 啓子)  
83 全裸柱抱き縛り(大塚 啓子)  
84 タロープ首縄責(大塚 啓子)  
85 麻縄亀甲絞縛り(荒尾 慶子)  
86 喰込む縄股間縛(荒尾 慶子)  
87 首縄縦縛り正面(荒尾 慶子)  
88 強烈緊縛で絶頂(荒尾 慶子)  
89 美体乳房強調縛(荒尾 慶子)  
90 股間縛りの麗姿(荒尾 慶子)  
91 海老責浣腸地獄(長井葉津子)  
92 後手吊りの全裸晒(長井葉津子)  
93 迫るイルリ嘴管(長井葉津子)  
94 素人娘緊縛全裸(長井葉津子)  
95 浣腸責めの恐怖(長井葉津子)  
96 半減した浣腸液(長井葉津子)  
97 稚き臀部を開く(長井葉津子)  
98 麻縄縛りの正面(長井葉津子)  
99 注ぎ込まれる液(長井葉津子)  
100 洋裁生のM姿態(長井葉津子)



〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

昭和四十年頃より四十二年頃に  
かけて天竺社に於て分譲して  
ましたSM資料写真は、その後  
譲中になつておりました。最  
近になつて再開を強く望ま  
れております。御注文の方に  
増をいたします。作成の上、  
五日間の予定で、早速に御  
送付申し上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わふ▽

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わむ▽

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わら▽

女王様の臀臭をかかす

大手札二枚一組 略号△六〇〇円  
花田沙登子 略号△わけ▽

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わな▽

女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 略号△一五〇〇円  
花田沙登子 略号△わね▽

△入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よひ▽

全裸の入墨女賊折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よせ▽

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よゆ▽

ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よめ▽

凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よす▽

全裸の四つ這い木馬責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よも▽

逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よき▽

大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よさ▽

△日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もと▽

石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もへ▽

凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もに▽

女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もち▽

白洲答打ち折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ▽

非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もろ▽

美木乃々子 略号△もぬ▽  
土壇で胴斬りの仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もり▽

白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もは▽

△M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まふ▽

二女にいじめられるM男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まも▽

美女二人から縛られる男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まね▽

男馬を乗り潰す裸女二人

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まめ▽

痛烈、ムチ打ちの馳走

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まれ▽

首絞めでM男に止どめを刺す

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まむ▽

汚臭と足舐めの強要

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まり▽

二女の臀臭にむせび泣く男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まみ▽

パンプスの下に喘ぐM男

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△わそ▽

豊満な太股で首を股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
長野 良子 略号△ほふ▽

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△わよ▽

男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△わた▽

顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号△一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△らも▽

△女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹  
大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 啓子 略号△せ10▽

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 啓子 略号△ひた▽

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 啓子 略号△ひと▽

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
甘木 春子 略号△まに▽

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 啓子 略号△れは▽

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 啓子 略号△れみ▽

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△のせ▽

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
絹川 文代 略号△ちた▽

豊満腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
長野 良子 略号△ほふ▽



## M資料分譲品一覧

## ○新人S女性出現○

- 遅しき股に挟まる  
大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり  
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理  
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる  
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる  
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男  
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女  
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神  
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽  
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香  
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- M男性を尻に敷く  
略号(あこ) 一二〇〇円

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み  
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる  
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子  
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女  
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め  
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景  
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女  
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く  
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下につくめく顔  
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男  
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女  
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

- 人間椅子の御褒美  
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える  
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女  
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首  
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻  
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ  
大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制  
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔  
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 女に縛られて弄ばれる  
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面  
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年  
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

- 男を縛って玩具にする  
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる  
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男  
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ  
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態  
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程  
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男  
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く  
大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味  
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者  
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図  
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円





始めて、この雑誌を見ました。

何か私の心の中にも、共通の感受性が秘められているような気がしてなりません。私の彼が理解してくるので、個人的な秘密の漏洩を守って下さるのなら、編集部の方に、おもしきり責めていただきたいと思います。浣腸責めは、いやです。顔をとりられるのも、いやです。私が、辛抱できる責め方はローソク責め、開股縛り羞恥責め等々です。あとは御推測下さい。私は本当に何も知りません。よろしく御指導下さい。今、友だちと一緒に下宿していますので、もしお便り頂けるようでしたら信書でお願いします。

○(東京都文京区・栗田レミ)

奇クを愛読している写真を趣味

とする三十才の男性です。神戸市の小杉千恵様。4月号の読者通信を拝見し、ペンをとらせて頂きました。出来れば私が貴女の願いを聞きとどけたく思います。私は写真を現像、

焼付、引き伸ばしなどを自宅で行っております。未現像のフィルムが数本あるとか、先ずそれから始めて、後に貴女のMの美体の撮影に進みたいと思います。もちろん貴女の貞操を守り、絶対に他へ洩らさない事を約束します。私は現在、母と二人きりの生活をしておりますので、この約束は固く守れます。

○(尼崎市・坂田展明)

よい気候に、なってきました。いつも、奇クの見事な編集ぶりに感謝します。何故このように魅力があるのかと自分ながら心引かれるのを不思議に思っています。七年も続いた辻村氏のカメラハントが、三月号で終末を告げたことは淋しい限りですが、四月号からは、ハ耽奇房我楽多控Vとして、

再び健筆をふるわれていますので期待しています。後継者として塚本鉄三氏が控えています。3月号では、西条紀代さんの「処女しぱり」をした珍しいルポルタージュが誌上を賑わし、4月号5月号と、その西条さんの飼育の進展ぶりをルポされ、近頃、こんな経過を辿った報告書が少なかっただけに、大いに関心を持って読みました。塚本氏の今後の活躍を暗示するような、この三月間のルポは本当に楽しみました。それから、最近、特に目立って充実してきたのが、「奇クサロン」欄です。これは読者の層の厚さは勿論のこと、読者の中に実践者が多くなり、又執筆する人も多くなったことを物語るものとして、大いに喜ぶべき現象だと思います。

○(静岡県・月田逸夫)

千葉県の水島並子様、思い切った奇クモデルに応募なさった旨の読者通信を読みました。採用され、羞恥の美しさで誌上を飾られることを祈っております。せっかく決心なさったのですから、中途半端なマゾに終わらず徹底的に羞恥責めを受け、何もかもさらけ出して下さい。オシッコ写真に始ま

り、剃毛、強く双丘を割る股間縛り、縛り上げられてのバイブ責め思い切った浣腸ポーズ等々期待しております。

○(神戸市・国川栄一)

私は奇クを愛読している二十八才になる独身男性です。私は今までに一度もSMプレイの経験がありませんが、誰か仲間に入れて下さいませんか。私はS性とM性半分位の者ですから責める事も責められる事も大好きですので、SMどちらか好きな方、お便り下さいませんか。又私は女性の素足、特に親指に興味を持っています。女の子の足の親指を合わせ縛りにして、電気を通して責め、指の動きを見つめたいと夢にまで見ている私です。もし私の夢をかなえてくれる女性がいたら、便りを下さいお願いします。

○(千葉市・嶋田加津夫)

三月二十八日の11PMで「女相撲横綱決定戦」があり、珍しくアメリカの白人女性が女相撲横綱になりました。女相撲に興味を持っている私は、テレビの深夜番組に登場すると、欠かさず見えています。シャツにショートパンツ姿と



(大阪市・明石流太郎)

○

〓御送金についてのお願い〓  
 現金を普通郵便物に封入する  
 ことは、郵便法によって禁止さ  
 れています。現金での御送金の  
 場合には必ず「現金書留」でお  
 願ひ致します。他に、振替、定  
 額小為替、普通小為替等の方法  
 もありますのでご利用下さい。  
 便宜上「切手代用」にも結構  
 ですが、その場合は必ず一割増  
 にてお願い致します。

も上京の折、お寄りになりませんか。そして皆様と心置きなく語り合い、又プレーを行なおうではありませんか。

(埼玉県草加市・中野春雄)

私は奇クの愛読歴八年、結婚後三年になります。誌上での先輩の告白に勇気づけられ、私達も最近になってSMプレイを夫婦生活の中に、とり入れるようになりました。まだ子供がないので新婚時代の延長のようなもので、奇クが発売になった夜は、二人でベッドの中で読み、研究しています。先日五月号を読んでから、「剃ってやろうか」と、口をすべらしたところ「剃って、剃って」と、毎日のように、やかましく言いますので「それだったら責めにならないじゃないか」と大笑いしました。それでも昨夜、とうとう剃毛プレイを、やりました。渡部ご夫妻、早坂ご夫妻、三浦ご夫妻のような先輩の足跡を追って、これで夫婦SMプレイも一人前になったかと安心しました。すべすべとした玉の肌。童女のようなという表現の通り、素晴らしい感触と眺めに、一段と倒錯心の高まりを覚えました。残念なことにカメラを持っていま

せんで写真がとれないのですが  
これから先輩の後塵を拝して、充  
実した夫婦生活を送りたいと思ひ  
ます。よきご指導を賜れば幸い  
です。  
(奈良県・葛城昌二)

(奈良県・葛城昌二)

S M雑誌のハンランで、初めの頃は物珍しさとケバケバしさにつられて求めましたが、帰って読んでみると、やはり奇クを十数年にわたって愛読している私達にとつては、内容がなくて物足りなく、見出しにひかれて手を出しても、この頃では見むきもしないようになりました。週刊誌に、よくある手で、見出しや、みかけは面白そうにしてありますが、内容はなにもないのです。やはり奇クは真面目で読みごたえがあるなあと、改めて見直しました。五月号が、もう出るというのに、書店の店頭に四月号が、うず高く積まれているのを見ますと、S M雑誌も大分、飽きられたなあと、思わずには、いられません。さて、奇ク四月号では、カメラハントの筆をおさめられた辻村隆氏の新作「耽奇房我楽多控」は、やはり永年、手馴れた書きぶりと私達愛読者の馴染み深さもあって、好読物でした。五月号の「幻の少女」では従来の力



メラハントとは又、違った自由さが見られて、今後の展開が楽しみです。塚本鉄三氏がカメラルポで西条紀代という女性の飼育ぶりを三、四、五月号の三回にわたって連作された努力は大いに、かつてよいと思います。私達のように平常、容易にSMプレイをやれない者にとって大変、参考になりました。それにしても二カ月余り、たった三回にして浣腸プレイにまで発展させたとは、凄い腕前です。奇クサロンに登場される数多くの色々の傾向の方々の文章を読んでみると、人間性の不可思議さに驚異を感じると共に、勉強になりました。いろんな傾向の方々の文章で花盛りにして頂きたいと念じております。

(東京都北区・西マモル)

○ ぼくは今年、大学を卒業して社会人となった一青年で、Sを自認していますが、案外、平凡な人種かもしれません。ぼく自身の周囲にも奇クファンが沢山います。学術書を読むような気持で奇クに接している人も多いのです。奇クの内容は、他のSM雑誌なんか買う気にならないくらい素晴らしいのですが、なんだか中年の人向き

て感じがするのです。その点、若いぼく達にとって少し不満なのです。告白や体験手記は、とてもグッドだと思います。創作小説では現実性のある若いエネルギーに満ちたものも、取り上げて下さい。

(広島市・加沢雄作)

○ 初めてお便り申しあげます。私は二十一才の女性です。今年の二月十一日に結婚しました。新婚旅行には宮崎へ行ったのですが、そのとき夫は奇譚クラブの三月号を持ってきていました。私はその本を見てから、すっかり興奮してしまい、その晩、はしたなくも夫に手拭いで、しばらく愛されてしまいました。「吊られゆく美少女」という前田真知子さんの写真が大変、気に入りました。その時から私は奇クのとりこになってしまいました、四月号五月号も見せてもらいました。今では夫に一晚中ヒイヒイいうまで、責められるようになってしまいました。三冊の本を読んだから、私は急に自分もモデルになってみたかと思いましたが、雑誌にのっている人達が、なんとなく、うらやましく思ったのと、私も若いうちに、このようなきれいな写真にとって残しておき

たいという気持ちの両方です。私がモデルに、なぜ応募したか、おわかり頂けたいと思います。女って結婚したって、他の男の人から、いじめてもらいたくないという秘かな願望を持っているものです。あいにく手元に写真がありませんので結婚式の時の写真を同封致します。ずいぶん、きたない字で、ごめんなさい。こんな私でもモデルに使っていただけるかしら。すこし不安です。(茨木市・中河原広子)

○

二十数年、愛読して居ります。最近の貴誌は白表紙直前の黄金期の再来、又は、それ以上の充実で喜びにたえません。私共、浣腸ファンにとって毎月毎月、ルポ記事に浣腸が登場して最高です。浣腸小説も、一考して下さい。以前の浣腸写真では、坂口利子嬢や須川令子嬢のが素晴しかったと思います。五月号「浣腸という名の飼育に耐えた紀代」という塚本鉄三氏のルポは近來にない佳作でした。西条紀代という可愛いらしい少女の熱演には感謝します。挿入写真の、すべて浣腸しているところの迫真性が私を、いたく興奮させました。種々制約もあると思いますが、これからも私のような古くか

らのファンの意見を参考に、よろしく願います。

(東京都・能島孝之)

○ 小生は、女の切腹マニヤです。時々載る記事を、たのしみに見ています。これからも取り上げて下さる様、お願い致します。更にお願ひしたいのは切腹について(一般)の歴史。いつごろから切腹は、あるものか。その由来は、どうか。そして、女の切腹として、じっさい記録や、文学に残っているものは、どういうものがあるか。貴誌にも載る女腹切は、創作なのか実話なのか、知りたいと思うのですが、切腹研究専門家の居られる事です。から、ぜひ、お願いして下さい。じっさいは女の腹切りというもののは想像上のものと言う者もあるのですが、古い本では、どうなのでしょう。こういう事は雄松比良彦さんの「女相撲」を拝見して感じたわけで、小生、女相撲は普通の好奇心しかなかったのだがあれを見て「なるほど、ここにも一つの世界がある」と感じ入った次第です。こういうものを切腹の方でも、お願いしたいというわけ

(東京都渋谷区・小泉文雄)



○ 毎号、回を重ねる毎に「奇クサロン」の投稿も多くなり、内容も充実して来て、読みごたえがあり喜んでおります。さて小生種々な器具類を自作するのが趣味です。奇ク二月号の最上卓也氏の投稿に「玉ギラス」と同じものを製作してみました。これはM女の秘所に詰め込んで責める目的で作ったもので大小四珠が組で連なっています。大は四センチ径、小は一・五センチ径で未産婦、経産婦の両方に使用出来るよう配慮されています。使用状況は二月号二三八頁に写真が出ていますので御参照下さい。家内に使ってみたら予期以上の好結果でした。プレイは開股縛りにした上で小さい方から一個宛押し入れますが、二個目から反応が強くなり、四個目から女の息づきも荒く、ヒイヒイという声が洩れて来ます。三番目の珠にパイプを仕込んだものを試作しましたがこれは数に限りがありますので少人数の方に限り無料で頒布したく思っております。お申込みの手紙には実践者であることを物語る写真近況短信を必ず御同封下さい。

(福島市・川辺徳一郎)

○ 小沢昭一氏の新著「私のための芸能野史」(芸術生活社、四八、一、三〇発行)の中に高箭(たかだま)を中心とする女相撲についてくわしく述べられ、珍しい写真も沢山、入っております。女斗愛好各位、未見の方は、ぜひ御覧下さい。日本テレビのイレブンPMの方も最近技が高度になり、寄倒しと、うっちゃりのもつれや、土俵ぎわの投げの打ち合いなど、オーバーに言えば手に汗を握る？勝負もあるようです。この催しは最近は大相撲各場所の十一日目の水曜日に決まったのかと思っております。もしたら一月場所はなく、一週間後の一月二十四日に、ある予定で、新聞番組には出ましたがベトナム停戦特集に変更。私も散々困った経験がありますが、こういうことを、あとで新聞資料で拾い出すと思わぬ誤りがあるわけです。友人、高島君が外遊しましたので引き継いで最近の女相撲ものをピックアップしますと、週刊漫画ゴラク増刊、四十七年十二月五日号に「昭和股旅坊主」の巡業娘相撲団のマンガがあり、漫画ボイン画報版同十二月一日号にグラビヤで「悩殺！ 女相撲」週刊漫画Q四

十八年二月十四日号に「横綱萬古山」ポケット版「スポーツ」創刊号に例の白六尺禪の娘相撲、「ラブハンター」二月増刊号の裏表紙ウラに団鬼六氏監修「愛奴・I」の五枚のうちの一枚。他誌のマンガに、人気力士にケイコをつけてもらう女の子の腹がふくれ出し、四股を踏むと前袋から赤ン坊が転げ落ちるというのがありますが、実際、臨月でなくても腹の子を殺すために女が相撲をとった(人べらしのため妊婦同士が激斗する)というのは老人から聞いた事があります。(京都・雄松比良彦)

○ 初めてお便り差しあげます。私は二十四才の会社員です。私は小さい時から一つの夢を持っています。それは女装したいという事です。といっても同性愛ではありません。女装して女性とレズプレイを、したいのです。そして、もう一つ、私は黒という色に強くひかれていきます。黒は悪魔的で、しかも神秘的な色だと思ふのです。どなたか女性の方で、こんな私の望みを、かなえてくれませんか。

(兵庫県明石市・魚住明)

○ 1月号に載った福島和男さんの

「女子トイレ考現学」には驚きました。こんな死角が都会の中にあるとは、私も気がつきませんでした。うっかりしていました。都会という所は面白い所ですね。でも福島氏の勇氣と実行力には恐れいりました。一覧表のデータは是非発表して欲しいものです。コプロ趣味を、いささか持っている私には、貴重な文献に思えてなりません。その後、続きが発表されないようですが。それと3月号での豊田二浪氏の「密室での女の生息」は、アルバイトの仕事の中から、女子トイレを覗くことが出来たとは、これも私にとっては盲点でした。暇が出来たら、自分もアルバイトに出たいと思ったりしました。折柄、新聞の広告でビル清掃下請会社が清掃夫を求めています。今の私は仕事の都合で応募出来ないのは残念です。いづれ暇を見つけて体験したいと考えています。その時は必ず体験記を投稿します。

(大阪市・沼田道雄)

○ ここ三年ばかり、なんととはなしに愛読しています四才の女児一人を持つ母親ですが、昨年十一月、協議離婚して現在は独身です。離



婚の理由は夫に女が出来、性格の不一致ということですが、私はどちらかといえば勝気でS性の持主なのです。その点、お互いに理解し合えず、私は不感症的欲求不満のまま放っておかれ、夫は私よりは遙かに容貌、学歴、家柄の劣っている水商売の女と親しくなりました。私は、いつも男性の上位に立ちたいという気持が強く、それが夫の氣にいらなかったのでしょう。私の家庭とか、それに教育の問題もあったと思いますが、軽はずみな結婚をしたのが悔まれてなりません。子供は実家の母が見てくれていますので、私は、腕に自信のあるインテリアダサイナ―として高収入があり、生活には困っていません。ただ、自分の性格を満足させてくれるような男性にめぐりあいたいと思っています。私のS性は多分に精神的なものです。私が、会って相手が人は圧倒されるような氣になると、よく言われます。二十七才ですが二度と結婚する氣はなく、独立して事業をするのが今のところの夢です。プレイ相手のみの男性との、おつきあいが出来たら、楽しいと思っています。車を持っていますので一泊ぐらいで行ける行動範囲の場

作六鬼団



決定版

●『サタニズム』小説総集篇遂に成る！  
昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八頁有余の豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サタニズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中であり、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

――内容主要見出し――

|     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |   |      |   |      |   |      |   |      |   |      |   |      |   |      |   |      |   |      |   |      |   |       |   |
|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|-------|---|
| 第一章 | 発 | 第二章 | 恐 | 第三章 | 美 | 第四章 | 華 | 第五章 | 救 | 第六章 | 救 | 第七章 | 狼 | 第八章 | 魔 | 第九章 | 怖 | 第十章 | 淫 | 第十一章 | 美 | 第十二章 | 色 | 第十三章 | 美 | 第十四章 | 落 | 第十五章 | 密 | 第十六章 | 脱 | 第十七章 | 華 | 第十八章 | 地 | 第十九章 | 翻 | 第二十章 | 翻 | 第二十一章 | 一 |
| 第一章 | 発 | 第二章 | 恐 | 第三章 | 美 | 第四章 | 華 | 第五章 | 救 | 第六章 | 救 | 第七章 | 狼 | 第八章 | 魔 | 第九章 | 怖 | 第十章 | 淫 | 第十一章 | 美 | 第十二章 | 色 | 第十三章 | 美 | 第十四章 | 落 | 第十五章 | 密 | 第十六章 | 脱 | 第十七章 | 華 | 第十八章 | 地 | 第十九章 | 翻 | 第二十章 | 翻 | 第二十一章 | 一 |

|       |             |
|-------|-------------|
| 第二十二章 | 身代金奪取の失敗    |
| 第二十三章 | 涙の宣誓文       |
| 第二十四章 | 連命の逆転劇      |
| 第二十五章 | 奇妙な三々九度     |
| 第二十六章 | 飼育される白い動物   |
| 第二十七章 | 悪魔と悪女の悪業    |
| 第二十八章 | 屈辱の地獄図絵     |
| 第二十九章 | 逃走の恐怖と失敗の結末 |
| 第三十章  | 悪鬼達の残忍な所業   |
| 第三十一章 | 落花無残の修羅場    |
| 第三十二章 | 淫らな美女の調教    |
| 第三十三章 | すさまじいショーの展開 |
| 第三十四章 | 汚水にまみれた宝石   |
| 第三十五章 | 華々しき美女の屈伏   |
| 第三十六章 | 対峙する美女と美女   |
| 第三十七章 | あくどい陥穽      |
| 第三十八章 | 羞恥図絵の展開     |
| 第三十九章 | 清纯な令嬢の屈辱    |
| 第四十章  | 人身御供の令夫人    |
| 第四十一章 | 深窓の美少女とズベ公  |
| 第四十二章 | 小夜子への執拗な調教  |
| 第四十三章 | 変性色事師の登場    |

|       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |      |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |      |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |      |   |       |   |       |   |       |   |       |   |
|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|
| 第四十四章 | 生 | 第四十五章 | 激 | 第四十六章 | 愛 | 第四十七章 | 愛 | 第四十八章 | 愛 | 第四十九章 | 愛 | 第五十章 | 愛 | 第五十一章 | 愛 | 第五十二章 | 愛 | 第五十三章 | 愛 | 第五十四章 | 愛 | 第五十五章 | 愛 | 第五十六章 | 愛 | 第五十七章 | 愛 | 第五十八章 | 愛 | 第五十九章 | 愛 | 第六十章 | 愛 | 第六十一章 | 愛 | 第六十二章 | 愛 | 第六十三章 | 愛 | 第六十四章 | 愛 | 第六十五章 | 愛 | 第六十六章 | 愛 | 第六十七章 | 愛 | 第六十八章 | 愛 | 第六十九章 | 愛 | 第七十章 | 愛 | 第七十一章 | 愛 | 第七十二章 | 愛 | 第七十三章 | 愛 | 第七十四章 | 愛 |
| 第四十四章 | 生 | 第四十五章 | 激 | 第四十六章 | 愛 | 第四十七章 | 愛 | 第四十八章 | 愛 | 第四十九章 | 愛 | 第五十章 | 愛 | 第五十一章 | 愛 | 第五十二章 | 愛 | 第五十三章 | 愛 | 第五十四章 | 愛 | 第五十五章 | 愛 | 第五十六章 | 愛 | 第五十七章 | 愛 | 第五十八章 | 愛 | 第五十九章 | 愛 | 第六十章 | 愛 | 第六十一章 | 愛 | 第六十二章 | 愛 | 第六十三章 | 愛 | 第六十四章 | 愛 | 第六十五章 | 愛 | 第六十六章 | 愛 | 第六十七章 | 愛 | 第六十八章 | 愛 | 第六十九章 | 愛 | 第七十章 | 愛 | 第七十一章 | 愛 | 第七十二章 | 愛 | 第七十三章 | 愛 | 第七十四章 | 愛 |

所でしたら、出向きます。どちらかといえば、地元よりも離れた所の方がよいと思っています。私は普通の正常な交りでは不感症です。普通、いつも男性の上位に立っているという精神的空想をしています。(芦屋市・高千穂順子)

ボク、奇クの大ファン、そして佐々木真弓ちゃんと梨花悠紀子ちゃんのファン。くずれかけた爛熟の美味しさと、清純な美しさの双方に憧れるボクです。愛は死よりも強く、そして、SMは性の権化であるボクは思っています。奇ク、フレイフレイ。いついつまで

も、お二人の女性のお美しくあることを祈ってボクのペンをおきます。(神奈川・横川北八)

辻村隆先生のカメハン、三月号の佐野みさ子の巻で大団円になったそうで惜しいと思います。耽奇房に期待はしておりますが、特に



妊婦のハントは、六十才の老夫婦にとって心打たれるものがあります。先般、木戸悦子さんの妊婦分譲フォトを入手、大いに老夫婦の性生活にも好結果を挙げることが出来ました。老生は妊婦の写真に大いに興味があり、特に乳房と腹の偉大なもの、又、出産後の満タシ乳房にも魅力を感じます。年令的にも老妻の性生活は、日毎に淡泊になりつつありますが、妊婦のフォトを眺めますと、俄然、元氣が出て、二十才代の回数を保つことが出来ます。便々たる太鼓腹は老生の最も垂涎おきたわざるものです。今後共、塚本鉄三先生にも従前以上のペースで妊婦のルポをお願いします。

(愛知県・那加従三生)

私は女性の刺青(いれずみ)に大変興味を持っている者です。完成した美しい刺青を観賞することの他に、刺青を彫っている彫物にセックスアップピールを感じます。従って、それに関係してピアッシング(刺環)にも大いに興味を持っています。御誌では以前、山原清子さんの刺青について資料の提供をされたことがあり、その他、読者の方々の、それに関係した資

料も誌上に載り、文献誌として高く評価しておりました。ペアーシングマニアというものは案外、多くいるもので、潜在的なファンを入れたら相当な数になるかと思えます。これから刺青、ピアッシング関係の記事を多少に拘らず、発表されるよう望みます。

(福岡県直方市・望月一三)

私は、赤いお腰が大好きです。いつも私の様なヘタな文面を活字にして頂いて有難うございます。ヘタな字で一生懸命書きました。私みたいなコシマキファンも沢山おられる事と思います。私は自分の部屋にコレクションのオコシをツリ下げて楽しんでます。私は貴誌と共に生きる男です。

(東京都・赤井尾越)

ここ二、三年の間、奇譚クラブで一番、しげきに見られたのは松本たえさんでした。僕の空想では、いつも松本たえさんとデートして、トコトンまで責めた上で床に入って、やむすというユメを見ます。そして、僕を呼び出しているユメを見るのです。芸者福竜の表情の神秘を、僕なりに探ってみたいと思っています。それと

いうのも、塚本鉄三様がルポで、「全日空機で来た女」以来、松本たえ様の記事を、くわしく書かれたことが僕のタマシイを奪ってしまいました。特に両足挙げの柱宙縛りのあのフォトは、完全に僕の心をショックさせました。あんなシゲキ的なシーンは、今までに見たこともありません。塚本鉄三様どうか、もう一度、松本たえ様を誌上に出して下さい。それが出来ないければ是非、僕に会わせて下さい。お願いします。僕は今のままではシンボウ出来ないのです。

(三重県・左藤公明)

私は女王様趣味の女装者です。奴隷的奉仕のできるM男性を求めます。奴隷の年令、容姿などは問いませんし、女性Sの代りとして女装Sを求める人でも、かまいません。あなたの希望のプレイにも応じられると思いますし、希望に反する奉仕を強制することはしません。奴隷的奉仕をする気が、まったくない人はM男性であって、お断わりします。私は容姿に十分、自信がありますが、手紙を下された方には、女装写真を必ずお送りします。プロではありません。んから、ご安心下さい。(東京都

中野新井局止・松田一美)

初めまして。小生正統派ソフトSM愛好のX才の男性です。十年程前から貴誌を購入、胸をドキドキさせて拝見。正に千金の値を持つ宝のように思ったのを、今でも覚えています。貴誌が何故、こんなに耐えがたい魅力があるのか、今でもわかりません。私って、その方の才能があるのかしら？(但しオカマじゃない)女みたいな性格もあり、自分が女であつたら、好きな男性に全裸で縛られてみたいなあと夢みます。でも、切腹のような流血加虐は邪道です。愛する男性に好きなように飼育され、歓喜の涙を流して、花の散るまで存分に、いじめられたいのです。「パロディ花と蛇」は傑作です。京子さんばかりでなく他の女性もドンドン責めて下さい。梨花悠紀子さんの可憐さは、すばらしい。それに中河恵子さんの様に少し肉のついた肌も大好き。梨花ちゃんと中河さんの大ファン。「こわ」は抜群に、よかった。これは完全に、芸術品です。佐々木真弓さんと文通したい。この三人とホテルの一室で逢って、じゃんけんして負けた方が、いじめられ役って



奇譚クラブ 臨時増刊  
「女体緊縛写真集」 定価一〇〇〇円(送50円)



天然色写真  
柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子  
首縄横臥二態 前田真知子  
典型的後手縛り 前田真知子  
自由な肢のもたえ 前田真知子  
麻縄と統肌の明暗 前田真知子  
厳しい縄目を味う 前田真知子  
準備態勢OK 前田真知子  
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

|             |       |
|-------------|-------|
| 金髪碧眼の美女     | シラ・ケイ |
| 鞭打ちの苦悶      | 関谷富子  |
| 洗腸の痛        | 長井葉津子 |
| 亀甲縛りの美      | 左近麻里子 |
| 麻縄と白肌の対照    | 中河恵子  |
| 陽を浴びた柔肌     | 左近麻里子 |
| 狼狽な裸身の喘     | 中河恵子  |
| 緊縛の悦        | 中河恵子  |
| 責められの放      | 中河恵子  |
| 没我の境地       | 中河恵子  |
| 痛打の末の悦      | 中河恵子  |
| 沖繩美人の緊縛     | 関谷富子  |
| 剣玉子の縛り      | 佐々木真弓 |
| 狂変する裸女      | 川路叢子  |
| 責めくたびて      | 佐々木真弓 |
| 紅毛碧眼の白人を責める | シラ・ケイ |
| 海老責の狂態      | 川路叢子  |
| ボリウムに挑戦     | 関谷富子  |
| 鞭打の下に挑      | 関谷富子  |
| 祭壇の人身御供     | 関谷富子  |
| 雅妻は縄を知りぬ    | 中河恵子  |
| 開股の正面と背面    | 中河恵子  |
| 華麗な開股責め     | 中河恵子  |
| イルリガイトルを前に  | 中河恵子  |
| 非情な責めの終末    | 長井葉津子 |
| 両手吊りの晒し     | 中河恵子  |
| 柱縛りの完了      | 中河恵子  |
| 処女縛りとまどう    | 三浦純子  |
| 麻縄に身をゆだね    | 中河恵子  |
| 盗視するSMの目    | 佐々木真弓 |

緊縛女体の光と影

|             |       |
|-------------|-------|
| 両手挙げ棒責め     | 川路叢子  |
| 柱縛りに浮く      | 長井葉津子 |
| 後手縛りに苦しむ    | 中河恵子  |
| どこまでも責めて    | 佐々木真弓 |
| 鞭の法悦境       | 関谷富子  |
| ムチが痛い、許して   | 関谷富子  |
| 柱を挟んだ連続     | 中河恵子  |
| 花と蛇の静子です    | 中河恵子  |
| 針責めをして頂戴    | 中河恵子  |
| 二つ折りの女体     | 中河恵子  |
| 猿ぐつわりの哀     | 中河恵子  |
| 日本式縛りの白人    | 関谷富子  |
| マゾの女王に答     | 関谷富子  |
| 柱縛りの恥辱      | 関谷富子  |
| 長襦袢の艶姿      | 関谷富子  |
| 豊満ボディを誇る    | 関谷富子  |
| 美女今縛られる     | 関谷富子  |
| 折檻にも汚れる     | 関谷富子  |
| 海老責への展開     | 関谷富子  |
| 責めたい碧眼の女    | 関谷富子  |
| 日本式高小手縛     | シラ・ケイ |
| 猫の目のような女    | 中河恵子  |
| 足吊りの風情      | 中河恵子  |
| 亀甲縛りの花      | 中河恵子  |
| M女二輪の黒髪     | 中河恵子  |
| 苛責に乱れた黒髪    | 中河恵子  |
| 開股縛りの幻想     | 中河恵子  |
| 鏡の前での放      | 中河恵子  |
| 愉悦のひととき     | 中河恵子  |
| ハリツケ晒し      | 中河恵子  |
| これから、どうするの? | 長井葉津子 |
| 美しき吊り       | 前田真知子 |
| 苦痛の悦        | 前田真知子 |
| 逆エビ縛りの魔術    | 中河恵子  |
| 愛撫の責め       | 中河恵子  |
| 黒縄と白肌       | 中河恵子  |
| 身動きできぬ境地    | 中河恵子  |
| 浮上した女体      | 中河恵子  |
| 麗しの背        | 中河恵子  |
| 汚辱の縄        | 中河恵子  |
| 高小手縛り       | 中河恵子  |
| 責められたマゾ女    | 中河恵子  |
| 失神したマゾ女     | 中河恵子  |
| 前手縛りの天国     | 中河恵子  |
| 柱縛りの海老責     | 中河恵子  |
| 荒縄の女        | 中河恵子  |
| 美と縛の女神      | 中河恵子  |
| 可憐な女        | 中河恵子  |
| 酒の肴になる      | 中河恵子  |
| 妖蛇の洗        | 中河恵子  |
| 奔弄されるままに    | 中河恵子  |
| 海老縛りの妙味     | 中河恵子  |
| 柱縛りの妙味      | 中河恵子  |
| 痛さをこらえる異国   | 中河恵子  |
| 責の果の諦観      | 中河恵子  |
| 痛打の一瞬       | 中河恵子  |
| ホステス裸人生     | 中河恵子  |

カメラ・ハント楽我記 辻村 鉄三 隆  
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三 隆

うのは、どうですか? ボク、も  
ちろん独身です。マユミちゃんに  
早く、いじめてもらいたい。大塚  
啓子さんも大人の味で、いいです  
ね。いじめっこでも、お医者さん  
ごっこでも、面白いです。ポルノ  
大国日本だもの、お互いに若いう  
ちに愛しあうのもいいものです。

私達は私40才、妻37才の結婚歴  
十七年の夫婦です。奇ク発表の夫  
婦プレイの愛読者を自負している  
ものですが、誰か妻を私の眼前  
で責めて下さいませんか。私は、  
まだプレイを第三者を交えて行な  
った事はありませんが、自分の目  
の前で妻が責められ弄ばれている  
事を見ていると思うと、それだけ

凄く興奮するのです。妻も承知し  
ております。但し中年になった小  
肥りの妻ですが、容姿のバランス  
は、まだ、くずれていません。乳  
首責めの全身緊縛から、SEXを  
伴った羞恥責めを含めて、フォ  
ト撮影も構いません。プライバ  
シーさえ固く守って下さるなら、ど  
んな責めをされても結構です。お互  
いの信頼感の上で永続性のある交  
際が出来ればと思っています。渡  
部好美ご夫妻のような第三者を混  
じえたプレイが出来れば、理想的  
だと考えています。渡部さま。近  
況、誌上にて、お知らせ下さい。  
(東京都北区・矢部雅三)

五月号拝見。本号は私のMを満  
足させてくれるに充分な内容で、  
だんぜん嬉しくなり、ペンを執り  
ました。まず第一に、「読通」に  
久々にS女王高橋千寿代様のお呼  
びかけを拝見し、胸おどる思いで  
す。小生も、女王様の坐ぶとんと  
なって、お尻の下敷になり、その  
重みに押しつぶされ、その強烈な  
芳香にむせびたい一人です。女王  
様の男を責められた御体験を誌上  
に発表して下さいることを期待して  
います。次にイメージ画、いつも  
楽しく拝見していますが、九十頁



「ペーパーを、どうぞ」は、とても、ひきつけられます。この画では、与えられる紙が、大のあとに使われたものか、小のあとに使われたものか分かりませんが、小生は、この女性のオシッコのあとを拭いたものと想像します。草深い谷間にたまるしずくを、たっぷりと吸いこんで、まだ温かみの残っているチリ紙が今、男の口に与えられている。小生も、この男の代りになりたいです。記事としては沢井和雄氏の「亜矢様をめぐる不思議な夜」が、すばらしい。あと二回連載が、とても、たのしみです。終わりに編集部へおねがい。口絵グラビヤに「男を責めるS女性」の数々を、載せて頂くわけにはゆかないものでしょうか。以前よくあった、女性による踏みつけ馬のりなど、仰向けに押し倒された男の顔の上に、巨大なお尻を、でんと据えて押しつぶすグラマー女性のフォトなど、Mの夢は、つきません。(京都市・上田光一)

○ 奇ク新年号に、はずかしながら女子トイレ考現学を載せていた。いた、福島です。あれ以来、同好の士にとどまらず、多くの方より心暖まる激励をいただき、感謝の念

にたえません。以降も、操作を続けておりますが、撮る写真はすべていつもとかわらず、またレポートも、同じ内容になってしまっており、ますます、焦って、どうしようもありません。いただいたアドバイスの中には、医師と知り合い、胃カメラのようなものを借りて撮影すれば、良いであろうとか、フィルムを高感度のものを使用してみろなど、いずれも、尤もな、助言ばかりです。奇クのよな一流雑誌にのせるには、ごまかしは利かず、また、多くのアドバイスをしていただいた人にも、できるだけ良い作品をと考えている毎日です。このような、カメラの使用法、または、どのような場所、そして、その他、私のレポートに係る一切の御希望とか、御注文がありましたら、お手紙いただけないものでしょうか。

(長野県・福島和夫)

○ 毎月楽しく拝見しております。

五月号で千葉の水島さんが男性に苛められてみた、本誌のモデルに思い切った応募すること、SMに楽しみを求める私にとって、は、本誌を飾るM女性、又一人増えると考えて、今から期待に胸

を、ふくらませております。誰でもSMの傾向は多少あるもの。その傾向を引き出し、追求するのは一つの生き甲斐であると考えています。まだ二十四才の若さで、これからM性が開花しても決して遅くはないと思われ、バイブ責め、剃毛に興味をお持ちのようですが、我々の目を楽しませてくれるのも近いことでしょう。出来れば私が、などと考えたりしますが塚本氏の如く数多くの経験も持ち合わせず、實際上、さまざま工夫が必要とされるでしょう。私の好きなのは開股縛りや羞恥責め、剃毛で、最近は写真に凝り出し、被写体を求めています。女性の方で私のモデルになってもよいとおっしゃる方がありましたら御連絡下さい。(東京都・西 伸二)

○

五月号のルポルタージュ・西条紀代の浣腸フォトは最高でした。ぜひ毎号、浣腸フォトを掲載して下さい。単なるヌードモデルは現代の割り切った若い女性なら、さほど、ちゅうちょせずして、なりうる人も多しと想像できますが、お尻に異物を挿入しての撮影となれば、マゾ性のある女性でないと耐えられないことでしょう。こ

ういうフォトこそ、奇譚クラブたるべき本質です。丸い可愛いお尻を剥き出しにして、冷たい管を味わいながらカメラに対処する時、おのずから羞恥の美しさが滲みでて、見るものをうっとりさせるのは当然でしょう。現代の乾いた味気なさに、うるおいを与え、再び女性の美しさを見出させてくれる芸術です。福井桃子様を縛り上げて、あの豊かな双臀の下に挿し込み便器を当てて、高圧浣腸フォトを。マゾにむせぶ高村浩子様を四つ這いにさせて、ゴム管をぶら下げさせてイルリガートルを。トイレの便器の上で、お尻をさしあげての前田真知子様浣腸フォトを。浣腸後の究極の羞恥フォトは幼児用オマルに、またがらせたり、ビールの大カップの上にお尻をかかげさせたり、幼女が母親にオシッコをさせて貰うように抱き上げたりして、表情をとらえて撮影して下さい。

(神戸市・羞恥美を求める男)

○

高橋千寿代様、いきなり誌上でごあいさつする御無礼を平にお許し下さい。奇クを愛読する中で今の今まであなた様の出現を心待ちにしておりましたM男です。私は



次号(七月号)は五月二十二日に発売いたします

今年二十四才、身長一七四センチ、体重七五キロ。スポーツを愛し、あなた様の調教を心から望む男性です。私は高校時代より野球部で活躍し、大学に入ってから現在に至るまでアイス・ホッケーを、いたしております。顔は、やや童顔の部類に属し、体格は御推察のとおり、大柄です。あなた様の水泳と合気道で、お鍛えになった引きしまった、お体で責めていただきたいのです。体に傷がついたり、生命に危険のない責めでしたら、如何なる責めにも耐えるつもりです。(もし耐えきれずに、そそうをしたら、おしおきを下さい)私の体を奴隷として千寿代様に、さしあげます。女王様の前で全裸になり、首輪をされて、四つ這いで歩き、体に墨かマジックインキで「千寿代私有物」と書いていただきます。奴隷の名前で呼んでいただきます。舌がしびれるまで御奉仕申しあげます。卑しい奴隷の私を思いきり足蹴にして下さいませ。緊縛、さるぐつわ、アヌス責め、ペニス責めなど、存分に調教をいただきます。そして、ごほう

びとして女王様が一度口に入れて吐きだされた残飯を下さいませ。さらに女王様のお友達は私にとつては聖なる女王様です。(女王様は千寿代様だけです)たくさんは女王様達のおられる前で、私一人女王様の調教を、おうけし、羞かしめていただけるなど、考えるだけで私の体の芯からゾクゾクとしたものが込みあげてきます。私を馬にしてください、女王様共々、素肌で私の背中にまたがっていただけたら、どれ程幸せでしょう。高橋千寿代様。今一度、お願い申しあげます。この私を奴隷として調教して下さい。そして私有物として、あなた様のおそばで御奉仕させて下さい。なにとぞ、私に興味をお持ちになりましたら、編集部を通じてまた、この欄を通じて御一報下さい。奇巧掲載の春川ナミオ氏の絵のように私を、お責め下さい。私は千寿代様の思われるがままです。

(京都市左京区・光林裕二)

同じ神戸に住む瞳耀太郎様よりお手紙を頂き喜んでおります。で

も、貴方の私に対するイメージがロマンチックな夢のようで、こわい気が致します。私は貴方の考えていらっしゃるような詩のような女ではありません。流腸責めを求めて悶えているような肉の奴隷です。身近なところに住んでいらっしゃる貴方にお会いでき、貴方とプレイできたら、素晴らしいことと存じます。でも私の望むプレイは貴方の夢をこわしてしまふのではないのでしょうか。私の求めるものはそれはMへの耽溺でございます。

(神戸市・小杉千恵)

最近のSM雑誌の繁雑さは目にあまるものがありますが、その中にあり奇巧はひととき目立った存在であるというより、質的に他の雑誌は全然問題になりません。これはひとえに奇巧の長年の伝統、数多い愛読者のささえ更に編集部の方々の努力によるものと思えます。私も十年近くの奇巧の愛読者ですが、これより一層の奇巧の発展と読者との親密感を増していっていただくための努力をお願いしたいと存じます。五月号を書店にて早速入手、巻頭の言葉のようにM女こそ、天女のような淑女の中から生まれることと思えます。

奇巧誌上に姿を見せていられる女性、すべてM女の中のM女、そして私達読者に対しては天女のような女性ばかりです。夫婦プレイのよき伴侶を持たれるご主人は、この世の中で一番幸運で幸福な人達です。中河恵子さんの告白は、以前は涎をたらして読んでいました。近頃時々M女の心境を珠玉のような文章で発表していられますが、これからも私達読者の心をかきたてるような告白を書いて下さい。私は貴女を理想の女性として描いております。「無料花電車ショー」を書かれた後藤執生様、百数十枚も写真を撮影されたそうです。その一部でも、是非発表して下さい。公表は部分カットでも、十分値うちがあるものが載せられると思います。

(東京都・足立昌一)

私はヌメヌメとした生ゴムの感触をこよなく愛する女性です。輪ゴムを口の中へ入れてチューインガムのようにかんんだり、下着の代りに生ゴム製のものを求めています。夏は汗でぬらぬらし、時には汗もやかぶれたりして困りますが、それがまた私の性感を上げきるので







# 編集後記

○何故ともなく開放感を覚える春陽の候、S  
M愛好者がいわれる「プレイの季節」にお届  
けする本号。巻頭の、ガッチリと現実を踏ん  
まえた提言「SMブームの退潮と「奇ク」に  
ついて」△橋房由△から、華麗に本文を締め  
くくって下さった「幻の少女」△辻村隆△、  
そして△サロン欄△△通信欄△まで、SMに  
心の潤い求められる人々の真意と意欲を、ギ  
ューギュー詰めにすることが出来たと自負し  
ておりますが、如何なものでしょう。  
○勿論「詰めこみゃいい」というものでもな  
いでしょうが、国鉄のナニヤラ斗争とはワケ  
違いで、押し込んだからといって叱られるこ  
ともあるまいと、あれもこれもと欲ばったバ

チが当たり、満席になって気がついてみると  
予約席をワリ込みの裸女フォトが占領。「ア  
タシ縛られてるんだからもう動けないワヨ」  
なんて状態になってしまっていて、予定原稿の積  
み残しが、二、三点、出てしまっていました。  
○それはドナタのナニナニだと、ここに並べ  
たいのですが、書けばその筆者に叱られそう  
で、気の弱い担当者としては頼被りで逃げの  
一手です。が、「ワシヤ知らんデエ」では済  
まされないのでが連載もので、「命預けます」  
△柴利好△の予約席も大半無くなった結果、  
同小説完結後まで眠っていてもう心算であ  
った「奴隷妻覚え書」で繋ぎとしたことだけ  
は白状しておきます……とマア、書かでもの  
ことまでブチマケル、このバカと名のつく正  
直さに免じて、今後一層のご愛読を……。

## 懸賞原稿募集

### △体験、告白、手記△

読者の皆さまが自分で親し  
く体験されたことや、かくさ  
れた性癖や性向について語っ  
てみたいと思われたこと、或  
はこれだけ、どうしても書  
き残しておきたいと考えられ  
た事を大胆にお寄せ下さい。  
採用しました原稿には三千円  
以上の賞金を贈呈します。

### △創作、小説、物語△

本誌の編集内容に適した特  
異な素材を駆使した力作をお  
待ちします。すべて自作の未

### △感想、論評、批判△

本誌に関連したものでした  
ら話題の内容は問いません。  
忌弾なき皆さまの御意見を  
待ちします。採用篇には二千  
円以上の賞金を贈呈します。

### △(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、  
単行本或はその他見聞などで  
特に興味をお持ちになった事  
項の通信をお待ちします。出

発表作品に限ります。これは  
と思う作品は必ず誌上に取り  
上げます。腕試しの意味で奮  
って御投稿願います。採用篇  
には賞金十万円迄贈呈。

### △読者通信原稿△

巻末の通信欄は読者の皆さ  
ま方のための公共の広場とし  
て開放してあります。御遠慮な  
くお寄せ下さい。

## ☆ 本誌御購読の葉 ☆

予約に限り  
一月分(1冊)四〇〇円△送32円△  
三月分(3冊)一二〇〇円△送共△  
半年分(6冊)二四〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書  
店にて一斉に発売いたしますが、入手困難  
の方は直接代金御送付の上、御予約下され  
ば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に局  
重包装して確実に発送申し上げます。局留  
の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 四〇〇円

六月号 (第二十七巻第六号)  
(通刊第三百四号)

昭和四十八年五月二十日 印刷  
昭和四十八年六月一日 発行

編集人 杉原 虹児  
発行人 吉田 俊夫  
印刷人 北村 俊夫  
郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号  
発行所 暁出版株式会社  
△振替口座大阪四二七八三番△  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号)

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の検討、挿絵  
の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の  
健全なる育成に努める各条例に指定されな  
いよう充分に注意して編集いたしております  
ますが、本来成人向として発行を企図してお  
り、下す関係上、十八才未満の方には絶対販  
売下さないよう、特にくれぐれもお願  
い申し上げます。